

國學院大學學術情報リポジトリ

都市祭りの宗教学：戦後の地域社会の変容と神田祭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一, Akino, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002432

平成二八年九月

博士学位申請論文

「都市祭りの宗教学

―戦後の地域社会の変容と神田祭―」

國學院大學大学院

文学研究科

秋野 淳一

序

近年、都市の祭りが大きな賑わいをみせている。特に大都市の伝統的な神社祭礼である京都の祇園祭、大阪の天神祭、浅草の三社祭、神田・日本橋の神田祭などが、多くの観客と参加者を動員して盛んに行われている。しかしながら、現代の都市の祭りについて、そこに人々のどのような意味や役割があるのかを社会との関係から実証的な手続きを経て、明らかにした研究は少ない。

「神なき祭りの時代」あるいは、「日常を脱することのできない祭り」になっていることが指摘される現代社会において、盛んに行われている都市祭りには、どのような宗教性があるのだろうか。

そこで、本研究では、戦後の地域社会の変容と神田祭の視点から、現代日本人の伝統的な宗教に対する新しい意味や役割を浮き彫りにすることで、社会変動と宗教の関係を考える一助としたい。

本研究では、次のように分析を展開する。

第一部では、戦後の神田祭研究の意義を明らかにする。第一章では、戦後の都市祭りの研究史を整理し、その課題を提示する。第二章では、神田祭の発祥から現代までの神田祭の変遷を概観し、変遷からみえる研究の課題を浮き彫りにする。

第二部では、戦後の神田祭の経年的変化について、地域社会の変容との関係から、個人の役割を踏まえて考察を行う。第三章では、昭和四三（一九六八）年に実施した藪田稔の調査、平成四（一九九二）年に実施した松平誠の調査結果のその後を分析すべく、平成二五年と平成二七年の神田祭について実態調査に基づき考察を行う（第三章第一節・第二節）。その上で、隔年で行う神田祭における蔭祭、町会の年中行事の中の神田祭、女性の神輿の担ぎ手に特化した須田町中部町会の神田祭に注目し、地域社会の変容と経年的変化の関係を複合的に把握する。具体的には、観客がほとんどいない現代の神田祭の蔭祭の役割を解明し（第三章第三節）、町会の年中行事の変容と神田祭の関係から、町会にとって神田祭が最大の行事になっている背景を考察する（第三章第四節）。また、（町会の神輿を単独で女神輿にして連合渡御や宮入を果たす）「元祖女みこし」の街の神田祭について考察する（第三章第五節）。第四章では、個人と神田祭の

関係を考察する。これまでの都市祭りの研究において、ほとんど注目されることがなかった神職（宗教者）と都市祭りとの関係に着目する（第四章第一節）。また、町会の特定の個人と神田祭の関係について考察し、神輿などの祭礼の象徴が誕生・復活したり、祝祭の場が形成される背景を探る（第四章第二節）。そして、不特定多数の個人が集う「元祖女みこし」の参加者の実態を明らかにするとともに、よさこい祭りなどの新しい都市祝祭との共通点と差異を明らかにする（第四章第三節）。

結論では、なぜ現代の神田祭が盛んに行われているのかを解明するために、第一部と第二部の分析で浮き彫りとなった特徴を整理した上で、「非日常性」に留意しながら、都市祭りの宗教性について指摘する。

付論では、大都市の祭りの参考事例として、現代の東京・渋谷の神社祭礼を取り上げる。SHIBUYA109 前で行う神輿集合の意味などについて考察する。道玄坂（付論第一節）、渋谷中央街（付論第二節）の祭礼について地域社会との関係から考察し、神田祭との比較についても言及する。また、渋谷の小祠やモニメントの実態調査から渋谷の小さな神々の特徴を明らかにするとともに、渋谷の神社祭礼との比較を行い、小さな神々と祭りが拡大する共通の時期について指摘する（付論第三節）。

なお、本研究で「都市祭礼」とせずに「都市祭り」とするのは、都市の祭りの中には観客のほとんどいない祭りもあり、そこにも新たな役割や意味があることから「都市祭り」という語を採用した。

目次

序 一頁

【第一部】 研究史篇 —戦後の神田祭研究の意義— 一二頁

第一章 都市祭りの研究史と課題 一三頁

- 一、都市祭りに関わる理論的な研究 一四頁
- 二、戦後の秩父祭・川越祭を対象とした研究 一七頁
- 三、戦後の祇園祭・天神祭・左大文字行事を対象とした研究 二五頁
- 四、戦後の神田祭を対象とした研究 二九頁
- 五、戦後の山王祭・三社祭・佃祭を対象とした研究 三八頁
- 六、戦後の銀座・新宿・渋谷の都市祭りを対象とした研究 四〇頁
- 七、戦後の東京近郊の都市祭りを対象とした研究 四四頁
- 八、神戸まつり・浜松まつりを対象とした研究 四九頁
- 九、戦後の九州の都市祭りを対象とした研究 五二頁
- 一〇、高知のよさこい祭り・札幌のYOSAKOIソーラン祭りを対象とした研究 五六頁
- 一一、戦後の青森ねぶた祭りを対象とした研究 六一頁

一二、戦後の沖縄のエイサーを対象とした研究 六三頁
まとめ 六四頁

第二章 神田祭の変遷と研究の課題 七七頁

- 一、神田祭の発祥 七七頁
 - 二、近世の神田祭 七八頁
 - 三、明治期から戦前・戦中までの神田祭 八五頁
 - 四、戦後の神田祭 九二頁
- まとめ 九九頁

【第二部】 個別分析篇 —戦後の地域社会の変容と神田祭— 一〇三頁

第三章 戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰 一〇五頁

第一節 昭和四三年〜平成二五年の神田祭の盛衰 一〇五頁

- 一、藪田稔・松平誠の分析 一〇六頁
- 二、町会の世帯数と神酒所の設置にみる変化 一〇八頁
- 三、主な行事の変化 一一三頁

四、役割動員と一般動員の変化	一一四頁
五、行事経済・行事変化	一一八頁
六、祭りの評価	一二〇頁
七、経年的変化からみえる平成二五年の神田祭	一二二頁
まとめ	一二三頁
第二節 平成二七年の神田祭（遷座四〇〇年奉祝大祭）の分析	一二五頁
一、平成二七年神田祭の概観	一二六頁
二、平成四年と平成二七年の神田祭の経年的変化	一二九頁
三、平成二七年の調査から新たに浮き彫りになった特徴	一三四頁
まとめ	一三七頁
第三節 現代の神田祭・蔭祭考	一四一頁
一、神田和泉町会の蔭祭	一四二頁
二、蔭祭における史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸	一五三頁
三、東日本橋二丁目町会の蔭祭	一六一頁
四、宮本町会の蔭祭	一六六頁
五、本町一丁目町会・室町一丁目会の蔭祭	一七〇頁
六、その他の町会の蔭祭	一七二頁
まとめ	一七四頁

第四節 町会の年中行事の変容と神田祭 一七七頁

一、神田中央連合 一七九頁

二、中神田十三ヶ町連合 一八七頁

三、外神田連合 一九七頁

四、神田駅東地区連合 二〇五頁

五、岩本町・東神田地区連合 二一〇頁

六、秋葉原東部地区連合 二一五頁

七、日本橋地区連合 二一八頁

八、須田町中部町会の年中行事 二二二頁

まとめ 二二九頁

第五節 「元祖女みこし」の街の神田祭 二二九頁

一、「元祖女みこし」の誕生 二四〇頁

二、「元祖女みこし」の変遷 二四四頁

三、「元祖女みこし」の参加者の変化 二四六頁

四、地域社会の変容と須田町中部町会の神田祭 二四八頁

まとめ 二五二頁

第四章 個人と神田祭 二五七頁

第一節 神田神社の神職と現代の神田祭 二五七頁

- 一、参与観察からみえる神田神社神職と神田祭 二五九頁
- 二、神田祭以外の氏子町会と神社・神職との関わり 二六一頁
- 三、神田祭の変遷にみる神職と賑わいの場の形成 二六七頁

まとめ 二七四頁

第二節 町会の個人の活躍と神田祭 二七七頁

- 一、「元祖女みこし」の誕生と個人 二七七頁
- 二、「おまつり広場」の形成と個人 二八七頁
- 三、ダンボール神輿の誕生と個人 二九三頁

まとめ 二九九頁

第三節 「元祖女みこし」の参加者の実態と神田祭 三〇一頁

- 一、「元祖女みこし」の担ぎ手の実態 三〇二頁
- 二、他町会の神田祭との比較 三〇九頁
- 三、「合衆型」の都市祝祭との比較 三一〇頁

まとめ 三二五頁

結論 都市祭りの宗教学 三二九頁

- 一、都市祝祭と町内の祭りの複合構造 三二九頁
 - 二、結集のための核の存在 三二五頁
 - 三、個人の活躍（人的要因） 三二九頁
 - 四、非日常化するイベント ―都市祭りの宗教性― 三三二頁
- まとめ 三三九頁

付論 渋谷の地域社会の変容と都市祭り 三四一頁

第一節 渋谷・道玄坂の祭礼にみる新たな祭りの場の形成 三四一頁

- 一、都市祭りを取り巻く状況 三四二頁
 - 二、地域社会に通う人たちの存在 三四四頁
 - 三、渋谷・道玄坂の祭り 三四五頁
 - 四、道玄坂町会に住む人と「通いの住民」 三四八頁
 - 五、祭りに際して道玄坂町会に通う人たち 三五〇頁
- まとめ 三五二頁

第二節 都市祭りからみえる〈渋谷〉 三五五頁

- 一、鳳輦の巡幸と宮入―金王八幡宮の祭りの現在 三五五頁
- 二、展示する神輿 三六三頁
- 三、祭りとイベント 三六九頁
- 四、SHIBUYA109 前神輿集合 三七四頁
- 五、渋谷の街の変化と祭り 三八四頁
- まとめ 三九三頁

第三節 〈渋谷〉の小さな神々 三九五頁

- 一、ハチ公前広場から公園通り・渋谷センター街に坐す神々 三九五頁
- 二、松濤から道玄坂に坐す神々 四〇三頁
- 三、渋谷駅東口から青山方面に坐す神々 四〇八頁
- まとめ 四一二頁

資料篇 四一九頁

- 【資料一】平成二五（二〇一三）年の神田祭・町会別祭礼行事実施状況 四二二頁
- 【資料二】平成二七（二〇一五）年神田祭（御遷座四〇〇年奉祝大祭）・町会別祭礼行事実施状況 四三九頁

初出一覧 四九五頁

あとがき 四九七頁

第一部 研究史篇
—戦後の神田祭研究の意義—

第一章 都市祭りの研究史と課題

近年、大都市の都市祭りが盛んに行われている。例えば、東京・浅草の三社祭は、平成二四（二〇一二）年は五月一五～一八日の日程で行われたが、東京スカイツリー目当てで訪れた観光客が含まれるものの、祭りの三日間で一八四万人の出入を記録した。浅草神社によると「過去最高の人出」であったという¹⁾。また、平成二七年の東京の神田祭では、神社境内に出されたアニメ「ラブライブ！」の模擬店に並ぶ若者の列と神田神社に宮入をする町会神輿の行列とお祭りをみる観客とで賑わい、神輿の宮入が大幅に遅れるほどの事態となった。京都の祇園祭は一〇〇万人、天神祭は一五〇万人の観客を動員するといわれている。神戸まつりにおいても、観客が一〇〇万人を超えた時期があり、札幌のYOSAKOIソーラン祭りは観客が二〇〇万人を超したこともあったといわれている。

こうした事例からは、大都市の都市祭りが非常に多くの人たちを動員して盛んに行われていることがわかる。この事実をどのように捉えるべきであろうか。

これまで、戦後の都市祭りを対象とした研究は、宗教学・宗教社会学、社会人類学・文化人類学、社会学、民俗学などの複数の学問領域において数多くの蓄積がなされてきた。こうした先行研究においては、都市祭りが盛んに行われている状況をどのように捉えてきたのであろうか。

そこで、本章では、最初に、戦後を対象とした都市祭り研究に影響を与えた、都市祭りの理論的な研究について簡単に紹介する。その上で、戦後の都市祭りを対象とした先行研究を学問領域や論点別ではなく、都市祭りごとに整理をしていきたい。都市祭りごとに整理を行うのは、次の二つの理由からである。一つは、都市祭りごとの特徴を把握し、他の都市祭りとの共通項と差異を読み解くための材料にすることにある。もう一つは、個別の都市祭りによって盛んになっている要因を探るために、同一の都市祭りの変化を、同一の都市祭りを対象とした複数の研究から読み解くためである。そのため、なるべく明らかにされた事実や具体的な指摘内容を確認しながら、研究史をみていきたい。そして、最後に研究史からみえる課題について指摘したい。

一、都市祭りに関わる理論的研究

(一) 欧米における主な祭り・祝祭の理論的研究

まず、祭りを社会の統合機能として読み解く研究を挙げておきたい。宗教学者のエミール・デュルケムの研究は、『宗教学の原初形態』⁽²⁾の中で、オーストラリアの原住民は雨季に集まり集中的な祭りを行い、次第に興奮状態になることを明らかにし、これを「集団的沸騰」(集合的沸騰)と呼んでいる。宗教的観念が生まれたと思われるのは、この沸騰した社会環境における沸騰そのものからであると考え、神は興奮した祭りの中から生まれたことを指摘している。また、宗教を「聖」と「俗」の二分法で捉え、「宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる道徳的共同社会に、これに帰依するすべてのものを統合させる信念と行事である」と指摘している。

次に、祭りを構造的に理解しようとする研究を挙げておきたい。

宗教学のミルチャ・エリアーデは、『永遠回帰の神話』⁽³⁾において、祭りを神話的な始源の再現として捉えている。

民族学のファン・ヘネップは、『通過儀礼』⁽⁴⁾において、通過儀礼には、分離・過渡・統合の三つの段階があることを明らかにしている。人類学のエドモンド・リーチは、「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」⁽⁵⁾の中で、儀礼には形式性、乱痴気騒ぎ、役割転倒の三つの局面があることを明らかにしている。そして、形式性から始まって、役割転倒、乱痴気騒ぎの順に展開するものと、乱痴気騒ぎから始まって役割転倒、形式性へ展開するものの二種類があるとしている。

人類学のヴィクター・ターナーは、巡礼の分析において、ファン・ヘネップが明らかにした儀礼の三段階のうち、「過渡」(移行)に注目し、世俗の構造とは異なつて反構造的な融即状況があることに注目し、これをコミュニタス(communitas)と呼んでいる⁽⁶⁾。ターナーは祭りの中の矛盾する原理が存在することを明らかにしている。H・コックスは『愚者の饗宴』⁽⁷⁾において、祭りを形式性と乱痴気騒ぎの対立と捉える見方を打ち出している。

神話学のカール・ケレーニイは、『神話と古代宗教』⁽⁸⁾において、古代社会のギリシア・ローマには「祝祭性」としかいいようのな

い特殊な位相があり、西欧の近代社会では既に失われていて、理解ができなくなっていることを明らかにしている。文化社会学のダンカン⁽⁹⁾は、祭りは宗教と社会の接点に生まれる劇的交流 (dramatic communication) と位置付けている⁽⁹⁾。

また、祭りを「遊び」の概念として捉えようとした、ヨハン・ホイジンガの『ホモ・ルーデンス⁽¹⁰⁾』がある。ロジェ・カイヨワは、『遊びと人間⁽¹¹⁾』において、ホイジンガの後を受けつぎ、遊びの体系的な分類を試み、「アゴン」(競争)、「アレア」(偶然)、「ミミックリ」(模擬)、「イリンクス」(眩暈)の四つの遊びの領域を明らかにしている。このカイヨワの分類を参照しながら、日本においては、主に、中村孚美や米山俊直、和崎春日らが都市祭りの分析を行っている。

文芸史家のミハイール・バフチーンは、『フランソワ・ラブレールの作品と中世ルネッサンスの民衆文化⁽¹²⁾』において、中世民衆のカーニバル的な笑いの文化を明らかにして、「儀式的・見世物的形式」などの笑いの祝祭が人類文化のきわめて重要な第一次的な形式と位置付けている。

(二) 日本における主な祭礼・祝祭の理論的研究

日本においては、民俗学の柳田國男の研究が著名である。

柳田は、昭和一六(一九四一)年の『日本の祭⁽¹³⁾』の中で、「日本の祭の最も重要な一つ目の変り目は何だったのか。一言でいうと見物と称する群の発生、すなわち祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現れたことであろう」として、見物人という「群」の発生が「見られる祭」への変化、すなわち「祭礼」に変化する重要な画期となったことを指摘している。また、祭と都市文化の関係をみると、冬祭が寒い山間の村に盛んであることとは反対に、夏祭は平地の方が多く、都会地などの水辺に近い所はどこも盛んであるとしている。そして、「たとえ起源は農民と共通の信仰にあるにしても、特に夏の祭をこの通り盛んにし、また多くの土地の祭を「祭礼」にしてしまったのは、全体としては中世以来の都市文化の力であったと言い得るのである」として、中世以来の都市文化の力が「祭」を「祭礼」に変化させていったことを明らかにしている。柳田の見物人という群の発生によって祭りが祭礼に変化したという指摘は、その後の都市祭りを対象とした研究が観客の存在に注目する契機となった。

また、民俗芸能研究の立場から観客に注目する早川孝太郎の研究がある。早川は、愛知県の奥三河地方に伝わる花祭の分析した『花祭』を昭和三二年に刊行したが、その中で「花祭においては、見物もまた祭りの重要な要素な分子である」として、「せいと」の客に注目している。早川は、花祭の客には、神座の客と「せいと」の客に分類され、神座の客が一般部落内の婦女子と祭事に直接関わりを持たない有力者（旦那衆）、特別の招待客であるのに対し、「せいと」の客は、「大部分がいわゆるよそもので、祭りになんら交渉を持たないただの見物である」と指摘している。神座の客は静粛に見物しているが、「せいと」（庭燎）の周りに夜通し立ち通しで見物している「せいと」の客は、何の制約や統制もない群集であり、舞子のみならず、神座の客や楽の座にあらん限りの悪態を浴びせ、「せいと」同志でも悪態をつき合うという。この「せいと」が賑わうか寂しいかで祭りの景気が左右され、「せいと」の客が賑やかなほど、祭りの景気は引き立ったと指摘している（14）。

宗教学会・民俗学の原田敏明は、昭和四五年に國學院大學日本文化研究所で行った講演の中で、「夜の祭から昼の祭に発展してくると、この昼の祭の行事には宮相撲があり、御輿や山車などが出る。場合によっては近郷近在の人が集まって見物にくると、御輿や屋台などは従来の当番では出来なくなる。長老ではなおさらのこと、そうなってくると、そこに若衆というのが発展してくるのである（15）」と指摘している。原田は、夜の祭から昼の祭への変化によって行事が拡大し、従来の長老を中心とした当番ではなく、若衆という祭祀組織が発展したと位置付け、見物人を伴う「祭礼」に変化することによって、祭りの担い手が変化したことを明らかにしている。原田の分析の背景には、デュルケムの影響が窺われ、宗教を社会の集団表象として捉えている。

宗教学の藺田稔は、エリアーデ、リーチ、ターナー、ダンカンなどを参照しながら、「祭りとは―、劇的構成のもとに祭儀（リチュアル）と祝祭（フェスティビティ）とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状況（コミュニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである。そして、その表象された世界像のなかで、集団はその存続の根源的意味を再確認し、成員のエトスが補強される。要すれば、祭は集団の象徴的な再生の現象である（16）」と定義している。また、藺田は、祭りイベントについて、「マツリが本来的に神話的過去の再現を目指すのにたいして、イベントはつねに陳腐さを嫌い、現状の変化を求めるところに本質的な違いがある」としている。そして、マツリには社会や人間の生命秩序の再生に深く関わってその始源的カオスを象徴的に再現する意味

があるが、イベントには本来宗教的なカオス性を許容する余地はない位置付けている⁽¹⁷⁾。

社会学の松平誠は、祝祭を「日常世界の反転、それらからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化・対象化し、それによって感性の世界を復活させ、社会的な共感を生み出す共同行為⁽¹⁸⁾」と定義している。

二、戦後の秩父祭・川越祭を対象とした研究

戦後の都市祭りを対象とした調査研究を、比較的早い時期に行ったのは宗教学・宗教社会学である。秩父祭の分析を皮切りに、柳川啓一、藪田稔といった東京大学宗教学研究室の人たちによる調査研究が進められた。

(一) 戦後の秩父祭を対象とした柳川啓一・藪田稔・赤池憲昭による研究

秩父祭を対象とした研究には、昭和四一（一九六六）年の藪田稔「祭り参加の諸相と階層⁽¹⁹⁾」、昭和四二年の柳川啓一「祭と近代化⁽²⁰⁾」、昭和四五年の柳川啓一「祭りと現代⁽²¹⁾」、昭和四六年の赤池憲昭「祭りと町会⁽²²⁾」、昭和四七年の「親和と対抗の祭―秩父神社夜祭―⁽²³⁾」などがある。

柳川啓一は、昭和三五年に東大文学部に着任し、この頃安保条約改訂のデモが行われ、まつりに興味を持ったという。最後のデモが終わり銀座で飲んだ際に、ある学生が「さあ、これで終わった。明日から勉強だ」といった言葉が印象に残り、政治現象・社会運動と宗教を重ねてみることができる貴重な体験をしたと感じ、祭り研究をすれば日本人の一つの生き方の解明になるのではないかという希望を持ち、祭り調査に入ってしまった。そして、昭和四三年の大学紛争を体験し、大学紛争は安保とは異なり、運動を行っている当事者が運動をまつりと規定していることに注目し、まつりに対する人々の意識が何年かの間で変化したとして指摘している⁽²⁴⁾。柳川は昭和四一年一〇月から六年に亘って秩父夏祭と冬祭（夜祭）の調査を行った。

〔藪田稔の研究〕

藪田稔は、秩父祭の調査結果を昭和四一年の「祭り参加の諸相と階層」にまとめている。この論文では、町内会、観光協会、神社の三者の関係性に注目し、町内会と観光協会は祭りの準備の段階でしばしば対立を繰り返すが、祭りになると祭りを立派に済ませるべく、両者の力を結集しようとする。神社の神事は、町内会と観光協会の対立を含めた、様々な対立を宗教的な象徴の次元で止揚し統一すべく、慎重に執行される。そして秩父夜祭の御神幸における山車の供奉、斎場祭執行後の深夜の仕掛花火の打ち上げに見られるように、一種オルギー的な興奮の盛り上がりの中で、対立のくすぶりがある程度昇華されていくのであるとしている⁽²⁵⁾。

藪田は、昭和四一年から六年に亘って行った秩父祭の調査の結果、昭和四七年の「祭」において、「祭りとは―、劇的構成のもとに祭儀（リチュアル）と祝祭（フェスティビティ）とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状況（コミュニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである。そして、その表象された世界像のなかで、集団はその存続の根源的意味を再確認し、成員のエトスが補強される。要すれば、祭は集団の象徴的な再生の現象である⁽²⁶⁾」との定義に至る。

こうした「祭儀」と「祝祭」という相反する行動志向を持つ両面から祭りを捉える視点は、昭和五〇年の「祝祭と聖犯⁽²⁷⁾」に受けつがれている。藪田は、この論文の最後で、結論的に「本来の具象的な神話的筋立て則した構成から既に遙かに遠ざかって、いわば勝手に一人歩きしているかに見える現代の祭りも、そこに改めて、秩序の自己放棄による混沌への回帰、表象的には秩序の強調を前提とした聖犯現象の自己実現、を原理として挿入してみると、過去の神話と現在の祭りが一種の宗教的次元で共鳴し合っていることが理解できるように思えてならないのである⁽²⁸⁾」と指摘している。

〔赤池憲昭の研究〕

赤池憲昭は、「祭りと町会―秩父市上町会の事例報告―」において、地域社会と祭りの問題を主眼に、秩父市上町会を対象にして、夏祭りや冬祭り、秋葉神社の祭りの三つの祭りや町の関係を考察している。赤池は、主として祭りや町会との組織上の関連から抽出され

る相関関係に注目し、上町会における三つの祭典は、町会 Status の Symbol 的意味をもち、祭りの執行を契機に将来の町会指導層を選別し、Status の上昇過程を媒介に祭りと町との対応関係を構造化しているとする。また、祭りにおける序列と担い手に照明をあてることで輪郭をえられる祭りの原理と町の原理との緊張関係に注目し、祭りは町会の平常時における序列と平行関係を有しながら、同時にそれを転倒する構造的矛盾をかかえている。祭りがいわゆる「お祭り騒ぎ」に尽きず、一種の緊張感を漂わせそれによって参加者を魅了するものであるとすれば、その理由の一つに祭りの担い手が獲得する矛盾性をあげることができると指摘している(29)。

〔柳川啓一の研究〕

社会変動と祭りに関わる研究

柳川啓一は、昭和四二(一九六七)年の「祭りと近代化」で、日本の近代化をみる見方には、変化(discontinuity)の面を強調する見方と、「新しいものは手段として利用するが、根本的な考え方は大きな変化をしていない」「まつりの形態が変わっても、それが与える集団との同一化という機能は必要とされる」という持続(continuity)の面を強調する見方の二つの見方があることを指摘している。その上で、「埼玉県秩父郡では、農村部では、ほとんど祭に山車をひくことが絶え、一方、秩父市ではさかんにおこなわれている」ことから、「都市的環境がいつも祭に対してマイナスの要素とばかりはならない」としながらも、自然に伝統が保たれているのではなく、担い手にはかなり大きな変化があることに注意を促している。つまり、「変化と持続の関係はたえず両面がはたらいっている」ことを指摘している。柳川のこれらの研究からは、「近代化と祭り」「社会変動と祭り」を考える上で、変化と持続の両面、あるいは、変化によって縮小していく側面と変化に対するリアクションとして拡大していく側面の両面をみる視点が必要であることがわかる。こうした視点は、初出が昭和五二年の「伝統社会の崩壊と宗教」という論文の中にもみられる。この中で柳川は、宗教社会学は宗教と社会との関係をみようという学問であるが、「宗教の育って来た、あるいは宗教の置かれている社会というのが非常に違った状況であるとすれば、宗教もそれに影響される」という面と、「社会が非常な変化を迎えようというときに、宗教がむしろ先頭になってその社会を新しい方向に引っ張っていく、社会の変動を促していく」という面があり、宗教社会学という学問はこの両面を見ようとするものであると位置付けてい

昭和四四年一〇月二五日に國學院大學日本文化研究所で開催された「祭りと現代」という講演の中で、近代化と祭り（広義には、近代化と宗教、社会変動と宗教）について捉える場合、①祭りが解体し、崩壊するプロセスとして近代化と祭りを捉える視点（社会学的に外側の状況や環境によって祭りがどういふふうに変ってくるかという面）と、②近代化に対する一つのリアクション・反応、あるいは反発とか挑戦として捉える視点（環境の変化に対して祭りというものが反発し、あるいは超克するという運動になる面）の二つの視点があることを指摘している。柳川は、フィールド調査を行った秩父神社の祭りが、「近代化、都市化、工業化というふうな社会の変動の激しい現象というのが、激しくなってくる程その時代に祭りというものは盛んになっている」ことを指摘している。ここで柳川がいう「盛ん」とは「非常に大規模な祭りになってくる」ことを意味し、秩父夜祭は特に昭和三〇年前後に盛んになったという。そのため、柳川は、祭りの宗教性として、①一つのドラマ構造を持ったもの、②聖と俗をつなぐ仲介者を必要としていること、③過去の再現であるという三つの特徴を挙げるとともに、近代化に伴って祭りがかえって拡大してくることを「宗教運動としての祭り」として捉え、これをもう一つの特徴として挙げている。そして、この「宗教運動としての祭り」の側面は、観光化や世俗化という位置付けだけではみられないとしている。つまり、柳川は、社会変動と祭りを考える上で、変化の側面のみならず、変化に対する一つのリアクション・反応として祭りが盛んになる（拡大する）側面にも注目する必要性を説いている。

初出が昭和四七年の「親和と対抗の祭—秩父神社夜祭—⁽³¹⁾」で、秩父市上町会を対象とした赤池憲昭の「祭りと町会」と、神社・町内会・観光協会の三者の関係性に注目した藪田稔の「祭り参加の諸相と階層」を参照しながら、祭りの組織原理を親和と対抗という一見矛盾した状態の同時達成をねらうものとして位置付けている。

具体的には、「表立った指導者のいない、しかもその進行について、たえず緊張しなければならない祭の組織原理は何であるか」「分業と統合によって成立する近代化、官僚化、あるいは世俗化した社会から遠望すれば、一見無構造であり、自然的状态における一体化とみえるものが、接近すれば、何か特定の原理がみえる」かどうかを明らかにしようとした。昭和三〇年に観光協会ができ、観光協会が企てる行事が、昔から行われていた祭りの周りに新しい行事を組み込んで行くことを指摘している。それによって、祭りの主催は町

内会と観光協会に二分されているが、両者が分業し、それが統合されるという意味での二分ではなく、「角突きあわせた形」で対抗しているとしている。つまり、町会は優位、観光協会は劣位という形で分かれた二分組織、すなわち「不均等分割」であると位置付けている。そして、それは両者を統合する指導者はいないが、対抗を通して窮極的には、共に祭りを盛んにして「秩父」の名前を高くしなければならぬという「親和」あるいは団結を目指しているという認識によって支えられているとしている。このことから、祭りの組織原理となつていゝるものを、「親和と対抗という一見矛盾した状態の同時達成をねらうもの」と規定している。そしてこの親和と対抗の関係は、象徴の次元の男女にもみられ、観光協会が新しい行事を思い付こうとするとき、再び男性に対する女性の役割が強調されるなど、祭りにおいて構造としては劣位にあるとみられながら、男女が対になることによつて祭りの全体にとけ込んで行くとしている。

なお、柳川啓一の「親和と対抗の祭り」で明らかにした視点は、例えば、人類学の次の研究に受け継がれていることが窺える。

文化人類学の谷部真吾は、「祭りにおける対抗関係の意味―遠州森町「森の祭り」の事例を通して―⁽³²⁾」の中で、静岡県周智郡森町の「森の祭り」を対象として、祭りにみられる町会内の対抗関係に注目し、それが祭りの中でいかなる意味をもっているかを考察している。その結果、祭りに参加する集団間の対抗関係を背景に、「新しい様式」(民俗学でいう「風流」)が付加されていくことを明らかにしている。また、観光人類学の安藤直子は、「地方都市における観光化に伴う「祭礼群」の再編成―盛岡市の六つの祭礼の意味付けをめぐる葛藤とその解消―⁽³³⁾」の中で、平成八(一九九六)年〜平成一四年の調査を基に、岩手県盛岡市の「盛岡さんさ踊り」と「チャグチャグ馬コ」といった事例から盛岡市地域全体の複数の祭りを対象として、祭りに関与する諸集団間の対立と葛藤を分析している。その結果、行政によつて文化財保護及び観光化の二つの異なる目的を同時に要請されたことで生じた対立と葛藤は、祭りに関与する人々が、観光化に対応し祭りを活性化する原動力となつていゝることを明らかにしている。

祭りの本質論に関わる研究

一方で、祭りの本質論に関わる研究も同時期になされている。

柳川啓一は昭和四六(一九七一)年の「祭の神学と科学―会津田島祇園祭―」で宗教現象のとしての祭一般の原型の探求を目的とし

て、祭研究の進展を図るために祭の神学（Ⅱ「実験・観察・証明の不可能な要素に究極的な原因を見出す学問」）の認識と、祭の神学と科学（Ⅱ「直接に観察できる諸事実の間に存在する関係を研究する学問」）の分業を説き、会津田島祇園祭を事例としながら、「つながりとしての祭」「聖なる劇としての祭」「矛盾の併存としての祭」の三つの祭の神学を提示している。柳川は、宗教現象の客観的・科学的理解を目指してきた宗教学には相容れない語感を含む神学という言葉をわざと使って祭の科学的研究は多くは無意識的に何かの神学を根底としていて、研究の進展には神学を完全に排除した徹底的な科学的研究を目指すのではなく、神学と科学の区分を常に意識し自覚する必要があると考えた（³⁴）。

同様な視点は、昭和四八年の「祭にひそむ二つの原理」にもみられ、秩父夏祭・冬祭（夜祭）の昭和四一年から六年間の調査成果を踏まえて出した藺田稔の「祭とは―、劇的構成のもとに祭儀（リチュアル）と祝祭（フェスティビティ）とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状況（コミュニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである」の定義に対して、「相反する原理を取り出してみるのはよいとしても、時間に沿った進行という点からのみ見ると、全体としては枠にはまった劇的構成、ドラマとしての祭という面しか浮かび上ってこないのである」と指摘し、非ドラマ的要素にも注目する必要性を指摘している（³⁵）。つまり、「祭り研究を進展させるためには、「ドラマとしての祭り」という一つの特徴だけで見る視点（Ⅱ「神学」）だけでなく、「ドラマとしての祭り」では捉えられない特徴（Ⅱ「科学」）にも注目すべきことを指摘している。

さらに、柳川は、昭和五年の「まつりの感覚（³⁶）」で「つながりとしての祭」（機能論）と「聖なる劇としての祭」「矛盾の併存としての祭」（構造論）の祭の神学だけでは解き明かせない、色（視覚）、音（聴覚）、御輿を担ぐ痛さ（触覚）、御馳走（味覚）、アセチレンガスの匂い（臭覚）といった「感覚」の問題を取り上げている。私たちがまつりを捉えるときに、信仰よりもむしろ感覚を持って記憶されている点を重視し、象徴として捉えるだけでなく、「感覚としてのまつり」の調査の必要性を説いている。柳川は、「つながりとしての祭」「聖なる劇としての祭」「矛盾の併存としての祭」といった三つの神学（特徴）のほかに、「感覚としてのまつり」という四つ目の神学（特徴）を提示したといえるのではなからうか。しかしながら、柳川は「まつりの感覚」を境に祭りの研究から遠ざかっていった。

こうした宗教学・宗教社会学における祭り研究は、石井研士が『戦後の社会変動と神社神道』の中で指摘するように、その後、祭りの本質論や景観論へ向かい、祭りと社会変動に関しては、人類学や社会学からの研究が進展した⁽³⁷⁾。

(二) 川越祭・秩父祭を対象とした中村孚美の研究

社会人類学・都市人類学の中村孚美は、昭和四七（一九七二）年に刊行された埼玉県川越市の川越祭を対象とした「都市と祭り―川越祭りをめぐって―⁽³⁸⁾」と同県の秩父祭を対象とした「秩父祭り―都市の祭りの社会人類学―⁽³⁹⁾」をまとめている。

中村は「都市と祭り」の中で、歴史的な関心ではなく、都市と祭りの関係性に注目し、詳細なモノグラフを提示した上で、川越祭の特徴として、鳶の活躍、華やかな祭りの衣裳、パレードとしての山車の曳き廻し、町内の重立ちの重要性と若衆の補助的役割を挙げている。そして、川越祭を支えているものは、都市の旦那衆の経済力と経済力から生まれるゆとりや文化で、市民にとつての祭りは一種の遊びとして位置付け、都市祭りの特筆として遊び・ゲームとしての性格を持つことと指摘している。つまり、川越祭の背景には、近世以来、商業の中心地として発達した川越の町の歴史が自ずから表れているとして、川越祭の特色は、関東風ないし江戸風の好みや気風を伝えていることにあると指摘している。

また、中村は、「秩父祭り」においても、詳細なモノグラフを提示した上で都市と祭りの関係性に注目し、リーダーシップ、時の割りふり、屋台・笠鉾の配置の問題、屋台・笠鉾の運行技術の問題、祭りにおける係りの細分化と専門化、ページェント、在郷町としての性格、祭りと人をキーワードとして秩父祭の特徴を捉え、秩父祭は、それを支える町の人々のそれぞれの人生と深く結びついていることを指摘している。

(三) 川越祭・秩父祭を対象とした松平誠の研究

〔川越祭〕

社会学の松平誠は、昭和五八（一九八三）年刊行の『祭の文化 都市がつくる生活文化のかたち⁽⁴⁰⁾』において、関東の伝統的都市

に根づく「町内」と呼ばれる生活集団に着目して、この集団の文化的な意味を川越祭や府中の大國魂神社の祭礼などの分析を通して探っている。

川越祭では、川越市旧高沢町に注目し、昭和五〇年一〇月一四日・一五日の調査をもとに、高沢町の生活集団に着目しながら、旧大店の店主のみならず、「全日制」住民と「定時制」住民の存在を指摘し、これらの生活集団と祭礼との関わりを考察している。ここで松平が「全日制」住民と命名したのは、古くから町に密着して生活を営んでいる自営業を営む青年男女・家事従事者・老人・生徒・児童および幼児であり、「定時制」住民と命名したのは、町外に職場を持つサラリーマンや町外の学校へ通う学生などのいわば町内に寝に帰ってくる人たちのことである。この「定時制」住民が町内との縁を太く結び直そうとする機会が年に一度だけあり、それが神社祭礼の付け祭で、会社仲間を呼んで祭見物の賑いを作り、学生仲間を連れてきて日頃は姿を見せない若者の活気を作り出す。つまり、「定時制」住民は、自分の縁のネットワークを町内にひき入れることによって、町内をより開放し、それによって、町内と自分との接点をつくっていくと指摘する。

では、こうした「全日制」住民と「定時制」住民がどのように祭りに関わっているのか。松平は、「昼の祭」と「夜の祭」の視点から両者の祭礼への関わりを位置付けている。昼の祭に表わされているのは現実の町内の社会構成であり、「全日制」住民が祭の主役になっている。昭和五〇年一〇月一四日午前の古式に則った山車行列は、現在の「全日制」住民の構成を表わしている。一方で、夜の祭（山車の曳っかわせ）は、現在の「定時制」住民がこれを独占している。これが祭りのメインイベントであるが、「定時制」の男たちは主役にはなれず、夜の祭を演じる人足役であると位置付けている。つまり、旦那衆の実権が消え町内の社会構成も変った古い町では、生活のカタチは変わっても、人々を町内へ結びつけていく祭の文化は、奇妙なほどに、今の町内に息づいているようにみえる。そして、「全日制」で生活している人々が生活している限り、確実に核は形成され、生活の文化はカタチを表わすとしている⁽⁴¹⁾。松平は町内社会を、町内には強固な伝統ができあがりにくい性質があり、「変化こそ町内の本質である。環境インパクトによって絶えず動揺し、移りかわっていくからこそ、町内は存続してきたのである⁽⁴²⁾」と捉えているのである。

〔秩父祭〕

昭和五九年には、松平誠は、秩父祭を対象とした「秩父の町内―近代における伝統的都市の祭りと生活集団の変容―⁽⁴³⁾」を刊行し、翌・昭和六〇年の「都市の社会集団(5)―秩父の祭りと生活集団―⁽⁴⁴⁾」を公にしている。この二つの論考は、のちに『都市祝祭の社会学』の「第一章 伝統的都市祝祭(1)―秩父本町の生活共同―⁽⁴⁵⁾」へ発展した。

松平は、「第一章 伝統的都市祝祭(1)―秩父本町の生活共同―」において、秩父本町は古い在郷町の性格をいまだに多く残している伝統的な都市の一つであるが、現在では、都市の伝統的神社祭礼をシンボルとする生活共同の実態をほとんど失い、その経済と威信との階層支配を基盤とする統合の意味も減じている。それにもかかわらず、秩父神社祭礼と秩父本町という社会単位は存続しているのは、過去の生活共同の実態はほとんど失われたが、神社祭礼は都市祝祭の一つの類型として存続し、秩父本町構成員の感性の世界において、その観念的な生活共同のきずなどとして役立っているからであると位置付けている。

松平は、秩父本町の伝統的な共同社会の中核を構成してきたのは、そこに住む住民のうち一部の人たちであり、町の経済と威信の階層における上層と中層の家々で構成されたことを強調している。第二次世界大戦以後に成立した秩父本町町会では、その幹部に選ばれているのは戦前期以来の自営業の世帯主であり、現在でも町内会費の金額上の上位層を占めていて、彼らを中心に成立している。ここには、意識の上では、過去の町内社会がいまだに生きており、彼らを町内の中心として町内会の総意が形成される精神構造が反映されているとしている。つまり、秩父本町では、共同の基礎の上に特定の家々の階層的な結合があり、町内の連帯はその範囲内で成立する。ただし、町内の連帯は、同じ土地に居住しながら町内社会から排除される層を持つことから基本的には排他的な性格を持っている。そして、祭礼のなかで確認される構成員の階層性は、毎年度更新されながら継承され、外部との障壁を構成したと指摘する。

秩父本町の秩父祭は、祭礼の中にその外部とをはっきり区別し、町内のカミによる結合を、外部に対して誇示することによって、構成員の間に社会的求心力を増大させる性質のものであると分析している。

三、戦後の祇園祭・天神祭・左大文字行事を対象とした研究

戦後の京都の祇園祭、大坂の天神祭を対象とした研究についてみておきたい。文化人類学の米山俊直は、昭和四九（一九七四）年発刊の『祇園祭⁽⁴⁶⁾』、昭和五四年発刊の『天神祭⁽⁴⁷⁾』で京都・大阪という大都市の都市祭りの研究を行っている。米山の祇園祭研究の端緒は、中村孚美の秩父祭研究に触発されたとしている⁽⁴⁸⁾。

（一）祇園祭

米山は『祇園祭』の中で、祭りの参加者に注目し、立場や見方のちがう多様な参加者それぞれが祇園祭を自分のこととして考えているため、多様な参加者をつなぎ、祭りを実現させるのであると指摘している。そして、多様な参加者が祭りに参加する理由の一つは、祭りが人々にとって社会的に許された大きい遊びの機会であることを挙げ、祇園祭が“めまい”と“生きがい”を与える場になっているとする。また、歴史的経緯を踏まえた上で、祇園祭に災厄を免れることを期待し、祭りが創造と表現の場になっていることを指摘している。その後、米山俊直編著『ドキュメント 祇園祭 都市と祭と民衆と⁽⁴⁹⁾』を刊行している。

（二）天神祭

米山は『天神祭』の中で、米山は祇園祭と天神祭の比較を行っている。両者の共通点として、夏祭である点、町人・町衆の祭りである点、複合的・重層的で立体的な構成を持っている点、御霊信仰に起源が求められる点、人々の都市的集住と情報の集積の結果として成立し盛大になった点、土地の古い神祠の上に力のあるものを勧請して生まれた神祠である点、商人を主要な担い手としている点などを挙げている。一方、相違点として、祭礼を支える組織が祇園祭は地縁的な町組を基盤に持っているのに対し、天神祭は、全体としては講社組織（Ⅱ社縁）を基盤にしていることが最も大きな違いであると指摘している。また、祇園祭には、地方自治体といった地縁原理の延長線上にある組織が実質的に保護しているが、天神祭は、天満市場の中央市場などへの拡散もあって、地元的地縁組織の弱体化をまねいたまま、あとは同業者団体などの講社へ大きく依存してきたとしている。そして、この基盤の差が、祭礼の持続性にも反映し、

祇園祭は戦争による中断などがあっても年々さかんになっているといわれるのに対し、天神祭は船渡御中止というような事態があったりするとしている。

米山は、昭和六一（一九八六）年発行の『都市と祭りの人類学⁵⁰』においても、祇園祭の特徴や祇園祭・天神祭の比較、都市と祭りの分析などを行っている。

この本に所収された「祇園祭―その七つの驚異」では、祇園祭の特徴を「町がそのままハレの舞台に変わること」「神々が巷にあらわれること」「人々も変身すること」「風流の工夫が見られること」「見物衆の興奮が見られること」「二階祭りの伝統が残っていること」「厄除けの靈験あらたかなること」を七点挙げている。米山は考察の中で「祭りは、人々を疲れさせるためにある―はげしく大きい発散のためのイベントという性格を、本来もっているものではないか。それは、ただ祭りをやる人たちだけでなく、見る人たちについてもあてはまる」（二五八―二五九頁）と指摘している。

「祇園祭と天神祭―伝統の祭礼をどうみるか」では、祇園祭と天神祭との対比から、二つの祭りとも見物人が非常に重要な役割を果たしている、「まことに祭礼は、神ないしそれに代わる象徴と、神事の当事者と、見物人の三つの要素が不可欠であること」（一七八頁）を明らかにしている。そして、祇園祭における一番祭礼らしい部分は巡行を終えた山や鉾がそれぞれ町へ帰ってゆくところであり、天神祭においては船渡御を終えた神輿や太鼓が上陸して、最後に天満宮に還る「宮入り」だといった人の話を踏まえ、「祭礼をやる人たちと、見物人がひとつになるオーシーがそこに現出することはたしかだ」（二七八頁）と指摘している。

（三）左大文字行事

文化人類学・都市人類学の和崎春日は、京都の盆行事である左大文字行事を都市祭礼として分析を行っている。昭和五一（一九七六）年発行の「都市の祭礼の社会人類学―左大文字をめぐって―⁵¹」、昭和五六年発行の「左大文字地域におけるシンルイ意識―シンルイ構造・呼称・伝統行事との関連―⁵²」、昭和五七年発行の「左大文字における伝統と変化―その儀礼様式と祭祀集団をめぐって―⁵³」などがある。これらの研究は後に昭和六二年刊行の『左大文字の都市人類学⁵⁴』にまとめられた。

和崎は、『左大文字の都市人類学』において、都市祭礼には、宗教行事・伝統行事・観光行事という三つの行事性があり、それは、都市祭礼における自然性・閉鎖性・開放性という三属性で説明できるとする。この三つのレベルを自己認知やアイデンティティの側面で見ると、第一が自己客体化以前の自分、第二が自他の相互主観のなかの自分、第三が自他の主観超越による共通地平にいる自分、という三つの自己認知に照応させることができるとしている。つまり、和崎は、左大文字の分析から都市祭礼が持つ三つのレベルの複合的性格を明らかにしている。

左大文字や大文字五山送り火の都市祭礼には、地元閉じた伝統行事というアーバン・エスニティのレベルと、市民に開放された市民的宗教行事・観光行事という祝祭のコミュニティレベルとが、二律背反的にまた表裏一体をなして併存していることが大きな特色であると位置付けている。みんながみているからこそ、市民の敬心が集まっているからこそ、観光旅行者がこれを見て美しいと感嘆してくれるからこそ、テレビ・ニュースやドキュメントで全国に流され多くの国民が見知りその壮大さに向かえるからこそ、その視線集中の逆ベクトルにのって、地元文化の固有のエスニティが主張できる。市民にも旅行者にも、そしてマスコミによって全国の人びとにわたって「見る者」がいるから、自文化を「見せる」シンボル性が確保される。つまり、祭礼は自己文化主張のシンボルなのであると指摘する。

そして、左大文字行事を重層構造として捉えている和崎は、様々な操作概念を使って分析する。左大文字にはダイナミックで壮大な山焼き行事という大スケタルがあり、人々は眩暈 \parallel イリンクスという物理的「落差」を覚える。もうひとつは閉鎖性から開放性への人間存在の長い距離を埋め、個から共同存在に帰する存在論的「落差」のイリンクスがあるとするとする。この「落差」から和崎は、都市祭礼とイベントの違いに言及し、イベントには、もしあるとしても物理的「落差」しかなく、存在論的「落差」はないと云位置付ける。また、祭りには、核や儀礼があり、祝祭のレベルを備えているが、イベントには儀礼的核はないし、また宗教的核を備えているわけではないと位置付けている。ここでいう核とは、市民のコードであり、人びとの共通理解なのであるとしている。

和崎は、考察の最後で、人びとは都市祭礼の弁証法で、自己存在をぶつけあいエスニティを主張しあい、その強い自己肯定の相克と超克のうちに、一段止揚した超構造の次元で、上昇的一体化を果たし、「市民」となった。市民の全ての「生き様」の燃焼が左大文字に

投影され、実現され、生かされ、個が都市の総和をつくっていったのであるとする。そして、都市祭礼は都市理念の爆発であり、市民は、そして、左大文字の「大」の火のうちに「愛のシステム」（個人が自分自身の欲求を他人の欲求と一体視するにいたるようなシステム）の復権に成功したのであると結論付けている。なお、和崎は、平成八（一九九六）年に『大文字の都市人類学的研究（55）』を刊行している。

このほか、京都の時代祭を分析した、昭和六一年発行の阿南透の「歴史を再現する」祭礼（56）がある。この論文の中で、阿南は、時代祭の戦後の大きな変化は、女性の参加と、歴史上著名な人物が数多く個人名を持って登場するようになったことを明らかにしている。

四、戦後の神田祭を対象とした研究

（一） 藪田稔の研究

当時、國學院大學日本文化研究所の研究員であった宗教学の藪田稔は、昭和四三（一九六八）年の五月に神田神社の神田祭、同年六月に日枝神社の山王祭を調査し、中間報告を兼ねて「大都市の祭り（57）」、「大都市の祭り（二）——都市における祭りの理念型——（58）」にまとめ、続いて「祭と都市社会」「天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（一）（59）」として成果報告を公にしている。

藪田は「祭り」と都市社会・「天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（一）の中で、明治維新百年を迎えた昭和四三年に「都市社会における宗教的な文化現象の一つとして祭りの実態を多面的に資料化しておく、将来、祭り構造の比較分析と、都市住民の宗教生活に関する考究とに役立てたいとの狙い」から、明治百年記念の奉祝行事として「本祭」が揃って行なわれた神田祭・山王祭をはじめ、佃島住吉祭・川越祭・秩父夜祭の合計五つの祭りの調査を実施した。その結果、いくつかの問題関心が浮かび上がったが、とりあえずそのうちのひとつとして、祭りに関わる社会集団の問題を神田祭と山王祭の調査から報告している。具体的には、「現在における「祭り」という

宗教現象それ自体の分析結果ではなく、祭りに参加してその担い手となる人びとの参与機構に視点をおき、地域住民が、どのような機構を通じて祭り行動に参加しているのか、という社会的関心に属する報告」であるとして考察を行っている。

その結果、第一に「祭りの構造」について、神田祭・山王祭を中心に、現象的变化に耐えて持続してきた構造的な特色として、①神幸祭、町内祭礼のいずれを問わず、御神霊のシンボルの移動が、巡回区域の宗教的浄化という象徴的効果を果たしていること、②各氏子町内の神輿や曳き太鼓などによる「練り」の行動には、自町内だけを練る「町内練り」、隣接町内と連合して十数基がともに練り合う「地区練り（連合渡御）」、やはり地区単位で数カ町の神輿が神社に練り込んで宮詣りをし、お祓いを受ける「連合宮入り」があり、多数の観衆を引きつけた上で成立する集団的興奮、あるいは日常性を突き破るべきオルギー状況を現出させることが期待されていること、③祭りに行なわれる諸行事をになう基礎集団の単位が、町内集団、すなわち町内会であることを指摘している。

第二に「祭り」と町内会」について、神田祭の場合、氏子町の一〇八のうち七五の町会（全町会数の六八・四％）が神酒所を設置し、ここを中心として神輿の巡幸などが行われることから、氏子としての一般住民の祭り参加は、経済、労力ともに町内会を単位として行われることを確認している。その一方で、日常時（昭和四二年一月中旬）に配布された神札を受けた氏子家庭の分布状況は、必ずしも、祭り時の町内行事の実施状況に現われる分布状態と一致しない点が指摘されている。つまり、一般に氏子は、町内または町内会という集団単位を通して祭りに参加する傾向を示し、参詣行動を含めた個人的、家的な次元で動機づけられる宗教的行動は、祭りにおいては減少する傾向を示していることを指摘している。

第三に「町内会と祭り」について、「町会とは別に祭典委員会または氏子総代等の団体を設けて運営しているも、両者の団体はほとんど一体であることが多く、町会の役員が大部分この氏子団体の役員を兼ねていたり、事実上別の団体が祭礼を行う形をとっていても、みこし、太鼓等の祭礼具は町会が所有し、これを使用させているものであったり、あるいは祭礼執行団体に対し、町会から相当の補助金を出したり、舞台やみき所を作るとか、町会の祭礼行事に対する地位は非常に高い者がある」ことを指摘している。

最後に、「所見―祭り」と地域社会」として、祭りの構造を持続させている主な担い手は町内会であり、住民が氏子として動員され、神社活動に直結する象徴行動に参与するメカニズムには中間的媒介機構として町内会という地域団体が介在していることを指摘し、祭り

を通して顕在化する氏神―氏子の関係は、町内会のレベルで成り立っていることを確認している。

以上のように、菫田の研究についてみてきたが、鳳輦や町内神輿といった御神霊のシンボルの移動に伴う巡回区域の宗教的浄化や町内会を媒介とした地域社会と神社（氏子と氏神）の関係の維持など持続の側面が強調されている。

菫田稔は、秩父祭を対象とした昭和四二年の「祭り参加の諸相と階層」を皮切りに、神社と氏子が祝祭の場を通してどのようなふうにつながっているかに関心を持っていたことが窺える。それも厳粛な「祭儀」だけでなく、オルギー状態を迎えるような「祝祭」がどのように連動しながら、祭りが形成されているかを解き明かしたいという問題関心があったことが窺える。昭和四三年の菫田の神田祭調査もそうした問題関心の上に調査研究が行われたことに留意が必要である。

（二）松平誠の研究

菫田稔の調査から二四年が経過した平成四（一九九二）年、社会学の松平誠によって神田祭の調査が行われた。その報告として、平成五年発表の「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」⁶⁰をまとめている。

松平は、まず、菫田の研究を概観した上で、菫田の調査段階では脱地域化の起こりにくい社会的性格を持つとした神田一帯は、一九七〇年代を通じて加速度的に人口流出が続き、一九八〇年代には高層ビル化が進んで人口流出が止まらず、平成二年までの四半世紀の間に人口の半数強が地域から流出し、脱地域化が進んだことを明らかにしている。そして、こうした社会変動によって町内会そのものの性格がビル化した町の中で変わらざるを得なかった点を指摘している。

次に、昭和四三（一九六八）年と平成四年の神田祭の構成について比較を行っている。その結果、氏子町内会の集団規模や氏子町内の祭礼行事参加状況といった祭りの際の町内会編成には大きな変化はみられず、連合渡御と並んで町内の神輿練りも依然として盛んであり、全体としては町会の神酒所も健在で、神酒所の分布状況にも大きな違いがみられないとしている。ただし、例大祭への町内会代表参列は存続しているものの、神幸祭に際しての町内への鳳輦出迎え・見送りを町内行事として実施したのは四四町内会に留まっている。また、神輿の蔵入れ・蔵出しを実施したのは三四町内会で、このうちどちらか片方だけしか実施していない町内会が七つある。同

様に、神酒所での御霊入れ式（町内の神輿に神の分霊を入れる儀礼）は七六町内会で持続しているものの、御霊返しを行ったのは三五町内会に留まる。つまり、昭和四三年の段階では、神事の持つ氏子と神の連携が神の巡回という意味で解されていたが、平成四年の段階では儀礼の持つ本来の意味が既に理解されにくくなっていることを指摘している。

また、祭りの町内組織についてみると、ほとんど全ての町内会が町内に祭典委員会を作り、これに青年部・婦人部・老人会などが加わり、役割動員を形成する形に変化はなく、町内会が依然として地域における儀礼の実施機関であり、祭礼経済に町会費を充てる町内会の割合も大きな変化がないとしている。しかし、一般動員に問題があり、既に昭和四三年の段階でも、一般動員が「子供と母親」という町内会が五つあり、「商店従業員の動員」「中小企業従業員」「学生アルバイト」など、大人連・若衆・子若といった男子居住集団による神輿担ぎが崩れていたことが窺えるとしている。

そして、平成四年の段階の一般動員の大きな変化として、①動員される人々の中に半数ないし三分の一の女性が登場してきたこと、②かなりの部分を様々なネットワークから集めた町内会員外の人々で補っていること、③一九七〇年代以来の新顔として御輿同好会のメンバーが加わったことを挙げている。さらに、松平は、神輿同好会の参加に注目している。神輿同好会は地域の組織とは無関係に神輿担ぎの愛好者が集まってつくった同好会組織であり、一九七〇年代以降都心の主要な祭礼で同好会が目立ってきた。平成四年の神田祭において、氏子神輿の連合宮入参拝（連合渡御）に参入した神輿同好会の総数は五七で、総計一九の町内会に参入して連合渡御に参加し、参入した神輿同好会は関東一円から集まっていることを明らかにしている。ただし、同好会の活動は必ずしも全員の集合行動ではなく、構成員の希望によってその都度グループを構成し、祭りに参入するという緩い組織になっていることが窺われるとしている。そして、こうした神輿同好会の存在が平成四年の段階では神田祭の欠くことのできない一要素になっていることを指摘している。

以上のように、松平の研究についてみてきたが、昭和四三年の藪田の研究と比較して、氏子と神の連携が神の巡回であるという神事の持つ意味は薄れたとする。また藪田の調査時点では、祭りを通して顕在化する氏神と氏子の関係は町内会のレベルで成立しているとしていたが、平成四年の松平の調査の時点では、町内会が依然として地域における儀礼の実施機関であるなど役割動員を形成する形においては持続の側面が指摘されている。その一方で、一般動員、すなわち祭りの担い手には、女性や町内会員以外、神輿同好会の参加

が目立つなど変化の側面が強調されている。

この松平の研究で特筆すべきは、昭和四三年の藪田稔の調査と調査項目を揃える形で実態調査を行った点にある。同一の都市祭りの分析を調査項目を揃える形で行ったため、実証的なデータに基づく比較検討が可能な貴重な先行研究といえる。

須田町中部町会の女神輿を対象とした研究

松平誠は、神田祭に女神輿（ギヤル神輿）を登場させた須田町中部町会に注目し、平成三（一九九二）年発行の「現代神田祭仄聞（⁶）₁」、平成四年発行の「神田の地上げと生活集団（⁶）₂」「神田と祭りに生きる人々―神田祭女神輿町内の古老談―（⁶）₃」といった複数の論考を公にしている。平成五年には、先に挙げた「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」が発表された。

以上の研究成果をベースとしながら、平成六年に小学館から刊行された『現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―（⁶）₄』所収の「第二章 娘御輿の登場―神田祭の新たな神賑わし―」「第三章 ミル人とスル人の逆転―神田の祭りの主役交替―」「第六章 氏はいったい誰なのか―虫食いになった町内―」「第七章 ビル住民・通い住民・企業住民―氏子町内会の構成員―」が著された。

ここでは、複数の論考において内容が重複するところがあるため、松平の研究で神田祭を対象とした最初の論考で、女神輿渡御の詳細なモノグラフを明らかにしている「現代神田祭仄聞」を中心にみていきたい。

松平は、「現代神田祭仄聞」の中で、昭和六〇（一九八五）年から立教大学社会学部松平研究室の学生とともに、神田祭の調査を始めたのは須田町中部町会であったとしている。この町内会を対象としたのは、①徳川時代から江戸の台所として有名な青物市場だったという古い歴史の町であること、②過去一〇年間に人口流出とビル化が激しく進んだ場所であり、一九八〇年代半ばには自力で勝手にやる町内神輿の渡御の実施が困難になったが、女神輿をギヤルの一般募集という想像もできなかった方法で実現したことを挙げ、①と②という二つの相反する顔が二重写しになっている状況の中に、現代日本の都市的な時間軸と空間軸との接点を典型的な形で理解し、都市生活文化の実態について、具体的な探求があるいは可能なのではないかと考えたからだとしている。

松平は、第一に、女神輿について分析をしている。須田町中部町会で女神輿が始められたのは昭和六〇年として、この年の四月に都

めての女神輿募集のチラシが貼り出された。この年の応募者は約一〇〇人であったが、核になる町内の女性も神輿担ぎにはまだ慣れていなかったとしている。貼り出されたチラシ（松平「現代神田祭仄聞」の註（2）に記載）から、この年は五月一日（土）に神輿の町内渡御が男女混合で行われ、翌一二日（日）には神輿の連合渡御が女性のみで行われたことがわかる。そして、二年後の昭和六二年になると、応募者一二〇人に若干増加し、男女混合の担ぎ手による神輿の町内渡御は行われず、町内渡御と連合渡御への参加は神輿に変化したことを明らかにしている。また、女性による神輿担ぎも慣れてきて、祭衣裳も一部変更され、見栄えのする祭衣裳に年々工夫されていったとしている。担ぎ手の募集のチラシ（松平「現代神田祭仄聞」の註（3）に記載）には、「当町会の御輿は、前回のマスコミの話題を一手にさらった女御輿、『伊達政宗』よりも人気のある元祖『女御輿』です。」とあり、誰でも参加可能な「オープン参加方式」であることが書かれている。また、一年前の昭和六〇年にはマスコミに須田町中部町会の女神輿が取り上げられたことがわかり、『伊達政宗』（おそらく『大河ドラマ』）より人気がある「元祖」の女神輿であることが強調されている。「元祖」が強調されるのは、他の町内会でも女神輿が始められたことが窺われる。

平成二年になると、昭和六二年と祭衣裳には大きな変化はないが、鉢巻の手拭として「ピンクの模様を散りばめた女性向きの派手な品」が作られ、この手拭が「この町の参加者を他の町内とはつきりと区分けするようになった」としている。この年に入り、須田町中部町会の「女神輿の盛況にあやかろうと、二、三の町内が同様な試みを始めた」という情報があり、前回以上に盛り上げようと、町内会祭典委員会が作られ、町内の企業（特に女性従業員が多い金融機関）に勧誘を行い、町内会婦人は親戚縁者を頼んで大々的に娘探しを行った。他町会の女神輿と差別化し、祭りを盛り上げようとする意志は、担ぎ手募集のチラシ（松平「現代神田祭仄聞」の註（4）に記載）にもみられ、チラシには「元祖 女みこし」であることが書かれ、「オープン参加方式」で女性ならば誰でも参加できることが強調されている。そして、参加関係諸団体の責任者やリーダーを集めた会合が開催されたが、松平はこの会合を「祭の説明をし、その成功にむかって協力を依頼するのは町内会の祭礼委員たちであり、それを受けて協力を誓い、モリアガッタのは、参加グループである町外の余所者たち、という構図」でかつての祭りではみられない「不思議のあつまり」であったとして、伝統的になかったの祭りでは「祭は町内がスるものであり、観客はそれをみるものだった」が、今は「町内会は準備し、下支えをするものであり、それに乗って繰りだ

すのはほとんどが余所者という構図」に変化したことを指摘している。

一方、平成二年から、町内会祭礼委員会に婦人部としての役割（神酒所係・食料係・衣裳係・お土産係）が与えられ、婦人部が拡大している。こうした中で、平成二年五月一三日に町内神輿連合渡御が行われたが、女神輿の巡幸には、町内七人（うち婦人部神輿リーダー二人）、町内関連法人六一人、町内地縁・血縁者及び友人五八人、立教大学社会学部松平研究室二二人の総勢一四八人の女性が神輿を担いだ。ただし、応援として銀行から男子二〇人が参加している。そして、町内会神酒所前から神田神社へ宮入りをする町内神輿連合渡御のあと、町内に還御し町内巡幸を行い、お土産をもらって解散するまでの流れが時間を追って記録されている。ここからわかることは、婦人部が中心となって女神輿の巡幸を支えていることであり、神輿の休憩には婦人部食料係が運んだ、握飯・寿司・沢庵・麦茶・コーヒー牛乳・ビール・ジュース・ゼリー・マドレーヌ・もなかなどが配られている。

第二に、女神輿が登場した須田町中部町会の町の変化について分析している。松平の調査によれば、一九八〇年代の初めには二五〇世帯以上を数えた町の住民は、昭和六四年には実際に住んでいる世帯数が六七戸（住民台帳記載の世帯数が七六戸）に減少していることを明らかにし、神輿を担ぎ手となる年齢層は一六歳（高校生）～四〇歳で、男性に限定してみると最大で三三人（四一～六〇歳の三人を加えても五六人）しかないことから、一九八〇年代半ばには町内だけでは神輿の巡幸が困難になっていたことを指摘している。

第三に、女神輿を生んだことよって町内を結束させ、連合渡御を実施させた活力はどこから生まれてきたのかという要因として、①地域社会や地域住民といった既成の伝統的な結びつきの糸が切れつつあることから否応なしに生まれた「地縁の拡大」とでもいうべき発想の転換がなされたこと（「通いの住民」が市民権を得たこと）、②ビル化の中で町内観念が変化したこと、③町内会と会社・一般店舗との関係（「会社世帯の住民」の増加）、④旧来の町内にも、こうした外部からの変化に即応した住い方の変化が起こり、それが町内社会の衰退に対する支えになっている点、⑤町内における女性の役割の変化とそれによる町内構成の変化の五点を挙げている。

第四に、町内会組織の変化について分析している。昭和六三年に神田祭の神輿連合渡御への参加を中止せざるを得ない状況の中、町内会役員を四〇代中心に若返らせ、事業（防災・防犯・青年会・福祉）と環境整備（保健・清掃）という二つの柱ができ、祭祀部と婦人部とが活動の目玉として浮き彫りになったとしている。そして、日常の社会共同が改めて見直され、年末の夜警が自主的に復活し、

環境整備を巡って町内会の境界内の法人企業と居住者との話し合いが生まれるなど、町内会活動は変化し始めたとしている。

以上、松平の「現代神田祭仄聞」についてみたきたが、町内の男性の担ぎ手が減少し、町内神輿の巡幸が困難になるという危機的な変化を迎えたとき、女神輿という発想の転換が起こり、町内会組織を変化させ、社会共同が再認識されたという事実は興味深い。まさに、変化に対するリアクションとして祭りが盛んになっているといえる。

なお、松平の研究以降の変化については、筆者による拙稿「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭⁽⁶⁵⁾（本研究…第三章第五節に所収）、「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭―「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」―⁽⁶⁶⁾（本研究…第四章第三節に所収）などにおいて明らかにしている。

（三）清水純の研究

清水純は、「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―⁽⁶⁷⁾」において、平成二一（二〇〇九）年の神田祭（本祭）の調査・平成二〇年と平成二二年の裏祭・その前後の時期に行った調査から、松平誠と同様に、担い手の変化に注目し、神輿の担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関わりに焦点を当てながら、神田祭を対象とした菌田稔と、平成四年の松平誠の調査時点からの変化を分析している。

松平誠の調査で明らかにされた、神輿同好会が特定の祭りや町会に拘束されないとの指摘に注目し、神輿同好会を対象とした北村敏の研究⁽⁶⁸⁾を参照しながら、神輿同好会が次第に特定の町会と結びついていくプロセスがみて取れるとし、清水の調査からも神田祭で類似の状況がみられたとしている。つまり、神田祭において、地元企業の社員や女性の担ぎ手、神輿同好会の参加も当たり前になっているという変化を指摘している。しかしながら、神輿同好会の協力なしに神輿巡幸が行えなくなる半面で、神輿同好会と町会との間で揉め事や喧嘩などのトラブルも発生し、鎌倉町のように地元青年による神輿同好会の成立がなされている。こうした動きは、北村敏が神輿愛好会の示す熱気が、神輿を持つ地元の青年たちに刺激を与えたというだけではなく、「多くは同好会の参入によるトラブル発生や伝統的な祭りの雰囲気の変貌が、地元の人々に危機感を抱かせ、地域を地盤とした睦会や同好会の成立を促したと考えられる」と分

析している。また、清水が調査した地域においては、大抵二〇〇三〇年、時には四〇年もの付き合いが続く神輿同好会が特定の町会に毎回担ぎに来る関係が成立しているが、神輿同好会と町会との関係は長年続いたとしても祭り以外の日常的な領域に拡大深化することはほとんどないことを明らかにしている。清水は、こうした町会と神輿同好会の結び付きを「祭縁」と呼び、この祭縁の場合には祭礼の主催組織である町会と、神輿同好会との間に目的の限定された二者関係が結ばれ、神輿渡御を果たすのに必要とされる程度の、相互の距離が維持されることを指摘している。そして、清水は「結論」の最後で、「神田祭を主催する各町会は外部からの参加者を招来し、常にそれらとの力のバランスに腐心しながら、町会の主体性を保持することのできる新しい関係性を構築しようと努めてきた。町会役員たちの意識に共通するものは、町会神輿は自分たちの神聖な財産であり、神田祭は自分たちが主催する地域の祭りであるという強い自覚である。そこに外部から担ぎ手が入ってきたときに、町会側の運営上の主導権を維持しようとする意志が働いてきたのである」と分析している。

以上、清水の研究についてみてきたが、町会の一般動員、すなわち、祭りの担い手が松平の調査時点よりも、地元企業の社員や女性、神輿同好会の参加が当たり前になるという変化が進む反面で、藪田の調査時点と同様に町会神輿は神聖なものであり、地域の祭りは自分たちのものであるという意識が持続されていることが窺える。また、神輿同好会とのトラブルや祭りの雰囲気の変化の中で、地元青年たちによって睦会や神輿同好会が結成されるなどの変化に対するリアクションとして祭りが盛んになる要素がみられることがわかっている。ただし、清水の研究において、神輿同好会を受容していった背景をみる上で必要な各町会の個別具体的な社会変化（ビル化に伴う人口減少や町内組織の変化など）についての詳細なデータが示されていない。

戦後の神田祭に関しては、実証的なデータに基づいた同一の都市祭りを継続的に調査した先行研究が複数存在し、研究間の比較分析もなされている。

なお、松平誠、清水純の研究以後の変化については、筆者による拙稿「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」⁽⁶⁹⁾（本研究・第三章第一節所収）、「神田祭調査報告―平成27年 神田神社・御遷座400年奉祝大祭の分析―」⁽⁷⁰⁾（本研究・第三章第二節所収）で明らかにしている。

五、戦後の山王祭・三社祭・佃祭を対象とした研究

(一) 戦後の日枝神社の山王祭を対象とした研究

戦後の日枝神社の山王祭については、先に紹介した昭和四三（一九六八）年の調査をもとにした藺田稔の研究⁽⁷¹⁾があるのみである。その後の変化を追跡した調査はなされていない。おそらく神田祭と同様な担い手の変化がみられるはずである。平成二四（二〇一二年）六月一〇日（日）に、山王祭に際して、日本橋や茅場町の氏子町会の神輿が日本橋まで連合渡御する「下町連合渡御」が行われた。この連合渡御では、「野村證券」や「高島屋」などの企業名の入った半纏を着て神輿を担ぐ人たちが多数みられた。また、日本橋の橋の中ほど、神田神社と日枝神社の氏子区域の境には、神田神社の氏子町会の室町一丁目と本町一丁目の人たちが半纏姿で高張提灯を持って陣取り、連合渡御をする日枝神社の氏子町会の神輿を神田神社の氏子区域内に入れないようにする様子がみられた⁽⁷²⁾。これは、山王祭を盛り上げようと、一〇年前より始められたという。また、下町連合渡御において、平成二四年に茅場町にある撰社日枝神社からの宮出しが始められた。背景には少子高齢化で町内の担ぎ手が減り、このままでは子どもの世代は祭りへの関心を失ってしまうといった危機感があつたようだ⁽⁷³⁾。しかし、詳細なデータに基づく実証的な研究はなされていない。

(二) 戦後の三社祭を対象とした研究

戦後の浅草神社の三社祭についての継続的な研究はほとんどなされていない。宮御輿の渡御が復興される前の状況を松平齋光が記述した研究⁽⁷⁴⁾、川上周三の研究⁽⁷⁵⁾、越智恵の研究⁽⁷⁶⁾、牧野圭子の研究⁽⁷⁷⁾などにとどまる。

これらの研究は、神田祭のように、先行研究の研究成果をまとめ、その上に新しい研究がなされていないため、研究間の相互関係が不明である。そのため、本節の冒頭に述べたように、平成二四（二〇一二）年の三社祭において、祭りの三日間で一八四万人の出入を記録（「うねり 頂点 浅草・三社祭」『朝日新聞』、平成二四年五月二二日付）するような状況がなぜ生まれているのかといったと同時

的な理解が現状の研究では困難である。また、平成二四年の三月一日(日)には五〇年振りに「船渡御」が復活している。なぜ、船渡御が復活したのかについての背景も検討されていない。今後の本格的な調査研究が必要である。

一方で、同じ浅草で実施されている「浅草サンバカーニバル」は現在でも盛んに行われている。三社祭と浅草サンバカーニバルの比較によって、祭りとイベント、地域社会と宗教の関係をみていく方向も残されている。

(三) 戦後の佃祭を対象とした研究

社会学の有末賢は、昭和五人(一九八三)年の「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭礼組織の事例研究―(78)」において、東京都中央区佃・月島の住吉神社大祭(佃祭)を対象として、祭祀組織の重層性に注目しながら都市祭礼の過程と構造を分析している。分析に当って、住吉神社の氏子地区の地域特性を佃島(佃一丁目)と月島に分け、佃島の祭りを「内部構造」、月島の祭りを「外部構造」として位置付けている。内部構造では祭祀組織の住吉講に、外部構造では町内会を基礎とする祭祀組織に注目すると、祭礼が内部と外部という関係を持った重層的構造になっていることを明らかにしている。つまり、地域住民組織の一つである祭祀組織は、祭礼という場を通じて内部と外部という構造の一断面を表し、一方では区別されながらも一体感を味わう動態的なものであり、内部の祭祀組織は戦後の大都市の社会変動の過程の中で対応が迫られている点を指摘している。

のちにこの論文は、平成二一(一九九九)年刊行の『現代大都市の重層的構造(79)』に所収された。そして、同書には、「ウォータ―フロント再開発と佃祭りの変貌」といった昭和五八年の分析以後に再開発に曝された佃祭の経年的変化を考察した論考も所収されている。

有末は、この「ウォータ―フロント再開発と佃祭りの変貌」において、佃・月島の社会変動との関わりから、佃祭りの六つの転換点を指摘している。

明治三四(一九〇二)年頃、月島御旅所ができたことを契機として月島地区に氏子圏が拡大した。

昭和二三(一九四八)年、佃島の祭祀組織として住吉講が誕生した。

昭和三九年、防潮堤の完成に伴い、神輿が隅田川に入れなくなり、海中渡御と船渡御の中断した。このことによって、祭りの儀礼的意味が変化した。

昭和四六年、佃一丁目の人口減少などによる住吉講の規約が一部修正され、佃一丁目出身者以外でも若衆に入れるように変化した。これによって地縁性が変化していく契機となった。

昭和五七年、勝どき四丁目にあった月島御旅所の土地を売却した。

昭和五九年、佃・住吉神社を外側は木造、内部は鉄筋コンクリート造りで再建した。

昭和六二年、売却した土地にリクルート社のビルが建ち、その裏に町内神輿を入れる神輿庫を新造した。

平成元年、大川端リバーシティ21への入居が始まり、佃公園のオープンした。

平成二年、船渡御（船に神輿を乗せて隅田川を渡御）を二八年振りに復活した。

平成七年までに、リバーシティ21の住民の住吉講への門戸が開かれ、同時に女性が講員に入れるように変化した。

以上のように、有末の研究は、同一の都市祭りを継続して調査し、社会変動との関わりの中で変化の画期を明らかにした点で学ぶべき点が多い。ただし、平成二年になぜ船渡御が復活したのかについては明らかにされていない。

六、戦後の銀座・新宿・渋谷の都市祭りを対象とした研究

(一) 戦後の銀座の都市祭り

民俗学の松崎憲三は、昭和四三（一九六八）年に地盤沈下傾向の強い銀座の再生を目的として始められた「大銀座まつり」に注目し、『現代社会と民俗』の「三「地域おこし」としての「大銀座まつり」」において分析を行っている。大銀座まつりは、一〇月の第二日曜日を中心に一週間近く行われ、音と光のパレードがメイン行事である。音と光のパレードは、大企業が経費をつぎ込んだ花自動車に混ざって、ブラスバンド、ミス銀座、郷土芸能などがパレードするものである。このほか、昭和五〇年から大銀座まつりの一環として、

銀座八丁神社めぐりが開始された。

松崎は、銀座に関わる人々を第一類型…夜間人口（銀座を居住地とする四五〇〇人余）、第二類型…地縁的昼間人口（他地域にすみつつも商店経営者という地縁性の中で生活し、居住地と職場との両面で捉えている人）、第三類型…銀座を職場とする昼間人口、第四類型…盛り場として利用する人に分類し、第一・二類型の人々の間には近隣集団としての町内会や任意団体の成立がみられるとしている。しかし、これらの近隣集団は伝統的なものと異なり、地縁性と任意性が共存した新しいスタイルの性格と機能をそなえている。こうした団体を支えるのが旦那衆であり、かれらの創作物が銀座まつりであると指摘している。昭和六二年一月一七日の音と光のパレードには、第三・四類型の人々を中心とする見物客が例年並みの七〇万人であったが、このパレードは割と整然として進行し、参加者と見物客との交流は全く断たれているかに見えるとしている。松崎は、個人またはグループが主体となり、銀座八丁という同一空間の中で、しかも同一時間帯に並行的に行われる様々な催しを選択して見ル（あるいはスル）といった行為を通して「一時的な解放感と連帯感を得、再生する、これが現代都市市民にとっての祝祭であろう」と位置付けている。一方で、銀座を根城にする第一・二類型の人々にとっては、相互に共通性の高い一元的価値観を見出しにくく、祭りの意味付けやその実施方法をめぐって苦闘している状況がうかがえるとしている。

さらに、松崎は、銀座まつりの一環として行われる銀座八丁神社めぐりについて、二、三年後に七福神めぐりが設定されたことを踏まえ、「銀座まつりも神無まつりとして始められたものだが、結局知らず知らずのうちに神仏が紛れ込む結果となってしまうようである。現代人の非合理的なものに対する潜在的志向の強さを物語る現象といえよう」と指摘し、「不時に際して、もしくは不安にさいなまれた時や精神的空洞を埋めようとする時、さり気なく手をさしのべてくれる存在を必要としているのだし、いわば保険料として常日頃からそういう存在を身近に侍らせているのである」と解釈している。そして、「こうした現代人の心意を汲み取って、銀座八丁神社めぐりを銀座まつりのイベントの一つに組み入れた企画者にこそ敬意を払わなければならない」としている。しかし、銀座八丁神社めぐりや音と光のパレードを中心とする銀座まつりの解説は、それなりに銀座の再生に貢献したと思われるが、第一・二類型の人々にとってはアイデンティティの形成には至らず、不十分なものになっていると指摘している（80）。

宗教社会学の石井研士は、『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』の中で、銀座八丁神社めぐりについて詳細な調査を行い、銀座八丁神社めぐりはマツリなのかイベントなのかという問いを立てて考察を行っている。石井は、銀座八丁神社めぐりのように近年意図的に設けられた都市祭がイベントであるのかマツリであるのかイベントを行う側でも混同していて容易に二分できない。双方の性格をあわせ持ち、条件の変化によって相互に移行し変化するため、「マツリのイベント化」と「イベントのマツリ化」は絶えずひとつの現象の中で共存している。そして、イベントも容易に都市の装置に組み込まれてしまうようなものではなく、カオス化する力を秘めながらその機会を待っていて、イベントは、マツリの母体となる共同体を生み出しさえするかもしれないと指摘する。なぜそう考えるかといえば、「銀座の小祠が、祀られる母体を換え、災害や都市化の波に洗われながら、それでも現在まで存続してきた経緯にはこうしたことを物語っているように思える。日本の都市はそうした宗教を包摂しながら存在しているのである」としている(81)。

(二) 戦後の新宿の都市祭り

民俗学の八木橋伸浩は、平成二七(二〇一五)年刊行の『はじめての民俗学』に所収された「マチのつきあい」において、新宿区高田馬場地区と西早稲田地区を対比し、前者は都会的と評され、ムラ的な人間関係が密でない印象が強いが、後者はまるで一昔前の田舎(ムラ)のようで、都会の中にムラのような人間関係が確認できるとしている。こうした地域社会の特徴は、高田馬場地区と西早稲田地区の氏神である天祖神社の祭礼にも反映されていることを明らかにしている。祭礼運営の核となる役員が町会や商店会といった地縁集団から選抜される構造、地元以外の人が多数を占める状況は両地区とも同様だが、神輿の担ぎ手たちの状況に違いがみられ、それが端的に示されるのが神纏だと指摘している。すなわち、高田馬場地区では、町会神輿・宮神輿の別を問わず、参加する各神輿同好会の神纏着用で神輿渡御が行われるが、西早稲田地区では、いずれの神輿の場合も神輿を担ぐ際には町会神纏の着用が義務づけられ、町会の神纏で担ぎ手は統一されるといふ違いがある。このことは、西早稲田地区に見られる仲間意識、神輿場のあり方は、個人の意見を発端とするものであっても、都会の中にもムラのような緊密な人間関係が存在することを雄弁に物語っていて、高田馬場地区にみられる神輿同好会の優位性と個性の高さは、都市的な人間関係をそのまま具現化しているのであるとしている。そして、西早稲田地区の神輿

担ぎ手グループの構成から、いわば地縁に基づくネットワークの基盤のうえに、神輿という趣味によってもたらされた縁が加わり、地元キーパーソンとなる人物を介して地縁を越えた人間関係が重層的に結ばれて、それぞれの行事が機能する構造になっているとして
いる(82)。

なお、多数の参拝客で賑わう新宿・花園神社の祭礼については調査研究が手付かずのまま残されている。

(三) 戦後の渋谷の祭り

宗教学の黒崎浩行は、『渋谷学叢書3 渋谷の神々』に所収された「第二章渋谷の住宅地と神社祭礼」において、都市の住宅地での祭礼がどのような面で新たな支え合い、社会包摂をもたらさうるかという問題意識のもと、渋谷の氷川神社の氏子である若羽町会と代官山町会の祭礼、渋谷の金王八幡宮の松濤町会の祭礼を調査し、考察を行っている。その結果、これらの祭礼には「ケアをする関係」が幾重にも組み込まれていることが垣間みえることを明らかにしている。新たな担ぎ手や子どもたちを迎え入れる役員、神輿や山車が来るのを接待する地域住民や施設、さらには初心者に神輿の担ぎ方を手ほどきする神輿会のメンバーたち、とりわけ、子どもたちの祭礼参加は、その記憶が次の世代へのケアにつながっていくという点で重要であることを指摘している(83)。

また、民俗学の高久舞は、『渋谷の神々』に所収された「第八章渋谷の《祝祭》—スクランブル交差点にどう人々—」において、渋谷のスクランブル交差点で行う年越しのカウントダウンを対象として分析を行っている。そして、渋谷の宗教文化を大きな枠組みで捉えたとき、渋谷の氏神である金王八幡宮や氷川神社の祭礼と、渋谷のスクランブル交差点で行う年越しのカウントダウンやサッカー(ワールドカップ)の勝利時のスクランブル交差点での行為を比較し、「祭儀」と「祝祭」の二項対立で考えた場合、「祭儀」に当る部分が前者で、「祝祭」に当るのが後者であると指摘している(84)。

筆者も、『渋谷の神々』に所収された拙稿「第三章祭りからみえてくる「渋谷」—SHIBUYA109前に集う神輿 金王八幡宮の祭り—」(本研究…付論第二節所収)において、金王八幡宮の祭礼の概要、金王八幡宮の氏子である渋谷中央街の祭礼、SHIBUYA109前に神輿が集合するようになった経緯を明らかにした上で、SHIBUYA109前に神輿が集合する意味について論じている(85)。また、『共存学3 復興・

地域の創生 リスク世界のゆくえ』に所収された拙稿「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」(本研究…付論第一節所収)において、SHIBUYA109の地元・道玄坂町会の金王八幡宮の祭礼に注目し、町会の居住者の実態と町内に通う人の存在、祭礼において地域社会の外側から通う人たちに注目し、人口減少社会における祭礼を通じた地域間交流の役割について考察を行っている(86)。

七、戦後の東京近郊の都市祭りを対象とした研究

(一) 府中・大國魂神社の祭り

社会学の松平誠は、『都市祝祭の社会学』の第二章「伝統的都市祝祭(2)―府中における祝祭共同の内包と外延―」において、伝統的な都市祝祭の変容過程に注目して考察を行っている。松平は、「第一章 伝統的都市祝祭(1)―秩父本町の生活共同―」において秩父本町の秩父祭の分析から、伝統的祝祭における共同認知の方法と、共属の原理に焦点を合わせ、その一般的な類型を提示している。そして、この類型が日本の重化学工業化とともに伸展していく産業社会の中で性格を変容させていく過程に注目し、特に、その共同の内包と外延に焦点を当てて府中・大國魂神社の祭りの分析を行っている。

松平は、明治以来の府中四カ町では、相互認知の社会的境界が幾度も動揺しているが、その最も大きなものは一九二〇年代にはじまり、一九三〇年代に本格化した共同の内包・外延の大変化であったと指摘する。この時期には、一つの共同主体が小単位に細胞分裂し、結合の多重化をすすめる動きが目立ったとしている。すなわち、数個の町内会への分化と、町内会を単位とし、それを統合する連合町内会を構成することによって二重の共同が作りだされた。ただし、一九三〇年代の変化は、在来の共同を要として、旧四カ町が主体的に対応できる変化の過程であった。しかし、昭和二九(一九五四)年に府中市が誕生し、一九六〇年代に町名・地番改正が実施されるころになると、環境条件が大きく変化し、府中の旧四カ町は府中市域の世帯・人口の一〇分の一を持つに過ぎなくなった。つまり、府中の伝統にもその歴史にもまったく無縁な人々が府中の大部分を占めるように変化した。この時期の府中には、孤立した伝統的な共同が外部からの浸透と反発のなかで変化し、その外延と内包とが変質していく過程がみられると指摘する。具体的には、例大祭の補助町

内の新設（新町内会を取り込みながらも補助的な役割にとどまる）、町内会内部での選別認知（新来住者群を原則的に包み込みながら最小限のところを選別）、町内会組織と例大祭組織・町内会財政と祭礼財政との間にみられるような二重性の論理がみられるとしている。そして、伝統的共同の基盤が変質していくのと並行して、府中の旧四カ町共同は急速に観念化し、大國魂神社の例大祭において年に一度、その姿をあらわす共同組織として、結合の再確認を続けていくことになるとしている。松平は、「生活上での実体的な共同がうしなわれていくなかで、逆に祭礼はいっそう華麗になり、観念的な一体感が強化される。祝祭の賑わいがいっそう多彩なものにすることに よって、観念の共同を存続させようとするのである」（二二四頁）と位置付けている。

以上の分析のまとめとして、松平は、都市共同の内包と外延とは、都市化の伸展する中でつねに変化し、社会的な変化をくりかえしてきたが、現代では、伝統的共同はそうした変化の中で観念化しつつ生きつづけていると指摘する。そして現代においても、伝統的な神社祭礼は、そうした共同認知の表出の場として、都市祝祭の重要な類型を構成しているものであるとしている（87）。

松平の研究以後、現代の大國魂神社の祭礼を分析したものに中里亮平の研究がある。平成二二（二〇一〇）年発行の「変更からみる祭礼の現代的状況―東京都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から―」（88）では、祭礼の動態的理解を目的として、祭礼の現代的状況の変更に ついて論じている。中里は、祭礼の参加者同士、そして祭礼の「外部」が「自らの望む祭礼」をぶつけ合い、競う場として祭礼を理解し、動態的把握を目指すものであると指摘している。

（二）高円寺阿波おどり

松平誠は、『都市祝祭の社会学』の「第三章 非伝統的都市祝祭―高円寺阿波おどり―」において、昭和三二（一九五七）年に杉並区の駅前商店街行事として始まった高円寺阿波おどりを対象として、昭和六〇年の調査から、現代都市生活文化をこの新たな祝祭を通して類型化することを目的に考察を行っている。松平は、秩父祭と大國魂神社の祭礼を「伝統的都市祝祭」、この高円寺阿波おどりを「非伝統的都市祝祭」と位置付けている。

そもそも高円寺の阿波おどりは、隣駅の阿佐ヶ谷の商店街が行う「阿佐ヶ谷七夕まつり」への対抗イベントとして高円寺の駅前商店

街、俗称「バル商店街」の青年部によって編み出された。それも、地元の氏神・氷川神社祭礼に当って、商店街の振興策と地域住民の健全なレクリエーションを考えて発案された。そのため、「今日でも夜の阿波おどりと昼の御興担ぎとは、祭の一对の行事になっている」（二四四頁）としている。そして、松平は「この催しが、商店街のイベント以外に、地元の地域住民・企業をまきこんで成立したこと、それが伝統的な祭礼と結びついてはじまっていることは、たいへん興味深い事実であるといえよう」（二四四頁）と指摘している。

阿波踊りのグループである「連」には、町内会・商店街・企業から直接援助を受けずに運営する独立の連（自立連）が一七あり、中核をなしている。このほか、自治体を母体とする連、金融機関の連、公務員の地域活動としての連、印刷会社の職場連、身体障害者の連、自由参加者に開放する連（江戸浮連・びっくり連）、スナック常連の連があることを明らかにしている。この中で、自立連は、主たる収入を外部出演と幹部の寄付に頼っていて、商店街との友好的な関係を保ちながらも、商店街ひいては地域の拘束は基本的には存在しないと指摘している。

松平は、高円寺阿波おどりの祭りに集まった人々の結合形式は、ひとたび祝祭空間を離れるやいなや、この人々の間には、持続的で日常的な結合がほとんど存在しないという際立った特徴あると指摘している。それぞれの連だけに着目すれば、外部出演や年間練習、連単位の年間行事など、かなりの日常的な結びつきをもっているものもないわけではないが、「高円寺阿波おどりを構成する人びとの全体集合は、祝祭の終了とともに雲散霧消してしまい、それをもとにした強固な生活共同が生まれたり、生活組織が形づくられたりすることはない」（三〇九頁）と指摘している。そして、「ここには伝統的な閉鎖システムをもつ祝祭類型とは異なる開放的なネットワークからなる現代祝祭の類型の一典型がみられる」（三一〇頁）と位置付けている（89）。

（三）池上本門寺・雑司ヶ谷の御会式

松平誠は、池上本門寺と雑司ヶ谷の鬼子母神における日蓮宗御会式の万燈講に注目し、実態調査を行い、平成二（一九九〇）年発行の「日蓮宗御会式と万燈講の社会文化的研究（前）」（90）、平成三年発行の「日蓮宗御会式と万燈講の社会文化的研究（後）」（91）に調査結果をまとめ考察を行っている。池上本門寺万燈練り供養は、池上本門寺と日蓮宗信徒にとって支えられている土台の上に、それ

外の人々を多数抱き込んだ一般的な講社がのった形の二重構造になっていて、それは現代都市祝祭の一形式とみえると指摘する。それは、万灯同好講社をはじめとした講社一般の実態は、高円寺阿波おどりと類似し、「合衆型」都市祝祭の性質を持っているからであると位置付ける。つまり、池上本門寺万灯練り供養は、日蓮宗独特の宗教性にしっかりと裏打ちされながら、同時にそれを現代都市文化のなかにうまくとりこんだまったく現代都市的な生活文化様式の一つの典型であると結論付けている⁽⁹²⁾。

(四) 品川漁師町の祭礼

松平誠は、かつて南品川全体の鎮守である荏原神社と漁師町の守り神・寄木神社の二つの神社への信仰を持つ品川の漁師町と祭礼⁽⁹³⁾「かっぱ祭り」の関係について、昭和六一(一九八六)年発行の「都市の社会集団(6)——元南品川漁師町の生成構成(その1)——⁽⁹³⁾」と「品川漁師町の形成と展開——東京漁民の生活史⁽⁹⁴⁾」、昭和六二年発行の「都市の社会集団(7)——元南品川漁師町の生活構成(その2)——⁽⁹⁵⁾」において口述の生活史をもとに分析を行っている。かつては漁師町であったが、東京内湾から漁業が消え去り、一人の漁師もいなくなったが、品川荏原神社の南の天王祭では、洲崎(元漁師町の海上渡御)がメイン・イベントである。それが元漁師たちの何物にも代えがたいプライドの源になっていることを明らかにしている。漁師たちが海から上がった時からとつくの昔に消えていはずの伝統の流れが今に生きているその要因は、祭礼に際して作り出される洲崎の祭礼集団の構成や町内の生活組織の中に映しだされているに違いないとする。

かつての漁師町は、昭和三七年の漁業権放棄までは漁師を核とするほとんど閉じられた地域生活集団であった。漁師が活躍した時代の町内は、南品川漁師町の伝統を受けついできた漁師、漁業に直接関連する商売、漁業者の雇用人(町に住み日常的に漁業者と生活とともにしてきた「乗り子」と一時の臨時の助っ人である「出稼ぎ」)、漁師町に住みながら漁業とは無関係な商業についていた「陸人」の四つの階層があり、「出稼ぎ」と「陸人」にはほとんど発言権を与えられなかった。昭和五九年九月の段階では、町内にアパート・マンション、事業所が建ち並び、元漁師は少数派になった。町会の主要役員の多くは元漁業者であるが、陸人の中からも副会長や主要役員の幾人かを出せるように変化した。この変化は、漁業権放棄後に町内の共同生活のエネルギーが枯渇し、栄光ある歴史の町が崩壊の

危機に曝されたとき、元漁師主導型の町会改革がすみ、新旧混合の役員構成が元漁師側多数のもとでできあがったことを明らかにしている。祭礼集団の担い手においては、祭礼委員は元漁業者の二代目・三代目で、海中渡御へのマンションの勤め人の参加はあまりなく、子ども神輿を担ぐのにも漁師の子が威勢がいいとしている。ただし、寄木神社の世話人には、責任役員は元漁業者だが、漁業関係者以外の役員もみられ、ここにも町の変化が入り込んできていると指摘している。そして、松平は、この町は古い漁師の守り神であるご神面をシンボルにして先祖の漁師たちが作り出したかつば祭りの伝統のもとで常に新たな挑戦を続けていくに違いないと結論付けている(99)。

なお、同じ時期の昭和六二年には、「都市解体期の祝祭文化―日本人の回帰性を問題として―」(97)、翌・昭和六三年には「都市祝祭の構成原理序説(98)」と、東京・高円寺の阿波おどりを対象とした「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」(99)を公にしている。

松平誠の研究は、伝統的都市における町内の生活変容と神社祭礼の関係から、昭和六二年頃を境に、都市祝祭の構成原理へと問題関心が移り、新しい祭りである高円寺の阿波おどりを研究対象としている。そして、平成二(一九九〇)年に秩父祭、大國魂神社の暗闇祭、高円寺の阿波おどりなどを対象とした論文集としてまとめ、『都市祝祭の社会学(100)』を刊行した。

松平は、『都市祝祭の社会学』の冒頭で、「祝祭」を「日常的反転、それからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化・対象化し、それによって感性の世界を復活させ、社会的な共感を生み出す共同行為(101)」と位置付けている。そして、日本都市の主要な祝祭類型として、「近世の伝統のうえに開花しながら、産業化のなかでその基本的性格を体現してきた都市祝祭」である「伝統型(伝統的都市祝祭)」と、「伝統とは無縁で、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」「連」「講」などを形成してつくりだす祝祭」である「合衆型」との二つの類型に分類している(102)。

また、昭和六二年頃、松平は神田祭の調査に入っている。その結果を、既に述べたように、神田祭に参加する須田町中部町会の女神輿に注目した平成三年発行の「現代神田祭仄聞(103)」、平成四年発行の「神田と祭りに生きる人々―神田祭女御輿町内の古老談―」(104)と「神田の地上げと生活集団(105)」、神田祭全体を対象した平成五年発行の「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」(1

「」にまとめている。そして、品川の漁師町の祭り、高円寺阿波おどり、日蓮宗御会式、神田祭の論考は、平成六年刊行の『現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―⁽¹⁰⁷⁾』に結実した。

(四) 小山両社祭

社会学の玉野和志は、平成一〇(一九九八)年発行の「地域の世代的再生産と都市祭りの復興―「小山両社祭」調査報告―⁽¹⁰⁸⁾」において、東京都品川区武蔵小山駅から西小山駅にかけての地域で、一九八〇年代に生まれた新しい祭りである「小山両社祭」を対象として、昭和六三(一九八六)年〜平成元年に掛けて実施した調査を基に分析を行っている。両社祭という独自の地域文化が形成されてくる背景には、都市化のタイミングにもとづく人口統計学的な条件と東京という大都市における産業形成上の位置による社会経済的な条件が、具体的なローカル・コミュニティのレベルで微妙に絡み合いながら作用しているということである。そこには地域の世代的再生産が、文化的「伝統」の創造と継承を伴いながら、具体的に展開していくダイナミズムが見て取れるとして、ローカル・コミュニティのレベルと都市のレベルとのダイナミズムに留意する必要性を指摘している。玉野は、両社祭が自生的に成立し定着してきた背景には、新造された神輿が連合の渡御だけでなく、各町内での渡御や祭りの盛り上がりにつながっていった点が重要であったと指摘している⁽¹⁰⁹⁾。また、翌・平成一一年には「都市祭りの復興とその担い手層―「小山両社祭」を事例として―⁽¹¹⁰⁾」を公にしている。そして、これらの成果は、平成一七年刊行の『東京のローカル・コミュニティ ある町の物語一九〇〇・八〇⁽¹¹¹⁾』に所収された。

八、神戸まつり・浜松まつりを対象とした研究

(一) 神戸まつり

昭和五二(一九七七)年には、神戸まつりを対象とした宗教学の藺田稔の「神戸まつり調査偶感⁽¹¹²⁾」と、沖縄県名護市の奄美まつりを扱った藺田稔・宇野正人の「奄美諸島調査⁽¹¹³⁾」といった調査報告が出された。そして、昭和五三年に宇野正人は「都市の祭

への視角―名瀬市〔奄美まつり〕をとおして―⁽¹¹⁴⁾」を公にしている。

昭和五五年には、神戸まつりを対象として、宇野正人が「都市祭における伝統への指向―神戸まつり―⁽¹¹⁵⁾」にまとめている。宇野は、神戸まつりの構成の中に、伝統的行事がモザイク細工のように組み合わせられているのみならず、中央行事と区行事の対立があり、調査時点から九年前は中央行事中心の祭構成であったが、現在はそれとは異なり、中央行事と区行事とが相互補完的であり、またせめぎあっている祭構成をとっているとみることができる。それは、祭の構成が緊張関係をはらみ、それゆえに祭がダイナミックに組みあわさっているということの意味していると考えられると指摘している。この宇野の論文の註には、柳川啓一の「親和と対抗の祭り」が挙げられていて、柳川の分析を踏まえた考察であることが窺える。

米山俊直は、昭和六一年刊行の『都市と祭りの人類学』に所収された「現代社会と祭り―神戸まつり一九八四⁽¹¹⁶⁾」において、昭和五九年の神戸まつりの調査から考察を行っている。その中で、米山は、神戸まつりは本質的に世俗化した現代社会のイベントであって、神仏などの宗教に基礎をおいた伝統的な祭礼と異なっている。いわゆる聖・俗の二分論で見れば、神戸まつりは聖の部分が少なく、ほとんどが俗の領域が占める行事ということになろうと指摘している。また、米山は、『都市と祭りの人類学』に所収された「都市と祭り⁽¹¹⁷⁾」において、祇園祭や天神祭、行政主導型の神戸まつりなどを踏まえながら、都市の祭りの特色として、①「見られる祭り」を前提としていること、②見られる祭り（祭礼）であるがゆえにたえずさまざまな工夫がこらされ、趣向がつけ加えられていること（たえず風流に工夫があること）、③風流の工夫の中に大きい創造性が認められることの三点を挙げている。そして、都市の祭りについて考える場合の項目として、祭礼に五つの要素、四つの必要、三つの社会関係、二つの時間区分、一つの目標があることを提示している。すなわち、①五つの要素…決まった時と場所・シンボル・変貌した空間・祭壇と儀式・参加者、②四つの必要…老若男女全階層の参加・資金・演出・伝統、③三つの社会関係…地縁・血縁・社縁、④二つの時間区分…日常（ケ）と非日常（ハレ）、⑤一つの目標…ふだんのつきあいを超えた人々の心の連帯の回復―コムニクスの出現を挙げている。

なお、昭和五五年には、高取正男・松平誠・中村孚美・森田三郎・米山俊直による「座談会 日本の都市の祭り⁽¹¹⁸⁾」が行われ、その中でも神戸まつりについて触れている。また、昭和五八年には、阿南透・宇野正人・酒井直広・永井良和・林智良・森田三郎・吉

田由佳子・米山俊直によって「座談会 大都市の祝祭行事―「神戸まつり」の調査から―⁽¹¹⁹⁾」が行われた。

このほか、兵庫県西宮市の事例であるが、西宮神社の十日戎開門神事福男選びを対象として、通時的・共時的な視点から考察を行っている人類学の荒川裕紀の研究⁽¹²⁰⁾がある。

(II) 浜松まつり

宇野正人は、昭和五六（一九八一）年の「年中行事から都市祭へ―浜松まつり―⁽¹²¹⁾」において、昭和五五年に行われた浜松まつりの分析から旧行事（浜松まつり以前から存在し伝統的な行事の要素をもつ行事群）と新行事（浜松まつりになってから新しく登場してきた行事群）を対比した上で、祭全体をみるならば、行事の運営や金銭的なものを含めて、旧行事は新行事に比べ、その吸引力には目を見張らせるものがあると指摘している。

また、宇野とともに浜松まつりの調査に参加した民俗学の茂木栄は、平成九（一九九七）年の「都市とイベント⁽¹²²⁾」の中で行政政策と都市の祭り・イベントとの関連を指摘している。その上で、①国土総合開発法の制定された翌年の昭和二六年前後、②全国総合開発計画の昭和三八年前後、③新全国総合開発計画の昭和四五年前後、④第三次全国総合開発計画の昭和五三年前後、の四つの画期を提示している。そして、浜松まつりにおいて、昭和二五年、昭和三八年、昭和四五年、昭和五四年の四つの展開期を明らかにしている。

その後、浜松まつりに関しては、静岡大学の荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子による平成一八年刊行の『浜松まつり―学際的分析と比較の視点から―⁽¹²³⁾』がある。ただし、宇野正人と茂木栄による浜松まつりに関する先行研究との比較検討がなされていない。

戦後の祭りの変化の時期

茂木栄の「都市とイベント」に関連して、民俗学の阿南透は平成九（一九九七）年の「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造⁽¹²⁴⁾」の冒頭で、前述の茂木論文を参照しながら、戦後五〇年における祭りの変化の時期を大きく三つの時期に分けて捉えている。

具体的には、①昭和二〇（一九四五）年～昭和三〇年…戦争で中断した祭りが復興する時期（神田祭・山王祭は昭和二七年に復活）、後半になると観光客誘致の新しい祭りが創生（よさこい祭りなど）、②昭和四五年の大阪での万博開催から昭和四八年の第一次石油ショックの時期…この後、昭和五二年の第三次全国総合開発計画、③昭和六二年～平成元年辺り…昭和六二年に第四次全国総合開発計画、昭和六三年の「ふるさと創生」施策。その後、平成四年の「おまつり法」（地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律）の成立を挙げている。

さらに、民俗学の福原敏男は、平成一年の「山車を失った都市祭礼―津八幡宮祭礼の戦後―⁽¹²⁵⁾」の中で、対象とする津八幡宮祭礼が復活した昭和二五年について前述の阿南論文を引きながら、東京の神田祭や山王祭などと同様に戦争で中断した祭りが徐々に復興する時期と呼応するものとして、全国の事例の中に津八幡宮祭礼を位置付けている。また、津八幡宮の宮司（神職の）側の葛藤も示し、行政主導の「津まつり」の中に津八幡宮祭礼が取り込まれていく過程を明らかにしている。

九、戦後の九州の都市祭りを対象とした研究

（一）長崎くんち

米山俊直の研究助手を務め祇園祭の調査に参加した、文化人類学の森田三郎は、長崎くんちを取り上げ、祭りとその担い手に焦点を当て、祭りを支える人々の生活を考察することを最終目的として昭和五五（一九八〇）年発行の「長崎くんち考―都市祭礼の社会的機能について―⁽¹²⁶⁾」にまとめている。また、昭和六二年発行の「祭りとイベント―ウラまつりをめぐって―⁽¹²⁷⁾」では、徹夜の暇つぶしが名前が付くほどのイベントに成長した「ウラくんち」に注目し、祭りから疎外された感じをいなく周辺の祭り参加者はそれを昇華させるために自分たちの祭りを求める、それがウラ祭りであると分析している。森田は、イベントはその参加者がそれを通して自己のアイデンティティを確認することができてはじめて祭りとなる。逆に、誰のアイデンティティの確認にも関わらないものは祭りと呼ぶに値しないとしている。森田は、アイデンティティの確認の有無が祭りとイベントの違いとして考えていると指摘している。こ

の二つの論文は後に、『祭りの文化人類学⁽¹²⁸⁾』に所収された。

(二) 博多祇園山笠

社会人類学・都市人類学の中村孚美は、「博多祇園山笠―そのダイナミックスとアーバニズム―」において、博多の総鎮守・櫛田神社の祭礼である博多祇園山笠を昭和四九（一九七四）年と五〇年の二年間にわたって参与観察し、祭りへの参画の仕方を詳細に記録している。中村は、博多祇園山笠の特徴として、豪気と細心、フレキシビリティ、都市的洗練を挙げ、ある人がいった「山笠は博多のすべてだ」という言葉のように、博多祇園山笠には博多の人たちの生活の美意識、行動の美学といったものが行事の隅々に至るまで反映していることは確かであると指摘している。そして、祭りは博多的なアーバニズム（都市的生活様式）、あるいはアーバニティの集約的表現であるように思われると結論付けている⁽¹²⁹⁾。

竹沢尚一郎は、「村の祭、都市の祭」において、九州地方の村の祭（銀鏡神社大祭・神楽）と都市の祭（博多祇園山笠）を比較し、都市の祭が村の核心であったコスモロジーや生業との関係を滑落させる一方で、都市固有の資源としての人間とその能力を最大限に活用するために、村の祭では欠けていた競争的性格の強調と組織の洗練に向かっていったことは、ある意味当然といえようと指摘する。しかし、村の祭と都市の祭のあいだには共通性も存在し、両者とも人間が生まれてから死ぬまでの一生を、地域が単位となって行う祭の中に丸ごと取り込もうとしていることにあると指摘している⁽¹³⁰⁾。

また、竹沢は「博多祇園山笠」において、博多という地域社会に対して祭りがいかなる機能を果たしてきたかを、地域社会の観点から捉えることを目的に考察を行っている。その結果、博多の祭りとは、博多という都市がつくりあげた、都市の自主管理と都市住民の能力の開発・向上のための独自のソフトにはかならなかったと指摘している⁽¹³¹⁾。

福岡市博物館の福岡裕爾は、平成一二（二〇〇〇）年発行の「現代の祭りにおける「伝承」のありかた―北海道芦別市の健夏山笠を題材に―⁽¹³²⁾」、平成一六年発行の「ウツス」ということ―北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程―⁽¹³³⁾」において、博多とは無縁の北海道芦別市の人たちが一〇数年の歳月を掛けて博多山笠を移し（写し）ていく過程を明らかにしている。

松平誠は、平成二〇年刊行の『祭りのゆくえー都市祝祭新論ー⁽¹³⁴⁾』に所収された「第三章模倣を拒む博多山笠」において、先に挙げた福岡裕爾の論文を参照しながら、日本を代表する都市マツリとして、「博多山笠」には、特殊な閉鎖性と、それと裏腹な開放性が並存することがわかったと指摘している。

(三) 小倉祇園太鼓

都市人類学・民俗学の中野紀和は、『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体⁽¹³⁵⁾』において、福岡県小倉市八坂神社の夏季大祭に出される小倉祇園太鼓について個人のライフヒストリーに注目しながら考察を行っている。中野は分析にあたって、祇園太鼓に表出されるメッセージは一つではないため、特定の集団をメッセージの送り手として固定するのではなく、祇園太鼓に中心的にかかわる集団のそれぞれの立場から状況に応じた臨機応変な対応を明らかにする。その際、スル側とミル側のあり方が現代社会における祭礼のどのようなあり方を示唆しているのかを考えたいとしている。

中野は、松平誠の高円寺阿波おどりにおけるミル側とスル側の分析を踏まえ、小倉祇園太鼓を五層構造として捉えている。すなわち、ミル側を「見物人Ⅰ」（ミル側からスル側へ移行する可能性を秘めた層）、「見物人Ⅱ」（ミルことに徹する層）の二層構造、スル側を「参加することに意義」「楽しむ」「見せる」の三層構造である。そして、見物人Ⅰの存在は、宗教行事や伝統行事としての特色を持っていた祇園太鼓が祝祭性を強めていったときに顕著になると指摘する。そして、都市祭礼における風流の側面の肥大化は宗教性を希薄にしている点も否めず、むしろ宗教性の希薄化が、見物人Ⅰの層を生み出していると分析している。この見物人Ⅰがミル側からスル側へ移行したときに、彼らを受け入れる器が祇園太鼓の有志チームであることを明らかにしている。有志チームは個人的なつながりを基盤としながらも、完全に個人的ネットワークに依拠しているのではなく、集団の一員としての意識も強められることがわかるとする。祇園太鼓で演じられる太鼓のパフォーマンスは、創作という形をとることで抽象化されていくが、一方でそれを支える集団は、個人と所属が一致する具体的な場につながっているのである。つまり、有志チームは、日常的なつながりの延長線上にあったグループが、範囲を拡げることで自主的に参加する人々をとりこんでアシエーションとして機能していることを明らかにしている。

中野は、小倉祇園太鼓の現状を「場所の空間化」と「空間の場所化」が同時進行で起きていると位置付ける。つまり、前者が祭礼の脱コンテクスト化（祭礼のイベント化）であり、後者がコンテクストの創造（多様な者の参加を促し、新たな試みを許容し、新たなストーリーが生まれる）であるとすると、こうした動きを受けて、再度、町内が場所の持つ意味を見出そうとするのはコンテクストの再生といえるだろうと指摘する。そして、「都市的なるもの」とは場所への欲求が生み出す動きの中に表われ、場所としての都市は、自らを内側の中に位置付けようとする重層的な動きの中に浮上する。それは、没場所性を乗り越える不断の営みでもあると結論付けている。

（四）熊本市・藤崎八幡宮秋季例祭の神幸式（通称「ボシタ祭り」）・「火の国まつり」

社会学の芦田徹郎は、昭和五九（一九八四）年、当時在職していた熊本大学教養学部で開講していた社会調査実習のテーマとして、熊本市の藤崎八幡宮秋季例祭の神幸式（通称「ボシタ祭り」）を取り上げ、調査に入っていた。芦田がこの祭りに注目したのは、昭和五七年に熊本市に赴任した際に何気なく見物したところ、祭りの参加者数の多さと、参加者の憑かれたような熱狂に仰天したことによる。「いったいこの祭りはなんだ」という不審と「この祭りにはきっとなにかある！」という確信が同時に働いたという⁽¹³⁶⁾。

また、同じ熊本市の市民まつり「火の国まつり」の調査研究を行っている。芦田は、二つの祭りの分析結果を、昭和六三年発行の「祭りと社会変動―熊本市『ボシタ祭り』をめぐって―」⁽¹³⁷⁾、平成六（一九九四）年発行の「ある市民祭の生と死―熊本市・（旧）火の国まつりをめぐって―」⁽¹³⁸⁾にまとめている。この二つの論文は、平成一三年刊行の『祭りと宗教の現代社会学』⁽¹³⁹⁾の「第2章 祭りの盛衰と葛藤―熊本市・ボシタ祭りをめぐって―」と、「第3章 祭りの事実と祭りの精神のあいだ―熊本市・（旧）火の国まつりをめぐって―」に所収された。

芦田は、『祭りと宗教の現代社会学』の「第2章 祭りの盛衰と葛藤―熊本市・ボシタ祭りをめぐって―」において、祭りを通しての共同体の自己認識のメカニズムを探ることの意義は依然失われていないものの、共同体とその祭りにとつての外部環境との関わりを無視することはできないと指摘している。現在の祭りの盛況を踏まえれば、祭りとその内部環境（としての共同体）との関係にも目くばりしつつ、主としてその外部環境との関わりに着目し、ボシタ祭りの考察を行っている。芦田は、戦前戦後を通じてのボシタ祭りの消長

は、時代そのものが祝祭性を帯びているときにはこの祭りは衰退し、逆もまた真である。つまり、戦争という「お祭り」のときも、高度成長という「お祭り」のときも、ボシタ祭りは衰退せざるをえなかったことを明らかにしている。しかし、時代そのものの本質的な「非祝祭性」が祭り一般にとつては好都合であるとしても、それだけでは必ずしも個々の具体的な祭りの盛況を保証するものではないと指摘する。そして、ボシタ祭りの再活性化に当って力があつたのは、旧来の個人団体や地域団体の退場と入れ替わりに参入してきた高校同窓会系や祭り愛好会系の団体であつた。このことはマクロな時代性を背景としながらも、その時代にふさわしい新陳代謝があつたことを示していると指摘している。

「第3章祭りの事実と祭りの精神のあいだ―熊本市・(旧)火の国まつりをめぐつて―」において、現代社会における祭りの衰退は、二重の意味で「祭りの日常化」が進んだ結果であるとする。ここでいう二重とは、本来の祭りが「日常性」を十分に脱却できずにそれを引きずっているという意味と、特に都会には一種の祭りが日常的に用意されているという意味であるとする。そして、「火の国まつり」においては、祭りをする(つくる・売る)側にとつて魅力がなくなったことを指摘している。つまり、「祭りの日常化」によつて、祭りの日といえども、特別の消費と販売のときではなくなったことを明らかにしている。

なお、平成一〇年七月に九州大学において開催された「宗教と社会」学会第六回大会において、竹沢尚一郎・福岡裕爾・南博文・小松秀雄・芦田徹郎・重信幸彦・関一敏によるワークショップ「都市祭礼研究の課題と可能性⁽¹⁴⁰⁾」が開催された。

ほかに、宮崎県都城市の「おかげ祭り」を分析した、平成二六年刊行の竹元秀樹の『祭りと地方都市⁽¹⁴¹⁾』がある。竹元は、松平誠の都市祝祭類型を参照しながら、「おかげ祭り」は新しい祭りであるが、日本の伝統ある祭りを手本にして、厳格な秩序の中で本物の祭りを創造することを目指していることから「伝統型」の類型に入るが、運営母体が一般市民で構成され、祝祭の形態は「伝統型」でも「合衆型」の性格を持つものであると指摘している。

一〇、高知のよさこい祭り・札幌のYOSAKOIソーラン祭りを対象とした研究

平成に入った一九九〇年代の初めからよさこい祭りの研究が盛んに行われた。ここでは主な研究について概観しておきたい。

(一) 高知のよさこい祭り

地理学・民俗学の内田忠賢は、高知のよさこい祭りを対象とした平成四（一九九二）年発行の「都市と祭り―高知「よさこい祭り」へのアプローチ（一）―⁽¹⁴²⁾」において、高知のよさこい祭りを社会的・文化的な位置付けるために、①地縁↓社縁↓選択縁と進化し、既に踊り隊は匿名を帯びた存在であること、②演者と観客が明確に区分される「演劇」になっていること、③鳴子踊りは正調及びそれをアレンジした曲で演じられること、④競演場の配置は都市構造の問題であること、⑤リオのカーニバルや阿波踊りと同じく、よさこい祭りは踊りによるパレードを基本としていることの五つの視角を挙げている。そして、高知のよさこい祭りの研究によって、高知の地方都市ないし都市の本質に迫り得ることに間違いはないとしている。

平成六年発行の「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ（二）―⁽¹⁴³⁾」では、祭りの担い手となる社会集団と、祭りの舞台となる祝祭空間の二つの視点に注目して分析を行っている。一つ目の社会集団に関しては、平成四年の分析と共通し、踊り隊は一般募集を行い、流動性・匿名性が高い集団であるとしている。二つ目の祝祭空間に関しては、競演場の設定には、地元の政治的・経済的判断が少なからず影響しているとしている。そして、よさこい祭りにおいて祝祭空間として重要なのは、地区競演場だけでなく、追手筋本部競演場と中央公園競演場であると指摘している。

このほか、平成六年発行の「地域イベントの展開―高知「よさこい祭り」を事例として⁽¹⁴⁴⁾」、平成一一年発行の「都市の新しい祭り」と民俗学―高知「よさこい祭り」を手掛かりに―⁽¹⁴⁵⁾」などがある。

また、平成一八年発行の伊藤亞人「よさこい祭りと市民社会⁽¹⁴⁶⁾」などがある。

(二) 札幌のYOSAKOIソーラン祭り

YOSAKOI ソーラン祭りは、平成二（一九九〇）年に当時大学生であった長谷川岳が仕掛けた新しい祭りである。森雅人は平成一一年発行の「たった一人が仕掛けた祭り―札幌」YOSAKOI ソーラン祭り⁽¹⁴⁷⁾で、YOSAKOI ソーラン祭りの成り立ちから、参加者の七割が女性が占める三石なる公会、平岸天神チームなどYOSAKOI ソーランのネットワークについて触れた上で、みられること、観衆を楽しませることを貪欲に追求するからこそ、新たに創造されたパフォーマンスの中に、時代の変化に柔軟に対応する札幌の姿が映し出されるのであると指摘している。

（三）全国のよさこい祭りを対象とした研究

〔矢島妙子の研究〕

文化人類学・民俗学の矢島妙子は、高知のよさこい祭りの伝播やYOSAKOI ソーラン祭りの分析を含め、全国のよさこい祭りを対象とした体系的な研究を行っている。矢島は、平成一二（二〇〇〇）年発行の「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―⁽¹⁴⁸⁾、「祭り「よさこい」の誕生―「感動」した旅人たち―⁽¹⁴⁹⁾」、「祝祭の受容と展開―YOSAKOI ソーラン祭り⁽¹⁵⁰⁾」、平成一三年発行の「よさこい」の祭りにみる地域性についての人類学的考察⁽¹⁵¹⁾、平成一四年発行の「札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程―YOSAKOI ソーラン祭り」の地域密着型参加集団の歴史・社会背景―⁽¹⁵²⁾、「祝祭の組織編成にみる都市性と継承性―YOSAKOI ソーラン祭り」における参加集団の分類と特徴―⁽¹⁵³⁾、平成一五年発行の「よさこい」系祭りの全国展開の分析―伝播をめぐる統合的枠組を基礎として―⁽¹⁵⁴⁾、「よさこい」系祭りの全国展開にみる祝祭の正統性―祭りの本家に対する語りの分析―⁽¹⁵⁵⁾、「都市祝祭における「オーセンシティブ」再考―YOSAKOI ソーラン祭り」参加集団の地域表象のリアリティをめぐって―⁽¹⁵⁶⁾、平成一七年発行の「都市祝祭にみる「地域拡大・開放と地域再確立」―「よさこい」系祭りにみる都市の伝承母体をめぐって―⁽¹⁵⁷⁾」などがある。これらの論考をもとに、平成二七年刊行の『よさこい系」祭りの都市民俗学⁽¹⁵⁸⁾』に結実した。

矢島は、『よさこい系」祭りの都市民俗学』において、都市の現象を対象として現代社会に生きる人々の文化動態の解明と、祝祭を対象として都市に生きる人々の心性を探り、現代社会における人々のつながり方の解明を目的に、「現代社会における人々の集合性」と

「地域文化の継承」について分析を行っている。矢島の研究は、祭りがどう支えられ、継承され、そして発展していくかを検証し、それによって、民俗学における「都市民俗学」および「都市の伝承母体」を再考しようという意図を持つものである。そして、よさこい祭りの分析から都市祝祭の原理として、①「ゆるやかなルール」、②「多様性、ゆえに選択性がある」、③「差異性と統一性、両方の性質がある」、④「ユウラ祭り」の要素が等価単位としてある」、⑤「協調的連帯と競争的連帯…全国ネットワークとそれによる競争」、⑥「オーセンシティティとリアリティ」、⑦「ユニットが支える全体…地域に細分化されたエネルギーが都市全体の祭りを支える」、⑧「新文化と地域民俗文化の相互動態」、⑨「都市の伝承母体」（ゆるやかな伝承母体・多様な受け皿の結合原理である伝承母体・動態的伝承母体・伝承母体単位「単位母体」の重要性・伝承母体の全国性・競い合うことによる伝承力の強化）、⑩「拡大（多様性）と凝集（内的エネルギーの充実）の両方が祭り全体を持続させる」、⑪「都市祝祭における、地域」は「再確立された、地域」（「ゆるやかな地縁」を形成）の一一の特徴があることを明らかにしている。これらの特徴のうち、③と⑤、⑥と⑧、⑦と⑩、⑨と⑪はリンクする。つまり、差異性と統一性があるから都市の伝承母体には全国のネットワークがあり、細分化されたユニットも伝承母体となる。また、都市祝祭は拡大と凝集の両方が必要で、その上で地域に戻る方向性、リアリティへの引き戻しも大事であると指摘している。そして、矢島は、近代化・都市化は効率性追求のために、場所、からの意味の剥奪を行ってきた。トポスの再実現化（再トポス化）が必要である。「よさこい系」の祭りの踊りは、トポス（場所性）の実現としての踊りであると結論付けている。

なお、先に挙げた森雅人の論文や矢島妙子の論文の一部は、平成一五年に刊行された内田忠賢編『よさこい YOSAKOI 学リーディングス (159)』に所収されている。

〔森田三郎の研究〕

森田三郎は、平成一二(二〇〇〇)年刊行の『祝祭の一〇〇年』に所収された「祭りの創造―よさこいネットワークを考える―」(160)において、よさこい祭りが全国的なひろがりを見せるようになった社会的文化的な背景について、平成一一年に観察した第八回札幌 YOSAKOI ソーラン祭り、第六回高知よさこい祭り、第一回奈良バサラ祭りの事例検討を通じて考察を行っている。これらの新しい

祭りには、演目内容や参加資格の自由度があり、その最大の特徴は、参加者自身の創意工夫を活かす余地があること、地域を越えた連帯感の創出という点にあるとする。また、企画力とボランティアの力も大きかったとする。そして、YOSAKOIソーラン祭りの大きな特徴は、地域、性別などの様々な区分を取り払い、踊り子チームやスタッフとして仲間意識を醸成していることにある。地域コミュニティ・基盤の祭りから一八〇度、発想を転換したといえる。しかし、参加資格をこれだけ自由化すると、全体をまとめて持続的に多様な人々をひきつけていくシンボル・装置・絶えざる工夫が一段と重要になってくる。そのために鳴子をシンボルとして育て、地域の民謡を取り入れると同時に、踊り子チーム自身にも祭りの健全な発展のためのアイデアと労力を求めると指摘している。

〔松平誠の研究〕

松平誠は、平成二〇（二〇〇八）年刊行の『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―⁽¹⁶⁾』に所収された「第五章進化するYOSAKOIソーラン祭り」において、二一世紀初頭の都市マツリのなかで、YOSAKOIソーラン祭りや高知の「本家」のよさこい祭りの果たしている役割について触れたいとして考察を行っている。松平は、大学生が一人で始め、大学生中心の「YOSAKOIソーラン祭り実行委員会」という運営組織から、行政や商工会議所が入った「YOSAKOIソーラン祭り組織委員会」に変化した以後の目立つ事柄として二つの点を挙げている。一つは、YOSAKOIソーラン祭りの第一回から実施してきたマツリの終幕を飾るコンテストの変化である。二つはYOSAKOIソーラン祭りを札幌大通公園で行われる本戦を中心に眺めると、ここには初期にみられた自由さや開放感がいくぶん損なわれているように感じると指摘している。そして、瞬く間に全国に増殖していったこの踊りも、札幌のマツリが一〇数回を重ねると伝播の勢いを鈍らせ、観光客が二〇〇万を超えたところで近年伸びがほとんど止まったかにみえると指摘している。また、松平は、YOSAKOIソーラン祭りの創始には、中心となった当時、北海道大学の学生であった長谷川岳の特異な独創性と企画力の賜物であろうと指摘している。松平は、都市祭りと個人の活躍（人的要因）について、貴重な指摘を行っている。

一方、松平は、「本家」である高知のよさこい祭りについても分析を行っている。松平は、高知のよさこい祭りが受けたのは、鳴子を持って踊る「正調よさこい」が受けたのではなく、自由なオリジナル音楽と自由な振り付けによる鳴子踊りがそれを次第に凌駕する勢

いをみせ、都市マツリの本領を發揮し始めたことにあるとしている。昭和二九（一九五四）年から始められたよさこい祭りは、その初期においては、地縁団体がマツリの母体であったが、一九六〇年代になると、会社・学校などが組織する「社縁」団体中心に変化した。さらに、一九八〇年代になると、マツリに踊ることだけを目的とした「クラブチーム」（同好会組織）の参加が増加し、現在では半数近くが「クラブチーム」の踊りであることを明らかにしている。また、出場する一チームの人数を一五〇人以上にするという提案が通って、少人数で踊りを組むことができなくなり、「一般募集」が始まったことを明らかにしている。「本家」でも、都市のマツリは進化していると指摘している。

一一、戦後の青森ねぶた祭りを対象とした研究

（一）阿南透の研究

青森ねぶたの現代的变化に関しては、民俗学の阿南透の研究の蓄積がある。

阿南透は、平成一五（二〇〇三）年発行の「青森ねぶたの現代的变化（¹⁶²）」において、青森ねぶた祭りが現在のよう到大規模な都市祭礼になっていった過程を考察している。そして、戦後の変化の時期を、第一期が昭和二二（一九四七）年～昭和三六年の戦争による中断からの復興の時期、第二期が昭和三七年～昭和四二年の観光化の開始と大型化の時期、第三期が昭和四三年～昭和五四年の青森ねぶた祭りが確立し一つのピークを迎えた時期、昭和五五年～平成八年の若者の逸脱行為が目立ち始める転換期、第五期が平成九（一九九七）年～現在の逸脱行為への対応に迫られる変容期の五つの時期に区分している。

また、阿南は、平成一二年刊行の『祝祭の一〇〇年』に所収された「青森ねぶたとカラスハネト（¹⁶³）」において、青森のねぶた祭りを事例に、都市祭礼における「騒動」の実態と、それがなぜ発生し問題視されたかを考察している。阿南は、祝祭を宗教色の強い神社祭礼の意味で用いると、社会規範の否定こそが「祝祭」の重要な要素であるため、騒動が生じるのは当然であり、暴力の表出は祭礼の本質的要素となる。しかし、祝祭を娯楽性の強いイベントを包括する概念として用いると、祭礼の中の暴力沙汰や不祥事はあくまで

も偶発的・派生的な出来事とされ、軽視されがちになると指摘する。現代日本においては、参加者、特に若者は定められた祭礼のプロセスから逸脱し、自由で狂騒的に振る舞うことに快感を見出す者も多く、そうした逸脱行為は偶発的なものであるから、何が起こるかには主催者は予期しがたい。大多数の祭礼の主催者は、けが人や不祥事がなく、無事に行事が終わることに最大の関心がある。つまり、主催者にとつて、騒動はもともとの祭りの趣旨とは異なる行為と認識されているのであると問題の所在を明らかにしている。

青森ねぶた祭りは、ハネトとして誰でも自由に参加できる特徴があり、ハネトの服装は浴衣を着て花笠をかぶるのが正装である。ある時期から正装をせず、黒装束などの異様な風体で現われる若者集団、「カラスハネト」が大量に出現し、暴力沙汰にも発展し、祭りの雰囲気や壊すとして問題視されている。カラスハネトが登場する以前から祭りにおいて深刻な問題はなかったわけではないが、カラスハネトが登場し、それが「カラスハネト」と命名されて、黒装束というユニホームが登場したことによって、ねぶた祭りの場で反抗的な態度をとつて目立つための標準的なスタイルができあがり、参加者が拡大した。またマスメディアによって全国に知れ渡った。しかし、観光客に対する傷害事件が発生したことを契機にこの問題が問題化した。さらに、青森ねぶた祭りには「ねぶた大賞」など七つの賞があるが、賞取りが過熱することによって、カラスハネトを入れない整然とした運行を行うことが受賞のための重要なポイントとなり、カラスハネト敵視の一因を作ったことを明らかにしている。

このほか、阿南は、『よさこい』 YOSAKOI 学リーディングス』に所収された、阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子の共著による「祭りの「旅」―「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植」⁽¹⁶⁴⁾、平成二〇年発行の「祭りの海外遠征―ロサンゼルス of 青森ねぶた」⁽¹⁶⁵⁾、平成二三年発行の「青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷」⁽¹⁶⁶⁾ などがある。ねぶたは、よさこい祭りと同様に、海外を含めた他地域に遠征したり、移植されたりすることが指摘されている。

なお、平成一二年には、宮田登・小松和彦監修の『青森ねぶた誌』⁽¹⁶⁷⁾ が刊行されている。

また、阿南透は、平成二一年発行の「都市祭礼「仙台七夕まつり」の成立と変容」⁽¹⁶⁸⁾ において、現代の仙台七夕に関しても分析を行っている。

(二) 松平誠の研究

松平誠は、平成二〇（二〇〇八）年刊行の『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―（169）』に所収された「第二章伝播するネブタ」において、ネブタの伝播に関する考察を行っている。松平は、戦後のネブタは、青森のネブタが青森県の都市伝承行事の枠を超えて日本を代表する大イベントに変貌し、海外にまで遠征を繰り返す存在になったことが最も大きな出来事であると指摘する。そして、ネブタの伝播は、移植や模倣を媒介にした新たな行灯文化の創造とでも名付けたくなるような過程で、こうしたネブタの展開は青森ネブタという道具立てに負うところが大きかったと指摘する。そのため、これまでの都市マツリがもつ制約を振り切って、新しい町のシンボルとしてマツリを生み出そうという人々がこの道具立てによってどれだけ荷を軽くしたか、ネブタの急展開が示すのはそうした町々の期待そのものであった。しかし、ネブタの魅力を支えに立ち上げたマツリは、どんな工夫をしてもネブタから離れることは難しいと指摘している。

一三、戦後の沖縄のエイサーを対象とした研究

松平誠は、平成二〇（二〇〇八）年刊行の『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―（170）』に所収された「第四章日立風流物とエイサー」の中で、沖縄のエイサーの戦後の展開について、平成一〇年刊行の『エイサー360度―歴史と現在（171）』を参考にしながら考察を行っている。松平は、戦後、沖縄のエイサーの変化の一つとして、昭和三一（一九五六）年から始められたコザ市（現沖縄市）主催の「全島エイサーコンクール」を挙げている。それまで地域行事として統一感が乏しかったエイサーが、この催しによって一つにつながり、その後の振興発展に大変大きな踏み台になったことを紹介している。

このコンクールは昭和五二年に「沖縄全島エイサーまつり」に衣替えされ、一九八〇年代からは沖縄市の後押しでできた「琉球國祭り太鼓」など、新たな芸能が入り込むようになり、沖縄のマツリは厚みと幅を加えることにもなった。そして、沖縄中部だけの芸能であった太鼓中心の「太鼓エイサー」が南部や北部にも広がり、沖縄全島に展開した。さらには、奄美大島や海外にまで広がったといわ

れる。ハワイやロサンゼルス、ブラジルへの遠征がなされている。日本においては、沖縄県以外の広がりには、ほとんど県人会を土台としたもので、そこからの飛躍はほとんど実現していない。東京にもJR中野駅前を根城にエイサーを演じているグループはあるが、都内での活動はほとんど現状維持の範囲を出ていないと指摘している。松平は、こうしたエイサーに魅力を感じられるのは、それが戦後、どこかのマツリよりも急速に激しく展開してきたからであるとしている。

なお、松平誠は、高円寺阿波おどり、伝播するネブタ、博多山笠、日立風流物、エイサー、YOSAKOIソーラン祭りを事例として都市祭りのゆくえについて、平成二〇年刊行の『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―⁽¹⁷²⁾』にまとめている。

しかし、その後、エイサーは全国に知られるようになる。森田真也は「地域を演出する」の中で、平成六年八月の第七六回夏の高校野球甲子園大会において、沖縄県代表校の応援に関西在住の沖縄県出身者がエイサーの衣裳で駆け付けたところ「奇異」にして「華美」として日本高等学校野球連盟から自粛を求められたという事件があり、当時はまだエイサーは認知される途中にあったと思われると指摘している。そして、一九九〇年代以降の「沖縄ブーム」を背景として、沖縄に対するマイナスイメージがプラスイメージに変化し、エイサーは最も沖縄らしく、明るく楽しい、独自の歴史と文化をもった沖縄をイメージさせるのにふさわしいパフォーマンスになっていったのであるとしている⁽¹⁷³⁾。

東京・渋谷では、平成二五年から金玉八幡宮の祭礼において渋谷中央街のイベントとしてエイサーが行われるようになった。

まとめ

このように、戦後の都市祭りを対象とした研究史を整理すると、デュルケム、リーチ、ターナー、カイヨワなどの欧米の研究成果や柳田國男が指摘した観客の存在に留意しながら、非常に多くの研究蓄積がなされてきたことがわかる。学問領域ごとに整理するとおおよそ以下のようにまとめられる。

宗教学・宗教社会学の研究は、戦後、いち早く都市祭りの研究に入り、柳川啓一・藪田稔・赤池憲昭らによる秩父祭の研究を皮切りに、大都市の神田祭・山王祭などの伝統的な神社祭礼の研究を経て、藪田稔・宇野正人らによって、神戸まつり・浜松まつりといった行政主導型の新しい祭りの研究へ展開した。社会変動と宗教をテーマとして始められた研究も、祭りの本質論・景観論へ移行した。しかし、その後、社会変動と祭りをテーマとする宗教学・宗教社会学の研究はあまり進展していない。わずかに、石井研士の大銀座まつりの銀座八丁神社めぐりの研究、黒崎浩行による渋谷の住宅地の祭礼研究と、筆者による神田祭と渋谷の祭礼の研究にとどまる。

社会人類学・文化人類学・都市人類学の研究は、伝統的な都市祭りを中心に、中村孚美による川越祭・秩父祭・博多祇園山笠の研究、米山俊直による祇園祭・天神祭・神戸まつりの研究、和崎春日による左大文字行事の研究、森田三郎による長崎くんちの研究、竹沢尚一郎による博多祇園山笠の研究、中野紀和による小倉祇園太鼓の研究へ展開してきた。中村・米山・竹沢の研究においては伝統的な側面のみならず、風流など新しい側面にも着目し、複合的な視点で都市祭りを捉えている。和崎・森田・中野の研究も祭りといイベントの関係に注意しながら、都市祭りを複合的あるいは重層的に捉えている。いずれの研究においても、都市祭りの背景にある都市的生活様式の解明を志向している。

社会学の研究は、有末賢による佃祭の研究、松平誠による川越祭・秩父祭・大國魂神社の暗闇祭・高円寺阿波おどり・神田祭・池上本門寺と雑司ヶ谷の御会式・品川獵師町の祭礼・ネブタ・博多山笠・YOSAKOI ソーラン祭り・エイサーの研究、玉野和志による小山両社祭の研究、芦田徹郎によるボシタ祭りといの国まつりの研究、竹元秀樹による「おかげ祭り」の研究など、膨大な蓄積がなされている。多くの研究で、地域社会の変容と都市祭りの関係が明らかにされている。また、伝統的な都市祭りのみならず、戦後始められた新しい祭りに対しても研究がなされている。

松平誠は、都市祝祭を「伝統型」と「合衆型」に分類し、秩父祭・大國魂神社の暗闇祭などの伝統的な都市祭りを前者に、高円寺阿波おどりのような地域を離陸して展開する新しい祭りを後者に位置付けている。松平は、「伝統型」と「合衆型」の中間のタイプ、すなわち、「伝統型」と「合衆型」の両方の側面を持つ都市祭りの研究も志向していたようであり、池上本門寺の御会式は、「伝統型」のタイプに分類されるが、御会式に出される万灯練りの一般の講社組織は、高円寺阿波おどりと類似することから「合衆型」と位置付けて

いる。竹元秀樹は、松平の分類をもとに、「おかげ祭り」は「伝統型」でも「合衆型」の性格を持つものであることを明らかにしている。民俗学の研究は、松崎憲三による大銀座まつりの研究、茂木栄による浜松まつりの研究、福原敏男による津まつりの研究、阿南透による時代祭・青森ねぶた祭り・仙台七夕まつりの研究、内田忠賢による高知よさこい祭りの研究、八木橋伸浩による新宿区天祖神社の祭りの研究、矢島妙子によるよさこい祭り・YOSAKOIソーラン祭りの研究などの蓄積がある。戦後の都市祭りを対象とした研究では、どちらかといえば、伝統的な祭りよりも戦後に誕生もしくは発展した新しい祭りの分析が中心となっている。青森ねぶた祭りも仙台七夕まつりも民俗行事が都市祭りに発展したものである。また、個別の伝承を問題とするもののみならず、ねぶたやよさこい祭りに関してはその伝播について研究の蓄積がある。なお、矢島妙子は、文化人類学にも分類できるが、都市民俗学や伝承母体の再考を目的とする側面を持っていることから民俗学に分類した。

これらの研究のうち、伝統的な都市の神社祭りを扱った研究では、いずれの学問領域においても、祭りの担い手の変化が多くの研究で指摘されてきた。祭りの担い手は、かつては町会などを単位とした地域社会に居住する人たちであったが、地域社会の変容によって地域に在勤の会社員や女性、神輿同好会、有志チームなどの担い手へ変化していったことが共通して指摘されている。地縁や血縁から社縁、選択縁へ、すなわち「選べない縁」から「選べる縁」へ変化してきたことが指摘されている⁽¹⁷⁴⁾。そうした中で、松平誠は秩父祭や品川猟師町の祭礼などの研究において、地域社会の変容によって、町内共同が観念的になり、その分、祭りが盛んに行われるようになったことを明らかにしている。

また、多くの研究者が、伝統的な都市祭りにしても、新しい都市祭りにしても、個別の都市祭りを複合的・重層的な構造として捉えている。祭りに参加する人も、スル側・ミル側・支える側、ミル側からスル側への移行など、多様な人々の都市祭りへの参加の実態、あるいは参加の仕方が先行研究で指摘されている。

こうした研究の流れの中で、個人のまなざしも重視されるようになっていく。戦後の都市祭りを対象とした研究では、松平誠が秩父祭・(須田町中部町会の) 神田祭・品川猟師町の祭礼などで口述の生活史の記録を行い、それをもとに分析を行っている。玉野和志も、小山両社祭の背景にある東京のローカル・コミュニティの把握に口述の生活史をもとに分析を行っている。社会学が中心となっている

が、文化人類学においても、中野紀和が小倉祇園太鼓の分析においてライフヒストリーを把握し、それをもとに考察を行っている。森雅人が明らかにしているように、よさこいソーラン祭りを始めたのは、長谷川岳という個人である。個人と都市祭りとの関係も重要な視点であることがわかる。

一方、「神なき時代の祭り」といった祭りの世俗化とでもいうべき、状況も指摘されている。小松和彦は、「時代の潮流は、神のいる祭りから神なき時代への祭りへ、祭りからイベントへと、大きく変化している(175)」と指摘している。祭りとイベントとの関係も重要な論点の一つである。石井研士や森田三郎は、イベントから祭りへの変化、すなわち「イベントの祭り化」についても指摘している。とすると、一度、イベント化した祭りが再び祭り化する流れも都市祭りの中に存在するのであるか。こうした祭りとイベントの関係は、芦田徹郎の「祭りの日常化」の指摘とも連動する。脱日常化が難しくなった祭りが再び非日常化(聖化)する機会はあるのであるか。こうしたイベントの祭り化、脱日常化した祭りの非日常化については、都市祭りの宗教性を考える上で重要な論点になっている。

以上が、戦後の都市祭りを対象とした研究史の整理から浮き彫りとなってきたおおよその流れと論点である。

そこで、次に、先行研究から浮き彫りとなった課題について、まとめておきたい。

先行研究にみる課題

先行研究の課題は、少なくとも次の七点を挙げることができる。

第一に、都市祭りを分析対象としながらも、大都市の都市祭りを対象とした研究が少ない点が挙げられる。神田祭、祇園祭、天神祭、佃祭などを対象とした研究にとどまり、多くが地方都市の祭りの分析が中心である。特に、東京の中心部の研究が少なく、三社祭、山王祭などの体系的な研究はほとんどなされていない。都市祭りといっても、地方都市の祭りをどこまで都市祭りとして捉えてよいのかという問題もある。

第二に、同一の都市祭りを継続的に調査研究し、先行研究の分析結果と比較検討を行い、その経年的な変化を実証的に明らかにした研究が非常に少ない点が挙げられる。東京の神田祭においては、昭和四三(一九六八)年の藪田稔の調査(176)、平成四(一九九二)

年の松平誠の調査(177)と約二五年周期で、松平は藪田の調査項目の多くを踏襲して実証的な比較検討を行っていて、研究間の相互関係も明確な稀有な事例である。また、東京の佃祭においては、有末賢がウオーターフロントの再開発前と再開発後の変化を明らかにしている(178)。経年的変化を追う必要があるのは、都市祭りの盛衰を考える上で、経年的にデータを比較し、祭りのどの要素が拡大し、どの要素が縮小したかを知る必要があるからである。柳川啓一が「祭り」と現代(179)で指摘した社会の変化に対する一つのリアクションとして祭りが拡大していくのは、個別の事例において、具体的にどのような契機に起こるのであるか。また、それは柳川が指摘するように「宗教運動としての祭り」として捉えることができるのであろうか。

第三に、同一の都市祭りに限らず、他の都市祭りとの比較検討が充分になされない点が挙げられる。松平誠や森田三郎、中野紀和の研究などではこの点を意識的に行っているが、特に、伝統的な神社祭礼と新しい祭りとの研究間の実証的な比較検討があまり進んでいない。松平誠の類型でいうと、「伝統型」は「伝統型」、「合衆型」は「合衆型」で、それぞれの領域で研究を行っている傾向がある。そのため、「伝統型」と「合衆型」、「祭り」と「イベント」の相互関係についての検討が充分になされていない。

第四に、地域社会が変容していく中で、都市祭りが観念的な町内共同の確認の場になっていることが指摘されているが、都市祭りが地域の現状に則した新しい町内共同の確認の場になっているというような視点で分析を行っている研究は少ない。もし都市祭りにおける新しい町内共同のあり方があるとすれば、町内の他の行事と比較してどのような役割があるのかも解明し、町内共同の実態に迫る必要がある。

第五に、個人と都市祭りとの関係を分析した研究が充分に進んでいない。口述の生活史やライフストーリーなどをとくに、具体的な都市祭りの盛衰につながるような契機や背景を浮き彫りにした研究が少なく、現代の神社祭礼や寺院の祭礼においては、神職や僧侶といった宗教者という個人と都市祭りとの関係も盲点となっている。また、祭りをスル側として地域社会の外側から参加する個人についての解明も進んでいない。

第六に、「神なき祭りの時代」や「祭りの日常化」などが指摘され、祭りの非日常性が希薄化しているという指摘がある中で、祭りに参加する人たち(祭りをスル側・ミル側・支える側)は、非日常性を感じることがあるとすれば、それはどのような場において、非日

常性を感じるのだろうか。個別の都市祭りにおける非日常化する要素や場について具体的に明らかにするといった課題がある。

第七に、メディアへの取り上げられ方など、情報化と都市祭りとの関係について、ほとんど実証的な研究がなされていない。

以上、七点の研究史から浮き彫りとなった課題についてみてきた。これらの課題を克服し、社会変動と都市祭りの関係を実証的な分析によって明らかにするためには、まずは第一と第二の課題を克服できる東京の神田祭が研究対象として浮上してくる。神田祭であれば、大都市の祭りであり、秋葉原の中央通りの連合渡御や神田神社への神輿宮入参拝の場面に多くの観客が集い、盛んに行われている事例でもある。本研究では、分析の主たる対象にはできないが、第七の課題である情報化の問題にもメディアに取り上げられる機会も多く有効であると考ええる。

そこで、本研究では、戦後の地域社会の変容と神田祭をテーマに、昭和四三年の藪田稔、平成四年の松平誠の調査時点から現在に至るまでの経年的変化を藪田の調査項目に沿う形で実証的に明らかにしたい。そして、戦後の神田祭の分析から現代日本人の伝統的な宗教に対する新しい意味や役割を明らかにしたいと考える。

具体的には、続く第二章では、本題に入る前に、神田祭の変遷を概観し、変遷からみえる研究の課題をまとめておきたい。ここでは、過去の神田祭の盛衰に留意する。第二の課題については第三章第一節・第二節で考察を行う。第四の課題については、第三章第三節で蔭祭、第四節で町会の年中行事、第五節では第二の課題を踏まえて、個別の町会の神田祭を明らかにする。第五の課題については、第四章第一節で神田神社の神職、第二節で町会の特定の個人、第三節で一般募集で参加する個人を対象した分析を行う。この第三節は、第三の課題につながる。そして、結論においては、第一〜五の課題を踏まえて第六の課題を考察しつつ、都市祭りの宗教性について指摘したい。ここに、本研究を「都市祭りの宗教学」と題した所以がある。

註

- (1) 「うねり 頂点 浅草・三社祭」『朝日新聞』、平成二四年五月二一日付。
- (2) エミール・デュルケム著、古野清人訳『宗教生活の原初形態』上・下、岩波文庫、昭和一七年。
- (3) ミルチャ・エリアーデ著、堀一郎訳『永遠回帰の神話』未来社、昭和三八年。
- (4) ファン・ヘネップ著、綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波文庫、平成二四年。
- (5) エドモンド・リーチ・青木保訳『時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ』青木保ほか訳『人類学再考』思索社、昭和四九年。
- (6) ヴィクター・ターナー『儀礼の過程』思索社、昭和五三年。
- (7) ハーヴィー・コックス『愚者の饗宴』新教出版社、昭和四六年。
- (8) カール・ケレーニー著、高橋英夫訳『神話と古代宗教』新潮社、昭和四七年。
- (9) H. D. ダンカン著、中野秀一郎・柏岡富英訳『シンボルと社会』木鐸社、昭和四九年。
- (10) ヨハン・ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社、昭和三八年。
- (11) ロジェ・カイヨワ著、多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社学術文庫、平成二年。
- (12) ミハイール・バフチン著、川端香男里訳『フランソワ・ラブレールの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、昭和四九年。
- (13) 『柳田國男全集』一三三、ちくま文庫、平成二年。初出は、柳田國男『日本の祭』弘文堂、昭和一七年。
- (14) 早川孝太郎『花祭』講談社学術文庫、平成二二年、三六七〜三六八頁。初出は、早川孝太郎『花祭』岡書院、昭和五年。
- (15) 「講演録」宮座の祭…神主の変遷について』『國學院大學日本文化研究所紀要』二六輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四五年、七四頁。
- (16) 藪田稔『祭りの現象学』弘文堂、平成二年、六四頁。初出は、藪田稔「祭」『儀礼の構造』佼成出版社、昭和四七年。
- (17) 藪田稔「祭とマチ文化」井上忠治編『都市のフォークロア』ドメス出版、昭和六三年、一一〇〜一二二頁。
- (18) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年、二頁。
- (19) 藪田稔「祭り参加の諸相と階層」『人類科学』第一九集、九学会連合、昭和四一年。
- (20) 柳川啓一「祭と近代化」『第二回神道研究国際会議紀要』、國學院大學日本文化研究所、昭和四二年。
- (21) 柳川啓一「祭りと現代」『國學院大學日本文化研究所紀要』第三四輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四五年。
- (22) 赤池憲昭「祭りと町会」『愛知学院大学文学部紀要』第一号、昭和四六年。
- (23) 柳川啓一「親和と対抗の祭—秩父神社夜祭—」『思想』五八二号、岩波書店、昭和四七年。
- (24) 柳川啓一「まつりの感覚」『宗教研究』第四九卷第三号、日本宗教学会、昭和五一年、一一〜三〇頁。
- (25) 前掲藪田「祭り参加の諸相と階層」五七頁。
- (26) 前掲藪田『祭りの現象学』六四頁。
- (27) 藪田稔「祝祭と聖犯」『思想』六一七号、岩波書店、昭和五〇年。のちに『祭りの現象学』弘文堂、平成二年に所収。

- (28) 前掲藪田『祭りの現象学』一一七頁。
- (29) 赤池憲昭「祭り」と町会―秩父市上町会の事例報告―『日本祭祀研究集成』第二卷、名著出版、昭和五年、二〇三〜二四九頁。
- (30) 柳川啓一『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房、昭和六年、一八〜一九頁。初出は、柳川啓一「伝統社会の崩壊と宗教」『東洋学術研究』第一六卷第一号、財団法人東洋哲学研究所、昭和五年。
- (31) 前掲柳川『祭と儀礼の宗教学』一二三〜一四三頁。初出が柳川啓一「親和と対抗の祭―秩父神社夜祭―」『思想』五八二号、岩波書店、昭和四七年。
- (32) 谷部真吾「祭りにおける対抗関係の意味―遠州森町「森の祭り」の事例を通して―」『日本民俗学』二二二号、日本民俗学会、平成一二年。
- (33) 安藤直子「地方都市における観光化に伴う「祭礼群」の再編成―盛岡市の六つの祭礼の意味付けをめぐる葛藤とその解消―」『日本民俗学』二二二号、日本民俗学会、平成一四年。
- (34) 柳川啓一「祭の神学と科学―会津田島祇園祭―」『思想』五六九号、昭和四六年一月。
- (35) 前掲柳川『祭と儀礼の宗教学』九一頁。初出は柳川啓一「祭にひそむ二つの原理」『公評』昭和四八年九月。
- (36) 前掲柳川「まつりの感覚」、一一〜三〇頁。
- (37) 石井研士『戦後の社会変動と神社神道』大明堂、平成一〇年、五〇頁。
- (38) 中村孚美「都市と祭り―川越祭りをめぐって―」『現代諸民族の宗教と文化―社会人類学的研究―』、社会思想社、昭和四七年。
- (39) 中村孚美「秩父祭り―都市の祭りの社会人類学―」『季刊人類学』三一四、社会思想社、昭和四七年。
- (40) 松平誠「祭の文化 都市がつくる生活文化のかたち」(有斐閣選書)有斐閣、昭和五八年。
- (41) 前掲松平『祭の文化 都市がつくる生活文化のかたち』二五六〜二九一頁。
- (42) 前掲松平『祭の文化 都市がつくる生活文化のかたち』二五七頁。
- (43) 松平誠「秩父の町内―近代における伝統的都市の祭りと生活集団の変容―」『生活学 第十冊』ドメス出版、昭和五九年。
- (44) 松平誠「都市の社会集団(5)―秩父の祭りと生活集団―」『応用社会学研究』第二六集、立教大学社会学部研究室、昭和六〇年。
- (45) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、七一〜一六八頁。
- (46) 米山俊直『祇園祭』中公新書、昭和四九年。
- (47) 米山俊直『天神祭』中公新書、昭和五四年。
- (48) 米山俊直『都市と祭りの人類学』河出書房新社、昭和六一年、一四頁。
- (49) 米山俊直編著『ドキュメント祇園祭 都市と祭りと民衆と』(NHKブックス)日本放送出版協会、昭和六一年。
- (50) 前掲米山『都市と祭りの人類学』。
- (51) 和崎春日「都市の祭礼の社会人類学―左大文字をめぐる―」『民族学研究』四一―一、日本民族学会、昭和五一年。
- (52) 和崎春日「左大文字地域におけるシンルイ意識―シンルイ構造・呼称・伝統行事との関連―」『人文研究』第八〇集、神奈川大学人文学会、昭和五六年。
- (53) 和崎春日「左大文字における伝統と変化―その儀礼様式と祭祀集団をめぐる―」『稲・舟・祭―松本信廣先生追悼論文集―』六興出版、昭和五七年。
- (54) 和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、昭和六二年。

- (55) 和崎春日『大文字の都市人類学的研究』刀水書房、平成八年。
- (56) 阿南透「歴史を再現する」祭礼『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二十六号、慶応義塾大学大学院社会学研究科、昭和六十一年。
- (57) 菌田稔「大都市の祭り」『國學院大學日本文化研究所報』五十四、國學院大學日本文化研究所、昭和四十三年八月。
- (58) 菌田稔「大都市の祭り(二)——都市における祭りの理念型——」『國學院大學日本文化研究所報』五十五・六、昭和四十三年一月。
- (59) 菌田稔「祭と都市社会——天下祭(神田祭・山王祭) 調査報告(一)——」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四十四年。
- (60) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容——神田祭による試論——」『応用社会学研究』第三十五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (61) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年。
- (62) 松平誠「神田の地上げと生活集団」『日本生活学会編』『生活学』1992『ドメス出版、平成四年。
- (63) 松平誠「神田と祭りに生きる人々——神田祭女御輿町内の古老談——」生活文化研究所編『遊びと日本人』啓文社、平成四年。
- (64) 松平誠『現代ニッポン祭り考——都市祭りの伝統を創る人々——』小学館、平成六年。
- (65) 秋野淳一「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭『國學院大學大学院紀要——文学研究科——』第四五輯、國學院大學大学院、平成二十六年。
- (66) 秋野淳一「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭——「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」——『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第一〇号、國學院大學研究開発推進センター、平成二十八年。
- (67) 清水純「神田祭——担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係——」『日本民俗学』二七一号、日本民俗学会、平成二十四年。このほか、清水純の研究には、「神田祭——大都市の祭礼における現代的変容——」日本大学経済学部中国・アジア研究センター。
- (68) 北村敏「東京近郊の神社と祭り——調布市を事例として——」岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄編『都市民俗学へのいざない——混沌と生成』雄山閣、平成元年。
- (69) 秋野淳一「都市祭りの経年的変化——戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰——」『國學院雑誌』第一一六卷一一号、國學院大學、平成二十七年。
- (70) 秋野淳一「神田祭調査報告——平成27年 神田神社・御遷座400年奉祝大祭の分析——」『神道研究集録』第三〇輯、國學院大學文学研究科神道学・宗教学院学生会、平成二十七年。
- (71) 前掲菌田「祭と都市社会——天下祭(神田祭・山王祭) 調査報告(一)——」。
- (72) 筆者による観察調査、平成二十四年六月一日。
- (73) 金丸裕子「皇居のお膝下を、十二基の神輿が練り歩く!」『下町連合渡御』『東京人』平成二十四年六月号、都市出版、三八〜四一頁。
- (74) 松平齋光「浅草の三社祭」『日本祭祀研究集成』第三卷、岩崎敏夫・三隅治雄編、名著出版、昭和五十一年、三八二〜三八八頁。
- (75) 川上周三「浅草の宗教と社会——三社祭を中心にして——」『人文科学年報』第三二号、専修大学人文科学研究科、平成十四年。
- (76) 越智恵「浅草三社祭に神輿を担いで35年——三社祭の変遷——」『民俗音楽研究』第三二号、日本民俗音楽学会、平成十九年。
- (77) 牧野圭子「震災後の日本観光に関する感性論的考察——浅草三社祭の事例——」『成城文藝』二一六号、成城大学、平成二十三年。
- (78) 有末賢「都市祭礼の重層的構造——佃・月島の祭礼組織の事例研究——」『社会学評論』一三二二号、日本社会学会、昭和五十八年。
- (79) 有末賢『現代大都市の重層的構造』ミネルヴァ書房、平成二十一年。
- (80) 松崎憲三『現代社会と民俗』名著出版、平成三年、八〇〜一〇七頁。

- (81) 石井研士『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』新曜社、平成六年、五四〜五七頁。
- (82) 八木橋伸浩「マチのつきあい」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房、平成二十七年、一九八〜二〇七頁。
- (83) 黒崎浩行「第二章渋谷の住宅地と神社祭礼」石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、平成二五年、一一七〜一四三頁。
- (84) 高久舞「第八章渋谷の《祝祭》―スクランブル交差点にどう人々―」石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、平成二五年、三〇三〜三三七頁。
- (85) 秋野淳一「第三章祭りからみえてくる「渋谷」―SHIBUYA109前に集う神輿 金王八幡宮の祭り―」石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、平成二五年、一四五〜一九五頁。
- (86) 秋野淳一「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」『共存学3 復興・地域の創生 リスク世界のゆくえ』弘文堂、平成二七年、九一〜一〇〇頁。
- (87) 前掲松平『都市祝祭の社会学』一七〇〜二三九頁。
- (88) 中里亮平「変更からみる祭礼の現代的状況―東京都府中市大國魂神社くらやみ祭の事例から―」『日本民俗学』二六一号、日本民俗学会、平成二二年。
- (89) 前掲松平『都市祝祭の社会学』二四二〜三二〇頁。
- (90) 松平誠「日蓮宗御会式と万燈講の社会文化的研究(前)」『応用社会学研究』第三二集、立教大学社会学部研究室、平成二年。
- (91) 松平誠「日蓮宗御会式と万燈講の社会文化的研究(後)」『応用社会学研究』第三三集、立教大学社会学部研究室、平成三年。
- (92) 前掲松平「日蓮宗御会式と万燈講の社会文化的研究(後)」一六六〜一七〇頁。
- (93) 松平誠「都市の社会集団(6)―元南品川猟師町の生成構成(その1)―」『応用社会学研究』第二七集、立教大学社会学部研究室、昭和六一年。
- (94) 松平誠「品川猟師町の形成と展開―東京漁民の生活史」『生活学1987 第十二冊』ドメス出版、昭和六一年。
- (95) 松平誠「都市の社会集団(7)―元南品川猟師町の生活構成(その2)―」『応用社会学研究』第二八集、立教大学社会学部研究室、昭和六二年。
- (96) 前掲松平「都市の社会集団(7)―元南品川猟師町の生活構成(その2)―」三六八〜三七三頁。
- (97) 松平誠「都市解体型の祝祭文化―日本人の回帰性を問題として―」『生活学1988 第十三冊』ドメス出版、昭和六二年。
- (98) 松平誠「都市祝祭の構成原理序説」『応用社会学研究』第二九集、立教大学社会学部研究室、昭和六三年。
- (99) 松平誠「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」『季刊人類学』第一九卷第二号、昭和六三年。
- (100) 前掲松平『都市祝祭の社会学』。
- (101) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、二頁。
- (102) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、三〜四頁。
- (103) 前掲松平「現代神田祭仄聞」。
- (104) 前掲松平「神田と祭りに生きる人々―神田祭女御輿町内の古老談―」。
- (105) 前掲松平「神田の地上げと生活集団」。
- (106) 前掲松平「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」。
- (107) 前掲松平『現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―』。
- (108) 玉野和志「地域の世代的再生産と都市祭礼の復興―「小山両社祭」調査報告―」『人文学報』第二九〇号、東京都立大学人文学部、平成一〇年。

- (109) 前掲玉野「地域の世代的再生産と都市祭礼の復興」、一一四―一二六頁。
- (110) 玉野和志「都市祭礼の復興とその担い手層―『小山両社祭』を事例として―』『都市問題』第九〇巻第八号、東京市政調査会、平成十一年。
- (111) 玉野和志『東京のローカル・コミュニティ ある町の物語一九〇〇・八〇』東京大学出版会、平成一七年。
- (112) 藪田稔「神戸まつり調査偶感」『國學院大學日本文化研究所報』第一四卷第二号、國學院大學日本文化研究所、昭和五二年。
- (113) 藪田稔・宇野正人「奄美諸島調査」『國學院大學日本文化研究所報』第一四卷第五号、國學院大學日本文化研究所、昭和五二年。
- (114) 宇野正人「都市の祭への視角―名瀬市〔奄美まつり〕をととして―」宗教社会学研究会編集委員会編『現代宗教への視角』雄山閣出版、昭和五三年。
- (115) 宇野正人「都市祭における伝統への指向―神戸まつり―」『日本民俗学』第一二八号、日本民俗学会、昭和五五年。
- (116) 前掲米山『都市と祭りの人類学』。
- (117) 前掲米山『都市と祭りの人類学』。
- (118) 高取正男・松平誠・中村孚美・森田三郎・米山俊直「座談会 日本の都市の祭り」『季刊人類学』第一一巻第四号、京都大学人類学研究会、昭和五五年。
- (119) 阿南透・宇野正人・酒井直広・永井良和・林智良・森田三郎・吉田由佳子・米山俊直「座談会 大都市の祝祭行事―『神戸まつり』の調査から―」『季刊人類学』第一四卷第二号、京都大学人類学研究会、昭和五八年。
- (120) 荒川裕紀は、研究の成果を平成二七年度に大阪大学大学院に提出した博士学院申請論文『西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究』にまとめている。
- (121) 宇野正人「年中行事から都市祭へ―浜松まつり―」『都市社会の宗教―浜松市における宗教変動の諸相―』東京大学宗教学研究室、昭和五六年。
- (122) 茂木栄「都市とイベント」『情念と宇宙―都市民俗学へのいざない』雄山閣出版、平成元年。
- (123) 荒川章二・笹原恵・山道太郎・山道佳子「浜松まつり―学際的分析と比較の視点から―」岩田書院、平成一八年。
- (124) 阿南透「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造」『祭りとイベント』(現代の世相⑤)、小松和彦編、小学館、平成九年。
- (125) 福原敏男「山車を失った都市祭礼―津八幡宮祭礼の戦後―」『民俗学の資料論』国立歴史民俗博物館編、吉川弘文館、平成一二年。
- (126) 森田三郎「長崎くんち考―都市祭礼の社会的機能について―」『季刊人類学』第一一巻第一号、社会思想社、昭和五五年。
- (127) 森田三郎「祭りとイベント―ウラまつりをめぐって―」『甲南大学紀要文学編』六三、甲南大学、昭和六二年。
- (128) 森田三郎『祭りの文化人類学』世界思想社、平成二年。
- (129) 中村孚美「博多祇園山笠―そのダイナミクスとアーバンリズム―」『社会人類学の諸問題 馬淵東一先生古希記念』第一書房、昭和六一年。
- (130) 竹沢尚一郎「村の祭、都市の祭」脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』新曜社、平成九年。
- (131) 竹沢尚一郎「博多祇園山笠」『季刊民族学』八四号、財団法人千里文化財団、平成一〇年。
- (132) 福岡裕爾「現代の祭りにおける「伝承」のありかた―北海道芦別市の健夏山笠を題材に―」『福岡市博物館研究紀要』第一〇号、福岡市博物館、平成一二年。
- (133) 福岡裕爾「ウツス」ということ―北海道芦別健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一四号、国立歴史民俗博物館、平成一六年。
- (134) 松平誠『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―』中央公論新社、平成二〇年。
- (135) 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体』古今書院、平成一九年。
- (136) 芦田徹郎『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社、平成一三年、一〇四頁。

- (137) 芦田徹郎「祭りと社会変動―熊本市『ボシタ祭り』をめぐって―」『社会学雑誌』第五号、神戸大学社会学研究会、昭和六三年。
- (138) 芦田徹郎「ある市民祭の生と死―熊本市・(旧)火の国まつりをめぐって―」北原淳・大野道邦編『社会学 理論・比較・文化』、晃洋書房、平成六年。
- (139) 前掲芦田『祭り』と宗教の現代社会学』。
- (140) 竹沢尚一郎・福岡裕爾・南博文・小松秀雄・芦田徹郎・重信幸彦・関一敏「ワークシヨップ③都市祭礼研究の課題と可能性」『宗教と社会 別冊』、「宗教と社会」学会、平成十一年。
- (141) 竹元秀樹『祭り』と地方都市―都市コミュニティ論の再考―』新曜社、平成二十六年。
- (142) 内田忠賢「都市と祭り―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(1)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四五号、高知大学教育学部、平成四年。
- (143) 内田忠賢「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四七号、高知大学教育学部、平成六年。
- (144) 内田忠賢「地域イベントの展開―高知「よさこい祭り」を事例として―」『地理』三九―五、古今書院、平成六年。
- (145) 内田忠賢「都市の新しい祭り」と民俗学―高知「よさこい祭り」を手掛かりに―」『日本民俗学』第二二〇号、日本民俗学会、平成十一年。
- (146) 伊藤亞人「よさこい祭り」と市民社会」『東アジアからの人類学―国家・開発・市民―』風響社、平成一八年。
- (147) 森雅人「たった一人が仕掛けた祭り―札幌『YOSAKOIソーラン祭り』」『都市問題』第九〇巻第八号、東京市政調査会、平成十一年。
- (148) 矢島妙子「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―」『常民文化』第二三三号、成城大学常民文化研究会、平成一二年。
- (149) 矢島妙子「祭り」「よさこい」の誕生―「感動」した旅人たち―」『現代風俗学研究』六号、現代風俗学研究会、平成一二年。
- (150) 矢島妙子「祝祭の受容と展開―『YOSAKOIソーラン祭り』」日本生活学会編『祝祭の一〇〇年』ドメス出版、平成一二年。
- (151) 矢島妙子「よさこい」の祭りにみる地域性についての人類学的考察」『常民文化』第二四号、成城大学常民文化研究会、平成一三年。
- (152) 矢島妙子「札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程―『YOSAKOIソーラン祭り』の地域密着型参加集団の歴史・社会背景―」『生活学論叢』七号、日本生活学会、平成一四年。
- (153) 矢島妙子「祝祭の組織編成にみる都市性と継承性―『YOSAKOIソーラン祭り』における参加集団の分類と特徴―」『人文科学研究』第三二号、名古屋大学大学院文学研究科、平成一四年。
- (154) 矢島妙子「よさこい」系祭りの全国展開の分析―伝播をめぐる統合的枠組を基礎として―」『現代風俗学研究』九号、現代風俗学研究会、平成一五年。
- (155) 矢島妙子「よさこい」系祭りの全国展開にみる祝祭の正統性―祭りの本家に対する語りの分析―」『名古屋大学比較人文学研究年報2003』、名古屋大学文学研究科・比較人文学研究室、平成一五年。
- (156) 矢島妙子「都市祝祭における「オーセンシティブ」再考―『YOSAKOIソーラン祭り』参加集団の地域表象のリアリティをめぐる―」『人文科学研究』第三二号、名古屋大学大学院文学研究科、平成一五年。
- (157) 矢島妙子「都市祝祭にみる「地域拡大・開放と地域再確立」―「よさこい」系祭りにみる都市の伝承母体をめぐって―」現代都市伝承研究会編『現代都市伝承論―民俗の再発見―』岩田書院、平成一七年。
- (158) 矢島妙子『よさこい系』祭りの都市民俗学』岩田書院、平成一七年。
- (159) 内田忠賢編『よさこい系』YOSAKOI学リーディングス』開成出版、平成一五年。

- (160) 森田三郎「祭りの創造―よさこいネットワークを考える―」日本生活学会編『祝祭の一〇〇年』ドメス出版、平成一二年。
- (161) 前掲松平『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―』。
- (162) 阿南透「青森ねぶたの現代の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、国立歴史民俗博物館、平成一五年。
- (163) 阿南透「青森ねぶたとカラスハネト」日本生活学会編『祝祭の一〇〇年』ドメス出版、平成一二年。
- (164) 阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子「祭りの「旅」―「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植―」『よさこい YOSAKOI 学リーディングス』開成出版、平成一五年。
- (165) 阿南透「祭りの海外遠征―ロサンゼルス、青森ねぶた―」『情報と社会』第一八号、江戸川大学、平成二〇年。
- (166) 阿南透「青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷」『情報と社会』第二二号、江戸川大学、平成二三年。
- (167) 宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市、平成一二年。
- (168) 阿南透「都市祭礼「仙台七夕まつり」の成立と変容」『情報と社会』第一九号、江戸川大学、平成二二年。
- (169) 前掲松平『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―』。
- (170) 前掲松平『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―』。
- (171) 沖縄市企画部平和文化振興課編『エイサー360度―歴史と現在』沖縄全島エイサーまつり実行委員会、平成一〇年。
- (172) 前掲松平『祭りのゆくえ―都市祝祭新論―』。
- (173) 森田真也「地域を演出する」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房、平成二七年、六八〜六九頁。
- (174) 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、昭和五九年。上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」『日本人の人間関係』(現代日本文化における伝統と変容3)、ドメス出版、昭和六二年。
- (175) 小松和彦「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りといイベント 現代の世相⑤』小学館、平成九年、三八頁。
- (176) 前掲菌田「祭り」と都市社会―「天下祭」(神田祭・山王祭)調査報告(一)―』。
- (177) 前掲松平「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」。
- (178) 前掲有末『現代大都市の重層的構造』。
- (179) 前掲柳川「祭り」と現代」。

第二章 神田祭の変遷と研究の課題

本章では、まず、『神田明神史考』⁽¹⁾を中心に、『神田明神誌』⁽²⁾等で補足しながら神田祭の発祥から平成の初めまでの神田祭の変遷について、神田神社の変遷を踏まえながらみていきたい。その上で、神田祭の変遷から浮き彫りになった社会変動と祭りとの関係を示す事実を確認し、戦後の神田祭研究の課題を指摘する。そして、第二部の個別分析篇への導入としたい。

一、神田祭の発祥

(一) 神田明神の創建

神田明神（神田神社）は、天平二（七三〇）年に眞神田臣氏によって武蔵國豊島郡芝崎（現在の千代田区大手町・将門塚付近）に創建されたと伝わる。その後、江戸城拡張のため、慶長八（一六〇三）年に一時、駿河台に遷り、元和二（一六一六）年に湯島台（千代田区外神田の現在地）へ鎮座した。

『御府内備考続編』卷之九には、「神田明神社」の記載があり、「当社往古神田橋御門内（今神田橋御館之場所）に有之、其後年代不知駿河台（今鈴木町辺）へ遷座有之候処、元和二丙辰年当湯島之地所へ替地拝領仕遷座有之候」として、「祭神二座 一宮大己貴命 但、神躰往古より秘封、於神主も拝見不仕候。二宮平親王将門公靈 但、神躰往古より秘封之儘に而、於神主も拝見不仕候。天慶年中之頃蒙勅許相殿に相成候由申伝、委細之儀相知兼申候⁽³⁾」と記されている。祭神に一の宮・大己貴命、二の宮・平親王将門公靈を祀っていることがわかる。ただし、創建年代については記載がない。

(二) 江戸開府以前の神田明神の御祭禮

神田明神では、天平二(七三〇)年の創建以来、定期的に祭りは行われてきたものと思われるが、古い時代の記録は残されていない。戦国時代に入ると、わずかに神事能に関する記録がみえる。小田原の北条氏(後北条氏)の記録である『北条五代記』巻四には、神田明神の神事能について触れている。毎年、九月一六日に神事能の興行があったが、大永四(一五二四)年に北条氏綱が上杉朝興のいた江戸城を攻め落としたため、神事能ができず、次の年に開催した。北条氏綱は神事能がこの年に欠けたことを吉例にしようとし、それ以来三年目ごとに神事能を行うようになった。京都の石清水八幡宮に暮松太夫という名手がいて、この人物が江戸に来て三年に一度の神事能を務めたとされる⁽⁴⁾。当時は、神事能が神田明神の御祭禮の中心であったことが考えられる。

徳川家康が関東に入国した頃(一六〇三年頃)の神田明神の御祭禮について記したものがあ

寛永(一六二四〜一六四四)の頃に小木曾某の話を書き留めた『落穂集追加』によれば、「只今の酒井讃岐守殿の上屋敷は古来より明神の仕地にて、御入国の節は地内に大木ども生い茂り、其の中に宮居有之。毎年九月祭禮の節は、件の木立の中に幟を立てならべ、近在町方より栗・柿を初め種々の売買物持ち出し、人たちの多く賑やかに有之由、小木曾など物語り仕り候⁽⁵⁾」とある。

『武江披砂』外編巻一に所収された記事によれば、「御祭禮の儀、権現様御入国の比までは毎年舟祭りにて、竹橋より御船にて、小船町神田屋庄右衛門と申す者の宅前より神輿御揚り、陸地通行にて御座候」とある。この「権現様御入国の比」とは、『神田明神史考』では、神田明神が芝崎村を離れ神田山(駿河台)に仮遷座したのが慶長八(一六〇三)年頃であることを踏まえると、慶長八年以前であることは確実であるとしている。また、舟祭りが行われていたのは、文禄の頃ないし慶長の初年頃までと推定している⁽⁶⁾。

二、近世の神田祭

(一) 近世の神田明神

元和元(一六一五)年の徳川家康による江戸開府に伴い、江戸城の普請と城下町の造成工事のため、元和二年に神田明神は湯島の地

に遷された。このとき、幕府から社地一万坪が与えられた。二代將軍・徳川秀忠の命により、江戸の総鎮守として壮麗な桃山風の社殿が建築され、元和三年九月に竣工した。このとき、葵の御紋の使用が許可された。秀忠が湯島の地に神田明神を遷座したのは、湯島の地が江戸城からみて丑寅に当り、鬼門を鎮めるためであったと伝わる。しかしながら、明暦三（一六五七）年の振袖火事によって神田明神の殿舎は全て類焼した。

万治三（一六六〇）年、四代將軍・徳川家綱は神田明神の再建を命じ、寛文元（一六六一）年八月に竣工し、同年九月六日に遷座した。再建の費用は金二千両といわれている。寛文一一年、幕府の要請により、靈元天皇の勅命をもって、従一位左大臣大炊御門経孝が「神田大明神」の五字を染筆し、勅額として社殿に掲げられた。

延宝七（一六七九）年に修復工事、翌延宝八年に烈風により破損したため再度修復工事を行ったが、天和二（一六八二）年一二月二八日の大火（八百屋お七の火事）によって類焼した。翌天和三年に五代將軍・徳川綱吉の命により再建した。その後、元禄四（一六八九）年、元禄一二年、正徳四（一七一四）年、享保二（一七一七）年、延享元（一七四四）年に修復工事が行われた。

明和九（一七七二）年二月、江戸大火（目黒行人坂火事）により、神田明神は類焼し社殿いっさいを焼失した。一〇代將軍・徳川家治が再建を命じた。安永八（一七七九）年正月二八日新始め、安永九年一月一〇日立柱、天明二（一七八二）年八月二七日に上棟した。この天明二年に建築された社殿が関東大震災で焼失するまでの約一四〇年間保持された。この社殿は『江戸名所図会』などの絵画、錦絵などに描かれている（[76](#)）。

（二）天下祭の始まり

徳川幕府は神田明神と日枝山王（山王権現）の祭礼に対して庇護を行い、祭礼費用も負担した。

天和元（一六八一）年、寺社奉行の水野忠春が神田と山王の祭礼を隔年にするように触れを出し、以後、神田明神の御祭禮は丑・卯・未・酉・亥の年に行われるようになった。当時の神田祭は、神輿の行列立てによる渡御祭が行われ、氏子の町々は競って山車・練り物・屋台・附祭を出して、神輿の前後に供奉した。

『武江年表』によると、元禄元（一六八八）年九月に「神輿、練り物、江戸城内に入る」とあり、五代將軍徳川綱吉のときに初めて神田明神の祭り行列が江戸城内に入ったことがわかる。また、嘉永二（一八四九）年成立の『徳川実紀』によると、宝永二（一七〇五）年九月一六日、將軍・徳川綱吉自らが城内吹上において神田御祭禮を上覧した。こうして、祭礼行列が江戸城内に入るようになった神田明神の御祭禮は、日枝山王の御祭禮と並んで「天下祭」として全国に名声をはせ、江戸っ子の誇りとなった。神田明神の氏子各町では、山車や屋台を競って作り、附祭の趣向を凝らした。

（三）祭禮番附

神田大明神の祭禮日が近づくると、その年の神輿の行列立てや山車・附祭にどのようなものが出されるかを予報した瓦版の『神田大明神御祭禮番附』が売り出されるようになった。予報であるため、実際の行列立てとは若干異なることもあったが、当時の神田祭の様子を窺う貴重な記録となっている。

文政一二（一八二九）年丑年九月一五日の『神田大明神御祭禮番附』には、一番…大伝馬町・諫鼓鶏の山車、二番…大伝馬町・御幣持ち猿の山車、三番…旅籠町一丁目・翁の山車、四番…旅籠町二丁目・和布刈り竜神の山車、五番…鍋町・武蔵野の山車、六番…通新石町・武蔵野の山車、七番…須田町一丁目・牡丹の山車、八番…須田町二丁目・武蔵野の山車、九番…連雀町・岩組牡丹の山車、一〇番…三河町一丁目・武蔵野の山車、御神輿一の宮・二の宮行列立て、一一番…豊嶋町・武蔵野の山車、湯島町・武蔵野の山車、金沢町・田村麿の山車、（附祭）藤棚の曳き物、一二番…岩井町・筆と軍扇の山車、（附祭）菊慈童の学び、一三番…橋本町一丁目・二見ヶ浦の山車、一四番…橋本町二丁目・石台牡丹の山車、一五番…佐久間町一丁目・松竹梅の山車、佐久間町二丁目・珊瑚樹の山車、一六番…佐久間町三丁目四丁目・武蔵野の山車、富松町・猩々の山車、（附祭）静と忠信の曳き屋台、一七番…久右衛門町・日の出に松の山車、一八番…田町一丁目・鉢に稲穂の山車、一九番…田町二丁目・武蔵野の山車、（附祭）後の月見の学び、三番叟の踊り、曳き屋台、二〇番…永富町・龍神の山車、（附祭）岩に大蛸の曳き物、二一番…堅大工町・岩台牡丹の山車、（附祭）拍子舞名草の学び、二二番…蠟燭町・関口町・松と船の山車、（附祭）嵐山桜川遊覧の学び、二三番…明神西町・大国主神の山車、二四番…新銀町・武蔵野の山車、二五

番…新石町一丁目・岩石松竹梅の山車、(附祭) 天岩戸管弦の学び、二六番…新革屋町・弁財天の山車、(附祭) 福祿寿の曳き物、二七番…鍛冶町一二丁目…小鍛冶の山車、(附祭) 寿根元草摺踊りの学び、二八番…元乗物町・石台牡丹の山車、二九番…横大工町・武蔵野の山車、(附祭) 十三夜月見の学び、三〇番…雉子町・岩と桜の山車、(附祭) 高砂子丹前の学び、三一番…三河町四丁目・武内宿禰の山車、(附祭) 神功皇后三韓攻め凱旋の学び、三二番…明神下御台所町・武蔵野の山車、(附祭) 義経螢狩りの学び、三三番…皆川町一二丁目・汐汲みの山車、(附祭) 浜松風汐汲みの学び、三四番…塗師町・武蔵野の山車、三五番…白壁町・武蔵野の山車、三六番…松田町・武蔵野の山車が挙げられている⁽⁸⁾。この文政一二年の祭禮番附は、化成文化の時代で最も神田明神御祭禮が盛んであった時代である。この年の三月に江戸の神田方面で大火があり、「武蔵野の山車」という間に合わせの山車が一四台あることから、武蔵野の山車を出した町は三月の大火で山車を焼失したものと考えられる⁽⁹⁾。

天保二(一八三一)年卯年九月一五日の『神田大明神御祭禮番附』には、一番…大伝馬町・諫鼓鶏の山車、二番…大伝馬町・御幣持ち猿の山車、三番…旅籠町一丁目・翁の山車、(附祭) 能狂言丹前の学び、踊り女と供所作の浄瑠璃の曳き屋台、四番…旅籠町二丁目・和布刈り竜神の山車、五番…鍋町・蓬萊の山車、(附祭) 寿女夫万歳の学び、曳き屋台、六番…通新石町・安宅松の山車、(附祭) 隈取安宅松の学び、長唄曳き屋台、七番…須田町一丁目・住吉明神の山車、(附祭) 大江山凱陣の学び、長唄曳き屋台、八番…須田町二丁目・岩組と関羽の山車、(附祭) 牡丹に獅子の造り物、九番…連雀町・岩組牡丹の山車、(附祭) 大伴黒主茵独の学び、一〇番…三河町一丁目・石崖牡丹の山車、(附祭) 汐汲みの学び、長唄屋台、御神輿一の宮・二の宮の行列立て、一一番…豊嶋町・武蔵野の山車、湯島町・武蔵野の山車、金沢町・田村麿の山車、(附祭) 豊高砂磯辺磯台の学び、女踊りの屋台、一二番…岩井町・武蔵野の山車、一三番…橋本町一丁目・二見ヶ浦の山車、(附祭) 拍子舞の学び、一四番…橋本町二丁目・浦島の山車、(附祭) 唐人管弦の学び、一五番…佐久間町一丁目・玉に釣針の山車、(附祭) 玉とり姫人形の曳き屋台、佐久間町二丁目・大蜘蛛の山車、(附祭) 蜘蛛の拍子舞、長唄女と子供、踊り曳き屋台、一六番…佐久間町三丁目四丁目・浦島の山車、(附祭) 龍宮管弦の学び、富松町・武蔵野の山車、一七番…久右衛門町・大手桜の立木、鳥居の山車、(附祭) 三ヶの津物見の学び、一八番…田町一丁目・稲穂の蝶の山車、一九番…田町二丁目・武蔵野の山車、二〇番…永富町・龍神の山車、二一番…堅大工町・武蔵野の山車、一二番…蠟燭町・関口町・岩に牡丹の山車、二三番…明神西町・大

国主神の山車、二四番…新銀町・鶴ヶ岡鳥居の山車、二五番…新石町一丁目・石崖と牡丹の山車、二六番…新草屋町・花龍と牡丹の山車、二七番…鍛冶町一二丁目…小鍛冶と狐の山車、二八番…元乗物町・玉手箱と亀の山車、(附祭) 浦島太郎の学び、二九番…横大工町・岩と松竹梅の山車、三〇番…雉子町・桜と雉子の山車、三一番…三河町四丁目・武蔵野の山車、三二番…明神下御台所町・武蔵野の山車、三三番…皆川町一二丁目・武蔵野の山車、三四番…塗師町・武蔵野の山車、三五番…白壁町・恵比寿の山車、(附祭) 鳥の万灯の学び、三六番…松田町・武蔵野の山車が挙げられている(10)。

この天保二年の祭禮番附にも武蔵野の山車が一一台出されている。また、七番の須田町一丁目の附祭に「大江山凱陣の学び」がある。「学び」とは仮装行列を意味する。「大江山凱陣の学び」は『江戸名所図会』巻五の「神田明神祭禮」の図として掲載されている(11)。

(四) 『東都歳時記』にみる天保年間の神田祭

天保九(一八三八)年に齊藤幸成によって刊行された『東都歳時記』の神田祭の記述について紹介しておく。

九月一四日は御祭禮の前日で、通称宵宮という。この日は「ねり」といって御祭禮関係者が勢揃いをして歌い踊りながら町を練り歩く。これをみようととして群衆がつかける。町々の家や武家屋敷でも、軒に幕を張り、各家自慢の屏風などを飾り、花を生け、客を饗応し、町は騒然となる。また、軒提灯をつけ、大幟を立て、神酒所を造り、酒樽を積み上げ、山車を飾りつけて、祭りの雰囲気はいよいよ高まる。

神社では、神主は束帯、社家は狩衣で、布衣・白丁を引き具して、未の刻(午後二時)社殿において祝詞を奏上、神樂が奏される。その頃になると社頭には参詣人が群がってくる。

御祭禮当日の一五日、丑の刻(午前二時)浅草日輪寺の僧たちが神前において読経をする。これは平将門公の霊を慰めるためのものである。虎の刻(午前四時)になると、各町の山車をはじめ行列参加者は桜の馬場(湯島聖堂西側)に集まってくる。町々の往来は人止めになり、みだりに通行することが禁じられる。

六つ時(午前六時)、行列は定められた順序によって出発する。山車の多くは牛が曳くので、約一〇〇頭の牛、五〇頭の馬のいななき

が明け方の町に響き渡るとともに勢揃いした三六台の山車が順番に繰り出す。

行列は、御茶の水河岸通り↓昌平坂↓本郷竹町↓本郷通り↓御本社前（神田明神前、ここで神輿二社が行列に加わる）↓湯島の坂↓旅籠町から仲町と加賀原の間を筋違御門に入る↓須田町↓鍋町↓鍋町西横丁↓横大工町↓三河町三丁目↓三河町一丁目の河岸（鎌倉河岸）↓神田橋↓御堀端通り↓本多家屋敷に沿って護持院ヶ原北側↓飯田町↓俎橋↓九段中坂↓田安門から御曲輪内に入る（将軍上覧所）↓竹橋御門↓一ツ橋御館前（神田明神の旧地のため、神輿は御館内に入り奉幣を行う）↓大手前↓酒井家・小笠原家屋敷に沿って松平越州侯屋敷から常盤橋に出る。この頃、晩景に及び、山車等が群を乱して退散する。神輿二社は行列を揃えて、本町通り↓石町↓鉄炮町↓大伝馬町↓堀留町↓小網町↓小舟町河岸から瀬戸物町↓伊勢町河岸↓本船町↓小田原町河岸から日本橋↓通り一丁目から京橋↓北詰東の河岸↓炭町↓本材木町七丁目↓一丁目河岸↓四日市↓日本橋↓室町一丁目↓通り町↓筋違御門↓昌平橋↓湯島の河岸↓聖堂脇の坂↓本社に還御する（12）。

（五）『神田明神祭禮絵巻』にみる文久年間の神田祭

現在、神田神社には『神田明神祭禮絵巻』三巻が伝わっている。この絵巻は、昭和初期に博文館社長の大橋新太郎から神社へ寄進されたものである。絵巻は、幕府の御用絵師・住吉内記広定の作で、巻末の押紙から一ツ橋家の求めに応じて文久年間（一八六一〜一八六四）に描かれたものであろうと推測されている。絵巻に描かれた山車・附祭、神輿行列の一部を紹介しておきたい。

〈先頭行列立て（山車・附祭部分のみ抜粋）〉一番：大伝馬町「山車 諫鼓鶏」（牛二頭、曳き手五〇人以上、太鼓打ち唐人二人乗り）、二番：南伝馬町「山車 御幣持ち猿」（牛二頭、曳き手五六人以上、太鼓打ち唐人二人乗り）、三番：旅籠町一丁目「山車 松に翁」（牛二頭、曳き手三五人以上、囃子方六人乗り）、四番：旅籠町二丁目「山車 和布刈り竜神」（牛一頭、曳き手二五人以上、囃子方六人乗り）、五番：鍋町「山車 兜に梅」（牛二頭、曳き手三六人以上、囃子方九人乗り）、六番：通新石町「山車 花籠」（牛一頭、曳き手三一人以上、囃子方六人乗り）、〔附祭〕大神楽行列四四人、お宮と牡丹に獅子の山（囃子方とも）二九人以上、七番：須田町一丁目「山車 武蔵野」（牛二頭、曳き手三〇人以上、囃子方六人乗り）、八番：須田町二丁目「山車 武蔵野」（牛一頭、曳き手一人以上、囃子

方二人乗り)、九番・連雀町「山車 武蔵野」(牛一頭、曳き手二人以上、囃子方三人乗り)、一〇番・三河町一丁目「山車 僧正坊牛若」(牛二頭、曳き手三五人以上、囃子方四人乗り)、

〈神輿行列立て(神輿部分のみ抜粋)〉「一の宮 神輿」一基(白丁一四〇人以上)、二の宮 神輿」一基(白丁一〇〇人以上)、

〈後尾行列立て(山車・附祭部分のみ抜粋)〉「一番の一・豊嶋町・湯島町・金沢間町」山車 武蔵野と牡丹」(牛二頭、曳き手六人以上、火男踊りと囃子方一三人乗り)、「附祭」老松に兜の曳き物(老若二〇人以上の行列立て)、飾り傘一四組(各種女物売り姿の行列立て)、花籠を負った女二〇人(踊り歩く行列立て)、底抜け屋台に芸妓三〇人くらい(三味線をひき歌い歩く行列立て)、奴ぶり(花毛槍を立て踊り歩くあとに、花駕籠に稚子に乗せた行列立て)、屋根付きの曳き屋台(棟上げの祝幣を立て、中で男女所作言を演じる)底抜け屋台二台(中で音曲を演奏しながら歩く行列立て)、一番の二・金沢町「山車 義経」(牛二頭、曳き手四七人以上、囃子方四人乗り)、「附祭」拍子木を打ち男女老若の伊達踊り、二番の二・岩井町「山車 岩台花籠」(牛二頭、曳き手三六人以上、神楽踊りと囃子方九人乗り)、三番・橋本町一丁目「山車 狸々」(牛一頭、曳き手二三人以上、神楽踊りと囃子方六人乗り)、四番・橋本町二丁目「山車 松竹梅の鉢植え」(牛一頭、曳き手四人、囃子方五人乗り)、五番の一・佐久間町一丁目「山車 素戔鳴命」(牛二頭、曳き手二人以上、狐神楽舞、囃子方七人乗り)、六番の二・佐久間町二丁目「山車 日の出に波」(牛二頭、曳き手二八人以上、囃子方五人乗り)、「附祭」唐人管弦行列立て(四七人以上)、六番の一・佐久間町三・四丁目「山車 浦島太郎」(牛二頭、曳き手三九人以上、囃子方四人乗り)、七番の二・富松町「山車 龍宮城」(牛二頭、曳き手二九人以上、囃子方五人乗り)、八番・田町一丁目「山車 稲穂に蝶」(牛二頭、曳き手一八人以上、おかめの神楽舞、囃子方七人乗り)、九番以下は白描で、番数・町名の記入なし、二九番のみ彩色記載)、二九番・横大工町「山車 頼光」(牛二頭、曳き手四二人以上、囃子方五人乗り)⁽¹³⁾。

山車は、牛二頭と大人数の曳き手で巡幸を行っていたことがわかる。

(六) 幕末期の神田祭

黒船の来航によって、攘夷派と開国派に分かれて対立し、尊王思想が台頭する中で幕藩体制は急速に衰退した。

安政二（一八五五）年、都合により江戸城内への御城内入りは取り止めになった。

安政四年、御城内入りは許可された。

安政六年九月一日、神輿・山車三六番・附祭三ヶ所・練物・御雇祭の太々神楽・こま廻しなどが全て江戸城内に入り、一四第将軍家茂が上覧する。

文久三（一八六三）年は祭禮一切禁止された。

慶応三（一八六七）年は、御城内入りは取り止めになり、神輿のみ氏子の町々を巡った。

なお、江戸期の神田祭の研究には、民俗学の福原敏男の研究⁽¹⁴⁾、神道学の岸川雅範の研究⁽¹⁵⁾、都市と祭祀研究会⁽¹⁶⁾による研究など、研究の蓄積がなされている。

三、明治期から戦前・戦中までの神田祭

明治維新から第二次世界大戦前までの神田祭について概観する。

(一) 明治初年の神田神社

慶応三（一八六七）年、将軍・徳川慶喜が大政奉還し、明治時代が幕を明けた。明治政府は、王政復古の大号令のもと、宗教政策の見直しを推し進め、神社・寺院においても大きな変革を迫られることになった。

慶応四年は、後に明治元（一八六八）年に改められた。その年の三月一三日に神祇官復興の布告が太政官から発せられ、神祇官が復興された。そして、同年三月二八日に神仏分離の布告、いわゆる神仏判然令が太政官から発せられた。この神仏判然令によって、神社

は仏教との分離を進め、それは次第に廃仏棄釈へと発展した。こうした神仏分離は、神田明神においては、社名を神田明神から神田神社へ改め、祭礼の際に日輪寺の僧による読経が廃止された。さらに、江戸時代を通じて神主の座を世襲した芝崎氏が辞任し、神田の主神である牛頭天王三社は須賀神社（のちの江戸神社）と八雲神社へ改称することになった。

明治五年、当時の宗教行政を司った教部省から、神田神社の祭神・平将門公霊に対して、異議が伝えられた。それに対し、神田神社の祠官・本居豊穎は、明治六年二月一七日に、東京府知事・大久保一翁宛に、平将門公霊を境内の別殿（摂社）に遷して祀る願書を提出した。教部省はその案に対しても反対意見を表明したものの、明治七年二月一三日付で、東京府知事は本居豊穎の許可願を認めた。そのため、神田神社は、早速、将門神社の建築に着手し、平将門公霊を境内の大国主神社へ仮遷座した。そして、将門神社は明治一年一月に竣工し、遷座祭が行われた。

その一方で、明治七年三月、教部省から本居豊穎に呼び出しがあり、神田神社に掲げている「神田大明神」の額を取り外すようにとの厳命が下された。それに対して、本居豊穎は諸方へ陳情した結果、太政大臣三条実美が染筆した「神田明神」の額を下賜する形に落着いた。また、明治七年八月一七日に、少彦名命の分霊が大洗磯崎神社から神田神社へ遷座した。旧来の平将門公霊を摂社に遷し、新たに少彦名命を神田神社の祭神として迎えた。この勅額と遷座の事件によって神田の氏子たちの感情は悪化した。これに対し、明治天皇は、明治七年九月一九日に蓮沼村への行幸の帰りに急遽、神田神社へ立ち寄り、休息し、御幣物を奉った。神田神社側では、勅免の沙汰があったとしても、朝廷に反逆した平将門公霊に御親拝をいただくのは畏れ多いとして、急遽、別殿に平将門公霊を遷して、明治天皇の行幸を迎えた。明治天皇の行幸に対して、神田の氏子は大いに喜んだという。しかしながら、九月一日に行われる神田神社の御祭禮（神田祭）は以後一〇年間、大々的な祭礼は行われなかった（17）。

当時の神田神社の氏子地は、明治五年に東京府が府内の神社を調査した「氏子町名・同人員調帳」（『東京都神社史料』第五輯）によると、以下の町が挙げられている。

- 一、大手町一〜二丁目、道三町、銭瓶町、永楽町二丁目（以上、氏子五カ町、戸数一二戸、人員三五人）、
- 二、三河町一〜四丁目、同裏町、美土代町一〜四丁目、四軒町、雉子町、佐柄木町、新銀町、関口町、蠟燭町、皆川町、松下町、鎌

倉町、千代田町、永富町、塗師町、新石町、豎大工町、多町一〜二丁目、旭町、連雀町、西今川町（以上、氏子二六カ町、戸数三五五戸、人員一万四〇四七人）、

三、本町一〜四丁目、岩附町、本草屋町、金吹町、本両替町、駿河町、北鞆町、品川町、同裏河岸、本石町一〜四丁目、十軒店、本銀町一〜四丁目、室町一〜三丁目、瀬戸物町、伊勢町、本小田原町、本船町、長浜町、安針町、小舟町一〜三丁目、堀江町一〜四丁目、小網町一〜三丁目、仲町（以上、氏子四一カ町、戸数四〇三九戸、人員二万三三五六人）、

四、鍛冶町、鍋町、須田町、松田町、上白壁町、下白壁町、南乗物町、北乗物町、通新石町、紺屋町、東紺屋町、美倉町、東松下町、元柳原町、富山町、平永町、小柳町、黒門町、柳町、西福田町（以上、氏子二〇カ町、戸数四五七五戸、人員一万八〇三六人）、

五、馬喰町一〜四丁目、橋本町一〜四丁目、江川町、久右衛門町、富松町、豊嶋町一〜三丁目、亀井町、小伝馬上町、東福田町、東今川町、神田材木町、元岩井町、大和町、松枝町、岩本町、東竜閑町（以上、氏子二四カ町、戸数四五一九戸、人員二万四〇二人）、

六、通塩町、横山町一〜三丁目、米沢町一〜三丁目、薬研堀町、吉川町、元柳町、新柳町、橋町一〜四丁目、村松町、久松町、若松町、若松町、菖蒲町（以上、氏子一九カ町、戸数二二五〇戸、人員一万一九三一人）、

七、大伝馬町一〜二丁目、通旅籠町、通油町、元浜町、鉄炮町、大伝馬塩町、小伝馬町一〜三丁目、堀留町一〜三丁目、新大阪町、田所町、弥生町、富沢町、長谷川町、新乗物町、新材木町、葺屋町、堺町、新和泉町、高砂町、浪花町、住吉町、岩代町、芳町、新葺町、元大阪町、松島町、蛸殻町一〜三丁目、小網町四丁目（以上、氏子三一カ町、戸数四六二二戸、人員二万三三三〇人）、

八、神田宮本町、台所町（以上、氏子二カ町、戸数三五四戸、人員一三六六人）、

九、元久右衛門町一〜二丁目、八名川町、餌鳥町（以上、氏子四カ町、戸数二一八戸、人員九四六六人）、

十、佐久間町二〜四丁目、平河町、和泉町（以上、氏子五カ町、戸数二九八戸、人員一五二一人）、

十一、佐久間町一丁目、松永町、花房町、仲町一〜二丁目、花田町、相生町、旅籠町一〜三丁目、末広町、金沢町、田代町、山本町、相富町、栄町、元佐久間町、練堀町、松富町、五軒町（以上、氏子一七カ町、戸数二二〇〇戸、人員九二〇七人⁽¹⁸⁾）

(二) 明治期の神田祭

明治初年に明治政府によって様々な変革を迫られた神田神社であったが、明治期の神田祭の様子はどのようなものであったかを次にみておきたい。

『武江年表』によれば、明治元（一九六八）年は、蔭祭の年に当り、九月一五日の祭日には神田神社への参詣のみが行われた。この年の一〇月一六日には、神田神社へ官幣使の御参向がなされた。

明治二年四月一八日に神田神社神主芝崎氏宅が焼失したが、社頭や末社。社家の家などには焼失を免れた。九月一五日に「神田大明神祭禮」が行われ、晴天の中、五時半に神輿が出御し、夕方の八時半に還御した。巡幸の道筋は、一昨年と変化がなかった。ただし、「町々山車附まつり等これなし」とあり、神輿行列のみ渡御した。

この年の一二月、「外神田類焼」し、神田相生町外十カ町が明治三年の正月中に御用地に召し上げられた。また、鎮火のために、鎮火社（現・台東区秋葉神社）が創建され、社務は神田神社が兼務した。

明治三年九月一五日に「神田大神祭禮」が行われ「山車九輛」が出され、「伎踊り」が催された。この年の神輿の巡幸は、「大学校河岸通りより、本郷竹町、同所一丁目、湯島五丁目、六丁目、四丁目、神田宮本町、湯島一丁目、同横町、台所町、湯島一丁目、同横町左へ、台所町右へ、旅籠町一丁目、金沢町、末広町、松富町、神田仲町、花房町、佐久間町一丁目、鎮火社前より裏手相生町、松永町、東校脇、和泉橋通り、佐久間町二丁目、三丁目河岸、美倉橋を渡り、富松町、豊島町辺、東竜閑町、弁慶橋、大和町、元岩井町、亀井町、橋本町一丁目、馬喰町通り、浅草御門前、吉川町、広小路、米沢町、横山町、塩町、通油町、旅籠町、大伝馬町二丁目より鍛冶町、筋違御門を出て、夜九時還御あり」といったルートで行われた。

明治四年九月一五日に「神田大神祭禮」が行われた。この年の神輿巡幸は、外神田の町々は翌明治五年に巡幸することとし、西神田の町々の巡幸を行った。晴天の中、神輿は早朝に出御し、山車（踊りはなし）は内神田より一四輛出されたが、内神田のみを曳き、「それより神輿とともに神田橋御門に入り、大手のこなたへ出で引き返して、常盤橋御門を出で、南伝馬町まで曳いて、暮時帰る」といったルートで行われた。また、「外神田は湯島横町の辺に俄踊り其の所限り廻りしよし。見物群集す。十六日雨中なれど、例の通り福詣り

とて詣人多かりし」とある。多くの見物人で祭りは賑わい、神田神社へも参拝客で賑わっていたことがわかる。

明治五年六月一五日に本小田原町（魚河岸）で水神を祀り、神輿を修理して御仮屋に安置し、山車一輛を曳き、周辺の町々を巡った。同年九月一五日に「神田大神社祭禮」が行われた。この年から隔年の執行に戻された。神輿の巡幸は、「外神田町々を廻り、美倉橋を渡り、両国橋辺、浜町、堺町、高砂町、難波町、小網町、鉄炮町、小伝馬町辺、神田町々より和泉橋、帰社夜子刻に及ぶ」といったルートで行われた。また、産子町々より山車三五輛、伎踊り台三荷、地走跳も出されて賑わったという。ただし、山車、練り物が多く出されたが、「されど慶応以前のなかばにも足らず」と評されている。

明治六年九月一五日に「神田祭禮」は行われなかった。

そして、先にみたように明治七年以降一〇年間に亘って大々的な神田祭は中止された。

なお、明治初年の神田祭については、岸川雅範の「東京奠都と神田祭―明治初年の神田祭の変遷を素描する―⁽¹⁹⁾」がある。

(三) 明治一七(一八八四)年の神田祭

氏子各町が相談を重ねた結果、明治一七年九月一五日を期して、山車の祭りを盛大に行うことになった。この年は四六番の山車が出された。四六番の山車の順序立ては次の通りである。

一番・大伝馬町「諫鼓鶏」、二番・新石町「戸隠神」、三番・皆川町「武蔵野」、四番・多町一丁目「稻穂」、五番・旭町「竜神」、六番・蠟燭町「盃に樽」、七番・千代田町「弁財天」、八番・美土代町「石台牡丹」、九番・三河町「鞍馬山」、一〇番・堅大工町「飛騨内匠」、一一番・雉子町「雉子」、一二番・新銀町「鶴ヶ岡」、一三番・白壁町「恵比寿」、一四番・神保町「猿田彦」、一五番・錦町「蓬菜」、一六番・福田町「大国主神」、一七番・鍛冶町「小鍛冶」、一八番・紺屋町「珊瑚樹」、一九番・松田町「頼義」、二〇番・通新石町「歳徳神」、二一番・佐柄木町「神日本」、二二番・須田町「関羽」、二三番・連雀町「熊坂長範」、二四番・多町二丁目「鍾馗」、二五番・佐久間町「素戔嗚命」、二六番・豊島町「豊玉媛」、二七番・小伝馬町「戸隠神」、二八番・亀井町「浦島」、二九番・小伝馬町「日本武尊」、三〇番・岩本町「日本武尊」、三一番・葉研堀町「桃太郎」、三二番・浜町「獅子子落し」、三三番・竜閑町「竜神」、三四番・元岩井町

「菊慈童」、三五番・大和町「橋弁慶」、三六番・松枝町「日出鶴」、三七番・駿河町ほか四カ所「春日竜神」、三八番・小田原町「弁財天」、三九番・本船町「竜神」、四〇番・相生町「相生の松」、四一番・宮本町「大国主命」、四二番・台所町「鈴」、四三番・松永町「松に日の出」、四四番・山本町「猩々」、四五番・両国柳町「和藤内」、四六番・末広町「徳川家道具」。

江戸城内入りや大名の参加はなかったが、江戸時代に劣らないものであった。しかしながら、台風の襲来によって午後から暴風雨となった。参加者は算を乱して退散し、山車は強風で倒壊するものがあり大半が使えなくなった。また、山車を曳く、曳き牛は三〇余頭が死に至った。この台風によって、全国の死者五三〇人、東京府下の全半壊家屋三二〇〇戸に上る大惨事となった。神田の氏子の間には、この大惨事が平将門公霊を撰社に遷し、新たに少彦名命を迎えたことに対する平将門公の怒りと考える人もいたようであった。

残存した山車は、祭礼の際に神酒所に飾られるのみとなり、維持費の都合で地方へ売却されるものもあった。当時の山車人形で現在でも神田に残されているのは、連雀町の「熊坂長範」と佐柄木町の「神日本」(神武天皇)で、関東大震災と第二次世界大戦での罹災を免れた。この連雀町の一部と佐柄木町の一部は、現在の須田町中部町会に当る。

この明治一七年の神田祭を最後に、多数の山車の巡幸は徐々にみられなくなった。また、電線に張り巡らされて、背の高い山車は巡幸ができなくなった。さらに、例大祭式は昭和二三(一九四八)年まで古式に則り九月一五日に変化はなかったが、台風被害などを契機として、明治二五年から神田祭の時期を、新暦の九月一五日は台風の季節に当るため、新暦の五月一五日に改められた。

明治二〇年頃から氏子各町は山車に代る町神輿を作るようになり、町内の若衆がこれを担ぐようになった。明治二二年の憲法発布奉祝の際に神田から五台の山車が出されたが、氏子各町の神田祭は山車中心の祭りから町神輿中心の祭りへと移行することとなる。

明治二二年九月一四日付の『東京朝日新聞』朝刊によれば、この年の神田祭に出す各町から出す山車の順番は、決定分として、田町一丁目(一番)、旭町(二番)、佐久間町一二丁目(三番)、同三丁目(四番)、青物市場の二本(五番・六番)、神保町(七番)、松枝町大和町元岩井町松永町(八番)、東紺屋町(九番)、大伝馬上町(一〇番)、橘町三丁目(一一番)、米澤町(一二番)、村松町(一三番)、濱町一丁目(一四番)を挙げている。これらの山車は九月一四日の午前七時より神田神社前へ「打揃ふ筈」としている。

なお、この明治二二年に多町大通りを巡幸する山車行列の写真が残されている⁽²⁰⁾。多くの人で賑わう様子がみと取れる。また、明

治末期の氏子町内の一つである連雀町神酒所の飾付の写真、通新石町の山車「歳徳神」の写真、佐柄木町の山車「神日本」の写真が残されている⁽²¹⁾。

(四) 大正期から昭和二〇年の終戦までの神田祭

明治一七(一八八四)年から昭和二〇(一九四五)年までの神田神社における神田祭の記録は、大正一二(一九二三)年の関東大震災と第二次世界大戦の東京大空襲によって一切が焼失している。わずかに残された記録(「神田神社渡御祭執行書留」)から、年代順に変遷をみておきたい。

大正五(一九一六)年五月、六日間にわたり神輿行列渡御を行った。神輿渡御に供奉した猿田彦の写真、神輿境内御仮屋と神輿二社および宮鍵講員が写った写真が残されている⁽²²⁾。

大正七年五月、六日間にわたり神輿行列渡御を行った。当時の神輿渡御は宮神輿二基(「一の宮」「二の宮」)が行列の中心であった。この大正七年の神田祭における樓門前を巡幸する一の宮神輿の写真、御休所で献饌を受ける一の宮神輿・二の宮神輿の写真が残されている⁽²³⁾。

大正九年五月、六日間にわたり神輿行列渡御を行った。

大正一一年五月、四日間にわたり神輿行列渡御を行った。新調された鳳輦形式の宮神輿が渡御した。当時の写真が残されている。

大正一二年九月一日の関東大震災により、神田祭は以後一〇年間中断した。この震災によって、前年に新調された宮神輿は神輿庫もろとも焼失した。また、神田神社社殿その他一切も、焼失した。

その後、神田神社復興会が結成された。神田神社復興会役員には、総裁に男爵の阪谷芳郎(元大蔵大臣)、会長には、星野錫(商工会議所会頭)、常任理事には藤井得三郎(氏子総代)ほか一三人らが就任した。設計監督には、伊東忠太(工学博士)・大江新太郎・佐藤功一(工学博士)が当り、当時としては画期的な鉄骨鉄筋コンクリート造り、屋根銅版瓦二枚重ね本葺き、本体朱塗り、権現造りの社殿の建築を決定した。

昭和四年一月一二日に地鎮祭、同六年六月三日に立柱祭、同六年一〇月五日に上棟祭、同九年五月七日竣成遷座となった。建築費用は金八八万円余りで、全て氏子・崇敬者の浄財によるものであった。約四万三〇〇〇人の現場作業員を動員して、神殿・幣殿・拝殿・神饌所・渡廊下・神庫・前方玉垣・地下道が作られた。神門その他の建築を行う予定であったが、戦時体制への時局の変化によって延期された。

昭和七年五月、六日間にわたり神輿行列渡御を行った。

昭和九年五月、五日間にわたり神輿行列渡御を行った。この年、先述の通り、神田神社の社殿が復興し、宮神輿も一基、鳳輦形式のものが作られた。

昭和一一年五月、六日間にわたり神輿行列渡御を行った。

昭和一五年五月、五日間にわたり神輿行列渡御を行った。

昭和一七年五月、五日間にわたり神輿行列渡御を行った。

以後、第二次世界大戦のため、昭和二七年まで神田祭は一〇年間中断した。

昭和九年に作られた宮神輿は戦災によって焼失し、町神輿の大半も焼失した。

四、戦後の神田祭

昭和二〇（一九四五）年三月一〇日の東京大空襲によって、神田神社の氏子地の多くが焦土と化し、神田神社は社務所・神輿庫・祭器庫・附属殿社は焼失したが、本殿は鉄筋コンクリート造りのため、焼失は免れた。一望の焦土の中、湯島台の上に神田神社の朱塗りの本殿が厳然と不動の威容を示す姿は、氏子の人々に復興への勇気を与えたという⁽²⁴⁾。

(一) 終戦直後の動き

終戦の翌年の昭和二一（一九四六）年、神田神社宮司に大鳥居吾朗氏が就任した。同年九月一四日に神田区主催の復興祭（神田復興祭）が行われた。

昭和二二年頃、神田神社は賑わい始めた。五月になると、疎開していた町神輿を引き取って神酒所を作り町の祭りをを行うところが次第に出始めた。

昭和二三年、神田神社の例大祭の祭日が九月一五日から五月一五日に改められた。この頃から各氏子町内は町神輿を復興した。

昭和二五年五月一五日、神田神社の例大祭を執行した。例大祭当日、氏子総代会と評議員会を開き、昭和二七年から神幸祭を復興することを決定した。併せて、鳳輦一基・祭礼道具を氏子有志の協賛金をもって新調することを決めた。

昭和二六年四月三日、宗教法人法が公布された。宗教法人法は新憲法のもとで信教の自由と政教分離の精神に基づいたもので、全国の宗教団体はこれによって運営することとなった。神田神社においても、宗教法人法に基づき「宗教法人神田神社規則」を制定した。

その後、境内復興も行われ、手水舎、神楽殿、隨身門、脇門、廻廊、社務所、鳳輦庫、氏子神輿庫、裏参道、明神会館などが順次建築された。

（二）昭和二七（一九五二）年の神田祭

昭和二七年五月、戦後第一回の神幸祭⁽²⁵⁾が三日間行われた。神幸祭の行列はこの年完成した「一の宮」の鳳輦を中心とした平安朝風の優雅なものであった。また、この年の神田祭から各氏子町内の町神輿が神田神社へ連合宮入を行うようになった。

『神田明神史考』には、昭和二七年の神田祭について、神幸祭の日程、行列立て、例大祭式次第、巡行氏子地区および町名表を掲載している⁽²⁶⁾。ここでは、神幸祭の日程と巡行氏子地区および町名表をみておきたい。

昭和二七年の神幸祭は、五月一日（日）一四時・前斎神事、一五時・御用具修祓式、一九時・御神璽遷座祭、〈神幸第一日〉五月二日（月）六時・御朝饗、七時・御発輦祭、一〇時三〇分・旧蹟地祭（将門塚）、正午・御昼饗、一六時三〇分・還御、一七時・御夕饗、〈神幸第二日〉五月一三日（火）六時・御朝饗、七時・御発輦、正午・昼御饗、一七時三〇分・御飯屋着御（両国）、一八時・御飯屋祭、

〈神幸第三日〉五月一四日(水) 六時・御朝饗、七時三〇分・御仮屋出御、正午・御昼饗、一六時半・還御、一七時・還御祭、二〇時・御神靈還座祭の次第で行われた。そして、五月一五日(木)に例大祭が執行された。

この神幸祭で巡幸した氏子地区・町内は、以下の計一〇八カ町である。

〈神田第一地区〉神保町一丁目、猿楽町一・二丁目、錦町二丁目、小川町一丁目(南)、小川町三丁目(南)、小川町一・二丁目、小川町三丁目(北)、錦町三丁目、〈神田第二地区〉多町一丁目、多町二丁目、旭町、鎌倉町、司町一・二丁目、美土代町、須田町一丁目(南)、須田町一丁目、須田町一丁目(北)、鍛冶町三丁目、淡路町一丁目、淡路町二丁目、〈神田第三地区〉宮本町、湯島三丁目、台所町、同朋町、五軒町、末広町、金沢町、旅籠町一・二・三丁目、花房町、仲町一・二丁目、花田町、田代町、山本町(神田市場)、松富町、栄町、元佐久間町、〈神田第四地区〉富山町、紺屋町(北)、紺屋町(南)、東紺屋町、材木町、亀井町、東福田町、東今川町、北乗物町、美倉町、西福田町、鍛冶町一丁目、鍛冶町二丁目、〈神田第五地区〉東神田、豊島町、岩本町、松枝町、大和町、元岩井町、須田町二丁目、〈神田第六地区〉練塀町、松永町、下谷練塀町、佐久間町一丁目、佐久間町二丁目、平河町、元久右衛門町一丁目、元久右衛門町二丁目、佐久間町三丁目、佐久間町四丁目、和泉町、八名川町。

〈日本橋第一地区〉本石町、室町一丁目、室町二丁目、室町三丁目、室町四丁目、本町一丁目、本町二丁目、本町三丁目(東)、本町三丁目(西)、本町四丁目(東)、本町四丁目(西)、〈日本橋第二地区〉小伝馬町一丁目、小伝馬町二丁目、小伝馬町三丁目、大伝馬町一丁目、大伝馬町二丁目、大伝馬町三丁目、小舟町一・二丁目、富沢町、人形町三丁目、〈日本橋第三地区〉人形町一丁目、蛸殻町二丁目(南)、蛸殻町二丁目(中)、蛸殻町二丁目(北)、蛸殻町三・四丁目、蛸殻町四丁目、〈日本橋第四地区〉馬喰町一丁目、馬喰町二丁目、馬喰町三丁目、馬喰町四丁目、横山町、橋町、両国、矢ノ倉、〈日本橋第五地区〉村松町、久松町(南)、久松町(北)、浜町一丁目、浜町二丁目(金座)、浜町二丁目(親合)、浜町二丁目、浜町二丁目(元徳)、浜町二丁目(スタンドクラブ)、浜町三丁目(東)、浜町三丁目(西)、中洲町。

〈麴町地区〉大手町一・二丁目、丸ノ内一丁目。

以上のように、昭和二七年の神田祭は、神幸祭は五月一二日(月)〜一四日(水)までの三日間行い、五月一五日(木)に町神輿連

合宮入と例大祭を行った。神幸祭は平日に三日間、町神輿連合宮入も平日で例大祭当日に行ったことがわかる。

(三) 昭和二九(一九五四)年〜平成二(一九九〇)年の神田祭

次に、『神田明神史考』の記述を中心に、昭和二九年から平成二年までの神田祭の変遷を概観する。

昭和二九年、神田祭が実施され、戦後第二回目の神幸祭が行われた。日程は、神幸祭を五月二日(水)〜一四日(金)の三日間、町神輿連合宮入と例大祭を五月一五日(土)に行った。この段階では例大祭と町神輿連合宮入を同じ日に行っていることがわかる。

昭和三十一年は、神幸祭を五月二日(土)〜一四日(月)の三日間、町神輿連合宮入は五月一四日(月)を予定していたが雨で中止となった。例大祭は五月一五日(火)に執行された。町神輿連合宮入は雨で中止となったものの、この年から例大祭と町神輿連合宮入の日程を分けて行うことを計画していたことがわかる。

昭和三十三年、神幸祭は五月一三日(火)〜一五日(木)の三日間行い、町神輿連合宮入を五月二日(月)に計画していた。しかしながら、雨でこの年も中止となり、例大祭は五月一六日(金)に行った。

昭和三五年、神幸祭は五月一二日(木)〜一四日(土)の三日間、町神輿連合宮入は五月一五日(日)、例大祭は五月一六日(月)に行った。この年から町神輿連合宮入と例大祭は別の日に行われるようになった。

昭和三六年〜昭和三九年まで神田神社境内に明神会館を建設のため、中断された。

昭和四〇年、神幸祭は五月二日(日)、三日(月)の二日間に実施した。町神輿連合宮入は五月二日(日)に行い、例大祭は五月一五日(土)に執行した。この年から神幸祭は都心部の交通事情により、五月連休中の二日間に短縮された。

昭和四三年、神幸祭は五月三日(祝)と五日(日)の二日間に行った。間の四日は中休みとなった。町神輿連合宮入は五月三日(祝)に行い、例大祭は五月一五日(水)に実施した。この年は明治維新百年の年に当り、当時、國學院大學日本文化研究所の研究員であった藪田稔によって、神田祭の調査がなされた⁽²⁷⁾。なお、同年二月八日、NHKの要請により、「ふるさとの歌まつり東京編」に鳥越神社大神輿と共に、神田神社の氏子・鍛冶町二丁目町会の大小神輿が出演した⁽²⁸⁾。

昭和四五年、神幸祭は豪雨のため中止となったが、町神輿連合宮入を五月五日（祝）に、例大祭を五月一五日（木）に執行した。
昭和四七年、神幸祭を五月五日（祝）と七日（日）の二日間（六日は中休み）、町神輿連合宮入は五月七日（日）、例大祭は五月一五日（月）に行った。

昭和四八年、昭和天皇御即位五〇年の記念事業として、隋神門の再建が企図され、一月一九日に神門建設奉賛会を結成した。隋神門は、総檜造り・二階建て・屋根銅版板瓦葺きで、外廻りに朱雀・白虎・清龍・玄武、内側に大己貴命の神話を具象化した彫刻を配し、正面左右に隋神像一对、内面に神馬一对を配置し、大鳥居吾朗宮司の筆による掲額を掲げた。建築の予算は三億円で、奉賛会役員には、会長に廣瀬太吉、副会長に藤井得三郎らが就任した。

昭和四九年は、神田祭は神田神社の隋神門建築のため延期となり、翌昭和五〇年に実施した。

昭和五〇年、神幸祭は五月九日（金）、一〇日（土）の二日間、町神輿連合宮入は五月二一日（日）、例大祭は五月一五日（木）に行った。同年、隋神門の再建工事が進み、四月二九日に立柱式、九月四日に上棟式、一月二七日に竣工修祓式が執行された。そして、昭和五一年の元旦零時をもって開門され、多数の初詣の人たちが参入した。なお、昭和五〇年二月四日、神田神社の氏子・鍛冶町二丁目町会の大神輿がフランス「ニースのカーニバル」に参加した⁽²⁹⁾。

昭和五二年、神田祭は神田神社隋神門竣工を奉祝記念して行われた。神幸祭は五月一四日（土）の一日間、町神輿連合宮入は五月一五日（日）、例大祭は五月一六日（月）に実施した。この年から、交通事情の悪化により、神幸祭の渡御は例大祭前の土曜日一日間に改め、町神輿の連合宮入は神幸祭の翌日の日曜日に改められた。

昭和五四年、神幸祭は五月一二日（土）、町神輿連合宮入は五月一三日（日）、例大祭は五月一五日（火）に行われた。

昭和五六年、神幸祭は五月九日（土）、町神輿連合宮入は五月一〇日（日）、例大祭は五月一五日（金）に行われた。

昭和五七年、大鳥居吾朗宮司の逝去により、今永利男氏が宮司に就任した。多年の懸案であった平将門公霊を正式に神田神社の祭神に復座する運動に着手した。

昭和五八年、神幸祭は五月一四日（土）、町神輿連合宮入は五月一五日（日）、例大祭は五月一六日（月）に行われた。

昭和五九年、平親王将門公霊を三の宮平将門命として複座奉祭した。盛大な遷座祭を執行するとともに、三の宮鳳輦の調整と鳳輦庫の建設に着手した。氏子の募金も進み、屋形造りの鳳輦一基（宮惣・作）が完成した。

昭和六〇年は、昭和天皇の御即位六〇年奉祝記念の年に当り、神幸祭は五月一日（土）、町神輿連合宮入は五月二日（日）、例大祭は五月十五日（水）に行われた。『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集』には、「氏子町内神輿・山車の宮入」の写真として、神田松枝町会の「羽衣」山車とともに、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の宮入の写真が掲載されている⁽³⁰⁾。

昭和六二年は、三の宮平将門神輿・神輿復興奉祝記念の年に当り、神幸祭は五月九日（土）、町神輿連合宮入は五月一日（日）、例大祭は五月十五日（金）に行われた。神幸祭では、三体（一の宮・二の宮・三の宮）の鳳輦・神輿が氏子の町々を渡御した。大祭後の五月二〇日、今永利男宮司は急逝された。同年六月、大鳥居信史氏が宮司に就任した。

平成元年は、昭和天皇が崩御されたため延期となった。

（四）平成二（一九九〇）年の神田祭

平成二年は、天皇陛下御即位奉祝・平将門公神忌一〇五〇周年記念の年に当った。それを記念して、諫鼓鶏の山車を新調し、祭神の平将門公の縁により、福島県相馬から騎馬武者七騎を招いて、神幸祭行列に加わるなど盛大に実施された。この年は、神幸祭は五月二日（土）、町神輿連合宮入は五月三日（日）、例大祭は五月五日（火）に行われた。詳細は『神田明神史考』に掲載されている。ここでは神幸祭の日程、氏子各町神輿の連合宮入の箇所をみておきたい。

神幸祭は、五月一〇日（木）一五時・前斎神事、一七時・御用具修祓式、一八時三〇分・神璽遷座祭、五月一二日（土）七時二〇分・御朝饗、七時二〇分・発輦祭、九時三〇分・塚前祭（将門塚）、一二時二〇分・御仮屋着御（両国）、一二時三〇分・御昼饗、一二時三五分・御仮屋祭、一八時御即位奉祝記念行列、一九時一〇分・還御、一九時二〇分・御夕饗、一九時二〇分・着輦祭、二一時・神璽遷座祭の日程で行われた。

氏子各町神輿の連合宮入は、五月一三日（日）は、九時・外神田地区連合（大神輿一・小神輿八）、一〇時・千代田区東部地区連合

(大神輿五・小神輿一・山車一)、一〇時四〇分…神保町・猿楽町・錦町・小川町連合(大神輿四・小神輿四)、一一時三〇分…中神田地区連合(大神輿一三、小神輿九)、一三時二〇分…神田駅東地区連合(大神輿三)、一三時四五分…秋葉原東部地区連合(大神輿四・小神輿五)といった内容で行われた。この年は、神田青果市場の移転によって、江戸神社大神輿の宮入はなかったが、宮入終了後に奉祝稚児行列(一三〇人)が神社付近を巡り、一七時に神田神社へ昇殿参拝した。

表千家家元による献茶式は五月一四日(月)に行われ、氏子総代ほか約三〇〇人が参列した。例大祭は五月一五日(火)に氏子総代ほか約五五〇人が参列して行われた。

平成二年の氏子地区町会は、(麴町地区)大手・丸の内町会、(神保町・猿楽町地区)神保町一丁目町会・猿楽町町会、(神田公園一地区)錦町二丁目町会・錦町三丁目町会・錦町三丁目第一町会、小川町一丁目南部町会、小川町二丁目南部町会、小川町三丁目南部町会、小川町三丁目西町会、小川町北一丁目町会、小川町北二丁目町会、小川町北三町会、(神田公園二地区)美土代町町会、司一町会、司町二丁目町会、内神田鎌倉町会、内神田旭町町会、多町一丁目町会、多町二丁目町会、鍛冶三町会、(万世橋一地区)淡路町一丁目町会、淡路町二丁目町会、須田町一丁目南部町会、須田町中部町会、須田町北部町会、(万世橋二地区)外神田一丁目万世橋会、外神田旅籠町会、宮本町会、神台会、外神田同朋会、外神田三丁目金沢会、外神田三丁目末広会、外神田四丁目田代会、外神田四丁目松富会、外神田五丁目栄町会、外神田五丁目元佐久町会、外神田六丁目町会、湯島一三会、(神田駅東地区)鍛冶町一丁目町会、鍛冶町二丁目町会、昭和町会、北乗物町町会、紺屋町(南)町会、紺屋町北部町会、富山町町会、須田町二丁目町会、(岩本町東神田地区)岩本町三丁目町会、岩本二松枝町会、岩本町二丁目岩井会、岩本町二丁目大和町会、岩本町二丁目東紺町会、岩本町一丁目町会、東神田町会、東神田豊島町会、(秋葉原東部地区)佐久間町一丁目町会、佐久二平河町会、佐久間町三丁目町会、佐久間町四丁目町会、東神田三丁目町会、和泉町町会、松永町町会、練塀町町会、秋葉原町会、(日本橋一地区)本石町町会、室町一丁目町会、室町二丁目町会、室町三丁目町会、室町四丁目町会、本町一丁目町会、本町二丁目自治協会、本町三東町会、本町三西町会、本町四丁目東町会、本町四丁目西町会、(日本橋二地区)大伝馬町一の部町会、大伝馬町二の部町会、大伝馬町三の部町会、小伝馬町一の部町会、小伝馬町二の部町会、小伝馬町三の部町会、小舟町町会、富沢町町会、人形町三丁目東町会、(日本橋三地区)人形町一丁目町会、蛸一町会自衛会、蛸殻町一丁目共和会、

蛸殻町東部町会、人形町二丁目三の部町会、(日本橋四地区)馬喰町一丁目一の部町会、馬喰町一丁目二の部町会、馬喰町一丁目三の部町会、馬喰町二丁目町会、横山町町会、東日本橋三丁目町会、東日本橋二丁目町会、東日本橋一丁目矢の倉町会、(日本橋五地区)東日本橋一丁目村松町会、久松町町会、浜町一丁目町会、浜二金座町会、浜二親合町会、浜町二丁目西部町会、浜二町会、浜三東部町会、浜三西部町会、中洲町会、である。

平成二年の次に行われたのは、松平誠が調査を実施した平成四年の神田祭である。

まとめ

神田祭は神田神社(神田明神)の創建以来、祭りの構成を変化させながら、あるいは途中で中断を余儀なくされながらも、今日まで連綿と受け継がれてきたことがわかる。

神田神社の創建当時の祭禮の様子は不明であるが、大永四(一五二四)年は神事能を中心とした祭りであり、慶長八(一六〇三)年の江戸開府以前は舟祭りが行われた。神田神社自体も芝崎村(現在の大手町・将門塚付近)から駿河台へ遷り、元和二(一六一六)年に湯島台の現在地(千代田区外神田)に鎮座した。天和元(一六八一)年から神田祭は隔年で行われるようになり、神輿の行列立ての渡御と、氏子各町の出す山車・練り物・附祭が神輿の前後を供奉するという形が整ってきた。元禄元(一六八八)年九月に初めて、江戸城内に神田明神御祭禮の行列が入り、宝永二(一七〇五)年には将軍・徳川綱吉自らが祭りを上覧した。こうして神田祭は「天下祭」として知られるようになり、氏子各町は競って山車や附祭などの趣向を凝らした。文政一二(一八二九)年と天保二(一八三一)年の『神田大明神御祭禮番附』には、三六番の山車が掲載されている。しかしながら、安政六(一八五九)年の江戸城内への城内入りを最後に天下祭は終焉を迎える。

明治期に入ると、新政府の朝敵・平将門公霊を祀る神田神社への要請が強く、明治七(一八七四)年平将門公の霊を境内摂社へ遷し、新たに少彦名命を祭神に迎えるなどの変革を迫られ氏子は動揺した。明治七年を境に、神田祭の大々的な実施は一〇年間中断された。

そして、明治一七年、山車を四六番出して盛大に神田祭を執行したが、折からの台風によって、山車等が大きな被害を蒙った。これ以後、山車を中心とした祭りは終焉を迎える。また、神田祭の祭日は、台風の時期を避け、五月一五日に変更となった。そして、明治二〇年頃から各氏子町内では山車に代って町神輿が作られ、神田祭で担ぐようになった。その後、宮神輿の巡幸と各町の町神輿の巡幸によって祭りを構成したが、関東大震災、第二次世界大戦の影響でそれぞれ一〇年間、中断を余儀なくされ、宮神輿や町神輿も戦災で焼失した。

戦後、神社は神道指令によって、宗教法人法のもと、宗教法人としての道を歩むことになった。昭和二七（一九五二）年に戦後、第一回目の神田祭が行われ、この年完成した鳳輦が四日間かけて氏子町内を巡幸した。また、戦後作られた町神輿を中心に連合宮入が行われた。そして、神幸祭は三日間から二日間、そして一日の巡幸に変化し、連合宮入も日曜日に実施されるようになり、現在の神田祭の姿に至っている。

最後に、神田祭の変遷からみえてきた事実をもとに、社会変動と祭りの関係性捉える上での研究の課題をまとめておきたい。神田神社の創建以来の神田祭の変遷を概観して、興味深いのは社会の大きな変動や事件に対して、祭りがある時期から復活したり、形を変えながらも、盛んになっていることである。

例えば、明治七年で大々的な神田祭が中断され、一〇年振りに行われた明治一七年の神田祭において、江戸時代よりも多い四六番の山車を勢揃いさせたこと、山車の運行が困難になると、新たに町神輿を誕生させ新しい祭りのスタイルを作り上げたこと、さらには関東大震災、第二次世界大戦で繰り返し、中断したにもかかわらず、戦後の昭和二七年には戦後第一回の神田祭を行い、鳳輦による神幸祭のほか、新たに神田神社への町神輿の連合宮入を開始したことなどが挙げられる。近世においても、山車が大火の影響によって焼失した場合などに、「武蔵野の山車」を出して、祭りへの参加を持続した事実も興味深い。

柳川啓一が「祭と現代（さゝよ）」で指摘するように、社会の変化に対する一つのリアクションとして祭りが盛んになっている側面が窺えるのである。

とすると、戦後の神田祭においても、社会の変化に対する一つのリアクションとして祭りが盛んになるといった事実がみられるのであろうか。社会変動と祭りの視点から現代の神田祭を考える上で重要な課題であると考ええる。

そこで、第二部では、これらの研究の課題に留意しながら、実証的なデータに基づき、先行研究で明らかにされてきた事実と照らし合わせながら、戦後の地域社会の変容と神田祭の関係についてみていきたい。

註

- (1) 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年。
- (2) 『神田明神誌』神田明神誌刊行会、昭和六年。
- (3) 前掲『神田明神史考』一一一～一二二頁。
- (4) 前掲『神田明神史考』二一九頁。
- (5) 前掲『神田明神史考』二二〇頁。
- (6) 前掲『神田明神史考』二二〇頁。
- (7) 前掲『神田明神史考』一三三～一三八頁。
- (8) 前掲『神田明神史考』二二四～二二八頁。
- (9) 前掲『神田明神史考』二二九頁。
- (10) 前掲『神田明神史考』二二四～二二八頁。
- (11) 前掲『神田明神史考』二二九頁。
- (12) 前掲『神田明神史考』二二九～二三〇頁。
- (13) 前掲『神田明神史考』二三三～二四一頁。
- (14) 福原敏男『江戸最盛期の神田祭絵巻―文政六年御雇祭と附祭―』渡辺出版、平成二四年。福原敏男『江戸の祭礼屋台と山車絵巻―神田祭と山王祭―』渡辺出版、平成二七年、などの研究がある。
- (15) 岸川雅範「附祭・御雇祭の展開に関する序論―江戸・神田祭に焦点を当てて―」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四七号、明治聖徳記念学会、平成二二年。岸川雅範『江戸天下祭の歴史的展開に関する研究』博士学位申請論文、未刊、平成二四年、など研究がある。
- (16) 都市と祭礼研究会編『天下祭読本―幕末の神田明神祭礼を読み解く』雄山閣出版、平成一九年。都市と祭礼研究会編『江戸天下祭絵巻の世界―うたい おどり ばけり―』岩田書院、平成二三年。
- (17) 前掲『神田明神史考』一四二～一四八頁。

- (18) 前掲『神田明神史考』一七一〜一七五頁。
- (19) 岸川雅範「東京奠都と神田祭―明治初年の神田祭の変遷を素描する―」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四六号、明治聖徳記念学会、平成二二年。
- (20) 『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』神田神社社務所、昭和六〇年。
- (21) 前掲『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』。
- (22) 前掲『神田明神史考』三一八〜三一九頁。
- (23) 前掲『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』。
- (24) 前掲『神田明神史考』二五七頁。
- (25) 旧来の「渡御祭」という名称を「神幸祭」に変更し、隔年実施とした。
- (26) 前掲『神田明神史考』二五八〜二六二頁。
- (27) 藪田稔「祭と都市社会―「天下祭」(神田祭・山王祭)調査報告(一)」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (28) 『鍛冶二一五十年誌』千代田区鍛冶町二丁目町会、平成一五年、三五頁。
- (29) 前掲『鍛冶二一五十年誌』三五頁。
- (30) 前掲『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』。
- (31) 柳川啓一「祭りと現代」『國學院大學日本文化研究所紀要』第三四輯、昭和四五年。

第二部 個別分析篇
―戦後の地域社会の変容と神田祭―

第三章 戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰

第一節 昭和四三年〜平成二五年の神田祭の盛衰

平成二八（二〇一六）年、東京の神田神社（神田明神）が現在地（千代田区外神田）に遷座してから四〇〇年という節目の年を迎えた。神田神社の大祭である神田祭は隔年で行われるが、前年の平成二七年が神田祭の年に当り、遷座四〇〇年の奉祝大祭として盛大に実施された。それに先立つ平成二五年の神田祭は、東日本大震災の影響によって四年振りの開催となったが、氏子町会の神田神社への神輿宮入に際して多くの観客と参加者を動員して行われた。

この神田祭をはじめ、三社祭、祇園祭、天神祭など大都市の伝統的な都市祭りが近年、多くの人たちを動員して盛んに行われている。しかしながら、戦後の都市祭りを対象とした先行研究では大都市の都市祭りを対象とした研究が少なく、また同一の都市祭りを継続的に調査し、経年的変化を追った研究がほとんどないという課題がある。ただし、神田祭は氏子町会全体を対象とした昭和四三（一九六八）年に実施した菌田稔の調査⁽¹⁾、平成四年に実施した松平誠の調査⁽²⁾があり、平成二五年から四五年前と二一年前との実証的な比較が可能である。経年的変化を追うことができる数少ない事例といえる。

そこで、本節では、平成二五年の神田祭（一部、平成二七年の状況も含む）について、昭和四三年、平成四年の調査からの変化を踏まえ、その特徴を実態調査のデータをもとに解明する。この実態調査は、昭和四三年の菌田稔の調査項目をもとに、町会の世帯数、祈禱札の頒布数、神酒所の有無、祭礼の象徴（神輿や山車の数など）、主な行事、役割動員（祭りの組織）、一般動員（祭りの担い手）、祭りの費用（寄付の金額など）、行事変化、祭りの評価、神社イメージについて、平成二五年の神田祭について対象となる町会ごとに把握したものの（巻末の資料篇【資料一】参照）である。このうち、特に、主な行事、一般動員、行事変化に注目しながら、戦後の地域社会の変容によって、町会の神田祭のどの要素が拡大し、どの要素が縮小したのかを解明し、神田祭の盛衰について考察する。そして、こ

の神田祭の（平成二七年の一部事例を含むと）約五〇年の盛衰から現代日本人の伝統的な宗教に対する新しい意味や役割を浮き彫りにして社会変動と宗教の関係を考える一助としたい。

ただし、本節は、神田神社の氏子一〇七町会³⁾のうち平成二五年に神田神社への宮入を実施した神田と日本橋の氏子五二町会と二連合（錦連合・小川町連合）「居住民がいない大手・丸の内町会を除く全ての宮入実施町会」を対象として、平成二五年は宮入を実施しなかった岩本町二丁目岩井会と蠣殻町東部町会の二町会を参考事例として分析したものである。連合地区（神田神社の氏子町会のみ）ごとにみると、神田中央連合…二町会と二連合（錦連合・小川町連合）、中神田十三ヶ町連合…一三町会、外神田連合…一二町会、神田駅東地区連合…六町会、岩本町・東神田地区連合…八町会、秋葉原東部地区連合…五町会、日本橋一・三・四・五地区連合…八町会を対象とした。

一、 菫田稔・松平誠の分析

(一) 菫田稔の分析

菫田稔は、明治維新百年を迎えた昭和四三（一九六八）年の神田祭の調査において、神田神社の氏子町会を巡る神幸祭や町会の神酒所、神輿巡幸の把握など、宗教社会学的な調査を実施した。そして、調査の結果として、以下の三つの特徴を明らかにしている。

【特徴一】 神幸祭、町内祭礼のいずれを問わず、御神霊のシンボルの移動が、巡回区域の宗教的浄化という象徴的效果を果たしていること。

【特徴二】 各氏子町内の神輿や曳き太鼓などによる「練り」の行動には、自町内だけを練る「町内練り」、隣接町内と連合して十数基がともに練り合う「地区練り（連合渡御）」、地区単位で数カ町の神輿が神社に練り込んで宮詣りをし、お祓いを受ける「連合宮入り」があり、多数の観衆を引きつけた上で成立する集団的興奮、あるいは日常性を突き破るべきオルギー状況を現

出させることが期待されていること。

【特徴三】祭りに行われる諸行事をになう基礎集団の単位が町内集団、すなわち町内会であること。

藪田はこうした三つの特徴を挙げた上で、昭和四三年の段階では、神田地域は「脱地域化」が起こりにくい社会的性格をもっているといえるかもしれないと指摘している。

(二) 松平誠の分析

松平誠は、昭和四三（一九六八）年から二四年経過した平成四（一九九二）年の神田祭から藪田稔の調査項目のうち、祭礼の象徴、神酒所の有無、主な行事（祭礼行事）、役割動員（祭礼組織）、一般動員（祭りの担い手）、行事経済（祭礼費用）について、明らかにしている。

まず、松平は、昭和四三年の藪田の調査段階では神田地域は「脱地域化」が起こりにくい社会的性格であったが、一九八〇年代（一九九〇年代）の初めにかけて人口流出や高層化などによって「脱地域化」が進んだことを指摘した。

次に、藪田が挙げた三つの特徴について、平成四年の時点での再検討を行った。藪田の【特徴一】は、昭和四三年の段階では、神事の持つ氏子と神の連携が神の巡回という意味で解されていたが、平成四年の段階では儀礼の持つ本来の意味が既に理解されにくくなっていると指摘した。その根拠として、町会の祭礼行事において、神幸祭「受渡し」（神田神社の神霊を載せた鳳輦を迎え、次の町会へ送り、受け渡していく行事）の欠落や忘却、「御霊入れ」（町会の神輿に御霊を入れる行事）を行うが、「御霊返し」（御霊を返す行事）の欠落、「蔵出し」（神輿を神輿庫から出す行事）と「蔵入れ」（神輿庫に戻す行事）が対になっておらず、片方が欠落していることなどを挙げている。藪田の【特徴二】は、【特徴一】の変化によって、町内祭礼行事の中での伝統的な儀礼の保持という側面では徐々に衰退しつつあるばかりでなく、平成四年の段階では、神田祭Ⅱ神輿担ぎという短絡が生じ、連合渡御と町内練りが祭りの本体であるかのように意識されている場合が少なくないと指摘している。藪田の【特徴三】は、役割動員を形成する形に変化はなく、地域の居住集団と考

えられてきた町内会は、依然として地域祭礼の実施機関としての役割を確実に果たしつつあると指摘している。ただし、一般動員に問題があり、男子居住集団による神輿担ぎが崩れていたことが窺えるとしている。そして、平成四年の一般動員の大きな変化として松平は次の三つの特徴を挙げている。

【一】 動員される人々の中に、半数ないし三分の一の女性が登場してきたこと。

【二】 かなりの部分を様々なネットワークで集めた町内会員外の人々で補っていること。

【三】 一九七〇年代以来の新顔として神輿同好会のメンバー（松平誠の表記「御輿同好会のメンバー」）が加わったこと。

松平は、この特徴【一】に注目する形で、神田祭において町会の神輿を女神輿に変化させた須田町中部町会における神田祭の調査研究を地域社会の変容の視点から行っている⁽⁴⁾。また、松平の特徴【三】に注目する形で、平成二十一年の神田祭の調査を軸に、神田祭に参加する一部の町会の事例から神輿同好会の動員について論じた清水純の研究がある⁽⁵⁾。清水は、神輿同好会が新顔ではなく、特定の町会に特定の神輿同好会が定着していることを明らかにしている。ただし、神田祭の全体を対象とした網羅的な研究には至っていない。さらに、松平の特徴【二】については、松平以後の変化を含めた詳細が明らかにされていない。松平の特徴【一】のその後の変化についても不明である。

そこで、本節では菌田の三つの特徴と松平の一般動員のその後について、平成二五年の神田祭から検討する。

二、町会の世帯数と神酒所の設置にみる変化

(一) 千代田区の人口・世帯数の推移

戦後の神田神社氏子町会における個別の世帯数の推移をみる前に、神田のある千代田区の人口・世帯数の推移を概観しておく。

まず、千代田区の人口・世帯数の推移について、『新編 千代田区史』の記述からみておきたい。千代田区の人口は、国勢調査によると、大正九（一九二〇）年の第一回調査時点では二万七六八二人いたが、関東大震災、第二次世界大戦を経て、昭和二〇（一九四五）年には四万四四一人まで減少した。その後、昭和三〇年に二万二七四五人まで回復したが、これをピークに昭和三五年に一万六九四四人、昭和四〇年には九万三〇四七人、昭和四五年には七万四一八五人に減少した。昭和三〇年から昭和四五年の一五年間で五万人減少した。特に、昭和三五年から昭和四〇年までの減少率は二〇・八％（五八〇一人）で戦後最大の減少を示した。この時期の人口減少は若年層、特に一〇代の若年労働者人口が昭和二五年から三〇年の間に大幅に減少している。さらに二〇代の若年層の流出がかなり多くなっている⁽⁶⁾。また、世帯数の推移をみると、大正九年は四万五六四世帯であったが、昭和二〇年には一万五九七八世帯まで減少した。その後回復し、昭和二五年には二万四三二五世帯となったが、昭和三〇年には昭和二五年から約一〇〇〇世帯減少し、昭和三五年に再び約一〇〇〇世帯増加した。そして、昭和四〇年に二万九四四世帯、昭和四五年は一万八八四七世帯になった。昭和三〇年から昭和四五年の一五年間で四五七三世帯が減少したことになる。この昭和三〇年から昭和四五年までの人口減少は、寮や住込み使用人などの若年単身層と、世帯形成期にあたる若年層の世帯分離から生じたものであった。住込みみや家族労働といった職住一致型の都心商業者のライフスタイルが既にこの時期に変化したことがわかる⁽⁷⁾。

夜間人口が減少する一方で、昼間人口は、昭和三〇年に四九万四六七三人、昭和三五年に六四万五三七七人、昭和四〇年に七十七万八一人、昭和四五年は八五万四九七五人を増加の一途をたどった⁽⁸⁾。昼間人口の増加の要因として、オフィスビルの建設ラッシュが挙げられる。昭和三五年の新規着工建築物に占める木造建物率は六六・三％、昭和四〇年には三一％、昭和四七年には一桁台まで減少した。その一方で、建築件数は、昭和三五年の七八四棟をピークに、昭和四八年まで五〇〇棟台から六〇〇棟台を推移して、昭和四九年には三〇〇棟台になる。昭和四〇年代以降、千代田区は中高層建築ブームを迎え、商人・職人の町であった神田地区は、ゲタバキ住宅の建設や丸の内・大手町からのオフィスビル建設の波が押し寄せ、町並みが大きく変貌した⁽⁹⁾。そして、夜間人口が減少し、昼間人口が増大し、千代田区の地域社会は空洞化していった。

夜間人口の減少は昭和四五年以降も続き、昭和五〇年は六万一千六五六人、昭和五五年は五万四千一人まで減少した。また、出生数

の減少と若年人口の減少の結果、高齢化が著しく進み、昭和五五年の六五歳以上の人口比率は一二・二%にまで上昇した。昭和五七年度に委託実施した『千代田区人口動向調査』によれば、千代田区の人口減少の特徴は、①出生率の低下に伴い自然増が少ないこと、②二〇歳代の若年層の減少が著しいこと（その内実は世帯形成期の年齢層と寮、住み込みなどの一時居住者層の「若年層の減少」）、③昭和二五年から昭和三〇年の人口増加期にみられたような一〇代の若年層の流入がなくなったこと、④昭和四五年から昭和五五年までの一〇年間の一万九三八四人のうち八〇%が下町地区（神田地区）の減少であり、千代田区全体の減少の八〇%を占めること、⑤下町地区の人口減少は、その半分が準世帯および民営借家棟であり、残りの世帯が持ち家世帯であることを挙げている⁽¹⁰⁾。『千代田区人口動向調査』の一環で実施された「人口減少に関する住民意識調査」からは、人口減少によって神田地区は「地域全体に活気がなくなつた」「地域活動が少なくなった」「防犯・防火の不安が増した」などコミュニティに関連する変化が挙げられている。それは、商人・職人のまちとして伝統的な人間関係によつて支えられていた町内のコミュニティが危機的状况にあることを物語っている⁽¹¹⁾。

昭和四三年に実施した藪田稔の調査から平成四年に実施した松平誠の調査の間には、夜間人口の減少に伴う地域社会の空洞化が進んでいたことがわかる。

(二) 町会の世帯数

平成四（一九九二）年の松平の調査に世帯数の記載はないため、昭和四三（一九六八）年と平成二五年（一部、平成二七年を含む）について、比較可能な町会に限って地区連合ごとに見ていきたい。

神田中央連合では、神保町一丁目町会が三三〇世帯↓町会員三八三世帯・七四三人、神田猿樂町町会が二四一世帯↓町会員八〇世帯「昔から住んでいる住民」、錦町二丁目町会（錦連合）が一三〇世帯↓居住者二一〜二三世帯「町会員六〇世帯」、錦町三丁目町会（錦連合）が二〇〇世帯↓居住者八世帯である。神保町一丁目町会は増加したが、神田猿樂町町会は昔からの住民は減少し、錦町二丁目町会・錦町三丁目町会は大幅に世帯数が減少した。

中神田十三ヶ町連合では、司一町会が四五〇世帯↓一五一世帯（住民登録）「町会員六四世帯」、司町二丁目町会が四三〇世帯↓二〇

四世帯・三七六人「このうち町会員一四〇〇世帯」、内神田鎌倉町会が三〇〇世帯↓二二五世帯（区公表）「町会員一七八世帯」、内神田旭町町会が二七八世帯↓九九世帯「町会員は二〇〇弱世帯」、多町一丁目町会が一八〇世帯↓五四世帯（住民登録）「実際の居住者三〇世帯、町会員一五〇世帯」、多町二丁目町会…三四〇世帯↓町会員二二〇〇世帯、神田鍛冶三町会が二一五世帯↓七七世帯（住民登録）「町会員二二〇人」、須田町北部町会が二〇〇世帯↓町会員一四〇世帯（大半が企業）「住民五〇世帯」である。比較可能な八町会全てで世帯数は減少した。

外神田連合では、外神田一丁目万世橋町会が二〇〇世帯↓一三三世帯、神田旅籠町会が二五〇世帯↓一五〇世帯、神臺會が七五世帯↓八〇世帯（登録世帯）「町会員五〇世帯」、宮本町会が七〇世帯↓一七〇世帯（町会員）、神田同朋町会が一五〇世帯↓一五〇世帯「町会員一〇〇世帯」、外神田三丁目金澤町会が一〇〇世帯↓町会員九〇世帯、神田末廣町会が二二〇世帯↓町会員二四四世帯、外神田四丁目代会が一〇〇世帯↓町会員二〇世帯、外神田四丁目松富會が一四五世帯↓八〇世帯、神田五軒町町会（旧・外神田六丁目町会）が二五〇世帯↓三三〇世帯である。JR秋葉原駅に近い、外神田一丁目万世橋町会、神田旅籠町会、外神田四丁目代会、外神田四丁目松富會で大幅に世帯数が減少した。反対に、宮本町会や神田五軒町町会、神田末廣町会などでは、世帯数は増加した。

神田駅東地区連合では、鍛冶町一丁目町会が二〇〇世帯↓五九世帯「居住する世帯…二六世帯・登録人口…一一〇人・町会員…三〇〇世帯（会社を含む）」、鍛冶町二丁目町会が四〇〇世帯↓町会員三〇〇世帯「居住者六〇世帯」、北乗物町町会が六〇世帯↓居住者二三世帯・七〇人、富山町町会が一〇〇世帯↓七〇世帯（区登録人口）「町会員二三世帯・四〇人」である。比較可能な四町会全てで世帯数が減少した。実質的な居住者は少なく町会員は企業会員を含んで構成している。

岩本町・東神田地区連合では、岩本町一丁目町会が二〇〇世帯↓町会員約一二〇世帯（マンションを含むと五〇〇世帯）、神田東紺町会が一四〇世帯↓二〇世帯、四〇〇人「マンションの住民を除き、町会費を払う昔からの住民」、東神田町会が四〇〇世帯↓三五〇世帯「平成一七年…五五四世帯（町会に加入している世帯）」、神田松枝町会が一八〇世帯↓二二〇世帯「町会員一五〇世帯」。昔からの住民七〇世帯、マンション住民一五〇世帯」、岩本町二丁目岩井會が七七世帯↓一八〇世帯「町会員二〇〇世帯」、神田大和町会が一六〇世帯↓昔からの住民六〇世帯・約一五〇人「マンション、公社等の数は不明」、岩本町三丁目町会…三〇〇世帯↓町会員

一八〇世帯「町会役員五〇世帯」、東神田豊島町会が二六五世帯↓居住者一二〇〇〜一三〇世帯「マンション居住者を含むと四〇〇〜四五〇人世帯、町会員一二四世帯（事業所を含む）」である。岩本町一丁目町会、神田松枝町会、岩本町二丁目岩井会、平成二七年の東神田豊島町会、東神田町会ではマンション住民を含むと世帯数は増加したが、町会活動に参加する町会員は減少傾向にある。

秋葉原東部地区連合では、神田佐久二平河町会が二〇〇世帯↓町会員一三〇世帯、神田佐久間町三丁目町会が二八〇世帯↓四三一世帯「町会員三三〇世帯」、神田佐久間町四丁目町会…二二世帯↓二〇〇人（登録人口）、東神田三丁目町会…一一〇世帯↓四一九世帯「町会員は半分強。マンション七棟中三棟が町会に加入」、神田和泉町会が四三〇世帯↓二〇〇世帯である。神田佐久二平河町会と神田和泉町会では世帯数は減少したが、神田佐久間町三丁目町会、東神田三丁目町会が増加し、神田佐久間町四丁目町会でも増加したことが窺える。東神田三丁目町会では、マンションの建設によって人口・世帯数は増加し、マンションも棟単位で町会に加入している。

日本橋一・三・四・五地区連合の宮入実施町会では、蛸一共和会…一九〇世帯↓七〇〇世帯「マンションを除くと約二〇世帯」、蛸殻町東部町会…三七〇世帯↓七四六世帯（区登録）・町会員約三三三世帯、東日本橋三丁目橋町会…三三〇世帯↓町会員九四〇世帯「マンション一〇棟で五五〇戸」、東日本橋二丁目町会（旧・両国町会）…四五〇世帯↓一一〇〇世帯、浜町一丁目町会…二〇〇世帯↓九七六世帯「町会にはほとんど加入」、浜町三丁目東部町会…二五〇世帯↓九一〇世帯「町会員約八一九世帯」である。いずれの町会でも世帯数は増加した。マンションが建ち、新住民は大幅に増加したことが窺える。そのため、蛸一共和会ではマンションを除くと約二〇世帯になる現状がある。

（三）神酒所の設置率

各町会では、神田祭に際して神酒所を町内に設置して、ここを起点として神輿の巡幸などの祭礼行事を実施する。この神酒所の設置数について、昭和四三（一九六八）年、平成四（一九九二）年、平成二五年の順にみると、六〇↓五八↓六一と推移し、ほぼ同水準の設置率を維持している。地区連合ごとに見ると、中神田十三ヶ町連合、外神田連合、岩本町・東神田地区連合、日本橋一・三・四・五地区連合では同水準の設置率を維持しているが、神田中央（一〇〇↓一〇〇↓七「町会五、連合二」）では減少した。神田駅東地区連合では、

昭和四三〜平成四年で減少（六↓四）したが、平成四〜二五年で増加（七「紺屋町北部町会を含む」）した。ここには、北乗物町会と紺屋町南町会による合同の神酒所の設置が含まれる。

三、主な行事の変化

神田祭の主な行事のうち、松平誠が藺田稔の調査との比較の根拠とした七つの行事について、昭和四三（一九六八）年、平成四（一九九二）年、平成二五年の順に実施数を挙げ比較検討する。

（一）蔵出し・蔵入れ

「蔵出し」は、なし↓二九↓四六、「蔵入れ」は、なし↓三〇↓四六といずれも増加した。平成四（一九九二）年は神田駅東地区連合と秋葉原東部地区連合で「蔵入れ」と「蔵出し」が対になっていない町会があったが、平成二五年は全て対になっていた。平成二五年では、「蔵出し」「蔵入れ」は神輿庫から神輿を出し入れするのみで特別な儀礼を伴うものではなく、「蔵出し」「蔵入れ」終了後に飲食や直会をする程度である。神田神社境内には氏子神輿庫があり、多くの町会の神輿が納められている。神田祭では、神輿を搬出入する町会が集中し、短い時間で区切って搬出入を行うため特別な儀礼を行う時間的・空間的な余裕がないという実態がある。

（二）神幸祭「受渡」

神幸祭「受渡し」は、四（鳳輦供奉）、「鳳輦迎エ」↓三四↓五五（把握分のみ、神田中央連合の二町会と二連合を含む）と増加し、全ての地区連合で増加した。ただし、これは各町会が単独で実施するというよりも、地区連合ごとに複数の町会が合同で「受渡し」をするため実施率が高い。つまり、町会の境から町会の境へ鳳輦を送る各町会単位の神幸祭「受渡し」から地区連合ごとの合同の「受渡し」へ変化した結果であるといえる。

(三) 御霊入れ・御霊返し(御霊抜き)

「御霊入れ」は、三一↓五九↓五八(把握分のみ)、「御霊返し」は、五↓一九↓一八(把握分のみ)と推移し、「御霊入れ」「御霊返し」ともに、昭和四三(一九六八)年〜平成四(一九九二)年で増加し、平成四年〜二五年は大きな変化がない。また、平成二五年においても「御霊入れ」は行方が「御霊返し」を行わない町会が多いことがわかる。ただし、地区ごとに見ると、岩本町・東神田地区連合では、「御霊返し」は一↓二↓五と増加し、秋葉原東部地区連合でも、平成二五年に宮入した五町会全てで「御霊入れ」と「御霊返し」を実施した。「御霊返し」は、神田中央連合、中神田十三ヶ町連合、外神田連合、神田駅東地区連合では低い実施率であるが、岩本町・東神田地区連合と秋葉原東部地区連合では実施率が比較的高い。日本橋四地区連合の東日本橋三丁目橘町会と東日本橋二丁目町会は神田神社への宮入後、神田神社で「御霊返し」を行い、実施率を維持している。

(四) 町内渡御・神輿宮入参拝

「町内渡御」(町会練り)は、四〇↓五〇↓五二(把握分のみ)と増加し、「神輿宮入参拝(連合渡御)」は、二三(「連合練り」を含む)↓五四↓五五(把握分のみ)と増加した。全ての地区連合で町内渡御、神輿宮入参拝(連合渡御)が増加傾向にあり、特に、神輿宮入参拝が拡大した。平成二七(二〇一五)年には、岩本町・東神田地区連合の岩本町二丁目岩井会が神輿の町内渡御を復活し、日本橋三地区連合の蛸殻町東部町会は神輿宮入を行った。

四、役割動員と一般動員の変化

(一) 役割動員(祭りの組織)

松平誠は、平成四(一九九二)年の時点で町内会(町会)が依然として地域祭礼の実施機関としての役割を確実に果たしつつあると指

摘した。平成二五年では、対象となった全ての町会で祭典委員を置き、多くの町会で祭典委員会などの祭りの運営組織を設置した。町会長や町会役員が祭典委員や祭典委員長などに就き、青年部や婦人部などを動員し、町会が神田祭を実施する機関としての役割を担っている点に変化はない。ただし、神田中央連合の錦連合と小川町連合では、それぞれの連合で一つの祭典委員会、一人の祭典委員長を置く形に変化した。また、中神田十三ヶ町連合の須田町中部町会では、女神輿の担ぎ手を一般募集するが、平成二五年からインターネットによる募集を開始した⁽¹²⁾。非町会員で町内に事務所を構える「女みこし担ぎ手募集係」(女性三人)がインターネットからの応募を含め、全ての参加者リストの管理を一括で行った。

(二) 一般動員(祭りの担い手)

全体の傾向として、昭和四三(一九六八)年〜平成四(一九九二)年に参加者数(動員数)そのものが増加したことが窺える。平成二五年の日曜日に宮入を実施した町会では、土曜日より日曜日の参加者数が多い傾向がある。また、昭和四三年は、青年・子どもを含めた町内の居住者や町内企業の従業員の参加者が多かったことが菌田の調査から窺えるが、平成四年になると、町会員外の参加者の割合が増加し、平成二五年も同じ傾向が続いている。ここでは、平成四年の調査から松平が指摘した神輿同好会、様々なネットワークで集めた町内会員外の人々を考える上で参考となる他町会、女性や町内企業の参加者に注目して検討したい。

「神輿同好会」

神輿同好会の参加は、平成四(一九九二)年は一五町会であったが、平成二五年は四一町会(把握分のみ)に増加した。平成二五年では、神輿同好会が流動的に様々な町会の神田祭に参加するのではなく、「神輿同好会は昔からの付き合い。頭の関係。深川、向島から来る。半纏合わせは毎回同じメンバーで四月に実施」(神田五軒町町会)、「神輿同好会とは何十年の付き合い」(佐久間町三丁目町会)というように、多くの町会で長い付き合いのある神輿同好会が特定の町会に定着している傾向が窺える。神田須田町二丁目町会では、町会公認の神輿同好会(金沢睦、日本橋貳通睦)がある。栄町会では、「神輿同好会のメンバー一〇人程度は、蔭祭の「ふれ合い広場」

など普段から町会の活動を手伝う」といい、町会と長い付き合いの中で信頼関係を築いた神輿同好会は神田祭以外の町会活動にも参加している例もみられた。須田町一丁目南部町会（町内五〇人【一六・七％】、神輿同好会二五〇人【八三・三％】）や東神田豊島町会（神輿同好会【八三・三％】）では町会の半纏ではなく、神輿同好会の半纏での参加を認めている。清水純は、平成二一年の神田祭の調査を軸に神輿同好会の動員について分析し、「大抵二十〜三十年、時には四十年もの付き合いの続く神輿同好会が特定の町会に毎回担ぎに来る関係が成立していた⁽¹³⁾」ことを明らかにしているが、平成二五年も同じ状況であることがわかる。

「他町会の参加者」

他町会の参加者は、平成四（一九九二）年の調査からは窺えないが、昭和四三（一九六八）年の段階で「東松下町ナド依頼五〇人」（神田鍛冶三会町会）、子どもが「他町から六〇人参加」（北乗物町町会）とあり、当時から他町会の参加者の存在が窺える。平成二五年では、多町一丁目町会（亀戸天神の町会一五〜一六人、本郷・桜木神社の氏子町会一〇人）、宮本町会（亀有三丁目東町会一〇〇人【大人神輿の参加者の四〇％】、亀住町会）、神田同朋町会（茅場町一・二丁目町会二五人、新中野町会）、神田末廣町会（亀住町会七〜八人）、神田五軒町町会（亀住町会、外神田松住町会）、鍛冶町二丁目町会（紺屋町北部町会、東松下町町会、富山町町会）、神田須田町二丁目町会（日本橋貳通睦）、東神田町町会（水海道・栄町仲睦青年会四三人、外神田松住町会八人、足立区前保木間青年部六人）、東神田豊島町会（中目黒の月光町・小山台など町会関連三団体）、佐久間町四丁目町会（北千住三丁目）、東神田三丁目町会（深川南・花川戸一丁目青年部・両国二丁目睦・湯島の春木町）、室町一丁目会（日本橋貳通睦など）などで一定数の他町会の参加が確認できた。氏子外の他町会のみならず、同じ地区連合で氏子が異なる町会や同じ氏子同志で宮入を行わない町会の参加がみられた。宮本町会では、大人神輿を借りた先の亀有三丁目東町会が参加した。神田須田町二丁目町会と室町一丁目会では、日枝神社の氏子である日本橋二丁目通町会の日本橋貳通睦が参加した。日本橋貳通睦は、既述の通り、神田須田二丁目町会公認の神輿同好会であり、山王祭に参加する日本橋二丁目通町会の睦会である。「外に出る時は神輿同好会、中では町会の青年部」という神輿同好会の一つの形が窺える。神田同朋町会に参加した茅場町一・二丁目町会も日枝神社の氏子である。日本橋一地区連合の本町一丁目町会と室町一丁目会では、神田祭が蔭祭の時

に山王祭の日本橋の町会（日本橋三丁目など）の神輿に参加し、山王祭が蔭祭の時に、日枝神社の日本橋の町会は室町一丁目会の神田祭に参加するなど、神田祭と山王祭でお互いの町会の祭りに助っ人として参加する「相互乗り入れ」を行っている⁽¹⁴⁾。他の祭りとの「相互乗り入れ」のネットワークを通じ一定数の参加があることがわかる。

「女性の参加者」

平成二五（二〇一三）年では、「女性の参加者が多い」とする町会が九町会あった。具体的な数値を回答した町会は、多町一丁目町会（八〇〜一〇〇人）「日曜の参加者の四〇％」、多町二丁目町会（一割）、須田町中部町会（一六九人）、神田同朋町会（約一五〇人）「三七・五％」、栄町会（町外から三〇〜四〇人、宮入時一〇人弱）、外神田三丁目金澤町会（三分の一）、元佐久町会（約一〇人）、神田和泉町町会（約二〇人）、東日本橋三丁目橋町会（約二〇％）、浜町一丁目町会（二割）、浜町三丁目東部町会（約二〇人）である。岩本町三丁目町会、神田東紺町会では、町会の神輿を一部区間だけ女神輿にした。神田佐久二平河町会では、宮入の際、神輿の前棒は全部女性になり、神田鍛冶三会町会では、金曜日の夜に子ども神輿を女神輿にして、町内渡御を行った。連合渡御や宮入を含む全区間を女神輿で渡御する須田町中部町会の「元祖女みこし」は、平成二年の松平誠の調査⁽¹⁵⁾と平成二五年の参加者を比較すると、参加者数は増加（一四八人↓一六九人）した⁽¹⁶⁾。一方で、淡路町一丁目町会では、女性の参加者は少ない。

以上の調査結果からは、松平誠が指摘するように、「動員される人々の中に半数ないし三分の一が女性である」とは必ずしもいえないものの、女性の参加者が増加傾向にあることが窺える。町会の側では、女性の参加者の増加に一部区間を女神輿にするなど対応していることがわかる。

「町内企業の参加」

平成二五（二〇一三）年の町内企業の参加は、内神田美土代町会（会社員四〇〜五〇人）、司一町会（城南信用金庫一〇人）、多町一丁目町会（城南信用金庫神田支店約二〇人）、多町二丁目町会（会社社員約五〇人）、神田鍛冶三会町会（三菱銀行三〇人）、須田町中部町

会（西武信用金庫一三人）、須田町北部町会（りそな銀行三〇人、新日鉄興和不動産二〇人、JR東日本ビルディング、JRステーションリテーリング、みずほ銀行二〇〇〜三〇人）、鍛冶町一丁目町会（山梨中央銀行三〇人）、鍛冶町二丁目町会（徳力本店一〇人、神田通信機二〇〇〜三〇人）、神田須田町二丁目町会（向井建設四〇〇〜五〇人）、神田佐久二平河町会（UFJ銀行八人・三協化成一三人・パセラ一人）、岩本町三丁目町会（山崎製パン三〇〇人、本間組二〇人、田島ルーフィング二〇人、貝印一〇人）、神田和泉町町会（YKK一〇〇〜一五人と凸版印刷一〇〇〜一五人を含み企業四〇〇〜五〇人）、室町一丁目会（企業・宮入二三人、町内渡御一二人）などでみられた。岩本町三丁目町会では、昭和四三（一九六八）年は八割が町内の店員であったが、平成四年は町内会員外が五九・六%、平成二五年は企業の参加者が七〇・〇%を越えた。特に、山崎製パン社員三〇〇人の参加者に占める割合が高い。一〇〇〇人を超える会社員が参加する大手・丸の内町会の史蹟将門塚保存会大神輿に近い。「神田藪そば」などの老舗が立地する須田町北部町会では、町会の戦略として、三〇年前に神輿同好会を頼みから脱却し、企業を巻き込んでいく方針に転換した。鍛冶町一丁目町会、鍛冶町二丁目町会、神田須田町二丁目町会、紺屋町南町会では、平日にしかない企業の会社員を巻き込もうと金曜日の神輿巡幸を行っている。栄町会では、地元企業の取り込みを図り、金曜日の夜に「ふれあい広場」を神酒所前で開いている。蔭祭の時も神田祭と同じ時期に「ふれあい広場」を実施して企業会員と親睦を図っている。外神田三丁目金澤町会では、金曜日の夜の神輿巡幸を一〇年前から始め、蔭祭の年は企業との懇親会を神田祭の時期に開いている。

町内に有力な企業がある町会では、祭りの担い手も企業に特化したり、祭りを通じて企業との関係を良好にしようとする町会の戦略が窺える。町会は、企業を取り込むために、金曜日の夜の祭り（神輿巡幸・懇親会）や蔭祭を実施していることがわかる。

五、行事経済・行事変化

（一）行事経済（祭礼費）

平成二五（二〇一三）年の町会の祭礼費は、昭和四三（一九六八）年と平成四年と同様に大多数の町会が寄付（奉納金）で行って

ることに変化はない。寄付だけで不足する場合は、町会費（祭礼準備金）などで補足して、町会の祭礼行事を運営している。寄付は、前回の祭りの奉納金額を記した奉加帳を持って会員を戸別訪問したり、回覧を回して寄付を募るなどの方法で徴収している。寄付の金額は、平成四年のデータがないため、昭和四三年と平成二五年を比較すると、金額は上昇している。しかし、物価が異なるため、単純な比較はできない。中神田十三ヶ町連合の須田町中部町会では、昭和四三年…四〇万円↓平成二年…五一〇万四千円⁽¹⁷⁾↓平成二五年…三五三万円⁽¹⁸⁾と推移している。平成二年から平成二五年にかけて大きく減少した。「奉納金は減少傾向」「町内に銀行が多かった時代、奉納金は四二〇〇〜四三〇万円になった。統廃合で移転後、その分が減少」といったように、多くの町会でピーク時より寄付が減少し、寄付集めに苦勞していることがわかる。栄町会では、「居住する三〇世帯からの寄付金が多い」としながらも、祭りの運営に際して無駄の排除を行い、分業化を進め、有効に祭礼費を使うように工夫をしている。

(二) 行事変化

地区ごとには二〇〇〇〜一五年の行事変化をみていくと、神田中央連合では、住民の減少に対応して、企業の参加を進め、錦町や小川町では「連合」という祭りの合同組織を作り、神輿の巡幸や宮入を持続している。小川町連合では、連合を組む四町の核になる幸徳稲荷神社の存在が大きかったことが窺える。中神田十三ヶ町連合では、大きな変化がないとする町会が四町会あるものの、町内の居住人口が減り、子どもの減少と高齢化が進み、マンション住民が増えても神田祭への参加は進まず、神輿同好会や外部の参加者に頼らざるを得なくなった状況が見て取れる。そうした中で、一五年くらい前から土曜日の「八町会合わせ」（連合渡御）が始まり、神田鍛冶三会町会では平成一九（二〇〇七）年頃から金曜日の女神輿の巡幸を開始した。外神田連合では、住民減少や高齢化によって祭りの担い手の確保に苦勞するようになった一方で、平成六年から、神田神社への宮入の後、秋葉原の中央通りに連合渡御する「おまつり広場」の開始、企業向けの金曜日の祭りや蔭祭の開始、宮本町会では、他町会から大人神輿を借りて、平成二一年から宮入を開始した。また、蔭祭における子ども神輿の巡幸も平成二四年から開始した。神田駅東地区連合では、神田祭が盛んになっていることがわかる。紺屋町南町会では、平成一一年五月に手作りの神輿を作り、平成一三年に宮入を開始、平成一九年から北乗物町会と合同の神田祭を行うよう

に変化した。岩本町・東神田地区連合では、昔からの住民は減少する一方で、新たな祭りの場が生まれた。岩本町二丁目岩井会は、平成二五年に神田神社へ「桃太郎」山車を展示することによって、二〇年振りに神酒所を設営し、神輿を組んで神酒所に展示するなど、盛り上がりを見せた。神田大和町会の神輿の宮入の際、神田神社拝殿前で岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車を曳くパフォーマンスを行った。神田松枝町会では、「羽衣」山車の子ども参加者がマンション住民を巻き込み増加傾向にある。岩本町一丁目町会では、金曜日の午後に台車に載せた神輿を門付し、町内企業に祭りの開始を知らせ、その夜に会社員向けの町内渡御を始めた。秋葉原東部地区連合では、大きな変化がないとする町会が二町会ある一方で、東神田三丁目町会では、平成一六年に神輿を新調し、神田佐久間町四丁目町会では、平成二五年に神輿の巡幸と宮入を復活するなど、拡大する傾向もみられた。ただし、神田佐久間町四丁目町会では、担い手の外部に占める割合は高く「ヨソ（外部）の力で神輿を出すのは町内の祭りではない」として、一時期、神輿の巡幸を止めていた時期もあった。日本橋では、祭りの拡大が窺える。蛸殻町東部町会では、平成一二年に神輿を新調し宮入を開始、参加者も増加した。蛸一共和会では、平成二一年から宮入を開始した。

六、祭りの評価

平成二五（二〇一三）年の神田祭がどのような場になっているかをみると、類似例を含み「地域・町会（町会員）の結束や絆の確認、親睦や活性化の場」が三三町会、「伝統・ブランド」が一二町会、「町内・町会で最大のイベント・行事」が一〇町会であった。一方、「町会役員の負担が大きくて辛い面もある」「役員をやっている人は「また祭り」といった感覚」といった祭りの運営が困難である現状を浮き彫りにする評価もあった。昭和四三（一九六八）年では、「祭りハ町ノ繁栄親睦ガ主目的デアル」と町内の親睦の場とする評価が一部である一方で、「幼イ頃祭りノ楽シイ気分ガ今デモ残ツテイル」「祭りハ昔ノ伝統ヲ継グタメニ必要」「氏神ノ祭りダカラ楽シム」「オ祭りヲスルノハ先祖ヘノ義務」「交通事故ガ心配」といった「祭りの評価」であった。昭和四三年に比べると、平成二五年は、「祭りをやるために町会がある」（神田和泉町町会）、「お祭りは町会の最後の抛り所」（岩本町一丁目町会）など、「地域」や「町内」を強調した

評価が増加し、伝統やブランド力を有し、町会のつながりを維持するための最大の行事として神田祭が位置付けられていることがわかる。

七、経年的変化からみえる平成二五年の神田祭

(一) 菫田稔の【特徴一】「神事・儀礼の意味のその後」

菫田の【特徴一】については、平成二五（二〇一三）年では平成四（一九九二）年と共通し、神事・儀礼の持つ本来の意味を理解しにくくなっているといえる。それは、「蔵出し」「蔵入れ」は神輿庫から神輿を出し入れするのみで特別な儀礼を伴うものではなく、神幸祭「受渡し」は実施率は増加したものの、町会単位から地区連合を単位とした合同の「受渡し」へ変化した。「御霊返し」の実施率には、人的要因（人手不足等）に伴い、町会の神輿巡幸の終了時間と神事を行う神職が来れるタイミングが一致するか否かにかかっていると考えられる。同様に、神輿巡幸の終了後、担ぎ手と一緒に神酒所前で「直会」を行う町会は限られている。担ぎ手は神輿巡幸が終ると、弁当を貰って早々に退散する。本来の「直会」の意味とは異なっている。また、金曜日の宵宮（前夜祭）は、町内の企業を祭りに巻き込むための場になっている。

(二) 菫田稔の【特徴二】「練り」（神輿巡幸）のその後

菫田の【特徴二】については、松平誠が「町内祭礼行事のなかでの伝統的な儀礼の保持という側面では徐々に衰退しつつあるばかりでなく、一九九二年の段階では、神田祭すなわち御輿担ぎという短絡が生じており、連合渡御と町内練りが祭りの本体であるかのよう意識されている場合が少なくない⁽¹⁹⁾」と平成四（一九九二）年の調査から指摘したが、平成二五年も同様の特徴を持つ。ただし、町内渡御（町内練り）は、実施率は高いものの、居住者が減少する中、町内の見物人が少なく、門付の軒数は減少し、本来の意味が変容している。町内渡御が観客がおらず寂しいため、土曜日の連合渡御を秋葉原東部地区連合や岩本町・東神田地区連合では開始した。

つまり、神田祭Ⅱ神田神社への宮入や連合渡御といった「見せ場」という意味合いが強くなってきたといえる。

【三】 菫田稔の【特徴三】 町内会その後

菫田の【特徴三】については、松平は、菫田との比較から「地域の居住集団と考えられてきた町内会は、依然として地域祭礼の実施機関としての役割を確実に果たしつつある⁽²⁰⁾」としているが、平成二五（二〇一三）年においても町会（町内会）が地域祭礼の実施機関であることに変化はない。ただし、町会とは違った個人やグループの活躍、町会が合同して祭礼を行うようになった事例もあり、「確実に果たしつつある」とは言い切りにくい現状もある。

【四】 松平誠の一般動員のその後

松平の【一】～【三】について順番にみていきたい。

【一】「動員される人々の中に、半数ないし三分の一の女性が登場してきたこと」は、平成二五（二〇一三）年では必ずしも三分の一にまでは及ばないものの女性の参加者が増加傾向にある。

【二】「かなりの部分を様々なネットワークで集めた町内会員外の人々で補っていること」は、平成二五年では、様々なネットワークを通じた参加が拡大している。他町会や会社員、町会員を介した友人・知人の参加もみられる。また、町会によって一般動員の仕方の特徴がみられ、一般募集の女性の参加者に特化した須田町中部町会、神輿同好会の参加に特化した須田町一丁目南部町会や東神田豊島町会、企業参加に特化した岩本町三丁目町会、大手・丸の内町会、企業の参加を重視する須田町北部町会、栄町会などがある。

【三】「一九七〇年代以来の新顔として神輿同好会のメンバーが加わったこと」は、平成二五年では、清水純が指摘する通り、二〇年、三〇年と長い付き合いのある神輿同好会が特定の町会の神輿巡幸の担い手として定着している例も少なくない。新顔から町会との間に信頼関係を構築した馴染の神輿同好会へ移行したことが窺える。

まとめ

昭和四三（一九六八）年の藪田稔の調査からおおよそ五〇年が経過した平成二五（二〇一三）年（及び平成二七年）の神田祭は、地域社会の祭礼の実施機関である町会の昔からの住民が減り、マンションの建設によって新住民は増えても、町会の神田祭を下支えする人たちは増加しにくい現状がある。にもかかわらず、祭りは衰退するどころか、かえって拡大し盛んになっているようにみえる。例えば、「御霊返し」といった祭儀の部分は、人的要因とタイミングによって選択され、選択できない場合は現状維持ないし縮小する傾向がある。その一方で、町内企業に見せ、取り込みを図る金曜日祭や蔭祭、連合渡御や宮入など、「見せる要素」のある祝祭の部分が拡大している。ここ一〇年以内に神田神社への宮入を開始した町会が複数存在し、秋葉原の中央通りで連合渡御を行う「おまつり広場」は平成六年に始まった。また、縮小していた町会の祭りが祭礼の象徴の誕生や復活などによって、祭りが盛んになり地域社会が活性化する事例もみられた。須田町中部町会の「元祖女みこし」の誕生、紺屋町南町会のダンボール神輿の誕生、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の展示に伴う神酒所の二〇年振りの設置、北乗物町町会と紺屋町南町会の合同の神酒所の設置など、町会の居住人口が減少し、町内の担い手の確保が困難になるといった社会的状況にもかかわらず、祭りは活性化しているのである。つまり、地域社会の変容という社会変動に対して祭りが衰退していくのではなく、社会変動に対して祭りを盛んにして対応していることが神田祭のおおよそ五〇年の盛衰から浮き彫りになってきたのである。そして、祭りが社会変動に対して拡大する要因として、「祭りの評価」から窺えるように、町会にとって神田祭が最大の行事であるとともに、神田祭が地域社会の結集を維持するための「最後の拠り所」であるからではないか。「祭りをやるために町会がある」というように、地域社会が大きく変容し、神田祭以外の町会活動が縮小傾向にある町会にとって、神田祭の果たす役割が増していることが窺える。そのことが社会変動に対して祭りが可逆的に反応する一つの原動力になっているのではなからうか。

註

- (1) 藪田稔「祭と都市社会―「天下祭」(神田祭・山王祭)調査報告(一)―」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (2) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (3) 一般に、神田神社の氏子は一〇八町会といわれるが、「二〇七町会」の数は、『平成二五年神田祭』神田神社、平成二五年、『平成二七年神田祭』神田神社、平成二七年の「祭典委員芳名」に掲載された町会数をもとにしている。「湯島一三会」を入れると一〇八に上るが、松平誠が「湯島一三会」は町会ではないとして町会数からは除外してカウントしている。
- (4) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三輯、国立歴史民俗博物館、平成三年。
- (5) 清水純「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―」『日本民俗学』第二七一号、日本民俗学会、平成二四年。
- (6) 『新編 千代田区史』通史編、東京都千代田区、平成一〇年、一一一六頁。
- (7) 前掲『新編 千代田区史』通史編、一一一七頁。
- (8) 前掲『新編 千代田区史』通史編、一一一七頁。
- (9) 前掲『新編 千代田区史』通史編、一一一五頁。
- (10) 前掲『新編 千代田区史』通史編、一一四一―一一四二頁。
- (11) 前掲『新編 千代田区史』通史編、一一四三―一一四四頁。
- (12) 本研究・第三章第五節参照。初出は、秋野淳一「「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第四五輯、國學院大學大学院、平成二六年。
- (13) 前掲清水「神田祭」、二六頁。
- (14) 本研究・第三章第三節参照。初出は、石井ゼミ神田祭蔭祭・調査班「神田祭・蔭祭 調査報告―平成26年度―」『神道研究集録』第二九輯、國學院大學大学院神道学・宗教学専攻院生会、平成二七年。
- (15) 前掲松平「現代神田祭仄聞」。
- (16) 前掲秋野「「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」。
- (17) 前掲松平「現代神田祭仄聞」。
- (18) 前掲秋野「「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」。
- (19) 前掲松平「都市祝祭(伝統)の持続と変容」。
- (20) 前掲松平「都市祝祭(伝統)の持続と変容」。

第二節 平成二十七年の神田祭（遷座四〇〇年奉祝大祭）の分析

平成二七（二〇一五）年の神田祭は、平成二八年に神田神社（神田明神）が現在地（東京都千代田区外神田）に遷座して四〇〇年を迎えるに当り、奉祝大祭として盛大に行われた。また、神田祭とアニメ「ラブライブ！」のコラボレーションによる神田祭のポスターや授与品・グッズが神田神社で販売され、若者の注目を集めた。

遷座四〇〇年奉祝大祭の神田祭は、五月七日（木）の鳳輦神輿遷座祭「一九時・神田神社」を皮切りに、八日（金）氏子町会神輿神霊入れ「夕刻・氏子町会神酒所・御仮屋」、九日（土）神幸祭・附祭「終日、神田神社く氏子地域一帯」と神輿宮入「夜、神田神社」、一〇日（日）神輿宮入「終日、神田神社」、一四日（木）献茶式「表千家家元奉仕、一時・神田神社」及び明神能幽玄の花（金剛流薪能）「二八時・神田神社」、一五日（金）例大祭「一四時・神田神社」の日程で行われた。

特に、一〇日に行われた氏子町会神輿の宮入には、その様子を一目見ようと神田神社境内を訪れる多くの観客と、神田祭（神田神社）と「ラブライブ！」の授与品・グッズを受ける若者の長い行列が交差し大きな賑わいを見せた。結果として、一〇日午後の神輿宮入の時間が予定よりも遅れる事態となった。この神輿宮入の様子はテレビやインターネット中継を通じてお茶の間にも届けられた。

こうした賑わいと大きな注目を集めて行われた平成二十七年の神田祭であるが、各氏子町会の神田祭はどのように行われたのだろうか。そこで、本節では、前節（第三章第一節）で試みた平成二五年の神田祭調査を足掛かりとしながら、平成二十七年の神田祭について、実態調査に基き、神田祭全体を対象として考察を行う。

実態調査は、本来であれば、藪田稔・松平誠の調査のように、各町会の神酒所を訪れ、藪田の調査項目に沿う形でインタビュー調査を詳細に実施すべきであるが、相手先の祭礼時の多忙さ、対象となる神田神社の氏子町会数の多さとエリアの広さなどから神田祭の際の詳細なインタビュー調査は困難であるといえる。そのため、神田祭の際の実態調査は観察調査に徹した方が、外形的ではあるものの等質的・網羅的なデータを限られた時間・人員で効率的に得られると判断した。

具体的には、各氏子町会に赴き、①神酒所の有無・場所の把握、②祭礼の象徴（神輿・山車など）の有無と数、③神酒所付近に掲示

された町会ごとの祭礼行事の予定表・ポスターの把握、④神酒所に設けられた芳名板の把握、⑤可能な範囲で参加者数の把握（インタビュー）を実施したものである。

③からは、藪田の「主な行事」（祭礼行事）の項目に当る「御霊入れ」「御霊返し」の有無、「町内渡御」「連合渡御」「神輿宮入参拝」の有無を把握することができる。

④からは、奉納金（寄付）の金額や奉納品の品目といった藪田の「行事経済」の項目がわかるのみならず、誰から奉納されているかを把握することによって、各町会ごとの社会的な関係や人的なネットワークなどを解明すること、すなわち「一般動員」（祭りの担い手）の項目、例えば、神輿同好会や他町会の参加状況、企業との関わりなどの把握が可能である。集計に当たっては、前節の調査時のインタビューで把握した平成二十七年の予定や平成二十七年の神田祭公式ガイドブック『平成二十七年神田祭』を参照しながら、データ化し分析を行った。つまり、本節では、藪田の調査項目のうち、ほぼ松平の全調査項目（「祭典委員（役割動員）」「構成員・数」、『平成二十七年神田祭』を引用）、「神酒所」「有無・場所」、「祭礼の象徴」、「一般動員」「インタビュー結果、奉納金・奉納品」、「主な行事（祭礼行事）」、「行事経済（奉納金）」、「備考」「インタビュー調査で得られた参考データ」の実態を記録し分析したものである。

なお、調査結果の詳細は、巻末の資料篇・【資料二】に掲載した。

一、平成二十七年神田祭の概観

まず、本題に入る前に平成二七（二〇一五）年神田祭について概観しておく。

（一）神幸祭

五月七日（木）の神社の御神霊を鳳輦・神輿（一の宮鳳輦・大己貴命、二の宮神輿・少彦名命、三の宮鳳輦・平将門命）に遷す遷座祭では、夕刻にもかかわらず、多くの見物人が訪れた。そうした中で遷座祭の神事が厳粛に執行された。

九日（土）の神幸祭では、神田神社の三柱の御神霊を載せた鳳輦・神輿、諫鼓山車、獅子頭山車など約五〇〇人からなる行列が氏子区域を巡った。九日の早朝、神田神社を出発し、氏子総代の献饌や氏子町会の出迎えと引き渡しを受けながら神田から日本橋に及ぶ氏子町会を一日で巡り、夕刻、無事に神田神社へ還御を果した。途中、大手町の将門塚（神田神社旧蹟地）と東日本橋二丁目の両国御飯屋では神田神社宮司を斎主とする厳肅な神事を執行し、神田五軒町町会のアーツ千代田3331では今回初めての試みとして巫女舞が演じられた。

（二）附祭

九日の神幸祭の途中、日本橋の有馬小学校からは神幸祭の後ろに附祭の行列が加わった。附祭は沿道に集まった多くの見物人の興味を引いた。この附祭には、相馬野馬追騎馬武者一〇騎、「大江山凱陣」、「大鯰と要石」、江戸っ子「みこしー」、神馬「あかり」、東京藝大「白虎」、東京藝大サンバチーム、稚児太鼓、ボーイスカウト千代田第六団、万世橋交通少年団、神田消防少年団、「花咲か爺さん」、「浦島太郎」、神田一ツ橋中学校生徒、慶應幼稚舎の子どもたち、有馬小学校生徒、遠州横須賀・三熊野神社の祢里二基、文化資源学会・都市と祭礼研究会、大江戸和髪隊らが参加した⁽¹⁾。

平成二七年の付祭には、アドバルーンでできた「浦島太郎」の曳き物が新たに加わった。小網町児童公園から神田神社までは慶應幼稚舎の子どもたちが浦島太郎を曳き、無事宮入を果たした。また、かつて神田祭で使用されていた山車が静岡県横須賀から里帰りした。里帰りした山車は、三熊野神社の祢里二基で、お囃子に合わせて独特のリズムを刻んで山車を動かしながら、無事宮入を果たした。

（三）神田猿楽町町会の新調神輿の披露

氏子町会の一つである神田猿楽町町会では、神田祭に先立ち大人神輿を新調した。宮本卯之助商店から神田猿楽町に新しい神輿が五月三日（日）に到着した。この日の九時一五分頃から、神田神社拝殿前で神輿新調清祓並びに御霊入れ式が行われた。祭典終了後、新しい神輿を囲んで神田神社神職と半纏姿の神田猿楽町町会の関係者らで記念撮影が行われた。そして、神輿を神門の外へ移動した。神

門の外から神門を潜り、神田神社拝殿前まで巡幸する新しい神輿の披露が行われた。この神輿の披露では、神田猿楽町町会の人たちが神輿を担ぎ、一足早い宮入をみるかのような盛り上がりとなった。

神田神社での神輿の披露が終わると、神輿はトラックの荷台に積まれ、神田猿楽町へ移動した。一時過ぎから神田猿楽町町会の神酒所前を起点として、新しい神輿の町内への披露が行われた。鳶の頭による木遣りを皮切りに、半纏姿の町会関係者、トラックの荷台に載せられた神輿の順に町内披露を開始した。神輿を載せたトラックは町内の細い道にも入り、神田猿楽町内を一巡した。家の二階や商店の前で新しい神輿を一目みようと思える人たちを少なからずみることができた。神輿をバックに記念撮影をするお年寄りの姿もみられた。町内にある神田女学園では、日曜日にもかかわらず、神輿が学園の前を通るときだけ、シャッターを開けて学園の関係者が神輿を出迎え、通り過ぎるとシャッターを下ろして門を閉めるといった光景がみられた。

正午前に神酒所に戻り、町内の披露を終えた。そして、近くのホテルで記念式典が行われた。

(四)「おまつり広場」・明治座前連合渡御

一〇日の一二時半頃から秋葉原の中央通りを多数の神輿が埋め尽くす連合渡御「おまつり広場」が行われた。「おまつり広場」には、外神田連合一二町会の神輿のほか、岩本町・東神田地区連合の岩本町一丁目町会や神田大和町会、神田駅東地区の鍛冶町一丁目町会の神輿などを加え、神田祭に里帰りした遠州横須賀の三熊野神社の祢里二基も加わった。連合渡御の開始の前に、自民党本部から借りるという選挙カーを式台として、外神田連合の神輿の会長、神田神社宮司のほか、三熊野神社の祢里の地元である静岡県掛川市長、千代田区長が挨拶をした。その後、連合渡御が行われ、多数の観客が見守る中、大きな盛り上がりを見せた。

また、一〇日の同じ時間帯には、明治座前に日本橋五地区の一〇町会の神輿が集合し、式典が行われた。式典では、日本橋五地区連合会長、中央区長、氏子総代(明治座)、水天宮宮司が挨拶をした。平成二七(二〇一五)年は、水天宮が建替え工事のため、水天宮の仮宮が明治座の隣、浜町公園の入口にあった。そのため、水天宮仮宮へ参拝する長い行列と神田祭の一〇町会の連合渡御が並行することとなり、新たな賑わいを形成した。ちょうど、平成二七年の五月一〇日は、日曜日の「戌の日」に当たったため、多くの参拝客が水天宮

仮宮へ訪れ、長い行列を作ったためである。行列を誘導する警備員によれば、「日曜の戌の日でなければ、こうはならない」と話していた。

(五) 船渡御

神幸祭で昼御饌を奉る両国旧御仮屋の地元・東日本橋二丁目町会では、一二年振りに船渡御を行った。江戸開府四〇〇年を迎えた平成一五(二〇〇三)年に船渡御を実施して以来のことである。浜町から船に載せられた神輿は神田川を遡り、万世橋まで船渡御を行った。途中の橋という橋には、船渡御の模様を一目みようとする多くの見物人が押し寄せた。万世橋で大型クレーンで船から路へ神輿を吊り上げて移した。その後、神輿を担いで巡幸し、一〇日夜、無事に宮入を果たした。平成二七年の神田祭における神輿宮入の最後を飾った。

(六) テレビ放映・インターネット配信

テレビ東京では、開局一五周年特別企画としてBS JAPAN「生中継！神田明神遷座四〇〇年記念神田祭」と題して、一〇日の一五時～一七時半の時間帯で内神田鎌倉町会の宮入の様子や多町二丁目町会の町内渡御の様子を中心に神田祭を生中継した。TOKY O MXテレビの『日本の祭り』(テレコムスタッフ制作)では、須田町中部町会の「元祖女みこし」を中心に記録し「ダイドードリンコスペシャル 神田祭～遷座四〇〇年 受け継いできた日本のこころ」と題して、平成二七(二〇一五)年六月一四日(日)に放映した。

また、神田神社とNTTコミュニケーションズが制作した「神田祭・ch」では、インターネット中継を行い、その模様を終日配信した。

二、平成四年と平成二七年の神田祭の経年的変化

ここでは、主として平成四（一九九二）年と平成二七年の神田祭の経年的変化について整理しておきたい。

（一）神酒所

神酒所は、昭和四三（一九六八）年は七五町会、平成四（一九九二）年は七四町会で設置した⁽²⁾。平成二七年は、一〇七町会のうち八四町会（七八・五％）で神酒所を設置した。ただし、この数値には合同で神酒所を設置する町会の数を含んでいる。例えば、錦連合では、錦連合で一つの神酒所を作るが、錦連合を構成する錦町二丁目町会、錦町三丁目町会、錦町三丁目第一町会、小川町三丁目南部町会の四町会を神酒所の設置する町会数にカウントしている。合同で設置するものを一としてカウントすると、神酒所の設置数は七六になる。

神酒所を設置する町会では、神輿や山車の巡幸を行う町会が大多数を占めるが、神田山本町会、神田練塀町会、秋葉原町会では神輿や山車の巡幸を行わないが神酒所のみを設置している。

（二）祭礼行事（主な行事）

「御霊入れ」は、平成四（一九九二）年は七六町会⁽³⁾であったが、平成二七年では、前節の調査時インタビューと今回の調査を総合すると、七〇町会と二連合（錦連合三町会・小川町連合四町会）での実施が確認できた。「御霊返し」（御霊抜き）は、平成四年は三五町会⁽⁴⁾であったが、前節の調査時インタビューと今回の調査を総合すると、一七町会での実施が確認できた。

「御霊入れ」は大きな変化はないことが窺えるが、「御霊返し」は減少している。前節でみたように、東日本橋三丁目橋町会と東日本橋二丁目町会は神田神社への宮入が終わると神田神社で御霊返しを行い、そのまま神輿庫へ神輿を納める。同様に、神輿渡御が終了しですぐに「御霊返し」を行うのが四町会（神保町一丁目町会、神田佐久二平河町会、神田佐久間町三丁目町会、東神田三丁目町会）である。神輿渡御終了から三〇分以内に「御霊返し」を行う町会が三町会（岩本町三丁目町会、岩本町一丁目町会、蛸殻町東部町会）ある。



「元祖女みこし」の神田神社への宮入（平成27年、筆者撮影）

神輿巡幸の終了からあまり時間が経たないうちに「御霊返し」を行っていることがわかる。

平成四年は、「町内渡御」は八〇町会、「神輿宮入参拝（連合渡御）」は七三町会⁽⁵⁾であったが、平成二十七年では、「町内渡御」は六九町会と二連合、「連合渡御」は六四町会と二連合、神田神社への「神輿宮入参拝」は五三町会と二連合の実施が確認できた。

また、前節で指摘したように、金曜日の神輿巡幸や懇親会の実施など町内の企業の社員を対象とした金曜日の祭りを実施している町会が、平成二十七年は、神保町一丁目町会（金曜日の神輿巡幸）、神田大和町会

（前夜祭・企業との交流会）など一六町会で確認できた。

（三）一般動員（祭りの担い手）

〔女性の参加〕

平成二七（二〇一五）年の神田祭では、前節でみた松平誠の特徴の【一】で指摘された女性の参加については、平成二五年と同様に、

全体としては増加傾向にあることが窺われる。須田町中部町会の「元祖女みこし」（宮入を含めた全区間の巡幸を女神輿で行う神輿）は、参加者の女性を一般募集しているが、平成二十七年の参加者は一八四人となり、平成二十五年の一六九人よりも増加した。

このほか、一部区間を女神輿にする町会が平成二十七年は、祭礼行事の記載にみられるように、神保町一丁目町会（日曜一七時頃の町内渡御）、内神田鎌倉町会（日曜・宮入後など）、神田鍛冶三会町会（金曜一九時の町内渡御）、神田淡路町二丁目町会（土曜一八時・ワテラス）、鍛冶町二丁目町会（金曜一八〜一九時・女性五〇人限定）、神田駅東地区連合（連合の子ども神輿が宮入を終え復路で連合の女神輿になる）などでみられた。

こうした女性の参加者のニーズに応え、新たな参加者の開拓にもつなげようとする講座も行われた。神田祭に先立ち、四月八日（水）の一九時からアーツ千代田3331を会場として、女性を対象とした神田祭入門講座が開催された。この講座は、神田神社のバックアップと外神田連合の協力のもと行われた。

〔他町会の参加者〕

前節でみた松平誠の特徴の【二】に含まれる他町会（同じ地区連合以外・氏子外）の参加者は、各町会の奉納金や奉納品の芳名からも参加の実態を窺うことができる。

平成二七（二〇一五）年の他町会（同じ地区連合以外・氏子外）の参加者は、神田同朋町会（茅場町二・三丁目町会）や浜町三丁目西部町会（鉄砲洲湊三青年部）など二二町会でみられた。神田祭への参加に際し、参加先の町会に対して奉納品を寄付するのみならず五千元〜一万円の寄付を行っていることがわかる。

〔神輿同好会の参加者〕

前節でみた松平誠の特徴の【三】に挙げられた神輿同好会には、神輿会や神輿愛好会のみならず、睦会や実質的に町会の青年部が構成する神輿会が含まれると考えられる。そのため、実態としては他町会の参加者と重複することも想定される。ここでは重複分も含め、

平成二七（二〇一五）年の各町会の奉納金や奉納品の芳名から窺える神輿同好会の参加状況についてみておきたい。

平成二七年の神田祭では、神保町一丁目町会（むさし神輿會）や神田須田町二丁目町会（横濱連合、横濱金沢睦）など三八町会で神輿同好会の参加がみられた。平成四年の神田祭では一九町会^⑥であり、神輿同好会の参加は拡大している。平成二五年の神田祭では四五町会（把握分のみ）であったが、平成二七年の神田祭においても、奉納金や奉納品を納めない神輿同好会や芳名板への未揭示分の存在が考えられ、実際には三八町会を超える町会での参加が窺われる。

神輿同好会は、平成四年の神田祭では、関東一円の神輿同好会が参加している^⑦。平成二七年においても、東京二三区内や二三区以外の東京都内、神奈川・埼玉・千葉・群馬など関東地方を拠点とする団体が中心に参加していることがその名称から窺える。

参加する神輿同好会は、一千元〜三万円（五千元と一万円が多い）の寄付金を納めるか、清酒やビールなどを奉納して町会の神田祭に参加している。

〔子どもの参加者〕

平成二七（二〇一五）年の神田祭では、地区連合ごとに特定の小学校・幼稚園のPTAから町会へ奉納がなされていて、小学校や幼稚園を媒介として町会の神田祭への子どもの参加が行われていることが窺える。

しかしながら、神田中央連合や神田駅東地区連合では、町内の子どもの参加が少なく、地区連合で一つの子ども神輿の連合渡御・宮入を行っている。

一方で、日本橋五地区連合では新住民の子どもの参加者数が多いところもある。浜町三丁目西部町会では、曳き太鼓（山車）に土曜・日曜各一二〇人、浜町三丁目東部町会では土曜・日曜各一〇〇人、浜二町会では土曜夜一三八人、日曜が約一五〇人など、子どもの参加が新住民を巻き込んで進んでいる。「ママ友だち」のロコミ（LINE）のネットワークもあり、ある町会のお祭りで出されるお菓子が豪華であるとその町会のお祭りに殺到するとの話も聞かれた。

また、参加する子どもは、子ども神輿よりも曳き太鼓（山車）への参加者数が多いことが窺える。平成二五年の神田祭でも同様の傾

向がみられる。岩本町・東神田地区連合の神田松枝町会では、「羽衣」山車という人形山車を持っているが、この山車の曳き手として新住民の子どもの参加が進んでいる。新住民の子どもにとっては山車の方が参加が進むのであろうか。

三、平成二十七年の調査から新たに浮き彫りになった特徴

(一) 地域の神社・小祠との関わり

神田祭と地域の神社や小祠との関わりは、菌田稔⁽⁸⁾や松平誠⁽⁹⁾、清水純⁽¹⁰⁾の研究ではほとんど触れられていない。しかしながら、平成二七（二〇一五）年の神田祭では、町会の神田祭と地域の神社や町会で祀る小祠との関わりがみえてくるのである。

〔水天宮・末廣神社・松島神社との関わり〕

日本橋三地区連合の蛸殻町東部町会と日本橋五地区連合では、水天宮との関係の深さが窺える。水天宮のお膝下である蛸殻町東部町会では、水天宮から二〇万円の寄付と清酒二本の奉納、平成二七（二〇一五）年に水天宮の仮宮が置かれた日本橋五地区連合では、全町会（東日本橋一丁目村松町会、久松町町会、浜町一丁目町会、浜二金座町会、浜町二丁目親合町会、浜町二丁目西部町会、浜二町会、浜町三丁目東部町会、浜町三丁目西部町会、中洲町会）に対し、水天宮から各二万円の寄付がなされた。

また、日本橋三地区連合では、神田神社・末廣神社・松島神社の三社の「連合祭」として、蛸殻町東部町会、人形町二丁目三之部町会、人形町二丁目浪花会（神田神社氏子外、資料二未記載）、人形町一丁目町会、人形町二丁目一之部町会（神田神社氏子外、資料二未記載）、蛸殻町一丁目自衛会、蛸一共和会で神輿連合渡御を行った。平成二十七年の連合渡御は、蛸一共和会を集合場所として五月一〇日の一〇時から行われた。

〔各町会で祀る小規模神社や小祠との関わり〕

神田中央連合に属し、小川町北部四町会で構成する小川町連合では、幸徳稲荷神社を祀る。この幸徳稲荷神社の大祭と神田神社の大祭（神田祭）を一緒に行う形で小川町連合の神輿渡御を行った。小川町連合の神輿は、幸徳稲荷神社の宮神輿としての性格も有しているようであり、この神輿は幸徳稲荷神社に普段は保管されている。前節で指摘したように、小川町連合を形成する上で幸徳稲荷神社の存在は大きい。小川町北部二丁目町会の神酒所は、幸徳稲荷神社内に設置し、「神田神社」と「幸徳稲荷大明神」の掛け軸を祀る。また、錦連合に参加する小川町三丁目南部町会では、町内の五十稲荷で町会の半纏の貸出と返却を行った。

中神田十三ヶ町連合の内神田鎌倉町会では、町内の御宿稲荷神社に神田祭に際して高張提灯を祀った。また、浦安稲荷神社から一万円が寄付された。内神田旭町会では、佐竹稲荷神社を神酒所とした。須田町中部町会では、神田祭に際し、町内の豊潤稲荷神社に供え物をして祀った。須田町北部町会では、町内の出世稲荷神社から一万円が寄付された。

外神田連合の神田同朋町会では、町会の氏神・妻恋神社と神田神社の掛け軸を神酒所に祀り、妻恋会から一万円が寄付された。神田駅東地区連合の神田須田町二丁目町会は、町内が柳森神社、神田神社、下谷神社の三社の氏子に分かれ、神酒所には三社の掛け軸を祀る。土曜日に柳森神社へ宮入をし、日曜日に神田神社への宮入を行った。

岩本町・東神田地区連合の神田松枝町会では、町内の繁栄お玉稲荷から金一封が寄付された。神田東紺町会では、神酒所を町内の金山神社に設置した。大手・丸の内町会では、史蹟将門塚（神田神社旧蹟地）を起点として史蹟・将門塚保存会大神輿の巡幸が行われた。

日本橋二地区連合の小伝馬町三之部町会は、竹森神社の隣のビルの一階に御飯屋を作り、竹森神社例大祭として実施する。富沢町町会では富沢稲荷神社を起点に子ども山車の巡幸を行った。

日本橋三地区連合の人形町一丁目町会では、町内にある茶之木神社の世話人会から二〇万円が寄付された。日本橋五地区連合の久松町町会では、神酒所が久松稲荷大明神を祀った久松町会館に作られる。浜町二丁目西部町会では、神酒所が元徳稲荷神社・網敷天満神社に作られ、元徳会から一万円が寄付された。浜三西部町会では、神酒所が濱町神社に作られ、濱町神社崇敬会から金一封と清酒、陶楽神社から三〇万円が奉納された。中洲町会では、神酒所が中洲町会事務所に作るが、町会事務所は金比羅神社の境内にある。

〔町内の寺院、その他の宗教施設との関わり〕

東日本橋二丁目町会では、神酒所が薬研堀不動院に作られ、薬研堀不動院から二〇万円が寄付された。薬研堀不動院は、九日の神幸祭で鳳輦・神輿に昼御饌を奉る両国旧御飯屋である。浜二町会では神酒所が浜町公園作られる。浜町公園内には清正公寺があるが、そこから二万円が寄付された。浜二町会の曳き太鼓には山車人形として加藤清正の人形が付けられる。外神田三丁目金澤町会では、町内の神田寺から一万円が寄付された。

なお、岩本町三丁目町会では世界救世教主之光教団神田布教所から一万円、神田和泉町町会では金光教東京教会から三万円の寄付があった。

こうした地域の神社や小祠、寺院などを町内が結集するための拠点として活かしながら、町会の神田祭を維持している姿がみえてくるのである。

(二) 企業との関わり

企業との関わりも各町会の芳名板から窺える。例えば、東神田豊島町会(株龍角散…二〇万円)、神田和泉町町会(YKK・凸版印刷…各一〇万円)、室町一丁目会(三越…金一封、三井不動産…五〇万円、山本海苔店…三〇万円)などがある。岩本町三丁目町会では、前節でみたように一般動員(祭りの担い手)は企業に特化しているが、行事経済(祭礼費)も山崎製パングループ、本間組、田島グループの企業に特化していることがわかる。

また、再開発との関わりも窺える。安田不動産が中心となって再開発を進めた神田淡路町二丁目町会(ワテラス)と浜町三丁目西部町会(濱町神社)、三井不動産が中心となった神保町一丁目町会、室町一丁目会(コレド室町)などの再開発を担う大手不動産会社が町会の神田祭への高額の奉納を実施している。

(三) 「匿名」という名の芳名

各町会の神田祭における芳名板は、個人や法人などの団体が奉納金や奉納品の寄付を行って、奉納者の名前を芳名板に掲示して町内外の人たちに見せることに意義があると考えられる。しかしながら、「匿名」という芳名で寄付を行う個人や団体が少なからず存在することが今回の調査からみえてきた。

神田中央連合、外神田連合、神田駅東地区連合、日本橋一地区連合・二地区連合・四地区連合では「匿名」の芳名はみられなかった。中神田十三ヶ町連合では司一町会（一万円に一本）と淡路町一丁目町会（三万円に一本）、岩本町・東神田地区連合では神田大和町会（五千円に一本）、秋葉原東部地区連合では東神田三丁目町会（三千元に一本）でみられた。

日本橋三地区連合では、人形町一丁目町会（五千円に一本、一千元に一本）、蛸一共和会（一万円に三本、五千円に二本、二千元に一本、一千元に一本）、蛸殻町一丁目町会自衛会（五万円に一本、一万円に一本、五千元に一本、三千元に一本、一千元に一本）、蛸殻町東部町会（五千元に一本、ビールケースに一本、お菓子に一本）でみられた。

日本橋五地区連合では、浜町二丁目親合町会（五千元に一本）、浜二町会（一万円に一本、五千元に一本、一千元に一本）、浜町三丁目東部町会（二千元に一本）、浜町三丁目西部町会（一万円に一本、一千元に一本）、中洲町会（五万円に一本、二万円に一本、五千元に一本、三千元に一本、一千元に一本）でみられた。

日本橋三地区連合と日本橋五地区連合に「匿名」の芳名が集中していることがわかる。大多数が奉納品ではなく奉納金で「匿名」を使用し、金額は一千元～五万円である。

まとめ

平成二七（二〇一五）年の神田祭について、観察記録を中心とした調査データからみえる特徴についてみてきた。

一般動員では、女性の参加者の増加、一定数の他町会の参加者と他町会による寄付の存在、氏子町会全体に広がる神輿同好会の参加と神輿同好会による寄付の存在、子どもの参加者と小学校・幼稚園の関係、日本橋五地区連合での子どもの参加者の増加が確

認できた。また、氏子町会に近接する地域の神社や町会の小祠の存在も、町会の神田祭を実施する上で町内の結集のための拠点となっていることが窺われた。企業との関わりにおいては、高額の奉納をする大手不動産会社と、再開発が実施される地域社会との関わりが神田祭を通してみえてきた。そして、「匿名」という寄付の存在も浮き彫りとなった。

石井研士は、雑誌『東京人』に掲載された「生き残る神社、生まれ変わる神社」の中で、高円寺の阿波おどりにおける氷川神社境内の賑わいと神田祭における「おまつり広場」（秋葉原中央通りの連合渡御）・神田神社への神輿宮入を例に挙げながら、都市の祝祭の賑わいについて触れた上で「読者の皆さんは、かつて子どもの頃、神社のお祭りが楽しみだった記憶をお持ちではないだろうか。地域社会への私たちの関わりが薄れ、少子化が進行したために、神輿を担ぐ子どもの数が減ってしまった。地域の氏神の祭礼の衰退と都市の祝祭は同じ現象の表裏である（11）」と指摘している。果たして、平成二七年の神田祭調査からこの特徴をみることもできるのであるか。

平成四年の松平の調査と比較すると、平成二七年の「御霊入れ」の実施率に大きな変化はないものの「御霊返し」の実施率は大幅に減少した。また、神幸祭の「受渡し」も前節で指摘したように、町会の境から町会の境へ鳳輦を受け渡していくというよりは、地区連合で合同して神幸祭の「受渡し」を行う形に変化している。つまり、個別の町会で実施する神事の要素はどちらかといえば現状維持ないし縮小傾向にあるといえる。

一方で、町内渡御と連合渡御は、いずれも平成四年と比較すると実施の総数は減少している。ただし、神輿宮入参拝に関しては、松平の調査は連合渡御と宮入を同じものとしてカウントしていて、連合渡御を行うが神田神社への宮入は実施しない日本橋五地区連合の事例をどのように判別するかが不明である。そのため、平成四年の松平の調査結果との比較は困難である。

少なくとも、平成四年と同様に平成二七年も多くの町会が町内渡御と連合渡御をセットで行っていることがわかる。つまり、町会の祭礼行事において、町会単独で行う要素よりも地区連合を単位とした合同で行う要素が拡大したことが窺える。地域社会の変容によって、居住人口が大きく減少し、神輿同好会や女性、様々なネットワークによる動員によって一般動員を維持するのみならず、近隣町会や地区連合で合同で行うことによって町会の役割動員を維持しているのではなからうか。

例えば、小川町連合では、連合で一つの神輿を持ち、連合の四ヶ町の町内渡御、連合渡御や神田神社への神輿宮入参拝を行っているが、その一方で、小川町三丁目西町会、小川町北部二丁目町会、小川町北三町会の各町会で神酒所を設営し、各町会の神輿を飾っている。町会の祭りや連合の祭りを棲み分けて連合渡御や神輿宮入参拝を維持しているようにみえる。町会の祭りと連合の祭りをつなぐ中核に小川町連合で祀る幸徳稻荷神社があるといえる。

以上のように、神田祭における神輿宮入参拝や「おまつり広場」などのような大規模な連合渡御といった多数の観客を集める都市の祝祭が存在する一方で、町内の祭りが衰退・縮小する場合と、逆に維持・拡大し活性化する場合があるのではなからうか。つまり、「地域の氏神の祭礼の衰退と都市の祝祭は同じ現象の表裏」であることは確かに一面では当てはまるものの、実態はもう少し複合的なものであることが平成二七年の神田祭調査から窺える。つまり、都市の祝祭と町内の祭りが対になることによって、町会の神田祭が活性化しているのではなからうか。

では、町内の祭りの衰退・縮小と維持・拡大の境目はどこにあるのだろうか。

一つは、前節で指摘したように、須田町中部町会の「元祖女みこし」、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車、紺屋町南町会のダンボール製の神輿など、特徴的な祭礼の象徴の有無であるのではなからうか。これらの祭礼の象徴の誕生や復活などを通じて、祭りが拡大していることが指摘できる。言い換えれば、祭礼の象徴の誕生や復活を行った町会の人たちの存在が指摘できる。人的な要因が町会の神田祭の盛衰を左右しているといえるかもしれない。また、幸徳稻荷神社のように、各町会で祀る地域の神社や小祠などの存在も大きいのではなからうか。

註

(1) 『平成二七年神田祭』神田神社、平成二七年。

(2) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。

- (3) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (4) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (5) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (6) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (7) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (8) 藺田稔 「祭と都市社会―「天下祭」(神田祭・山王祭) 調査報告(二)―」 『國學院大學日本文化研究所紀要』第三三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (9) 前掲松平 「都市祝祭伝統の持続と変容」。
- (10) 清水純 「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―」 『日本民俗学』第二七一号、日本民俗学会、平成二四年。
- (11) 石井研士 「生き残る神社、生まれ変わる神社」 『東京人』二〇一五年四月号、都市出版社、平成二七年、七三―七四頁。

第三節 現代の神田祭・蔭祭考

神田神社の氏子町会の中には、神田祭が蔭祭の年にも、町会神輿の巡幸を行う町会が複数ある。神田和泉町会の蔭祭における町会神輿の巡幸は三〇年近い歴史を持っている。江戸開府四〇〇年を境に、それまで神田祭への参加が空白地帯であった大手・丸の内町会（大手町・丸の内地区）では、史蹟将門塚保存会大神輿を新調し、本祭及び蔭祭の神輿巡幸を行っている。宮本町会と東日本橋二丁目町会では、東日本大震災以降、蔭祭の子ども神輿の巡幸を始めた。また、隣接する地区の本祭へ参加する事例、企業との懇親会を行う町会などがある。本節では、こうした現代の神田祭・蔭祭について分析を行う。

これまで戦後の都市祭りを対象とした先行研究では、祭りの担い手と観客の間に生じる「見る／見られる」あるいは「見る／見せる」の関係性が主要なテーマの一つであった⁽¹⁾。しかしながら、本節で取り上げる蔭祭に於ける神輿の巡幸は、観客をほとんどみることのできない祭りである。実は、祭りを支える側の新たな町内共同のあり方を考える上で、観客がほとんどいない蔭祭の分析は意義あるものであると考える。毎年、淡々と祭りを行っているという訳ではないのである。

そこで、本節では、祭りの担い手と観客の間に生じる「見る／見られる」あるいは「見る／見せる」の関係とは異なり、先行研究ではほとんど指摘されることがなかった、蔭祭の役割や近隣町会との祭りにおける関係など、都市祭りを維持する社会的なシステムについて明らかにしたい。

ところで、現代の本祭と蔭祭の関係を考察した研究は、ほとんどなされていない。

「座談会 都市の祭り」において、佃・住吉神社の平岡好和が「佃はいわゆる本祭りの時は大人の遊びになってしまっんです。大人のお祭りなんです。子供の面倒をみんながみないんです、自分たちがお祭りをやって。(笑)ですから蔭祭りの時には子供の神輿だけ出してやる。それでないとお祭りというものをだんだん身近に感じなくなってしまい、お祭りの雰囲気というものから遠ざかり、神輿を担げるようにする準備や祭りの飾り付け等を忘れてしまう。これが困るので、蔭祭りの時だけは何としても子供に担がせようじゃないかということ、毎年やっております⁽²⁾」とわずかに触れているのみである。ここからは、「本祭Ⅱ大人の祭り」「蔭祭Ⅱ(祭りの継

承を目的とした)「子どもの祭り」として位置付けられていることがわかる。同じ座談会の中で、藪田稔は秩父の秩父祭と川瀬まつりについて、「冬の十二月三日を中心とする秩父祭が大人の祭りとし、大体夏のこの祭りは子供主体の祭り、子供と青年が中心で行われる祭りです⁽³⁾」と述べている。ここからは、「秩父祭」＝大人の祭り、「川瀬まつり」＝子どもと青年の祭りとして位置付けられていることがわかる。

柳川啓一は秩父の夏の川瀬まつりと冬の秩父祭を調査し、わずかではあるが両者を対比して「いいそえると、夏祭においても、小さな屋台が出て、七町がこれをもっているが、夏・冬両方の屋台をもつのは、上・中・本のみである⁽⁴⁾」と指摘している。

島田潔は、『神道宗教』(神道宗教学会)を中心とした戦後の祭祀学・祭り研究の研究史をまとめた上で「同一の神社の複数の祭りの相互関係というものを考慮した意味の解釈、世界観の抽出ということも、実は手付かずに残されており、今後考えてよいのではないかと思えます⁽⁵⁾」と指摘している。同様の問題意識から諏訪大社の複数の祭りに注目している⁽⁶⁾。

茂木栄は、「同一地域に伝承される複数の祭りの関係と位置づけに、よりいっそうの注意を払うべきことを、祭調査・研究に取り組み始めたばかりの筆者に、かつて柳川啓一先生はアドバイスして下さった⁽⁷⁾」として、奥三河の花祭伝承地域におけるシカウチ神事と花祭、田遊・田楽、その他の祭りの関係について古戸集落をケース・スタディとして分析している。

以上のように、同一神社・地域の複数の祭りの相互関係への視点が先行研究にみられる。現代の神田祭の蔭祭と本祭の相互関係を分析することには意義があると考える。

一、神田和泉町会の蔭祭

(一) 神田和泉町会の概観

神田和泉町は、JR秋葉原駅の東側のほど近い場所にある。昭和通りと清洲橋通りに挟まれた長方形のエリアが神田和泉町である。

神田和泉町の歴史については、町内に建てられた千代田区の町名由来板が簡潔にまとめているため、以下に引用しておく。

神田和泉町は、江戸時代、伊勢国津藩の藤堂家上屋敷、出羽国鶴岡藩の酒井家中屋敷などがあった。藤堂家は代々、和泉守を名乗ったことから、この町は和泉町と呼ばれるようになった。江戸時代は武家地であったため町名を持っていなかったが、明治五（一八七二）年、神田和泉町の名前が正式に誕生した。明治維新後、政府は津藩上屋敷跡地に東京医学所（現・東京大学医学部附属病院の前身）を設立した。さらに明治七年、酒井家跡に文部省医務局薬場を設立した。大正一二（一九二三）年九月一日、関東大震災で街は町民の必死の防火活動によって火災をまぬがれ、世の奇跡として市民の賞賛を受けた。そのため、この神田和泉町を含む一体は、昭和一四（一九三九）年一月に、東京府より「関東大震災協力防火の地」として顕彰され記念碑が建てられた。しかしながら、昭和二〇年三月一日未明の東京大空襲で町の全域が焼失した。戦後の昭和二三年には、現在の三井記念病院の敷地の一部に当時の農林省東京食料事務所ができ、全国知事会議や食糧需給上の重要な会議が開催された。現在の和泉公園は、食糧難時代のゆかりの旧跡である。

以上のように、神田和泉町は「関東大震災の防火の地」として知られている。

町内には、町会施設として、関口記念和泉会館（神田和泉町町会事務所）がある。和泉公園（公園内には「防火守護地」と「和泉公園誕生之碑」がある）の近くには、三井記念病院、坪井医院があり、院外処方薬局が多数店舗を構える。また、ちよだパークサイドプラザ、千代田区立いずみこども園、千代田区立和泉小学校（かつては「佐久間小学校」「佐久間幼稚園」があった）といった文化・教育施設がある。そのほか、凸版印刷本社、日本通運、YKK、キンビバレッジ（住友商事神田和泉ビル）、日本卓球などの企業が立地する。宗教施設には、金光教館（金光教東京教会）、日通が祀る金網稲荷神社がある。町内には中層階のビルが立ち並ぶが「テナント募集」の掲示が多数みられ、空き巣への注意の貼り紙が少なからずみられた。

神田和泉町の人口は、国勢調査によれば、平成一七（二〇〇五）年は、人口六七七人（男三五四、女三二三）、世帯数三〇六世帯であり、平成二二年は、人口五九四人（男三二〇人、女二七四人）、世帯数二八一世帯である。平成二二年は平成一七年に比べ、世帯数と人口総数がともに減少している。住民基本台帳によれば、調査対象とし平成二六年の五月一日現在の登録人口は、人口八一〇人（男四三四人、女三七六人）、世帯数四七三世帯である。

(二) 神田和泉町会の蔭祭の構成

平成二六(二〇一四)年の神田和泉町会の蔭祭は、五月一日(土)の夕方から夜にかけて、町会神輿への御霊入れと宵宮の子ども神輿の巡幸、翌一日(日)の午前子ども神輿の巡幸、午後大人神輿の巡幸、御霊返しが行われた。以下に、神田和泉町会の蔭祭の構成要素、概要についてみていきたい。

〔蔭祭のポスターの掲示場所〕

「神田祭 和泉」と書かれ、神輿の写真とともに神田和泉町蔭祭の日時と内容が記されたポスターが掲示された。今回の蔭祭に際しては、町内の一部に掲示されていた。平成二六(二〇一四)年四月二六日(土)の段階では、昭和通り沿いの小森金物店に一枚ポスターが貼られているのみであった。宵宮当日の五月一日(土)の段階では、小森金物店のほか、HINOYA(酒屋)など五ヶ所に掲示されていたが、町会事務所があり、一階が神輿の御仮屋となる関口記念和泉会館の前にはポスターの掲示はみられなかった。一日の蔭祭当日にも、和泉会館を始め、町内の多くで「神田祭 和泉」のポスターの掲示はみられなかった。

〔御仮屋と神酒所〕

町会関係者の話によると、神田祭(本祭)の神酒所は、十字路を挟んで斜め向かいの小林ビル(神田和泉町一―八)の一階に作られる。関口記念和泉会館一階は御仮屋となり、神輿が安置される。神田祭には神酒所と御仮屋が別々に作られる。

今回の蔭祭では、神酒所は作られず、関口記念和泉会館一階を御仮屋として大・中・小の神輿が三基(大・中・小神輿)が安置された。神輿への御霊入れは、本祭も蔭祭も関口記念和泉会館一階の御仮屋で行われる。昔はテントを神酒所にしたこともあったと伝えられ、関口記念和泉会館では葬儀も行ったという。

〔蔭祭の開始時期・主催者〕

蔭祭は、約三〇年前に町内のI・H氏が始めたという。蔭祭の主役は町会青年部のため、蔭祭の実行委員長も青年部長が務める。祭りの費用については、神田祭（本祭）は奉納金（寄附）で行うが、蔭祭は町会費で行っているという。

〔宵宮〕

五月一〇日（土）の一六時半頃、神田和泉町会の三基の神輿が安置された御仮屋（関口記念和泉会館一階）前で、神田囃子「泉笑会」の囃子屋台によるお囃子が始まった。やがて神田神社から神職二人を祭員として、一七時から町会長以下約一五人（和泉小学校の教員を含む）が参列して、御霊入れの神事が行われた。御霊入れは、御仮屋内の灯りが消され、警蹕が響くなか、大・中・小神輿の三基の神輿に対して行われた。終了後、関口記念和泉会館前に長机が並べられ、酒と寿司やオードブルなどの料理が用意されて直会となった。御霊入れの神前に供えられた御神酒が参加者に分けられた。直会には神職二人も参加した。

一九時、「神田雷神太鼓」の太鼓（「神田雷神太鼓」の半纏を着た子どもと大人の叩き手一人、女の子の数が多い）に合わせて、宵宮の子ども神輿の巡幸が始まった。子ども神輿は、小神輿と中神輿の二基で、神田囃子「子供連」の囃子屋台を先頭に、オンベ（御幣）、小神輿、オンベ（御幣）、中神輿の順で町内渡御を行った。

小神輿は神田和泉町の半纏姿の大人七く八人が担ぎ棒を持って支え、小学校低学年以下の子ども八人程度が担いでいた。子どものお母さんや和泉小学校の教員が手拍子をしながら、あるいは携帯で写真を取りながら、付き添った。中神輿は、神田和泉町の半纏姿の大人四人と和泉小学校の教員一人、私服で小さな子どもを背負ったお父さん一人が神輿を持って支え、小学校高学年くらいの子ども七人程度が担いでいた。神輿を担ぐ子どもは、女の子も多かった。子供連は、囃子屋台の左右を四人の半纏姿の大人が押して、屋台には子ども四人程度が乗り、「和泉小」の名前の入った半纏を着た大人や私服の大人（主に母親）が付き添った。

巡幸ルートは、一九時に関口記念和泉会館を出発すると、町内の路地↓佐久間学校通り↓町内の路地↓凸版印刷本社ビル前↓早尾ビル前（ファミリーマート神田和泉店の隣）「休憩」↓町内の路地↓岡本ビル↓町内の路地を経て、二〇時に関口記念和泉会館に還御した。所々で、神田囃子「子供連」の囃子屋台とともに、神田囃子「泉笑会」の囃子屋台もお囃子を奏でながら、子ども神輿の巡幸を盛り上

げた。中間地点の早尾ビルを過ぎた辺りから、中神輿の担ぎ手に神田雷神太鼓のハッピー姿の子どもたちや私服の子どもたちも新たに加わり、担ぎ手の子どもの数が一〇人以上に増えた。

見物人は、子どもの付き添いの親御さんや巡幸に関わる半纏姿の町会関係者以外、ほとんどおらず車の通りも少なかった。佐久間学校通りから町内の細い通りに入ると街灯の明かりも暗く、ビルの一階はシャッターが下りているところも多かった。神輿の一行が過ぎ去ると、人通りのない静かな土曜日の夜の街が広がった。街角に設置された自動販売機の明かりがまぶしいくらいであった。所々で神輿を支える半纏姿の大人たちは、お囃子に合わせて神輿を揺すり、「ワッショイ」と駆け声をかけ、巡幸を盛り上げた。神輿の一行から離れると、遠くにお囃子の音とかすかに「ワッショイ」の掛け声が聴こえた。

巡幸が終わると、子どもたちには弁当が配られ、解散となった。小・中神輿は御飯屋に納められ、後片付けが一段落すると、町会関係者は、町内の居酒屋・駒忠で打ち上げとなった。

〔蔭祭当日〕

五月一日（日）は、神田囃子「泉笑会」による午前七時の明け囃子で始まった。囃子屋台一台を一〇数人で交替しながらお囃子を奏して町内をジグザグに廻る。

一〇時頃、御飯屋前で神田和泉町町会会長、蔭祭実行委員長、神輿責任者、和泉小学校校長らによって式典が行われ、終了後に子ども神輿に巡幸が実施された。

子ども神輿の巡幸は、午前中、神田囃子「子供連」囃子屋台、オンベ（御幣）、小神輿、オンベ（御幣）、中神輿の順で行われた。

小神輿は、中神輿よりも背丈の小さい、小学校低学年と思われる子ども七〜八人程度が担ぎ、四〜五人の神田和泉町の半纏を着た大人が担ぎ棒を一緒に持って支えた。神田和泉町の半纏を着た大人の二〜三人が「神田祭 小神輿 和泉町々會」の襷をしていた。和泉小学校の教員も付き添った。

中神輿は、子ども約一二人（男・五人、女・七人）である。神田和泉町の半纏を着た大人五人くらいが前後左右に入って、一緒に担

ぎ棒を持って支えた。和泉小学校の教員四〜五人や私服のお母さんと思われる女性が付き添った。また、神田和泉町の半纏を着た大人の二〜三人が「神田祭 中神輿 和泉町々會」の襷をしていた。中神輿の前に行くオンベ（御幣）は神田和泉町の半纏を着た小さい女の子が持っていた。

子ども神輿は、一〇時過ぎに関口記念和泉会館を出発し、町内の路地↓佐久間学校通り↓清洲橋通り↓富士セルビル前（町会長ビル）〔休憩〕↓清洲橋通り↓三井記念病院前↓凸版印刷本社前↓早尾ビル前（ファミリーマート神田和泉店の隣）〔休憩〕↓町内の路地↓廣瀬ビル前（マンシヨンのソレーアード一〇一がある附近）〔休憩、アイスを配布〕↓MK氏宅前（酒屋HINOYA附近）〔休憩〕を経て、一一時二〇分頃、関口記念和泉会館に還御した。御仮屋には弁当が用意され、子どもたちは順番に並んで弁当と菓子を受け取って帰っていった。

お昼休憩を挟んで、午後からは大人神輿の巡幸が行われた。

一二時五五分、御仮屋前で大人神輿の巡幸前の式典が行われた。式典では、町会長、蔭祭実行委員長、神輿渡御責任者の挨拶のあと、「和泉町以外で和泉町の神輿に入れる半纏」の紹介が行われた。神田囃子「泉笑会」のほか、神田佐久二平河町会、東神田三丁目町会、神田佐久間町三丁目町会、神田松永町会と同じ秋葉原東部地区連合から参加する近隣町会の半纏が紹介された。

一三時、神田雷神太鼓の演奏に合わせて、神田囃子「泉笑会」の囃子屋台、オンベ（御幣）、大神輿の順に行列して町内渡御を行った。ビルとビルの間では、掛け声と手拍子がビルに反響していた。「エッサ、ホイサ」、あるいは「ワッショイ」の掛け声に、女性の「ソレツ、ソレツ」という声も混じっていた。時折、神輿について歩く担ぎ手が両手を挙げて、あるいは拳を挙げて神輿の巡幸を盛り上げた。巡幸の途中、担ぎ手が次々に入れ替わっていった。しかし、神輿が通り過ぎたあとは閑散としていて、神輿の巡幸を町内のビルから見物している人はみられなかった。町内の十字路では、神輿の先頭をいく「泉笑会」の囃子屋台の他に、「子供連」の囃子屋台を出して、お囃子を奏で祭りを盛り上げていた。

巡幸ルートは、御仮屋（関口記念和泉会館）前を出発すると、町内の路地↓佐久間学校通り（和泉公園、金網稲荷神社を通過）↓清洲橋通り↓富士セルビル前（町会長のビル）〔休憩〕↓三井記念病院前・凸版印刷本社前〔通過〕↓昭和通り↓町内路地↓井出ビル〔休

憩) ↓O 実行委員長店舗 (小休止) ↓早尾ビル脇 (ファミリーマート神田和泉町店脇の路地) (休憩) ↓凸版印刷本社ビル前 (通過) ↓町内路地 ↓和泉中央ビル (休憩) ↓M・K 氏宅前 (酒屋 HINOYA 附近) (小休止) を経て、御仮屋前に到着した。一〇分以上、御仮屋前で神輿を揉んだあと、一七時過ぎに拍子木が鳴らされ神輿を下ろし還御となった。そして、還御式が行われ、蔭祭実行委員長、大神輿責任者、神田和泉町町会会長が挨拶した。

(平成 26 年、筆者撮影)

一七時半、神田神社の神職二人を祭員として、町会長以下の関係者が参列し、小・中・大神輿からの御霊抜きの神事が厳粛に行われた。神事は約一五分で終了した。その後、御仮屋前の路上に、長机が並べられ、ビールやおつまみ、オードブルが用意されて大神輿の担ぎ手と一緒に直会となった。そして後片付けを終え、蔭祭は終了した。

[平成二八(二〇一六)年の蔭祭]

二年後の平成二八年、神田和泉町町の蔭祭は、五月一四日(土)・一五日(日)の日程で行われた。町内に掲示された蔭祭のポスターによると、一四日一七時・御霊入れ、一五七日七時・明け囃子、一〇時・小中神輿お囃子町内渡御、一三時・小中大神輿お囃子町内渡御の内容で実施された。

平成二六年と異なるのは、把握した範囲であるが、御仮屋の場所が、関口記念和泉会館の建て替えにより、神田祭に神酒所が作られる小林ビル一階に設営された。一四日は、この小林ビル一階の御仮屋で小・中・大神輿へ御霊入れが行われた。神田和泉町町会関係者、和泉小学校・和泉こども園の教員、

神田和泉町に居住する神田東紺町会会長が参列した。終了後、直会が建て替え中の関口記念和泉会館前の路上で行われた。直会が一段



神田和泉町町会の蔭祭における大人神輿の巡幸

落すると、大神輿が出され、関口記念和泉会館近くの十字路から昭和通り方面に向かって、神田囃子「泉笑会」の囃子屋台に先導されながら、短時間であるが大神輿を担いだ。町会長や町会役員、神田東紺町会会長らが神輿を担ぎ、私自身も参加した。少ない人数で大神輿を担ぐため、一人担ぎ手が抜けるとかなりの重みが肩にかかってきた。参加者には終盤、飛び入りの参加者もいたようで、神田和泉町町の半纏を付けず、リュックサックを下げた若者が神輿の後ろの担ぎ棒に入って担いでいた。宵宮の短い大神輿の渡御が終わると、町内の居酒屋「駒忠」で打ち上げとなった。この日は、二年前と異なり、子ども神輿の渡御は行われず、代わりに大神輿の短時間の渡御が行われた。そして、翌一五日、午前中のみならず、午後も大神輿の町内渡御と一緒に、子ども神輿の巡幸も行われた。御飯屋の場所、御霊入れ後の大神輿の巡幸、宵宮の子ども神輿の巡幸がなく蔭祭当日の午後巡幸に子ども神輿の巡幸が行われたことが平成二六年の蔭祭と異なる点であった。

(三) 祭りの担い手(参加者)の数

〔子ども神輿の参加者〕

神田和泉町の町内に立地する和泉小学校の校長によると、「地域あつての学校だからである」という意識のもと、和泉小学校の教員は蔭祭に参加している。蔭祭当日には六人、宵宮にも六、七人が参加したという。蔭祭に参加する子どものうち、二〇人程度が和泉小学校の生徒であるという。教員たちは和泉小学校の校章の入った黄緑色の半纏を着ていた。

なお、蔭祭当日、子ども神輿の巡幸後、参加した子どもに配布された弁当の数は約五〇である。つまり、子どもは最終的に五〇人程度が参加したことが窺える。

〔近隣町会の参加者〕

大神輿の周辺に集まった人たちの中には、「和泉町」の半纏を着た人以外に、他の町会の半纏を着た人が一定数みられた。緑色に黒地

で「東神田三」と書かれた半纏を着た東神田三丁目町会の人たち、茶色に白地で「佐久参」と書かれた半纏を着た神田佐久間三丁目町会の人たち、鼠色に紺（青）地で「佐久二平河」と書かれた半纏を着た神田佐久二平河町会の人たち、緑色に白地で「松永」と書かれた神田松永町会の人たちであった。この東神田三丁目町会、神田佐久間町三丁目町会、神田佐久二平河町会、神田松永町会の四町会はいずれも神田和泉町会と同じ神田神社の氏子町会で、「秋葉原東部地区連合」に属している。平成二五（二〇一三）年の神田祭では、神田和泉町会とともに、東神田三丁目町会、神田佐久間町三丁目町会、神田佐久二平河町会の三町会は、秋葉原東部地区連合で行う神田神社への神輿宮入参拝を実施した。

これらの近隣町会の蔭祭（大神輿巡幸）への参加者数は、蔭祭当日の聞き取りから判明している限りであるが、東神田三丁目町会が約一〇人、神田佐久間三丁目町会が町会の青年部長以下の青年部が一人、神田佐久二平河町会は四人（うち一人が「和泉町」の半纏を着用、青年部長・前青年部長が参加）、神田松永町会が一〇人（うち三人が「和泉町」の半纏を着用、青年部長が参加）である。このほか、神田松永町会の参加者の知人一〇人が「和泉町」の半纏を着て参加している。このうち八人が神輿同好会の「半粋会」のメンバーである。半粋会はSONYの社員の神輿会で、平成二六年五月現在の会員数は二〇人であるという。神田松永町会の関係も含め、近隣の四町会の参加者数の合計は五二人（判明分、うち和泉町の半纏を着用した一四人を含む）に上る。ただし、今回（平成二六年の蔭祭）は四町会が参加したが、例年、神田佐久間三丁目町会と神田松永町会の二町会が参加しているという。

〔神輿同好会の参加者〕

松永町会の関係で参加した神輿同好会「半粋会」のほかにも神輿会・神輿同好会の参加がみられた。判明している限りではあるが、「祭遊連」と「龍翔会」の二つの会のメンバーが参加している。

「祭遊連」は一〇人が参加した。祭遊連は、元々は神田和泉町会の青年部であったが、現在は色々な町会の青年部の集まりであるという。会員数は約三〇人である。参加した女性の一人は、母の実家が神田和泉町で、いとも住んでいるので毎年参加しているという。他の町会の青年部と仲良くなって、他のお祭りにも一緒に神輿を担ぎにくため会を結成したという。

「龍翔会」は一八人が参加した。船橋を拠点とする神輿同好会で、前町会長の頃から神田和泉町町会と付き合いがある。「例年、当たり前のようにお世話になっている」というくらい長い付き合いがあるという。

神輿同好会は、「半粋会」を含めると、合計で三六人に上り、いずれも「和泉町」の半纏を着ていた。

〔大神輿の参加者数〕

町会長のT・M氏によれば、今回の大神輿巡幸に参加した神田和泉町町会の会員は一二〇〜一三〇人という。ただし、これは神田和泉町の半纏の数から割り出した数字であり、実際にはもう少し少ない可能性も考えられる。町会会員の企業で大神輿巡幸に参加する凸版印刷の社員二人、YKKの社員二人の計二四人を除くと九六〜一〇六人である。先にみた他町会の関連で参加して「和泉町」の半纏を着た人一四人、「和泉町」の半纏を着て参加する「祭遊連」と「龍翔会」の参加者二十八人を除くと、五四〜六四人となる。実質的には六〇人前後の可能性が伺える。町会会員の凸版印刷とYKKの社員を加えると、七八〜八八人となり、町内は七〇〜八〇人と話す方もいたことから、町内の実質的な参加者数は六〇人前後ではないかと考えられる。このうち、町会の青年部は約四〇人である。これに、神田和泉町の半纏を着ない近隣の町会の人たち三八人を加えると、一五八〜一六八人になる。

(四) 特徴

以上、神田和泉町町会の蔭祭についてみてきたが、最後にその特徴についてまとめておきたい。

第一に、神田和泉町町会の蔭祭は、御飯屋を設営し、大人神輿（大神輿）のみならず、子ども神輿（小・中神輿）を含めた町会の三つの神輿に神田神社の神職を祭主として御霊入れと御霊抜き（返し）がなされるなど、本祭と同様に祭儀を厳粛に執行している。その一方で、本祭のように、神酒所は設営されず、祭礼の費用は奉納金（寄附）ではなく、町会費で賄われるといった違いがある。また、祭りの主催も、本祭のように町会長を祭典委員長として町会全体で祭りを担っていくというスタンスではなく、蔭祭の主催は、あくまでも青年部を中心としたものであるという違いがある。

第二に、蔭祭は、本祭のときには祭りを運営する側でほとんど神輿を担ぐことができず、交通整理や巡幸状況の確認など祭りを支える立場に徹していた神田和泉町会の人たち（特に、青年部）が、自分たちの神輿を自分たちで担ぎ、自分たちの祭りをを行う場になっている。いわば、本祭で祭りを支える側が、蔭祭で祭りをスル側になっていることが指摘できる。

第三に、神田和泉町会の蔭祭は、殊に大人神輿（大神輿）の町内渡御において、神田和泉町と同じ神田神社の氏子である「秋葉原東部地区連合」に属する四町会の青年部を中心とした人たちと合同で行っている。これは、第二の特徴と関連していて、神田和泉町以外の四町会、殊に宮入を行う三町会では、本祭では祭りを支える側に徹して自分たちの祭りを楽しみにくいだが、神田和泉町の蔭祭に近隣町会としてのつながりで参加することによって、自分たちの祭りを楽しむ場になっているといえる。秋葉原東部地区連合で結集して蔭祭を楽しむことによって、本祭以外にも近隣町会の特に青年部との交流を持ち、秋葉原東部地区連合としての一体感を深めると考えられる。こうした青年部の交流が「祭遊連」のような近隣の青年部を中心としたメンバーで結成する神輿会の誕生へとつながっていることが窺える。

第四に、神田和泉町会の蔭祭は、地域社会の外から訪れる観客をほとんどみることができない「観客のみえない祭り」である。そのため、観客と神輿の担ぎ手との間の「見る／見られる」あるいは「見る／見せる」の関係が成立しにくい。にもかかわらず、大神輿の巡幸において、手拍子をして神輿を担ぐ掛け声も大きく、それなりの盛り上がりが見えるのは、第二・第三の特徴と関連して、蔭祭は祭りのスル側として、自分たちの祭りを楽しめる場になっていることが考えられる。しかも、神田和泉町単独ではなく、秋葉原東部地区連合の四町会と一緒にあって、いわば、楽しめる「連合渡御」を行っているかのようにみえる。

第五に、蔭祭に際して、神酒所の設営を行わないのみならず、屋台（出店）も出さず、祭りの提灯を軒先につるすなど、町内の家々で祭りの装飾がほとんどみられない。蔭祭のポスターの掲示も少ない。御仮屋前の直会や町内の居酒屋での打ち上げでアルコールは出されるが、神輿の巡幸においてはアルコールが出される要素は必ずしも多くはない。その一方で、太鼓やお囃子などの祭りの音には満ちているといえる。子ども神輿（小・中神輿）の巡幸には子供連の囃子屋台が先導するのみならず、随所で大人の泉笑会の囃子屋台もお囃子を演奏して、音によって祭りを盛り上げようと演出している。祭り囃子の音に惹かれて、みに来た隣接する下谷神社の氏子町会

の神輿を担ぐ担ぎ手が表れたように、祭りの音の存在は大きいといえる。

このように、神田和泉町町の蔭祭は、地域社会の外から訪れる観客は少ないものの、それをお囃子や太鼓の音の演出によってカバーしながら、本祭ではできない、地域社会の人たちが祭りをスル側として、自分たちの祭りを「連合」する近隣町会の青年部の人たちとともに、楽しむ祭りとして蔭祭が存在していることが窺える。言い換えれば、本祭で支える側に徹するためには蔭祭という楽しむ祭りの存在が町会の特に青年部の人たちの祭りへのモチベーションを維持する上でも不可欠といえる。なぜなら、この蔭祭は神輿の組み方や御飯屋の設営の仕方、神輿の担ぎ方、警備の仕方など、祭りの技術を受け継いでいく上で重要な練習の機会となっていることがわかるからである。つまり、町内や近隣町会の子どもと青年・大人、町内の企業や小学校教員などを巻き込んで蔭祭に動員しながら、本祭に備えるのみならず、町会の組織、特に青年部組織の維持に、蔭祭が果たす役割があると考えられる。

二、蔭祭における史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸

(一) 大手町・丸の内地区の概観

大手町・丸の内地区は、東京駅と皇居に挟まれた地域で、高層ビル街が広がる。東京メトロ大手町駅の近くには、神田神社及び神田祭に密接に関わる史蹟将門塚（以下、「将門塚」）がある。将門塚は、千代田区大手町一丁目二番一号にあり、「将門首塚」とも呼ばれている。

将門塚は、平安時代に、西国の藤原純友とともに東国で朝廷に対して反旗を翻した平将門の首を祀った首塚とされる。ここは、神田神社が慶長八（一六〇三）年頃までであった場所と伝えられ、神田神社の旧跡地である⁽⁸⁾。現在、将門塚は三井物産株式会社ビルの隣に位置し高層ビルに囲まれた場所にある。将門塚の前を通る東西の通りは、昭和四〇年代に数度の改修を経てきたものである。塚の周辺は樹木に囲まれ、塚には花やお酒などの供え物が奉られていて、線香の煙が絶えることはない。一般の参拝者が多く訪れるほか、周辺企業の社員も参拝している。平成二四（二〇一二）年一月四日の仕事始めには、周辺の企業の社員がスーツ姿で参拝する光景

が多数みられ、将門塚の入口付近にテントを張って、神田神社や平将門のお札とおみくじを授与していた。参拝する会社員の中には、「昨年は将門塚にお参りしなかったので仕事が上手くいかなかった」と同僚に話をしながら参拝する人もいた。

『神田明神史考』には大正五（一九一六）年の「大蔵省構内の将門塚前における神輿振り」とキャプションのある写真が掲載されている⁽⁹⁾。戦前から神田神社の宮神輿が将門塚に渡御していたことがわかる。

将門塚の戦後の動きについてまとめると以下ようになる。

戦後、進駐してきた米軍は将門塚ある附近に広大なモータープールを造ろうと工事に着手したが、工事用のブルドーザーを運転していた運転手が墓のようなもの前で突然転落して死亡するという事件が起きた。当時の町会長ら住民は「ここは古代の大曾長の墓である」と説明し、米軍の了解を得て塚域に竹垣を巡らして将門塚を破壊から救うことができたという。昭和三四（一九五九）年にモータープールの接收が解除され、敷地は東京都から民間に払い下げられ、日比谷通りに面して日本長期信用銀行と三井生命保険相互会社のビル工事が開始された。そして、用地払い下げに際して、同地内にある将門塚は地元で管理することとされた。そこで、地元の町会有志・有力会社が発起人となって、昭和三五年七月二八日に「史蹟将門塚保存会」（以下、「将門塚保存会」）が結成された。参与法人会員として、三菱地所、三井物産、物産不動産、丸紅などの企業が名を連ねる。翌・昭和三六年、将門塚保存会によって整備修復工事が行われた。東向きであった塚を西向きに改め、整地、植樹を行い、玉垣を設け、仮参道をつけた。同年一二月に神田神社宮司を斎主として竣工奉告を兼ねて慰霊祭を執行した。昭和四〇年、将門塚の西北の土地が民間に払い下げられ、三井物産ビルを建てることになり、将門塚の北参道を閉鎖することになった。そして、塚域の配置を変更し、参道入口を南側に付け替える工事を行った。参道は翌・昭和四一年一月に完成した。塚域の南側には日比谷通りから内堀通りに通じる道路が貫通することになったので、将門塚も塚域の一部を提供し、その新道の側に入りを開いた。新道の南側には三和銀行が建設され、将門塚は四方を高層ビルに囲まれることになった。昭和四六年三月、将門塚は東京都の文化財（都旧跡）に指定された。

現在、将門塚は毎年秋彼岸の一日を選び、将門塚保存会の主催で例祭が行われている。また、神田祭の神幸祭では神田神社の鳳輦が将門塚へ巡幸し、塚前祭を行っている⁽¹⁰⁾。

将門塚の地元町会である大手・丸の内町会は将門塚保存会の結成に先立ち、昭和三二年に設立された。町会区域は、丸の内一丁目・二丁目・三丁目、大手町一丁目（三・四を除く）・二丁目である⁽¹¹⁾。この町会区域の人口は、平成二四年五月一日現在の住民基本台帳によると、丸の内一丁目が世帯数〇世帯・人口〇人、丸の内二丁目が世帯数一世帯・人口総数一人、丸の内三丁目が世帯数二世帯・人口二人、大手町一丁目が世帯数〇世帯・人口〇人、大手町二丁目が世帯数〇世帯・人口〇人である。住民がほとんどおらず、町内に立地し将門塚保存会に参与する企業を中心とした企業町会である。

かつて三菱地所の社長であった渡辺武次郎の発案によって、昭和三二年に町内会として、大手町・丸の内地区に所在する企業・団体・商店等が集まり、会員相互の親睦を深め、共同の福祉を増進することを目的として「千代田区大手・丸の内町会」が設立された。現在では、約二〇〇の法人が入会し、千代田区の各種施策への協力なども積極的に言い、「企業町会」としての特色を生かした活動を進めているという⁽¹²⁾。

こうした特徴を持つ大手町・丸の内地区の神田祭への参加は以前は行われていなかった。昭和四三年の神田祭を調査した藺田稔は、その調査結果を「祭りと都市社会―天下祭（神田祭・山王祭）調査報告（一）―」としてまとめ、その巻末資料には神田神社の氏子町会の神田祭への参加の状況を挙げている。これによれば、一〇七番目に「大手町・丸の内地区」が挙げられ、神酒所も作らず、神田祭への参加が行われていないことがわかる⁽¹³⁾。また、藺田の調査から二四年が経過した平成四年には松平誠が神田祭の調査を行い、藺田の研究以後の変化を「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」にまとめている。藺田の研究と同様に、巻末の資料として一〇七番目に「大手町・丸の内地区」が挙げられ、この段階でも、神酒所は作られず、神田祭への参加が行われていないことがわかる⁽¹⁴⁾。

しかしながら、江戸開府四〇〇年を迎えた平成一五年、「大手町・丸の内地区」の神田祭への参加が開始された。この年に行われた神田祭では、三井物産の社員二二四人が将門塚保存会の参与法人として神田祭を盛り上げようと、神田神社から借りた神輿で将門塚から神田神社まで渡御し、神田神社へ宮入したという。これを契機として、社会貢献活動の一つとして将門塚保存会のメンバーとして独自に担げる神輿を作ろうという機運が高まり、将門塚保存会大神輿を新調した。そして、平成一七年の神田祭では、将門塚保存会大神輿

で神田神社への宮入を果たしている。以後、将門塚保存会大神輿は、神田祭の年には将門塚を發御して神田神社へ宮入を行い、再び将門塚に戻ってきて着御する形を取り、蔭祭の年には宮入を行わず、将門塚を發御して、将門塚に着御する形を取っている。将門塚保存会大神輿の巡幸には、将門塚保存会の参与法人である三菱地所・三井物産・三井生命保険・物産不動産・三菱東京UFJ銀行・竹中工務店・プロミス・丸紅・パレスホテル・三菱不動産の一〇社が参加する⁽¹⁵⁾。平成二二年は蔭祭の年であったが、五月九日に、大手町や丸の内約一〇社の会社員が過去最高の一〇〇人参加し、将門塚保存会大神輿が渡御した⁽¹⁶⁾。

現在、神田祭（本祭）では、将門塚保存会大神輿を担ぎ、将門塚から神田神社への宮入を実施し、蔭祭の年は、将門塚を起点に、大手町・丸の内地区の巡幸を行っている。ただし、平成二八年の蔭祭において、伊勢志摩サミット開催に伴うテロ対策の一環として、警備上の理由から蔭祭における将門塚保存会大神輿の巡幸は中止された。

（二）将門塚保存会大神輿の蔭祭における巡幸

ここでは、平成二四（二〇一二）年の五月一三日（日）に行なわれた将門塚保存会大神輿の巡幸の模様を将門塚から出御して、将門塚に還御するまでの模様を追ってみた。この日の巡幸は、一〇時に将門塚を出発し、一五時半に将門塚に還御する予定で行われた。

〔巡幸開始前の様子〕

九時一〇分頃、既に将門塚周辺には、白地に赤で背中に「神田祭」と書かれた半纏を着た多くの人たちが集まっていた。半纏の正面には、白地に黒で「神田明神」「将門塚保存会」と書かれている。中には将門塚に参拝する人や子ども連れの人もみられた。将門塚に隣接する三井物産の敷地内も半纏姿の人たちで溢れていた。三井物産の社屋前には将門塚保存会大神輿が出され、神田囃子保存会のお囃子も待機していた。半纏姿の人には女性の姿も多くみられた。

九時半過ぎ、神田神社の神職が将門塚へ到着した。「将門塚保存会」と「大手・丸の内町会」と一張ずつ書かれた高張提灯が将門塚前に移動し、大神輿も台車に載せられて将門塚前に移動した。大神輿は将門塚前に到着すると台車が外され、ウマ（神輿を載せる台）

の上に置かれた。大神輿の周りには半纏姿の多数の担ぎ手で埋め尽くされた。しかし、ほとんど見物人はみられなかった。

〔発御祭〕

九時四〇分、神田神社の神職が将門塚保存会大神輿前で、供物を供え、発御祭を行った。担ぎ手一同は頭を下げて修祓を受け、神職の祝詞奏上を静かに聞いていた。実行委員長をはじめとした役員は紫色の半纏を着て、笠を背中に付け、「実行委員長」などと役名の入った襷を肩から掛けて、祭典に参列していた。玉串奉奠では実行委員長らが玉串を捧げ参拝した。実行委員長の二礼二拍手一礼に合わせて担ぎ手全員が参拝した。多数の柏手の音が将門塚前に響いた。玉串奉奠が終わると、実行委員長の挨拶が行われた。

実行委員長は「本日は地元大手町、丸の内、遠くは静岡から将門塚保存会将門神輿渡御に大勢の方がお集まりいただきました誠にありがとうございます。将門公の御神威によりまして、この地元地域の皆さん、会社の益々のご発展、ご健勝、また、昨年ございました東日本大震災のより一層の復興を祈念しまして、この地元でしっかりと神輿を担いで、元気を出していただきたいと思えます。また、本日、神田明神の皆さまには準備及び本日の供奉と、色々お世話になり誠にありがとうございます。また、丸の内警察署の皆さまの御協力によりまして、本日交通規制にもなっております。この空を見上げていただければわかります通り、まさしく五月晴れ、非常に気持ちいい天気でございます。この状態の中で是非、怪我のないように、無事故で、元気よく町を活性化していただければと思いますので、宜しくお願い致します」と挨拶した。挨拶が終わると、大神輿の周りに担ぎ手が集まった。木遣りの後、一本締めを行い、九時五五分、将門塚前を出発した。神田囃子保存会のお囃子に合わせ、勢いよく神輿を担いでいった。道端ではアマチュアカメラマンの姿が多少みられたが、圧倒的に神輿の担ぎ手が多かった。将門塚を出た大神輿は、三井物産・物産不動産の敷地内へ入っていった。

〔三井物産株式会社・物産不動産株式会社〕

敷地内の天上の低い箇所を大神輿が潜る際には緊迫感が漂ったが、その後、三井物産・物産不動産で神輿を降ろす直前、すぐに神輿を降ろすことが許されず、担ぎ手たちは手を挙げながら担ぎ、盛り上がっていた。屋根の下で担いでいるため、音の反響が担ぎ手たち

の盛り上がりを助けているようであった。ようやく拍子木が鳴らされ、神輿を降ろすと、神職によるお祓いのあと、神輿への献饌がなされ、玉串を捧げて参拝が行われた。

一〇時五分過ぎ、一本締めで再び出発した。出発した神輿は将門塚の前を通り、プロミスへ向かった。ビルとビルの合間を担ぎ声が反響して、担いでいる人たちは比較的盛り上がりつつあるように感じられた。大神輿は、御幣、お祓いを行う神職、実行委員、高張提灯、神田囃子、大神輿の順で行列して進んで行った。交差点付近でも、担ぎ手は手拍子をしながら盛り上がりつつあった。

〔プロミス〕（S M B C コンシューマファイナンス株式会社）

ここでも神輿を降ろして、神職によるお祓いの後、献饌がなされ、玉串を捧げ大神輿へ参拝を行った。その様子を担ぎ手たちは静かに見守っていた。こうした祭事がなされている後ろの道を乗用車が通過した。交通規制はしているものの、巡幸ルートの全面通行止はしていないようだ。

一〇時一八分過ぎに再び出発となった。こうした形で順次、将門塚保存会の参与法人の会社を巡っていった。

〔巡幸ルート〕

プロミスを出ると、三井不動産前（一〇時二六分着・一〇時二九分発）、丸紅（一〇時五七分着・飲料水（ペットボトル、アルコール類なし）配布・一一時八分発）、パレスホテル（一一時四〇分着・飲料水（ビールなどのアルコール類あり）・一一時四九分発）、三井生命（一二時九分着）、三菱地所（一二時一七分着）、サンケイビル前（一二時二四分頃着・お昼休憩（会社ごとに分かれて弁当を食べる）・一三時半頃発）、三菱東京UFJ銀行前（一三時四九分着・一三時五三分発）、竹中工務店（一四時一七分着）を巡って、将門塚前に戻った。三菱東京UFJ銀行へ向かう一部区間では、女性だけで担ぐ女神輿になった。

〔還御〕

竹中工務店を出た大神輿は、一旦将門塚前を通過して戻り、将門塚前で何度か揉んで、神輿を降ろして還御となった。将門塚への還御の際がこの日で一番多い観客がみられた。しかし、アマチュアのカメラマンが大半で決して数は多くはなかった。到着後に、神田神社の神職によって還御祭がなされた。還御祭が終わると、あつという間に大神輿は片付けられ、担ぎ手はその場で直会を行うこともなく解散した。

〔平成二六（二〇一四）年の蔭祭〕

平成二六年の蔭祭では、五月一日（日）に将門塚保存会大神輿の巡幸が大手町・丸の内地区で行われた。九時半頃、大手町野村ビル前で発御祭が行われたあと、将門塚前に移動し、三井物産ビル、パレスホテル前、大手センタービル、丸の内永代ビルディング、大手町野村ビル（三井生命保険前）、大手町ビルディング、東京サンケイビル前、大手町一丁目三井ビルディング、丸紅東京本社を巡幸し、一五時一四分に将門塚へ還御した。また、平成二六年の蔭祭では、子ども神輿が出された⁽¹⁷⁾。

（三）特徴

最後に、将門塚保存会大神輿の蔭祭巡幸において明らかとなった特徴を四つ挙げ、そこからみえる都市祭りの役割について論じておきたい。

第一に、将門塚保存会大神輿の巡幸を行う上で、祭りの担い手が結集するための核として、平将門を祀る将門塚と神田神社があることである。将門塚を守る将門塚保存会は大手町・丸の内地区の企業を参与会員として結成された。将門塚保存会の参与会員である三菱地所などの企業を中心に大手町・丸の内地区の「企業町会」として「大手・丸の内町会」がある。大神輿の巡幸には、将門塚保存会と大手・丸の内町会の高張提灯が出され、両者が参与する形で大神輿の巡幸が行われている。また、正月の仕事始めや九月の将門塚の例祭日などには、将門塚保存会に参与する企業の会社員を中心に将門塚への参拝がなされている。

一方、将門塚に祀られた平将門命は神田神社の祭神の一柱であり、将門塚付近は神田神社の創建の地と伝えられ、神田祭の際には神

田神社の鳳輦が将門塚へ渡御し、神田神社宮司が祭事を行っている。この将門塚と神田神社の両者を結ぶ形で神田祭と蔭祭の大神輿の巡幸がなされ、将門塚保存会大神輿の担ぎ手は「神田明神」「将門塚保存会」「神田祭」の文字が入った半纏を着用している。

第二に、将門塚保存会大神輿の巡幸には、神田神社の神職の積極的な関与がみられることである。江戸開府四〇〇年を迎えた平成一五（二〇〇三）年を境として、それまで行われていなかった大手町・丸の内地区の神田祭への参加（神田神社への宮入）を神輿の貸出という形で後押ししたのも神田神社の神職である。また、大神輿巡幸の準備や大神輿巡幸に合わせて行われる祭事など、神田神社の神職が介在して行われている。

第三に、この祭りは観客をほとんどみることのできない「観客のみえない祭り」であることである。それは、将門塚周辺の大手町・丸の内地区が住民のほとんどいない地域でもあることが影響している。つまり、地域社会に暮す実質的な「地縁」がなく、地域社会の「見る人」がまともって存在しないからである。同時に、地域社会の外部から訪れて「見る人」も少ない。よって「見る／見られる」「見る／見せる」の関係が成り立ちにくく、「祭礼」とは呼びにくい祭りである。神田囃子が先導して「祭りの音」を演出して神輿の巡幸が行われるものの、将門塚周辺には屋台（出店）は出されていない。お囃子の音はあるが、祭りらしい雰囲気は形成しにくく観客を集める要素が少ない。

一方、神輿の担ぎ手は一〇〇〇人を超え、動員数の多さから神輿の出御や着御の際に、神輿を担ぐ掛け声がビルに反響して担ぎ手はそれなりに盛り上がっていた。しかし、アルコールを口にする機会がほとんどなく、唯一、アルコールが出されたパレスホテルでも、そこで飲むことが課せられ、マナーが重視されていた。観客が少ないばかりでなく、マナーが重視されることから、日常の構造が逆転するような沸騰はしにくいのではなからうか。

第四に、祭りの担い手からみると、会社員のつながりを軸とした「社縁」（会社縁）に特化した祭りであるが、観客をほとんどみることができないことから、いわば「会社員による会社員のための祭り」になっているといえる。それは、蔭祭の神輿の巡幸ルートからも窺え、神輿が巡るのは全て将門塚保存会の企業である。そして、祭りの担い手を「社縁」に頼るほかないことから、蔭祭の年にも神輿の巡幸を実施して会社員の動員力を維持し、神田祭における神田神社への宮入に備えているといえるのではないかと考える。つまり、

神田祭における神田神社への宮入があるからこそ、蔭祭における神輿の巡幸が存在しているといえる。逆にいえば観客をほとんどみることのできない「観客のみえない祭り」があるからこそ、多数の観客をみることができ「観客のみえる祭り」に繋がっているといえるのではなからうか。

とすると、同じように居住人口が少なくなりつつある神田神社の氏子町内の祭りにおいて、神田祭における連合渡御・神田神社への宮入があるからこそ、町内渡御や町内の祭りが持続しているとみることができないだろうか。特に、神田神社への宮入の存在は町内の祭りを維持する上で重要な存在であると考ええる。

このように、将門塚保存会大神輿の蔭祭の巡幸から、将門塚や神田神社といった結集のための核を軸として、神田神社の神職の積極的な関与が介在しながら、「観客のみえる祭り」（宮入・連合渡御）が地域社会（氏子町内）における「観客のみえない祭り」を持続させていると同時に、地域社会（氏子町内）における「観客のみえない祭り」が「観客のみえる祭り」（宮入・連合渡御）の維持につながっているという、都市祭りにおける一つのダイナミズムが浮かび上がってくるのである。

三、東日本橋二丁目町会の蔭祭

ここでは、東日本橋二丁目町会の蔭祭について、調査を行った平成二八（二〇一六）年五月の祭りからみておく。

（一）東日本橋二丁目町会の概観

東日本橋二丁目町会は、神田祭の際に鳳輦が渡御し、昼御饗を奉る両国御飯屋（薬研堀不動院）の地元町会である。神田祭に際して、町会の神酒所は薬研堀不動院前に設営される。町会の区域は中央区東日本橋二丁目全域である。

東日本橋二丁目町会は、かつて両国町会と呼ばれた。「両国」という町名は、昭和九（一九三四）年八月に、関東大震災後の土地区画整理により、幹線五号線が久松町から両国橋橋詰に解放されて三角形になった地域を総括して名付けられた。この三角形になった地域

には、かつての元柳町全部、新柳町全部、古川町全部、米沢町一・二丁目全部、葉研堀町一部、岩松町一部、横山町三丁目一部が含まれた。元柳町は、浅草橋のたもとから神田川沿いに両国橋西詰に至る河岸添地で、芸妓の町と呼ばれ女性の数が多かった。昭和四六年四月の住居表示改正によって、両国から東日本橋二丁目に改称した(18)。

昭和四三年の菌田稔の調査によれば、両国町会は、人口・四五〇世帯、神札の配布数(年末に配布するもの)・六八枚(一五・一%)、祭礼の象徴・神輿大(昭和三五年製作)、神輿小(昭和二六年製作)、曳き太鼓(昭和二六年製作)、主な行事・ミタマ入れ・鳳輦迎エ・町内練り・ミタマ返し、役割動員・祭典委員(町会役員)、一般動員・若衆六〇人・子若一〇〇人・自発的参加、行事経済・寄附(協賛金)一五〇万、祭りの評価・町ノ良サ特色ガ出ル・子供ノ友愛ヲ高メル、神社イメージ・大己貴命・少彦名命・将門ダトモイウとして
いる(19)。

菌田の調査から四五年が経過した平成二五(二〇一三)年の神田祭では、筆者の調査によると、人口・一一〇〇世帯・二三〇〇人、神札の配布数(神田祭に配布するもの)・五〇〇枚、祭礼の象徴・神輿大一・小一・曳き太鼓一、神酒所・有り(葉研堀不動院)、主な行事・蔵出し・御霊入れ・挨拶廻り・神幸祭「受渡し」・連合渡御・チビッコ縁日・町内渡御・宮入参拝・御霊返し・直会、役割動員・祭典委員・祭典委員会・祭典委員長(町会長)・祭担当責任者(副町会長)、一般動員・大人神輿六〇人(町内四〇人・町外二〇人)・町外・東京理科大学学生、行事経済・寄附(奉納金四〇〇万円)・町会費一〇〇万円、行事変化・一二年前に舟渡御を実施「平成二七年にも舟渡御を実施」、祭りの評価・地域の連携がお祭り、神社イメージ・平将門である。

昭和四三年と平成二五年を比較すると、人口が四五〇世帯から一一〇〇世帯と大幅に増加している。町内にファミリータイプのマンションが複数建設されたことが影響している。なお、住民基本台帳に登録された平成二八年五月現在の東日本橋二丁目の人口は、世帯数・一二九八世帯・人口二一八三人である。

(二) 東日本橋二丁目町会の蔭祭の概要

東日本橋二丁目町会の蔭祭は、平成二八(二〇一六)年五月八日(日)に葉研堀不動院前(神田祭の際に神酒所が作られる場所)の

路上に子ども縁日を開き、そこを拠点として子ども神輿と曳き太鼓（山車）の巡幸を行った。

〔蔭祭のポスター〕

東日本橋二丁目町会では、蔭祭のポスターを作成し、薬研堀不動院前の芳名板など数ヶ所に掲示していた。ポスターには、「東日本橋二丁目町会祭礼のお知らせ 子供神輿とチビッコ縁日 平成28年度神田明神祭礼 チビッコ縁日(場所：薬研堀不動院 御神酒所横) 5月8日(日) 10:00～13:00 美味しい焼きそば・ソーセイジ・カレーライス・ラムネ お菓子のつかみ鳥・射的・くじびき ※御神酒所前で縁日券(50円)を発売します。 子供神輿神霊入れ(場所：薬研堀不動院 御神酒所前) 5月8日(日) 09:30～ 子供神輿・山車町内渡御(集合場所：薬研堀不動院 御神酒所前) 10:30～11:30(午前) 11:30～13:00(休憩) 13:00～14:00(午後) ※午後の渡御開始10分前までに、集合場所にお集まりください。お子様たちのご参加をお待ちしております! ※小雨決行。雨天の場合、チビッコ縁日は信徒会館にて開催致します。 ※参加されるお子様の保護者は、祭礼半天を「4月25日(月)」より町会会館で申し込みを受け付けます。 主催：東日本橋二丁目町会青年会 協賛：城北信用金庫日本橋支店」と記載されていた。

〔御霊入れ〕

東日本橋二丁目町会の関係者と神田神社の神職の記念撮影のあと、九時半過ぎから神田神社の神職二人を祭員として、薬研堀不動院前の路上に置かれた子ども神輿に御霊入れが行われた。玉串奉奠では、東日本橋二丁目町会会長や町会役員のほかに、薬研堀不動院の住職も玉串を捧げ、御霊の入った子ども神輿に拝礼した。

〔子ども縁日〕

御霊入れが終わると、一〇時頃から薬研堀不動院前の通りの両側で子ども縁日が行われた。フランクフルト、カレー、焼きそば、く

じびき、お菓子つかみどり、ラムネ、射的の出店が出され、「祭」と書かれた半纏を着た小さな子どもとその親たちで賑わった。

〔巡幸ルート〕

一〇時半に薬研堀不動院前を出発した子ども神輿と曳き太鼓（山車）は、警察官三人に誘導されながら、金棒隊、子ども神輿、曳き太鼓（山車）の順に、柳橋通り↓清杉通り（町内側の歩道を巡幸）↓PMO東日本橋・東日本橋グリーンビルアネックス附近（小休止）↓清杉通り（町内側の歩道を巡幸）↓浅草橋（京葉道路を横断歩道を通って横断）↓京葉道路（両国橋方向へ歩道を巡幸）↓吉澤ビル前（一一時五分着・休憩、飲料水と黄色のリボンを配布）↓京葉道路（歩道を巡幸「ただし、両国橋西交差点の少し手前から車道を巡幸」）↓両国橋西交差点（京葉道路を横断歩道を通って横断）↓薬研堀不動院参道（途中、東日本橋二丁目一八―五附近で神輿を高く上げる「サシ」を行う）を通り、一一時半に薬研堀不動院前に還御した。還御後、途中の休憩で配布された黄色リボンで子どもたちは縁日券五枚と交換した。子どもたちは縁日券を使って、薬研堀不動院前の縁日で焼きそばやソーセイジなどを食べたり、射的やくじびきなどを楽しんだ。午前中の巡幸では、金棒隊一〇人（女の子のみ）、子ども神輿に子ども一八人、曳き太鼓（山車）に、小学生以下の子ども六〇人以上が参加した。曳き太鼓（山車）には最低一人の大人がそれぞれ付き添って歩いたため、かなりの賑わいとなった。

お昼休憩を挟んで、一三時に再び薬研堀不動院前を出発した子ども神輿と曳き太鼓（山車）は、金棒隊、子ども神輿、曳き太鼓（山車）の順に、柳橋通り↓清杉通り（東日本橋三丁目方向へ歩道を巡幸）↓御幸通り（隅田川方面へ車道を巡幸）↓宮城館ビル前（休憩、飲料水と黄色のリボンを配布）↓御幸通り（車道を巡幸）↓鳥安前（東日本橋二丁目一―七で「サシ」を行なう）↓浜町河岸通り↓すずらん通り↓東日本橋二丁目町会会館前（「サシ」を行う）↓不動院通りを巡幸し、薬研堀不動院前に戻った。曳き太鼓（山車）は比較的早く巡幸を終えたが、子ども神輿はすぐに還御しないで、担ぎ手を女の子と大人の女性だけの女神輿に替えてしばらく巡幸した。最後に男性の大人が担ぎ、しばらく薬研堀不動院周辺で揉んだあと、東日本橋二丁目町会会長や薬研堀不動院の住職も子ども神輿を担ぎ、一四時半頃、ようやく還御となった。還御後、途中の休憩で配布された黄色リボンと縁日券五枚と交換して縁日を楽しんだ。

午後の巡幸では、子ども神輿に子ども一〇人、曳き太鼓（山車）に子ども一五人が参加した。午後の巡幸の後半では、子ども神輿の

子どもが六人に減り、逆に曳き太鼓（山車）の子どもが一七人と少し増加した。

〔御霊返し（御霊抜き）〕

子ども神輿は担ぎ棒を外し、町会青年会の車に載せられて神田神社へ移動した。神田神社拝殿の右脇、獅子山の前付近に子ども神輿を下ろし、神輿に二本の担ぎ棒を通してウマの上へ置き、神饌を供えた。一五時三十分頃、神田神社の神職二人を祭員として、東日本橋二丁目町会会長、青年会長、半纏を着た青年会のメンバーらが参列して御霊返し（御霊抜き）を神事を行った。約一五分で神事が終わると、子ども神輿は、町会青年会の人たちによって神田神社境内の神田神社氏子神輿庫へ納められた。

（三）参加者数

東日本橋二丁目町会では、平成二八（二〇一六）年の蔭祭の実施に当り、以下のような役割動員を行った。「平成二八年度 子供祭青年会祭典委員」によれば、祭典委員一人（町会長）、実行委員一人（青年会長）、運営本部一人、子供神輿係一二〜一四人（神輿長一人、副神輿長三人、東京理科大学協力者四〜六人）、金棒係三人（責任者一人・副責任者一人）、山車係一二〜一四人（責任者一人、副責任者一人、東京理科大学協力者四〜六人）、縁日係七人（責任者一人、副責任者一人、青年会長大学生協力者四人）である。ここに、縁日の出店（屋台）のお手伝いをする主に町内のファミリータイプのマンションに暮す女性たちが参加する。この女性たちは、普段は町会の婦人会には参加していない。

子どもの参加者は、五月八日一二時の時点で貸し出した半纏の枚数から九八人が参加した。付き添いの大人を一人としても、九八×二＝一九六人とかなりの人数になったことがわかる。特に、午前中の曳き太鼓（山車）には、多くの子どもとその親が参加した。本祭でも、子どもの半纏は六〇〜七〇枚は貸出すというため、子どもの参加者は本祭より蔭祭の方が多くことがわかる。

（四）特徴

東日本橋二丁目町会の蔭祭は、平成二三（二〇一一）年の東日本大震災の発生を契機として、平成二四年から開始された。町会関係者の話によれば、再開発で誕生したファミリータイプのマンションに住む新しい住民と古い住民の接点を作ろうとして始められたという。

東日本橋二丁目町会の青年会は、二〇〇三〇人で新しい住民の参加者も多く、男性同士の新しい住民と古い住民の交流は進んでいる。一方、新しい住民の女性は、普段は町会の活動に参加しない人が多い。しかし、蔭祭の縁日を手伝う女性たちは町会の婦人会には入っていない、マンションの新しい住民がほとんどである。つまり、東日本橋二丁目町会の蔭祭は、子どもを媒介とした新しい住民と古い住民との交流の場、特に女性にとつての接点になっているという特徴がある。蔭祭当日の午後、子ども神輿の巡幸の最後に、大人の女性たちだけで担ぐ女神輿になり、さらには大人の男性たちで担ぐ神輿になったのは象徴的であったのではなからうか。

参加者に目を転じれば、午前中の曳き太鼓（山車）へ子どもとその親が多数参加し、子どもの参加者数が本祭よりも多くなっているという特徴がある。一方、参加者の数は多く、巡幸の行列は賑わいを作るが、子ども神輿と曳き太鼓の巡幸を見物する観客をほとんどみることができない「観客のみえない祭り」となっている。

四、宮本町会の蔭祭

続いて、宮本町会の蔭祭について、調査を行った平成二八（二〇一六）年五月の祭りからみておく。

（一）宮本町会の概観

宮本町会は、その名の通り、神田神社のお膝元の町会である。かつては、神田明神門前町・表門町・裏門町・西町等と称していたが、明治二（一八六九）年に神田神社と併せて宮本町と称するようになった。現在、千代田区外神田二丁目一六〜一九（七番一号、四号一部）を区域とする²⁰。甘酒の天野屋や三河屋など、門前の老舗が町内に立地する。

昭和四三（一九六八）年の藪田稔の調査によれば、宮本会（現・宮本町会）は、人口…七〇世帯、神札の配布数（年末に配布するもの）…四七枚（六七・一％）、祭礼の象徴…神輿小（昭和三五年製作）、主な行事…ミタマ入れ・ワタリ・町内練り・地区練り（宮入）、役割動員…祭典委員（町会役員）・婦人部、一般動員…小学生・母親、行事経済…町会繰越金・奉納金、行事変化…昭和二七年神田祭復興、祭りの評価…子供中心ノ楽シミ、神社イメージ…大国主命・将門ノ末社、備考…神田祭ノ本当ノ良サヲPRシタイ・2湯島三丁目
が合併参加としている⁽²¹⁾。

藪田の調査から四五年が経過した平成二五（二〇一三）年の神田祭では、筆者の調査によると、町会員…一七〇世帯、神札の配布数（神田祭に配布するもの）…未配布、祭礼の象徴…神輿小一、神酒所…有り（アヤベビルF）、主な行事…蔵出し・御霊入れ・挨拶廻り・連合渡御「おまつり広場」・町内渡御・宮入参拝・直会、役割動員…祭典実行委員・青年部・婦人部、一般動員…子ども神輿…子ども一〇〇人「町内二〇〇〜三〇〇人と昌平小学校」。大…二五〇人「亀有三丁目東町会一〇〇人、町内企業・印刷屋四〇人、町会員の親戚五〇人」、行事経済…寄付（奉納金一〇〇〜二二〇万円）、町会費二〇〇〜二五〇万円、繰越金。合計四〇〇〜四五〇万円、行事変化…町内の高齢化。ただし、子どもの参加は増。平成二二年より大人神輿を亀有の町会から借りて宮入を開始、祭りの評価…町会を守っている氏神様のお祭り。氏神の近くに住んでいるという誇りがある。何があってもきちんとやろうと思っている、神社イメージ…大国主命、恵比寿様、将門。商売の神様である。

昭和四三年と平成二七年を比較すると、七〇世帯から一七〇世帯に人口は増加している。なお、平成二八年五月現在の住民基本台帳に登録された外神田二丁目の人口は、世帯数六〇〇世帯、人口九六六人（男…四九七人、女…四六九人）である。

（二）宮本町会の蔭祭の概要

ここでは、宮本町会の蔭祭における子ども神輿の巡幸についてみておく。巡幸は、平成二八（二〇一六）年五月一四日（土）に行われた。

蔭祭当日、一三時に参加者は町内のヒルトップお茶の水に集合した。細い路地に入ったヒルトップお茶の水の一階に、受付が設けら

れた。受付では、「未就学児」「一年」「二・三年」「四・五年」の貼紙が貼られていた。参加者はそれぞれの区分ごとに受付を済ませ、子どもの半纏とお弁当（セブンイレブンのおにぎりセット）、宮本町会の手拭、首から下げることが出来る神田神社のお守りを受け取った。

〔御霊入れ〕

一四時過ぎ、神田神社拝殿前で、神田神社の神職二人を祭員として、宮本町会の子ども神輿への御霊入れの神事が行われた。神事の際、神田神社権宮司が神事の内容を参列する子どもにもわかるように解説を加えていた。神事には、宮本町会関係者のほか、昌平小学校の校長、副校長ら教員五人（昌平小学校の半纏を着用）、子どもたちとその親らが参列した。神事の間、真剣に頭を下げる子どもたちが複数みられた。また、玉串奉奠では、子どもの代表も玉串を捧げ参拝した。神事は約二〇分ほどで終了した。

〔巡幸ルート〕

一四時二〇分過ぎ、金棒隊四人（女の子のみ）、御幣、宮本町会の高張提灯、「祭」・「宮本町会」と書かれた大団扇、子ども神輿の順に、神田神社境内から出発し、随神門を潜り右折した。そして、神田の家↓区立宮本公園（休憩・飲料水を配布）↓五島ビル前（通過）↓藤和シテイホームズ御茶の水前（左折）↓ファミリーマートお茶の水店前（左折）↓楽器会館附近（休憩・飲料水を配布）↓天野屋（通過）↓神田神社大鳥居（通過）↓随神門↓ヒルトップお茶の水↓（奥の細い路地）↓明神会館前（通過）↓国学発祥の地碑附近↓末廣稻荷神社付近↓江戸神社前↓随神門を過ぎ、一六時にヒルトップお茶の水前で神輿を高く上げる「サシ」を行い、巡幸は終了した。終了後、子どもたちはお菓子を貰って帰路に就いた。子ども神輿は、「写真撮影ができるように」ということで、宮本町会の大人たちによって随神門の右脇にある脇門前に移され、しばらくそこに置かれた。その後、神輿庫に納めた。

子ども神輿は、①小学二・三・四・五年生、②小学一年生、③幼稚園（未就学児童）といった具合に神輿をウマ（神輿を載せる台）に下す度に担ぎ手を交替して担いでいった。神輿を担いだり、神輿を下ろしたりする合図に拍子木を叩いて木入れを行うが、これも参

加する子どもたちが交代で行った。途中から希望者を募ると、多くの子どもが手を挙げて、交替で行っていた。巡幸の後半、神田神社境内を一周するときには、何度も神輿を下ろして、多くの子どもが木入れを行えるように町会の大人たちは工夫をしていた。巡幸には子どもたちの親が多く付き添って歩いた。ビデオカメラで撮影をするお父さん、乳母車を押して歩くお母さんなど、神輿の行列は大きな賑わいをみせた。その一方で、神田神社の拝殿前や随神門付近、大鳥居・天野屋付近には、神輿の巡幸を見物する観客はいたが、それ以外神輿巡幸をみる観客をほとんど見ることができなかった。

(三) 宮本町会の蔭祭の参加者

平成二八(二〇一六)年の宮本町会の蔭祭には、子ども約一四〇人が参加した。参加者リストから参加者の詳細をみていくと、未就学児童が四〇人、小学校一年生が約四〇人、二年生が一九人、三年生が七人、四年生が三人、五年生が九人、六年生は〇人である。六年生は中学受験がある関係で参加しないという。町内の子どももいるが、近隣の町会を含めた千代田区立昌平小学校の子どもたちが参加している。子どもには多くの親が付き添って神輿の巡幸について歩いていた。最低一人の親が付き沿ったとしても一四〇人×二倍で、総勢二八〇人に上る計算になる。多くの子どもと親が蔭祭の神輿巡幸に参加したことがわかる。

本祭の子ども神輿の参加者は子ども六〇人であり、本祭よりも蔭祭の子ども神輿の参加者の方が多いという。平成二八年の宮本町会の蔭祭では、約一六〇個のお菓子を用意したという。一方、町会の半纏を着た大人は五人程度であった。

(四) 特徴

宮本町会の蔭祭は、主催は宮本町会であり、町会費で運営している。女性のお手伝いは町会の婦人部と父兄が行っている。しかしながら、参加者も観客もない寂しい町会の祭りかといえ、多数の子どもたちとその親で賑わう子ども神輿の巡幸であることが大きな特徴である。しかも参加者は年々増加している。子どもの半纏は一二〇〜一三〇枚であったが、五〇枚を新調したという。東日本橋二丁目町会の蔭祭と同様に本祭よりも参加者の多い蔭祭の子ども神輿の巡幸である。多数の子どもの参加者が学年ごとに交代で担ぎ、木

入れにも多くの子どもが参加できるように工夫し、また神田神社の境内を巡幸できるという魅力もある。神田神社の理解とバックアップが窺える。

五、本町一丁目町会・室町一丁目会の蔭祭

神田神社の氏子町会の本町一丁目町会・室町一丁目会では、神田祭が蔭祭の年、日枝神社の山王祭への参加を行っている。両町会の青年部を中心とした人たちが「連合」する形で、高張提灯を持って日本橋の境に立ち、山王祭の下町連合の神輿を出迎える。この日本橋の境は、神田神社と日枝神社の氏子区域の境でもある。ここで高張提灯を持って自分たちの氏子区域に山王祭に参加する日枝神社の下町連合の神輿が侵入するのを妨げるといったパフォーマンスを行う。この山王祭での日本橋におけるパフォーマンスは、多数の観客のいる祭りであるが、一〇年前から始められたという。調査を行った平成二六（二〇一四）年は六月一五日（日）に行われた。

（一）本町一丁目町会・室町一丁目会の概観

本町一丁目町会は、中央区日本橋本町一丁目全域を町会区域とする。町内の鎮守として常磐稻荷神社がある⁽²²⁾。蔭祭調査を実施した平成二六（二〇一四）年六月一日現在の住民基本台帳に登録された日本橋本町一丁目の人口は、世帯数一五三世帯、人口二二四人である。

室町一丁目会は、中央区日本橋室町一丁目全域を町会区域とする⁽²³⁾。町内には三越、山本海苔店などの老舗、コレド室町などがある。蔭祭調査を実施した平成二六年六月一日現在の住民基本台帳に登録された日本橋室町一丁目の人口は、世帯数一〇四世帯、人口一八四人である。

この本町一丁目町会と室町一丁目会は兄弟町会としての意識を持っている。

(二) 本町一丁目町会・室町一丁目会の蔭祭の概要

ここでは、調査を実施した平成二六(二〇一四)年六月一五日(日)の蔭祭について、本町一丁目町の動きを中心にみておきたい。

一二時四六分頃、本町一丁目町の参加者は、町内の中華料理・大勝軒へ高張提灯を持って半纏姿で集合。

一三時過ぎ、大勝軒から日本橋へ高張提灯を持って徒歩で移動を開始。

一三時一〇分、日本橋の橋の上に到着し、室町一丁目会と合流した。室町一丁目会も半纏姿で高張提灯を持つ。

一三時四八分、高張提灯を持って本町一丁目町会は室町一丁目会と一緒に日本橋の中央、道路上に一列に整列し、道を塞ぐ。ただし、

都営バスは通行を許し、都営バスが通行する際には、一旦、道を塞ぐことを中断する。

一四時二分頃〜一四時五一分頃、山王祭に参加する下町連合の神輿を出迎え、神田神社側への侵入を阻むパフォーマンスを行う。本

町一丁目町会と室町一丁目会の町会長や役員らは、山王祭の町会役員らと高張提灯を挟んで挨拶を交わした。その後ろに下町連合渡御に参加する町会神輿が高張提灯の前に至り、高張提灯の前、日本橋の中央で神輿を高く上げる「サシ」を行い、日枝神社の氏子区域側に引き返していった。ここには多くの観客が押し掛けていた。日本橋でのパフォーマンスが終わると、それぞれの町会へ戻った。

一五時、本町一丁目町会で祀る常磐稲荷神社の社務所へ高張提灯を片付けた。そして、日本橋へ引き返し、日本橋を越えて、日本橋三丁目町会へ移動した。日本橋三丁目町会は、日枝神社の氏子町会で山王祭の下町連合に参加する。

一五時半〜一六時三五分頃、日本橋三丁目町会の神輿へ本町一丁目町会と室町一丁目会が一緒に参加し、神輿を担いだ。半纏は、本町一丁目町会と室町一丁目会の半纏のままであった。日本橋三丁目町会の神酒所への神輿が帰着後、弁当と酒類を貰って町内への帰路に就いた。

一七時五分、本町一丁目町会の参加者は、町内の大勝軒へ帰着した。

(三) 特徴

山王祭での日本橋における本町一丁目町会と室町一丁目会のパフォーマンスは、観客が多数いる祭りである。多数の観客と祭りの担

い手との間に、「見る／見られる」「見る／見せる」の関係が成り立つ。しかし、祭りを支える側ではなく、祭りをスル側として、神田神社側に日枝神社側の氏子町会の神輿の侵入を妨げるといふ劇を演じる役者でもある。つまり、観客がいて、かつ自分たちが祭りをスル側で、祭りを楽しめる祭りでもある。また、日本橋での出迎えを終えたあと、日枝神社の氏子町会（平成二六年は担ぎ手が少なかつた日本橋三丁目町会）に神輿担ぎの助っ人として、本町一丁目町会と室町一丁目会の人たちが参加した。これは、本祭のときに、祭りを支える側として自分たちの祭りを楽しめないが、蔭祭の年は、氏子区域を越えて「日本橋」というつながりを媒介として自分たちが楽しむ祭りを実施しているという特徴を持つ。神田祭（本祭）では、本町一丁目町会は室町一丁目会の神輿に参加して、神田神社へ宮入を行う。

神田祭の年は山王祭は蔭祭であり、日本橋で境を接する日枝神社側の氏子町会は日本橋の境に高張提灯を持って立ち、日枝神社側への侵入を妨げるパフォーマンスを行う。そして、室町一丁目会の神輿に助っ人として参加している。

以上のように、「日本橋」というエリアにおいて、神田神社側の氏子町会は、神田祭が蔭祭の時に日枝神社の山王祭（本祭）へ、日枝神社側の氏子町会は山王祭が蔭祭の時に神田神社側の神田祭（本祭）へと、お互いの町会の神輿担ぎの助っ人として参加する。近隣町会がお互いの祭りへ乗り入れて楽しむ祭りを実施する、いわば「相互乗り入れ」を行って、青年部組織の維持に役立てていることが窺える。

六、その他の町会の蔭祭

神田祭が蔭祭の年に、内神田旭町町会では、かつて子ども神輿と曳き太鼓（山車）の巡幸を行っていたが、今（平成二五年）から二〇年前頃を境に途絶えている。その一方で、神輿の巡幸を行わず、様々なイベントを行なう町会が複数ある。ここでは、その概要を以下に列挙しておきたい。

(一) 錦町二丁目町会・錦町三丁目町会

蔭祭の年に、神田祭と同時期の金曜日に縁日を行なっている。費用は町会費で捻出している。

(二) 須田町北部町会

町会長のY・H氏によれば、蔭祭の年に納涼会を行っている。平成二六（二〇一四）年度までに一四回実施していて、二八年前から行っている。納涼会は、比較的小さい子どもがいないエリアのため、大人が楽しめ、企業人と共同作業ができるということを目的に、企業の社員にも参加してもらっている。生ビールの販売など企業ごとに役割を担ってもらい、チームで入ってもらい協力してもらっている。場所は、町会会館の周辺の道路を封鎖して行う。町会員は一五〇口程度だが、参加者は四〇〇人を超えるという。毎回積極的に取り組もうという気運に、今なってきた。近隣町会にも招待状を出して、町会員、町会関係者、町内企業の社員、町内企業の取引先などが参加する。

(三) 外神田三丁目金澤町会

ここ一〇年くらいで年に一回、企業との懇親会を開いている。神田祭の年は夏に、蔭祭の年はお祭りの時期に行っている。

(四) 外神田五丁目栄町会

蔭祭のときも神田祭と同じ時期に「ふれ合い広場」を実施して企業会員と親睦を図っている。神田祭に参加する神輿同好会のメンバー一〇人程度は、蔭祭の「ふれ合い広場」に参加する。

(五) 岩本町三丁目町会

蔭祭の年には七月下旬にサマーフェスティバルを実施している。町内の山崎製パン本社の敷地内で、佐川急便のトラックの荷台を舞

台として、照明車を用意し、出店を出して行う。

(六) 神田東紺町会

蔭祭の時には、夏のイベント（縁日）がある。町内の金山神社の前で行う。

以上のように、蔭祭の際に、神輿の巡幸は行わないが、町内企業と懇親の場を持つ町会が複数存在していることがわかる。

まとめ

現代の神田祭の蔭祭についてみてきた。神田和泉町会の蔭祭は（平成二五年から）三〇年ほど前に始まったものである。しかし、それ以外の史蹟将門塚保存会大神輿（大手・丸の内町会）の蔭祭の巡幸は平成一六（二〇〇四）年、東日本橋二丁目町会と宮本町会の蔭祭における神輿巡幸は平成二四年、本町一丁目町会と室町一丁目会の山王祭における日本橋でのパフォーマンスも（平成二五年の）一〇年前から始まり、平成二五年からここ一〇〜一五年で生まれた新しい動きが多いことがわかる。

特に、将門塚（大手・丸の内町会）、両国御飯屋（東日本橋二丁目町会）、神田神社の地元町会（宮本町会）と、神田神社と非常に縁の深い町会で蔭祭の神輿巡幸が行われていることがわかる。つまり、大手・丸の内町会、東日本橋二丁目町会、宮本町会の蔭祭に関しては、町会の力のみならず、神田神社とその神職のバックアップが窺えるのである。

神田和泉町会と本町一丁目町会・室町一丁目会の蔭祭は、青年部組織の維持を企図して、蔭祭において楽しむ祭りを実施していることが窺える。本町一丁目町会と室町一丁目会の山王祭への参加のように、蔭祭の年にお互いの本祭に助っ人して「相互乗り入れ」を行う事例は、神田同朋町会、鍛冶町一丁目町会、神田須田町二丁目町会など多くの町会でみられる。

もう一つ重要なことは、企業との接点を維持するため、蔭祭の年に神輿巡幸（史蹟将門塚保存会大神輿、神田和泉町会大神輿に参

加する凸版印刷社員・YKK社員など）やイベント（須田町北部町会、外神田三丁目金澤町会、栄町会、岩本町三丁目町会など）を行っていることである。地元企業に町会の活動へ参加してもらい、交流する場を作ると同時に、毎年、懇親の場を持つことによって地元企業を町会から離れさせないように工夫していることがわかる。

つまり、青年部内部のつながり、地元企業と町会の関わり、新住民と旧住民との交流の場などを蔭祭を通して、維持・強化していることが神田祭の蔭祭の分析から窺えるのである。

冒頭でみた「座談会 都市の祭り」の平岡好和の指摘のように、「本祭Ⅱ大人の祭り」「蔭祭Ⅱ子どもの祭り」⁽²⁴⁾とは二分できない側面があることがわかるのではないだろうか。祭りの継承や世代間継承の役割はあるものの、東日本橋二丁目町会の蔭祭のように、子どもの祭りを介した大人のつながりを強化する中間領域にある祭りなのではなかろうか。だからこそ、お祭りやイベントを見物する観客をほとんどみることができない「観客のみえない祭り」であっても行う意義があるのでなかろうか。

観客と祭りの担い手との間に生じる「見る／見られる」「見る／見せる」とは違った町内のつながりを維持するための社会的なシステムが存在していると考えられる。それも、古くからの住民が多く、町会活動や祭りの担い手に事欠かなかった時代とは異なり、地域社会の空洞化によって、町会の青年部のモチベーションの維持する場や、町会と町内の企業・子ども・新住民などとの接点を作る場が必要となり、そうした社会的なシステムとして蔭祭の役割があると考えられる。そして、こうした町内の結集を図る、観客をほとんどみることができない「観客のみえない祭り」があるからこそ、多数の観客を見ることができ「観客のみえる祭り」が維持・拡大しているではなかろうか。つまり、蔭祭の実態から町内共同の新しい形がみえてくるのである。

註

(1) 例えば、和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、昭和六十二年。松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年。中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体』古今書院、平成一九年、などがある。

- (2) 宮家準・平岡好和・菌田稔・中村宇美「座談会 都市の祭り」『三田評論』第八六三号、昭和六〇年、一八頁。
- (3) 前掲宮家ほか「座談会 都市の祭り」六頁。
- (4) 柳川啓一『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房、昭和六二年、一三七頁。
- (5) 島田潔『神道宗教』を中心とした戦後の祭祀学・祭り研究』『神道宗教』一六九号、神道宗教学会、平成九年、五三頁。
- (6) 島田潔「中世諏訪祭祀における王と王子」菌田稔・福原敏男編『祭礼と芸能の文化史』思文閣出版、平成一五年。
- (7) 茂木栄「十五童・玉・花・翁」奥三河古戸のシカウチ神事・白山祭・花祭・田楽」脇本平也・田丸徳善編『アジアの宗教と精神文化』新曜社、平成九年、四九頁。
- (8) 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年、五三頁。
- (9) 前掲『神田明神史考』六九頁。
- (10) 前掲『神田明神史考』六八〜七〇頁。
- (11) 神田倶楽部『明神さまの氏子とお神輿』武蔵野書院、平成一〇年、三六三頁。
- (12) 麴町わがまち情報館 <http://koujimachi.net/town/otemaruub.html>
- (13) 菌田稔「祭りと都市社会―天下祭―(神田祭・山王祭) 調査報告(一)」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二十三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (14) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (15) 織田桂「サラリーマンが神輿を担ぐ!」『東京人』二〇一二年六月号、都市出版、平成二四年、八二〜八三頁。
- (16) 「神輿に燃えるビジネスマン」『讀賣新聞』朝刊、平成二二年五月八日付。
- (17) 石井ゼミ神田祭祭典・調査班編「神田祭・祭典調査報告―平成二六年度―」『神道研究集録』第二九輯、國學院大學大学院神道学・宗教学専攻院生会、平成二七年、四六〜六〇頁。
- (18) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』八七頁。
- (19) 前掲菌田「祭りと都市社会」一一二頁。
- (20) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三五頁。
- (21) 前掲菌田「祭りと都市社会」一〇二頁。
- (22) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』七〇頁。
- (23) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』六七頁。
- (24) 前掲宮家ほか「座談会 都市の祭り」一八頁。

第四節 町会の年中行事の変容と神田祭

本節では、神田祭に参加する神田神社の氏子町会という具体的な対象地域を設定し、そのエリアの年中行事について、各地区連合ごとにとどのような現状にあるかを挙げ、その中で神田祭はどのように位置付けられているかを明らかにしたい。

なぜ、町会の年中行事を対象とするかといえば、町会の年中行事の中には、地域社会の祭りである神田祭も位置付けられるからである。つまり、蔭祭と同様に、神田祭以外の町内の行事を対象として、町会の神田祭と対比させながら新たな町内共同のあり方について探る目的を持っているからである。

そもそも、年中行事とは、柳田國男監修の『民俗学辞典』によれば、「年々同じ暦時がくれば、同じ様式の習慣的な営みが繰り返されるような傳承的行事をいう。ただし、それは個人について年々繰り返されるものではなく、家族や村落など、とにかく或る集團ごとに、しきたりとして共通に営まれるものである⁽¹⁾」と位置付けられている。また、『日本民俗大辞典』によれば、年中行事とは、「年ごとに、同じ日もしくは、暦によって決められた日に繰り返される一連の行事。多くは儀礼や式典を伴う⁽²⁾」としている。

民俗学では、多くの年中行事に関する研究蓄積がなされている。例えば、田中宣一の『年中行事の研究⁽³⁾』、倉石忠彦の『年中行事と生活歴―民俗誌への接近―⁽⁴⁾』などが挙げられる。これらの研究は、基本的には農山漁村の年中行事を対象としてきた。一方、都市民俗学を想定した倉石忠彦は、『年中行事と生活歴―民俗誌への接近―』に所収された「民俗都市の把握」の中で、都市における民間伝承の発見への意識はあるものの、具体的なフィールドを設定した体系的な都市の年中行事の把握には至っていない。

宗教学者の石井研士は、民俗学の文献に記された年中行事の説明には、昭和二九（一九五四）年生の自身の生活実感とは無縁であり、現代の若者の間に民俗学が説明する年中行事が見出だせないに違いないと考える。また、宗教学における日本人の年中行事の常識を再考することを目的に、「現在の都市民の世界観や霊魂感の現状を解き明かすためには、現在都市で行われている「年中行事」の説明が必要なのではないか」として、『都市の年中行事―変容する日本人の心性―⁽⁵⁾』にまとめ、考察を行っている。ただし、石井の関心は、年中行事自体の研究が目的ではなく、年中行事の変化の分析を通して、日本文化、特に宗教文化がどのように変化してきたかを把

握することになった。そのため、民俗学で説明されるような年中行事のうち、どの行事が今でも行われ、どの行事が廃れてしまったのか。産業構造や生活構造が大きく変わる中で、どのような新しい行事が生み出され、年中行事の全体的な構造はどのように変化したと考えられるか、そして初詣に出かける恋人やバレンタインデーにチョコレート売り場に殺到する女性らがどのような意味で宗教的なのか、あるいは宗教的でなくなってきたのかに着目している(6)。

しかしながら、石井の研究のように、年中行事の変化の実態から、現代日本文化全体を考察するような研究は、特に、大都市部の都市の年中行事を対象にしたものは、その後、大きくは進展していない。わずかに、石井とは研究の目的が異なるものの、都市の民間伝承の発見を志向して、倉石忠彦が國學院大學大学院において大学院生らと実施した調査研究があり、参考となる。

倉石忠彦は、先に挙げた「民俗都市の把握」の中で、「都市の民俗調査においてはとりあえずはその対象地域を設定しなければならぬ。しかし定住する人ばかりがその対象ではない。もちろん定住者は除外することはできない。夜間人口と昼間人口との差が大きい――言うまでもなく昼間人口のほうが多い――のが都市としての目安になる。都市的空間においては不特定の一次的生活者・来訪者と定住的生活者は共にその生活空間の構成要員である。調査者の視線の向こうにはその両者が存在しなければならない(7)」としている。具体的なフィールドを設定して、その地域の不特定の一次的生活者・来訪者と定住的生活者の両者を対象とすることが都市の民俗研究においては重要であると位置付けている。倉石は、こうした都市の民俗調査を射程にして、東京・渋谷という調査対象の地域を設定し、大学院生らとともに『渋谷学叢書1 渋谷をくらすー渋谷民俗誌のこころみー(8)』としてまとめている。しかし、副題に「こころみ」とあるように、渋谷の年中行事については、十分な分析がなされていない。また、社会学の松平誠は、神田の須田町中部町会を対象とした分析から、地域の大変動の中でこれまでは異なつた町内の構成メンバーが誕生したことを明らかにして、「住いこそ別だが、町内で働いている昔からの町内の人という町会員」を「通いの住民」と名付けている(9)。こうした「通いの住民」についても、『渋谷をくらす』では対象とされていない。

以上のように、都市において特定のエリアを対象とした一定の集団が行う年中行事を把握することは、都市の年中行事の研究においても一定の意義があるものと考えられる。

そこで、本節では、町会の年中行事の実態把握から、年中行事のどの要素が縮小し、どの要素が拡大したのかという経年的変化を地域社会との関係から解明しつつ、年中行事の変容と神田祭の関係について考察したい。

具体的には、まず、分析対象となる町会の区域を提示した上で、昭和四三年の神田祭を対象として行った藪田稔の調査で明らかにされた分析対象となる町会の世帯数と平成二五（二〇一三）年（一部、平成二七年の含む）の筆者の調査で明らかとなった世帯数を対比し客観的なデータを提示する。次に、対象となる町会長をはじめとした町会関係者のインタビューをもとにその生活実感に寄り添いつつ、関係資料や町会活動を紹介する「大好き神田」のホームページ⁽¹⁰⁾やFacebookのページ⁽¹¹⁾などで補完しながら年中行事の現状把握と経年的変化を明らかにしたい。なお、中神田十三ヶ町連合の須田町中部町会に関しては、筆者が町会の年中行事の多くの場面に参与観察していることから、実態把握のための詳細データを紹介し、別項を立てて個別分析を行った。

一、神田中央連合

最初に、神田中央連合からみていく。神田中央連合は、古本の街として知られる神保町や夏目漱石が出た錦華小学校がある猿楽町、小川町などがある。

(一) 神田猿楽町町会

町会の区域は、千代田区猿楽町一丁目・二丁目全域である⁽¹²⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は二四一世帯⁽¹³⁾であったが、平成二五（二〇一三）年現在の世帯数は昔から住んでいる町会員八〇世帯である。松平誠が調査を実施した平成四年当時と平成二五年・平成二七年と比べると、マンションの人口と昔から住んでいる町会員の割合が逆転した。町内には一六棟のマンションがあり、そのうち四棟がファミリータイプ（世帯用）のマンションで、残りはワンルームマンションである。

平成二七年現在、年に二回、道路の花植えを行っているが、参加するのは役員を中心に約二〇人である。普段の町会活動に参加しな

い人でも神田祭には参加する人もいるという。なお、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）は町会としては行っていない。

（二）神保町一丁目町会

町会の区域は、千代田区神保町一丁目一〜七一までの奇数番地である⁽¹⁴⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は三三〇世帯（神保町一丁目南部町会⁽¹⁵⁾）であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は、町会員は三八三世帯、七四三人である。

町会長のT・Y氏（昭和一四年生）によれば、初詣は個々で行う。昔は一月三一日まで一週間〇日ほど夜警をやっていたので、夜警をやっていた役員たちが大晦日の紅白歌合戦が終わったら、「神社へ行こう」と流れで一緒に参拝をしていた。現在では、役員でも町内に住んでいる人が少なく、町内に通っている人が多く、大晦日の夜遅くまで町内にいない。そのため、一緒に神田神社へ初詣をする機会が少なくなってきた。現在の役員の二〇何人中約半数が町内に通っているという。今は、本屋の店舗があっても店には住んでいない。昔は店主が店に住んでいたが、今は通うようになった。

町会として神田神社への昇殿参拝を行うのは、毎年、町内の小学校・中学校（義務教育）を入学・卒業する町会員の子ども（該当者）を対象に案内を出して一緒に入学・卒業祝いとして参拝するときである。平成二七年は三月の最終日曜日に実施した。昇殿参拝を終えて記念品（図書カードなど）を町会から贈呈する。神田神社では四月に健育祭を行うが、それとは別に神保町一丁目町会単独で行っている。

町会の新年会には、企業にも案内を出して参加してもらっている。毎年八月最終日曜日には、神保町三井ビルディングの前で場所を借りて、子どもの「路上天国」を行っている。ラジオ体操の表彰式なども一緒に行っている。敬老会を行っているがその景品も町内企業が協力してくれているという。

（三）神田錦町二丁目町会（錦連合）

町会の区域は、千代田区錦町二丁目全域である⁽¹⁶⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は一三〇世帯⁽¹⁷⁾であったが、平成二五（二

〇一三）年の世帯数は、居住者一二〜一三世帯、町会員は六〇世帯である。略表記は「錦二」である。

千代田区神田公園地区連合町会『創立三十周年記念誌』のよれば、戦前、錦町町会に属し一之部から八之部までであったが、現在の錦町二丁目とは三之部と八之部に当る。戦時中は統制のため錦町二、三丁目町会に改組され、防空演習等を行った。昭和十九年一月二九日の大空襲で町の大半が焦土と化した。

戦後はGHQの指令により町会と隣組は解散させられたが、町の復興とともに疎開先より人々も戻り、町会設立を望む声が大きくなってきた。昭和二三年に、町会員の出資により衛生会として木造二階建の町会事務所を建設した。昭和十九年二月九日、豊川倶楽部（錦町二―二）において発起人会が開かれ、錦町二丁目町会が発足した。昭和三二年に小神輿、昭和三五年に町会旗と大神輿を購入し、それぞれ神田神社で「入魂式」を行った。また、昭和三五年には町会事務所の土地（国有地）を購入した。昭和四七年には、簡易保険の集金代行を行う「錦保会」を発足し、表彰を受けるほどに参加者が増加し、町会運営の大きな財源となった（18）。

『創立三十周年記念誌』の「錦町二丁目町会のあゆみ」（昭和六〇年）によれば、町会の年中行事には、町会発足以来、海水浴・ハイキング等のバス旅行を毎年続けてきたが、住民が少なくなり、また事務所の人々も参加できるように昭和五三年から納涼会を始めた。納涼会は年々盛んになり、隣接地区からも期待されるほどの「錦二名物」になったという。町会の青年部・婦人は、旅行会を開催して親睦を深め、青年部より発展した「緑友会」は国内一九回、海外七回の旅行を行っている。町内のゴルフ会である「錦会」はコンペ一〇〇回記念を迎えた。このほか、敬老会・子ども会の行事を行い、錦地区のラジオ体操も三〇周年を迎えようとしている。また、町内の豊川稲荷社は豊珠講と町会が協力して信仰活動を行っているとしている。「錦町二丁目町会のあゆみ」には昭和六〇年の新年会の写真も掲載されている（19）。

昭和二九年の町会発足から昭和六〇年までの変化をみると、居住人口の減少により海水浴やバス旅行などの日帰り旅行は縮小し、町内企業を取り込むべく納涼会が拡大していることがわかる。また、「錦保会」を含め「緑友会」「錦会」といった、町内に新たな団体が結成されたことがわかる。

その後の変化を「神田錦町二丁目町会のあゆみ」（千代田区神田公園地区連合町会『創立五十周年記念誌』平成一七年、所収）からみ

ていくと、納涼会は「現在も錦二名物」であるものの、錦地区ラジオ体操は三〇周年を一区切りとして中止された。町会事務所には常時専従員がいる体制から婦人部のボランティアが詰める体制に変化した。また、神田錦町二丁目町会の学区であった小川小学校が急激な学童の減少により統廃合され廃校となった。バブル経済の余波で地価の評価額が年々高まり、町会所有の事務所の敷地建物も例外ではなく、また町会員の転出に伴い、退会者も多く見られる結果が生じた。そのため、節税効果がある町会の法人化を進め、千代田区の第三番目の認可地縁団体となったことである。そして、平成一七年の町会五〇周年では、大神輿の大修理を行い、完成の奉告祭を平成一七年四月二十八日に神田神社で行った⁽²⁰⁾。

平成二七年の錦町二丁目町会の年中行事には、「大好き神田」のホームページによれば、新年会（二月二三日（金）一八時〜、如水会館）がある。

（四）錦町三丁目町会（錦連合）

町会の区域は、千代田区錦町三丁目一〜一九までの奇数番地及び二〇〜二四・二六・二八である⁽²¹⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は二〇〇世帯⁽²²⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は居住者八世帯である。

『創立三十周年記念誌』の「錦町三丁目町会のあゆみ」（昭和六〇年）によれば、錦町三丁目町会の前身である錦三会は、昭和二四年五月五日のこどもの日を記念して発足した。そして、戦前の町会事務所跡三九坪の土地を購入し、千代田区の協力を得て、東京都の子どもの遊び場第一号ちして誕生させた。このことによって、昭和二六年三月一五日に優良社会事業功労者として錦三会は表象を受けた。この遊び場をベースに、毎年夏にはレクリエーションを催した。

昭和三〇年に錦三会を発展的に解散し、錦町三丁目町会を設立した。昭和三二年には、町会だけで錦華小学校の校庭を借りて大運動会を開催した。昭和三七年には町会内の四之部会が独立し、錦町三丁目第一町会となった。昭和四〇年代から街の様子が徐々に変化してきた。丸の内地区から大手町へビルの進出が目覚ましく、ついに日本橋川を越え、神田地区もビルラッシュの波がヒタヒタと押し寄せてきた。それによって錦町三丁目町会もだんだんと古きよき隣人が一人去り二人去りして淋しい状況が続いてきた。昭和五〇年には、

NETテレビ（現・テレビ朝日）で「ビルの谷間」というテーマで当時の町会長と八木アナウンサー、立教大学の先生が三〇分番組で対談した。夜間人口の減少による人材難となり、役員構成も一度お手伝いをするともう足が抜けなくなるといった具合であった⁽²³⁾。「錦町三丁目町会のあゆみ」には、昭和四〇年の新年会の写真が掲載され、新年会を開催していたことがわかる。

その後の変化を『創立五十周年記念誌』の「錦町三丁目町会のあゆみ」（平成一七年）からみていくと、この二〇年間の当町会を取り巻く環境は、昭和四〇年代から激しくなった転出による会員の減少は止まることなく、四〇世帯になった。新居住者はおらず、会員の高齢化が進むばかりで町会の存立基盤が脅かされている。町会にはほぼ全員参加という状況が続いているものの、かつて盛大に行っていたレクリエーションや催しは主に人手の関係で低調になっている。しかし、町会員の愛町精神に支えられ、日帰り旅行などの催しが不定期であるが復活しつつあるとして、平成一二年の町会バス旅行（千葉県鋸山）の写真が掲載されている。錦町三丁目町会のシンボルで錦三会の時代から管理をしていた「錦三子供の遊び場」（錦町三丁目三番地）の管理運営も千代田区に委ねている現状があるとしている⁽²⁴⁾。この「錦町三丁目町会のあゆみ」には、平成一三年の町会新年会（学士会館）、平成一五年五月の神田明神祭礼・婦人部集合、平成一五年一月の江戸天下祭・青年部集合の写真が掲載されている。ただし、『創立三十周年記念誌』および『創立五十周年記念誌』の「錦町三丁目町会のあゆみ」には、神輿に関する記述はない。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによれど、新年会、神田祭（隔年）、納涼会、歳末の夜警などを実施している。新年会、納涼会は学士会館で行い、住民と企業が参加して行っている。また、歳末の夜警にも企業が参加している。「大好き神田」の「錦町三丁目町会今昔」によれば、昔からの町会員は減少を辿る一方で、新しく入ってきた企業に対して法人会員になるように積極的な働きかけを行い、昔からの町会員と町会に参加した企業のコミュニケーションを密にとり、新たな町会のあり方を模索しているとしている。そして、「とりわけ神田地域特有の文化である「神田祭」を核として、新旧町会員が互いの理解を深め、この歴史と伝統ある錦町に愛着を深めて頂きたいと考えております」としている。この「錦町三丁目町会今昔」には、「昭和三〇年代の町会行事」として、「小学校を借り切った運動会」「錦三こども劇場（於錦三児童公園）」「大勢の子供で綱引き」「桃太郎山車の宮入（平成一五年に復活）」「何台ものバスを借り切った町内旅行」「小神輿の宮入（於神田明神）」が掲載されている。子ども中心の町会の行事から、

昔からの住民と新たに加入した企業のつながりの場としての町会行事へと大きく変化したことがわかる。

(五) 錦町三丁目第一町会(錦連合)

町会の区域は、千代田区錦町三丁目二〜一八の偶数番地である⁽²⁵⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は七四世帯であった⁽²⁶⁾。平成二五(二〇一三)年の世帯数については未調査である。

『創立三十周年記念誌』の「錦町三丁目第一町会のあゆみ」(昭和六〇年)によれば、錦町三丁目第一町会は、昭和三七年に錦町三丁目町会より分離した町会である。錦町三丁目第一町会の淵源は、大正初期に錦町三丁目五番地を一角として学事奨励会という教育文化活動を行ったことにあり、その活動が「五ヶ番地会」と称する町会活動に発展した。関東大震災により八割が焦土と化した。戦後は区画整理が行われ、耐火建築と高層ビルの林立する街へと一変した。

昭和六〇年の錦町三丁目第一町会の状況は、世帯数・八五世帯、戸数・鉄筋コンクリート二五棟・木造モルタル造り四〇棟、人口・昼間一五〇〇人・夜間一一五人、商業地域・店舗数三〇軒・地場産業一六軒・事業所一一〇棟である。町内には神田保養所(のちの千代田保養所)、錦町郵便局を擁し、商業地区としての発展が期待されている⁽²⁷⁾。

その後の変化を、『創立五十周年記念誌』の「錦町三丁目第一町会のあゆみ」(平成一七年)からみていくと、平成四年に町会の創立三〇周年記念式典を行ったが、その際の町会の世帯数は町会員七〇軒、世帯数二九世帯に変化した。昭和六〇年と比較すると、八五世帯から二九世帯へ減少した。さらに、平成一四年の町会創立四〇周年式典を行ったが、その際の町会員数四五軒、世帯数一〇世帯まで減少した。バブル景気、地上げ、底地買い、土地の高騰が錦町を襲い、さらにバブル崩壊により地主の転売、土地の権利の複雑化し、この土地を離れていく町会員が増加した。平成一五年・一六年には、土地の再利用でワンルームマンションが五棟建設された⁽²⁸⁾。その後、五棟二五二戸が町会に加入することとなったが、町会費などの収入的なメリットはあるものの役員になるなど質的な人員増加の期待は薄いとされている⁽²⁹⁾。

昭和六三年度に、町会青年部を新装した。平成八年五月の神田祭では、長年の夢であった町会単独での神輿宮入を行った。しかしな

がら、経済や人員の事情により、平成一七年の神田祭は休みこととなった⁽³⁰⁾。

平成二七年度の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、四月一日(土)神田祭の打ち合わせ、五月八日(金)一〇日(日)神田祭、五月三〇日(土)総会(神田祭の直会を兼ねる)、一二月二六日(土)・二九日(火)夜警、一月三〇日(土)新年会などがある。このほか、神田公園地区連合町会の防火防災訓練、納涼会などが行われた。神田祭の打ち合わせでは、人手不足からボランティアスタッフの募集(神輿の担ぎ手、そうめんを配る人、お祭りの準備をする人など)と打ち合わせが行われた。また、連合町会の防火防災訓練には錦町三丁目第一町会からマンション住民を中心に一四人が参加した。

(六) 小川町三丁目南部町会(錦連合へ参加)

町会の区域は、千代田区小川町三丁目一―一の奇数番地である⁽³¹⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は一二〇世帯であった⁽³²⁾。平成二五(二〇一三)年の世帯数については未調査である。

『創立三十周年記念誌』の「小川町三丁目南部町会のあゆみ」(昭和六〇)によれば、小川町三丁目南部町会は、昭和二八年一月二日、町内に祀ってある五十稲荷神社の社務所で創立総会を開催し、設立した。創立総会では、町会の行事として、祭礼積立金の設立、歳末夜警(毎年年末に七日間実施)、敬老会、一泊旅行、ねずみ取り・害虫の駆除、ラジオ体操・子供の遊び場、消火器の設置などを取り決めた。翌昭和二九年一月五日、五十稲荷神社にて町会設立の報告祭を行い、終了後に当時の都民銀行神田支店二階ホールにおいて祝賀会を実施した。この「小川町三丁目南部町会のあゆみ」には、「昭和二七年大祭」(神酒所前での集合写真、曳き太鼓「山車」が写る)、「昭和二八年蔭祭」(五十稲荷神社前での集合写真、神輿・曳き太鼓「山車」が写る)、「昭和二七年大祭」の写真にはたぐささんの子どもたちの姿も写されている。

その後の変化を、『創立五十周年記念誌』の「小川町三丁目南部町会のあゆみ」(平成一七年)からみていくと、明治の頃から学生街として賑わい、ミナミスポーツ店やミズノスポーツ店があったが、昭和三〇年代からスポーツ用品店が出店し始め、日本屈指のスポーツ店街に発展した。昭和六二年には女性の町会長が誕生した。町会員数・夜間居住軒数の推移をみると、昭和三九年・昼間一一五・夜

間六二、昭和四九年・昼間一三三・夜間六〇、平成一〇年・昼間九七・夜間三六、平成一七年・昼間七九・夜間二七である。夜間人口は、昭和三九年の六二から平成一七年の二七と大きく減少している。この現状について「夜間居住軒数共に減少が目立ちその反面ワンルームマンション等の建設が進み町会運営にも支障をきたし困った現象です」（四六頁）としている⁽³⁴⁾。

(七) 小川町北部二丁目町会（小川町連合）

町会の区域は、千代田区小川町一丁目二〜一〇の偶数番地である⁽³⁵⁾。昭和四三（一九六八）年は神田祭へ不参加であったため不明だが、平成二七年の世帯数は登録上は約三八世帯である。ただし、実際に町内に住んでいない人もいる。その他に会社があり、それを合せると六〇世帯である。

平成二七年現在、二月に小川町連合で幸徳稲荷神社（神田小川町二・一四）の節分祭に参加し、神田祭に合わせて、小川町連合で幸徳稲荷神社の大祭を行っている。小川町連合の神輿は、幸徳稲荷神社の宮神輿という意識もあり、幸徳稲荷神社に小川町連合の神輿が保管されている。

『千代田の稲荷―区内稲荷調査報告書―』によれば、幸徳稲荷神社は、小川町北部一丁目町会・小川町北部二丁目町会・小川町北三町会・小川町三丁目西町会の四町会で祀り、管理は小川町北部二丁目町会が行っている。もともとは「小川町北部町会」が祀っていたが、昭和二一年に四つの町会に分離したため、「幸徳稲荷神社奉信会」を結成して活動を引き継いだ。昭和四三年には、境内に「幸徳会館」を建築し、二階に社を移して宗教法人化した。代表役員・責任役員を各町会から選出し、小川町北部二丁目町会が中心となって維持管理に当たっている。現在では毎年二月三日に節分祭があり、神事のあと、豆撒きが行われるとしている⁽³⁶⁾。また、神田祭が蔭祭の年には太田姫稲荷神社の祭りに参加している。

町会長のK・M氏（昭和一二年生）によれば昭和六三年の小川町連合の神輿を作る一〇年くらい前から、神輿を借りて小川町連合で神田祭で神輿を担ぐようになったという。バブルの少し前から神輿を作ろうという機運が高まった。小川町連合を組むようになったのは、連合の四町会で祀る幸徳稲荷神社が核になっている。一緒にお祀りするお稲荷さんがあるから四つの町会が集まって仲良くやって

きた。毎年二月に節分祭を幸徳稻荷神社で行っていて、豆撒きを行わないが、氏子に小さい袋に入れた豆を四つの町会の全会員に配っている。四〇〇ぐらいの数を配っている。節分祭とは別に各町会が毎年奉納金を出し、それで神社の維持管理をしているという。

以上のように、神田中央連合の七町会の年中行事についてみてきたが、特筆すべき特徴として、以下の三つの特徴が挙げられる。

一点目は、居住人口が減少する中で、町会の年中行事を通して、企業を町会員として取り込み、新たな町内共同のあり方を探っている町会が複数あることである。納涼会や敬老会などが新たな年中行事としての性格を持って登場してきていることがわかる。

二点目は、町会として、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）を実施しないところが多いことである。神保町一丁目町会のように、町内に住む人が減少し、町内に通う「通いの住民」が増えたことによって、年末の夜警の日が早められ、少なくとも一二月三十一日まで夜警を行わなくなり、初詣は町会による神田神社への参拝から個人での参拝へと変化している。その一方で、神保町一丁目町会では、入学・卒業祝いで神田神社へ昇殿参拝を実施している。

三点目は、小川町連合で祀る幸徳稻荷神社の存在である。第三章第一節・第二節で触れたように、小川町連合のまとまりを維持する上で幸徳稻荷神社の存在が大きく、神田祭の際に合わせて大祭を行うのみならず、二月の節分祭も重要な場になっていることがわかる。

二、中神田十三ヶ町連合

次に、神田藪そば・まつや・竹むら・ぼたんなどの老舗が立地する神田須田町や淡路町、内神田地域のある中神田十三ヶ町連合についてみていく。中神田十三ヶ町はJR神田駅の西側に位置する。

(一) 淡路町一丁目町会

町会の区域は、千代田区淡路町一丁目の奇数番地である⁽³⁷⁾。昭和四三（一九六八）年は不明だが⁽³⁸⁾が、平成二五（二〇一三）

年の町内に住む町会員は、五〇世帯・約一五〇人である。このうち、神田祭には五割程度が参加するという。

町会長のA・I氏によれば、かつては、初詣、神田祭（隔年）、総会、盆踊り（子ども天国）、旅行会、年末の夜警を行っていた。特に、旅行会が大きな行事であったが、参加する企業の割合が半分くらいになってしまい、社員旅行のようではなくなったという。また、盆踊り（子ども天国）もやらなくなった。

平成二七年現在、初詣、総会、年末の夜警、隔年の神田祭を実施している。初詣は、一月二日の一〇時半に神田神社への初詣（昇殿参拝）を行い、三〇人が参加する。また、淡路町一丁目町会の神田祭に参加する神興同好会・丸子会の拠点がある川崎市下丸子のお祭りに毎年、町会長と副会長が招待され、出向いている。

(二) 須田町一丁目南部町会

町会の区域は、千代田区神田須田町一丁目五・七及び一六〜三四までの偶数番地である⁽³⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は不明⁽⁴⁾だが、平成二七（二〇一五）年の世帯数は町会員一六三世帯（事業所を含む）、町内に住む町会員一〇〇世帯未満、町会の役員は四〇人である。平成二七年現在の町会の年中行事には、神田神社への初詣（昇殿参拝）がある。元旦の一〇時に行い、町内の一五世帯が参加し、御札と御守を受ける。

(三) 須田町北部町会

町会の区域は、千代田区須田町一丁目一・三・九〜二五までの奇数番地、淡路町一丁目二・四、淡路町二丁目二〜一二までの偶数番地である⁽⁴⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は二〇〇世帯⁽⁴⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は、町会員一四〇世帯（大半が企業）、住民は五〇世帯である。

平成二七年現在の町会の年中行事として、元旦の〇時三〇分集合で神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行い、町内の一五人が参加する。蔭祭の年には、前節でみたように納涼会（金曜日の夕方）を開いている。町会会館前の路上で飲食を行い、企業との懇親会を行っている。

る。近隣町会の人も含め四〇〇人が参加する。また、毎年九月一五日前後に、町内の出世稲荷神社の祭りを町内の延寿稲荷神社の祭りと一緒に行う⁽⁴³⁾。

(四) 神田鍛冶三会町会

町会の区域は、千代田区神田鍛冶町三丁目・内神田三丁目一九〇二一である⁽⁴⁴⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、二一五世帯(鍛冶町三丁目)⁽⁴⁵⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は七七世帯(住民登録)、町会員二二〇人である。このうち、一〇〇人が神田祭に参加する。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月四日(日)の町会の新年会(神田神明神会館)、五月八日(金)〜一日(日)の神田祭、一月二八日(月)の一九時〜二二時の町会の夜警がある。

町会長のC・S氏によれば、新年会には三〇人が出席する。毎年七月下旬の土曜日に納涼の子ども縁日を内神田八町会で開催し、田公園出張所の二〇町会で、運動会を実施している。

(五) 多町一丁目町会

町会の区域は、千代田区内神田三丁目七・一二・一三・一四・一七・一八・二二・二三である⁽⁴⁶⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、一八〇世帯⁽⁴⁷⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は、五四世帯(住民登録)で、実際の居住者は三〇世帯である。町会員は一五〇世帯で、町会活動に参加するのは二〇人である。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月一日(土)の二三時〜一五時の賀詞交歓会(神田神明神会館地下一階)、二月一日(水)の二〇時半からの「大柳稲荷旗揚げ」(町内の大柳稲荷神社で、町会の町内旗揚げ)、二月二三日(月)の二時からの大柳稲荷神社初午祭(旗下げ後に直会・祭典委員会発足式)。この際、祠・鳥居改修祭も併せて実施)、三月二日(月)の一九時〜二〇時の多一(多町一丁目)・旭(旭町)・司一(司町一丁目)合同防火パトロール、三月一四日(土)の一二時〜一

四時からの町会福祉部「春の懇親会」、五月八日(金)～一〇日(日)の神田祭、六月一三日(土)の一七時～一九時半の町会の総会(終了後に半纏を持参して神田祭の直会)、一二月一日(火)の一四時～一五時半の町会の理事・役員会(神田公園区民館)、一二月二八日(月)の一七時～二一時、二九日(火)の一七時からの町会の夜警がある。

(六) 多町二丁目町会

町会の区域は、千代田区多町二丁目全域である⁽⁴⁸⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、三四〇世帯⁽⁴⁹⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の町会員は二二〇～二三〇世帯である。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月一七日(土)の一七時半からの町会の新年会、三月七日(土)の一八時からの町会の役員会・祭礼委員会、五月八日(金)～一〇日(日)の神田祭、六月六日(土)の一八時からの町会の役員会(神田公園出張所)、一二月二八日(月)・二九日(火)の一八時半～二〇時の町会の夜警がある。

平成二七年現在、元旦には一一時に集合して神田神社へ初詣(昇殿参拝)を行う。町会から六五人が参加する。新年会は初詣とは別に開催している。また、旧暦の初午には、町内にある一八稻荷神社を多町二丁目町会を中心とした一八稻荷神社維持会が祀る⁽⁵⁰⁾。町内の松尾神社に毎年一〇月中旬から一月初旬の吉日(土曜日)に神田神社の神職を祭主として、松尾神社維持会をはじめ近隣町会関係者などが参列して祀る⁽⁵¹⁾。

(七) 司一町会

町会の区域は、千代田区内神田一丁目九～一一・一六～一八及び内神田二丁目一〇～一二・一五である⁽⁵²⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、四五〇世帯(司町一丁目)⁽⁵³⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は、一五一世帯(住民登録)で、町会員六四世帯である。

東京都教育委員会は、昭和五二年度～昭和五三年度にかけて緊急民俗文化財分布調査を実施した。この報告書である『東京の民俗1』

には、大正時代の民俗を対象として、神田司町（旧神田司町）の報告も行われている。年中行事についても記載がある。以下に紹介しておく。

一月三〇日 正月準備―町内のカシラからかざりもの（カドマツ・シメナワ等）を買う。神棚・仏壇をそうじし、神棚の古いお札をさげて、神田明神のお札は神田明神へいってもやしてもらおう。二九日は九の字が縁起が悪いとし、三十一日は一夜飾りといつてさける。

一月三十一日 魚屋は正月用品を売るために忙しく親せきのものが手伝いにきて、正月用食品を煮たきした。夕食はだいたい年越しそばといつてそばを食べた。

一月一日 元旦、年始まわり、すでに市場が次の日からあることや、正月用のさしみの小売などで店はひらく。

一月七日 門松をおろす。七草がゆを食べる。

七月一三日 盆 灯をつくり、盆棚の準備をする。夕方買ってきたオガラをたいて、家中の人が一人ずつまたぎながら、盆棚をおまわりする。これをするとしもの病がなおると言われた。

七月一六日 同じように送り火をする。

九月彼岸 春も同じであるが、お重におはぎをつめて、両隣、向かい三軒に配る、お返しとしてマッチや半紙をそのお重の上におせとお礼とする⁽⁵⁴⁾。

現在では、こうした家ごとに行う年中行事は少なくなっている。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月一〇日（土）の一七時からの町会の新年会、三月二日（月）の一九時～二〇時の多一・旭・司一合同防火パトロール、五月八日（金）～一〇日（日）の神田祭、六月一三日（土）の一六時から町の総会（神田公園区民館四階）、一〇月九日（金）の一八時半からの町会役員会、一〇月一七日（土）の一六時から神田神社の末社・御宿稲荷神社例大祭、一月二八日（火）の一八時半からの町会役員会（神田公園区民館）、一月一三日（日）の一一時～一

三時の町会の餅つき、一月二五日（金）・二六日（土）・二八日（月）の一九時～二三時半の町会の夜警がある。

（八）司町二丁目町会

町会の区域は、司町二丁目全域である⁽⁵⁵⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は四三〇世帯⁽⁵⁶⁾あったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は、二〇四世帯・三七六人で、このうち町会員は一四〇～一五〇世帯である。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、元旦の〇時から初詣（神田神社へ参拝したあと、町内の真徳稻荷神社へ参拝）、一月一〇日の「新年七福神巡り」（九十九里七福神巡り）、一月一七日（土）の一七時から町会の新年会（如水会館）、五月八日（金）～一〇日（日）の神田祭、六月六日（土）の町会の定期総会（神田公園出張所四階洋室）、七月二日（火）～二四日（金）・二七日（月）・二八日（火）・三〇日（木）・三一日（金）の町会ラジオ体操、八月六日（木）・七日（金）の一八時～二時半の町会主催納涼盆踊り（神田児童公園）、一月一日（日）の八時からの町会のレクリエーション、一月二六日（土）・二七日（日）・二十八日（月）の一九時～二三時の町会の夜警がある。

年末の夜警には男性四〇人、女性二〇人、子ども二〇人が参加する。男女六〇人のうち、町内に住んでいるのは九割であるという。新年会は、初詣のあと神田神社で行う。

（九）内神田旭町町会

町会の区域は、千代田区内神田二丁目八・九・一三・一四・一六、内神田三丁目五・六・八～一一・一五・一六・二四である⁽⁵⁷⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は、二七八世帯⁽⁵⁸⁾であった。神田公園地区連合町会の『創立五十周年記念誌』によれば、平成一七（二〇〇五）年四月現在の町会世帯数は九〇世帯、人口一六七人、会員数（会費納入者数）は二〇八である⁽⁵⁹⁾。平成二五年は九九世帯で、町会員は二〇〇人弱である。

平成元年の四月から一年間の町会の年中行事として、『創立五十周年記念誌』には、四月：町会旅行会・会計監査・さくら祭り手伝い、

五月…佐竹稻荷祭典・新入学児童を祝う・各協会総会（交通・防火・防犯）、六月…連合青年部献血・漏電防止PR・町会総会、七月…連合青年部子供縁日、八月…夏季ラジオ体操、九月…千代田区総合防災訓練参加、一〇月…千代田区運動会参加、十一月…千代田フェス参加・秋の（交通・防火・防犯）週間協力、十二月…歳末助け合い運動募金・歳末特別警戒実施、一月…賀詞交換会・新年会（町会他）・新成人を祝う、二月…第一回神田祭祭典委員会、三月…春の（交通・防火・防犯）週間協力を挙げられている⁽⁶⁰⁾。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月一日（日）の新年会（三島大社）、三月二日（月）の一九時〜二〇時の多一・旭・司一合同防火パトロール、三月八日（日）の一二時からの町会婦人部「春の懇親会」（日本橋のレストラン「サンパウロ」、三月一四日（土）の一時からの町会の理事会（佐竹稻荷神社社務所二階）、四月一日（土）の一時からの町会の理事会（佐竹稻荷神社社務所二階）、五月八日（金）〜一〇日（日）の神田祭、六月六日（土）の二七時〜二〇時の町会の通常総会（終了後に神田祭の直会を兼ねた懇親会を開催）、七月一日（土）の一時からの町会の理事会（佐竹稻荷神社社務所二階）、七月二二日〜八月一日の内神田旭町ラジオ体操会、八月八日（土）の一時半からの町会の理事会（終了後に暑気払い）、九月二七日（日）の八時からの町会のレクリエーション（マザー牧場へ旅行）、一二月二六日（土）・二八日（月）の一九時〜二二時の年末の夜警がある。

町会長のH・Y氏によると、（平成二五年の）四〜五年前から月一回第三木曜日に、雨天決行で近隣の五町会で夜警を実施している。一九時から三〇〜四〇分程度を夜警を行い、終了後に参加者で懇親の場を設けている。隣の親交を深める場になっているという。また、ハロウィンに商店街でお菓子を配っている。しかし、子どもが少なくなっていて、小学生以下の子どもは近隣三町会を合せても四〇人程度であるという。かつては、神田祭が蔭祭のときに、子ども神輿と太鼓山車を出していたが、二〇年近く出していない。

五月第二土曜日に、町内の佐竹稻荷神社の祭りを行う⁽⁶¹⁾。神田祭の年には神田祭に合わせて実施している。

（一〇）内神田鎌倉町会

町会の区域は、千代田区内神田一丁目一番五〜九・一二・一四号、五〜八番、内神田二丁目一〜七、内神田三丁目一〜四である⁽⁶²⁾。

昭和四三（一九六八）年の世帯数は三〇〇世帯⁽⁶³⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は二一五世帯（区公表）、町会員一

七八世帯である。

昭和五二〜五三年度に東京都教育委員会が調査を実施した『東京の民俗 1』には、大正年間の民俗について、内神田（旧鎌倉町）の調査も行われ、年中行事について記載がある。以下に参考までに、列挙しておく。

一月一日 元旦（二ヶ日）…前年の暮にメ飾りを買ひ玄関前に飾った。玄関には松飾り、輪飾り、裏口には小さな松に小さな輪飾りを、各部屋、便所、仕事台に小さな輪飾りをした。この日ははじめ、三ヶ日は雑煮におせちで過す。雑煮は切餅を焼き、すまし汁に小松菜を入れて食べる。おせちは煮しめだけを作り、その外は買う。

初詣…神田明神へ行く。神田明神では、初日の出が辰巳に昇り始めると境内で神田囃子が始まった。

一月七日 七草…七草粥を食べた。餅を入れ、白砂糖で食べた。

一月十五日 小豆粥で食べた。

一月二〇日 一五日に粥を少し残しておき、二〇日粥にした。

二月 節分…メザシとヒイラギを束ね玄関と便所の外にさす。また家族の年の数の豆を半紙に包んで、それで子供たちの体や頭に触れ「病気になるないように」「頭が良くなるように」と祈った。その後その包を家の北東の隅（道路の端）に置いて、うるを振り返らないように家にもどる。ふり返ると災難にあうという。

三月三日 ひな祭…ひな人形を飾り、菱餅、白酒、ひなアラレ、草餅を供えた。鯛の刺身で祝った。

七月 お盆…一三日にはお墓参りをし、一五日は浅草玉宗寺にて施餓鬼の供養をした。お盆には、オシヨロサマを買って来て仏前に飾り、終るとお金を付けて近郊の農家の人に渡した。また食物は、そうめん、カボチャの煮物、白玉（ぶつかき氷に白砂糖）を用意した。送り火と迎え火は、細かい花の束で水をかけ、火を消して三回またぐ。

一月 酉の市…一月の酉の日に行われる市で江戸なまりで「トリノマチ」と呼んだ。商人は熊手を買う習慣がある。切さんしよやとろの芋（八ツ頭）が売られた。この日女性たちは、帰りに吉原を見物した。普段は女性は見られなかった。

一二月 丸太河岸のべつたら市、神田明神の歳の市などでにぎわう。年越そばは、そば屋からもりそばをとって食べた⁽⁶⁴⁾。

現在では、こうした家ごとの年中行事は少なくなっているものの、新年の注連飾りや門松などは、比較的現在でも飾り付けられている。

平成二十七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、元日一二時からの初詣（神田神社境内の御宿稲荷神社・浦安稲荷神社に参拝し、神田神社に昇殿参拝をしたあと、明神会館で直会）、一月三日（火）の一八時半からの町会の新年会・新成人を祝う会（神田神社明神会館）、一月二六日（月）の一八時半～一九時半の定例役員会、二月九日の定例役員会、二月一〇日に顧問相談役会、二月一四日の祭典委員会、三月一四日（土）の一二時からの町会福祉部のお楽しみ会、三月一五日（日）の九時～一七時の早春バスツアー（横須賀軍港クルーズなど）、三月二六日（木）の一八時半～二〇時の定例役員会・地区組長会・祭典委員会、四月四日（土）の町会の神輿搬出、四月二一日（火）の一八時からの定例役員会・祭典委員会、五月八日（金）～一〇日（日）の神田祭、五月一六日（土）の一七時からの祭典委員会の足洗（直会）、五月二七日（水）の一八時半～一九時半の定例役員会、六月一〇日（水）の定例役員会、六月一二日（金）の顧問相談役会、六月二五日（金）の一七時半～二〇時の第六二回総会・懇親会（会場：全国地方銀行会館）、七月一七日（金）の一八時半～一九時の定例役員会、九月一〇日（木）の一八時半～一九時半の定例役員会、九月二六日（土）の一二時から町会福祉部のお楽しみ会、一〇月八日（木）の一八時半～一九時半の定例役員会、一一月六日（金）の一〇時～一〇時半の町会の清掃（千代田区一斉清掃の日に合わせて実施）、一〇月七日（土）・八日（日）の町会の有志旅行会（松島）、一〇月一〇日（火）の一八時半～一九時の定例役員会、一一月一〇日（木）の一八時半～一九時半の定例役員会、一二月一六日（水）の一八時半～二〇時半の忘年会、一二月二七日（日）・二八日（月）・二九日（火）の一九時～二二時の町会の夜警がある。

（一）内神田美土代町会

町会の区域は、千代田区美土代町及び内神田一丁目二～四・一二～一五である⁽⁶⁵⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は、神田祭には不参加であったため不明⁽⁶⁶⁾であるが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は一三五世帯（住民登録）、人口二〇〇人である。このう

ち、町会の活動に参加するのは二〇人であるという。

平成二七年の町会の年中行事は、「大好き神田」のホームページによると、一月一〇日の一三時からの新年会、五月八日（金）～一〇日（日）の神田祭、一二月二五日（金）・二六日（土）の一八時～二二時の町会の夜警がある。

なお、中神田十三ヶ町連合の動きとして、平成二七年は中神田十三ヶ町祭典委員会を一月三一日（土）・二月二八日（土）、三月二七日（土）に行い、四月三日（金）の一四時から神田神社春季大祭（終了後祭典委員会）に参列、五月二四日（日）の一六時～一七時で中神田十三ヶ町世話人会を実施、五月三〇日（土）の一七時から中神田十三ヶ町祭典委員会直会、一〇月一八日（日）の九時半から第五三回千代田区民体育大会に各町会が参加、一〇月三一日（土）の一七時～一九時に中神田十三ヶ町祭典委員会を実施した。

以上のように、中神田十三ヶ町連合の一一町会（把握分のみ）の年中行事から、特筆すべき特徴を挙げて傾向をみておきたい。

町会として神田神社への昇殿参拝を行っている町会は六町会（後で詳述する須田町中部町会を入れると七町会）、新年会（賀詞交歓会を含む）を行う町会は八町会（須田町中部町会を含むと九町会）、納涼会・縁日は九町会、盆踊りは一町会、旅行は二町会（須田町中部町会を含むと三町会）、夜警は九町会（須田町中部町会を含むと一〇町会）である。淡路町一丁目町会では、かつては旅行や子ども縁日をやっていたが、居住者が減り中止した。その一方で神田祭に参加する神輿同好会・丸子会の地元の祭りへ招待されて出かけるようになった町会もある。夜警については、一二月二六日（土）・二七日（日）・二八日（月）の土日を含んだ三日間を行うところもあれば、土日を休んで平日だけ行う町会、一日間のみしか行わない町会もある。平日にしか実施しない町会は、町内に住まず町内に通う「通いの住民」の割合が少なくないことが考えられる。夜警を一日で終えた神田鍛冶三会町会の町会長は、町内に居住せず目黒から通っている。

また、町内で稻荷神社（神田神社の末社を含む）を祀る町会が七町会（須田町中部町会を含むと八町会）ある。町内の稻荷神社の存在が稻荷神社の祭祀を通じて、町内の人たちが結集する貴重な機会になっているのではなからうか。内神田鎌倉町会のように、町会の年中行事が多数ある町会もあれば、新年会と神田祭、夜警ぐらいしか活動を行わない町会が存在する。町会の年中行事が少ない町会に

とって稲荷神社の祭祀は、町内の人がつながる貴重な場になっていることが窺える。一方で、千代田区民体育大会や夜間パトロール、内神田八町会の納涼会のように周辺町会が合同で行う年中行事も拡大していることがわかる。

三、外神田連合

JR秋葉原駅の西側に位置し、神田神社の地元・宮本町会を含む外神田連合についてみていく。

(一) 神臺會

町会の区域は、千代田区外神田二丁目五番一〜一二号・六〜九番（七番地一号、四号一部を除く）である⁽⁶⁷⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は、七五世帯⁽⁶⁸⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は、登録世帯八〇世帯、町会員は五〇世帯である。町内に住んでいる人は約二〇人である。

平成二七年現在、毎年一月二日の一〇時半〜一一時の時間帯に神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行う。町会の一七〜一八人が参加し、昇殿参拝のあと、神札・御守を受けて明神会館で直会を実施している。

(二) 神田同朋町会

町会の区域は、千代田区外神田二丁目一〇〜一五、六丁目一・二・三番三・四・七・八号である⁽⁶⁹⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は一五〇世帯⁽⁷⁰⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は一五〇世帯であり、町会員は約一〇〇世帯である。

昭和五二〜五三年度に東京都教育委員会が調査を実施した『東京の民俗1』には、大正年間の民俗について、外神田（旧同朋町）の調査も行われ、年中行事について記載がある。以下に列挙しておく。

一月一日 初詣…神田神社、妻恋神社に参詣する。あわせて、恵方詣、明治神宮、靖国神社、浅草観音へ詣でる者も多かった。

若水・本来は年男によって、早朝汲み込み、神棚に供え、雑煮を煮るのに用いたが、大正期ごろには、一家の家長によって方位をみて汲まれた。この日は雑煮を食べるが、さまざまで、江戸前のは、鶏肉、芋、大根、菜などの具にのし餅の角切を焼いて入れるすまし汁のものである。その家の出身生国により、ブリ、鱒（石川、富山）、凍豆腐（長野）等を入れる。また酒粕を入れて調理する家もある。

一月七日 七草・七草といっても、大正期にはせり、なずな、すずな、すずしろ程度のものを八百屋で買い、七草粥にして食べたものである。

一月八日 どんど焼・取り去ったシメ縄、輪飾り等と書初を、東方一・五キロメートルの鳥越神社に持参して焼いた。

一月一五日～一六日 藪入り・商人、職人ともその奉公人も含めて休んだ。住み込みの奉公人は、宿下りと称して帰宅を許されたが、多くは親類、知己を訪れる程度で、あとは終日、上野・浅草で過す。

一月二〇日 エビス講・エビス、大黒を床の間等に飾り、灯明をあげお祓いをして商売の繁盛を祈った。供物には、小豆飯を炊き、尾頭付、煮物を供えた。この日は、親類、知己を招き、夕刻供物を下げ、盆をまわして小宴をはる。（一〇月二〇日のエビス講も同様）

二月三日～四日 節分会・その年の年男は神田神社へ詣で、多数の年男、役者、力士等とともに炊り豆を購入し、家人の年の数のみ白紙に取り、神棚に供え、他はかけ声とともに戸口、窓辺に向かって撒く。

二月 初午・氏神様である妻恋神社（同朋町ととなりの妻恋町が氏子）の第一神が正一位稻荷大明神なので、二月最初の午の日に子供達が集まり、旗、幟をたて、太鼓を叩き続けて囃子たてる。氏子総代、世話人等により菓子などが配られた。

三月三日 桃の節句（雛祭り）…一部の家では、白・赤・緑ののし餅についてヒシ餅を作るが、多くの家では餅菓子屋から購入し、雛人形を供えた。白酒、煎豆あられもヒシ餅とともに供えた。本格的には内裏ビナ、四人官女、五人囃子等を金屏風を背に飾るが、家が狭いため親王飾りも多かった。

三月 彼岸・彼岸は春秋二回あり、いずれも中日をはさむ前後七日間をいう。各家で墓参に行き、供養をした。この期間中に彼岸団子、おはぎ、五目飯等を作って仏壇に供え、親類知己への配り物にした。

四月八日 灌仏会(花まつり)・・明暦の大火以後この地域には寺院がないため、西北六〇〇メートルにある霊雲寺に参詣し、花御堂の釈迦に甘茶をかけ、土産に甘茶をもち帰ったが、ごく一部の人たちだった。

五月五日 端午の節句・・五月人形はひな人形程は各家で飾ることはなく、武者人形を飾り、鯉幟りをあげる家は少なかった。鎧又は兜を飾る程度であった。食物も柏餅をつくるか購入するかで、粽は見られなかった。銭湯は菖蒲湯をたいて終日賑わった。

五月一三日～一五日 神田祭・・明治中期から九月の大祭と五月の神輿渡御祭に分けられ、それ以来五月の祭は隔年になった。同朋町は本来妻恋神社の氏子であり、妻恋神社は氏子も少なく、質素であったため、明神下の一部として準氏子として他町とともに神輿をかついで祝った。しかし、他の町のように山車は出さなかった。(ただし、妻恋神社では第二次大戦の折の空襲で神主が死んだため、三月の祭礼と大祓の時だけ神官の派遣を依頼し、町内の祭礼は神田明神に合流する。)

七月七日 七夕・・旧眼鏡橋北側の旅籠町の露店から笹竹を購入し、天の川の語句といろいろな願いごとを短冊に書きこれを笹竹に吊した。物干台や表通りに笹竹をたてた。夕刻七夕送りとして神田川に流したが、川を汚すという理由から流す短冊は限定した。

七月一二日 草市・・七夕の笹竹を売っていた旅籠町、仲町間の通りなどで、お盆の魂棚、飾り物の市がたつ。芋殻、真菰の菰、ませがき、蓮の葉、蒲の穂、茄子の牛、土器、白木の盆等を売っていた。

七月一三日～一五日 盆供養・・門徒、一向宗を除く各宗派では、一五日に真菰の菰を仏壇に布き、魂棚の飾り物を供える。夕刻門口で土器に麦稗をたて迎え火を焚き、その火で盆提灯、線香を灯す。一三日は迎え団子、一四日は野菜のあえ物、一五日は蓮飯と送り団子を各々仏壇に供える。一五日夜送り火と迎え日と同様にして焚く。

八月 二十六夜待・・この夜の月を拝むと後生が良いなどといわれ、明神境内に行く。夕涼みも兼ね、境内には夜店が出て、氷水、果物、菓子などが売られる。

九月 十五夜・・草市の出る所に露店が並び、そこでススキを買ってきたが大正期には八百屋で買うことが多くなった。月見団子はウルチ米を挽き、こねて団子にしたが、餅菓子屋で買うことが多い。この月見団子を枝豆、柿栗等と一緒に三宝に供えて飾る。夕刻一家揃って縁側、窓辺に坐り、これらを食べて宴を催す。一区切のよいところで抜け出し、料亭であらためて宴を催す主人筋もいる。

十一月五日 七・五・三の祝・古くは髪置・袴着・帯解の儀式が行われたが、大正年間には氏神様への宮詣りのみとなった。女兒は七歳と三歳。七歳では、四ツ身または本断の友袴で流行によりさまざまな晴着を着る。三歳児の晴着は、産着の仕立なおしか三ツ身の友禪に糸入帯が多く用いられた。男児は五歳のみで、その晴着は羽二重の黒っぽい五ツ紋に仙台平の袴を用いた。しかし最近では七割が洋装となった。いずれも神田明神で御神酒をいただき、神符を受け、千歳飴を土産に帰路に着く。

十二月二〇日～二一日 歳の市・松住町交差点前から同朋町妻恋坂下角までと、神田明神境内から神田旅籠町。神棚の道具類、お飾り用品、羽子板、凧、正月用食料品、お勝手用品、日用雑貨品等が売られる。これらの商人は旧東京市区部一円から集まり、買手も神田、本郷、下谷、日本橋方面からやってくる。

十二月二二日 冬至・この日を境にして昼(すなわち陽)が長くなるので、この日を「一陽来復日」とした。この日、柚子湯を浴びると無病息災になるといっているので銭湯ではみな柚子湯を沸した。また夏負けと長生きによいといわれ、南瓜を味噌汁にした(71)。

平成二七年の町会の年中行事は、「神田同朋町」のホームページによると、五月八日(金)～一〇日(火) 神田祭(遷座四〇〇年奉祝)、七月二二日(金)「納涼の集い」(主催・同朋町、場所・明神下中通り、時間・一八時～二〇時「子供会一七時半」、大人一八時～)、出店・生ビール・サワー・焼き鳥・焼きそば・ソーセイジ・かき氷、子供コーナー)、八月二〇日(木)・二二日(金) 納涼大会(主催・外神田文化体育会、後援・千代田区、場所・芳林公園、一七時～子どもブース「ゲームコーナー」両日・白バイに載って写真撮影「二〇日のみ・一八時まで」、一七時半～売店販売開始、一八時半～〇〇江戸助六太鼓、一九時～盆踊り、二〇時半～福引き、出店・生ビール・ジュース等清涼飲料・焼き鳥・焼きそば・フランクフルト・かき氷)、一〇月一八日(日) 千代田区民体育大会(場所・外濠公園総合グラウンド、時間・九時半～)、一〇月二五日(日) 第四回げんき会(敬老会)「おでんパーティー」(主催・神田同朋町会福祉部)・第二回「さんま会」(主催・神田同朋町会有志、場所・明神下中通り、一七時半～)、十一月六日(金) 千代田区一斉清掃の日・町名由来板の清掃(場所・妻恋坂交差点、九時～)、十二月二八日(月) 歳末町内夜警(一七時～)がある。

神田神社への初詣は町会としては行っていないが、町内の氏神である妻恋神社へ十二月二日から一五～一六人で奉仕している。

(三) 宮本町会

町会の区域は、千代田区外神田二丁目一六〜一九（七番一号、四号一部を含む）である⁽⁷²⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は七〇世帯⁽⁷³⁾であるが、平成二五（二〇一三）年は一七〇世帯に増加した。

平成二七年現在、毎年一月二日の一時〜三時の時間帯で神田神社への初詣（昇殿参拝）を行っている。町会の三〇〜四〇人が参加し、参拝のあと人数分神札を受け、明神会館で新年会を実施している。神田祭とお花見には一〇〇〜二〇〇人が参加する。町会の総会・懇親会には三〇〜四〇人が参加している。この他、年末の夜警を実施している。また、第三章第三節でみたように、蔭祭には子ども神輿の巡幸を行っている。

(四) 神田末廣町会

町会の区域は、千代田区外神田三丁目五〜一〇・一四〜一六である⁽⁷⁴⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数二二〇世帯⁽⁷⁵⁾であったが、平成二六（二〇一四）年四月一日現在の世帯数は二四四世帯である。

平成二七年現在、一月二日の一〇時から神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行う。町会の一五人が参列し、二〇人分の神札・供物を受ける。参拝だけで直会の席は設けていない。年末の夜警には町会の役員・委員を中心に三〇〜四〇人が参加する。

(五) 栄町会

町会の区域は、千代田区外神田五丁目一・六である⁽⁷⁶⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は一五〇世帯（栄佐久会）⁽⁷⁷⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は、居住者三〇世帯、法人四〇の約一〇〇人である。

平成二七年現在、町会の役員会は年一回で、飲み食い掛かる費用は減少している。正月に新年会、夏に外神田連合で納涼大会を芳林公園で行っている。新年会には、栄町会の神田祭に参加する神輿同好会のメンバーが新年会に七〜八人、納涼大会にも数人が手伝いに

来るといふ。また、神田祭の際、五月の神田神社への神輿宮入直前の金曜日夕方、御霊入れのあと、町内企業を呼んだ「ふれあい広場」を開催している。前節でみたように、蔭祭の際にも、五月の同じ時期に「ふれあい広場」を開催している。ここにも神田祭に参加する神輿同好会のメンバーが手伝いに来ているという。

(六) 外神田三丁目金澤町会

町会の区域は、千代田区外神田三丁目二・三・四・一である(78)。昭和四三(一九六八)年の世帯数は一〇〇世帯(79)であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員九〇世帯、一〇〇人である。

(平成二五年の)一〇年くらい前から、町会活動として年に一回、夏に町会企業との親睦会(懇親会)を開いている。神田祭の際は、神田神社への神輿宮入前の金曜日に(平成二五年の)一〇年程前から神輿の巡幸を行い、企業の社員にも参加してもらっている。神田祭が蔭祭の年には、前節でみたように、五月の神田祭の時期に町内企業との親睦会を開催している。費用は町会費約一五万円、千代田区からの補助金約一五万円の計三〇万円で賄っている。

その他、町会の活動としては、回覧を廻すこと、新年会の開催、年末の夜警などを行っている。しかし、町内にはほとんど人がおらず、特に若手が少ないため、今後の町会運営を危惧している。

(七) 外神田四丁目松富会

町会の区域は、千代田区外神田四丁目六〜一三である(80)。昭和四三(一九六八)年の世帯数は一四五世帯(81)であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は八〇世帯、平成二七年は八〇弱世帯に減少した。町会の役員は一〇人である。

平成二七年現在、町会による新年会は行わが、神田神社への初詣(昇殿参拝)は行っていない。

町会長のK・T氏(昭和二八年生)によれば、平成に入ってから、神田市場が秋葉原から太田区へ移転してから住んでいる人が減少してきた。市場関係の人を相手にした食堂など関連するお店もあり、神田市場の関係の人も松富会の神田祭に参加していた。今ではそうい

う人たちがほとんどいなくなつた。会社も数年で変わってしまった。

若い頃は、神田祭はもうできないのではないかと思つていた。その問題を上手く乗り越えたのが「十二睦」だった。十二睦は外神田連合一二町会の若手のいわば親睦会である。外神田文化体育会と十二睦で各町内を代表するようなものである。各町内の七〜八人ずつの若手が団結ができた場である。色々な町会と連絡を取つて、お互いに切磋琢磨していくような場があるからいいのではないかという。十二睦は、(平成二五年の)一〇〜一三年前くらいに結成された。それから外神田文化体育会の結成によって、昔は長老がやっているよなものであつたのが、四〇代がトップになるような形で一気に若返つた。それで若い人たちの横のつながりができた。十二睦とラジオ体操の運営などを行う「外神田文化体育会」によつて、各町内の若手の横の連絡が取れる場が生まれた。お互いの情報交換もできる。そして、そういう場があると「うちの町内もしっかりしなきゃ」「他の町会に馬鹿にされないようにしなきゃ」と思い、若手がみんなしつかりしだした。

外神田文化体育会の活動の一番の中心は、芳林公園で行う夏の納涼大会である。そのときにも各町内に割り当てがあり、人数や出す模擬店などの打ち合わせを頻繁に行っている。そして、各町内もそれぞれ夏に納涼会を行っている。

私が二〇代の頃までは、町会で海に行つたりしていたが、夏休みでも大人は勤めがあるのでいくことができない。そこで、納涼会をやるうということになった。町会の納涼会は、昼間は子どもたちのために縁日みたいなものを行い、夕方からはこの辺は会社の人も入っているため、会社の人たちのために、「ビアガーデンみたいなものをやるうよ」ということでやっている。それも何十年にもなるという。

(八) 神田五軒町町会

町会の区域は、千代田区外神田六丁目三番地五・六号、四〜一六である(註)。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二五〇世帯(外神田六丁目・旧五軒町)^(註)あつたが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は三三〇世帯、人口六二二人である。

町会長のK・I氏(昭和一八年生)によれば、この三三〇世帯には町内のワンルームマンションなども含まれるが、町会には加入していない。会社も多いが住民も七割ぐらいいる。(平成二五年から)二〇一〇〜一五年くらいで町としての勢いがついた(隆盛した)。

若い人たちを登用して町を活性化しようと若い人たちとコミュニケーションを取りながらしっかりとやってきた。それが絆を生んで、自然発生的に町の活性化につながった。若い人たちの意見だけでなく、婦人部や長老の意見も聞いてやってきた。祭りが一つの町の活性化につながる行事であるということが町内の人の心の根幹にある。祭りがなくなると町の空気感が元気がなくなってしまうというところがある。

若い人の話を聞いてコミュニケーションを取る場を普段の町会活動の中に作った。そういう場が多数ある。平成二七年で一〇年目になるが、夜間パトロールをずっと行っている。一〇年前はまだ防犯カメラが普及していなかった。駐車場の車上荒らしやビル荒らしが多発し、放火もあった。それに対してパトロールをすることによって、全くなくなった。月三回、夜の一〇時〜一一時までみんなで回っていて、多少人数は減ったがそれを繰り返してきた。町の安心・安全の取組みを我々の町会では行っている。千代田区でそれを行っている町会は少ない。月三回、夜の一〇時〜一一時の時間帯はみんな休み時間だが、台風や雪などのよほどの悪天候以外は夜回りをしている。また、一人暮らしの高齢者の見守りといった色々な福祉活動も併せると、年間行事がものすごく多い。私の町会がそういう活動が一番多いのではないか。町会員向けの「そよ風」という新聞も年四回発行している。夏の公園（千代田3331）の水やりも花の手入れも千代田区と提携して町会で行う。

なお、町会では、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）は行っていない。

以上のように、外神田連合の八町会の年中行事についてみてきたが、ここではおおよその傾向をみておきたい。

特筆すべきは、神田祭の十二睦と同様に、外神田文化体育会といった地区連合の若手の親睦会が中心となって行う夏の納涼会などの年中行事が拡大している。栄町会や外神田三丁目金澤町会などでは、蔭祭の際を含めた町内企業との懇親の場を形成している。さらに、栄町会では、新年会、ふれ合い広場、夏の納涼会に神田祭に参加する神輿同好会のメンバーが参加する。

新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）を町会として行っているのは、三町会である。

四、神田駅東地区連合

今度は、J R 神田駅の東側に位置する神田駅東地区連合についてみていく。

(一) 鍛冶町一丁目町会

町会の区域は、千代田区鍛冶町一丁目全域である⁽⁸⁴⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二〇〇世帯(鍛冶町一丁目曙会⁽⁸⁵⁾)であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は五九世帯(居住二六世帯)、登録人口が一一〇人である。

昭和五二く五三年度に調査を実施した『東京の民俗1』には、大正年間の民俗について、鍛冶町(旧鍛冶町)の調査も行われ、年中行事について記載がある。以下に、列挙しておく。

一月一日 元朝行事…トソ、ゾウニを三日まで柳箸で食べる。ゾウニは古くはいろいろなものを入れたが時代とともに次第に具が少なくなり、汁もすましが江戸前にされるようになる。餅はのし餅を角切りにして、日を重ねるごとに数を増す習慣がある。これを食いあげるとよぶ。

一月一日く六日 初詣…ウブスナ神(神田明神)に参詣し、御符、お守り、破魔矢を受ける。最近では、町会、会社等の集団参拝(任意参加)が流行する。恵方詣…トシトク神(陰陽道のアキの方角にある神)、恵方にある社寺へ参詣する。厄年に当るものは厄除護摩を焚く。また古くは、神田っ子は、成田へは詣らないといわれた。これは田原藤太が成田不動に祈願して平将門を誅伐したからだと言明される。

一月 正月の訪れ者 三河万歳…立烏帽子に義経袴の太夫と大黒頭巾の才藏かの一人が来ることが多くなり、現在ではほとんど見られない。獅子舞…太鼓、笛、鉦の囃子方と一緒に訪れたが、後太鼓だけとなり、現在では獅子舞だけとなった。猿廻し…昭和四〇年代から見かけなくなった。

一月六日 どんど焼・六日の夕方、門松を取外し、路上で焼却する。輪飾等は、この日焚く家もあるが、二十日正月まで残す家もありさまざまである。数年前から、鳶職人が取外すものが増えてきている。

一月七日 七草粥・春の七草を入れて粥を炊いて食べる習慣だが、今ではまれで、ナズナだけでの家が多い。またウリキリ（瓜切）といって、ナズナで瓜をぬらし（浄め）切る習慣がある。

一月一日 鏡開き・正月の鏡餅を手または槌でこの日割る。小豆でしるこを作る家が多い。

一月一五日 藪入り・一五日を上元とよび、小豆粥に餅を入れる。奉公人の休み日。

二月四日 節分・追儺式。「鬼は外、福は内」といしながら豆を撒き、その後各自数え年より一粒余計に豆を食べる。

二月 初午・二月の最初の午の日に各稲荷神社で盛大な祭が行われる。屋敷内の稲荷や小さな稲荷社にも幟を立て、地口行燈を掲げ、米、塩、水、神酒、生魚、野菜、青果、乾物、油揚げを供え、太鼓を叩き、子どもたちにミカン等を撒く。また講中には、赤飯、稲荷寿司等を配る。

三月三日 雛祭・三月三日の桃の節句に先立ち、二月の中旬に十軒店（本石町）に雛市が立つ。雛祭りは女兒の生育を願う行事で、雛人形を飾り、桃の花、菜の花、豆煎（雛あられ）、菱餅、白酒、桜餅を供え、子供は雛膳で食事をする。雛人形をしまう時にはソバを供える。また、十軒店近くの岩附町には、人形師が多勢住んでいたが、後に町ぐるみで埼玉に移住した。現在の岩槻市である。

三月 彼岸・古くは、墓参とともに六阿弥陀詣りが行われたが、現在では墓参のみである。五日寿司を仏壇に供える。

四月八日 灌仏会・花まつりとも呼ばれる、お釈迦さまの誕生日を祝う祭り。小さな竹づつの手桶で甘茶を買い、釈迦の立像にかける。

五月五日 端午の節句・男児の生育を願い、鯉幟、矢車、武者人形、陣道具を飾り、菖蒲、柏餅を供える。四、五日と菖蒲湯（蓬を添えるものもある）に入る。

五月一七日 幸稻荷祭・富山町の稲荷で芝山内の分れで芝の祭に芝区長、神田区長の両者が参拝する。富山町の社は戦災で焼失し、柳森神社の預りとなった。

五月 神田祭…古くは九月一五日、明治二一年より神幸祭が五月に行われるようになった。神幸祭は、旧天下祭の形式で、神社側の行列に氏子側の山車、附祭の併用によって構成されていたが、現在では山車が見られず、神社側の行列のみである。氏子側はみこしによる別個の祭の形態をとるようになった。なお九月一五日には神田神社内にて大祭が営まれている。

六月三〇日 形代流し（大祓）…日頃の罪を浄める神事で、各神社で茅ノ輪くぐり、形代流しが行われる。形代は紙を人形に切り、男女別、連記式、個別等さまざままで、氏名年齢を記し、各自息を吹きかけ神社へ渡す。式後、川または海へ流す。一二月にも行われる。七月七日 七夕…大笹を押し立てて五色の短冊に「天の川」「星まつり」「素牛」「織女」等の他、各自の願いごとを書いて枝に吊す。また吹き流し、牛、水瓜の切紙で飾ったり、商家では、そろばん、職人はのみ、かんな、墨つぼ等の拵えものを吊す。八日に笹ごと川へ流す。

七月一〇日 四万六千日。この日浅草寺詣りをすると四万六千日分の功德があるとの俗説がある。鬼灯市が立ち、雷除請合の護符が出され、持ち帰り、天井の棧に差す。

七月一二日 草市。盆市とも呼ばれ、今川橋、万世橋に精霊祭の魂棚飾りの市が立つ。真菰、小籠に入れた野菜、蓮華万灯等を売る。

七月一五日 お盆。精霊祭（地獄の釜のふたのあく日とされる）と墓参を行う。新仏のある家は切子灯籠、盆提燈を用意する。迎え火、送り火は各家の宗旨により異なる。また蓮の飯、牡丹餅、おはぎの類も各家の習慣で異なる。魂棚飾は、一六日川に流すが、依頼して処理してもらう家もあった。

九月（陰暦八月一五日） 月見…陰暦八月一五日の十五夜、いわゆる中秋の名月の日に行われる行事。すすき、雁来紅等を活け、月見団子、栗、柿、きぬかつぎ（一五個）等月に向って供える。団子を子供が盗むという風習は、噂には聞くが、実際に見た事はない。また十三夜の月の光で一三の女兒が、糸を針に通すと裁縫が上達するというまじないもある。

一〇月一二日～一三日 お会式…日蓮の忌日法要。うちわ太鼓を叩き、お題目を唱え、大万灯を掲げた信者の一団が、池上本門寺、堀の内妙法寺へとくり出す。沿道の知己（信徒とは限らない）にあらかじめ依頼して休憩所を設け湯茶の接待をうける。

一〇月一九日～二〇日 えびす講・べったら市…えびす講は、関西商人によってもち込まれた祭で、行事としては一部に定着してい

る程度。商売繁昌の願いが主なものであるが、宝田神社のべつたら市の賑いの方が、感覚的にはえびす講といえる。浅漬、切山椒、瀬戸物の市で賑わう。

一月八日 フイゴ祭 鍛冶、鋳物、鋳職の祭。伏見稲荷、帝釈天等に神酒とみかんを供える。供え方は、三室、フイゴの上と各々である。通常仕事は休まず、早じまいにする。みかん撒きには近隣の子供たちが群がる。この日夕食に酒肴でる。

一月一四日～二九日 年（歳）の市・羽子板、神棚、諸道具の市。一四、一五日は深川八幡、一七、一八日浅草観音、二〇、二一日は神田明神、二三、二四日芝愛宕、二五、二六日平河天神、二八、二九日は薬研堀不動となる。このなかで薬研堀の市がにぎわうと不景気だといわれている。他の市の売れ残りが多いであろう。

一二月 新春仕度：二〇日頃から門松が立ち、「ちん餅仕り候」の札が菓子屋、米屋の店頭にはられる。自家で餅搗をする家は少ない。古くは、ヒキズリ餅屋が、道具を揃え人家の軒先で餅搗をした。新春のための飾りは、一夜飾りを忌むため三〇日には済せる。大晦日は掛取りで忙しい。年越そばを食べ除夜の鐘と共に穴八幡の「一陽来復」の御符を貼り、福菓をいただき、お年玉の用意をする⁶⁾。

平成二七年現在、一月第二土曜日に新年会と一緒に、神田神社への初詣を行っている。また、年に二回イベントを実施している。千代田区から補助金を受け、夏に近隣の四町会と「神田縁起市」と、冬に近隣二町会で餅つきを行っている。

(二) 鍛冶町二丁目町会

町会の区域は、千代田区鍛冶町二丁目全域である⁽⁸⁷⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は四〇〇世帯⁽⁸⁸⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は町会員は三〇〇世帯（居住者六〇世帯）である。町会活動には居住世帯が参加する。

平成二七年現在、二月に神田と日本橋の合同の新年会（交流会）を行っている。八〇人くらい参加する。常盤小学校（中央区）の出身者が多い。八月に夏のイベント（「神田縁起市」）を行っている。

(三) 紺屋町南町会

町会の区域は、千代田区紺屋町一〜二五である⁽⁸⁹⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、当時、神田祭に不参加であったため不明⁽⁹⁰⁾であるが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は登録世帯は三〇世帯で、このうち町内に住んでいる世帯は約一〇世帯・二〇人である。

平成二七年現在、二月に新年会、五月または六月に総会、七月または八月に北乗物町町会と合同の納涼会、八月の最終土曜日には、九町会で「神田縁起市」を行う。一二月第一土曜日には、昭和町会と合同のきりたんぼ鍋大会、餅つきを今川中学校で行っている。

年末の夜警は、今川中学校を起点にして、一二月の最終金曜日に実施している。紺屋町北部町会・鍛冶町二丁目町会・北乗物町町会・富山町町会と一緒に合同で行っている。青年部を三班に分けて班ごとに回る。

(四) 北乗物町町会

町会の区域は、千代田区北乗物町全域である⁽⁹¹⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は六〇世帯⁽⁹²⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は二三世帯、七〇人である。紺屋町南町会や近隣町会で合同で行う行事以外は、総会を五月か六月、夏に暑気払いを行っている。

以上のように、神田駅東地区連合の四町会の年中行事についてみてきたが、ここではおおよその傾向をみておく。

大きな特徴として挙げられるのは、「神田縁起市」のように地区連合で行うものや近隣の町会で合同で行う行事が拡大していることがわかる。夜警に関しても、町会単独ではなく、紺屋町北部町会・鍛冶町二丁目町会・北乗物町町会・富山町町会は合同で行っている。

また、鍛冶町一丁目町会では、「今川睦」という睦会を平成二七(二〇一五)年に町会青年部有志で立ち上げ、睦会として平成二八年は山王祭や浦安三社祭などへの参加や、町会活動への参加を行うなど、新たな動きもみられた。

五、岩本町・東神田地区連合

続いて、JR神田駅の東側に位置し、山崎製パン本社や龍角散本社などが立地する岩本町東神田地区連合についてみていく。

(一) 岩本町二丁目町会

町会の区域は、千代田区岩本町一丁目全域である⁽⁹³⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二〇〇世帯⁽⁹⁴⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員一二〇世帯である。バブル期にビル化しオフィスの街になった。そして、近年、マンションの住民(三〇代後半〜四〇代の住民)が増加した。

平成二七年現在、初詣歩こう会、盆踊り(子ども会)、ふれ合い広場などを行っている。

(二) 岩本町二丁目岩井会

町会の区域は、千代田区岩本町二丁目八・九・一八及び一九番一・二号である⁽⁹⁵⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は七七世帯⁽⁹⁶⁾(元岩井会)であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員は二〇〜三〇世帯である。

昭和五二〜五三年度に調査を実施した『東京の民俗1』¹には、大正年間の民俗について、神田岩本町二丁目(神田松枝町)の調査も行われ、年中行事について記載がある。以下に、参考までに列挙しておく。

一月一日 新年の祝い お雑煮とおとそで祝う。お雑煮は、すまし汁に三つは、かまぼこを入れる。

一月六日 六日年越し とろろを食べ、お雑煮も食べる。春の七草を居れた七草粥を食べる。

一月七日 七草 春の七草を居れた七草粥を食べる。

一月一日 蔵びらき(鏡びらき) この日初めて蔵を明ける。前の晩にこわしたお供餅(鏡餅)をしるこまたは、雑煮にして食べる。

一月十五日 十五日粥 あずき粥を食べる。

一月十六日 藪入り 奉公人の休日。

一月二十日 二十日正月 この日雑煮を食べ、正月の終わりとする。またこの日まで忙しかった女性達の遊ぶ日とされる。

二月三日 節分 立春の前日の行事。神社と家の神棚に大豆を供え、日が暮れてから下げて外へまく。

二月 初午 二月の最初の午の日に行われる稲荷神社の祭。

二月八日 針供養 折れた針を豆腐にさして感謝する。お裁縫のけいこ所では必ず行う。

三月三日 ひな祭り 女兒の成長を祝ってひな人形を飾り、蛤のお供物をする。四日にそばを上げて片附けないとその家の娘が縁遠くなると言われる。

三月二日・二日 彼岸中日 祖先の霊を慰め、墓詣りをする。

四月八日 花祭り 近くのお寺へ甘茶を戴きに行く。その甘茶をすって習字をすると字が上達すると言われている。

五月五日 端午の節句 五月人形を飾り、軒に菖蒲をさして男の子の成長を祝う。菖蒲湯に入り無病を祈願する。

五月十五日 神田明神祭礼 氏神である神田明神の祭礼は各町会の山車、御輿が出て賑う。一年おきに本祭と蔭祭になっている。

七月五日 入谷朝顔市 古くからあるこの市は、今も盛んで、朝顔の種類も豊富である。朝早いにもかかわらず、相当な人手である。

七月九日 草市 四万六千日といって、この日お詣りすると一生したことになるといわれている。釣しのぶにしたほうづきが売られる。

七月一三日 盂蘭盆会 祖先の霊を迎える日である。宗旨によって異なるが、この日迎え火をたき、一五日には送り火をたく。

七月七日 七夕 色紙、短冊に芸能上達の願いを書き、それを笹の葉につるして祈る。

七月一五日・一六日 藪入り 一月と同様に、奉公人の休日。

九月 お月見 中秋の名月の晩、芒、だんごを供えて、名月を拝む。

九月二四日 彼岸中日 秋の彼岸の中日。祖先の霊を慰め墓参りをする。

一〇月一九日 恵比寿講 エビス様を祀って、樽柿、だんご等を供えて、親戚を招き、番頭から小僧に至るまで膳を出す。

十一月 団子坂の菊見 本郷団子坂の菊は見事で、必ず見に出かける。

十二月一七日 羽子板市 かんざし市もあつて浅草・仲見世は大変な賑いである。

十二月二二日・二三日 冬至 かぼちやを食べ、ゆず湯に入つて無病を祈念する。

十二月三十一日 大晦日、年越 この日の晩は、鮭を入れた味噌汁に、焼豆腐、はす、人参、こんにゃく、ごぼう等の煮物を食べ、除

夜の鐘を聞きながら年越そばを食べる⁽⁹⁷⁾。

神田神社へ「桃太郎」の山車を寄贈するまでには、年に一回、「桃太郎」の山車を虫干ししていた。平成二七年現在、年末の夜警を實施している。

(三) 神田東紺町会

町会の区域は、千代田区東紺屋町及び岩本町二丁目一〜四である⁽⁹⁸⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は一四〇世帯⁽⁹⁹⁾(東紺親和会)であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は、町会員二〇世帯で、人口四〇〜五〇人である。

平成二七年の町会の年中行事には、Facebookページ「神田 東紺町会青年部」⁽¹⁰⁰⁾によると、一月一六日は町会の新年会、二月一五日の東神田の餅つき大会(同じ連合の町会として参加)、二月二〇日の連合町会青年部の新年会、三月八日のウォーキング会(日本橋七福神めぐりを行い、三〇人以上が参加)、三月一日の町会の神田祭祭典会議、三月一八日の町会の神田祭の第二回祭典会議、四月一八日の神田祭の岩本町・東神田地区連合の決起集会と青年部会議、五月八〜一〇日の神田祭、五月一六日の神輿庫への蔵入れと神田祭の町会の直会、五月二九日〜三十一日・六月五〜七日の岩本町・東神田バザール、六月七日の岩本町・東神田地区連合の神田祭直会、六月一四日の町内の一斉清掃(この日、神田祭の町会の貸し半纏がクリーニングから上がったため、神田神社境内にある神輿庫へ半纏を納める)、七月三日の町会青年部の総会、八月二二日の岩本町・東神田地区連合の子ども会で納涼会(会場：岩本町のほほえみプラ

ザ、八月三〇日の町会の旅行（バスツアー、鴨川シーワールド）、一〇月三日・四日の岩本町・東神田地区連合の懇親会（箱根に一泊旅行）、一〇月一八日の千代田区の運動会、一〇月二〇日の日本橋のべつたら市（飲食をしながら懇親の場を持つ）、一二月一九日の忘年会（神田を散歩したのち、浅草の「七五三」にて忘年会）、一二月二八日の夜警（町内の金山神社を起点として実施、子どもたちも参加し、元気な「火の用心」の声が響く）がある。

蔭祭の時には、夏の縁日を町内の金山神社前で開く。

（四）岩本町三丁目町会

町会の区域は、千代田区岩本町三丁目（六番八〜一三号、一四号の一部、一番一・二号・三号の一部を除く）及び神田岩本町全域である⁽¹⁰¹⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は三〇〇世帯⁽¹⁰²⁾であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は町会員一八〇世帯（役員五〇世帯）である。

平成二七年現在、元日に神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行っている。参加者は三〇人で、人数分神札を受ける。また、蔭祭の年にも七月下旬にサマーフェスティバルを開催し、地元企業と懇親の場を設けている。

（五）東神田豊島町会

町会の区域は、千代田区東神田一丁目六〜一一、東神田二丁目一〜七、岩本町三丁目六番八〜一三号、一四号の一部、一番一・二・三号の一部である⁽¹⁰³⁾。昭和四三（一九六八）年の世帯数は二六五世帯⁽¹⁰⁴⁾（豊島町会）であったが、平成二五（二〇一三）年の世帯数は町会員一二四世帯（会社が多い）である。

平成二七年現在、年末の夜警には二〇人、連合で行う地域安全パトロールには、二五人が参加する。元日に神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行っている。子どもを入れて三〇人が参加する。

(六) 東神田町会

町会の区域は、千代田区東神田一丁目一〜五・一二〜一七、東神田二丁目八〜一〇である⁽¹⁰⁵⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は四〇〇世帯⁽¹⁰⁶⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員三五〇〜三六〇世帯であった。そして、マンションの建設が進み、平成二七年には五五四世帯に増加した。四分の一がマンションである。

平成二七年の町会の年中行事は、Facebookページ「お江戸は神田 東神田町会 青年部」⁽¹⁰⁷⁾によると、一月一七日(土)の初詣(一一時より町会半纏を着用して神田神社へ昇殿参拝を行い、終了後に青年部の新年会を実施)、一月二二日(木)の祭礼実行委員会、一月二三日(金)の町会の新年会(岩本町のほほえみプラザ)、二月一五日(日)の餅つき大会(町内の一橋高校で町会半纏を着用して実施、来賓で千代田区長も参加)、三月一八日の町会の祭礼実行委員会(町会の神田祭の日程を決定)、四月一八日の岩本町・東神田地区連合町会の神田祭の決起集会、五月七〜一〇日の神田祭、七月一八日の茨城県常総市の榮町仲睦の祭礼に参加、八月二二日の納涼盆踊り大会(神田大門通り子ども連合会主催で岩本町のほほえみプラザで開催、東神田町会青年部はサイコロゲームと焼トウモロコシを担当)、九月二〇日の災害復興支援(神田祭の際に東神田町会の神輿に参加する茨城県常総市の水街道榮町へ水害で被災した復興のお手伝いに町会青年部有志の一五人が被災地入り)、一〇月一九日(土)・二〇日(日)の千代田区民体育大会(運動会)、岩本町・東神田連合地区として参加)、十一月八日(日)の町会の日帰り旅行(埼玉県秩父地方を訪れ、秩父神社への参拝、長瀬のライン下りなどを楽しむ)、十二月二日の一橋高校の防災訓練・和泉小学校PTAの餅つき大会(町会青年部が一二時から防災訓練へ参加、その後、餅つき大会に参加)、十二月二〇日の隣接する中央区の小伝馬町町会の餅つき大会(青年部長以下六人が参加)、十二月二八日の歳末警戒の夜警(一八時半〜二〇時頃まで、町内を二周ずつ子どもも参加)がある。

なお、平成二八年は神田祭は蔭祭の年であったが、五月二九日には、東神田町会の友好町会である文京区松住町会の湯島神社祭礼に町会の青年部九人が参加した。

現在、元日に神田神社の初詣(昇殿参拝)を行っている。平成二七年は一月一七日(土)の一一時で行い、三〇人が参加した。平成四年に初めて神田神社へ宮入したという。

以上のように、岩本町・東神田地区連合の六町会の年中行事についてみてきた。詳細データのある神田東紺町会と東神田町会では、新年会、餅つき大会、納涼盆踊り大会、旅行、夜警など年間を通じて非常に多くの行事が行われていることがわかる。ただし、神田東紺町会では、町内に金山神社を祀り、ウオーキングや近隣町会の手伝いなど周辺エリアに活動が比較的限られているが、東神田町会では、神田祭に参加する他地域とのつながりで湯島天神の祭礼や茨城県常総市水街道榮町の祭礼に参加し、榮町が災害で被災した際には復興の手伝いに出向くなど、比較的広域な行き来がみられる。

全体の傾向としては、岩本町・東神田地区でのバザール、箱根での懇親会、千代田区民体育大会への参加など地区連合を単位とした活動も多い。町会として神田神社へ初詣（昇殿参拝）を行う町会は、把握できた限りであるが、三町会ある。

六、秋葉原東部地区連合

今度は、JR秋葉原駅の東側に位置し、凸版印刷本社、YKK本社などが立地する秋葉原東部地区連合についてみていく。

秋葉原東部地区連合（連合町会）では、毎年二月に、佐久間公園内（神田佐久間町三―二一）に鎮座する草分稻荷神社の初午祭を神田神社神職を祭主として実施している。平成二七（二〇一五）年は初午祭を二月二一日（土）に行った。『千代田の稻荷』によれば、草分稻荷神社は秋葉原東部連合町会（神田佐久間町一丁目町会・神田佐久二平河町会・神田佐久間町三丁目町会・神田佐久間町四丁目町会・東神田三丁目町会・神田和泉町町会・神田松永町町会・神田練堀町町会）で祀る稻荷であり、神田佐久間三丁目町会会長が世話人を務めることになっている。以前は二月初午に町会関係者を中心に神事のみを行っていたが、町会の餅つき大会を一緒に行うことによつて、より多くの人々が参加できることと近隣の小学校に通う小学生にも参加してほしいとの考えから、二月初午に近い土曜日に初午祭の神事と餅つき大会を一緒に行うようになった。初午祭当日は、神事終了後に青年部による餅つき、婦人部の協力によつて豚汁や甘酒なども振る舞われ、町会関係者を中心として大勢の人々が賑わっているという⁽¹⁰⁸⁾。

(一) 神田和泉町町会

町会の区域は、千代田区神田和泉町全域である⁽¹⁰⁹⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は四三〇世帯⁽¹¹⁰⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は二〇〇世帯、三〇〇人である。

平成一八年刊行の『神田和泉町八十年』の「町会の行事いろいろ」の中で、「町会主催の最大の行事はといえば神田祭であることはいうまでもありませんが、町会では祭以外にもいろいろな行事を開催しております」として、「神田和泉町子供縁日の夕べ」「婦人部主催研修旅行」「青年部主催バス旅行」を挙げている。神田和泉町子供縁日の夕べは、昭和五七年以来毎年八月最後の土曜日に開催し、「今年で27回目を迎える年々盛んになっています。子供からお年寄りまで神田和泉町の全ての町会員にとどまらず、近隣の町会の方々にも楽しんでいただいております。町会文化部主催、青少年部協力のもと始まった縁日ですが、近年は婦人部の皆様にもお手伝いいただき、文字通り町会挙げての催し物になっております」としている。婦人部主催研修旅行は、町会の女性のために研修を兼ねた日帰り旅行で、地方の様々な施設や名所旧跡を巡り、グルメを楽しむなど親睦を深めている。青少年部主催バス旅行は、町会の全ての会員を対象として、青少年部が企画した日帰りまたは一泊のスキーやキャンプなどのバス旅行を行っているという⁽¹¹¹⁾。

平成二七年現在、町会長のT・M氏によれば、一月三日に新年会を神田神社の明神会館で行う。この際に神田神社の神札を約五〇枚配る。八月の最終日曜日の子ども縁日を行っている。年末の夜警には三〇人が参加する。

(二) 神田佐久二平河町町会

町会の区域は、千代田区佐久間町二丁目、神田平河町、佐久間河岸四五〇五五号地である⁽¹¹²⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二〇〇世帯⁽¹¹³⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員一三〇世帯である。

平成二七年現在、元日に神田神社へ初詣(昇殿参拝)を行う。

(三) 神田佐久間町三丁目町会

町会の区域は、千代田区佐久間町三丁目、佐久間河岸五九〇七八号地である⁽¹¹⁴⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二八〇世帯⁽¹⁵⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は四三一世帯、人口六九九人で、町会員は三三〇世帯である。

平成二七年現在、毎年一月の第三土曜日に、新年会と一緒に、神田神社へ初詣(昇殿参拝)を行う。町会役員を中心に約二〇人が参加する。二月に草分稻荷神社の初午祭を行う。

五月に隔年で神田祭に参加し、町内渡御、連合渡御、神田神社への宮入を行う。夏には、秋葉原東部地区連合で秋葉原東部納涼大会、八月第三土曜日に佐久間町子ども縁日(外に出た子どもも参加)を実施する。秋には、運動会、旅行(日帰り)を行い、年末には歳末の夜警を行っている。

(四) 神田佐久間町四丁目町会

町会の区域は、千代田区佐久間町四丁目、佐久間河岸八一〇九二号地である⁽¹¹⁶⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は二二世帯⁽¹⁷⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員は約二〇〇人である。町内に通う人よりは住んでいる人の方が多い。

平成二七年現在、元日の一五時に神田神社へ集合し、町会で初詣(昇殿参拝)を行う。参拝後は解散となる。一二〇一三人参加する。その際、祈祷の神札は、参加できなかった家族の分も含めて五〇枚ぐらい受ける。町会の新年会は別の日に行っている。以前は、一二時に集合して初詣をしたあと、町内に戻って食事を行っていた。また、神田週報が神田神社で写真撮影をしてくれた。

二月の草分稻荷神社の初午祭、五月の神田祭(隔年)、日帰り旅行、行政の指導もあって年末の夜警を行う。そのほか、他の町会と一緒に縁日を行っている。

神田祭では、一時期、ヨソ(外部)の力で神輿を出すのは町内の祭りではないということで、神輿の巡幸をせず、神酒所に神輿を飾っていたことがあった。そのときは、町会の最大のイベントは旅行であった。バスを借りて行ったが人が集まらないこともあった。大きなバスに乗っていくのにパラパラしか参加しなくなってきた。かつては、旅行は二通りあって、各町会員に告知して日帰りで行くも

のと、積立をして、有力者だけで一泊で行く旅行があった。後者の方は行わなくなった。日帰りの旅行は、温泉にいつてそこで会食をして、周辺を観光して帰ってくるものであった。

平成二五年から神輿の巡幸を再開し、神田神社への宮入を開始した。神田祭が町会にとっての一大イベントになった。

近年は行政との関わりが非常に強いため防災訓練を実施したり、隣接する神田和泉町にある三井記念病院との懇談会を行ったりしている。

以上のように、秋葉原東部地区連合の四町会の年中行事についてみてきたが、ここではおおよその傾向をみておきたい。

一点目は、草分稲荷神社という秋葉原東部地区連合で祀る神社の存在があり、草分稲荷神社の初午祭を通じた場が連合のまとまりを維持するための一つの機会になっている。

二点目は、前節でみたように、神田和泉町会の蔭祭には周辺町会の青年部が参加し、合同で自分たちが楽しむ祭りを行っている。同様に、納涼大会も秋葉原東部地区連合で行っている。地区連合としてのまとまりの強さが年中行事からもみえてくる。

他方、神田佐久間町四丁目町会では、町会の旅行が町会の最大の行事であった時期もあったが、町会の旅行への参加者が減る中で神田祭における神輿巡幸が見直され、神田神社への宮入が開始された事実は興味深い。

なお、町会として神田神社への初詣（昇殿参拝）を行っている町会は四町会である。

七、日本橋地区連合

続いて、日本橋一地区連合（一之部）と五地区（五之部）における一部の町会の年中行事についてみていきたい。ただし、あくまで参考としての紹介に止めたい。

(一) 室町一丁目会 (日本橋一地区連合)

町会の区域は、中央区日本橋室町一丁目全域である⁽¹¹⁸⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は、神田祭に不参加であったため不明⁽¹⁹⁾だが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員一七〇世帯、居住者一〇五世帯である。

平成二六年現在、年末の夜警に約二〇人、夏の縁日に約六〇人に参加する。また、前節でみたように、蔭祭の年には、本町一丁目町会とともに山王祭に参加し、日本橋で高張提灯を持ってパフォーマンスを行う。

(二) 東日本橋三丁目橋町会 (日本橋四地区連合)

町会の区域は、中央区東日本橋三丁目全域である⁽¹²⁰⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は三三〇世帯⁽¹²¹⁾であったが、平成二五(二〇一三)年の世帯数は町会員九四〇世帯である。

町会長のM・T氏(昭和一六年生)によれば、マンションが町内に一〇棟あり、町会に加入している世帯が五五〇世帯あるという。マンション一棟に一〇戸入っているところもある。町会に加入していないマンションもある。マンションの住民ではない、元々のお店を中心とした個別の商店の会員は、一五〇〜一六〇世帯である。それがいつも回覧板を廻しているところで、マンションには回覧板を管理人室に置いてくる形で廻して貰っているという。

新年には、青年部や役員で神田神社へ初詣(昇殿参拝)を行うこともあるという。

(三) 蠣一共和国 (日本橋三地区連合)

町会の区域は、中央区日本橋蠣殻町一丁目三二〜三七番である⁽¹²²⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は一九〇世帯(蠣殻町二丁目共和国⁽¹²³⁾)であったが、平成二七(二〇一五)年の世帯数は七〇〇世帯(住民登録)である。マンションを除くと約二〇戸である。

町会長のT・M氏(昭和一二年生)によれば、小学校三・四年生までの子どもたちが曳き太鼓(山車)を曳くが、神田祭の際には一

五〇〇二〇〇人の親子が参加する。そのうち半分以上は他の町会の参加者である。ロコミでお菓子が出るところだけに集まる。お菓子がいいものでないと集まらない。

毎年、夏の納涼会を行うが、納涼会の始まる前に子どものお祭りをするが、そこに二〇〇人以上が集まる。ただし、町内の子どもは四分の一（五〇人）である。夏の納涼会は各町会行う日が違うため、よその町会の子どもも集まる。

新年会には、マンションの住民（若い人）も参加している。マンションの住民と町会の関係が上手くいっている。

町内の人口に対するマンションの割合が九〇％に達している。町の再開発が遅れていたお蔭でマンション化が一番早く進んだ。その代わり、マンションの人に協力してもらわなければ何もできないため、町会でマンション担当役員を置いた。その役員自身もマンションに住み、マンションの管理人と接触して町会の行事や活動に参加してもらおうようにしている。同じマンション住民が役員をやることでマンションの住民側も安心である。今は、そのマンション担当役員を副会長に登用した。そして、婦人部は解散し、マンションに住む若い人に任せた。仕事を与えるということが仲間という意識が増すと考えた。（平成二七年から）五年前に婦人部は解散して、その人たちを役員に迎えた。解散する前の婦人部には、地上げで町内から移転していった人がほとんどであった。だから解散しやすかった面もあった。今は女子部とっている。

一二月第一日曜日に行く日本橋三之部（日本橋三地区連合）の餅つきでは、お年寄りには外に座って接待に徹し、（通常は）若い女性が中心になって行っている。この餅つきの存在も大きい。餅つきのため、特に煮炊きを行う女性の人員が必要になる。若い人たちが手伝えることと、そのお友達が来て女性が大勢参加しやすい。それ以降、若い女子部が力を持ってきた。夏の納涼会も同様である。

夏の納涼会の予算を取るのが早い。いいものを早く申し込まなくてはいけないため、そのためにはお金が必要になる。今までは八月の行事だから七月にならないと予算化されなかったため、いいものは買えなかった。それを六月の初めに買えるようにした。お菓子上に關してはなるべく新しいものを買うようにしている。毎年、決まった行事であるため、町会長の裁量で可能である。

町会の女子部ができたときに、青年部も作った。青年部は一七人、女子部は二〇人である。青年部は青年部のプライドがあり、女子部とは色が違う青年部の半纏を作った。神輿の副責任者が三人いて、そのうち二人が女性である。神輿が出発するときには、前を女性

だけにして神輿を担ぐ仕来たりがある。女性が入れるようにそうした工夫をしている。そのため、神田神社の他の氏子町会からもうちに担ぎにくる。(他町会から参加する女性は)自分の町会であると、女性が神輿に入りたくとも入れないという。

うちの町会では、神田祭の直会を行わない。神田祭の当日には行いが、日を改めて、次の土曜日に直会を行うというとはしていない。お神輿に参加した人が終わったあとに飲み食いするのはいいが、改めて役員だけが集まって飲み食いするのは自粛している。

以上のように日本橋一〜五地区連合の三町会の年中行事についてみてきたが、特筆すべきは蛸一共和会の事例である。

夏の納涼会と餅つきが、マンションの新しい住民、特に女性が町会の活動に主体的に関われる場として重要な位置を占めていることがわかる。そして、その影響が神田祭における女性の参加のしやすさに実はつながっていることが窺える。

こうした新住民と旧住民との交流は、前節でみた東日本橋二丁目町会(日本橋四地区連合)の蔭祭のように、町会の年中行事がマンションに住む新住民(特に女性)にとって町会活動に参加する切っ掛けになっていることがわかる。

八、須田町中部町会の年中行事

最後に、中神田十三ヶ町連合の一つの町会である須田町中部町会の年中行事についてみておきたい。

須田町中部町会は、本章第五節・第四章第三節で詳細に検討する「元祖女みこし」の街として知られる。須田町中部町会を個別に取り上げるのは、筆者自身が実際に参与観察をして把握した町会であり、複数の年中行事が存在するからである。また、一般募集を行う「元祖女みこし」の参加者が増加している一方で、町会の年中行事がどのように行われているのかを対比する上でも適当な事例と考えるからである。

須田町中部町会の区域は、神田須田町一丁目二〜一四までの偶数番地である⁽¹²⁴⁾。昭和四三(一九六八)年の世帯数は不明だが、神札の配布数が七八となっている⁽¹²⁵⁾。平成二七(二〇一五)年の世帯数は一六〇世帯で、このうち町会員は一〇〇世帯である。町

内の企業を除くと人口は七〇人である。(平成二五年から)ここ一〇〜一五年での大きな変化はマンションが再開発で建ったが、マンションの新住民の町会活動への参加は進んでいない現状がある。

(一) 初詣・新年会

平成二六(二〇一四)年の元日、町内の町会員の家や店舗の入口、町会費を納めるマンションの入口には「謹賀新年 須田町中部町会」の貼紙が貼られている。平成二六年は、一月一二日(日)に神田神社への初詣を実施した。一時に神田神社の明神会館に集合した。町会長以下、一九人が昇殿参拝をし、神供と祈禱札を受けた後、神田神社拝殿前で集合写真の撮影を行った。一三時から、新年会を御茶ノ水のホテルジュラクの一室で開催した。会費は三〇〇〇円で、参加者は二人であった。町会長、来賓の千代田区万世橋出張所所長の挨拶が行われたあと、飲食を行った。余興で参加者によるカラオケなどが行われた。神田神社から受けた神供と祈禱札は、この場で町内の参加者に配布された。町内の西武信用金庫の社員も参加した。

(二) 豊潤稲荷神社の初午祭

豊潤稲荷神社は、千代田区神田須田町一―八に鎮座している須田町中部町会の鎮守である。須田町中部町会の規約には、「豊潤稲荷社は本会に於いて整備し管理運営する」⁽¹²⁶⁾と明記されていて、須田町中部町会よって豊潤稲荷神社の維持管理がなされている。

神社は、東京メトロ淡路町駅に近い、靖国通り沿いに建つワンルームマンションの裏手に位置する。社殿とマンションとの間のスペースがなく、本来は社殿の屋根に付けられていた千木は外され、社殿の右脇に飾られている。社殿の屋根には、金網が一部張られていて、マンションの上からの落下物にも対応できるように対策が取られている。社殿の中には、神田市場のマーク(紋章)を付けた立派な賽銭箱が置かれている。普段は社殿の扉は閉められ、賽銭は扉に開けられた穴から賽銭箱に賽銭を入れる形をとるなど、様々な防犯対策が施されている。

豊潤稲荷神社の創建についてみておきたい。大正一二(一九二三)年の関東大震災によって街並みが壊され、その後区画整理が実施

され、現在の区画となった。その保留地に当時の町内居住者や神田市場関係者を中心とした約一五人の有志によって、昭和五（一九三〇）年に勧請された⁽¹²⁷⁾という由緒がある。神社には、昭和五年に奉納された掲額がある。ただし、平成一七（二〇〇五）年の社殿移転時に内宮・内陣より「南無妙法蓮華經」「大正六年十二月二十二日」などと書かれた題目書付と「稻荷山」と書かれた軸が発見され、その後の千代田区の調査から、大正六年一月二二日に勧請された稻荷神社であることが明らかにされている⁽¹²⁸⁾。

平成二五年の豊潤稻荷神社の初午祭は、二月九日（土）の一時から神社前で行われた。神社の鳥居には注連縄が張られ、鳥居の左

右には「須田町一丁目中部町会 奉納 豊潤稻荷神社 平成四年壬申初午」な

どと白地で書かれた赤色の幟が左右に各六本ずつ合計一二本が立てられていた。本殿前には、奉納者の熨斗を付けた清酒が奉納され、榊・御神酒・米・水・塩のほか、鏡餅、昆布、野菜（大根・茄子・人参など）や果物（バナナ・リンゴなど）などの供物が三方に載せて奉られていた。

一時、定刻に須田町中部町会を担当する神田神社神職のT・N氏を斎主として、神社で祭典が始められた。参列者は、須田町中部町会・町会長、町会役員、町会関係者、町会婦人部など約一六人（男性八人、女性八人）で、神社前の路上で静かに頭を下げて祭典に参列していた。祭典は型通りのもので、初午祭の開始の挨拶、修祓、斎主一拝、献饌、祝詞奏上のもと、玉串奉奠が行われた。最初に、町会長が玉串を捧げ、神社に参拝し、町会役員、町会関係者、町会婦人部が一人ないし二人で玉串を捧げ、参列者全員が神社への参拝を行った。続いて、撤饌、斎主一拝が行われ、最後に、紙コップに入れられた御神酒が参列者全員に配られた。そして、町会長が挨拶に立って「初午祭おめでとうございませう。この町内はいつもこの豊潤稻荷様のご神徳をもちまして、皆さん、商



豊潤稻荷神社の初午祭（平成25年、筆者撮影）

売繁盛、そしてご健康でお過ごしができています。本年もまた豊潤稲荷様のご神徳をもちまして益々ご繁栄とご多幸を心からお祈り申し上げます、『おめでとうございます』で乾杯をさせていただきます」と述べ、「おめでとうございます」と参列者一同が乾杯して、祭典が閉められた。祭典の時間は一五分程度である。そして、神田画報のM・T氏によって集合写真が撮影されたあと、神職のT・N氏も参加して町内の中華料理店で直会となった。直会のあと、神社で片付けが行われ、参列者には赤飯が配られた。

なお、平成二五年の初午祭には、町会関係者を中心に一四人から金一封が奉納され、みかん一箱、果物二箱、清酒一本などの奉納品が町会関係者から神社へ奉納された。

平成二六年は、二月一日（火・祝日）に行われた。神田神社神職のTN氏を齋主として、一一時から豊潤稲荷神社前で祭典を執行了。玉串奉奠では、一七人の参加者全員が玉串を捧げ参拝した。町会長の挨拶のあと、御神酒で乾杯した。祭典終了後、近くの中華料理店で直会を行った。直会には、神職のT・N氏も参加した。

(三) 神田神社例大祭

本祭の年は、五月に神田祭を行い、神輿の町内渡御、連合渡御・宮入を行った後、神田神社例大祭に参列する。蔭祭の年は神輿の巡幸は行わないが、神田神社例大祭に町会役員らが参列する。神田祭が行われた平成二五（二〇一三）年は五月一五日（水）の一四時から神田神社で例大祭の祭典が行われた。町会長のM・O氏、婦人部長のM・M氏、Y・氏、T氏、SZ氏（女性）らが参列した。明神会館で行われた直会の席上では、「神田祭c.h.」のスタッフが撮影した神田祭の神輿宮入参拝の映像が神田神社神職のT・N氏によって流された。「元祖女みこし」の宮入の様子も流され、町会長のM・O氏と、神職のT・N氏が一緒にその映像を一緒にみていた。

(四) 総会

平成二五（二〇一三）年は、五月二六日（日）に御茶ノ水のホテル・ジュラクを会場として、町会の総会のあと、神田祭の直会と町会の六〇周年記念式典とうを合わせて行った。記念式典には、来賓として千代田区長、神田神社神職のT・N氏、須田町北部町会会長、

淡路町一丁目町会会長、淡路町二丁目町会会長らが出席した。会場では神田囃子の演奏も披露された。また、記念式典には、「元祖女みこし」の担ぎ手の募集を担当する女みこし担ぎ手募集係の三人も参加した。

(五) 旅行・敬老会・運動会

平成二五(二〇一三)年は町会の旅行が行われた。九月一日(日)に、八時に町内のセブン・イレブン前に集合し、日帰りの千葉県へのバス旅行を実施した。須田町中部町会を担当する神田神社神職のT・N氏も参加した。東京湾アクアラインを越えて、千葉県安房小湊へ向かい、日蓮宗・誕生寺を参拝した。参拝後、近くの鯛の浦で遊覧船に乗り、鯛の浦のホテルで昼食と温泉入浴を楽しんだ。そして、一七時半頃、町内に帰着した。参加者は二人で、町内の西武信用金庫の社員も参加した。この他、九月に敬老会を行い、一〇月には千代田区の運動会(千代田区民体育大会)に参加した。

(六) 年末の夜警

平成二五(二〇一三)年は一月二六日(木)・二七日(金)・二八日(土)の一七時半から町会長のビル一階を詰所として年末の夜警を実施した。詰所の外には、須田町中部町会の高張提灯が掲げられた。準備は一月二五日(水)、片付は一月二九日(日)の九時に集合して行った。

一月二六日には千代田区長が町会詰所を訪れた。二七日には二回町内を巡廻した。「火の用心」といながら拍子木を叩いて町内を巡る。子ども、西武信用金庫神田支店の社員四人が参加した。町会の詰所には万世橋警察署長以下四人が訪れた。この日の夜警には、町内の一四人が参加した。二八日は消防署長が町会詰所を訪れた。町内の一三人が参加した。

(七) 一日・二日の豊潤稲荷神社の清掃

毎月一日と一五日に、須田町中部町会の婦人部が当番で二人一組となって豊潤稲荷神社の掃除を行っている。九時に、神社の鍵を開

けて扉を開き、社殿内の掃除をして、おもりもの（平成二五（二〇一三）年四月一五日は大根・筍・人参・胡瓜・茄子などの野菜、リ
ンゴ・バナナなどの果物）、米、水、塩、榊、御神酒などを供える。手水鉢にも新しい水が張られる。そして、夕方の一六時に、おもり
ものを下げて、神社の扉を閉めて施錠する。神社の扉が開けられるのは、この一日と一五日、正月三が日、初午祭、神田祭のときであ
る。町内の人たちは、これらの日に神社へ参拝する。それ以外の日は、神社の扉は閉められ、施錠されている。

当番は、町会を六班に分け、班単位で二月と七月、一月と六月といった具合に六か月に一回、その月の一日と一五日に掃除を行う。
当番で掃除を行うようになったのは、ワンルームマンションの建設によって、社殿が現在の場所に移動した平成一八年からであるとい
う。掃除をやってもいいかどうか町内の方に打診してから、町会の役員会で決定したという。ただし、強制ではないため、当番に入っ
ていない人も一〜二人程度いたという。

（八）豊潤稲荷神社の変遷

本節でこれまでみてきたように、小川町連合で祀る幸徳稲荷神社、秋葉原東部地区連合で祀る草分稲荷神社、内神田旭町町会で祀る
佐竹稲荷神社など、町会の年中行事の中で祀る稲荷神社が多数存在している。また、神田祭に際しても、本章第二節でみたように、町
内で祀る神社名で奉納金が納められるなど、各町会で祀る小規模神社や小祠との関わりがみえてきた。

そこで、ここではさらに、豊潤稲荷神社に注目し、その変遷についてみていきたい。豊潤稲荷神社の社殿の修復や「参拝券」の導入、
マンションの建設に伴う社殿の移転が行われるなど、変化が著しかった平成二（一九九〇）年〜一八年までの時期に焦点を当て、初午
祭の記事を紹介しながら、年代順にみていきたい。

社殿の修復・遷座祭

平成二（一九九〇）年の初午祭は、初午の二月一〇日朝、豊潤稲荷神社で行われた。神田神社の神職二人により神事が執行され、町
会員が玉串奉奠を行い、家内安全と商売繁盛を祈願した⁽¹²⁹⁾。同年は、神田祭が行われ、松平誠の分析によると、須田町中部町会の

神田祭において、この年から町内会祭礼委員会に婦人部としての役割が与えられたとしている⁽¹³⁰⁾。この年は、京都府亀岡市安町の「安町夏祭り」に、安町商店会が須田町中部町会の女神輿を招待し、八月十八日の夜、神輿渡御を行った⁽¹³¹⁾。

平成三年の初午祭は、神田神社の神職を齋主として豊潤稲荷神社にて二月五日昼に行い、町内の安泰を祈願して乾杯をした⁽¹³²⁾。同年六月一日の須田町中部町会の定期総会で、新しい町会長として、M・O氏が選出された⁽¹³³⁾。

平成四年の初午祭は、二月一六日朝に豊潤稲荷神社で行い、祭りを記念して餅つきが行われた⁽¹³⁴⁾。同年の五月二一日の町会の定期総会では、町会の予算のほか、豊潤稲荷神社の決算（一八五万円）も承認された⁽¹³⁵⁾。そして、この年、社殿の老朽化が進んだことから、豊潤稲荷神社の鳥居と玉垣の修復整備を実施した。また、須田町中部町会の女神輿は、TBSテレビ『世界ふしぎ発見！』に出演した⁽¹³⁶⁾。

平成五年の初午祭は、二月六日昼に豊潤稲荷神社前で行った⁽¹³⁷⁾。

平成六年の初午祭は、二月一三日（日）午前、神田神社の神職を齋主として、祝詞奏上の後、町会長ら役員や会員が玉串を奉納して町内の安泰を祈願し、乾杯をした。甘酒も用意されて今年の家内安全を祈った⁽¹³⁸⁾。この年は、神田祭が行われ、神田市場の千貫神輿が七年振りに復活した。須田町中部町会では、五月一四日の宵宮まつりに、一七〇人が交代で女神輿を担いで町内を練ったという⁽¹³⁹⁾。

平成七年は、豊潤稲荷神社の社殿修復が完成した。これは、須田町中部町会の豊潤稲荷奉賛会が二年前から奉納金を集めて実施したものである。完成を受けて、同年四月三〇日夜に遷座式、翌五月一日に大祭式を盛大に行った⁽¹⁴⁰⁾。社殿修復に当って、町会の婦人部長を務めた経歴をもつK・O氏が参拝用の鈴を奉納した。また、協賛者は、神社の社殿内に掲げられた「平成七年度 豊潤稲荷社殿修復協賛者名」よれば、七四人（個人・企業）に上る。このうち、金融機関の協賛者は、住友銀行淡路町支店、神田信用金庫本店、さくら銀行神田支店、日本債券信用銀行の四社である。集まった寄付金約六〇〇万円を掛けて社殿を修復した⁽¹⁴¹⁾。

平成八年の初午祭は、節分の二月三日朝、豊潤稲荷神社で執行した。神田神社の神職を齋主として、祝詞奏上・玉串奉奠の後、豆まきを行った。午後からは稲荷神社協会で防火訓練を行った⁽¹⁴²⁾。

「参拝券」の導入

平成九（一九九七）年の初午祭は、二月九日午前、豊潤稻荷神社で町会長・役員・婦人部二八人が参列して行われた。神職の祝詞奏上の後、一人一人が玉串奉奠をして家内安全を祈願した。乾杯の後、カレーライスの食事、防災訓練を行って終了した（143）。

同年、賽銭泥棒に困った須田町中部町会では、豊潤稻荷神社で新たな参拝のシステムを導入した。平成九年四月二三日付の『毎日新聞』では、「神頼みはチケットで」という見出しをつけた記事で紹介している。これによると、平成七年の社殿の修復直後に、賽銭箱の引き出しの南京錠が壊されて賽銭が盗まれた。表の扉を閉めてかんぬきに鍵をかける対策を取ったが、数か月後にはこじ開けられた。さらに、鍵を電子ロックにして数を増やしたり、扉を開けるとブザーが鳴る警報装置を取り付けたが、回線を切断されるなど、効果を上げなかった。平成九年の三月二五日にも盗難が発生し、二年間で一〇回近い被害に遭い、賽銭箱や鍵の修理代に三〇万円以上の費用が掛かった。

そこで、須田町中部町会の町会長M・O氏は、「さい銭は年間二〇万円前後だから一回あたりの被害額は大きくはない。しかし対策を講じても講じても泥棒がいる以上、現金を入れない以外、方法がない」とチケット制に踏み切った。そのため、四月初めから「崇敬者へのお願い」と題する貼り紙を掲示し「参拝券」（縦約九cm、横約四cm）を神社向かいの食品販売店で販売し、賽銭箱に納めてもらうことになった。参拝券は、一綴り一〇枚五〇〇円以上とされ、集まったお金は世話人が管理し、神社の維持費に充てられるという。捜査を担当した警視庁万世橋署は、毎日新聞社の取材に対して「バブル期の地価高騰も手伝って都心は夜間人口が激減し、繁華街からはずれた現場は特に人通りが少ない。さい銭は鬼神のものと、盗まれても泣き寝入りしやすいところにも付けこんでいるのでは」と答えている。また、近くの銀行に勤め、毎日、豊潤稻荷神社を拝むという六〇代の男性は「町会で決まったことなら仕方ないが、チケットではありがたみが薄れるような気がする。それにしても罰当たりがいるもんだ」と複雑な表情であったと記事は記している。

この豊潤稻荷神社の参拝券の導入に対して、当時の神社本庁教学研究調査室は、同新聞記事の中で「盗難防止のため、お祭りの時だけさい銭箱を置く小さな神社はあるが、現金をチケットにしたケースは聞いたことがない。基本的にはお参りする人の気持ちの問題

だが、さい銭は神様へのお供え物。伝統的な参拝形式にはそぐわないのではないかと答えている。一方、日本文化史を専門とする藤井学氏（奈良大学教授）は「さい銭という信仰の自然な表現が犯罪によって曲げられてしまったという点では確かに好ましくない。しかし、信仰は時代とともに変わる。参拝する人たちが主体的な判断で決めたことなら、新しい信仰の形ができたということだろう」と答えている（144）。

平成一〇年の初午祭は、二月一五日程、神田神社の神職を齋主として行い、防災炊き出し訓練も行われた（145）。

平成一一年の初午祭は、二月一日午前に豊潤稻荷神社で行われた。町会長ら役員と婦人部の約二〇人が参列し、玉串奉奠を行い町内の安全と繁栄を祈願した。祭事後、防災炊飯が行われ、ミニ救急法も指導されたようだ（146）。

平成一二年の初午祭は、初午の二月六日午前に豊潤稻荷神社で行われた。玉串奉奠をして町内の安泰を祈願した（147）。同年、神社の「参拝券」はその煩雑さから廃止され（148）、賽銭箱に賽銭を入れる形に戻された。

社殿の移転・遷座祭

平成一三（二〇〇一）年の初午祭は、二月一二日の一〇時半から行われた。神田神社の神職の祝詞奏上、役員と婦人部が玉串奉奠して祈願した。祭事後、災害用赤飯を熱湯で蒸らし試食体験を行った（149）。

平成一四年の初午祭は、二月一日の一時から行われた。神田神社の神職を齋主に祝詞奏上、参列者の玉串奉奠が行われ、町内の安泰と家内安全を祈願した。神酒拝戴の後、参列者にお供えの赤飯と果物が配られた。参列者は約三〇人であった（150）。

平成一五年の初午祭は、二月二日の一〇時から行われた。神職の祝詞奏上の後、役員と婦人部が玉串奉奠を行った（151）。同年、須田町中部町会は創立五〇周年を迎え、記念祝典を催し、会員名簿が作成された。また、この年は江戸開府四〇〇年の年に当り、神田市場の町名由来板が町内に建てられ、町会の神輿が新調された。一月には江戸天下祭が行われ、須田町中部町会の女神輿が参加した。しかし、この年から行われたマンションの建て替えに伴い、以前より通り側にせり出すような配置になったため、再び社殿を移動し、造営し直すことになった（152）という。

平成一六年の初午祭は、二月八日午前に行われた。神田神社の神職の祝詞奏上、参列者の玉串奉奠の後、恒例のアルファ米の炊き出し体験を行い、カレーライスにしてみんなで昼食を取った(153)。この年の八月二日には、山口県萩市の「萩夏祭り」へ須田町中部町会の女神輿が招待され、神輿巡幸を行った(154)。

平成一七年の初午祭は、一月一日午前(二月の誤りか?)、神田神社の神職を齋主として神事が行われた(155)。

平成一八年五月、現在地に新しい豊潤稲荷神社の社殿が完成し、社殿の落成式と遷座祭が行われた(156)。

以上のように、豊潤稲荷神社の変遷をみてきたが、須田町中部町会の豊潤稲荷神社は、地域社会が再開発に曝されてその景観や神社を支える構成員が変容する中で、息も絶え絶えで存続しているとは言い難い。石井研士が『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』(157)で指摘するように、十分な存在感を持つて存在しているといえるのではなからうか。それは、稲荷神社の社殿の修復を行うだけではなく、「参拝券」という発想の転換がなされ、ワンルームマンションの建設にも対応しながら、初午祭や婦人部による掃除を継続し、神社そのものが持続していることから窺える。つまり、豊潤稲荷神社が町内に起こる社会的な変化に適応しつつ、時には対抗しながら持続するのは、現在でも須田町中部町会に暮し、町会活動に参加する人たちの心意がそこに託されているからであるようにみえるのである。

まとめ

このように、町会の年中行事の変容と神田祭の関係についてみてきたが、特徴を一言でいうならば、地域社会の変動によって、大きく町会の年中行事の意味合いが変容していることがわかる。

全体の傾向としては、個別町会で行う年中行事よりも地区連合や複数の町会が合同で行う年中行事が拡大しているといえる。また、企業との懇親の場を、蔭祭の際にも持つ町会が須田町北部町会、岩本町三丁目町会、外神田三丁目金澤町会などでみられた。同様に、

旧住民とマンションの新住民との交流や町会活動への参加の機会を作る蛸一共和会や東日本橋二丁目町会などの事例もみられた。

興味深いのは、栄町会のように、神田祭を手伝う神輿同好会が「ふれ合い広場」や夏の納涼会を手伝う事例である。いわば神田祭での「祭縁」が神田祭以外の町会活動にも発展した形である。茨城県常総市水街道榮睦の東神田町会の神田祭への参加が、榮睦の祭礼への東神田町会青年部の参加につながり、そして榮睦の地元が被災した際には、復興支援の活動に町会青年部が入った。神田祭を通じた「祭縁」が発展した形である。淡路町一丁目町会と丸子会の関係性も類似する。第三章第一節・第二節でもみたように、町会同士のお互いの祭りへの「相互乗り入れ」も町会の年中行事、特に青年部の新しい年中行事の一つになっているといえるのかもしれない。

その一方で、小川町連合で祀る幸徳稲荷神社、秋葉原東部地区連合で祀る草分稲荷神社、須田町中部町会の豊潤稲荷神社などにみられるように、地区連合や複数の町会、町会単独で祀る稲荷神社や小祠の存在とその祭りも、町会の年中行事として重要な位置を占めていることがわかる。

面白いことに、神田駅東地区連合では夜警を合同で行い、外神田連合では十二睦や外神田文化体育会といった合同で行う行事や活動が拡大しているが、中神田十三ヶ町連合では、夜警も個別町会で実施し、地区連合で行う行事も一定数あるものの、各町会の活動も依然として維持されている。中神田十三ヶ町連合では、本節で取り上げた一一町会のうち八町会で何らの小祠の祭祀を町会の年中行事の中で行っている。こうした個別町会の活動を維持する上でも町会の人が集う場としての小祠は、一定の存在感を持っているといえるのかもしれない。

もちろん、神田神社の存在も大きいものがある。神田祭への参加は、第三章第一節でもみたように、「町会の最大の行事」とする町会が多く、重要な位置を占めている。また、本節でみたように、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）も複数の町会が行い、実施する町会にとっては重要な位置を占めていることが窺われる。

つまり、地区連合や複数の近隣町会で合同で行う年中行事が拡大する一方で、個別の町内や複数の町会で祀る稲荷神社の存在、初詣や神田祭を通じた神田神社との関わりは、町会活動の中での比重が増し、町内が結集するための重要な場になっているといえるのではなからうか。神田佐久間町四丁目町会の事例のように、一時期、町会の旅行が町会の最大の行事であったが、町会の旅行への参加者が

減少する中で神田祭における神輿巡幸が見直され、神田神社への宮入が開始された。町会の年中行事が少ない町会にとっては神田祭のウエイトが増していることを裏付ける証拠の一つであると考ええる。

石井研士は『都市の年中行事―変容する日本人の心性―』の中で、「都市を中心に行われている年中行事の分析から、日本においても宗教の社会生活全般に対する影響力は薄れていき世俗化が確認できた」と断言するにはどうしても躊躇を覚えるのである」として、その最大の理由として「伝統的な宗教性を喪失しながらも、年中行事から完全に宗教性が脱落したとはどうしてもいえない点にある」⁵⁸⁾としている。

確かに、本節でみてきたように、神田・日本橋における町会の年中行事は従来のあり方とは変容してきたが、町内企業や新住民との交流の場など町内共同の新しい役割を担っている実態、豊潤稲荷神社のように町会の活動に参加し、町会に生きる人たちの願いが託されている様相がみえてきた。こうした新しい役割を担っているからこそ、幸徳稲荷神社のような結集のための核を媒介として、小川町連合の神輿の創設など、社会変動に対して可逆的な動きがみられるのではなからうか。

註

- (1) 柳田國男監修・財団法人民俗学研究所編『民俗学辞典』東京堂出版、昭和二六年、四四七頁、「年中行事」の項。
- (2) 坂本要「年中行事」福田アジオほか編『日本民俗大辞典』下巻、吉川弘文館、平成一二年、三一〇頁。
- (3) 田中宣一『年中行事の研究』桜楓社、平成四年。
- (4) 倉石忠彦『年中行事と生活暦―民俗誌への接近―』岩田書院、平成一三年。
- (5) 石井研士『都市の年中行事―変容する日本人の心性―』春秋社、平成六年。
- (6) 前掲石井『都市の年中行事―変容する日本人の心性―』七〇八頁。
- (7) 倉石忠彦『年中行事と生活暦―民俗誌への接近―』岩田書院、平成一三年、一七二頁。
- (8) 倉石忠彦編著『渋谷学叢書1 渋谷をくらす―渋谷民俗誌のこころみ―』雄山閣、平成二二年。
- (9) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年、八五頁。
- (10) <http://www.daisuki-kanda.com/>

- (1-1) 神田東紺町会青年部 <https://ja-jp.facebook.com/KandatoukonSeinenbu/>「お江都は神田 東神田町会 青年部」<https://ja-jp.facebook.com/higashikanda.seinenbu>
- (1-2) 江戸天下祭研究会神田倶楽部『明神さまの氏子とお神輿』武蔵野書院、平成一三年、一五頁。
- (1-3) 菌田稔「祭と都市社会」「天下祭」(神田祭・山王祭)調査報告(一)『國學院大學日本文化研究所紀要』第三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年、一〇八頁。
- (1-4) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一四頁。再開発後の平成二八年度は、神保町一丁目一〜四一と一〇一〜一〇三番地の奇数番地が町会の区域。
- (1-5) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇五頁。
- (1-6) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一六頁。
- (1-7) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇六頁。
- (1-8) 『創立三十周年記念誌』千代田区神田公園地区連合町会、昭和六〇年、三〇頁。
- (1-9) 前掲『創立三十周年記念誌』三〇〜三一頁。
- (2-0) 『創立五十周年記念誌』千代田区神田公園地区連合町会、平成一七年、二六〜二七頁。
- (2-1) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一六頁。
- (2-2) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇七頁。
- (2-3) 前掲『創立三十周年記念誌』三三〜三五頁。
- (2-4) 前掲『創立五十周年記念誌』三〇〜三二頁。
- (2-5) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一六頁。
- (2-6) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇七頁。
- (2-7) 前掲『創立三十周年記念誌』三七〜三八頁。
- (2-8) 前掲『創立五十周年記念誌』三三〜三六頁。
- (2-9) 『大好き神田2003神田を歩こう』神田公園地区連合会、平成一五年、一九頁。
- (3-0) 前掲『創立五十周年記念誌』三六頁。
- (3-1) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一八頁。
- (3-2) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇七頁。
- (3-3) 前掲『創立三十周年記念誌』四七〜五〇頁。
- (3-4) 前掲『創立五十周年記念誌』四五〜四六頁。
- (3-5) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一九頁。
- (3-6) 『千代田区文化財調査報告書一七 千代田の稲荷―区内稲荷調査報告書―』千代田区教育委員会・千代田区立四番町歴史民俗資料館、平成二〇年、四八頁。
- (3-7) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二八頁。
- (3-8) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇六頁。淡路町一丁目町会の世帯数の記載はないが、神札の数は三五になっている。

- (39) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三〇頁。
(40) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇五頁。須田町一丁目南部町会の世帯数の記載はないが、神札の数は九〇である。
(41) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三二頁。
(42) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇六頁。
(43) 前掲『千代田の稲荷』六〇〜六一頁。
(44) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二七頁。
(45) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇九頁。
(46) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二五頁。
(47) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(48) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二六頁。
(49) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(50) 前掲『千代田の稲荷』五七頁。
(51) 前掲『千代田の稲荷』五八頁。
(52) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二二頁。
(53) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(54) 『東京の民俗1』東京都教育庁社会教育部文化課、昭和五九年、一一頁。
(55) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二二頁。
(56) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(57) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二四頁。
(58) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(59) 前掲『創立五十周年記念誌』七七頁。
(60) 前掲『創立五十周年記念誌』七六頁。
(61) 前掲『千代田の稲荷』五五頁。
(62) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二三頁。
(63) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一〇八頁。
(64) 前掲『東京の民俗1』四三〜四四頁。
(65) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』二〇頁。
(66) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』一一五頁。
(67) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三六頁。

- (68) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(69) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三七頁。
(70) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇二頁。
(71) 前掲『東京の民俗1』二八頁、三一〜三三頁。
(72) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三五頁。
(73) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇二頁。
(74) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三九頁。
(75) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(76) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四〇頁。
(77) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(78) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三八頁。
(79) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(80) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四〇頁。
(81) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(82) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四二頁。
(83) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇三頁。
(84) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四三頁。
(85) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇九頁。
(86) 前掲『東京の民俗1』二三〜二四頁。
(87) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四四頁。
(88) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇九頁。
(89) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四六頁。
(90) 前掲 園田「祭と都市社会」一一五頁。
(91) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四五頁。
(92) 前掲 園田「祭と都市社会」一〇九頁。
(93) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五四頁。
(94) 前掲 園田「祭と都市社会」一一頁。
(95) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五一頁。
(96) 前掲 園田「祭と都市社会」一一〇頁。

- (97) 前掲『東京の民俗1』一三〜一四頁。
- (98) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五三頁。
- (99) 前掲菌田「祭と都市社会」一一一頁。
- (100) 「神田東紺町会青年部」<https://ja-jp.facebook.com/KandatoukonSeinenbu/>
- (101) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』四九頁。
- (102) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇頁。
- (103) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五六頁。
- (104) 前掲菌田「祭と都市社会」一一一頁。
- (105) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五五頁。
- (106) 前掲菌田「祭と都市社会」一一一頁。
- (107) 「お江都は神田 東神田町会 青年部」<https://ja-jp.facebook.com/higashikanda.seinenbu>
- (108) 前掲『千代田の稲荷』八一頁。
- (109) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』六一頁。
- (110) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇四頁。
- (111) 『神田和泉町八十年』公益法人神田和泉町町会、平成一八年、二七頁。
- (112) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五八頁。
- (113) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇四頁。
- (114) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』五九頁。
- (115) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇四頁。
- (116) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』六〇頁。
- (117) 前掲菌田「祭と都市社会」一〇五頁。
- (118) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』六七頁。
- (119) 前掲菌田「祭と都市社会」一一五頁。
- (120) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』八六頁。
- (121) 前掲菌田「祭と都市社会」一一二頁。
- (122) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』七九頁。
- (123) 前掲菌田「祭と都市社会」一一三頁。
- (124) 前掲『明神さまの氏子とお神輿』三一頁。

- (125) 前掲「前掲『千代田の稲荷』一〇六頁。
- (126) 前掲『千代田の稲荷』一五二頁。
- (127) 『町会発足50周年記念 会員名簿 千代田区須田町中部町会』。
- (128) 前掲『千代田の稲荷』五九頁。ただし、創祀は、大正六年より遡り、大正四年に社殿が焼失したという指摘もある。
- (129) 『週刊千代田』平成二年二月二二日付。
- (130) 前掲松平「現代神田祭仄聞」。
- (131) 『週刊千代田』平成二年八月二五日付。
- (132) 『週刊千代田』平成三年二月二五日付。
- (133) 『週刊千代田』平成三年七月二二日付。
- (134) 『週刊千代田』平成四年二月二九日付。
- (135) 『週刊千代田』平成四年七月八日付。
- (136) 『KAN D A ルネッサンス』二九号、N P O 法人神田学会、平成六年。
- (137) 『週刊千代田』平成五年二月一五日付。
- (138) 『週刊千代田』平成六年三月二二日付。
- (139) 『週刊千代田』平成六年五月一五日付。
- (140) 『週刊千代田』平成七年四月二九日付。
- (141) 『毎日新聞』朝刊、平成九年四月二三日付。
- (142) 『週刊千代田』平成八年二月八日付。
- (143) 『週刊千代田』平成九年二月二八日付。
- (144) 『毎日新聞』朝刊、平成九年四月二三日付。
- (145) 『週刊千代田』平成一〇年三月八日付。
- (146) 『週刊千代田』平成一一年二月一六日付。
- (147) 『週刊千代田』平成一二年二月二九日付。
- (148) 前掲『千代田の稲荷』五九頁。
- (149) 『週刊千代田』平成一三年二月一五日付。
- (150) 『週刊千代田』平成一四年二月二八日付。
- (151) 『週刊千代田』平成一五年二月八日付。
- (152) 前掲『千代田の稲荷』五九頁。
- (153) 『週刊千代田』平成一六年二月一五日付。

-
- (154) 『讀賣新聞』西部版、平成一六年七月三一日付。
- (155) 『週刊千代田』平成一七年二月一五日付。
- (156) 前掲『千代田の稲荷』五九頁。
- (157) 石井研士『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』新曜社、平成六年。
- (158) 前掲石井『都市の年中行事―変容する日本人の心性―』一九九頁。

第五節 「元祖女みこし」の街の神田祭

東日本大震災の影響によって四年振りの開催となった平成二五（二〇一三）年の神田祭を観察して目立つのは、祭りの担い手として、町会の神輿を担ぐ女性たちの姿であり、その元気さである。特に、「元祖女みこし」を名乗る須田町中部町会の女神輿は、神田神社への宮入の際、多くの観客の注目を集めていた。この女神輿は、一部区間を男性から女性へ担ぎ手を交替して担ぐ女神輿や男神輿と



神田神社の宮入へ向う須田町中部町会の「元祖女みこし」

（平成 25 年、筆者撮影）

対になった女神輿とは異なり、町会の神輿を単独で、しかも巡幸する全区間を女性だけで担ぎ、神田神社への宮入や連合渡御も果たす神輿である。そして、「元祖」を名乗り、参加者は一般募集される女神輿で他に類をみない。

戦後の都市祭りにおける大きな変化として、女性の参加を指摘している先行研究が複数ある。民俗学の阿南透は、「歴史を再現する」祭礼」の中で、明治二八（一八九五）年に創設された時代祭の戦後の大きな変化として、女性の参加と、歴史上著名な人物が数多く個人名を持って登場するようになったことの二点を挙げている⁽¹⁾。

昭和四三（一九六八）年に神田祭の調査を行った藺田稔は、「特に印象的なのは、年齢層を問わず女性の参加が目立つことである⁽²⁾」と指摘している。そのほか、昭和四八年から三年間に亘って京都の祇園祭を調査した米山俊直の研究⁽³⁾、昭和五二・五三年の大阪の天神祭を調査した米山俊直の研究⁽⁴⁾などがある。これらの先行研究から、戦後の早い時期から女性の参加が進んでいたことが窺える。

しかしながら、女性への担い手の変化について、地域社会との関係から検討した研究が少ない現状がある⁽⁵⁾。また、繰り返して述べてきたように、同一の都市祭りを継続的に調査し、その経年的な変化を詳細に追った研究は少なく、祭りのどの要素が拡大し、どの要素が縮小しているかを実証的に解明

した研究も少ない⁽⁶⁾。

神田祭の「元祖女みこし」については、松平誠が昭和六〇年・六二年・平成二年の神田祭調査から女神輿が誕生した背景を地域社会との関係で分析した研究⁽⁷⁾があり、神田祭全体に関しても平成四年に調査⁽⁸⁾を実施している。しかし、平成四年の松平の調査から二〇年以上が経過した平成二五年の神田祭に至るまでに大きな変化が生じているが、松平の研究以後の変遷が明らかにされていない⁽⁹⁾。また、平成四年の松平の研究から二四年遡った昭和四三年に藺田稔が神田祭全体の調査⁽¹⁰⁾を行っているが、その時点から女神輿が誕生するまでの変遷も明らかにされていない。

そこで、本稿では、須田町中部町会の「元祖女みこし」の誕生以前と誕生以後の変遷を明らかにし、藺田稔、松平誠の調査時点との変化を踏まえ、そこからみえる地域社会の変容と神田祭の関係について論じたい。

1、「元祖女みこし」の誕生

(1) 須田町中部町会の概観

須田町中部町会は、東京都千代田区神田須田町一丁目の二〜一四までの偶数番地が町会の区域である。靖国通りと外堀通り、中央通りに挟まれた地域で、東京メトロ淡路町駅、都営新宿線の小川町駅に近い。町会区域内には、庄之助最中や天ぶらの天兵、小山弓具店などの老舗が店舗を構えている。その一方で、靖国通り沿いには高層ビルが建ち、ワンルームマンションや企業がオフィスを構えている。町会の中ほど、靖国通りと多町大通りが交差する付近には、「神田青果市場発祥之地」の記念碑が建てられている。この記念碑は昭和三二（一九五七）年一月に神田青果市場関係者によって建立された⁽¹¹⁾。この神田青物（青果）市場の中心であった連雀町と佐柄木町のそれぞれの一部が合併して誕生した町会が須田町中部町会である。神田青物市場は、通称「やっちゃ場」とよばれる市場で、明暦の大火（一六五七年）以後、江戸市中に分散していた青物市が徐々に、連雀町・佐柄木町・多町・須田町・通新石町の辺りに集まってきた。当時、これらの五町の表通りには野菜や果物を扱う八百屋が軒を連ねていた。しかし、大正一二（一九二三）年の関東大震災で

焼失したため、昭和三年に現在の秋葉原駅の西側へ移転した。さらに、平成三（一九九一）年には大田区へ移転している。須田町中部町会は、記念碑に刻まれているように、神田青物市場発祥の地として、その伝統を意識する町会である（12）。

須田町中部町会のある須田町一丁目の人口・世帯数は、国勢調査によれば、平成二二年は、人口四五六人（男・二三八人、女・二一八人）、世帯数二七八世帯である。平成一七年は、人口四九四人（男・二四〇人、女・二五四人）、世帯数二三〇世帯である。なお、平成一七年の昼間人口は七三〇一人である。昼間人口が多く、夜間人口が少ない状況にある。平成二五年の須田町中部町会の世帯数は一六〇世帯（町会員一〇〇世帯）である。

（二） 藪田稔調査（昭和四三〔一九六八〕年）と女神輿の誕生以前

昭和四三年に神田祭の調査を実施した藪田稔は、「祭と都市社会―「天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（二）―」の註四九と巻末資料の中（調査番号二八）で、当時の須田町中部町会の神田祭への参加状況が明らかにされている。

まず、註四九の後半に、「逆に須田町一丁目中部町会は神札授与数が多いけれども祭礼行事は神酒所に神輿一基を飾り置き、個人持ちの熊坂長伴の人形を飾るだけで行事らしいものはやっていない」（八四頁）とある。また、巻末資料の調査番号二八では、「オモナ行事」として「神輿ハ飾り置き」、「行事変化」として「大正十年ガモットモ盛大。昭和十三年の紀元二千六百年記念祭モ盛大」（一〇六頁）と記載されている。ここからは、昭和四三年の須田町中部町会の神田祭では、山車人形と神輿一基を神酒所に飾り、町会神輿の巡幸が行われていなかったように取れる。また、大正一〇（一九二一）年と昭和四三年に比べると須田町中部町会の神田祭があまり盛んではなかったことのように取れる。しかし、須田町中部町会・会長のM・O氏（昭和八年生）によれば、昭和四三年当時も町会の神輿を担いでいたという。

神輿研究家の林順信によれば、藪田が調査した昭和四三年の明治百年祭を境に、戦後の神輿ブームが到来した。そうした状況の中で、昭和五〇年の神田十三ヶ町連合の番付には、第七番として「須田町一丁目中」が挙げられている（13）。昭和五〇年の神田祭では、須田町中部町会の神輿が連合渡御に参加していることが窺え、町会神輿の巡幸が行われていることが窺える。

(三) 須田町中部町会の女神輿の誕生

松平誠は、「現代神田祭仄聞」で、須田町中部町会の町内の男性の担ぎ手が減少し、一九八〇年代半ばに町会神輿の巡幸が困難になるという危機的な変化を迎えたとき、女神輿の導入という発想の転換が起こり、町内会組織を変化させ、社会共同が再認識され、町内会活動が活性化したことを明らかにしている⁽¹⁴⁾。ただし、女神輿が誕生したのは「一九八〇年代半ば」という記述にとどまり絶対年代は示されていない⁽¹⁵⁾。

松平の論考で女神輿が誕生した絶対年代を明らかにしたものをみると、『現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―』では昭和六〇（一九八五）年⁽¹⁶⁾、「神田の地上げと生活集団」では昭和五八年⁽¹⁷⁾としていて論考によって食い違いがある。一方、昭和六〇年五月一三日付の『朝日新聞』記事「夏だ祭りだ みこし町に踊る 神田神社と下谷神社」によれば、「神田祭りといえば、宮入りのトリを受け持つ神田市場の「千貫みこし」が売り物。だが、今回は市場移転問題が絡んで、みこしは中止。代わって人気を集めたのが、松枝町会と須田中部町会の女みこし。須田中部町会は前回の大祭に続いての女みこしだが、都内からOLや女子大生ら、約百人の「助っ人」ギャルが駆けつけた。黒髪を丸め上げ、鉢巻きをキリリとした、はんでん姿のギャルたちは、約六時間、ぶつとおしで練り歩いた」という。ここからは、須田町中部町会の女神輿は、昭和六〇年の前の大祭である昭和五八年の神田祭から始められたと取れる。一見、松平の昭和五八年の誕生の記述を裏付けるかにみえる。

しかしながら、須田町中部町会・会長のM・O氏によれば、須田町中部町会の「神輿の台座が一尺三寸で小振りだから、子どもに担がせるには重すぎる。中学生か高校生ぐらいがいいが、そのくらいの子どもは中々集まらない。しょうがなくて連合渡御の時に大小集めた子どもに担がせたこともあった。ところが、淡路町の交差点あたりまで来るとへたりこんじゃう。それでしょうがないもんだから大人がみんな棒を少し持ってやって、それで宮入した経緯もある。それから、女性に担がせてみたらどうかという発想があつて、女性に担がせて良かったから女神輿に発展していった。うちの町会の神輿は、子どもには大きすぎるし、大人には小さすぎる。じゃあ、女の人に担がせてみようということで、昭和五二年から始めた」（筆者による調査）という。須田町中部町会の女神輿が始められた時期に

関して、松平誠の分析と須田町中部町会長のM・O氏からの聞き取り内容とが異なっている。本節では、当事者の認識を尊重するといった観点から、M・O氏が記憶する昭和五二年を須田町中部町会の女神輿の開始時期としてみていきたい。

(四) 女神輿の隆盛と「元祖女みこし」の誕生

須田町中部町会の女神輿が誕生した同時期には、他地域でも女神輿が誕生している。例えば、菌田稔が神田祭の調査を行った昭和四三(一九六八)年には、東武東上線大山駅前商店街で「乙女みこし」が担がれた⁽¹⁸⁾。また、昭和四七年と昭和四九年には東京の芝大神宮の「だらだら祭り」に女神輿が出された⁽¹⁹⁾。昭和五六年には、大阪の天神祭に地域の振興と大阪文化の高揚、明るく楽しい街づくりを目指して、第一回天神祭ギャルみこしが開催された⁽²⁰⁾。昭和五七年の東京・荻窪の荻窪白山神社の秋祭りに女神輿が出され荻窪駅周辺の商店街を巡幸した。この女神輿は、昭和五四年から始まったといい、昭和五九年も高校生やOLら約一〇〇人が担いだという⁽²¹⁾。

以上のように、菌田稔が神田祭を調査した昭和四三年から松平誠が最初に神田祭の調査に入った昭和六〇年に至るまで、女神輿が東京近郊で比較的誕生している⁽²²⁾。そうした中で、須田町中部町会の女神輿が登場した。そして「元祖」を名乗るようになっていったことがわかる。須田町中部町会の女神輿が誕生した当時、芸者ではなく、素人の女性が連合渡御で神輿を担ぎ出したのが珍しく、取材に訪れた週刊誌の記者が須田町中部町会の女神輿をみて「元祖だね」と評したという。当初は婦人部だけで始められたが、その後、衣裳なども統一され、華やかなものに変えた結果、若い女性にも人気となったという⁽²³⁾。M・O氏によれば、週刊誌の記者の評価や他町会でも女神輿を担ぐようになり、昭和六〇年頃から「元祖女みこし」と呼ばれるようになったという。当初、町内では女神輿の導入に反対する意見もあったというが、その後、須田町中部町会の女神輿は継続され、例年、女性だけの担ぎ手で神田神社への宮入を果たし続けている。神田祭に参加する他の町会では、宮入の際に町会神輿の華棒を女性が担ぐことを禁じるなど女性に対する禁忌⁽²⁴⁾は現在でもみられるが、須田町中部町会では女性の祭りへの参加に対する禁忌は希薄にみえる。むしろ、婦人部の活躍も含め、女性の祭りへの参加は拡大している。

二、「元祖女みこし」の変遷

(一) 松平誠の研究にみる「元祖女みこし」の変遷

松平の「現代神田祭仄聞」からわかる昭和六〇（一九八五）年・六二年・平成二（一九九〇）年の女神輿の推移をまとめると以下のようになる。

- ① 女みこしの担ぎ手募集のチラシが初めて貼られたのは昭和六〇年。
- ② 「オープン参加方式」や「元祖」の文言が担ぎ手募集のチラシに盛り込まれたのは昭和六二年。
- ③ 女性たちの祭衣裳は、昭和六二年の紺のどんぶり腹掛け・紺のPATCH・紺足袋の草履掛け・揃いの半天（昭和六一年は白足袋）から、平成二年は昭和六二年と同様の衣裳のほか、鉢巻の手拭をピンク模様を散りばめたものに変更し、この手拭が須田町中部町会と他町会を区別。
- ④ 参加者数は、昭和六〇年が約一〇〇人、昭和六二年が一二〇人²²、平成二年が一四八人（松平研究室の人員を除くと一二六人）。
- ⑤ 平成二年から町内会祭礼委員会に婦人部としての役割が与えられた。

松平は、平成二年の調査から、神田祭に先立って参加関係諸団体の責任者やリーダーを集めた会合が開催されたが、この会合は「祭の説明をし、その成功にむかって協力を依頼するのは町内会の祭礼委員たちであり、それを受けて協力を誓い、モリアガッタのは、参加グループである町外の余所者たち、という構図」であり、かつての祭りではみられない「不思議のあつまり」であったとしている。つまり、松平は、伝統的なかつての祭りでは「祭は町内がスるものであり、観客はそれをみるものだった」が、今は「町内会は準備し、下支えをするものであり、それに乗って繰り出すのはほとんどが余所者という構図」へ変化したことを明らかにしている。また、町内会祭礼委員会に婦人部としての役割（神酒所係・食料係・衣裳係・お土産係）が付き、婦人部の役割が拡大したという。

松平が調査を始めた昭和六〇年の須田町中部町会の女神輿については、先述のように『朝日新聞』（朝刊、昭和六〇年五月二三日付）記事があり、この年は神田松枝町会でも女神輿が出されている。昭和六三年については、『讀賣新聞』（朝刊・都民版、昭和六二年五月一〇日付）の記事がある（25）。

平成二年の神田祭の女神輿については、石井研士が「続・都市の歳時記③ まつりだ、ワッショイ！」（『春秋5月号』（No. 338）、春秋社、平成四年五月）の中で報告している。平成二年五月一四日付の『The Japan Times』の一面に女性だけで担ぐ神田祭の神輿が掲載されたこと、多町二丁目町会の子ども神輿を子どもを集めての巡幸が困難になったため、当時の町会長が女神輿を提案したが他の役員から反対にあったにも関わらず、町会児童育成部の母親たちが反対を押し切って女神輿を実現し、町内渡御に一二〇人、連合渡御に一五〇人の希望者を集めたことを紹介している（一四〜一五頁）。多町二丁目町会は須田町中部町会に隣接する。

（二）女神輿の「遠征」と神輿の新調

松平の研究以後の大きな変化の一つとして、女神輿の「遠征」が挙げられる。「遠征」とは、「祭りが本来行われる場を離れ、他の場所で行われる例⁽²⁶⁾」を意味する。平成二（一九九〇）年には、松平は指摘していないが、この頃、女神輿はテレビでも取り上げられ、それをみた京都府亀岡市安町の安町商店会が「安町夏祭り」に須田町中部町会の女神輿を招待し、八月一八日の夜、神輿渡御を行った（『週刊千代田』平成二年八月二五日付）。江戸開府四百年を迎えた平成一五年には町内神輿を新調した。新調した神輿は、前の神輿より大型のものである。つまり、前の神輿よりも大きくなった分、担ぎ手の数も多く必要となった。この神輿で江戸開府四百年を記念して千代田区・日比谷公園や丸の内周辺を会場として行われた同年一月の「江戸天下祭」で巡幸を行った。これをみた山口県萩市から、「萩夏まつり」への参加を依頼され、翌平成一六年には山口県萩市へ女神輿が地元商店会から招待され、神輿巡幸を行った（『讀賣新聞』朝刊・西部版、平成一六年七月三一日付）。この萩への遠征には、神田神社から神職一名が同行している。費用は約一〇〇〇万円、全額萩市が負担したという。

(三)「女みこし担ぎ手募集係」の誕生

平成二五(二〇一三)年の神田祭で、須田町中部町会の「女みこし担ぎ手募集係」を担当した女性三人は、平成一四年に事務所を須田町中部町会内のビルに移転した。その際、当時、町会の副会長を務めていたビルのオーナーのY・M氏から、女神輿を担がないかと誘われた。最初は「お神輿を担いだことがない」し、「わざわざ日曜日に出てきてまで担ぎたくない」ので断っていたが、Y・M氏が「いい人」であり、お世話になったことがあって、お返しに担ごうと思いだ。担いでみたら面白く、格好も「コスプレ感覚」で面白かったという。「担ぐというよりはあの格好をしてみたいという所から入っていった。かわいいって感じで。体育会系で「わー」というような感じではやるのではない。それから友だちを集めて、二年に一辺やるようになった。それで毎回、事務所に二〇〜三〇人集まって、みんなでやるようになった」という。はじめて須田町中部町会の女神輿を担いだのは平成一五年からで、「江戸天下祭」や山口県・萩の「遠征お神輿」にも参加したという。四年前の平成二二年に、現在の「女みこし担ぎ手募集係」を担当する女性三人は、知り合い二〇〜三〇人に「ここが集合場所である」など、女神輿に関連する情報を伝えるために「神田須田町中部ガールズのワッショイ! ブログ」(<http://ameblo.jp/onna-mikoshi/>)を始めた。ブログでは、女神輿や神田祭に関するレポートのみならず、須田町周辺の様々な出来事もレポートされ、日々更新されている。平成二五年の神田祭では、町会の高齢化が進んだこともあり、参加者に連絡を取ること困難なため、「女みこし担ぎ手募集係」によって、初めてのインターネットを通じた担ぎ手の募集を実施するとともに、「女みこし担ぎ手募集係」がインターネット以外の応募者も含め、女神輿への参加者の名簿(リスト)管理を一括で行った。

三、「元祖女みこし」の参加者の変化

(一)参加者数の変化

「元祖女みこし」への参加者数は、昭和六〇(一九八五)年は約一〇〇人、昭和六二年は一二〇人²⁾、平成二(一九九〇)年は一四八人⁽²⁷⁾、平成一一年は約一八〇人(『讀賣新聞』朝刊・東京版、平成一一年五月二四日付)、平成二五年は一六九人(筆者による調

⑧。金融機関の割合が全体の三五%（五一人）を占めていた（図1参照）。これに対して、平成二五年は最終的に一六九人になった。募集を締め切った四月二五日時点のリストによると、一般二三人（うちブログ応募一六人、ブログ以外六人）、ワテラス学生四人、「女みこし担ぎ手募集係」Oさんの友人・知人二四人、「女みこし担ぎ手募集係」Kさんの友人・知人一〇人（うちマラソン友達五人、行政書

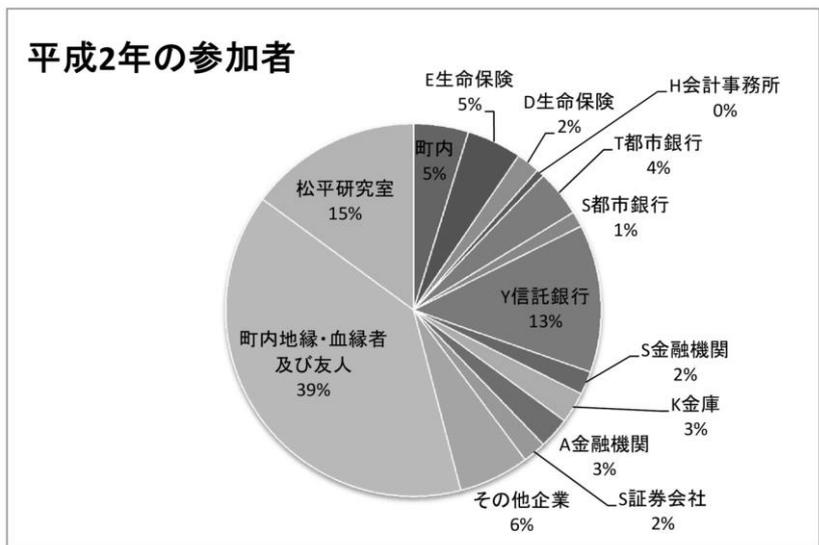


図1 平成2年の参加者

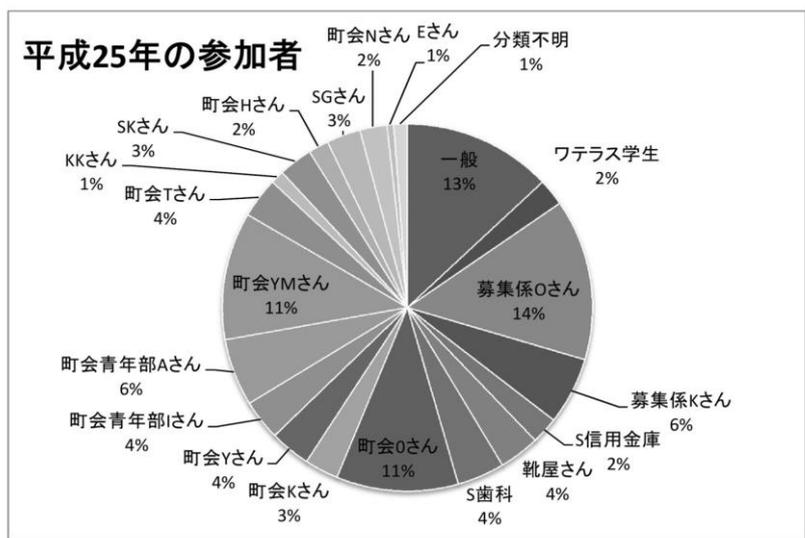


図2 平成25年の参加者

の参加者の比較

(二)平成二年と平成二五年

査)と、増加傾向にある。

松平誠が調査し、詳細を明らかにした平成二年の参加者の内訳は、町内七人、町内関連法人六一人（E生命保険七人、D生命保険三人、H会計事務所一人、T都市銀行六人、S都市銀行二人、Y信託銀行一人、S金融機関三人、K金庫四人、A金融機関四人、S証券会社三人、その他企業九人）、町内地縁・血縁者および友人五八人、立教大学社会学部松平研究室二二人の総勢一四八人であるとしている(2)

士会五人)、S信用金庫四人、S歯科七人、靴屋さんとその友人六人、町会Oさんの知人一人(うち茨城県から四人)、町会Kさんの親類とその友人五人、町会Yさんの親類・知人六人、町会青年部Iさんの知人六人、町会青年部Aさんの知人一人、町会YMさんの友人・知人一人(うちブログ応募三人、O治療院四人)、町会Tさんの親類とその友人・知人六人、KKさんとその友人二人、SKさんとその友人五人、町会Hさんの親類と知人三人、SGさんの知人五人、町会Nさんの知人四人、Eさん一人、分類不明二人の計一六九人(図2参照)。うちブログ応募は、一人で全体(二六九名)の二・二%である(筆者による調査)。

平成二五年は、松平が調査した平成二年の内訳と比較すると、町内関連法人、特に金融機関の参加率が三五%(五一人)から二%(四人)に減少し、「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人の二〇%(三四人)と町会に縁を持たない「一般」の一三%(二二人)を合わせると全体の三三%(五六人)と増加している。

四、地域社会の変容と須田町中部町会の神田祭

(一) 地域社会の変容

ここでは、「元祖女みこし」の担い手の変化と地域社会の関係を確認するために須田町中部町会にあった町内の金融機関の変遷を中心にみていきたい。金融機関に注目するのは、平成二(一九九〇)年と平成二五年を比較すると、金融機関の参加率が三五%から二%に大きく減少しているからである。そのため、『ゼンリン住宅地図』の地図上から確認できる金融機関(銀行)を、女神輿が誕生した昭和五二(一九七七)年頃からみていくこととする。

昭和五三年には、神田商工信用金庫、太陽神戸銀行神田支店の二つの金融機関があった。また、当時は町内に須田町医院という病院が存在した。昭和六三年には、神田商工信用金庫、協和銀行神田支店、太陽神戸銀行神田支店、商工中金神田支店の四つに増加している。一方、町内から須田町医院がなくなっている。平成二年には、協和銀行神田支店がなくなり、神田商工信用金庫、太陽神戸三井銀行神田支店、商工組合中央金庫神田支店の三つの金融機関になる。平成五年には、神田信用金庫、住友銀行淡路町支店、さくら銀行神

田支店、商工組合中央金庫神田支店、三和銀行の出張所の五つになる。この状態が、平成六〇九年まで続く。

平成一〇年には、商工組合中央金庫神田支店がなくなり、平成一一年には住友銀行淡路町支店がなくなる。そして、平成一二年には、さくら銀行神田支店がなくなり、神田信用金庫のビルが取り壊されて更地になる。平成一三年には、神田信用金庫の跡地にビルが建ち、一階にはセブンイレブンができています。また、さくら銀行のあったビルの一階には、a m・p m（コンビニエンスストア）が入る。さらに、三和銀行の出張所がATM（現金自動預払機）となる。このATMは翌年、UFJ銀行のATMに変化している。やがて、松屋、吉野家などの二四時間営業の店舗も靖国通り沿いのビルの一階にできてくる。平成二二年には、さくら銀行神田支店のあったビルに西武信用金庫が入り、一階のa m・p mはファミリーマートに変化している。こうして、金融機関が減少した町内にはコンビニエンスストアや二四時間営業の店舗が入り、平成二五年現在、深夜の靖国通り沿いが二四時間営業の店舗の光で明るくなっている。

祭りを支える町内の金融機関の減少（平成五年の五店舗↓現在の一家舗）が女神輿の担い手の変化にも影響していることがわかる。

（二）「元祖女みこし担ぎ手募集」のポスター掲示場所

昭和六〇（一九八五）年の松平誠の調査では、「四月に神田須田町から淡路町にかけての靖国通り」に担ぎ手募集のチラシが貼られた⁽²⁹⁾としている。一方、平成二五（二〇一三）年では、靖国通りと外堀通りには担ぎ手募集のポスターの掲示は少ない。平成二五年三月二二日に観察した担ぎ手募集のポスターの掲示箇所は一六ヶ所あったが、このうち外堀通りに一ヶ所、靖国通りに一ヶ所にとどまった。残りの一四ヶ所のポスターは町内の内側の通りに掲示されていた。その後、靖国通りには二ヶ所追加、外堀通りにもう一ヶ所（セブンイレブン）追加された。また、ポスターは、平成二年のテレビ映像では白黒印刷で小型であったもの⁽³⁰⁾が、平成二五年のものはカラー刷りのおしゃれで目立つ大きさに変化している。

（三）昭和四三（一九六八）年・平成四（一九九二）年・平成二五年の須田町中部町会の神田祭

昭和四三年に神田祭全体の調査を実施した藺田稔の「祭と都市社会―「天下祭」（神田祭・山王祭）調査報告（一）―」では巻末資料の

じて担ぎ手の一般募集がなされるように大きく変化した。

表1 昭和43年・平成4年・平成25年の須田町中部町会の神田祭

昭和43(1968)年 園田稔調査		平成4(1992)年 松平誠調査		平成25(2013)年 秋野調査	
町会名	須田町一丁目中部町会	町会名	須田町一丁目中部町会	町会名	須田町一丁目中部町会
世帯・神札	76	種類	御輿太鼓獅子山車	種類	神輿太鼓獅子山車
祭礼象徴	M 小	大小	大中1・大1	大小	神輿は大1・中1
作製年代		年代	S15	年代	H15(大1)
オモナ行事	神輿ハ飾り置き	蔵入れ	○	蔵入れ	○ (5/14)
役割動員	祭典委員(町会役員)	蔵出し	○	蔵出し	○ (5/6)
一般動員		氏子神輿御霊入れ	○	氏子神輿御霊入れ	○ (5/10)
行事経費	寄附四〇万	神幸祭「受渡し」		神幸祭「受渡し」	○ (5/11)
行事変化	大正十年がモトモ盛大。昭和十三年の紀元二千六百年記念祭も盛大。	御霊返し		御霊返し	
祭り/評価		氏子神輿宮入参拝(連合渡御)	○	氏子神輿宮入参拝(連合渡御)	○ (5/12)
神社イマズ	風輦一ノ宮ハ不明 二ノ宮ガ将門霊人	町会練り歩き	○	町会練り歩き	○(5/11.12)
備考		前齋神事(宵宮)		前齋神事(宵宮)	
祭礼費用	寄付	祭礼費用	寄付	祭礼費用	寄付
祭礼組織	祭典委員会 婦人部 子供会	祭礼組織	祭典委員会 婦人部 子供会	祭礼組織	祭典委員会 婦人部 女みこし担ぎ手募集係
神酒所	有無 建物の種類 店舗	神酒所	有無 建物の種類 店舗	神酒所	有無 建物の種類 駐車場
一般動員	町内会員 町内会員外 御輿同好会	一般動員	町内会員 町内会員外 御輿同好会	一般動員	町内会員 町内会員外 御輿同好会 神輿同好会の参加者有

調査番号二八(一〇六頁)、平成四年に神田祭全体の調査を実施した松平誠の「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」では、巻末資料の調査番号二四(七二頁)に、それぞれ須田町中部町会の神田祭への参加状況が掲載されている。それに、筆者の調査に基づく平成二五年の状況を比較すると以下のようになる(表1参照)。

祭礼組織(役割動員)について、昭和四三年↓平成四年↓平成二五年の順にみると、祭典委員↓祭典委員会・婦人部・子供会↓祭典委員会・婦人部・「女みこし担ぎ手募集係」の形で推移している。なお、「女みこし担ぎ手募集係」は、町会の正式な組織ではなく任意の仲間グループであるが変化を捉える上でメルクマールとなるため、祭礼組織として捉えておきたい。

平成四年と平成二五年を比較すると、祭礼組織は、「祭典委員会」、「婦人部」には変化がないが、「子供会」はみられない。太鼓車(山車)の巡幸が行われないことと関連していると思われる。つまり、子どもの参加者が少ないからだと推測される。また、先述したように、平成二五年には、「女みこし担ぎ手募集係」が追加され、「神田須田町中部ガールズのワッショイ! ブログ」や「神田須田町ガールズ@onnamikoshi」(<https://twitter.com/onnamikoshi>)を通

この事実は、松平誠は、「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」で藪田稔の調査と比較し、神田祭全体について「地域の居住者集団と考えられてきた町内会は、依然として地域祭礼の実施機関としての役割を確実に果たしつつある」（五九頁）と指摘しているが、果たして平成二五年でも「確実に果たしつつある」と言い切れるかどうか留保が必要であることを示している。確かに、現状においても町会が地域祭礼の実施機関としての役割を担っている。しかしながら、町会費を納めず、神田祭以外の町会活動にあまり参加することのない「女みこし担ぎ手募集係」を、従来と全く同じ町会内部の組織としてみていいかどうかという問題があるからである。

なお、平成二五年に初めて「女みこし担ぎ手募集係」の女性一人が神輿係になった⁽³¹⁾。

「祭礼費用（行事経済）」は、依然として「寄付」で賄われている。奉納金の額は、昭和四三年は四〇万円、平成二年は五一〇万四千円⁽³²⁾、平成二五年は三五三万円⁽³³⁾である。平成二年と平成二五年を比較すると、奉納金は減少している。

「祭礼象徴」として、平成四年と平成二五年では「種類」の「御輿太鼓獅子山車」に変化はないが、「御輿」が平成一五年に新調され、古い神輿は神酒所へ飾り置かれている。つまり、神輿は二台になっている。太鼓車（山車）は一台あるが、巡幸は行われず、獅子頭は神酒所へ祀られていた。

「祭礼行事」では、平成四年と平成二五年を比較すると、「蔵出し」（五月六日）、「蔵入れ」（五月一四日）、「氏子神輿御霊入れ」（五月一〇日）、「氏子神輿宮入参拝（連合渡御）」（五月二二日）、「町会練り歩き」（五月一日・二二日）のいずれも実施していて、実施状況に関しては変化がない。また、「御霊返し」が行われず、「前斎神事（宵宮）」に該当するものがみられないことにも変化がない。「神幸祭「受渡し」」は平成四年は実施されていないことになっているが、平成二五年には、五月一日の午前（神田郵便局前↓淡路町交差点付近）と午後（須田町中部町会・多町通り↓万世橋付近）の二回行っている。神酒所は設置されているが、平成四年は「店舗」であったが、平成二五年は「駐車場」（コインパーキング）へ変化した。

「一般動員」については、平成四年の松平の調査では、神輿同好会の参加は「〇」人であったが、平成二五年は神輿同好会に所属する人たちの参加がみられる。

まとめ

このように、「元祖女みこし」は、地域社会が変容する中で、その変化に対応しながら持続していることがわかる。平成二（一九九〇）年と比較すると、町内の金融機関の減少は、祭りの担い手の減少を意味したが、いわば会社員という「社縁」（会社社縁）から友人や仲間といった「選択縁^(3,4)」へと移行することによって、祭りの担い手の確保に成功している。それは、男性の担ぎ手の減少といった社会的な変化に対応するため、女神輿を誕生させた経緯と共通する。「社縁」から「選択縁」へ移行する過程で、「女みこし担ぎ手募集係」の設置やインターネットによる担ぎ手の募集といった新しい方式が採用された。かつて、町内会婦人部を祭礼実行委員会に取り込んだように、「女みこし担ぎ手募集係」の一部は神輿係に登用された。「女みこし担ぎ手募集係」は、ブログを通じて、祭り以外にも須田町近辺の様々な身近な出来事をレポートし、新たな参加者の開拓にも貢献している。いわば「身近な存在」として、「かわいい」、「おしゃれ」な「元祖女みこし」を広報できているといえるのではなからうか。

また、江戸天下祭への参加や亀岡市や萩市への「遠征」も実施し、その知名度は上昇を続け、須田町中部町会の女神輿は、神田祭の「元祖女みこし」へ拡大しつつあるといえる。そこには、神田神社や千代田区観光協会の戦略^(3,5)が見え隠れする。いわば、伝統ある神田祭の「元祖女みこし」として、その「ブランド化」が図られる一方で、新たな参加者にとって「身近な存在」として感じられるような仕組み作りに成功し、参加者の気持ちをつなぎ止めているといえる。

つまり、「元祖女みこし」は、地域社会の内部と外部の間に位置し、両者をつなぐ存在であるといえる。神田祭の「元祖女みこし」として、神輿の巡幸を維持し連合渡御や宮入への参加を持続したい町内会の意思と参加する女性たちのニーズを引き受けながら、町会の手を超えて神田祭の拡大に一役を買う存在になりつつあるのではなからうか。こうした性格を有することで、女性の参加に対する禁忌は町内では蔭を潜め、むしろ女性の参加をプラスの要因として位置付け、「元祖女みこし」は現代の神田祭を華やかに演出していると考える。

- (1) 阿南透「歴史を再現する」祭礼『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第二六号、慶応義塾大学大学院社会学研究科、昭和六一年、二三頁。
- (2) 藪田稔「大都市の祭り」『國學院大學日本文化研究所報』五一四（通巻二八号）、國學院大學日本文化研究所、昭和四三年、五頁。
- (3) 米山俊直『祇園祭』、中公新書、昭和四九年。米山は、戦後、占領軍の兵隊などが女性を連れて鉾に上げ、月鉾も昭和二五年から伝統であった女人禁制を解いたが、翌・昭和二六年の鉾建ての時に、月鉾が倒れたのは、女人禁制を解いた「バチがあたった」と噂されたことを指摘している。また、昭和四八年においても、鉾に女性を上げることが拒否したり、鉾の曳き綱を女性がまたぐことや巡幸当日に曳き綱に触ることが忌まれていることを報告している。その一方で、長刀鉾保存会の財務係の方は、女人禁制は既になくなっていないことをいい、鉾の曳き初めの日には男女区別なく綱を曳いていることが明らかにされている（二二二〜二二六頁）。女人禁制のタブーは完全にはなくなっていないものの、女性の参加が進んでいることが窺える。
- (4) 米山俊直『天神祭』中公新書、昭和五四年。米山は、天神祭に参加する天神講の獅子舞に携わる二〇代の三人の女性について報告し、天神祭が「とにかく好き」で、信仰心からではなく、自分自身の楽しみであり、ストレスの解消になるといった意見に加え、天神講の舞の練習には学校の友達とは違った人間関係の魅力が三人の女性を祭りに惹きつけていると分析している。そして、「天神講も、戦前は男だけが獅子舞や傘踊りをしてた。講元の妹さんが、女子として始めて参加し、そのときは問題になったという。しかしそれ以来女性の参加も認められ、最近では圧倒的に女性がおおい。ただし獅子舞は、正式には女性には認められていない、ということだ。」（一九二頁）と報告している。ただし、米山の調査の段階では、「ギヤル神輿」は誕生していない。
- (5) 近年では、金子毅「もう一つの戸畑「提灯山笠」——「女山笠」創出をめぐる葛藤の構図から——」『日本民俗学』第二五八号、日本民俗学会、平成二二年、がある。
- (6) 神田祭を対象とした、藪田稔の「祭と都市社会——天下祭（神田祭・山王祭）調査報告（一）——」と比較した松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容——神田祭による試論——」、藪田・松平との比較を試みた清水純「神田祭——担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係——」の研究が数少ない研究である。
- (7) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年。このほか、松平の須田町中部町会の女みこしに関する研究として、松平誠・鈴木孝光『土地買占めによる地域社会集団の変容に関する生活論的共同研究——東京神田須田町一丁目中部町会を指標とする実証的研究——』地域社会研究所・第一住宅建設協会、平成四年五月、松平誠「神田と祭りに生きる人々——神田祭女御輿町内の古老談——」『遊びと日本人——その空間と美意識——』生活文化研究所、平成四年一〇月二七日、同「神田の地上げと生活集団」『生活学』一九九二年 第十七冊』トメス出版、平成四年一二月二〇日がある。これらの論考は、後に、松平誠『現代ニッポン祭り考——都市祭りの伝統を創る人びと——』小学館、平成六年にまとめられる。
- (8) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容——神田祭による試論——」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (9) 清水純は、前掲「神田祭——担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係——」『日本民俗学』において、松平の平成四年の調査から一七年が経過した平成二二年の神田祭（本祭）の調査、平成二〇年と平成二二年の裏祭・その前後の時期に行った調査から、松平誠と同様に、担ぎ手の変化に注目し、神輿の担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関わりを中心に焦点を当てながら、神田祭を対象とした藪田稔と松平誠の調査時点からの変化を分析している。しかし、松平の「都市祝祭伝統の持続と変容——神田祭による試論——」のように、各町会の祭礼行事の実施状況等についての把握はなされていないため、各町会単位の変化は解明されておらず、須田町中部町会の変化も不明である。
- (10) 前掲藪田「祭と都市社会——天下祭（神田祭・山王祭）調査報告（一）——」。
- (11) 碑文には、「旧神田青果市場の由来 この市場は慶長年間今の須田町附近、当時は八辻ヶ原を称していたこの地一帯において発祥したものである。都市を追って益々盛大となり徳川幕府の御用市場として駒込、千住と並び江戸三大市場の随一であった。ためにこの市場には他市場で見られない優秀なものが豊富に入荷した。そして上総房州方面の荷は舟で龍閑町河岸へ、葛西、砂村方面のものは今の柳原稲荷河岸から水揚げされた。当時の記録によるとこの市場の若い衆達が白装束に身を固めてかけ声も勇ましく御用の制札を上に青物満載の大人車を引いて徳川幕府所青物御所を指してかけて行く姿は実に「いなせ」なものがあつたと云う。巷間江戸の華と云われた、いわゆる神田っ子なる勇肌と有名な神田祭はこの神田市場にそのことばの源を発しているものといわれた。こうして繁盛をきわめたこの市場は江戸時代から明治、大正、昭和へと漸次その地域を拡大してこの地を中心に多町二丁目、通り新石町、連雀町、佐柄木町、雉子町、須田町にわたる一帯のものとなりその坪数は数千坪に及んだ。この間大正十二年九月関東

大震災にあつて市場は全滅したが直ちに復興し東洋一の大都市とうたわれた。惜しい故この由緒ある大都市も時代の変遷と共にこの地に止まることができず、昭和三年十二月一日を期して現市場である神田山本町東京都中央卸売市場神田分場へと移転した。当時数百軒に及んだ問屋組合頭取は西村吉兵衛氏であった。風雪幾百年永い発展への歴史を秘めて江戸以来の名物旧神田青果市場は地上から永遠にその姿を消した。父祖の代からこの愛する市場で生きて来たわれわれは神田市場がいつまでもなつかしい。あたかも生れ故郷のように。尽きない名残りをこの記念碑に打込んで旧市場の跡を偲ぶものではないか」とある。

(12) その成立ちについて簡単に紹介すると、関東大震災後の土地区画整理事業によって、昭和八年、連雀町と佐柄木町の大部分、旧多町二丁目の北一部、雉子町北半分が「須田町一丁目」となった。その間、旧連雀町の一部が連雀町町会、旧佐柄木町の一部が義勇会と親交会となった。そして、第二次大戦中の隣組強化令により、連雀町町会・義勇会・親交会の三町会が合同して須田町中部町会になった。しかし、終戦後、GHQにより隣組は解体されたが、昭和二五年に須田町中部日赤奉仕団を設立した。さらに、これを母体として昭和二八年に須田町中部町会が設立された(『町会発足50周年記念 会員名簿 千代田区須田町中部町会』平成一五年)。平成二五年、町会発足六〇周年を迎え、記念式典が五月二六日(日)に行われた。

(13) 林順信『江戸神輿春秋』春の巻、大正出版、昭和五八年、七〇頁。本書には、須田町中部町会と同じ中神田地区連合渡御に参加した「須田町一丁目南町会神輿」、「多町一丁目町会神輿」、「須田町一丁目北町会神輿」の写真があり、それを見ると神輿を担ぐ女性の姿が確認でき、男女混合で神輿の巡幸がなされていたことがわかる。

(14) 前掲松平「現代神田祭仄聞」。松平は、一九八〇年代の初めには二五〇世帯以上を数えた町の住民は、昭和六四年には実際に住んでいる世帯数が六七戸(住民台帳記載の世帯数が七六戸)に減少していることを明らかにし、神輿を担ぎ手となる年齢層は一六歳(高校生)〜四〇歳で、男性に限定してみると最大で三三名(四一〜六〇歳の二三名を加えても五六名)しかないことから、一九八〇年代半ばには町内だけでは神輿の巡幸が困難になっていたことを明らかにしている。

(15) 同様に、松平の『土地買占めによる地域社会集団の変容に関する生活論的共同研究—東京神田須田町一丁目中部町会を指標とする実証的研究—』、「神田と祭りに生きる人々—神田祭女御輿町内の古老談—」では、須田町中部町会の女御輿がいつ始まったかについて「一九八〇年代半ば」といった指摘に留まる。また、「現代神田祭仄聞」には、昭和六〇年の四月に神田須田町から淡路町にかけての靖国通りに「神田明神の伝統的な祭礼行事としては大変異例な、はじめての女御輿募集のチラシが貼り出されていた。」(七六頁)という記述があるが、女御輿が昭和六〇年から始まったと取るのか、女御輿募集のチラシの掲示が昭和六〇年から始められたと解すべきなのか、判断し兼ねる曖昧な表現がある。

(16) 昭和六〇年の記述のところで「なにはともあれ、この年の神田祭は初の女御輿登場の場面となった。」としている(前掲松平『現代ニッポン祭り考—都市祭りの伝統を創る人びと—』四二頁)。

(17) 「かくて、一九八〇年代半ばのS町会では、伝統の神田祭、つまり神田神社例大祭への参加も危ぶまれる状態となって、重大な危機を迎えた。こうした状況の中で、一九八三年からこの町がはじめたのが、神田祭り元祖女御輿であった。」(前掲松平「神田の地上げと生活集団」、一七五頁)としている。このS町会が須田町中部町会を指す。同論文には、須田町中部町会に住むM・S氏(一九〇七年生)の聞き取り内容に、「実は、もともとこの町の御輿というのは、そう大きなものではない、大人の男が担ぐようなものではないのです。それで町でもいろいろ考えたが、いっそのこと、女の子に担がせたらどうか、近頃は娘の方が威勢がいいから、乗ってくるんじゃないか、ということ」で、一九八三年から神田初の女御輿ができたのだ。(一七九〜一八〇頁)との記述がある。

(18) 昭和四三年の一〇月五日、東武東上線大山駅前商店街では、氷川神社の秋の大祭と東京百年の記念行事として大山本町会が「とび切り晴れやかな催しを」と、「乙女みこし」を思いつき、商店街の娘さんたち二五人が「商店街の発展のためなら」と威勢よく、神輿担ぎをかって出た。そして、午後二時半、紺の揃いのハッピーに、ピンクの襷、鉢巻の出で立ちで酒樽を飾り付けた神輿を担いだという『読賣新聞』朝刊、昭和四三年一〇月六日付)

(19) 昭和四七年の「だらだら祭り」には、九月十七日に「女みこし」など三十代が付近を練り歩く。『読賣新聞』朝刊、昭和四七年九月一三日付)とある。昭和四九年には、「三十一基のみこしの中に今年も堂々と女みこしが登場する」とある。そして、芝大神宮では戦後いち早く女人禁制を解いて神明芸者による女御輿を登場させ、「いまはあまり珍しくありませんが、発祥地は当社」という話を紹介している(『読賣新聞』朝刊、昭和四九年九月一〇日付)。

(20) 天神祭ギャルみこし公式サイト <http://www.galnikoshi.com/>

(21) イザナミノミコトを祭神とする荻窪白山神社では、元々は氏子総代会に女性参加の拒否反応が強かったが、「女性の神様をお祭りしているのだから」と、三年前の昭和五四年に解禁した。それ以来、女神輿が名物となり、今年も地域の主婦や娘さん、銀行勤めのOLなど約七〇人から参加申し込みがあった。氏子代表は今では「町内会の女み

こしは珍しくないが、神社の純粋女みこしはこだけだよ」と鼻高々であったという(『讀賣新聞』朝刊、昭和五七年九月八日付)。昭和五九年の秋祭りにも女神輿が出され、高校生やOLのみこしギャルから六〇代の主婦まで約一〇〇人がハッピーにももひきのあで姿で勢揃いしたという(『讀賣新聞』朝刊、昭和五九年九月八日付)。

(22) 同時期に、神輿同好会の中に女性だけの同好会が結成されている。『日本神輿協会 創立30周年記念 日本神輿同好会名鑑』(日本神輿協会アカデミー、平成二二年)によれば、女性だけの神輿同好会として、昭和五四年四月の設立で千葉市川市富浜を本拠地とする「江戸麗粋會」、平成五年一月の設立で東京都豊島区東池袋を本拠地とする「祭艶會」(さいえんかい)、昭和五七年に発起人九名の神輿参加の後、昭和六一年に笠科神社神輿「姫纏」を発足させた、群馬県沼田市を本拠地とする「上州女神輿 姫纏」がある。また、男女の会員がいて湯島に本拠地を置く「湯島 綿引睦會」は、昭和六〇年五月に設立されるが、地元湯島では天三町会の他に、氏子の少ない同朋町会で女神輿渡御を二〇年任され、女性五〇人の会員を従えて、責任を持って務めているという。少ない資料であるが、昭和五四年には女性だけの神輿同好会が結成され、東京湯島の同朋町会でも昭和六〇年から女みこし渡御が行われ、「湯島 綿引睦會」がその巡幸に関わっていたことが窺われる。

(23) 『町会発足50周年記念 会員名簿 千代田区須田町中部町会』、平成一五年。

(24) 内神田鎌倉町会では、現在でも宮入の際の町内神輿の華棒を女性が担ぐことを禁じているという(筆者による調査)。また、かつての鍛冶町二丁目町会では、「昔は「女性性は神輿を担いではいけない」「神輿は上から見てはいけない」とか、結構うるさかった時代があった。」(『鍛冶二 五十周年誌』千代田区鍛冶町二丁目町会、平成一五年、一六三頁)という。

(25) 「エキ祭テイング 女みこし 神田明神例大祭」—こんなポスターが、神田界わい一帯に張り出されている。広告主は、神田須田町一丁目中部町会。そのかいあって、きょうは十日の神田祭りに、百五十人のギャルが練り出し、にぎやかにみこしをかつぐ。女子大生や地元企業のOLが主流を占める中、数少ない地元っ子の看板娘が、吉川佳代子さん(21)。「祭りが近づくにつれてられなくなっちゃって」と、二年に一度の祭りのためにそろえた衣装一式を、キリリと身にまとった。濃紺づくめの姿に、口元の紅がひときわさえて、なまめかしい。きょうの宮入りには朝から夕まで女みこしをかつぎ、夜は夜で隣町の男みこしに加勢する。「何時間かついでって疲れないんだから不思議なの。腹の底から声をふりしぼって、滝のような汗を流して好きなんだなあ。嫁いだ姉もこの日ばかりは神田っ子に戻って、三姉妹が一つみこしに心を合わせ、ねり歩く。それもこれも、実を言うと、都心の過疎化の裏返し。「市場が移転したら、大みこしはどうなるのかしら」と、まゆをひそめた。恋人はまだいない。「いい人ができたら、いつしよにかつぐ」のが夢。次の祭りには、女みこし卒業かな。

(26) 阿南透「祭りの海外遠征—ロサンゼルス of 青森ねぶた—」『情報と社会』第一八号、江戸川大学、平成二〇年、二二頁。

(27) 前掲松平「現代神田祭仄聞」七六〜七八頁。

(28) 前掲松平「現代神田祭仄聞」七八頁。

(29) 前掲松平「現代神田祭仄聞」七六頁。

(30) 「東京・神田 地上げで氏子不足!! 神田祭を支えた江戸っ子魂」(テレビ朝日『こんにちには2時』、平成二年五月一七日放送)より。映像は石井研士教授よりご教示いただいた。

(31) 平成二五年の須田町中部町会の「神田祭役割分担」は、祭典委員長(総括)一名(町会長)、祭典実行委員長(神輿巡幸責任者)一名、祭典副委員長(交通、庶務)一名、祭典副委員長(神酒所)一名、会計責任者一名、中神田連合世話人一名、婦人部統括一名(女性)、神輿係五名(うち、担ぎ手募集係の女性一名)、補給班・婦人部とほか一名、衣裳係・婦人部、神酒所四名、会計庶務三名(うち、婦人部統括の女性一名)、鳳輦供奉四名、賛助金募集・役員全員、担ぎ手募集担当者・女性一名とその他役員全員である。

(32) 前掲松平「現代神田祭仄聞」八八頁。掲載された表2より算出。

(33) 平成二五年五月九日(木)の段階。二五万円が二本、二〇万円が四本、一五万円が二本、一〇万円が四本、九万円が一本、五万円が九本、三万円が一〇本、二万円が五本、一万円が四九本、五千円が二〇本である。

(34) 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、昭和五九年。

(35) 『神田祭の楽しみ方』というパンフレットを千代田区観光協会が作成し、見どころとして「元祖女みこし」を紹介している。また、「元祖女みこし」の参加者の一般募集において、Twitterでの告知を千代田区観光協会がリツイートしている。

第三章 個人と神田祭

第一節 神田神社の神職と現代の神田祭

これまで繰り返し述べてきたように、東日本大震災によって四年振りの開催となった平成二五（二〇一三）年の神田祭、神田神社が現在地に遷座してから四〇〇年を記念して行われた平成二七年の神田祭（御遷座四〇〇年奉祝大祭）は、いずれも多くの参加者と観客を動員して大きな賑わいをみせた。都市祝祭の一コマを現代の大都市の祭りからみることができるといえる。

この都市祝祭（賑わい）を形成する一つの原動力は、第二章第一節・第二節でみてきたように、戦後の地域社会の変容に対する地域社会（氏子町会）の反応が影響していることが考えられる。

平成四年の神田祭を対象として分析を行った松平誠は、神田祭の祝祭の構図として大きな可塑性を発揮する点が特色であると指摘している。その理由として、第一に、町内会というものが、本来表出機能を中心として機能してきたものであり、危機に際しては必然的に新たな表出機能を模索することになるからであるとしている。第二に、そうした表出機能をかなり柔軟に発揮できる個別町内の独立性に裏打ちされているために、政治的あるいは社会的な危機に直面したとき、優れた表出機能を発揮してきたことを挙げている。山車の共同運行が不可能になったときに、それまでの慣習にない町神輿を創出するのは神田の町内であり、町神輿が定着すると今度は連合渡御に仕上げたのも神田の町内であった。そこには、本来の表出機能に基づく新たな都市の伝統創出の軌跡が描かれていると指摘する。そして、同様に起こっている神田地域の社会変化に対しても、文化的な形での挑戦を進めている。女神輿が生まれたり、神輿同好会への柔軟な対応を進める町内会が生まれたりする素地がそこにあると指摘している^{〔1〕}。

以上のように、松平は、町内会（町会）を基盤とした「可塑性」が神田祭の賑わいを作る一つの原動力になっていると捉えている。確かに、第二章第一節・第二節で明らかにしたように、平成二五年と平成二七年の神田祭では、連合渡御（「おまつり広場」など）、

神田神社への宮入の拡大、金曜日の町内企業に見せる祭りの拡大、祭礼の象徴（神輿・山車など）の誕生や復活によって祭りが盛んになり地域社会が再活性化（例、「元祖女みこし」の参加者の拡大、紺屋町南町会の段ボール神輿の誕生、「桃太郎」の山車の展示に伴う二〇年振りの神酒所の設置など）する事例がみられた。社会変動に対して可逆的に反応し、祭りが盛んになっていることが指摘できる。その理由として、町会にとつて、神田祭が最大の行事であるとともに、地域社会の結集を維持するための「最後の抛り所」になっているからであると考えられる。つまり、町会を基盤とした「可逆性」が神田祭の賑わいを作る一つの原動力になっていることは平成二五年・平成二七年の神田祭からも窺うことができる。

しかしながら、町会の持つ「可塑性」や「可逆性」だけが神田祭の賑わいを作る原動力なのだろうか。神田祭を現場で参与観察していると目につくことがある。一つは神田神社の神職の活躍である。もう一つは、町会の個人の強い意思と行動力である。

ここで参考となる先行研究がある。石井研士は、東京銀座の小祠や地蔵、高層化した神社などの宗教調査から都市における宗教の現状として二つの特徴を指摘している。一つは、「都市化と宗教変動のプロセスは可逆的なプロセスであることに注意しなければならない。個人や地域の危機的状態において、宗教は再び社会を聖化するように働く可能性がある。そうしたさいに人的要因は重大な要因である。八官神社の西澤半助、豊岩稲荷の岩松鉦太、朝日稲荷の三枝敏郎と沖山三郎などはそうした事例の典型である。特定の人物が神社の復興や存続に大きな役割を果たす⁽²⁾」ことである。二つは、「祀るもののフレキシブルな構造である。教義や世界観を厳密に遵守しないことによつて、必要が生じたときに、そのための表現様式のさまざまな可能性として存在し続けることができる。⁽³⁾」としている。特に、一つ目の「人的要因は重大な要因」としている点が注目される。銀座の八官神社の西澤半助らのような個人の活躍が神田祭でも確認できるのであろうか。

そこで、本章では個人と神田祭の関係について、神田神社の神職と町会の個人の切り口からみていく。さらに、参加者を一般募集する「元祖女みこし」の参加者に注目し、拡大する不特定多数の個人と神田祭の関係性について考察する。

本節では、まず、神田神社の神職と神田祭の関わりについてみていきたい。戦後の都市祭りを対象とした先行研究では、都市祭りと宗教者の関係を扱った研究はほとんどなされていない。先行研究が手付かずにしてきた、神職という宗教者と戦後の都市祭りとの関係

を切り開くという意味でも、神田神社の神職と現代の神田祭の関係を検討する意義があると考えられる。

一、参与観察からみえる神田神社神職と神田祭

平成二七（二〇一五）年五月現在、神田神社の神職数は一七人（研修生・巫女・職員を含むと二八人）である⁴。氏子町会が一〇八町会にも上ると称され、大規模な神幸祭行列の指揮や氏子町会の神輿宮入など、神田祭に関わる動きをこの人数で運営していることになる。限られた人員で神田祭を運営しているといえるのではなからうか。

平成二七年五月の神田祭における主な神事と神職の携わった活動として以下のものが挙げられる。

（一）主な神事・活動と神職

五月七日（木）の一九時から鳳輦神輿遷座祭が厳粛に執行された。多くの観客が見守る中、白装束（斎服・浄服）を着た神田神社の神職、巫女らによって御霊が、一の宮鳳輦（大己貴命）、二の宮神輿（少彦名命）、三の宮鳳輦（平将門命）へ遷された。

五月八日（金）は氏子町会の神輿御霊入れを多くの町会で実施した。複数の町会を担当する神職がそれぞれの町会の御霊入れを行うため、時間を分けて行っている。神田中央連合では、次の町会まで町会の車で神職を送って町会神輿への御霊入れを実施している。

五月九日（土）は八時に神田神社で発輦祭を行って、神幸祭は開始される。神田神社の三柱の御神霊を載せた鳳輦・神輿を中心とした神幸祭の行列は神田・日本橋の氏子町会を巡った。途中、将門塚と両国御飯屋では、神田神社宮司の大鳥居信史氏を斎主として神事を行った。また、一八時には神田五軒町会会の神酒所があるアーツ千代田3331で、初めての試みとして巫女舞が奉納され、神田神社権宮司の清水祥彦氏が挨拶をした。その後、神田神社へ還御し、一九時頃に着輦祭が神田神社で行われた。また、日本橋の有馬小学校からは附祭の行列が神幸祭行列の後ろへつながり、神田神社の神職と文化資源学会、有馬小学校の教員らで、附祭の行列を進行させた。附祭には、相馬野馬追の騎馬武者のほか、大江山凱陣、大鯰と要石、花咲か爺さん、浦島太郎などの曳き物が加わった。筆者も浦

島太郎の曳き物に参加し、慶應幼稚舎の子どもたちと「浦島太郎」を歌いながら、アドバルーンでできた浦島太郎の曳き物を曳いて、小網町児童公園から神田神社まで練り歩いた。途中の秋葉原から東京藝術大学学生が制作した「白虎」、万世橋交通少年団、ボーイスカウト千代田第六団などが合流したが、合流のタイミングや順番などは現場の神職が臨機応変に対応しながら、行列の運営をしていた。三熊野神社から里帰りした祢里（山車）二基も附祭の行列のあとに参加したが、ここにも神田神社の神職が付き添い、運行を管理していた。また、夜からは、富山町町会と日本橋の氏子町会による神輿宮入が行なわれ、社殿前で神輿を下し、神輿と担ぎ手のお祓いを神職が行った。

五月一〇日（日）は、終日、神田神社への氏子町会神輿の宮入が行われた。神輿宮入に際しては、神田神社大鳥居横に「指揮台」の櫓を組み、そこに神田神社の神職を配置して、大鳥居前から神田神社境内へ向かって神輿宮入を誘導する。また、神田神社拝殿前に氏子町会の神輿が到達すると、町会の神輿の紹介などを神田神社の神職が行う。拍子木が叩かれ（木が入られ）、神輿が下ろされると、お祓いを受けるために低頭する旨、だいきく様とえびす様の福鈴が鳴らされる旨、二礼二拍手一礼の神田神社への参拝の誘導、宮入を果した町会長の挨拶の誘導、還御する町会神輿の紹介などのアナウンスを神田神社の神職が行う。また、神輿宮入の際には、神田神社宮司の大鳥居信史氏の姿もみられた。このほか、一〇日の昼頃、秋葉原中央通りで多数の神輿が連合渡御をする「おまつり広場」が行われたが、連合渡御に先立って実施した式典にも神田神社宮司大鳥居信史氏が参加した。神輿宮入を終えた町会では、神田猿楽町会や神保町一丁目町会など、一〇日の夕方から夜にかけて町会神輿の御霊返し（御霊抜き）を神田神社の神職が行った。

なお、一〇日の神田祭の様子は、神田神社とNTTコミュニケーションズが制作するインターネットTV「神田祭・ch」で配信された。配信された映像はのちに編集されて、『神田祭大図鑑』（DVD）として販売された。

五月一四日（火）の一時から献茶式、同日の一八時から明神能が催された。そして、五月一五日（水）の一四時から神田神社例大祭が執行された。神田神社宮司以下の神職が厳粛に祭典を執行し、氏子町会の関係者が参列した。

（二）御霊入れと御霊返し

平成二七（二〇一五）年の神田祭では、第三章第一節で指摘したように、御霊入れは把握分であるが七〇町会と二連合（錦連合三町会、小川町連合四町会）で実施された。その一方で、御霊返しは一七町会で確認できた。御霊返しは、町会の神輿が神酒所に還御した時間と神田神社神職が御霊返しに来ることが可能な時間が一致した町会で実施されていることが窺われる。つまり、町会と神社双方の人的要因とタイミングが実施率に影響していることが考えられる。

（三） 神田祭入門講座・アサゲニホンバシ

神田祭に先立ち、四月八日（水）の一九時からアーツ千代田3331を会場として、女性を対象とした神田祭入門講座が行われた。神田神社のバックアップと外神田連合の協力のもと、講座は開催された。神田神社権宮司の挨拶、神田神社権禰宜による神田祭の歴史についての映像や画像を使った講義のあと、メイクや半纏の着付け、担ぎ棒を使った神輿担ぎの実演（外神田連合が協力）が行われた。

四月一七日（金）の「第六二回アサゲ・ニホンバシ」（朝餉・日本橋）では、室町一丁目の三井ホールを会場として、朝食を食べながら神田神社の神職によって「神田祭とゴルフ日本橋会」と題した講演が行われた。講演では、神道や神田神社、神田祭、ゴルフ日本橋会を通じた関わりが室町一丁目会の神田神社への神輿宮入へつながったことなどが、多数の画像を使ったスライドを使って紹介された。以上のように、神田神社の神職は限られた人数で神事を厳粛に執行するのみならず、神田祭の賑わいを彩る様々な活動に従事していることがわかる。

二、 神田祭以外の氏子町会と神社・神職との関わり

神田祭以外においても、氏子町会と神田神社・神職との関わりを持つ場が年間を通じて複数存在する。まずは神田神社の年中行事からそうした場を確認しておきたい。

(一) 神田神社の年中行事

『神田明神史考』には、大正八(一九一九)・九年の歳時記として、初日の出、初詣、一番組の初詣で新年会、神楽殿における太々神楽、節分祭・拝殿に整列した年男、夏越しの形代流し(隅田川)、七五三参り、歳の市・飾り店、歳の市・羽子板店と警戒の宮鍵講員、歳の市・御防講詰所、煤払い、除夜七祭の内・神門祭、除夜七祭の内・疫神祭、除夜七祭の内・道饗祭の写真が掲載されている(5)。

昭和六(一九三一)年発行の『神田明神誌』には、「現在行はれつゝあるもの」として神田明神の年中行事が挙げられ、旧行事には「△」(三角印)が付されている(6)。以下に列挙すると、「一月一日 歳旦祭」「一月一日 初日出拝」「一月二日 元始祭」「一月八日 神事始△」「二月九日より一月末日まで 氏子各町神楽奉奏△」「二月節分 疫神祭授與」「二月十一日 紀元節祭」「二月十九日 祈年祭」「三月春分ノ日 春季皇靈祭遥拝」「四月三日 神武天皇祭遥拝」「四月二十一日 大々神楽△」「四月二十九日 天長節祭」「隔年五月十三日より十九日まで 神幸祭」「六月三十日 大祓」「七月三十日 明治天皇祭遥拝」「九月十四日 前斎式」「九月十五日 例祭」「九月秋分ノ日 秋季皇靈祭遥拝」「十月十七日 神嘗祭遥拝」「十一月三日 明治節祭」「十一月十五日 七五三祝」「十一月廿五日 新嘗祭」「十二月二十日二十一日 年の市」「十二月卅一日 大祓」「十二月卅一日 除夜祭△」である。

昭和六〇年発行の『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』には、「神田神社年中行事」として、神楽始めの儀、神楽始めに参列の氏子総代、節分祭に参進する氏子総代、節分祭豆撒風景、将門塚例祭・長銀講堂、大祓形代流し御座船、大國祭の賑い、秋大祭に参列する氏子総代の八枚の写真が掲載されている(7)。

『神田明神史考』には、平成三(一九九一)年の神田神社の年中行事として、一月一日・初詣、一月八日・神楽始め、一月一四日・大國まつり、一月一五日・寒中がまん大会(寒中禊錬成)、二月三日・節分祭(豆撒き式)、四月三日・春大祭(祈年祭)、四月五日・健育祭(新入学児童参拝)、五月一五日・献茶式(表千家家元奉仕)、五月一五日・例大祭、七月三日・大祓形代流却神事(東京湾浦安沖)、九月彼岸中・将門塚塚前祭、九月彼岸中・将門塚例祭(長銀講堂)、十一月一五日・七五三詣、十一月二五日・秋大祭(新嘗祭)が挙げられている。また、結婚式についても「明神会館より参進」として、写真入りで紹介している(8)。

『神田神社 平成の御造替事業竣成報告書』には、平成一一年の年間行事(予定)として、元旦・初詣、一月八日・神楽始、一月一

四日・だいこく祭、一月一四日・寒中がまん大会、二月三日・節分祭、四月三日・春大祭（祈年祭）、四月五日・健育祭（新入学児童参拝）、五月一八日・例大祭、五月一九日・献茶祭（表千家家元奉仕）、六月三〇日・夏越大祓式、七月二日・大祓形代流却神事、七月七日・七夕祭、九月彼岸中・将門塚例祭、十一月五日・七五三詣、十一月二十五日・秋大祭（新嘗祭）が挙げられている⁹⁾。

神田祭公式ガイドブック『平成二十七年神田祭』には、「神田明神の一年」として、一月一日・初詣・歳旦祭、一月初旬・仕事始め参拝、一月中旬・だいこく祭・寒中禊（がまん会）・四條流包丁儀式・祈願串成就祭、一月下旬・神楽始（太々神楽）、二月三日・節分祭・豆まき式、二月一日・紀元祭、二月下旬・末社・浦安稻荷神社例祭、三月上旬・末社・末廣稻荷神社例祭、四月初旬・崇敬会春祭り・新入学児童健育祭・祖霊社春季例祭（氏子英霊慰霊祭）、四月三日・祈年祭（春大祭）、五月一日・合祀殿春例祭、五月一四日・献茶式（表千家家元奉仕）・明神能（金剛流）、五月十五日・例大祭、五月中旬・神田祭（二年に一度）、六月初旬・京都神田明神例祭、六月初旬・撰社・大伝馬町八雲神社例祭、六月初旬・撰社・小舟町八雲神社例祭、六月三〇日・夏越大祓式、七月初旬・大祓形代流却神事、七月七日・七夕祭、九月彼岸中・将門塚例祭、一〇月一日・合祀殿秋例祭、一〇月中旬・末社・金刀比羅神社例祭、一〇月中旬・末社・三宿稻荷神社例祭、一月中旬・末社・籠祖神社例祭、一月中旬・七五三詣祝祭、十一月二十五日・新嘗祭（秋大祭）、十二月一日・煤納奉告祭、十二月三日・天長祭、二月下旬・除災大祓式、二月三十一日・師走大祓式・除夜祭が挙げられている¹⁰⁾。

ここでは、平成三年、平成一年、平成二七年の神田神社の年中行事を比較すると、平成三年と平成一年では、末社・撰社の例祭など記載されていない行事の存在が想定されるもの、平成一年には七月七日の七夕祭が加わり、平成一年から平成二七年の間に、一月初旬の仕事始め参拝、四月上旬の崇敬会春まつり、五月一四日の明神能（金剛流）など、年間を通じた新たな行事が加わったことが窺える。また、平成三年と平成一年では、一月八日であった神楽始が、平成二七年では一月下旬になるなど、固定されていた祭日が初旬・上旬・中旬・下旬などと、毎年、日曜・祝祭日の日付に祭日に対応させながら、多くの参拝者を集ってもらおうと工夫していることがわかる。その一方で、四月三日の祈年祭、五月一五日の例大祭、十一月二十五日の新嘗祭（秋大祭）の祭日は、動かされていない。これらの大祭の日を中心に、氏子町会の人たちは神社の祭典に参列している。例えば、平成二六年の新嘗祭（秋大祭）では、翌・平成二七年の神田祭の日程等の予定が氏子町会に報告された。ただし、初詣を含め、仕事始めの企業参拝や崇敬会の春祭りなど、氏子

以外の崇敬者や個人、氏子の企業にも開かれた行事も多く催されていることがわかる。平成二七年の仕事始めの日には一三五〇社の企業が神田神社へ参拝した。

神田神社の神職によれば、崇敬会春祭りのポスター配り、大祓式、七夕祭、七五三、秋大祭（新嘗祭）などにおいて、神田神社の氏子町会の関係者（町会関係者には崇敬者もいる）と協力して、広報等をしてもらい、これらの行事を実施しているという。

（二）氏子町会の年中行事との関わり

次に、神田祭以外の町会の年中行事と神田神社の神職の関わりについてみておきたい。町会の年中行事については、第三章第四節でみているが、神田神社の神職との関わりから整理しておきたい。

〔初詣〕

多くの町会で行っているのが、新年の神田神社への初詣（昇殿参拝）である。平成二五（二〇一三）年神田神社に宮入を果した町会と参考事例二町会を含む五四町会と二連合（錦連合・小川町連合）を対象とした実態調査（インタビュー調査）の過程で判明した町会で初詣を行っているところは以下の通りである。

多町二丁目町会（元日、六五人参加）、神田淡路町二丁目町会（一月二日一〇時半・三〇人参加）、須田町一丁目南部町会（元日・一五世帯参加）、須田町北部町会（元旦〇時半集合・一五人参加）、宮本町会（一月二日・三〇〇四〇人参加、明神会館で新年会）、神臺會（一月二日・一七〇一人参加）、神田末廣町会（一月二日一〇時半・一五人）、岩本町三丁目町会（元日・三〇人）、東神田町会（三〇人参加）、東神田豊島町会（子どもを含む三〇人参加）、神田佐久二平河町会（元日に実施）、神田佐久間町三丁目町会（一月第三土曜に新年会と一緒に実施・約二〇人参加）、神田佐久間町四丁目町会（元日一五時・一二〇三人参加）、神田和泉町町会（一月三日）、人形町二丁目三之部町会（二〇人）、東日本橋三丁目橋町会（役員二〇〇三人参加）などである。

少なくとも一八町会が町会で神田神社への初詣（昇殿参拝）を実施している。昇殿参拝の際には社殿や撤下所などで神職と町会関係

者が挨拶を交わしている。また、町会では新年会を開催する町会が複数あるが、神田中央連合を担当する神職が担当町会の新年会に顔を出しているという。昇殿参拝の際に受けた祈禱札や神供は新年会の席などで、町会員に配られる。

〔その他の行事での関わり〕

二月には、小川町連合で祀る幸徳稲荷神社の節分祭や秋葉原東部地区連合で祀る草分稲荷神社の初午祭などを、氏子町会の稲荷神社の祭りを斎主として執行するのも神田神社の神職である。

四月の健育祭には、東日本橋二丁目町会の子どもが神田神社へ参拝する。平成二七（二〇一五）年は四月一日に神田神社へ参拝し、町会の子ども一二人が参加して行われた。神社が行う健育祭とは別に、三月中に町会の小中学校の卒業祝いと入学祝いを昇殿参拝をして実施する神保町一丁目町会もある。

第三章第三節でみたように、神田祭の蔭祭に、史蹟将門塚保存会大神輿の発御祭、還御祭などの神事を行い、また町会の神輿の巡幸を行う神田和泉町会の大・中・小神輿、東日本橋二丁目町会の子ども神輿に御霊入れ・御霊返し神事を行うのも神田神社の神職である。また、宮本町会の子ども神輿の巡幸に際しても、神田神社拝殿前で、神事の内容や意味の解説を付けて御霊入れの神事が行われた。

一二月の神田神社の「お札配り」では、氏子町会の崇敬会員を神田神社の担当神職らが回る。町会長（崇敬会員）が町内の会員分をまとめて受け取ることもある。

また、第三章第四節でみたように、須田町中部町会を担当する神職が、二月の豊潤稲荷神社の初午祭の祭典を行い、直会の席で町会の人たちと懇親の場を持ち、五月下旬に行われた須田町中部町会六〇周年記念式典に参加し、九月の町会の旅行に参加するなど、町会との関わりを大切にしている姿をみる事ができた。

以上のように、ここで取り上げたものはごく一部であるが、神田神社の神職と氏子町会の人たちは、神田祭以外の様々な行事において、交流する機会を持っていることがわかる。

(三) 氏子町会の神田神社のイメージ

こうした年間を通じて町会との関わりを大事にする神職の存在は各町会にどのような影響を与えているのだろうか。ここで一つの参考になるデータがある。

平成二五(二〇一三)年神田神社に宮入を果した町会と参考事例二町会を含む五四町会と二連合(錦連合・小川町連合)を対象とした実態調査(インタビュー調査)において、各町会の町会長をはじめとした町会関係者に「神田神社は何の神様を祀る、どのような神社か」を伺い、神田神社のイメージについて回答してもらった。

それによると、回答の多い順に、「平将門」(三四町会)、「氏神様」(一八町会)、「商売(繁盛)の神様」(一一町会)、「だいきく様」(九町会)、「えびす様」(六町会)、「少彦名命」(四町会)、「神様は三人」(四町会)、「大国主命」(三町会)、「大己貴命」(三町会)、「江戸の総鎮守」(三町会)などの回答があった。平将門のイメージが依然として強いことがわかるが、「氏神様」としての性格と「商売の神様」の性格を併せ持ったイメージが形成されていることがわかる。

このうち、平将門に関わるもので、具体的なイメージを言語化しているものに、「平将門様。神田の人間は成田山にはいかない」(司一町会)、「ちゃんとお祀りしないと将門さんは怖い」(淡路町一丁目町会)、「将門がいるとはいってはいけない」(外神田四丁目代会)などがある。また、氏神様に関わるもので具体的なイメージを言語化しているものに、「子どもの頃からの氏神。心休まる氏神様」(内神田旭町町会)、「氏神。氏子と氏神の距離間は変っていない」(栄町会)、「子どもの頃からの氏神」(鍛冶町一丁目町会)、「みんな氏子だと思っている。いい意味でプライドを持ってる」(神田佐久間町四丁目町会)、「地域を守ってくれる神様」(外神田三丁目金澤町会)がある。

このほか、「子どもが生まれるとお祓いを受けに行ったり、商売繁盛の祈願にも行く、身近な神社」(司町二丁目町会)、「子どもの頃から神社でセミを取ったり、親しみのある神社」(神田淡路町二丁目町会)、「神田神社はステータス。祭礼も大きいし、氏子町会の規模も大きい。神田祭は町神輿の祭り。一つ一つの町会が競い合う祭り。そうした求心力を持つ神田神社はボリュームも大きい。非常にステータスを感じる」(須田町北部町会)、「最初の頃はさみしかったが、ずいぶん隆盛してきた。お祭りもここ一五年くらいで盛んになっ

てきている」（神臺會）、「どの神様をお祀りしているかというより、神田神社そのものが持っているエネルギーが大きい」（岩本町三丁目町会）、「住民のすべての心の支え」（神田大和町会）、「明神様は心の拠り所。善意の象徴」（東神田町会）、「神田神社は下町につながる神社。商売繁盛に関連していて親しみやすい」（東神田豊島町会）、「神田神社は庶民に開かれた神社」（室町一丁目会）、「あそこに行くくと楽しめる神社。資料館もあり、面白い行事もあり親しめる」（東日本橋三丁目橋町会）などの、いずれも肯定的なイメージを回答している。

特に、「親しみやすい」「楽しめる神社」といったイメージの形成には、各氏子町会を担当する神田神社の神職との関係の深さも窺える。例えば、東日本橋三丁目橋町会や室町一丁目会の神田神社への神輿宮入は担当神職との個人的なつながりも働き、実現に至っている。

三、神田祭の変遷にみる神職と賑わいの場の形成

ここでは、千代田区のコミュニティ新聞である『週刊千代田』の記事を中心に、平成四（一九九二）年の松平誠の調査前後から現在に至るまでの神田祭の変遷を神職と賑わいの観点からみておきたい。ただし、一九七〇年代後半にも一九九〇年代（平成の初め）の動きにつながる萌芽があるため、まずこの動きから押えておきたい。

（一）一九七〇年代後半の動き

昭和五二（一九七七）年では、五月一二日に献茶式、五月一三日に宵宮、五月一四日に神幸祭、一四日午後から、歩行者天国で神輿連合渡御（中央通りに一〇〇基の神輿を集めたといわれるもの）が行われた^{（11）}。

昭和五五年は蔭祭の年であった。しかし、五月一〇日（土）の午後に、「神祭会」の若い衆が神輿を担いで秋葉原電気街を練った。五月一日（日）には、神田和泉町町会では神輿の巡幸、内神田旭町町会では子ども神輿の巡幸が行われた。神田明神境内では、新しく

できた神輿庫で神田祭の古い写真の展示、神楽殿では奉納演芸などの祭礼行事を五月一〇日〜一五日まで実施した⁽¹²⁾。この年、「明神稚児太鼓」が結成された。明神稚児太鼓が形成されるきっかけは、神田神社の氏子総代の一人がテレビで福井県剣神社の「明神太鼓」という名前の子ども太鼓をみて、強く心に焼きついた。「こんな可愛らしい子ども太鼓が神田明神にできないものか」と、当時神田神社の禰宜であった大鳥居信史氏（現・神田神社宮司）に相談した。大鳥居氏は早速、剣神社に見学に行き、明神太鼓を八ミリビデオにおさめて総代会で映写会を催した。そして、明神将門ばやし会が子ども太鼓の面倒を見ることになり、明神将門太鼓保存会による神田明神稚児太鼓が結成されることとなった⁽¹³⁾。

（二）一九九〇年代（平成に入ってから）の動き

次に、平成に入ってから動きをみておきたい。

平成二（一九九〇）年の神田祭では、神幸祭に復活した諫鼓（かんこ）山車、旧神田市場前から稚児行列が参加した。そして、その後ろに羽衣山車（岩本町二丁目松枝町会）が加わった。また、神輿宮入では須田町中部町会と多町二丁目町会の二基の女神輿が宮入を果たした⁽¹⁴⁾。

平成四年の神田祭では、茨城県から神田祭の行列を見て創始したという「町田火消し行列」が、五月九日（土）の神幸祭（一八時頃）から開催された旧神田市場跡の「おまつり広場」のイベントから）に飛脚ら一二〇人が参加した⁽¹⁵⁾。神輿宮入では、東神田町会の神輿（昭和二九年製作の神輿）が初の宮入を果たした⁽¹⁶⁾。

平成六年の神田祭では、担ぎ手の定員一六〇〇人である神田市場千貫神輿が七年振りの渡御を行った⁽¹⁷⁾。これに、茨城県岩井市から参加した将門武者行列が、おまつり広場付近で合流した⁽¹⁸⁾。また、企業協力によるクライスデールワゴンパレードという馬車行列に加え、日本航空株式会社のフライトアテンダントが神田祭に参加した。さらに、株式会社博報堂をはじめ各社の協力で「神田祭ウォークラリー」の企画も加わった。これによって、清水祥彦氏は「企業の参加による祭礼活性化はさらに進んだ」としている⁽¹⁹⁾。

平成七年の七月一三日〜一六日に行われた「靖国みたま祭り」には、神田靖国講が三基の神輿（司一町会、神田旅籠町会、鍛冶町二

丁目町会)を出し、麴町区と連合渡御を実施した⁽²⁰⁾。この巡幸には、外神田連合の現・神臺會会長のT・N氏が副委員長として参加した。

平成八年、氏子町会の一つの神田同朋町会が神輿を新調した。同年三月九日に神田神社社殿前で新調神輿を披露し、明神会館地下ホールで披露宴を催した。この席で神田神社宮司の大鳥居信史氏は、「お膝元の町会で二五年ぶりのお神輿の完成。神田祭り近し、の实感がする。大祭に一層の華を添えるものと思う」と祝辞を述べた⁽²¹⁾。

平成八年の神田祭には、遠州大須賀三熊野神社の祢里二基・二五〇人が里帰りを果たした。祢里二基は、五月一日(土)の神幸祭に後ろに加わった⁽²²⁾。同じ日の一七時半から、秋葉原駅前(神田神社間を「おまつり広場」(歩行者天国)として開放し、縁日を開催した。翌一二日(日)には、宮入を済ませた外神田地区の一一基の神輿が歩行者天国に繰り出した。そこに四尺の大神輿(約二〇〇〇人の若衆)、三熊野神社の祢里二基(二五〇人)も合流した⁽²³⁾。

平成八年の一二月六日に「神田祭の會」が結成された。「神田祭の會」は、「今後の神田祭りを一層盛り上げるため、情報交換作りができるネット・ワークを作りたい」との思いから、一二月六日一八時に明神会館へ六四人参集した。神田神社宮司の大鳥居信史氏、権禰宜二人も参加した。この會が結成された背景には、平成八年の次の大祭(神田祭)が、神田神社の本殿などの大改修(平成の御造替事業)によって三年後の平成一一年になることも影響したとみられる⁽²⁴⁾。

平成九年、平成の御造替事業(平成七年(平成一一年五月)の一環で齋館(一階が多目的祭祀殿、二階・三階が資料展示室と收藏庫〔現・神田明神資料館〕)を竣工した。齋館の二階展示室に土人形の神幸祭の行列を展示した⁽²⁵⁾。

同年、一二月四日から、神田神社で江戸を題材としたカルチャー講座「明神塾」を明神会館を会場として開講した⁽²⁶⁾。

平成一〇年、明神齋館落成記念に神田・日本橋の神輿三基の渡御を行う「平成一〇年神田神社蔭祭り神輿渡御提案書」を神田神社宮司・大鳥居信史氏が作成した。しかし、実現には至らなかった。その代わりに同年の五月には、神田和泉町町会(町内渡御)・岩本町三丁目町会(岩本町・東神田連合八町・五尺三寸の神輿、宮出・宮入)・内神田旭町町会(町内渡御、近隣八町会を巡幸)が神輿の巡幸を行った⁽²⁷⁾。

平成十一年は三年振りに本祭（神田祭）が行われた。この年、四尺の神社神輿（宮神輿）が水天宮の力添えにより奉納された（28）。四月一六日（金）の一八〜二〇時には、神田神社で女性のための「お祭り入門講座」を開催した（29）。

同年五月一五日・一六日の神田祭には、遠州大須賀町の祢里二基が参加した。一二時半過ぎ、「おまつり広場」（秋葉原中央通り・歩行者天国）の式典（神田神社宮司、千代田区長、大須賀町町長らが街宣車の上から挨拶）、旧神田市場の千貫神輿宮入と築地魚河岸会・水神社の大神輿が宮入を実施し、宮入後、「おまつり広場」へ向った。延べ一〇〇万人を超える人出となった（30）。

同年一月一二日に、天皇陛下御即位一〇年を祝う国民祝賀式典が皇居前広場で行われた。その第一部の「日本の祭り」に神田神社の神社神輿の渡御を決定した（31）。

平成一二年、サンフランシスコ桜祭に神田祭が参加した（32）。

平成一三年、附祭として、江戸時代に流行した「曳き物」を巨大な赤ちゃんに見立てて登場させ、インターネットや各種ITを駆使した「KIXプロジェクト」を実施した。また、「お祭り入門講座」の開催や大江戸ダンスという少年少女を中心とする踊りチームの参加も行われた（33）。

平成一四年、皇太子ご夫妻に敬宮愛子さまが誕生したことを記念して、神田祭で特大神輿を担いだ。特大神輿は、高さ約二m四〇cm、極彩色の鳳凰が載り、重さは少なくとも一トンを超える。約一五〇人が交代で担いでも息が切れるという。五月一二日の一三時、日本橋三越前を出発して中央通りを北上し、一七時に神田神社へ到着する。また、神田神社境内には、小型の「山車ロボット」（神田錦町の東京電機大学の学生の制作）が七台置かれた。山車ロボットはリモコンで遠隔操作できたという（34）。

（三）江戸開府四〇〇年以降の動き

平成一五（二〇〇三）年、江戸開府四〇〇年を記念して、東日本橋二丁目町会が船渡御による神輿宮入を行い、東京藝術大学学生が制作した四台の曳き物、底抜け屋台の演奏が復活した。また、江戸天下祭フォーラムの開催、金剛流の遠藤勝實師範による明神能が初めて開催された（35）。

この年、大手・丸の内町会（大手町・丸の内地区）の神田祭への参加が開始された。第三章第三節でみたように、三井物産の社員二・四人が史蹟将門塚保存会の参与法人として神田祭を盛り上げようと、神田神社から借りた神輿で宮入した。その後、社会貢献活動の一環として独自に担げる神輿を作ろうという機運が高まり、史蹟将門塚保存会のメンバーで大神輿を新調した。

平成一六年、蔭祭の年であったが、神社大神輿を、氏子区域を三地区に分けて輪番で神輿を巡幸した⁽³⁶⁾。

平成一七年、『神田明神祭礼絵巻』に描かれた「大鯰と要石」の曳き物を二一五年ぶりに復活させるとともに、三越やNTTコミュニケーションズなどの企業協力による曳き物も初めて参加した⁽³⁷⁾。また、史蹟将門塚保存会大神輿が宮入を果たした。史蹟将門塚保存会の参与法人である三菱地所・三井物産・三井生命保険・物産不動産・三菱東京UFJ銀行・竹中工務店・プロミス・丸紅・パレスホテル・三菱不動産の一〇社で神輿を担いだ⁽³⁸⁾。そして、将門公ゆかりの相馬野馬追騎馬武者の特別参加を実施し、「インターネットTV神田祭チャンネル」（神田祭・ch）という「情報化社会に対応した神賑行事」も行われた⁽³⁹⁾。

平成一八年、八月二日の新潟県長岡市の長岡まつりで、七・一三水害や中越地震からの復興を願い、神田明神神輿を神田神社の氏子有志四〇人と長岡市民ら約一二〇人が担いだ⁽⁴⁰⁾。

平成一九年、神田祭復元プロジェクト（文化資源学会創立五周年記念事業）を春に立ち上げた。その一環で、五月一二日に日本橋三越前から神田神社まで「大江山凱陣」の練物を出し、約六〇人が参加した。

平成二一年の五月九日の神田祭では、附祭の行列の規模をさらに大きくして一〇五人の文化資源学会の会員と神田祭へ参加した。「大江山凱陣」のほか、唐子や仮装人物など新たなキャラクターが加わり、東京藝術大学学生による鳥天狗、白象と一緒に練り歩いた。

平成二三年、東日本大震災の影響により、神田祭は中止となった。この年の一〇月三〇日に、「東日本大震災復興鎮祭祈願神輿渡御祭」を執行した。

平成二五年の神田祭では、附祭に「花咲か爺さん」の曳き物が新たに参加した。この年は「桃太郎」の山車（岩本町二丁目岩井会）の神田神社への展示を実施した。

平成二六年、神田神社が創建されて以来、初めてとなる女性神職が誕生した。

平成二七年の神田祭（御遷座四〇〇年奉祝大祭）では、神田祭と「ラブライブ！」とのコラボレーションが行われ、多くの若者で神田神社境内が賑わった。また、「浦島太郎」の曳き物が新たに加わった。

（四）神田神社神職の言説

神田神社・権宮司の清水祥彦氏は、「現代の神田祭について」という小論の中で、「昭和六二年に就任した大鳥居信史宮司のもとでは、神幸祭に附祭を積極的に招聘して、ここに活気がふたたび江戸、東京の町に戻ってきたのである」とした上で、平成二（一九九〇）年から平成一七年までの神田祭の変遷を概観し、「このように現代の神田祭は、氏子・市民・企業はもちろんのこと、地方都市の参加やIT技術導入にも積極的に取り組んでいる。天下祭としての豊かな祭礼文化の復権を目指し、時代や流行を意識した祭礼活性化への努力が不断に実施されているのである（41）」と締めくくっている。

まさに、清水氏の指摘のように、平成一五年の江戸開府四〇〇年の記念行事がなされて以降、江戸時代の神田祭の祭礼文化を見直し、曳き物（山車）、祭りに関わる芸能などの再評価がなされた。文化資源学会などを巻き込んだ附祭の復活を、宮司である大鳥居信史氏のもと、神田神社が主体となって行ってきたことがわかる。その延長線上に、「ラブライブ！」と神田祭のコラボレーションがあるのでなかろうか。

また、神田神社宮司の大鳥居信史氏は、企業の関わりについて、「企業が求める神社の役割とは？（42）」の中で、「神田明神は千代田区・中央区といった日本有数のオフィス街が氏子地域にあります。特に大手町などの地域には住民がほとんどいません。そこで神田明神では二十年ほど前から、企業の氏神意識の定着を図るよう促してまいりました」と述べている。こうした働きかけによって、それまでは企業内神社への参拝はあったが、企業が正月に参拝する風習はなかった。現在では正月に六〇〇〇社の企業が参拝するようになり、都内全体でも企業参拝が増えてきたとしている。そして、大手町・丸の内界隈の企業では、将門塚に尻を向けて席配置をしないなど、篤い信仰があり、三井物産をはじめとする大手企業では、将門塚保存会の役員として、参与法人役員会を結成し、将門塚への信仰が現在でも続いているとしている。その端的な例が神田祭における神輿で、神社のお祭りは基本的に、氏子地域住民が中心となって行

うが、住民がほとんどいない大手町・丸の内地域では、企業の協力を仰いでいる。将門塚保存会の参与法人役員会から平将門公の神輿が奉納され、平成二五年の神田祭では約一三〇〇人も会社員が参加して神輿を担いだことを紹介している。そして、最後に「神田祭でお神輿が出るのは隔年なのですが、大手町・丸の内では毎年担がれています。隣接していても日頃はほとんど機会がない企業の社員同士や地域の方々が一体となって打ち解ける絶好の機会となり、ますます盛り上がりを見せております。神社への信仰は今も変わりなく続いており、人と人をつなぐ場所になっているのです」と締めくくっている。

ここからは、住民が少なくなった氏子地域で企業との関わりを重視する姿勢が窺える。大鳥居信史氏の企業に対する神社のあり方が、正月の企業参拝や神田祭・蔭祭における史蹟将門塚保存会大神輿にも大きく影響していることがわかる。

こうした大鳥居氏の附祭の復活や企業との関係性を重視する取り組みなど、神田神社と神田祭に新たな賑わい作り出そうとする姿勢は、神田神社の他の神職の言説からもみえてくる。例えば、神田神社権禰宜の岸川雅範氏は、平成二七年の神田祭の公式ガイドブックに、「ラブライブ！」のポスターが掲載されたことについて、週刊ダイヤモンドの取材に対して、「一〇〇年後に、このガイドブックが現在をうかがい知る貴重な歴史的資料になっているかもしれない⁽⁴³⁾」と答えている。また、権宮司の清水祥彦氏は、「昔の姿を墨守するだけでは神社は輝きを取り戻せない⁽⁴⁴⁾」というインタビュー記事の中で、神社界が厳しい状況に置かれていることを述べた上で、「なぜ、神田神社では人を集めることができるのか。それは宮司の強いリーダーシップの下、私たち皆が現在の神社が置かれた状況に対する強い危機感を共有しているからです。常に時代の変化を敏感に察しながら柔軟に対応していく。こうした姿勢なくして神社が生き残っていくのは難しいでしょう」としながら、神田神社は秋葉原という流行の発信地の氏神で、サブカルチャーと神社の歴史・伝統を擦り合わせながら新しいあり方を模索しているとしている。そして、こうしたあり方に対して商業主義が行き過ぎていたりといった批判もあるが、「昔の姿を墨守するだけでは、神社が輝きを取り戻すことは難しい。時代の流れに柔軟に対応しながら新しい物語をつくっていく。この逆境を新しい文化を築いていく機会にできればと考えています」と締めくくっている。

こうした歴史・伝統を踏まえながらも、新しい物語・文化を形成していくという考え方があればこそ、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の展示や、紺屋町南町会のダンボール製神輿の神田神社への宮入が実現したのではなからうか。また、少し年代は遡り、昭和

五二（一九七七）年に誕生したとすると、神田神社宮司が大鳥居吾朗氏⁽⁴⁵⁾のときであるが、女性だけで担ぐ須田町中部町会の「元祖女みこし」の宮入を神田神社が受け入れたのではなからうか。そうした神田神社とその神職の姿勢も影響して、誕生・復活した祭礼の象徴が都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、新たな町内共同の形成につながったのではないかと考える。

まとめ

このように、現代の神田祭の拡大には、社会変動に対する町会の「可塑性」や「可逆性」のみならず、神田神社が祭礼の象徴（神輿や山車など）の創出や活用を積極的に推進してきたことが影響しているといえる。特に、神田神社宮司・大鳥居信史氏の神田祭を盛り上げようとする強い意志が都市祝祭の形成に大きく影響していることが窺われる。そうした神田神社宮司の思いに呼応するかのように、「おまつり広場」（秋葉原中央通り）における連合渡御の開始にみられるように、氏子の側の個人の活躍が新たな賑わいの創出に大きな役割を果たしている。

神田神社宮司の意志は各神職にも受け継がれ、文化資源学会と協働で行う附け祭の「復興」という新たな賑わいの形成や町会の神輿宮入の拡大にもつながっているのではなからうか。そして、岩本町二丁目岩井会の事例にみられるように、平成二五（二〇一三）年の「桃太郎」山車の神田神社への展示を通じた二〇年振りの町会の神酒所の設置、平成二七年の町内渡御の復活など、町会の祭礼の象徴を神田神社へ受け入れることを通じて地域社会が再活性化しているのである。つまり、神田神社とその神職による都市祝祭の形成と町会の可塑性や可逆性が呼応し、神田祭が拡大していることが窺えるのである。

註

(1) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年、六一頁。

- (2) 石井研士『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』、新曜社、平成六年、二七四頁。
- (3) 前掲石井『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』二七四頁。
- (4) 『平成二十七年神田祭』神田神社、平成二十七年に記載された神職数に基づく。
- (5) 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、平成四年、三六四〜三七一頁。
- (6) 『神田明神誌』神田明神誌刊行会、昭和六年、七三〜七四頁。
- (7) 『奉祝天皇陛下御在位六十年 神幸祭写真集 神田明神』神田神社社務所、昭和六〇年。
- (8) 前掲『神田明神史考』三七二〜三七六頁。
- (9) 『神田神社 平成の御造替事業竣成報告書』神田神社平成の御造替事業奉賛会、平成一二年、七六頁。
- (10) 前掲『平成二十七年神田祭』七五〜七七頁。
- (11) 『週刊千代田』昭和五二年三月八日付。
- (12) 『週刊千代田』昭和五五年五月一五日付。
- (13) 『週刊千代田』昭和五五年五月二二日付。
- (14) 『週刊千代田』平成二年五月一五日付。
- (15) 『週刊千代田』平成四年四月二二日付。
- (16) 『週刊千代田』平成四年五月一〇日付。
- (17) 『週刊千代田』平成六年四月一五日付。
- (18) 『週刊千代田』平成六年五月一五日付。
- (19) 清水祥彦「現代の神田祭について」都市と祭礼研究会編『神田明神選書 1 天下祭読本』雄山閣、平成一九年、一九四頁。
- (20) 『週刊千代田』平成七年三月二二日付、同年七月一五日付。
- (21) 『週刊千代田』平成八年三月一五日付。
- (22) 『週刊千代田』平成八年一月一五日付。
- (23) 『週刊千代田』平成八年四月八日付。
- (24) 『週刊千代田』平成九年二月一五日付。
- (25) 『週刊千代田』平成九年一月二九日付。
- (26) 『朝日新聞』朝刊、東京版、平成九年一二月三日付。
- (27) 『週刊千代田』平成一〇年四月二九日付、同五月一五日付。
- (28) 『週刊千代田』平成一一年一月二九日付。
- (29) 『週刊千代田』平成一一年四月二九日付。

- (30) 『週刊千代田』平成十一年五月十五日付。
- (31) 『週刊千代田』平成十一年一月一日付。
- (32) 『週刊千代田』平成十二年一月十五日付。
- (33) 前掲清水「現代の神田祭について」一九四頁。
- (34) 『朝日新聞』朝刊、東京版、平成十四年五月二日付。
- (35) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
- (36) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
- (37) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
- (38) 秋野淳一「観客のみえない都市の祭り―神田祭・蔭祭、将門塚保存会大神輿の巡幸―」『都市民俗研究』第一九号、都市民俗学研究会、平成二十六年。
- (39) 前掲清水「現代の神田祭について」一九五頁。
- (40) 『朝日新聞』朝刊、平成十八年八月三日付。
- (41) 前掲清水「現代の神田祭について」一九四〜一九五頁。
- (42) 大鳥居信史「特別インタビュ― 企業が求める神社の役割とは？」『別冊宝島2082号 日本の神様のすべて』宝島社、平成二十五年、八二〜八三頁。
- (43) 『週刊ダイヤモンド』二〇一六年四月一六日号 神社の迷宮』ダイヤモンド社、平成二十八年、四四頁。
- (44) 前掲『週刊ダイヤモンド』二〇一六年四月一六日号 神社の迷宮』五八頁。
- (45) 大鳥居吾朗氏は、神田神社宮司に昭和二十二年六月に就任し、昭和五十七年十二月に退任している（前掲『神田明神史考』三二〇頁）。

第二節 町会の個人の活躍と神田祭

本節では、町会の個人の活躍と神田祭の関係について、神輿や山車などの祭礼の象徴の誕生や、連合渡御などの祭礼における賑わいの形成に関わる人物の語りをベースに、その個人の生活史を加味しながら、考察を行っていきたい。分析対象とするのは、松平誠による先行研究のある須田町中部町会の「元祖女みこし」、秋葉原中央通り「おまつり広場」の形成と四尺の大神輿誕生、ダンボール神輿の誕生に関わった人たちである。祭礼の象徴や祝祭の場が誕生または形成された年代順にみていきたい。

一、「元祖女みこし」の誕生と個人

まず、昭和五二（一九七七）年に誕生したという須田町中部町会の「元祖女みこし」についてみていきたい。祭礼の象徴の誕生と個人の関係を解明するために、誕生当時から現在に至るまで町内に居住し、神田祭をはじめとした町会活動に参加する三人の個人生活史に注目する。

生活史（ライフヒストリー）を対象とした研究は、社会学では、中野卓の『口述の生活史⁽¹⁾』、有末賢の『生活史宣言 ライフヒストリーの社会学⁽²⁾』など、多くの研究蓄積がある。また、神田祭においては、既に須田町中部町会を対象とした松平誠の研究がある。

松平誠は、「神田と祭りに生きる人々―神田祭女御輿町内の古老談―⁽³⁾」と日本生活学会の『生活学1992』に所収された「神田の地上げと生活集団⁽⁴⁾」で合計六人の須田町中部町会に住む人たちの個人の生活史を明らかにしている。

松平が「神田と祭りに生きる人々」で対象としたのは、K・O氏（大正一〇（一九二二）年生、漬物屋・酒屋）、T・M氏（大正七年生、青物問屋・青物仲買）である。「神田の地上げと生活集団」で対象としたのは、M・S氏（明治四〇（一九〇七）年生、野菜問屋）、G・Y氏（大正二年生、米屋）、K・A氏（大正九年生、喫茶店）、K・S氏（昭和三〇年生、寝具店）である。

ここでは、須田町中部町会に生まれ、現在でも町内に居住する、M・O氏（昭和八年生、町会長）、M・Ok氏（昭和一七年生、町会・

会計担当)、K・Y氏(昭和一〇年生)の三人の生活史と「元祖女みこし」の関係についてみておきたい。

この三人のうち、K・Y氏は松平誠が調査したG・Y氏の長男である。K・Y氏の事例からは、松平の調査結果の検証と、松平の調査後の変化を追うことが可能である⁽⁵⁾。そして、K・Y氏を含め、松平がインタビューを行わなかった町会関係者の聞き取り内容を加味し、個人の生活史から「元祖女みこし」誕生の背景とその後の変化を明らかにしたい。

(1) M・O氏

M・O氏は、平成二八(二〇一六)年現在、須田町中部町会の町会長である。神田祭の祭典委員を務め、平成二七年の神田祭には二五万円を奉納した。昭和八(一九三三)年に須田町中部町会に生まれ、銀行員を経て、町会長に就任し現在に至っている。町内にOビルを所有する。

〔M・O氏の家の変遷〕

O家は、宮内省お抱えの弁護士の家で、元々は栃木の出であった。昔のO家は三階建てのマンサート型といわれるモダンな建物であった。三階建の二階には茶室があり、M・O氏の母K・O氏が茶道や香を教え、三味線もやっていた。三階には地方から東京に出てきた人を住まわせたこともあったという。

母のK・O氏は町会の婦人部長を務め、社会福祉協議会に携わっていた関係で里子を預かっていた。M・O氏の妻Mt・O氏が嫁いだ頃も里子を預かっていた、学校の弁当も作るなど実子と変わらないように育てたという。

昭和三二(一九五七)年か三三年頃、町内の別の場所から現在地に移転した。当時は三階建てのアパートだったという。移転後、妻のMt・O氏は「ピアノを弾いていると下の事務所に響く」ため、ピアノの先生を辞めたという。当時、三味線の音は町内の他の家からよく聞こえてきたがピアノの音は珍しかったという。

昭和四七年か四八年頃、建て直しをして四階建てのOビルにした。ビルの三・四階に居住した。Oビルになってからは、預かっていた

た子が大きくなったこともあり、里子は預からなくなった。

神田祭では、「元祖女みこし」の町内渡御の際に、神輿がOビル前に立ち寄る。M・O氏が木を入れ（拍子木と叩い）て、神輿を下ろす。

〔女神輿誕生の経緯〕

「神輿の台座が一尺三寸で小振りだから、子どもに担がせるには重すぎる。中学生か高校生ぐらいがいいが、そのくらいの子どもはなかなか集まらない。しようがなくて連合渡御の時に大小集めた子どもに担がせたこともあった。ところが、淡路町の交差点辺りまで来るとへたりこんじゃう。それでしようがないもんだから大人がみんな棒を少し持ってやって、それで宮入した経緯もある。それから、女性に担がせてみたらどうかという発想があつて、女性に担がせて良かったから女神輿に発展していった。うちの町会の神輿は、子どもには大きすぎるし、大人には小さすぎる。じゃあ、女の人に担がせてみようということで、昭和五二年から始めた。最初は、町内の婦人部だけで担いでいたんだけど、人が集まらず、それだけでは担げないから、公募するようになった」という。

〔神酒所の場所〕

Nさんが町会長の頃はNさんの店舗の端っこに神酒所を作ったことがある。それから、籠島のところが空地になったときに小山弓具の脇の所に作ったことだつてある。戦後すぐのとき、Eの軒先の真裏のところに神酒所を作ったこともあった。それから、この万二の隣の倉庫に神酒所を作ったこともある。O屋は、ビルになってから五階の部屋に「熊坂長範」（山車人形）を飾った。籠島が空地になったときにお飯屋を建てて「神武天皇」を飾ったこともある。

〔かつての町内の様子〕

一五〇〜一六〇世帯いたと思う。それで、熊倉製本所は、使用人も結構いた。それから、ここの山房商店も使用人が結構いた。昔は

世帯といっても、一軒で一〇人くらいはみんないた。ジャパンタイプも、Iさんのところも、住込みの店員が三人か四人いた。Nさんのところは、従業員が一〇人ぐらいいた。みんな、その当時は住込みの連中ばかり揃っていた。だからこの辺で泥棒なんていうと大変だった。みんなで追っかけて。「泥棒だー！」なんていうと、「わー」とみんな出てくるから、たちまち追っかけまわして、捕まえて、殴る、蹴るだった。だから、その当時はこの辺はおつかなくて泥棒が入らなかった。気が付かれてでかい声だされて、「わー」と出てきてみんなに袋叩きになったという。

昔はね、曳売りがたくさん来ていた。魚屋も来ていた。魚屋もいつの間にか来なくなった。それからアサリ売りも、ほとんど毎日のように来ていた。それで御用聞きで来ていた。朝、御用聞きに来るから酒屋なんかほとんど買いにいったことなかった。魚屋や米屋さんかもみんなね、御用聞きで来た。足りなくなったら電話かければ、すぐ持ってきたから。そういう時代だった。蕎麦屋だって出前を必ずしたから。

昔の須田町中部町会は神田市場の関係者が多かった。戦後も結構いた。ところがバブルでほとんどいなくなった。バブルでどんどんどん地上げされていなくなったという。

(II) M・O k氏

M・O k氏は、町会の会計を担当し、神田祭の祭典委員を務める。平成二七（二〇一五）年の神田祭には二〇万円を奉納した。M・O k氏は、須田町中部町会で昭和一七（一九四二）年に生まれた。公務員を経て（平成八年に退職）、現在はO kビルを所有し、貸しビル業を営んでいる。

〔O k氏の家の変遷〕

明治五（一八七二）年に先祖が埼玉から神田に出て、神田市場の附属商「熊野屋」になった。関東大震災で家が焼け、昭和五（一九三〇）年の区画整理で木造三階建ての家を現在地に建てた。関東大震災で神田市場が秋葉原へ移転し、そのときに、秋葉原の神田市場

内に営業する場所をもらった。しかし、その権利は従業員へ譲り、神田市場関係の仕事から手を引いた。

M・Ok氏は木造三階建ての家ときに生まれる。当時は、一階がたばこ屋と雑貨屋（雑貨の小売）をしていた。三階には一部屋のみがあった。雑貨はうまくいかなくなり、たばこ屋が残った。現在ではたばこ屋も閉じたが、ビル一階には、たばこの自動販売機がある。現在のOkビルは昭和五七年に着工して、昭和五八年に完成した。現在はビルの六階に居住している。

神田祭では、「元祖女みこし」の町内渡御の際に、神輿がOkビル前に立ち寄る。木を入れて、神輿が下ろされる。

〔女神輿誕生の経緯〕

僕の記憶では子どもが担ぐにはちよつと大きすぎる。大人が担ぐにはちよつと小さい。中途半端なので、だったら一番見栄えがするのは女性がいいだろうと、色々考えてそういう風にした。いつからかは全然記憶にないという。

〔神酒所の場所〕

神酒所はずっとO iさんのところ。仕舞屋で結構前が広がったので、お祭りになると必ずO iさんの一階を借りていた。O iさんのところがビルになるというので、「さあどうしよう」となった。それで一時はKさんの前のところを使わせてほしいと借りていた。だからお祭りは神酒所をどこにするかから始まるという。

〔町会や町会の人たちの関わり〕

町会と関わりができたのは親父が亡くなってから。それまではずっと（町会に）親父が出ていた。一世帯から二人出るとはほとんどないので、昭和四九（一九七四）年に親父が亡くなったので、「じゃ、手伝えよ」といわれて関わるようになった。その頃から町会の会計をやっている。ずっと親父がやっていたので。

町会費を納め易いのは会計がたえず店番してればいい。一階にいて。それだったらばつと来る。エレベーターで上がって、「これだけ

ちようだい」というのは面倒だ。だからたばこ屋をやっている頃は絶えず親父やお袋が留守番してるから、Yさんの親父さんが町会長
の頃は、一日一回はぶらっと入ってきてお茶飲んで、駄弁ってから出ていった。やっぱりお店やってる人の方が話しやすいと話す。

〔神田祭の記憶〕

自分の祭りの記憶というのが本当になくて。失敗したのが、小学生の頃。寒くて、寒くて震えていたら、「酒飲め」っていわれて、茶
碗で一杯ぐつと冷で空けたら立ってられなくなった。うちに帰って叱られた。

昔は今ある担がない方の神輿、あれが一基しかなかった。あれを（町内で）担いだ記憶はすごくある。だけど、宮入をした記憶が全
然ない。宮入のときはたぶん大人が担いでいったのかな。

〔町内の遊び・行事の記憶〕

子どもの頃、遊びといたらベーゴマも、メンコも、ビー玉もやった。あとは五寸釘なんかでもって地面を刺して。大鹿商店の前が
まだ舗装してなくて土だったから。ベーゴマなんか表でできないから、裏側に入って遊んだ。

うちの子どもが生まれたのが上が（昭和）四八年、下が（昭和）五二年だけでも、その頃はまだ、夏になると「子ども天国だ」とい
って、多町大通りを使って、消防車を呼んでパイプに穴開けたやつに水を送って、シャワーのようにして、そこに泥鰌を放したりして
ね、泥鰌つかみをやった。それから、お正月は餅をついた。あとはバス旅行で結構あちこち行って、地引網もやった。あの頃は、やっ
ぱり子ども中心でやっていたという。

（三）K・Y氏

K・Y氏は、松平誠の「神田の地上げと生活集団」に登場する須田町中部町会の前町会長G・Y氏の長男である。平成二五（二〇一
三）年の神田祭には、一〇万円を奉納した。K・Y氏は、昭和一〇（一九三五）年に須田町中部町会にあった米屋のY家に生まれた。

家業を継いだ、やがてYビルを所有し、貸しビル業を行いながら現在に至っている。神田祭では、女神輿の町内渡御の際、Yビルに立ち寄り、神輿を下ろす。

〔K・Y氏とY家〕

K・Y氏は、御茶の水の浜田病院で生まれた。Y家では浜田病院で出産することが多かったという。三歳頃から、家業（米屋）の蒲田支店（工場）にいつて配達を手伝った。戦争で埼玉県の寄居に疎開し、中学二年のときに、須田町のY家に帰った。Y家は、戦争で焼失を免れた。しかし、空襲で焼失した二軒の米屋がY家を頼り、Y家に入っていたため、寄居からすぐには戻れなかった。

蒲田で小学校に通い、疎開後、一橋中学へ通学した。蒲田にいた頃も動物園や鉄道博物館に来たときなどに、Y家に寄り、よく神田に遊びに行っていたという。

蒲田から須田町に戻ってきて、お祭りに参加するようになったのは、高校時代であった。高校時代に、ビールケースを飲んだら、親父たちに怒られたという。やがてK・Y氏は、店に入ってから、多町（隣町）の神輿を担ぎに行くようになる。中央大学を卒業後、昭和三四（一九五九）年に妻H・K氏と結婚した。翌三五年に子ども（娘）が誕生した。その子が中学生の頃、須田町中部町会の女神輿を担いだという。

かつてのY家は、柱が太く、潜り戸があり、中庭のある大きな家だった。一階で商売して、一番奥が茶の間になっていた。二階には日当たりのよい場所に客間があった。客間は、普段は誰にも使わせない場所だったが、K・Y氏が子どもの頃、蒲田から遊びにくるとここに泊った。夜中、小便に行きたくて一階に降りていくとニコライ堂の鐘が聞こえて怖かったという。正月には玄関に、米屋で作っていたお供え餅を飾った。

米屋の仕事は精米をしてお得意さん（飲食店）を中心に廻って配達を行うものだった。父のG・Y氏の頃は歌舞伎座にも米を納めた。従業員は、妻H・K氏が嫁いだ時には二人いた。

平成元（一九八九）年に七階建てのYビルが完成した。六階・七階に居住した。ビルの六階・七階は、G・Y氏が自分の土地に住む

ことを望んだため、居住できるようにした。完成したビルのお披露目は、G・Y氏が派手なのが大好きであったので、松坂屋に料理を頼んで一階で、盛大に行った。

バブルの頃、お得意さんのほとんどが引越して、商売が難しくなった。ビル化は、隣の家がビルになった頃、Y家の精米機が壊れたため、精米機を直すか、ビルにするかという選択を迫られた。最終的に米屋を廃業してY家を壊し、新しいYビルにした。

K・Y氏は米屋を閉めた後、ちょうどバブルの頃の人出不足で、「手伝ってほしい」と頼まれて精米工場へ働きに行って苦勞した。さらに知人の問屋を手伝って配達をしたが体を壊した。ビルにしてテナント収入はあるものの、支払いも少なくはなかった。

Y家と同じ頃にビルを建てた町内の家は、ほとんどビルを売って他へ移転した。Yビルの立地する番地に昔は三四軒あったが、今住んでいるのは四軒であるという。

K・Y氏夫妻がG・Y氏が亡くなられた後も他へ移転しなかったのはK・Y氏の母が「ここにいたい」と望んだからだという。

〔祭りのイメージ〕

お神輿というのは、今はサッカーでも野球でも騒げる。あれは特殊な格好をして騒げる。憂さが晴らせるから。やっぱりみんなでワイワイというのは楽しい。今の人も昔の人も。

〔K・Y氏の仲間と趣味〕

スキーの仲間が多町（隣町）に多かった。そのつながりで多町の神輿を担いだ。一二月三日の夜に店を終えてからスキーに出かけて、正月は店が休みなので長野県南小谷にスキーに行つて家にいなかった。子ども（娘）もスキーやスケートに連れて行つてK・Y氏が教えた。そのほかにK・Y氏はバスケットボールをやっていた。町内の親しい友人のN氏もバスケットの仲間である。子どももバスケットをやったという。大学時代には謡いをして舞をした。

〔父のG・Y氏〕

ダンスが上手く、ラップ吹きになりたいときもあったという。講壇もやっていて話し上手であった。しかし、商売にはどちらかといえば熱心ではなかったという。

〔「女みこし担ぎ手募集係」の人たち〕

地元の女性の多くが地域外に嫁ぎ、お祭りの時だけ帰ってくる。だから、色んなことを頼むのは、須田町に日頃からして仕事をするMゴルフ（「女みこし担ぎ手募集係」の人たちである）。

（四）小括

以上のように三人の生活史から「元祖女みこし」の誕生の背景とその後の変化についてみてきた。

須田町中部町会の女神輿が誕生したのは、松平誠の「神田の地上げと生活集団」ではM・S氏（明治四〇〔一九〇七〕年生）の生活史をもとに昭和五八（一九八三）年、「神田と祭りに生きる人々―神田祭女御輿町内の古老談―」では「1980年代半ば」としている。

しかしながら、M・O氏（昭和八年生）は昭和五二年、K・Y氏は何年から始まったかは直接は言及していないものの、昭和三五年の子ども（娘）が中学生の頃、須田町中部町会の女神輿を担いだという記憶から、昭和三五年とすると昭和五〇年と算出でき、昭和五〇〜五二年頃まで女神輿の誕生は遡ることがわかる。松平が指摘する一九八〇年代の地上げの時期よりも少し早い時期の誕生である。町内の子どもが減り始めた時期と重なっている可能性が指摘できる。

松平は、須田町中部町会の様子について、昭和二七年度には飲食店関係・ラシヤ屋などの衣料以外に地域日常生活関連の商店がたくさんあったが、一九七〇年代後半になると四階以上の建物が少しずつ目立ち、一九八〇年代になると急激にビル化が進み、多くの商店が消滅したことを明らかにしている⁶⁾。

ここで取り上げた三人の生活史からも、同様の地域社会の変容が確認できた。人口流出によって商売のお得意さんが減り、ビル化に

よってテナント収入が入るようになった半面で、商店を廃業し貸しビル業に転じざるを得なくなった。また、ビル化に伴って御用聞きや一階で店番をしながら地域の人と交流する機会が減り、祭りの奉納金の寄付や町会費の納入が以前に比べると困難になった。

かつての神酒所の場所はO i家が多かったが、O i家のビル化後、祭りのたびに神酒所の場所の確保に追われるようになった。生活世界の変容が祭りの基盤を揺るがしていることが窺える。

昭和五二年当時、須田町中部町会の町会長は、K・Y氏の父、G・Y氏であった。G・Y氏は、昭和五一年（一九八九）年まで町会長を務めた⁷⁾。前町会長のG・Y氏は、K・Y氏のインタビュウからわかるように、ダンスやラッパ、講壇などに通じ、G・Y氏の息子のK・Y氏はスキーやスケート、バスケットなどのスポーツを好み、謡いにも通じていた。多彩な性格は息子のK・Y氏にも受け継がれたようである。G・Y氏は、Ok氏の話からわかるように、Ok家のたばこ屋を毎日のように訪ねるなど、社交的な性格が窺える。

一方で、現在、町会長を務めるM・O氏の母K・O氏は、町会の婦人部長を務めるとともに、茶道・香・三味線を教えるなど、非常に文化的な生活を送っていたことが窺える。息子のM・O氏はそうした家の環境で育った。M・O氏の妻Mt・Oはピアノの先生をしていたが、周囲の家からは三味線の音が聞こえてきた。須田町中部町会の女神輿が誕生した当初は婦人部だけで担いだ⁸⁾といい、当時、婦人部長を務めていたK・O氏の影響も考えられる。

このように、須田町中部町会の「元祖女みこし」が誕生した時期は、松平の分析よりも遡り、四階以上の建物が出来始めた昭和五〇〜五二年頃が有力であるといえる。そして、女神輿の誕生の背景には、見せる要素を意識した、当時の町会長や婦人部長といった町会活動に関わる個人の豊かで文化的な生活の存在が窺えるのである。

その後、一九八〇年代のビル化に伴う生活世界の変容は、町内からの居住人口の流出を加速させ、女神輿にすることによって、婦人の担い手である町内の女性は結婚を機に、町外へ出て、戻って来られるのは祭りの機会などに限定されるようになった。

そうした問題が早い段階から影響したせいか、担ぎ手の一般募集が行われた。現状においても、担ぎ手の募集を担当する「女みこし担ぎ手募集係」の女性三人は、結婚して町外へ出た町内の女性たちに代わり、町内の事務所で働いているため、募集の管理を任せられ

た。この女性三人による個人の活躍も影響し、そこに不特定多数の個人が一般募集を通じて集まっているのである。

二、「おまつり広場」の形成と個人

次に、秋葉原中央通りで連合渡御を行う「おまつり広場」の形成に大きく関わった神臺會の会長T・N氏（昭和一六年生）と神田祭との関係について、T・N氏のインタビュー内容を中心にみていきたい。

（一）神臺會の生活変化と神田祭

昭和四三（一九六八）年当時は、お祭り（神田祭）をやっていたのではないか。祖父が昭和四八年〜四九年頃まで神臺會の会長をやっていた。

平成二七（二〇一五）年現在で、登録された町会の世帯数は八〇ぐらいある。町会費を払っているのは約五〇世帯である。住民票がなくても会社の人で町会費を払ってくれる人がいる。五〇世帯のうち、約二〇人が町内に住んでいる。神酒所の場所はここ（T・N氏の会社）に作る。私が町会長になって三一年になるが、私が町会長になる前からここに神酒所を作っていた。四〇年は経っている。

私の子どもの頃は何もなかった。バラックしかなかった。空襲で焼け野原になって、空地が戦後ずっとあった。当時、一番目立つ建物が松坂屋で、松坂屋が焼け残った。コンクリートの建物だけ焼け残った。祖父がここに防空壕を作って、住んでいた。朝鮮戦争の特需で急に景気が良くなってみんな家を建てた。その頃に、うちも建てた。他の家でも当時建てた家がまだ残っている。

曳き太鼓は昭和二年か二二年頃の戦後作った。大人神輿（一尺八寸）と子ども神輿は昭和三五年に作った。マッカーサーがいなくなつて（日本が）独立した昭和二七年〜二八年頃から早い所では（町会の）神輿を作りだした。それまでは町会が禁止されていて日赤奉仕団神臺會として活動していたが、その後には神輿を作った。

昔の鳳輦（神幸祭）は二日に分けて行い、うち（神臺會）の神酒所前の道も通ったが今は大通りを通行することが多くなった。通り

の向こう側を通ってしまうと自分の町会を触らない。外神田では本当に神酒所の前を通る町会は二、三町会あるかないかぐらいである。

(現在の)神輿の担ぎ手は二〇〇人くらいで、多いときには弁当を二五〇(個)出したこともあったが、神輿を担ぐのに三〇人もいればいい。僕が若い頃には、二五人くらいしか担ぎ手がいなくて、それで一日やっていた。寂しいがそれくらいしかいなかった。町内の人だけがやっていた。だから神輿の周りには余っている(神輿を担がない)人はいなくて、全員で担いでいた。それで神田神社へ宮入をしても誰もいなかった。ギャラリーもいなかった。マツカーサーが神社を認めないといっただいぶ洗脳した。

一八歳か二〇歳の頃は、お神輿で都電を止めたりして、そっちの方が面白かった。担ぎ方も今のように正面を向いて担ぐ担ぎ方ではなく、東西南北を向いて寝っころがるようなスタイルで(体を斜めにして)担いでいた。だから、ぐるぐる回りながら進んでいった。板塀なんかもどうしても足を踏ん張ってしまっただけで破ってしまったこともあった。神田市場の大きい神輿も同じ担ぎ方だった。いつの間にか整然とした今の担ぎ方になった。以前のお神輿の方がお酒を飲んでいと酔いも早かった。

(二)「おまつり広場」の形成

神田神社への宮入が行われる日曜日は、八時二〇分に明神下(交差点)集合で外神田連合の一二町会の神輿が集まる。神田神社への宮入は九時だが、時間帯が早いのでギャラリーが少ない。一〇時半までに外神田連合の一二町会の神輿が宮入を終える。遅れても一〇時四〇分ぐらいまでである。よその町会は一町会一〇分の時間をもらっているが、外神田連合は一二町会で九〇分(インタビューを実施した平成二七(二〇一五)年当時)である。かつては外神田連合の宮入は九町会ぐらいの頃もあった。神臺會、宮本町会、元佐久町会も出さない時代は九町会であった。そうすると、ちょうど九〇分で合っている。時間を伸ばしてもらおうように申し入れをしたことがあった。

僕が中央通り(「おまつり広場」)を始めたので、中央通りが一二時半集合のため、一〇時過ぎに宮入する町会は、自分の町内に戻ってお昼を食べてまた中央通りに出てくるのは大変である。芳林公園を借りておいて、そこで昼食を取り、芳林公園から秋葉原の中央通りまではすぐ近くのため、時間になれば、神輿を担がなくても神輿を持って運び、並べることができる。中央通りにも一二町会(の神

輿)が出る。それから岩本町・東神田地区の三町会(岩本町一丁目町会・岩本町三丁目町会・神田大和町会の神輿)が出る。岩本町・東神田地区連合の三町会が入る場合には事前に「入れてほしい」と挨拶に来る。そのときには一杯飲む。あとは神田市場の神輿が入る。秋葉原の駅前広場も僕が借りている。神田駅東地区連合からも四〜五町会来て通過していく。

いつも俺たちは数が多いので三列(神輿を三列に並べて)でやる。三(列)×五(町会)＝一五(基)くらいで行うので、神田神社の宮入へ向かう神田駅東地区連合の神輿が来ると避けなければならない。そういうような絵が必ずできる。平成二七年の神田祭には遠州横須賀の祢里二基も来る。

うちには、平成一年の祢里が来たときの中央通りの写真がある。この頃は東神田豊島町会も入るなど、岩本町・東神田地区連合の神輿も五つか六つ参加した。『讀賣新聞』の朝刊の一面(東京版、平成一年五月一七日付)に出た。

「おまつり広場」は一二時半から一四時か一四時半くらいまでやっている。連合渡御に先立って式典を街宣車の上で行うが、あの街宣車は自民党本部へ行って借りてくる。運転手付で。そのまま使うわけにはいけないので、「神田祭」といった文字を入れるなどお祭り用に装飾する。宮入に出発するときにも街宣車の上で挨拶をして、神輿を同時に綺麗に上げさせる。街宣車は自分で費用を負担して借りている。

「おまつり広場」はだいたい二五〇mの距離を四〇〜五〇分くらいかけて一回も止めないで渡御する。三列並んでいるので掛け声を出しながらゆっくりゆっくりしか進まない。音が共鳴している。そうすると担いでいる人も気分が高揚する。単独で神輿を担ぐよりはお互いの刺激がある。だから、こういう通りでもビルが高く建っていて、細い道だと急に声が反響して大きくなるところはお神輿が元気になる。自分の担いでいる声が自分に聴こえてくる。それが三つあるから、なおさら盛り上がる。盛り上がってくれるのは有り難い。だからずっと続けている。中央通り(の連合渡御)は、僕が平成六年から始めた。

平成二年と平成四年は、宮入が終わると、明神下(交差点)の角にテントを張って、ベルサール秋葉原のところにテントを張って、末廣町の三菱銀行の交差点のところにテントを張った。そのテントを神酒所があったことにして、芳林公園までぐるっと回ってそれで手締めをして芳林公園で解散するといったことが企画された。しかし、「それは神酒所にはならない」といって私は大反対したが二回や

った。

その前（平成二年の前）が、昭和六〇（一九八五）年と昭和六二年に（神酒所廻りを）やった。そのときは宮入を終わってから各町の神酒所を（神輿が）廻った。ところが、一二町会回るため、すごい距離になる。それが長いから嫌だとみんないう。お昼は芳林公園で食べて一五時くらいにならないと終わらない。

それ（神酒所廻り）を始めたのが祖父であった。昭和三七年か三八年頃にやり始めた。三〇人くらいしかいないのに寂しいからといってみんな担ぎ手がやっていた。道中は盛り上がらないで、神酒所の傍に来るとみんな盛り上がった。大きいお神輿のある町会は神輿を担ぐのではなく抱いて持って「御神酒所のところでは担げばいいよ」といった具合だった。うちの神輿は大きくないからずっと担いでいた。そんなことがあったので平成二年と四年は止めて違った形にした。それまでは神酒所廻りを神輿がしていた。

うちの町会では、昭和四一年頃から昭和六〇年までずっと（神田神社の）宮入に参加しなかった。「なんでうちの町会はやらないのか。あっち（宮入をする他の町会）の方がいいな」と思っていた。自分も町会長ではなかったし、祖父も町会長を辞めていた。それで昭和六〇年になって神輿を直して（宮入に）参加した。四〇〇万円くらい集めて二五〇万円で神輿を直した。余ったお金で今の神臺會の黄色の半纏を作った。一着当り一万四千円の半纏を作った。しかし、最初は「運営費はどうするんだ」と猛反対された。昭和五九年に、そのときは町会長になっていたので、「大丈夫ですよ。できますよ」と答えながらも、腹の中で、できなければ（お金が集まらなければ）全部自分で出そうと考えていた。

うち（神臺會）はなぜ宮入をするときに先頭かと思ったら、よその町会はいうことをきかない場合に困るからだ。八時半に出発して九時に入れ（宮入をし）ようと思っても、拍子木を打たれて止ってしまうと困る。坂の途中で「くたびれたから止める」とやられると、よその町会だと「上げる」といっても「お前、違う町会じゃないか」といわれたらそこまでだから。時間通りに行こうと思うと先頭にいるしかない。うちの町会だから「我慢して担いでいってくれよ」といえる。前がいけば後ろはついてくる。一基止ったら全部止ってしまう。そういうことがあって、早く入った（宮入した）町会は御神酒所廻りをする。（宮入の時刻が）遅い町会はできないから、芳林公園から中央通りに出て、帰って自分の町内を廻る。順番は籤引きをやって決める。

中央通りで連合渡御を始めたのは、ビルの間を神輿が通ると反響するわけだ。ビルとビルとの間で反響することがあるだろうと思つて、(神輿を横に)三つに並べた。そうすると興奮する度合が違った。音に反応する。僕は音楽はできないけど、お祭りをやっているとわかる。聞いていると、「ここはすごく盛り上がっているな」とわかる。一緒にやっけていてもわかる。だから、隣にお神輿があれば、両方(両側)で声が聞こえる。そうすると盛り上がり方が違う。それと、もう一つはギャラリイがいる、買い物客が。だから、(ギャラリイが)いないところで担ぐよりは担ぎ手は燃える。最初はそっちかもしれない、人がいるところでやろうと。

それで、秋葉原の中央通りは「歩行者天国」で、歩行者天国は、警視庁の管轄のため、一回目の平成六年は万世橋警察署の人と一緒に警視庁に挨拶に行った。その結果、一二時から一五時までの使用許可がでた。二回目は平成八年で警視庁のほか、機動隊の詰所、交通管制センターにも挨拶に行った。三回目は平成一一年でこのときも警視庁に挨拶に行った。四回目の平成一三年のときは万世橋警察署に資料を残すようになった。管轄が万世橋警察署の署長サイドになった。

平成六年のときは雨が降って自動車が通っていた。歩行者天国は雨が降ると中止になってしまう。お神輿が入ると、実質的には通行止めのような形になったが、警察が交通整理をした。平成六年より前は、歩行者天国にお神輿を入れることが許可にならなかった。平成六年は、希望する町会だけに秋葉原の中央通りに出てもらって、七町会が出た。七町会のあとに神田市場の神輿も出た。平成八年のときはたくさんのお神輿が出た。岩本町・東神田地区連合からも五町会、参加してくれた。

室町一丁目会が岩本町と外神田の間に、「二町会だけなんで(宮入に)入れさせてくれ」といわれた。それで担ぎ手はバスで来るが、「(神輿を)どこから上げるの」と聞くと「臺所町、ここから上げさせてくれ」といって、この(T・N氏の会社前)通りから神田神社へ宮入した。外神田がいくとすつと室町一丁目が入ってくる。みんな知っているので入ってもらった。それが一つ入ると三〇分くらい違ってきた。ただし、時間は遅くしないで一二時半集合のまま、中央通りが終わってから町内を廻れるようにしている。外神田の宮入の時間も九〇分のまま(平成二七年当時)である。

(三) 四尺の大神輿

神田神社には、四尺二寸の大きい神輿がある。平成一一（一九九九）年に水天宮から（神田神社へ）寄付された。今上天皇の御即位一〇年を記念して企画された。この大きい神輿を、神田祭の際、土曜日の一七時に秋葉原のベルサールの前に置いておいて、外神田連合で三八〇枚くらい半纏をもらって、残りの二〇枚くらいはよその地区（連合）の人が参加して大神輿を担ぐ。一七時から一八時半まで（明神下から）坂を登って、神田神社へ宮入する。それを行うと、それぞれの町会の神輿は止ってしまう（巡幸が行えない）。

四尺という都内有数の大きな神輿を担いで渡御できるという地区はほかにない。ただし、ほとんど外神田だけでやっているのはいないかといって、他の地区から反対をされて代表者会議の席で渡御の計画をつぶされたこともあった。神社へ宮入しようと思ってもうち（外神田）ぐらいしかできない。

最初は室町一丁目のお神輿、馬喰町のお神輿、多町のお神輿、神田祭で大きい部類のお神輿（二尺七寸とか三尺の大きい神輿）を持っているところから借りて、中央通りから須田町、神保町から須田町、両国から須田町に三つの神輿が集まって、それで宮入をしようと考えた。これは本祭のときにはできないから、平成一〇年の蔭祭のときにやろうといって「神田祭の會」という会を俺が作った。日本橋から神田から全部入ってもらってそれで企画をして、神田神社の宮司を呼んで「こういうのをやりたいんだ」と話したら、「いいじゃない」と宮司が乗ってくれて、お正月に「今年の蔭祭はこういうことをやります」と全部の町会長に回した。それで本番になる前に、まず多町二丁目の三尺のお神輿を借りていこうと、宮司と一緒に町会長を訪ねていくと「町会の役員会にかけないとお貸しできるかどうか。一〇日ぐらい待ってほしい」というので一〇日後に宮司と訪ねていった。しかし、町会の役員会にかけたらダメだということになったとの回答をもらった。一つがダメになってしまったので、会の解散式を行った。

平成一一年に四尺のお神輿（大神輿）が水天宮から寄付された。それを天皇陛下即位一〇周年記念で皇居前に持っていった。実現するまでには様々な困難があった。二回目の平成二一年（即位二〇周年）は轡を掛けて責任者となって皇居前に行った。そのときは街宣車の上に載って挨拶をした。

（四）小括

以上のように、秋葉原中央通りへ連合渡御をする「おまつり広場」の誕生の経緯と背景、四尺の大神輿との関わりなど、T・N氏と神田祭の関係についてみてきた。

T・N氏に「神田祭はどのようなもの(場)か」といった質問を筆者がしたところ、「生き甲斐。商売とは別なもの」という回答をもらった。まさに、「おまつり広場」や四尺の大神輿など、T・N氏の個性に裏打ちされた強い意志と行動力がなければ、現在のような都市祝祭の形成には至らなかつたのではなからうか。

「おまつり広場」へ至る過程においては、昭和六〇(一九八五)年に自身の町会(神臺會)の神輿を直して神田神社への宮入を復活させたことが大きな契機になった。祭礼の象徴の復活が、更なる賑わいの場の形成に発展したといえる。

しかも興味深いのは、観客が多数いて、ビルとビルの谷間で反響して盛り上がりやすい秋葉原中央通りでの連合渡御を重視していることである。観客のほとんどいない早朝の神田神社への宮入の時間を外神田連合全体で九〇分(平成二七年当時)に抑え、かつ自身の町会の神輿を先頭にして、神輿の巡幸の流れを止めないようにして、参加する神輿が増えても一二時半の集合時間を変えない工夫をした。一二時半からの式典のあと、神輿を三列に並べて二時間程度の凝縮された沸騰の場を連合渡御によって形成し、町会や担ぎ手の心、警察にも配慮しながら、都市祝祭の場を維持し、現在に至っていることがわかる。

三、ダンボール神輿の誕生と個人

さらに、神田駅東地区連合の紺屋町南町会のダンボール神輿について、神輿を製作したS・I氏(昭和一四(一九三九)年生)のインタビュー内容を中心にみていきたい。

(一) 紺屋町南町会の変化

平成二七(二〇一五)年一月現在、紺屋町南町会の世帯数は登録上は三〇軒であるが、実際に住んでいるのは一〇軒(二〇人)であ

る。町会員は会社を入れて六〇軒くらいある。お祭りには、遊びにくる人もいるので神田祭のお札は八〇枚くらい神田神社から受ける。町内にお店などを持っていて町外から通っている人は、三〇四軒である。あとは会社で町会員になっている人たちである。

紺屋町は職人町のため、商売する場所はあまり問題ではない。愛着のある人は住んでいるが、代替わりすると町外へいなくなってしまう。私が神田に越してきたときは、一階を飲み屋に改造したような飲食店が多かった。だんだん神田駅前が整備されてきてチェーン店が進出してくると、(飲食店を)維持するのが難しくなった。私のところの周りには、飲食店が何軒かあったが一時はずいぶん寂れた。ところが、それを逆手にとって出店するようところが最近少し増えてきた。うちの町会では、飲食関係で商売を辞められた方が二軒、新しく始めた方が飲食関係では五軒くらいある。うちの町会は小さい。一周するのに五分もかからない。それでもそれくらいの移り変わりがある。

(二) S・I氏とダンボール神輿

S・I氏は昭和一四(一九三九)年に生まれ、昭和五八年に神田に越してきた。S・I氏の妻の母親は、もともと神田で商売をやっていた。老後、神田に戻りたいということで(ビルを)買って、ビルの下を貸して上に住む形で(平成二七年から)三〇年ほど前に、神田に来了。途中から神田に入ってくるのは珍しい。

神田に移ってきたからしばらくは、町会活動には妻がお祭りのときに給与(飲食物で接待する役)をするために、隣近所の関係から婦人部に参加していた。S・I氏自身はサラリーマンであり、町会には積極的には関わっていないかった。町会活動に関わるようになったのは平成九(一九九七)年からだった。

平成九年に紺屋町南町会の役員になった。その頃はお祭りといっても何をやっていたのか記憶がない。紺屋町南町会では、終戦直後に山車などを売ってしまっって、当時は神輿もなかった。平成九年に役員になったときに、二〇年くらい町会長をやっていた方が辞めて、私の前任者のNさんという方が町会長になった。そのときに(町会の役員になるように)声を掛けてもらった。私の仕事は、もともとは経理屋だったため、町会の会計ということで役員になった。

N町会長になって役員会で集まったときに、当時から町内の過疎化が問題になっていて、ともかく人がいないので人を集めないといけない。そのためにはどうするか、何かイベントをやる人を呼んだらいいのではないかという話もあって、「イベントといったらお祭りだろう」という話になった。そうしたら、あるお婆さんが、「そんなことをいたって、うちの町会は戦後売ってしまっても何も無いから、私たち女性はお神輿にも触らせてもらえなかった」という話が出た。

それに対して、N町会長は、「うちは爺婆コンビで若いのがいないのだから、軽い樽神輿でもなんでもいいからお神輿を作って、イベントを盛り上げようじゃないか」という話になった。それで、町会長が当時の青年部長に「お前、作れ」と命令した。「樽神輿でもいいから。作れ」といわれた青年部長は、Gさんといつた。

当時、私は少年野球のコーチをしていたが、その人は監督だった人だった。私の方が一〇歳ぐらい若くてよく知っているものだから、「Gさんが作るのなら、だいたいの程度がわかる。俺も作ってみるよ」と私はいった。何で私がそんなことをいったかというところ、新聞に江戸川区の少年野球の監督がダンボールで神輿を作って子どもに担がせているという記事があった。Gさんが作るのはたぶん樽神輿であろう。じゃあ、新聞に出たようなお神輿なら私にも作れるのじゃないかと生意気にもそう思った。それで、二人で作ってみて、途中でどっちがいいかどうかみてもらって決めようということになった。それは平成一〇年のことだった。前年に本祭（神田祭）があって、平成一〇年の蔭祭が終わったあとに、役員会を開いて、五月の町会の総会で、そういう話が出たのをまとめた。

平成一〇年の六月から私が三か月かけて設計図を引いて、一〇月くらいから作り始めて、一二月くらいに作っている神輿の写真をみせて、「こっちの方がいいや」ということになって、私の作った方を採用することになった。

翌平成一一年に私の妻が癌だということがわかり、入院したため、それどころではなくなった。それで神輿は途中までしかできなかったが、（町会の）皆さんから「これでいいから」といわれた。

（町会の皆さんは）神輿ができるのを心待ちにしていたが、年明けからうちの女房の具合が悪くなって、三月の初めに癌というのがわかった。末期癌だったので私も困った。皆さんは担ぎたいので、そのときは皆さん、本当は早く作ってもらいたかったが私に遠慮していかなかった。だからこれしかできなかった。でも「これでいい」「これで立派だ」と。鳳凰もないが「これでいい」と。それで皆

さんが喜んで担いだ。前の町会長の奥さんは涙を流して喜んでくれた。「戦後で初めてだ」と。

亡くなった女房はこのとき（神輿ができた平成十一年の神田祭のとき）だけ退院してきて、最後にお祭りで騒いだ写真がある。夫婦で並んで撮ってもらった写真もある。二人ともやつれているがこれが最後の写真だ。この七ヶ月後に亡くなった。これは本当に記念になっている。このときに（女房は）神輿に色を塗ってくれている。だから、この神輿は記念品である。みんなが応援してくれた思いがここにこもっている。こんなに皆さんが喜んでくれるなら、これは一生の仕事だと思った。この神輿は町会を一つにするという意味ではシンボルになってくれている。その後、毎回毎回手入れをしたため、一昨年（平成二十五年）のお祭りでも、結構立派になった。それで評判も呼んで、「ダンボール神輿」と呼んで今うちの町会の名物になっている。

最初、（平成十一年に）ダンボールの神輿を作ったときに、鍛冶町一丁目町会と鍛冶町二丁目町会の神輿が神田駅の中（構内）へ乗り入れをした。「あんたのところも行くか」といわれたので「行きたい」と呼んで入れてもらったのは良かったが、みんなが嬉しがって神輿を揉んだものだから、屋根の上の鳳凰が飛んでしまった。そういったところを一つ一つ改良していった。薄いダンボールなので揉むとやはり切れてしまう。それを切れないようにした。このお神輿にはみんなの知恵が入っている。お祭りの費用で残った分は神輿の改良費（材料費など）に充てていた。平成二十五年からはペンキの塗り替えぐらいで済むようになった。

神輿を作ったのはうち（紺屋町南町会）の場合、大変化であった。これで、抛り所ができた。ダンボールの神輿は新聞にも取り上げてもらった。最初、「コミュニティちよだ」（地域誌）に取り上げてもらった。平成十三年の四月に取材を受けた。その後、『朝日新聞』の取材を東京版（朝刊、平成十三年五月一七日付）に大きく記事を出してもらった。「コミュニティちよだ」には神輿の鳳凰が写っていないが、朝日新聞の記事には鳳凰が写っているように、この間に鳳凰を作った。そういった形でだんだんと継ぎ足しをしていった。新聞にも取り上げられて、周りの人もみんな知ってくれるので、それで賑わっている。「ダンボール神輿ってどれ？」とみんな来てくれる。神輿があるということで全然求心力が違う。

だから、町内の人たちも「宮入しようぜ」といった具合に盛り上がってくる。神輿が起爆剤になって、北乗物町町会とも（神田祭を）一緒にやるようになったのではないかと思っている。そして、平成十三年に鳳凰ができて、平成十五年に神田神社へ最初の宮入をした。

このときには、鳳凰はあっても、神輿の屋根に小鳥が載っていないなかった。『平成二十五年神田祭』（公式ガイドブック）の三〇頁に掲載された宮入の写真は平成一五年のときのものだ。そして、平成二五年の神田祭で再び宮入を果たした。

（三）神酒所の変化・北乗物町との合同

神酒所は、現在、旧今川中学校に作る。私が平成九（一九九七）年に町会の役員になる前は、どこでやっていたのか、あまり記憶がない。平成九年以降は、今川中学校の前に語学学校が入っていてすぐに出ていったビルがあった。そこが空きビルになっていて、そこに紺屋町南町会の神酒所を作った。ところが、だんだん人がいなくなってきた。

地名でいえば神田紺屋町だが、もう一つ隣に北乗物町があって、その向こうに神田紺屋町（紺屋町北部町会）がもう一つある。両方とも小さな町会である。だから、私は外来者だから歴史を知らないから比較的好きなことがいえるので、「こんな小さなところで北だ南だといってもどうしよもないでしょ。一緒にやったらいいじゃないか」と何度か提案した。しかし、「お前はそういうけど、いろいろ事情があるんだよ」という話を聞いた。その頃はまだ昔気質の人が多く名前にこだわっていた。

最初は、空いたビルに神酒所を作ってやっていたが、私なんか（近隣町会と神田祭を）一緒にやることを提案したりしたので、全部（三町会）一緒にやろうという話になった。結局は、北乗物町町会と紺屋町南町会の二つだけが「一緒にやろう」ということになって、平成一九年のお祭りから「今中」（今川中学校）の跡地を借りて、ここに合同で神酒所を作るようになった。そのときに北乗物町の町会長のIさんという方が、いろいろとこちらへ声掛けをしたが、富山町と紺屋町北部は「いや、俺のところは」ということで受けなかった。それでも「ここで盛大にやろう」ということになった。残り二つの町会も集まったら、もっと賑やかになったのではないかと思う。最初は、誰にいわれたか忘れたが「Iさんよ、あんたのところは北乗さん（北乗物町）と一緒にやるんだって」といわれたので「そうですよ」と答えたら「大丈夫なの」といわれた。私にはその意味がわからなかった。昔は俺のところの町会、俺のところの町会と張り合っていたものだった。それが一緒にやれるのかといった心配だったらしい。ところが、（一緒に）やってみたら波及効果で三倍、四倍といった感じで賑わった。「大成功じゃないか」ということになった。

神輿ができる前の記憶は私にはないが、聞くところによれば、神酒所のようなものを作って、そこに町内の人が集まって飲み食いをしていたという。私の記憶では、神輿ができてから神酒所を初めて作った。神酒所の飾りも町会のNさんの知り合いの職人がみんな作ってくれた。

(四) 小括

以上のように、紺屋町南町会のダンボール神輿を製作したS・I氏の生活史をベースとして、神輿の誕生に至る経緯とその後の展開についてみてきた。

S・I氏は、もともと神田に住んでいたわけではなく、昭和五八（一九八三）年に紺屋町南町会に住むようになり、平成九（一九九七）年から町会の役員になった。その矢先に、過疎化する町に人を集めようと、青年部長と競って神輿を作り、S・I氏が作ったダンボール製の神輿が採用された。しかしながら、S・I氏の妻が癌になり、平成一一年の神田祭では神輿の屋根に鳳凰もなく、S・I氏にとっては十分な神輿ではなかった。それでも、紺屋町南町会の多くの人の思いを受けて、ダンボール製の神輿は町内を巡幸した。そのときに撮影した妻との写真が最後の一枚となった。その後、不十分な箇所があったが故に、改良に改良を重ね、様々な人たちからの応援を受けながら、S・I氏という個人が作った神輿が町会のシンボルになっていったといえる。そして、平成一五年には神田神社への宮入を果たし、平成一九年には隣接する北乗物町町会と合同で神田祭を行うようになり、相乗効果で活性化した。

紺屋町南町会の神田祭は、松平誠が平成四年に神田祭を調査した以降に活性化した注目すべき事例の一つである。町内に人がほとんどいないといった地域社会の変容に対して、危機感を抱いた町会の人たちの思いを受けて、町会の個人が神輿を手作りで作った。この個人の活躍によって、町会は再活性化し、手作りの神輿は個人のものから町会の象徴としての性格を帯びるようになった。町会のものとして町内の人に認知された神輿は神田神社への宮入を開始し、神輿の改良がある程度進んだ平成二五年に再び宮入を行ったと考えられる。そして、神輿を作ったS・I氏個人も神田の人間になったのではなからうか。S・I氏は、現在、紺屋町南町会の町会長を務め、平成二七年の神田祭でも神田神社への宮入を果たした。

まとめ

本節では、昭和五二（一九七七）年に誕生した須田町中部町会の「元祖女みこし」、平成六（一九九四）年に始められた「おまつり広場」（秋葉原中央通り連合渡御）と四尺の大神輿、平成一一年に作られた紺屋町南町会のダンボール製神輿と個人の関わりについて、個人の生活史からみてきた。

三者に共通していえる特徴として、第一に挙げられるのは、非常に多彩で個性的な個人の存在が祭礼の象徴の誕生や復活、賑わいの場の形成に大きな影響を与えたことである。石井研士が『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』で明らかにした、八官神社の西澤半助、豊岩稻荷の岩松鉦太、朝日稻荷の三枝敏郎と沖山三郎といった特定の人物の存在が神社の復興や存続に大きな役割を果たしたこと⁽⁹⁾と共通している。神田・日本橋の神田神社の氏子町会には、本節で取り上げた以外の人物でも、町会の個人の活躍がみられる。例えば、町会の戦略として企業との関わりを重視する方針を打ち出した神田藪そばの店主で須田町北部町会の会長のY・H氏、第三章第四節で紹介した、町会組織を変革しマンション住民（特に女性）を町会活動に巻き込んだ蛸一共和会会長のT・M氏、町を活性化しようと若手を登用し、若手とのコミュニケーションを重視した神田五軒町町会会長のK・I氏など、個人の活躍が町会組織や神田祭に影響を与えている事例が複数存在している。

第二に挙げられるのは、三者とも非常に現実的な対応やギリギリの判断をする中で、祭礼の象徴の誕生や復活、賑わいの場を形成してきたことである。町会の神輿は小さく、子ども神輿では大人が疲れ、見栄えもしないが女神輿であれば見映えもするといった婦人部に担がせた須田町中部町会の「元祖女みこし」、樽神輿と競いながらもダンボール製の神輿を採用してもらったが、妻が癌になり完成形を作れなかったが「それでいい」として神輿の巡幸を行った紺屋町南町会のダンボールの神輿、宮入の時間と中央通りでの集合時間を変えずに、巡幸の流れを止めないために自らの町会の神輿を先頭にして維持する「おまつり広場」など、様々な現実に対応した対応がなされてきた。だからこそ、「元祖女みこし」では、参加者を婦人部から一般募集に移行し、衣裳などを工夫し、常に変化させてきたよ

うに、ダンボール神輿も改良に改良を重ね、ついには二度目の神田神社への宮入に至っている。

第三に挙げられるのは、個人の活躍を温かく見守る神田神社の存在である。第四章第一節でみたように、特に、神田神社宮司が祭礼の象徴の誕生や復活、賑わいの場の形成に理解があり、それらを積極的に受け入れてきたことが重要な要素としてあるのではなからうか。厳しい現実の前に、単に伝統を墨守するだけでなく、改良を加えながらも柔軟に対応し、新しい場を作っていこうとする姿勢は、町会の特定の個人も神田神社の神職も共通し、むしろ呼応し、連動しているようにみえる。

このように、町会における特定の個人の活躍が、神田神社の新たな取り組みと連動しながら、神田神社宮司を中心とした神職の理解のもと、祭礼の象徴の誕生・復活を通じて地域社会を再活性化し、神田祭を多数の観客が押し寄せる都市祝祭に押し上げていく一つの原動力になったといえる。

註

- (1) 中野卓『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代―』、お茶の水書房、昭和五二年。
- (2) 有末賢『生活史宣言―ライフストーリーの社会学―』慶應義塾大学出版会、平成一四年。
- (3) 松平誠「神田と祭りに生きる人々―神田祭女御輿町内の古老談―」『遊びと日本人』啓文社、平成四年。
- (4) 松平誠「神田の地上げと生活集団」『生活学1992』ドメス出版、平成四年。
- (5) G・Y氏以外の松平誠がインタビュー調査を行なった個人に関しては、インシヤルの当人を特定することが困難な面もあり、また特定できた場合でも、家族ごと町外に移転されていたり、インタビューを予定していた矢先に亡くなられた方もおられ、その後の調査が困難であった。結果として松平が聞き取り調査を行なった人物の家族から聞き取り調査ができたのはG・Y氏の長男のK・Y氏だけとなった。
- (6) 前掲松平「神田の地上げと生活集団」一七〇～一七二頁。
- (7) 『千代田区須田町中部町会 町会発足50周年記念 会員名簿』千代田区須田町中部町会、平成一五年二月、二頁。
- (8) 前掲『千代田区須田町中部町会 町会発足50周年記念 会員名簿』二頁。
- (9) 石井研士『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』、新曜社、平成六年、二七四頁。

第三節 「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭

これまで繰り返しみてきたように、遷座四〇〇年奉祝大祭として行われた平成二七（二〇一五）年の神田祭では、五月一〇日（日）の氏子町会神輿の宮入に多くの観客が神田神社境内に押し寄せた。神田祭とコラボレーションを行ったアニメ「ラブライブ！」の授与品やグッズを受けるべく並ぶ若者の列と交差し、一〇日午後の宮入では、予定時刻より大幅に遅れるほどの賑わいとなった。この宮入の様子は、インターネットやテレビを通じてお茶の間にも届けられた。

神田神社とNTTコミュニケーションズが制作したインターネットTV「神田祭・ch」では、例年の通りであるが、稲川淳二がスペシャルゲストとして出演し、宮入の様様を生中継した。

稲川にはお気に入りの神輿がある。それは、神田神社の氏子町会の一つである須田町中部町会の女神輿である。この神輿は、第三章第五節でみたように、昭和五二（一九七七）年に誕生し、キャバレーのママが担ぐ女神輿はあっても、一般女性が担ぐ女神輿としては先駆けであるとの意識から「元祖女みこし」を名乗っている。稲川は、平成二五年の神田祭の際、神田神社境内で宮入の順番待ちで待機している「元祖女みこし」のすぐ近くまで出向き、担ぎ手の女性たちと対話した。平成二七年も同様の光景がみられた。

また、TOKYOXテレビの『日本の祭り』（制作…テレコムスタッフ）が「ダイドードリンコスペシャル 神田祭×遷座四〇〇年受け継いできた日本のこころ」と題した番組を平成二七年六月一四日に放映した。番組では、須田町中部町会の「元祖女みこし」について取り上げ、担ぎ手の募集を担当する女性たちの様子を中心に描写していた。このほか、テレビ東京のBSJAPANで開局一五周年特別企画「生中継！神田明神遷座四〇〇年記念「神田祭」」と題して、五月一〇日の一五時～一七時半の時間帯で宮入の様子を中心に生中継を行った。番組では、内神田鎌倉町会の神輿宮入と多町二丁目町会の町内渡御の様子などが中継された。当初、番組では多町二丁目町会の神輿と須田町中部町会の「元祖女みこし」とのコラボレーションも企画されたが時間やタイミングなどの課題があり、実現には至らなかった。多町二丁目町会は須田町中部町会の隣の町会である。

このように、脚光を浴びる須田町中部町会の「元祖女みこし」であるが、第三章第五節で述べたように、担ぎ手を一般募集するとい

う大きな特徴を持つ。平成二五年からはインターネットの応募も可能になった。

『日本経済新聞』のコラム「かれんとスコープ」では「祭りの助っ人、全国募集「地域と一体」若者魅了」と題した記事を平成二七年八月二三日付で掲載した。このコラムでは、祭りの担い手不足に悩む地域の伝統的な祭りに注目している。その中で、「域外参加者を受け入れる主な伝統的祭り」の一つとして、神田祭の「須田町中部町会が元祖女みこしの参加者を一般公募。約一八〇人の女性が参加」と紹介している。しかしながら、ここでは「元祖女みこし」にどのような個人が参加しているのかは記されていない。

そこで、本節では、神田祭の「元祖女みこし」に参加する個人に注目してみたい。具体的には「元祖女みこし」の参加者を対象として、平成二五年と平成二七年の実態調査をもとに参加者の特徴を明らかにするとともに、他の都市祝祭との比較検討を行い、共通点と相違点を指摘したい。

一、「元祖女みこし」の担ぎ手の実態

(一)「伝統型」都市祝祭と「合衆型」都市祝祭

松平誠は、現代の都市祝祭を、日本の都市の主要な祝祭類型として、「近世の伝統の上に開花しながら、産業化のなかでその基本的な性格を体現してきた」とする「伝統型」（伝統的都市祝祭）と、「伝統とは無縁で、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」「連」「講」などを形成してつくりだす祝祭」を「合衆型」に分類している⁽¹⁾。「伝統型」の代表的なものとして、「神田明神の付祭や深川八幡の付祭のように、地縁のカミを祭る都市地域共同の特定の閉鎖的な集団の運営する祭礼を祖形とするもの」を挙げ、「祝祭そのものの性格が、基本的に伝統の基盤のうえにたち、核になる組織が明確なものは、すべてのこの伝統的都市祝祭に入れる⁽²⁾」としている。一方、「合衆型」の代表例として東京高円寺の阿波おどりを挙げている。この分類に従えば、神田祭は「伝統型」に分類できると考えられる。

しかしながら、第三章第五節でみたように、平成二五（二〇一三）年は、松平が調査した平成二年の内訳と比較すると、町内関連法

人、特に金融機関の参加率が三五%（五一人）から二%（四人）に減少し、「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人の二〇・一%（三四人）と町会に縁を持たない「一般」の一三%（二二人）を合わせると全体の三三%（五六人）と増加している。町内の金融機関の減少に伴い、祭りの担い手を「社縁（会社縁）から「選択縁」へ移行させ参加者の維持・拡大に成功したことがわかる³⁰。

つまり、須田町中部町会の「元祖女みこし」は、松平が「伝統型」とする都市の神社祭礼の中に、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、様々な縁につながって一時的に結びつく「合衆型」の要素を併せ持っている可能性が考えられるのである。

（二）平成二五（二〇一三）年の担ぎ手の実態

まず、平成二五年に参加者が拡大した「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人と、須田町中部町会に全く縁を持たない「一般」の参加者に焦点を当て、「元祖女みこし」の参加者の内実に迫りたい。

分析の対象は、平成二五年六月二〇日（木）一九時から行われた「女みこし担ぎ手募集係」による参加者の打ち上げの席上で、参加者に、①「元祖女みこし」を担ぐようになった切っ掛け（どのようなつながりか）、②神田祭で「元祖女みこし」を担いだ感想を記入してもらった内容とする。有効回答は、一五人（うち一人は後日メールで回答）である。

具体的な内容について、「女みこし担ぎ手募集係」のOさんの関係、同じくKさんの関係、町会につながりを持たず一般募集に直接応募した「一般」の関係の順で、以下に列挙していく。

【Oさんの関係（1）】H・Uさん…初参加。神輿担ぎの経験なし。昭和三四（一九五九）年生。Oさんの音楽ファン（CKB）仲間。「七五三のお参りできた神田神社に、半世紀を経て又、参拝できるとは…！お神輿を担がせて頂けたのは町内会の皆様の広いお心のおかげ様です。ありがとうございます。人生の節目に、初めての経験、この意味、メッセージをかみしめてまいります。神社がとても安らぎます！」

【Oさんの関係（2）】M・Hさん…初参加。昭和四三年生。Oさんの音楽ファン（CKB）仲間。「軽い気持ちで参加してみてもん

な歴史のあるお祭りにかかわられて本当にこうえいでした。気分もスッキリしたような気がします。又やりたいです!!」

【Oさんの関係(3)】 Y・Mさん…初参加。女神輿は初参加だが、神輿担ぎの経験あり。昭和三四年生。「OさんつながりのH・Uさんのイトコです。地元目黒碑文谷八幡のお祭りで三〜四年間担がせていただきました。今回一〇年ぶりにお神輿をかつがせていただき、とても感謝しています。女神輿は初めてで、とてもかつぎやすく(背たけの関係もあると思いますが)、気持ちの一体感も格別だったと思います」

【Oさんの関係(4)】 M・Nさん…初参加。昭和四〇年生。Oさんの音楽友だち。「初めての参加で、何も分からなかったけれど楽しかったです。おみこしはやつぱり重たかった。どんどん疲れていったけれど、神様をお連れして歩いているんだと思うと、気持ちがあがりました。縁起がいい感じで楽しかったです」

【Oさんの関係(5)】 M・Fさん…神輿担ぎ経験あり。Oさんの中学の同級生。「練馬区氷川台の氷川神社にてH神輿会として参加しています。今年(平成二五年)は九月七日・八日です。宜しく願います」

【Oさんの関係(6)】 Z・Sさん…神輿担ぎ経験あり。昭和四九年生。「M・Fさんの後輩です。私は近年(四〜五年くらい)からH神輿会に参加し、楽しませて頂いています。宜しく願います」

【Oさんの関係(7)】 A・Kさん…初参加。昭和五四年生。「Oさんのお母様と一緒に会社で働いています。元々母の実家が神田にあり、神田祭を毎回見に来ておりました。今回は、Oさんのお母様にお声掛けを頂き、初めてかつがせて頂きました」

【Kさんの関係(1)】 T・Sさん…初参加。昭和四五年生。Kさんの行政書士のつながり。「神田界限に一〇年おりますが初めて女みこしを知り参加いたしました。多数の参加であり担がずに済んで(問題発言か?)よかったです。でも大変たのしかったです、次回も参加いたします」

【Kさんの関係(2)】 T・Kさん…初参加。「Kさんのランニング友達です。今回、初めてみこしを担ぎました。あの衣装も着てみたかったし、みこしも前から担いでみたいと思っていました。念願がかなってうれしかったです。当日も本当に楽しくてしかたなかったです。ぜひ、また二年後も!!」

【Kさん(3)】C・Yさん…初参加。昭和三九年生。「Kさんを通じて、T・Kさん経由で、今年、生まれてはじめてのミコシをかつぎました！ありがとうございます！町内会の方々の準備、役員？の方の声掛け等、かつぎ手の集め方が大変だったとの事。二年後は、又、参加出来る様体力維持にガンバリます!!」

【Kさん(4)】K・Nさん…初参加。「Kさんの紹介で参加させていただきました。歴史ある祭りに縁あって参加させていただきました感謝しております。担いだことで縁かつぎになるかも、と勝手に思いこみ、また参加できればと思っております」

【一般(1)】H・Sさん…初参加(ただし、神輿担ぎの経験はあり)。「ブログを見て、参加させていただきました。お神輿を担ぐのが大好きです。血が騒ぎます。全員がイキが合ったときの一体感、感動は忘れられません。日本三大祭りの一つである神田祭に参加することができ、幸せに思います」

H・Sさんは、神輿同好会にも入ったことがあったが、知り合いがおらず、仲間ごとに分かれていたので、仲間に入れず上手くなじめなかった。その点、「元祖女みこし」は一人でも参加しやすい良さがある。また、半纏やダボシャツなどの衣裳も手ごろな値段で借りることができるので参加しやすかったという。女性だけで担げるのも安心して担げる利点であると話す。H・Sさんは、インターネット上で調べていて、「須田町ガールズ」(「元祖女みこし」の担ぎ手募集)のブログに出合い、平成二五年に応募した。

【一般(2)】Y・Tさん…初参加(ただし、神輿担ぎの経験はあり)。「H・Sさんの友達でお神輿を担ぐのは三回目でした。女神輿は初めてでしたが、とても担ぎやすかったです。一日を通して担いだのも初めてだったので、疲労感はありません。貴重な体験ができたという気持ちが強く残って、また参加したいと思っています」

【一般(3)】K・Nさん…初参加。「H・Sさんの友人で誘ってもらいました。下町(深川)出身ですが、昔はあまり興味はなく最近歳を経て下町文化が好きになってきました。もっと早く気が付いていれば…(笑)」

【一般(4)】E・Tさん…初参加。昭和四七年生。「今年二月～三月にかけて、九段下の千代田区生涯学習館にて、地域情報発信のためのフリーペーパーを製作する講座があり参加しました。各自興味のあるテーマで記事を作るということでしたので、以前から興味がありましたお祭りのテーマのグループに参加することになりました。グループは男性二名、女性二名でしたが、ちょうどその日に講

師としていらした方のフリーペーパーに神田須田町の女御輿担ぎ手募集の記事があり、それを見た参加者（男性）から女性の私たちにこの祭に参加して、その経緯などを取材してはどうか、という話がありました。正直、その時は全然気乗りしていませんでした。須田町会長に連絡を入れてインタビューをしたり、女御輿事務局に伺ったりするうちに自分の中で気持ちが少しずつ高まっていったかんじです。最初はこうしたらよいか全然分からずに後ろについて歩いていましたが地元の方に腕を捕まれて中に入れられて、必死に見よう見真似で担ぐうちに、これはどんどん自分から担いで楽しまないと損だなと思いました。普段出さない大きな声を出したり、宮入の時の気持ちの高ぶりなど、初めて経験することばかりでも楽しかったです。千代田区在住ですが、麴町地区なので神田祭に参加することは難しいと思っていたのでこのような機会に参加させていただいたことは本当に感謝しています。益々地元のが好きになりもっと知りたいと思いました。また再来年も参加させていただきたいと思っています」

（三）平成二五（二〇一三）年の参加者の特徴

以上の一五人からみえる参加者の特徴についてまとめると、以下のように整理できる。

- ① 「音楽仲間」「マラソン仲間」「同級生」「仕事」「生涯学習」といったつながりを媒介に「元祖女みこし」に参加している。
- ② 「元祖女みこし」への初参加者は、一五人のうち一三人（「女みこし担ぎ手募集係」Oさんの関係：七人中五人、Kさんの関係：四人中四人、一般：四人中四人）と、初参加の人が多数（約八七％）を占めている。
- ③ 初参加のうち、「次回（平成二七年）も参加したい」と明確に答えている人は、初参加の一三人中七人（Oさんの関係：五人中一人、Kさんの関係：四人中四人、一般：四人中二人）と、半数以上が再度の参加を希望している。
- ④ 初参加者のうち、女神輿を担いだ感想として、「楽しかった」などプラスの評価を明確に言語化している人が一三人中一人と、ほぼ全員に近く、「元祖女みこし」の体験を肯定的に捉えている。
- ⑤ プラスの評価のうち、「一体感」を言語化している人が一三人中二人、「感動」を言語化している人が一三人中一人、「気持ちが上がる」「高ぶる」を言語化している人が一三人中二人である。

以上からわかるのは、「元祖女みこし」は、初めての参加者が多数を占め、神輿担ぎ（連合渡御や神田神社への宮入）を通じて肯定的なイメージが形成されていることがわかる。

（四）平成二七（二〇一五）年の担ぎ手の実態―平成二五年との比較から―

次に、平成二七年の「元祖女みこし」の担ぎ手についてみておきたい。平成二七年の「元祖女みこし」の参加者は、「2015年衣裳貸し出し台帳」によると一八四人⁽⁴⁾である。平成四年の一四八人、平成二五年の一六九人と比較すると、参加者は増加傾向にある。

平成二五年の参加者のうち、先述した「女みこし担ぎ手募集係」の関係と「一般」の参加者のうち、分析対象とした一五人中一三人（八六・七％）が平成二七年の「元祖女みこし」にも参加した。参加者全体では、平成二五年に続き平成二七年も「元祖女みこし」に参加した人は、一八四人中六〇人（三二・六％）となり、約三割を占める⁽⁵⁾。こうしたリピーターがいる一方で、約六〇七割が平成二五年には参加しなかったが平成二七年に参加した人たちということができる。流動性の高い構造を持っていることがわかる。そこで、参加者が増加したグループと減少したグループに分類して主な事例についてみていきたい。

なお、ここでいう「一般」とは、先述したように、平成二五年に須田町中部町会に全くつながりを持たずブログで告知された担ぎ手募集に応募してきた人たちである。

《増加》

- ・「女みこし担ぎ手募集係」の関係…四七人（二五・五％）…平成二五年は三四人（二〇・一％）「一三人増加」
- ・町会青年部I氏（飲食店経営）の関係…一五人…平成二五年は六人「九人増加」
- ・二人以上のグループではなく一人の参加者…一人…平成二五年は二人「九人増加」
- ・「一般」前回ブログから応募したFさんの関係…八人…平成二五年は三人「五人増加」
- ・町会Y・Sさんの関係…一人…平成二五年は七人「四人増加」

- ・「一般」前回ブログから応募したSさんの関係…一〇人：平成二五年は七人「三人増加」
- ・「一般」前回ブログから応募したI・Cさんの関係…四人：平成二五年は二人「二人増加」
- ・町会Y氏の関係…七人：平成二五年は六人「一人増加」

《減少》

- ・町会O氏の関係…八人：平成二五年は一八人「一〇人減少」
- ・O靴店の関係…〇人：平成二五年は六人「六人減少」
- ・町会S・G氏の関係…〇人：平成二五年は六人「六人減少」
- ・ワテラス学生…〇人：平成二五年は四人「四人減少」
- ・町会N・K氏の関係…〇人：平成二五年は四人「四人減少」
- ・O治療院…二人：平成二五年は四人「二人減少」
- ・町会H氏の関係…〇人：平成二五年は二人「二人減少」
- ・町会青年部A氏の関係…九人：平成二五年は一〇人「二人減少」
- ・S信用金庫…三人：平成二五年は四人「一人減少」

主な増加したグループと減少したグループを挙げてみると、増加したのは、「女みこし担ぎ手募集係」の関係や平成二五年にブログ経由で応募した「一般」の参加者、二人以上のグループではなく一人の参加者、町会青年部I氏（飲食店経営）の関係である。平成二五年にブログ経由で初めて参加した「一般」の参加者が、友人を連れて参加し、その関係が増加していることがわかる。また、一人だけで応募した一人の参加者の拡大も特徴的である。反対に、減少したのは、複数の町会関係者のつながりである。また、誰も参加しなくなったグループが複数存在し、流動性の高さが窺える。

以上のように、「元祖女みこし」は、松平誠が指摘する「伝統型」の中に、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、様々な縁につながって一時的に結びつく「合衆型」の要素を併せ持っていることが指摘できる。

二、他町会の神田祭との比較

次に、他町会の神田祭と比較しておきたい。松平誠は、平成四（一九九二）年の調査から「動員される人々のなかに、半数ないし1／3の女性⁽⁶⁾」の参加者があることを指摘しているが、平成二五年および平成二七年の神田祭においては、半数ないし三分の一には必ずしも至っていないものの、女性の参加は増加傾向にあることが窺える。

平成二五年の神田祭について、神田神社への宮入実施町会を中心に五四町会と二連合（錦連合・小川町連合）を対象とした筆者の調査によると、「女性の参加者が多い」とする町会が九町会確認できた⁽⁷⁾。

平成二七年では、一部区間を女神輿にする町会が、神保町一丁目町会（日曜一七時頃の町内渡御）、内神田鎌倉町会（日曜・宮入後など）、神田鍛冶三会町会（金曜一九時の町内渡御）、神田淡路町二丁目町会（土曜一八時・ワテラス）、鍛冶町二丁目町会（金曜一八〜一九時・女性五〇人限定）、神田駅東地区連合（連合の子ども神輿が宮入を終え復路で連合の女神輿になる）などでみられた。こうした女性の参加者のニーズに応え、新たな参加者の開拓にもつなげようと、平成二七年は神田祭に先立ち、四月八日（水）の一九時からアーツ千代田3331を会場として、神田神社のバックアップと外神田連合の協力のもと、女性を対象とした神田祭入門講座が開催された。

なお、平成二五年に生涯学習の縁で「元祖女みこし」に初めて参加したE・Tさんは、この平成二七年の神田祭入門講座に参加していた。講座が開催された四月八日の時点では、平成二七年は神田祭のお囃子に参加する予定であったが、最終的に五月一〇日の「元祖女みこし」の巡幸に参加した。

しかしながら、「元祖女みこし」のように、町会に全くつながりを持たず、インターネット経由で町会の神田祭の担ぎ手募集に応募できる環境は、他町会ではあまり進んでいない。わずかに岩本町三丁目町会などでみられるに過ぎない⁽⁸⁾。多くが、何らかの町会員と

のつながりを媒介として町会の神田祭に担ぎ手として参加している現状がある。また、神田神社への宮入の際、「元祖女みこし」は、女性が町会神輿の華棒を担ぐことができる。担ぎ手全員が女性であるからであるが、内神田鎌倉町会では、宮入の際、町会神輿の華棒を女性が担ぐことを禁止しているという。そのため、平成二五年の「元祖女みこし」に参加する神輿同好会のあるメンバーは、須田町中部町会の「元祖女みこし」に参加している。

他方、性別にかかわらず、町会の神輿が宮入する際に、神田神社境内では、外部の担ぎ手に町会の神輿の華棒を担がせないという町会が複数存在する。そうした中で、須田町中部町会の「元祖女みこし」は、女性であれば、初参加であっても、神輿同好会のメンバーを含む町外からの参加者であっても、結果的には町会の神輿の華棒を担いで宮入できる条件を持っているということになる。

三、「合衆型」の都市祝祭との比較

今度は、不特定多数の個人が集う「合衆型」の都市祝祭と、「伝統型」の中に「合衆型」を併せ持つ「元祖女みこし」の比較を行い、他の都市祝祭との共通点と相違点を確認しておきたい。

(一) 高円寺の阿波おどり

高円寺の阿波おどりは、阿佐ヶ谷の七夕に対抗すべく、地元・氷川神社の祭礼への奉納、商店街の振興、地域住民の健全なレクリエーションを目的として、昭和三二（一九五七）年から始められた祭りである。徳島の阿波踊りをモチーフに高円寺の阿波おどりとして独自の発展を遂げた。踊り手は、阿波おどりの揃いの衣裳に身を包み、「連」と呼ばれるグループごとに参加する。

松平誠は、既に述べたように、「合衆型」の代表例として東京・高円寺の阿波おどりを挙げている。この高円寺の阿波おどりと伝統的な神社祭礼との違いについて、松平は、過去の氏子祭礼と異なるのは、氏索性が全く問題にされないことを指摘している。地縁的・血縁的・家族的制約もなく、多くの場合、個人単位である。個人に対して連から強制力は一部を除いてはなく、加入脱退や連から連への

移動も簡単に起こり、年々の顔ぶれが固定している連はほとんどない。また、女性の参加も多く年齢的・性的な拘束もなく、地域的（空間的）な拘束もないことを指摘している⁽⁹⁾。

あくまでも松平は、「伝統型」に対する「合衆型」の都市祝祭の相違点として、以上の特徴を挙げている。しかしながら、平成二五（二〇一三）年および平成二七年の神田祭の「元祖女みこし」も同様の傾向を持っていることがわかる。つまり、参加者が個人単位で非常に流動的である点が共通している。

「元祖女みこし」では、町会で半纏や鉢巻などの衣裳の貸出を神輿巡幸に先立って行っている。平成二七年、参加者が衣裳を町会の配布場所に受け取り来た際に、受け取りに来た本人に代わって、参加申し込みをしている友人の氏名がわからず、誰の申し込みなのか不明で、町会側が確認できず混乱する場面がみられた。あるサークルの友人同士で、お互いにあだ名で呼び合っていたため、本名をお互いに知らないままでこれまで済んできたという。参加するグループの友人同士の氏索性すら問題にされていないことがわかる。

もう一つ、高円寺の阿波おどりととの共通点は、高円寺の氷川神社の存在である。松平が指摘するように、高円寺の阿波おどりは、第一回から高円寺の氷川神社の例祭日に合わせて行われてきた⁽¹⁰⁾。筆者が平成二六年にみた高円寺の阿波おどりでは、高円寺の氷川神社の境内には屋台（出店）が出され、多くの参拝客で賑わっていた。神田神社と、そこに宮入を果たす「合衆型」の構造を持つ「元祖女みこし」と共通している。高円寺の阿波おどりにおいても、伝統的な神社の存在と「合衆型」の都市祝祭の共存がみられるのである。

（II）よさこい祭り

高知のよさこい祭りは、高知市の商工会議所の発案によって、戦後の経済復興と夏枯れの景気対策を目的に昭和二九（一九五四）年に開始された。チームによる踊りを中心とした祭りであり、徳島の阿波おどりに負けないような市民祭りを目指して始められた祭りである。奇抜なメイクに派手な衣装をまとい、カチカチと音の出る「鳴子」を手にして若者が踊るよさこい祭りの光景は著名である。その後、よさこい祭りは全国に展開していった。女性の参加も多い。

高知のよさこい祭りを分析した地理学の内田忠賢は、平成四（一九九二）年五月二〇日現在、踊り子隊のメンバー二九団体で、メン

バーを一般募集していて、応募者は毎年参加するチームを変えるものが多いことを指摘している。また、演者と観客が明確に区別され、阿波おどりやリオのカーニバルと同じで道路を舞台としたパレードを基本としている。さらに、テレビ等のメディアも大きく影響している点、「祈願祭」といった神事を行う点などを指摘している⁽¹¹⁾。内田は、翌平成五年五月では、一四四団体中五二団体が一般募集を開始したことを明らかにしている⁽¹²⁾。

全国のよさこい祭りを対象として分析を行った文化人類学・民俗学の矢島妙子は、北海道のYOSAKOIソーラン祭りについて、踊り隊は一般募集が多いことを明らかにしている⁽¹³⁾。また、矢島は、よさこい祭りとは神社との関わりについて、「高知においては現在でも祭りの最初には祈願祭が行なわれるが、宗教色は極めて弱い。しかし、新たに「よさこい稲荷神社」が誕生した。北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」は本来全く宗教色がないものはずが、大通公園の中に「よさこいソーラン神社」が祭りの期間中だけ設置される⁽¹⁴⁾」ことを指摘している。

高円寺の阿波おどりと同様に、よさこい祭りにおいても、「合衆型」の都市祝祭と神社が密接に関連していることがわかる。しかも、新たに「よさこい稲荷神社」「よさこいソーラン神社」が作られた点が重要である。既に、宇野正人が、神戸まつりの分析から伝統への指向を持つことを指摘している⁽¹⁵⁾が、現代の都市祝祭の賑わいの場に神社が求められている意識が垣間みられるのである。

(三) 遠征

「元祖女みこし」と「合衆型」の都市祝祭の共通点として、第三章第六節で指摘した「遠征」を挙げておく必要がある。民俗学の阿南透は、青森のねぶたのロサンゼルスへの遠征の分析において、「遠征」とは「祭りが本来行われる場を離れ、他の場所で演じられる例⁽¹⁶⁾」と定義している。つまり、神輿や山車などの祭礼の象徴が違う場所で巡幸などを行うことを意味する。

既に見たように、過去に「元祖女みこし」も神田祭を離れて遠征を行ったことがある。平成二(一九九〇)年の京都府亀岡市安町の「安町の夏祭り」、平成一五年の「江戸天下祭」、平成一六年の山口県萩市「萩夏まつり」で、それぞれ神輿の巡幸を行った。また、「元祖女みこし」の参加者に注目すれば、神輿そのものを初めて担ぐ参加者がいる一方で、神輿同好会のメンバーや神輿同好会に所属しな

くとも他の祭りに参加している人たちが少なからず確認できた。象徴的なのは、「元祖女みこし」の一般募集を担当する一人の女性が高円寺の阿波おどりに参加していることである。他の祭りに参加しつつ「元祖女みこし」に参加する人たちもいることが一つの特徴である。

高円寺の阿波おどりは、マスコミへの積極的進出と他の商店街・地域への連単位の参加・指導といった「外部出演」を行っている⁷⁾。また、高知のよさこい祭りでは、昭和四七（一九七二）年と四八年にニースのカーニバルに参加した。それを契機に、若年層の参加が拡大したとされる⁸⁾。ねぶた祭りとよさこい祭りは、遠征のみならず、模倣や移植が行われていることが明らかにされている⁹⁾。

（四）共通点と相違点

以上のように、神田祭の「元祖女みこし」と、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りなどの「合衆型」の都市祝祭について比較を行ってきた。まずは共通点について整理してみたい。

【共通点】

- ① 女性の参加者が多いこと。
- ② 一般募集で参加者が集められること。
- ③ 演者と観客の分離といった「パレード」という側面を持つこと。
- ④ 見せ場を持つこと。
- ⑤ 揃いの衣裳を持つこと。
- ⑥ テレビやインターネットなど情報メディアの影響が窺われること。
- ⑦ 神社や神事など伝統的な宗教と何らかのつながりを持つこと。

⑧他の祭りやイベントなどに「遠征」を行うこと。

なお、③に関しては、「元祖女みこし」では、宮入時や神田神社近くの渡御を除く、連合渡御がパレードに当たると考えられる。

次に、相違点について整理してみたい。

【相違点】

①高円寺の阿波おどりやよさこい祭りは、連やチームの踊りが中心となるため、祭りの前の練習が必要となる。しかし、「元祖女みこし」は、ほとんど練習をしなくとも参加できること。

②連やチームでは、練習からパレードまで、比較的長い時間、拘束される。しかし、「元祖女みこし」は、わずか一日で神田神社への宮入を体験でき、終わるとすぐに解散するなど、拘束される時間が短いこと。

③「元祖女みこし」は、演者と観客の分離といった「パレード」では終わらず、神田神社への宮入において演者と観客が入り乱れ、観客は演者に巻き込まれ、神輿の後をぞろぞろと付いて歩くという特徴があること。

④「元祖女みこし」は、町会の半纏を着るため、参加する神輿同好会や団体、個人の名前は表に出にくいいため、匿名性が高い。一方、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りは、踊りに参加する連やチームの名称が表に出やすいが個人の名前は表に出にくく匿名性が高い。しかし、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りは技芸を競う側面を持つことから個人の活躍にも観客のまなざしが向けられ、個別具体性が高い。つまり、「元祖女みこし」の方が、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りに比べ、より匿名性が高いこと。

つまり、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りに比べ、「元祖女みこし」の方が、練習の必要性が希薄で、拘束時間も少なく、初参加でも短時間で宮入というクライマックスを体験でき、より匿名性が高いということが指摘できる。

まとめ

本節では、神田祭における須田町中部町会の「元祖女みこし」の参加者に注目し、実態調査をもとに、「伝統型」の都市祝祭の中の「合衆型」について検討してきた。「元祖女みこし」と、高円寺の阿波おどりやよさこい祭りといった「合衆型」の都市祝祭を比較すると、氏素性が問われない点、参加者が一般募集され、流動性が高い点、神社と関わりを持つ点などが共通点としてみえてきた。その一方で、「合衆型」に比べ、「伝統型」に位置付けられる神田祭の「元祖女みこし」の方が、練習の必要性が希薄で、拘束時間も短く、初参加でも短時間で宮入と体験でき、より匿名性が高いという特徴を持っている。一般に、伝統的な祭礼の方が、練習も必要であり、準備を含め拘束時間も長く、参加者も限定されているというイメージがあるのではなからうか。しかしながら、実態としては、「元祖女みこし」にみる「伝統型」と、高円寺阿波おどりやよさこい祭りなどの「合衆型」では、逆転現象が起きているのである。

では、「元祖女みこし」は「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持った特殊な事例に過ぎないのだろうか。確かに、同じ神田祭の中では、先述したように一般募集をしている町会は少ない。しかしながら、町内の企業を町会の神田祭に呼び込むため、スーツ姿のまま半纏を羽織って神輿の町内渡御に参加できる事例がいくつかの町会でみられる。町内の「〇〇会社」の会社員という肩書は背負っているものの、多くが町外に住む不特定多数の個人であり、練習も必要なく拘束時間も金曜日夜の1〜2時間と短く、初参加も可能である。また、町会員の友だちの友だちのつながりで参加する不特定多数の個人が存在することも確かである。彼ら彼女らもほとんど神輿担ぎの練習をすることなく、短時間でしかも初参加でも参加できる条件が存在している。つまり、他の町会の神田祭においても、実態としては「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持っているのである。ただし、町内の企業や町会員の友人・知人であることといった制限は存在している。その制限を取り払ったのが、一般募集を行う「元祖女みこし」である。ただし、男性の参加制限は存在している。

男性の参加制限もなく、担ぎ手をインターネット (Facebook) を通じて一般募集を行っている町会が同じ東京の渋谷にある。渋谷の氏神・金王八幡宮の祭礼における道玄坂町会の神輿である⁽²⁰⁾。ただし、完全に一般募集というわけではなく、団体としての募集を止

めたため、実態としては個人申し込みの体裁をとり、町会員の友だちの友だちのネットワークを通じて参加する団体も少なくない。しかしながら、「元祖女みこし」と同様に、二人以上のグループではなく、一人で参加する個人も一定数存在しているのである。インターネット (Facebook) を通じて参加してくる人たちにも個人参加が含まれる。こうした構造を持つ「元祖女みこし」と道玄坂町会の神輿の参加者数は増加している。しかも両者とも神社祭礼であり、氏子町会の神輿である。

ただし、以上に挙げた要因だけで参加者が増加しているわけではない。もう一つ重要なのは、両者とも参加者が満足できるような魅力や見せ場を持っていることである。「元祖女みこし」は、伝統ある神田祭で神輿を担げるという魅力と神田神社への宮入という見せ場を持ち、道玄坂町会の神輿は、SHIBUYA109 前やスクランブル交差点など、多くの人たちが集まる渋谷の著名な場所を神輿を担いで巡幸できるという魅力を持っている。特に、道玄坂町会の神輿の場合、JR渋谷駅ハチ公口の駅前交番まで神輿を渡御させ、そこで交番に「突っ込め、突っ込め」といったパフォーマンスを行うことができる見せ場を持っている。

こうした神田神社や SHIBUYA109、スクランブル交差点などの人の集まる魅力ある場としてのイメージはメディアを通じて再生産されているのではなからうか。特に、神田神社の場合、冒頭に紹介したように、神田祭をはじめメディアに取り上げられる機会が多い。メディアを通じて、歴史ある神田神社と神田祭というブランドイメージが再生産されているのではなからうか。そこには、メディアの側のみならず、第四章第一節でみたように、神田神社とその神職の対応も影響していると考えられる。参加者が増加する一要因として、メディアの影響が考えられるのである。メディアと神田神社及び神田祭の関係の分析は、今後の大きな課題である。

このように、神田祭の「元祖女みこし」は、「伝統型」の都市祝祭の中に一般募集という不特定多数の個人が参加できる「合衆型」の要素を併せ持つことによって参加者は増加している。それは、神田祭というブランドイメージを背景に、女性であれば初参加でも手軽に神田神社の宮入を体験できる魅力を持っているからであると考ええる。

註

- (1) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年、三〇四頁。
- (2) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、一六頁。
- (3) 秋野淳一「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第四五輯、國學院大學大学院、平成二六年。
- (4) 町会手伝い婦人部三人、男性二人(院長とその息子さん)を除いた数。
- (5) ただし、町会青年部I氏の関係が平成二五年は六人であったがその詳細は不明である。そのため、平成二七年は、町会青年部I氏の関係は一五人であったが、平成二五年と平成二七年の両方に参加した人を〇人として、合計六〇人(三二・六%)で算出した。仮に六人全員だとしても六六人で三五・九%となる。いずれにしても約三割を占めるということができる。
- (6) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (7) 第三章第一節参照。初出は秋野淳一「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」『國學院雜誌』第一一六卷第一号、國學院大學、平成二七年。
- (8) 平成二五年の神田祭を対象とした筆者の調査に基づく。
- (9) 松平誠「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」『季刊人類学』第一九卷第二号、京都大学人類学研究会、昭和六三年、二二九頁。
- (10) 前掲松平「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」、二二一頁。
- (11) 内田忠賢「都市と祭り―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(1)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四五号、高知大学教育学部、平成五年。
- (12) 内田忠賢「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)―」『高知大学教育学部研究報告』第二部第四七号、高知大学教育学部、平成六年。
- (13) 矢島妙子「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―『常民文化』第三三号、成城大学常民文化研究会、平成二二年、三一頁。
- (14) 前掲矢島「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―、三七〇三頁。
- (15) 宇野正人「都市祭における伝統への指向―神戸まつり―」『日本民俗学』第二二八号、日本民俗学会、昭和五五年。
- (16) 阿南透「祭りの海外遠征―ロサンゼルス青青森ねぶた―」『情報と社会』第一八号、江戸川大学、平成二〇年、二二頁。
- (17) 前掲松平「現代都市祝祭の構成―高円寺阿波おどり―」、二二八頁。
- (18) 前掲内田「地域イベントの社会と空間―高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)―」、四頁。
- (19) 阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子「祭りの「旅」―「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植―」内田忠賢編『よさこい/YOSAKOI学リーディングス』、開成出版、平成一五年。
- (20) 秋野淳一「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」古沢広祐責任編集『共存学3…復興・地域の創生、リスク世界のゆくえ』弘文堂、平成二七年。

結論 都市祭りの宗教学

なぜ、戦後の地域社会が変容する中で、大都市・東京の神田祭は盛んになっているのか。

本研究では、都市祭りの盛衰に注目し、社会変動によって祭りの衰退する要素だけでなく、祭りの拡大する要素の両面を踏まえ、そこから社会変動と宗教の関係を明らかにすることを目的に考察を行ってきた。そのため、拡大・縮小の両面を持つと考えられる都市祭りを対象とし、特に社会変動の影響が顕著に表われてくることが想定される大都市の祭りに注目した。祇園祭、天神祭、三社祭、山王祭、神田祭といった大きな賑わいを作る大都市の祭りのうち、神田祭を分析対象としたのは、実証的な調査データを伴った先行研究が複数存在し、都市祭りの盛衰を実証的に比較検討できると判断したからである。

その結果、都市祭りの拡大につながる四つの特徴が明らかになった。それは、「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」「結集のための核の存在」「個人の活躍（人的要因）」「非日常化するイベント」である。本章では、この四つの特徴について整理し、それをもとに、「神なき時代の祭り」といわれる現代の都市祭りの宗教性について考察を加えておきたい。

一、都市祝祭と町内の祭りの複合構造

まず、現代の神田祭は、都市祝祭と町内の祭りの複合構造で構成されていることが指摘できる。神田祭の祭礼行事でみると、都市祝祭は、神田神社への宮入や秋葉原中央通りの連合渡御（おまつり広場）のような観客が多い部分である。一方で、町内の祭りは、神輿や山車の町内渡御、各神酒所における神事を含めた行事など、観客がほとんどいないか少ない部分である。この両者の間には、観客が少ない連合渡御がある。多数の観客で賑わう都市祝祭の要素と、観客が少ない町内の祭りとしての要素の複合構造で構成されている。複合構造になっているのは、こうした祭礼の構造のみならず、祭りの担い手の動員においても同様である。

これまで繰り返し指摘してきたように、戦後の地域社会の変容の中で、町内の居住人口は減少した。昭和四三（一九六八）年から平成四（一九九二）年にかけて神田においても、松平誠が指摘⁽¹⁾するように「脱地域化」が進み、祭りの担い手は町内だけでは賅いきれず、町内の神輿巡幸を維持するためには、町外から祭りの担い手を動員せざるを得なくなった。平成二五年・二七年においても、町内の居住者そのものが減少した町会（錦町二丁目・錦町三丁目町会、田代会など）と、日本橋地区のように、昔からの町内に暮す住民は減少したが、再開発によってマンションが建ち、居住者の多くを新住民が占めている町会（東神田町会、東日本橋二丁目町会など）が存在する。新住民が増えた町会でも、新住民の神田祭をはじめとした町会活動への参加はあまり進んでいない。平成四年から平成二五年・二七年に至る間には、再開発によってマンションが建ち居住人口が増えた地域があるものの、新住民の大人の参加は進まず、松平が挙げた動員方法を含めた複数の動員方法を組み込みながら町会の神輿巡幸を維持している現状がある。そのため、既に、松平誠が平成四年の神田祭の分析から指摘するように、町会が地域祭礼の実施機関として役割（役割動員）を果たしているものの、祭りの担い手（一般動員）は、神輿同好会、様々なネットワークを通じて参加する町内会員外の人たち、女性といった多くを町内会員以外から動員するように変化した。つまり、町会ごとに祭礼組織（祭典委員会など）を設置して町内の内部で神田祭を主催・運営するものの、その祭りの担い手は町会の外側を含めた様々なネットワークに頼るようになった。

また、昭和四三年から平成四年にかけては、町内渡御や連合渡御といった「神田祭Ⅱ神輿担ぎ」のイメージが強まったが、平成四年から平成二五年・二七年にかけては、「神田祭Ⅱ神輿担ぎ」のイメージが強いことに変化がないが、観客の少ない町内渡御よりも観客の多い宮入や連合渡御を重視する傾向に変化した。つまり、「神田祭Ⅱ連合渡御・宮入」のイメージが拡大した。しかも、神輿の担ぎ手そのものの数は増加している。昭和四三年と平成四年の神田祭を比較すると、町会の神輿への参加者数そのものが増加している。平成二五年・二七年においても、平成四年と同様に、連合渡御や神田神社へ宮入を行う町会で多数の担ぎ手を集めて神輿の巡幸を続けている。例えば、須田町中部町会の「元祖女みこし」においては、平成二年に一四八人であった参加者は、平成二五年に一六九人、平成二七年に一八四人と増加している。さらに、須田町中部町会では、平成二年と平成二五年の間には、神輿を新調し、以前の神輿に比べると新しい神輿の方が大型化している。観客の多い神田神社への宮入や連合渡御の魅力が担ぎ手の動員を維持・拡大し、町会の神輿巡幸を支

えている。都市祝祭の要素を拡大させながら、町会を実施機関とする町内の祭りを支えている構造が見て取れるのである。

こうした都市祝祭の担い手、すなわち一般動員のあり方についても、平成四年から平成二五年・二七年にかけて変化が生じている。神輿同好会の特定の町会への定着、他町会の参加と相互交流の実態、企業の参加など、明らかとなった事実を次に整理しておきたい。

(一) 都市祝祭の担い手（スル側の顔ぶれ）

神輿同好会の定着と「祭縁」の拡大

清水純が平成二一（二〇〇九）年を中心とした神田祭調査において、町会に参加する神輿同好会は特定の神輿同好会が特定の町会の神田祭に定着していることを明らかにしている⁽²⁾。平成二五年・二七年においても、同様の傾向が窺え、神輿同好会の参加率が八割を超える町会（須田町南部町会や東神田豊島町会など）では、神輿を担ぐ際に町会の半纏ではなく、神輿同好会の半纏の着用を認めている。しかしながら、神輿同好会の参加は町会の神田祭にとどまり、他の町会の行事や普段の町会活動には参加しない、あくまで祭りの際の縁である「祭縁」にとどまっていることを指摘している⁽³⁾。確かに、平成二五年・二七年の神田祭に参加する神輿同好会の多くは「祭縁」にとどまっている。ただし、そうではない事例も明らかとなった。栄町会では、神田祭を手伝う神輿同好会のメンバーが「ふれ合い広場」や夏の納涼会を手伝う事例もみられた。神田祭での「祭縁」が町会の神田祭以外の年中行事へ拡大した形である。

こうした「祭縁」の拡大は、新宿区西早稲田地区の事例にもみられる。八木橋伸浩は、同地区の天祖神社の祭礼に参加する神輿同好会のメンバーが、大晦日の天祖神社の越年祭（お神酒係を担当）、四月の「桜まつり」（焼きそばの調理を担当）、七月と一二月の「お地蔵様（源兵衛地蔵）の縁日」（出店の調理を担当）といった地区の年中行事へ参加する実態を明らかにして、「町会や商店会の役員たちとは親しいつきあいの関係が結ばれているといつてよい」と指摘している⁽⁴⁾。

他町会の参加者と「相互乗り入れ」のネットワーク

神田祭の蔭祭における本町一丁目町会と室町一丁目会が日枝神社の氏子町会（日本橋六之部の町会）である日本橋の町会の山王祭へ参加し、山王祭が蔭祭のときには、日枝神社の日本橋の氏子町会（日本橋六之部の町会）が室町一丁目会の神田祭に参加し、神輿を担ぐといった「相互乗り入れ」を行う町会が複数でみられた。背景には、自分たちの祭りを行うときには、神輿巡幸の警備や交通誘導など、祭りを支える側で神輿担ぎを楽しむことはできないが、他の町会の祭りに参加して、自分たちの楽しむ祭りを行っている。神田祭では、東神田町会のように、町会青年部が年間を通して、氏子外のような祭りに参加して、いわば他の祭りへの遠征が青年部の年中行事化している。また、神田和泉町会の蔭祭のように、やはり本祭では祭りを支える側で祭りを楽しむことができないため、周辺の町会の青年部と一緒に蔭祭の神輿巡幸を行い、観客はほとんどいなくとも青年部同志が楽しめる場を形成している。

茨城県常総市水街道榮睦における東神田町会の神田祭への参加が榮睦の祭礼への東神田町会青年部の参加、そして榮睦の地元が被災した際には、復興支援の活動に町会青年部が入った事例も確認できた。これも神田祭を通じた「祭縁」が発展した形である。ただし、神輿同好会といっても実態としては町会の青年部であり、そうした意味では、他町会との「相互乗り入れ」のネットワークが機能して「祭縁」が拡大したとみることもできるかもしれない。

企業参加の拡大

様々なネットワークを通じて参加してくる人たちの中で、特筆すべきは、企業の会社員の存在である。町内企業といっても、例えば、岩本町三丁目町会では、町内に山崎製パンの本社が立地し、平成二五（二〇一三）年の神田祭において同社の社員三〇〇人が神田祭に参加した。岩本町三丁目町会では、山崎製パンのほか、本間組二〇人、田島ルーフィング二〇人、貝印一〇人が参加し、企業の参加率が七〇%を超える。このほか、須田町北部町会では、町会の戦略として神輿同好会からの脱却を図り、企業との関係性を重視する。住民がほとんどいない大手・丸の内町会では、会社員が一〇〇〇人規模で史蹟・将門塚保存会大神輿を担ぎ巡幸を行う事例も同様である。こうした企業との関係を重視する町会が複数あり、町内企業にみせ、交流を図る金曜日の神輿巡幸や懇親会、蔭祭の年のイベントなどが拡大している。企業との関係を良好にし、町会への寄付金を出資してもらうとともに、人員も動員できるような場として神田祭

を捉えている。つまり、「社縁」(会社縁)の拡大は、金曜日の祭りの創出といった町会の神田祭の行事構成に影響を与えとともに、蔭祭におけるイベントの実施など、町会の年中行事にも影響を与えている。

女性の参加者の拡大

平成四(一九九二)年の神田祭の分析から松平誠が指摘するように、「動員される人々の中に半数ないし三分の一が女性である」とは必ずしもいえないものの、女性の参加者が増加傾向にあることが窺える。平成二七年の神田祭では、一部区間を女神輿にする町会が複数でみられた。

神輿巡幸の全区間を女神輿として巡幸する須田町中部町会の「元祖女みこし」では、女性の担ぎ手を一般募集によって集めているが、参加者数は増加している。平成二五年と平成二七年の参加者の実態から、松平誠が日本の都市祝祭類型⁽⁵⁾として挙げた「伝統型」の中に、不特定多数の個人が集える「合衆型」の要素を持っていることが確認できた。一般募集に応募する参加者は、平成二五年と平成二七年の参加者を比較すると二回とも参加した人は約三割にとどまっていることが判明した。極めて流動性が高い構造を持っていることが指摘できる。祭りをミル側が町内に全く縁を持たずとも一般募集を通じて、祭りをスル側になることができる構造を「元祖女みこし」は持っている。中野紀和が明らかにした小倉祇園太鼓の有志チーム⁽⁶⁾に近い存在である。ただし、女性限定で男性は排除される。

新住民の子ども参加の拡大

再開発によってファミリータイプのマンションが増加した日本橋地区では、新住民の大人の神田祭や町会活動への参加は、蠣一共和会を除き、あまり進んでいない。その一方で、町会の曳き太鼓に参加する新住民の子どもが増加し、その親がついて歩くという光景がみられた。子ども神輿への参加は少ないが曳き太鼓(山車)への参加が集中するという特徴がみられる。岩本町・東神田地区連合の神田松枝町会の「羽衣」山車の曳き手にもマンションの子どもの多数参加した。平成二八(二〇一六)年の東日本橋二丁目町会の蔭祭における子ども神輿と曳き太鼓(山車)の町内渡御には、九八人の子どもが参加し、その親がついて歩く光景がみられた。また普段は町

会活動に参加していないマンションの女性にも町会活動に参加する切っ掛けの場となっていることが判明した。

平成二八年の宮本町会の蔭祭においては、曳き太鼓（山車）の巡幸はないが子ども神輿の巡幸を行う。小学生未満から小学五年生までの子ども一四〇人が参加し、学年単位で交互に神輿を担いだり、希望する子どもに拍子木を叩かせるなど、巡幸を工夫し、付き添う親も多数行列について歩いた。

ただし、神田祭と蔭祭における曳き太鼓と子ども神輿の町内渡御では観客をほとんどみることができない。付き添う親や宮本町会のように同行する小学校の教員に見守られながら行われる祭りである。合唱コンクールや文化祭などの発表の場にも近い要素を持っている。しかし、参加する子どもは活き活きと楽しみ、子どもの親はその様子を記録しようと、デジタルカメラや携帯などを使って写真や動画で盛んに撮影する光景がみられた。

（二）町内にとつての祭り（祭りを支える側の論理）

松平誠は、平成四（一九九二）年の神田祭調査から、町内会（町会）が依然として地域祭礼の実施機関としての役割を確実に果しつつあると指摘した。平成二五年・二七年の神田祭においても、対象となった全ての町会で祭典委員を置き、多くの町会で祭典委員会などの祭りの運営組織を設置した。町会長や町会役員が祭典委員や祭典委員長などに就き、青年部や婦人部などを動員し、町会が神田祭を実施する機関としての役割を担っている点に変化はない。ただし、「確実に果しつつある」とはいえない変化もないわけではない。しかしながら、町会を単位として祭礼組織を設置し、役割動員を行う点は持続している。

では、なぜ町外から神輿の担ぎ手を動員してまで神田祭を続けるのであろうか。今度は、町内にとつての祭りの意味や役割について考えてみたい。

町内の祭りを続ける意味を考える上で、平成二五年の神田祭調査から明らかとなった各町会の「祭りの評価」が参考となる。町会にとつて神田祭がどのような場になっているかを質問すると、類似例を含み「地域・町会（町会員）の結束や絆の確認、親睦や活性化の場」が三三町会、「伝統・ブランド」が一二町会、「町内・町会で最大のイベント・行事」が一〇町会で回答した。「祭りをやるために町

会がある」(神田和泉町会)、「お祭りは町会の最後の抛り所」(岩本町一丁目町会)など「地域」や「町内」を強調した評価が増加し、伝統やブランド力を有し、町会のつながりを維持するための最大の行事として神田祭が位置付けられていることがわかる。

つまり、町会役員や青年部・婦人部などの町会組織の共同性を、観念的であっても確認する場として神田祭があることが指摘できる。それも町会のメンバーにとつては、交通誘導や警備など、祭りを支える側に徹することから、祭儀性が強く表れている。いわば「多数の観客がいる祭儀」として神田祭があることが窺える。祭りをスル側から支える側に移行することによって「祭儀と祝祭の逆転」が起こっているのではなからうか。蔭祭で神輿の巡幸を行う神田和泉町会では、蔭祭において町会青年部が祭りを支える側からスル側へ移行し、いわば「観客のみえない祝祭」になっている。

なお、先行研究では、一つの都市祭りの構造を、複合構造として捉える研究が複数存在している。藪田稔の「祭儀」と「祝祭」⁽⁷⁾、宇野正人の「区行事」と「中央行事」⁽⁸⁾、和崎春日の「アーバン・エスニテイのレベル」と「祝祭のコミュニティのレベル」⁽⁹⁾、玉野和志の「ローカルコミュニティのレベル」と「都市のレベル」⁽¹⁰⁾などがある。これらの研究を参照しながら、本結論を導いている。

二、結集のための核の存在

都市祝祭の要素と町内の祭りの要素をつなぐ結集のための核として、祭礼の象徴(神輿や山車など)と小祠、神田神社の存在があることがわかる。当前といえば当然だが、「神なき祭りの時代」には、こうした結集のための核の役割が逆に増しているのではないかと考えるからである。まずは、町会の祭礼の象徴について整理しておきたい。

(一) 祭礼の象徴の存在

神輿や山車などの祭礼の象徴があるがゆえに、神田祭への参加を続け、町内渡御や連合渡御、神田神社への神輿宮入参拝を持続する町会が数多く存在する。特に、神輿の巡幸を維持するためには、町外や様々なネットワークを通じて多数の担ぎ手を動員する必要がある

る。そのためには、担ぎ手が満足するような観客が多数訪れる賑わいや見せ場の存在が不可欠である。そこで、祭礼の象徴を媒介にした連合渡御や宮入を開始するのである。

中神田十三ヶ町連合の土曜日の「八町会合わせ」（連合渡御）、外神田連合の「おまつり広場」の開始、日本橋地区の神田神社の宮入の開始など、ここ一〇〜一五年の行事変化からも裏付けられる。つまり、神輿を媒介にして、町会の神田祭の賑やかなものにするともに、それによって、松平誠が秩父祭の分析で指摘⁽¹⁾するようになり、観念的であっても町内の共同性が確認される。都市祝祭と町内の祭りは、祭礼の象徴の存在を介して、維持・拡大しているといえるのではなからうか。そうした意味では、神輿や山車といった祭礼の象徴の存在が神田祭の盛衰に重要な役割を果たしている。だからこそ、たとえ観念的であっても町内共同の危機においては、祭礼の象徴が新たに誕生したり、復活したりするのである。須田町中部町会の「元祖女みこし」の誕生（町会の神輿の復活）、紺屋町南町会のダンボール製神輿の誕生と神田神社への宮入の開始、神臺會の町会神輿の修復・宮入の復活を経て、秋葉原中央通りの「おまつり広場」の開始、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車の神田神社への展示と町内の祭礼行事の復活（神酒所復活・神輿の町内渡御の復活）などの事例が確認できた。祭礼の象徴の誕生や復活を通して、町内の祭礼行事を再活性化し、町内共同のイメージを復活させていると考えられる。

一方で、祭礼の象徴を譲る（手放す）ことによって、はじめて祭りへの参加を一旦やめることができると考えられる。かつて神田祭は山車の祭りであったが、町内の山車を他の地域へ譲る（売る）ことによって、新たな祭礼の象徴としての町神輿が誕生している。壊したりするのではなく、他の場所で祭礼の象徴が存在し続けるという前提があってはじめて、手放すことができるのではないかと考えられる。また、神輿や山車を展示するのは、神輿や山車の巡幸が困難な場合、祭礼の象徴を展示してみせ、それによって町内の共同のイメージを担保しているといえるのかもしれない。

そして、こうした祭礼の象徴を媒介に、その巡幸を担う様々な人的ネットワークを動員することによって、新たなつながりが形成されている。町会青年部の他町会の祭りへの遠征、他町会との「相互乗り入れ」のネットワークの形成、神輿同好会の町会年中行事への参加拡大など、祭礼の象徴がなければ、起こり得なかった新たな町内共同のイメージを支えるシステムとなっている。つまり、「祭縁」

の拡大は、いわば「神輿の縁」「山車の縁」ともいえ、祭礼の象徴の存在によって、町内共同の外延を拡大し、内包を強化している（1）といえるのではなからうか。こうした祭礼の象徴の存在が神田祭の拡大へ重要な役割を果たしているからこそ、「神田祭Ⅱ神輿担ぎ」「神田祭Ⅱ連合渡御・宮入」といったイメージが拡大しているといえる。

（二）町会や地区連合で祀る小祠の存在

神田祭に参加する氏子町会において、町会や地区連合で小祠を祀っているところが複数みられる。多くが稲荷神社である。具体的には、五十稲荷神社（小川町三丁目南部町会）、幸徳稲荷神社（小川町連合）、御宿稲荷神社（内神田鎌倉町会）、佐竹稲荷神社（内神田旭町町会）、豊潤稲荷神社（須田町中部町会）、出世稲荷神社（須田町北部町会）、司一町会（神田神社末社・御宿稲荷神社）、真徳稲荷神社（司町二丁目町会）、大柳稲荷神社（多町一丁目町会）、松尾神社・一八稲荷神社（多町二丁目町会）、妻恋神社（神田同朋町会）、草分稲荷神社（秋葉原東部地区連合）、柳森神社（神田須田町二丁目町会）、繁栄お玉稲荷（神田松枝町会）、金山神社（神田東紺町会）、竹森神社（小伝馬町三之部町会）、富沢稲荷神社（富沢町町会）、茶之木神社（人形町一丁目町会）、久松稲荷大明神（久松町町会）、元徳稲荷神社・網敷天満神社（浜町二丁目西部町会）、浜町神社（浜町三丁目西部町会）、金比羅神社（中洲町会）などがある。特に、中神田十三ヶ町連合に集中し、八町会がそれぞれ小祠を祀る。それぞれの小祠においては、例祭や初午祭、新年などに町会や地区連合で祭祀を行っている。町会や地区連合の人たちが集い、共同を確認する祭儀の場になっているといえる。

このうち、神田祭において小祠に町会の神酒所が置かれたり、小祠を起点に神輿や山車の巡幸が行われるのは、幸徳稲荷神社、佐竹稲荷神社、金山神社、柳森神社、草分稲荷神社、竹森神社、富沢稲荷神社、久松稲荷大明神、元徳稲荷神社・網敷天満神社、浜町神社、金比羅神社などである。これらの小祠（神社名・奉賛会・崇敬会など）から奉納金が町会の神酒所へ納められる。また、小川町連合の神輿は、小川町連合で祀る幸徳稲荷神社の宮神輿としての性格を有していて、各町内の巡幸や神田神社への宮入を行っている。秋葉原東部地区連合で祀る草分稲荷神社は、二月に初午祭を行うが、神田祭以外で地区連合で祭儀を行う重要な機会となっている。

こうした小祠の存在は、町会の年中行事にも反映していると考えられる。例えば、神田駅東地区連合では夜警を合同で行い、外神田

連合では十二睦や外神田文化体育会といった合同で行う行事や活動が拡大しているが、中神田十三ヶ町連合では、夜警も個別町会で実施し、地区連合で行う行事も一定数あるものの、各町会の活動も依然として維持されている。中神田十三ヶ町連合では、八町会で何らの小祠の祭祀を町会の年中行事の中で行っている。個別町会の活動を維持する上でも小祠は、一定の存在感を持っているといえるのかもしれない。観客はみれないが、町会役員や町会関係者が結集し、町内共同のイメージを確認する貴重な機会になっている。

このほか、史蹟将門塚（大手・丸の内町会、史蹟将門塚保存会）、薬研堀不動院（東日本橋二丁目町会）、清正公寺（浜二町会）といった宗教的施設と神田祭の関わりが指摘できる。将門塚は、神田神社の旧蹟地であり、神幸祭において神事が行われるのみならず、将門塚を起点として、史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸が行われる。薬研堀不動院は両国旧御飯屋であり、神幸祭では鳳輦・神輿に昼御饌を奉る。また、地元の東日本橋二丁目町会の神酒所が設けられ、蔭祭においてもここを起点として町内渡御が行われる。清正公寺前の浜町公園には神田祭において浜二町会の神酒所が作られ、清正公寺から町会へ奉納金が納められる。

以上のように、町会や地区連合で祀る小祠や宗教的施設は、町内共同のイメージを確認する結集のための核として存在し、町会の神田祭を内側から支えているといえるのではなからうか。

（三）神田神社の存在

神田祭は、神田神社の大祭である。そのため、神田神社の存在が大きいのは自明のことであり、わざわざ指摘する必要性はないのではないかと思われる向きもあるかもしれない。しかしながら、戦後の地域社会が変容する中で、神田神社の存在する意味が逆に増しているのではないかと考えるからである。

その一つ目の理由は、神田神社が都市祝祭の要素と町内の祭りの要素をつなぐ存在であることにある。多数の観客で賑わい、宮入をする各町会の神輿の担ぎ手にとっては魅力的な場が神田神社の神輿宮入にある。と同時に、それは宮入をする各町会の役員や関係者にとっても、町内共同のイメージを確認する貴重な機会であり、特に町会長にとっては晴れの舞台である。

二つ目の理由は、神田神社が年間を通じて賑わう場であることである。初詣、企業の集団参拝（仕事始めの日）、だいきく祭り、節分

祭、桜まつり、例祭、大祓式、七夕、納涼祭、納涼祭（平成二八年から開始）、新嘗祭、除夜祭など、複数の賑わいの機会がある。特に、初詣と仕事始めの集団参拝は都市祝祭といふべき不特定多数の人々が集い、マスメディアからも注目されている。

こうした不特定多数の人々が参拝に訪れる新年に氏子町会の複数の町会では、町会として神田神社へ昇殿参拝を行っている。都市祝祭と町内の祭りの複合構造は新年にもみられる。町会の年中行事が少ない町会では、神田祭や小祠の祭祀と同様に、町会単位で行う神田神社の初詣は、町内共同のイメージを確認するための貴重な機会になっている。

三つ目は、歴史ある神社としてのイメージが形作られていることである。江戸の総鎮守であり、徳川将軍が上覧した天下祭の流れを汲む神田祭など、伝統があり、現在も賑わいが絶えないというイメージが、神田神社や神田祭へさらなる人を集めているといえるのはなからうか。

以上のように、祭礼の象徴、町会や地区連合で祀る小祠、神田神社の存在が、結集のための核として都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、神田祭の拡大につながっていると考える。しかしながら、もう一步考察を深めていきたい。それは、これまで挙げた特徴の根幹に関する特徴がまだ残されているからである。

三、個人の活躍（人的要因）

現代の神田祭の隆盛を考える上で、個人の活躍を抜きにして語ることはできないといえる。それは、町会の特定の個人、神田神社の神職、都市祝祭に参加する個人の存在である。つまり、人的要因が神田祭の盛衰を考える上で重要な要素となっている。以下に、その特徴を順番にみていきたい。

（一）町会の特定の個人

祭礼の象徴の復活や誕生に大きく影響を与えたのは、町会の特定の個人の存在である。須田町中部町会の「元祖女みこし」、紺屋町南

町会のダンボール製神輿、神臺會の神輿と秋葉原中央通りの「おまつり広場」（聯合渡御）の形成など、多彩で個性的な特定の個人の活躍が大きく影響している。一方で、佐久間町四丁目町会では、町外の担ぎ手によって町会の神輿巡幸を行うのは自分たちの祭りではないと考え、当時の町会長の判断によって神輿の渡御を止め、神酒所に神輿を展示している時期があった。そして、町会最大の行事であるバス旅行の参加者が減る中、町会長が代わり、神輿巡幸を復活させ、新たに神田神社への宮入参拝を開始した事例もある。つまり、祭礼の象徴を復活・誕生させたり、聯合渡御を開始するのも町会の特定の個人であるとともに、神輿の巡幸を止めるのも町会の特定の個人であることがわかる。神田祭の盛衰には、町会の特定の個人の存在が密接に関わっていることが指摘できる。

（二）神田神社の神職

都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、祭礼の象徴の復活や誕生、聯合渡御や宮入の開始などを積極的に受け入れてきた神田神社の神職の力は、無視できないものがある。特に、神田神社宮司・大鳥居信史氏の神田祭を盛り上げようとする強い意志が都市祝祭の形成に大きく影響していることが窺われる。神田神社宮司の意志は、権宮司や各神職に受け継がれ、文化資源学会と協働で行う附祭の「復興」という新たな賑わいの形成につながっている。

また、町会の担当神職と町会の特定の個人との関わりが、室町一丁目町会のように、神田神社への神輿宮入の拡大にもつながっている。岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」山車においては、平成二五（二〇一三）年の「桃太郎」山車の神田神社への展示を契機に、二〇年振りに町会の神酒所を設置し、平成二七年には、町会神輿の町内渡御を復活させるなど、祭礼の象徴を神田神社へ受け入れることによって、町内共同の確認の機会を回復し、地域社会が再活性化している。「桃太郎」山車の展示においても、神田神社宮司や担当神職が積極的に関わり、「桃太郎」山車は最終的に神田明神資料館へ寄贈された。史蹟将門塚保存会の大神輿巡幸において、当初は神社から神輿を貸し出したり、蔭祭の年の巡幸を支えるなど神田神社の神職が密接に関わっている。

そして、神田神社の神職は、神田祭にとどまらず、神田神社の年中行事や日々の活動において、神社に賑わいの場を作る様々な取組みを行っている。企業との関わりをも重視する神田神社宮司の意志のもと、仕事始めの集団参拝も拡大した。「ラブライブ！」とのコラボ

ボレーションや、「こち亀絵巻」の奉納、納涼祭の開始など、現在進行形で様々な活動を行い、新たな賑わいを神社の場に作り、神田神社のイメージを形作っている。しかも、新しいイベントを行う一方で、天下祭の附祭の復活や明神塾、資料館の開館、巫女さん入門講座の開催など、歴史や伝統を重視し、そのブランド力を高めながらも、新しい要素を積極的に取り入れるところが鍵となっている。

つまり、歴史・伝統を踏まえながらも、新しい物語・文化を形成していくという神田神社の神職のスタンスが、神田祭や神田神社の年中行事に訪れる不特定多数の個人のニーズを捉え、多くの人の足を神社へ導いているといえるのではなからうか。実は、こうした柔軟な考え方は、町会の特定の個人も持っていて、神田神社神職の活動と連動しながら神田祭を盛んにしているといえる。いわば、祭儀性と祝祭性のせめぎ合いの中に、神田祭の拡大はあるのではなからうか。

(三) 不特定多数の個人

神田神社の神職や町会の特定の個人の活躍によって、神田祭には、特に神田神社周辺には不特定多数の観客が訪れる。不特定多数の個人が参加するのは、祭りをミル側としてではなく、祭りをスル側においても、不特定多数の個人が参加できる構造を持つ神輿がある。神輿の担ぎ手を一般募集する須田町中部町会の「元祖女みこし」である。町会に全くつながりを持っていなくても、女性限定ではあるが、ブログ経由で参加申し込みができ、祭りの半纏はレンタルで借りて参加することができる。中野紀和が指摘するミル側からスル側へ移行する際の受け皿になる小倉祇園太鼓の有志チームに近い存在である。また、松平誠の都市祝祭類型に基づくと、「伝統型」の中に「合衆型」を併せ持つ構造であるといえる。「元祖女みこし」の一般募集に応募した参加者のうち、平成二五(二〇一三)年と平成二七年の二回とも参加した人は、約三割にとどまり、極めて流動性が高い構造を持っている。

また、「元祖女みこし」は、祭りをスル側にとつて、初参加でも練習をせずに、わずか一日のうちに宮入を体験でき、匿名性が高く、準備も後片付けに参与する間もなく、弁当を貰って帰ることができる。練習に参加せず、チームで参加する必要性がないという意味では、神田祭の方が、よさこい祭りや高円寺の阿波おどりと比較して、より匿名性が高く、気軽に参加できるという側面も持っている。いわば「祭りのイベント化」といえそうな事例である。ただし、参加者へのインタビューから、初めての参加者が多数を占める中で、

神輿担ぎ（連合渡御や神田神社への宮入）を通じて「元祖女みこし」や神田祭へ肯定的なイメージが形成されている。しかも、少数ではあるが、「一体感」「感動」「気持ち上がる」といった感想を抱く人も存在している。

こうした担ぎ手の一般募集を行うのは神田祭においては、須田町中部町会や岩本町三丁目町会などとどまるが、町会員の友人の友人や町内企業の会社員、特定の町会に参加する神輿同好会の知り合い（同好会）も、町会につながる何らかの伝手を經由して参加している。町会に何も縁が無くても直接参加できる一般募集とは異なるが、参加者の実態としては、不特定多数の個人で構成されている。そうした意味では、神田祭は、「伝統型」の中に不特定多数の個人が集える「合衆型」を併せ持っているといえるのではなからうか。

とすると、現代の神田祭は、祭りがイベント化したものなのだろうか。小松和彦ら複数の研究者がいうように、「神なき祭り」として捉えられるべきものなのだろうか。あるいは芦田徹郎が指摘するような「祭りの日常化」として位置付けることができるのだろうか。最後に、現代の都市祭りの宗教性について考察していきたい。

四、非日常化するイベント ―都市祭りの宗教性―

小松和彦は、「神なき時代の祝祭空間」で、日常生活の都市化＝ハレ化の浸透によって、祭りの世俗化＝ケ化を促進し、ハレとケの対立が溶解していった。その結果、多種多様なハレの空間が常設され、消費空間が拡大することなどによって、「時代の潮流は、神のいる祭りから神なき時代への祭りへ、祭りからイベントへと、大きく変化している」⁽¹³⁾と指摘している。小松は、祭りとイベントの大きな違いは、神の祭祀の有無にあるとしている。祭りは、神とその信者との関係を確認・強化し、合わせて信者集団の結束も強化する。したがって、祭りは祭りの信者・担い手のための行事であり、信者によっていっさいが担われる。また、小松は、祭りは従来「神のいるイベント」であったともしている。それに対して、イベントは、主催者が意識するのは「神」ではなく「客」であって、主催者・出演者は客の反応を重視し、客を満足させるために「芸」や「食」やその他のモノを指し出す。「神饌」「芸能」「見せ物」「遊園地」の系譜につながるものはイベントと位置付けている。また、イベントの特徴として、期間が限定されている点にあり、それによってイベン

トがハレ的な性格を強く帯びてくるとしている。しかしながら、旧来の祭りも、資本主義の商品になるかどうかという選択を迫られ、それに応じた対応・変容をせざるをえなくなり、都市の大きな祭りも地域の小さな祭りも、神事から芸能・見せ物へと変貌することで生き延びようとしている。そして、新しい祭りであっても、人々がそれに馴染んでいるかが重要であり、その鍵を握っているのが「顧客」であるところに現代の特徴をみることができるとしている⁽¹⁴⁾。こうした小松の指摘は、日常生活における祝祭空間の拡大によって祭りの非日常性が希薄となり「祭りの日常化」(日常の祭り化)であるとする芦田徹郎の指摘とも一致する。小松のいう「ハレのケ化」が芦田のいう「祭りの日常化」に、小松のいう「ケのハレ化」が芦田のいう「日常の祭り化」に対応するといえる。とすると、現代の神田祭も「祭りの日常化」が進み、非日常性は希薄になったといえるのであろうか。そして、観客のニーズに答えるべく「祭りのイベント化」した現状なのだろうか。非日常性の希薄化は、「神なき祭り」あるいは「祭りの世俗化」の問題とも連動する。そこで、これまでの分析結果をふまえて検証しておきたい。まず、「祭りの日常化」について論じる。

(一) 現代の神田祭と「祭りの日常化」

芦田徹郎は、共同体の解体と祭りの日常化(日常の祭り化)とが現代の祭りの存在理由を危うくするのみならず、日常の祭り化とは逆に、現代の祭りは日常性からの脱却が難しい。日常生活が祭りに近づくのとは裏腹に、もともとの祭りは、日常生活からきれにくいとする。日常性という大海の中の孤島のような現代の祭りは、日常的な活動・価値・規範・利害などに包囲され、監視され、規制されつづけることになるとする⁽¹⁵⁾。つまり、芦田は、日常の祭り化と日常性からの脱却が難しいという二重の意味で「祭りの日常化」が進みそれによって、現代の祭りでは非日常性が希薄化していることを明らかにしている。そして、現在では共同体が幻想であるとすれば、おそらく非日常性も不可能である。現在の祭りやイベントの盛況は一見、日常の祭り化と日常性からの脱却が難しいという二重の意味での祭りの日常化に抵抗して、本来の祭りが復興しているようにみえるかもしれない。しかし、いかに非日常性を演出しても、実態は決して日常性を払拭できない「祭り」が、いつでもどこでも日常的に開催されているという実状から目をそらさなければ、現在の祭りの盛況それじたいが「祭りの日常化」の主要な一環を構成していることもわかる(第三の意味での「祭りの日常化」と指摘してい

る(16)。芦田の三つの意味での「祭りの日常化」を全て検証することは困難であるが、神田祭の実態に即して検討が可能なら二つ目の「祭りの日常化」、すなわち、日常性からの脱却が難しい、「脱日常化しにくい祭り」に絞って検討してみたい。

結論からいえば、神田祭においては、「脱日常化しにくい祭り」の要素はあるものの、それを非日常化させる構造を持っているといえる。このことが神田祭の隆盛につながっていると考える。

現代の神田祭において、町会半纏を着用し、足袋を履くなど、日常とは異なる装束に着替え、ある一定の時間、拘束されるという意味では、非日常性の要素が全くないわけではない。ただし、観客がほとんどいない、あるいは少ない町内渡御や連合渡御においては、祭りをスル側にとっては、非日常性は希薄であり、土曜日や日曜日の人通りの少ない通りを進んでいる間は、確かに、脱日常化しにくい祭りである。これは、数少ないミル側にとっても同様である。しかしながら、観客が多数を占める連合渡御や神田神社への宮入においては、脱日常化しにくい祭りが非日常化するといえる。特に、神田神社への宮入では、神社境内の神輿とその参加者、観客、参拝者などでごった返してカオス化し、否応なく祭りが非日常化する。そこには、お囃子の音、神輿の掛け声、屋台(出店)など、五感に働きかける要素も揃っている。そして、神職による修祓、神輿参加者一同での神田神社への参拝、町会長の挨拶と祭儀が行われる。参拝のあと、神田神社から出て行く神輿に、ぞろぞろと観客がついて歩く。まさに、ミル側を巻き込む盛んな祭りの様相が出現する。神田神社の神輿宮入参拝において、祝祭と祭儀が相乗的に表れる空間が神社境内に出現する。神輿の担ぎ手(スル側)にとっても、ミル側にとっても、祭りを支える側にとっても、クライマックスが宮入の場にある。そして、宮入が終わると、祭りは徐々に日常化していき、神輿の巡幸が終わると半纏を返し、弁当をもらって帰路に就くのである。この神田神社への宮入が都市祝祭と町内の祭りをつないでいる。

しかしながら、宮入の場面における一時的な非日常化であって、結局、現代の神田祭の隆盛は「祭りの日常化」の結果であるという結論に落ち着くのであろうか。否、「祭りの日常化」の結果であると言い切ることに躊躇を覚えるのである。なぜなら、神田祭において、町会の特定の個人の活躍によって祭礼の象徴が復活・誕生する事実は、祭礼の象徴の聖性がなくなり、世俗化しているとは必ずしもいえないからである。町会や地区連合で祀る小祠の存在も無視できない。そして、神田神社の宮司以下の神職によって維持・拡大が図ら

れている神田神社の存在も大きい。神職と町会の個人の活躍によって、結集のための核の聖性が維持され、祭りの日常化の浸透を抑えているのではなからうか。特に、神田神社の聖性は強化されているようにみえる。

(二) 現代の神田祭とイベント

次に、祭りとイベントの関係から、現代の神田祭について検討しておきたい。

祭りとイベントの関係を考える上で、参加者を一般募集し、不特定多数の個人が集う「元祖女みこし」をもとに考えておきたい。「元祖女みこし」は先述したように、「伝統型」の中に「合衆型」の構造を併せ持ち、「祭りのイベント化」を示す顕著な事例と考えるからである。衣装（半纏等）を借りられ、神輿そのものを始めて担ぐ人であっても、衣裳の着方も教えてもらうことができ、初参加で神田神社への宮入というクライマックスを体験できる。そして、神輿の巡幸が終わると、弁当をもらい帰路に就くことができる。よさこい祭りや高円寺の阿波おどりなどの「合衆型」の都市祝祭では、ある程度の練習が必要だが、「元祖女みこし」は練習の必要性が必ずしもない。そして、女性だけで担げるという安心感もある。不特定多数の個人が、それぞれの選択によって参加できる構造を持っている。言い換えれば、一回限りの参加で次回以降は参加しないという選択も可能である。そうした意味では、「元祖女みこし」の参加者にとってはイベント性が高いといえる。

しかしながら、「元祖女みこし」が単なるイベントかという点と必ずしもそうとはいえないと考える。なぜなら、これまで繰り返し述べてきたように、現代の神田祭は都市祝祭と町内の祭りの複合構造を持つことから、町内の祭りの側面についても考える必要がある。須田町中部町会の役員や関係者にとっては、観念的であっても町内共同のイメージを確認するという役割を持つことから祭りとしての性格を持つ。あくまでも、「元祖女みこし」の主役は、祭りをスル側ではなく、町内の側（祭りを支える側）にあると考えている。

また、儀礼的にも、御霊入れにおいて神輿に御霊を入れて、御霊を載せた「元祖女みこし」が町内を巡り、連合渡御を経て、神田神社への宮入を果す。そして、町会の役員、関係者の間では、御霊入れや神輿巡幸の後、神田祭終了後の町会の総会などで、直会が行われる。祭りを支える側にとっては祭儀性が強いといえる。

一方で、祭りをスル側にとっても、先述したように、「一体感」「感動」「気持ち上がる」といった感想を抱く人もいる。神田祭のあとに町会とは別にグループで集まり、「元祖女みこし」の映像をみながら、飲食をして盛り上がるという場も作られた。また、「元祖女みこし」の巡幸を観察していると、神田神社への宮入の当日、須田町中部町会の神酒所から神輿が発し、中神田十三ヶ町連合の神輿の集合場所である出世不動通りに向かうとき、かなり盛り上がる。初参加の担ぎ手も多く、慣れない緊張感もあり、必死に担ぎ、非常に意気が上がる。その分、非日常化するのではなからうか。そして、神田神社への宮入で盛り上がるの最高潮を迎える。「元祖女みこし」の参加者にとって神田祭は、少なくとも「非日常性化するイベント」であると考ええる。むしろ、「非日常化するイベント」であるからこそ、それを手軽に味わえる魅力によって「元祖女みこし」の参加者数は増加しているのではなからうか。また、三割のリピーターがいることも事実であり、そうした人たちにとっては、一回限りという「非日常化するイベント」が、毎回参加するうちにさらに祭り化していく方向性も残されている。

以上のように、「元祖女みこし」（祭礼の象徴）と神田神社という結集のための核が、都市祝祭と町内の祭りをつなぎ、それによってイベントを祭り化させ、現代の神田祭の賑わいを作っていると考える。宮入を行う他の町会の神田祭においても、不特定多数の個人が祭りをスル側として参加する実態を踏まえると、同様の構造が指摘できる。

（三）神社を媒介とした「イベントの祭り化」

宗教社会学の石井研士は、『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』の中で、大銀座まつりの一環として行われる銀座八丁神社めぐりを、祭りとイベントの視点から分析し、「マツリのイベント化」と「イベントのマツリ化」は絶えず一つの現象の中で共存していることを指摘する。そして、イベントも容易に都市の装置に組み込まれてしまうようなものではなく、カオス化する力を秘めながらその機会を待っている。イベントは、マツリの母体となる共同体を生み出しさえするかもしれないとする。それは、銀座の小祠が、祀られる母体を換え、災害や都市化の波に洗われながら、それでも現在まで存続してきた経緯にはこうしたことを物語っているように思えると重要な指摘をしている（177）。

文化人類学の森田三郎は、『祭りの文化人類学』の中で、イベントはその参加者がそれを通して自己のアイデンティティを確認することができてはじめて祭りとなる。逆に、誰のアイデンティティの確認にも関わらないものは祭りと呼ぶに値しないとしている。森田は、アイデンティティの確認の有無が祭りとイベントの違いとして考えている。そして、イベントから祭りになる、あるいは逆に祭りからイベントになるのは、めずらしいことではない。ただし、そこでの判定基準は、あくまでも参加者の側にあるとしている。そのため、参加者のつくるイベントと参加者の求める祭りが交わるとき、活性化された祭り⇨イベントが展開されると指摘している(18)。

また、森田は、「祭りの創造―よさこいネットワークを考える」という論文の中で、平成一一(一九九九)年のYOSAKOIソーラン祭りにおいて、祭りのメイン会場である大通公園に臨時に祀られたYOSAKOIソーラン神社を、同じ年にみた高知のよさこい祭りにおいて、高知大神宮の境内に祀られたよさこい稲荷神社を目撃し、両神社でご神体として、よさこい祭りの「鳴子」を祀っていることを明らかにした上で、「宗教とはまったく無関係な起源をもつこれらの祭りが、聖性を帯びたシンボルを育みつつあるようにみえる。人びとは鳴子に踊りがうまくなることや恋が成就することを願い、古くなった鳴子を供養するのである(19)」と指摘している。

文化人類学・民俗学の矢島妙子も、「高知においては現在でも祭りの最初には祈願祭が行なわれるが、宗教色は極めて弱い。しかし、新たに「よさこい稲荷神社」が誕生した。北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」は本来全く宗教色がないもののはずが、大通公園の中に「よさこいソーラン神社」が祭りの期間中だけ設置される(20)」ことを明らかにしている。

社会学の松平誠は、高円寺の阿波おどりが高円寺の氷川神社の祭礼に合わせて行われ始めたことを明らかにしている(21)。現在でも高円寺の阿波おどりが行われる日には、高円寺氷川神社の境内には多数の屋台(出店)が出され、参拝者で賑わっている。

都市人類学・民俗学の中野紀和は、小倉の八坂神社祭礼で行われる小倉祇園太鼓の分析から、神社祭礼であるはずの祇園太鼓は、風流の拡大によるイベント性の増大だけでなく、日常の論理を優先する企業という器を通じて、女性の参加が促されたことで、そこに内包されていた穢れ観が希薄になり、従来の神社祭礼とは異なるものに変わりつつあり、宗教性によって規定された様々な条件に捉われない「現代風流」とでもいうべき展開をみせると指摘する。そして、「有志チームを代表する伊藤氏による無法松乃碑に対する供養祭や、祭礼当日の小倉城での安全祈願祭といった、八坂神社とは別の擬似祭事が生み出されている。祭祀から神事の意味が抜け落ち、現代風

流が新たな神事を生み出すという現代の祭礼とイベントの姿が共存している(22)と位置付けている。無法松乃碑は、昭和一八(一九四三)年に公開された映画「無法松の一生」のゆかりの町に昭和三四年に建てられたものである。無法松乃碑を媒介とした「イベントの祭り化」の方向性が窺える。そして、小倉の八坂神社の祭礼は、現代の祭礼とイベントの複合構造であることがわかる。八坂神社を媒介として、両者をつないでいるとも解される。

以上のように、大銀座まつりと銀座八丁神社めぐりの小祠、YOSAKOIソーラン祭りとはYOSAKOIソーラン神社、よさこい祭りとはよさこい稲荷神社、あるいは高円寺の阿波おどりと氷川神社、小倉祇園太鼓と無法松之碑・八坂神社というように、一つの現象の中で、神社(小祠)を媒介として「イベントの祭り化」が図られているのではなからうか。

現代の神田祭においても、神田神社を媒介として、特に神輿宮入参拝において、「イベントの祭り化」が図られていると考える。神田神社の聖性によって、境内の賑わいが作られ、非日常性を帯びていると考える。この神社の聖性は、日々の神職による祭祀や活動、あるいは氏子町会の特定の個人や崇敬者によって強化されているのである。

以上のように、現代の神田祭は、宗教者である神職、そして町会役員・関係者などの特定の個人にとっては観念的であっても共同性の確認の場になっていることから「非日常化する祭り」であると考えられる。一方、祭りをスル側やミル側の個人にとっては、神田神社への宮入の場面において、少なくとも「非日常化するイベント」になっているといえるのではなからうか。そこに現代の神田祭の宗教性があると考ええる。それは、今までみてきたように、神田祭と他の都市祭りに共通した構造があることから、都市祭りの宗教性にもつながっていると考える。

神田祭以外にも、例えば、浅草の三社祭における浅草寺・浅草神社付近の賑いと神輿宮入の場面は、やはり日常とはどこか違った非日常性を帯びている。特に、宮神輿の宮出しと宮入の場面では機動隊が出動し、バリゲードを張り巡らせるほどの沸騰ぶりである。また、平成二八年の五月に見た新宿の花園神社の祭礼では、神社境内に屋台が所狭しと並び、多くの人で賑わうとともに、本社神輿・雷電神輿の宮入の光景は圧巻である。ミル側も否応なく巻き込まれて非日常化するのではなからうか。同年の八月にみた神奈川県川崎市稲毛神社の山王祭(稲毛まつり)においても、境内に屋台が所狭しと並び、多くの参拝客で賑わい孔雀・玉の二基の宮神輿が宮入す

る場面もまた非日常化の方向性を持つのではなからうか。賑わいのある現代の都市の神社祭礼では、神田祭と同じような構造を持っている可能性が指摘できる。

まとめ

現代の神田祭が盛んに行われているのは、神田神社神職と町会の特定の個人の活躍（人的要因）によって、神田神社や祭礼の象徴といたった結集のための核の聖性が強化されることによって都市祝祭と町内の祭り（祭儀）をつなぎ、不特定多数の個人が祭りの担い手や観客として集う賑わいの場を生み、非日常化するからであると考ええる。特に、人的要因と神田神社・祭礼の象徴の存在が大きい。つまり、現代の神田祭は、個人が神田神社や祭礼の象徴を媒介として、非日常化することによって一時的な共同性や擬似的なコミュニティを味わうことのできる場になっているといえる。町会にとっては、町会役員や関係者の共同のイメージを確認する祭儀であり、神輿や山車の参加者にとっては、イベント性を持つ祝祭である。両者とも神田神社への神輿宮入参拝の場面において、非日常化する。ただし、祭り単体では、柳川啓一が指摘⁽²³⁾するような宗教運動として社会を変革していくような力には至らず、共同体の再生にはつながらずとは言い難い。むしろ神職や町会の個人によって結集のための核の聖性が強化されるか否かが、その祭りの盛衰を左右すると考える。人的要因と結集のための核の有無によって、祭りが再聖化に向かったり、世俗化に向かったりするのはなからうか。祭りの盛衰の境目に、現代の都市祭りの宗教性を考える上でのヒントが隠されているといえる。

このように、現代の隆盛する都市祭りは、個人が結集のための核を媒介として賑わいを形成し、非日常化することによって一時的な共同性や擬似的なコミュニティ⁽²⁴⁾を味わうことのできる社会的な装置といえるのかもしれない。

今後、地域社会の変容と神田祭の関係について、引き続き実証的にデータを蓄積し経年的変化をみていく必要がある。そして、本研究で得られた知見と今後の神田祭研究をもとに、永田町・日枝神社の山王祭（特に、下町連合）に注目しながら現代の天下祭についても調査研究を進めていきたい。また、新宿・花園神社の祭礼、高円寺阿波おどりと氷川神社など、都市祝祭と神社の関係性についても

検討しながら、現代の都市祭りに関する理論構築を最終的には目指す予定である。

註

- (1) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論―」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (2) 清水純「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―」『日本民俗学』二七一号、日本民俗学会、平成二四年。
- (3) 前掲清水「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―」。
- (4) 八木橋伸浩「マチのつきあい―市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』ミネルヴァ書房、平成二七年、二〇一―二〇二頁。
- (5) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年。
- (6) 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』古今書院、平成一九年。
- (7) 藪田稔『祭りの現象学』弘文堂。
- (8) 宇野正人「都市祭における伝統への指向―神戸まつり―」『日本民俗学』第一二八号、日本民俗学会、昭和五五年。
- (9) 和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、昭和六二年。
- (10) 玉野和志「地域の世代的再生産と都市祭礼の復興―「小山両社祭」調査報告―」『人文学報』第二九〇号、東京都立大学人文学部、平成一〇年。
- (11) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、七一―一六八頁。
- (12) 松平誠による大國魂神社の祭礼の分析（前掲松平『都市祝祭の社会学』一七〇―二三九頁）を参考にしている。
- (13) 小松和彦「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りとイベント 現代の世相⑤』小学館、平成九年、三八頁。
- (14) 前掲小松「神なき時代の祝祭空間」六―三八頁。
- (15) 芦田徹郎『祭りと宗教の現代社会学』、世界思想社、平成一三年、三二頁。
- (16) 前掲芦田『祭りと宗教の現代社会学』、四八頁。
- (17) 石井研士『銀座の神々―都市に溶け込む宗教―』新曜社、平成六年、五四―五七頁。
- (18) 森田三郎『祭りの文化人類学』世界思想社、平成二年、一一九―一二二頁。
- (19) 森田三郎「祭りの創造―よさこいネットワークを考える―」日本生活学会編『生活学第二十四冊 祝祭の一〇〇年』ドメス出版、平成一二年、二五六頁。
- (20) 矢島妙子「よさこい祭り」の地域的展開―その予備的考察―、『常民文化』第三号、成城大学常民文化研究会、平成一二年、三七―三八頁。
- (21) 前掲松平『都市祝祭の社会学』、二四二―三二〇頁。
- (22) 前掲中野『小倉祇園太鼓の都市人類学―記憶・場所・身体―』、三二七頁。
- (23) 柳川啓一「祭りと現代」『國學院大學日本文化研究所紀要』第三四輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四五年。
- (24) 青木保の指摘（青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、平成一〇年、二八六―二八八頁）を参考にしている。

付 論 渋谷の地域社会の変容と都市祭り

第一節 渋谷・道玄坂の祭礼にみる新たな祭りの場の形成

平成二六（二〇一四）年は、「人口減少社会」をキーワードとして、現代日本の人口減少問題が大きな脚光を浴びる年となった。同年五月八日付で、岩手県知事と総務大臣を歴任した増田寛也が座長を務める日本創生会議・人口減少問題検討分科会がまとめた「消滅可能性都市896のリスト」（『成長を続ける21世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」』）は衝撃的な内容であった。地方から大都市への人口流出がそのまま続くと、若年女性（二九〜四〇歳）の人口が二〇四〇年には五割以上減少する市町村が八九六と全体の四九・八％に達するという試算が出された。若年女性が高い割合で流出し急激に人口減少が進む地域が多く存在し、いくら出生率が上がったとしても、将来的には消滅する危険性を指摘した。また、NHKの『クローズアップ現代』では、「極点社会」新たな人口減少クライシス」と題した番組を同年五月一日に放映した。同番組によると、NHKの独自調査に基づき、全国の五分の一に及ぶ自治体で、すでに高齢者が減少し、介護産業の経営が地方で成り立たなくなる危惧から東京などの大都市への移転を進めている。そして、そこで働く若年女性も地方から東京へ移動しているという。

増田寛也は、こうした大都市圏という限られた地域に人々が凝集し、高密度の中で生活している社会を「極点社会」と名付けている（一）。人口減少問題が「極点社会」という新たなステージに移りつつあるという現実を踏まえ、日本の地域社会を取り巻く人々の人的資源や人的交流をどのように考えるのかというのが本節のそもその出発点である。つまり、人口流出によって住む人がほとんどいなくなった地域社会をどのような人たちによって支えていくのか。そうした問題を都市化・高層化が著しく進み、居住者がほとんどいなくなった現代都市・渋谷の中心部において、地域社会の変容と祭りの担い手の変化の実態から考えていこうというのが本節の趣旨である。

一、都市祭りを取り巻く状況

近年、大都市部の都市祭りが多く人々を動員して盛んに行われている。日本三大祭りに数えられる京都の祇園祭、大阪の天神祭、東京の神田祭と山王祭も多く、観客と参加者を集めている。東京・浅草の三社祭も同様である。

これまで、戦後の都市祭りを対象とした研究は、宗教社会学、人類学、社会学、民俗学、建築学など複数の研究領域において多くの蓄積がなされてきた。これらの先行研究では、都市化に伴う地域社会の変容と祭りの担い手の変化と、祭りの場における「見る／見られる」あるいは「見る／見せる」の関係が指摘されてきた。前者では、祭りの担い手が「地縁」から「社縁」(会社縁)、「選択縁」へ移行していることが明らかにされている。具体的には、地域社会の構成員から、会社員や神輿同好会の参加者に変化し、性別でみても女性の参加が進んできたことが指摘されている。後者では、柳田國男の「見物人という群の発生」が「祭」から「祭礼」へ変化した契機であるとする指摘⁽²⁾を踏まえながら、社会学の松平誠は、かつては観客として祭りを「みる」側であった地域社会の外部から訪れる人たちが祭りを「スル」側に変化し、本来、祭りを担ってきた地域社会の人たちが祭りを「スル」側から支える側に変化する「ミル人とスル人の逆転」を指摘している⁽³⁾。

松平は、こうした現代の都市祭りを、日本の都市の主要な祝祭類型として、「近世の伝統の上に開花しながら、産業化のなかでその基本的な性格を体現してきた」とする「伝統型」(伝統的都市祝祭)と、「伝統とは無縁で、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、さまざまな縁につながって一時的に結びつき、個人が「合」して「衆」をなし、あるいは「党」、「連」、「講」などを形成してつくり出す祝祭」の「合衆型」に分類している⁽⁴⁾。松平は、「伝統型」の代表的なものとして、「神田明神の付祭や深川八幡の付祭のように、地縁のカミを祭る都市地域共同の特定の閉鎖的な集団の運営する祭礼を祖形とするもの」を挙げ、「祝祭そのものの性格が、基本的に伝統の基盤のうえにたち、核になる組織が明確なものは、すべてのこの伝統的都市祝祭に入れる」(一六頁)としている。一方、「合衆型」の代表として東京高円寺阿波おどりを挙げている。筆者が調査研究の対象とする現代の神田祭は、松平の「伝統型」に分類され

るといえる。しかしながら、経年的変化によって実態は変化している。神田神社の氏子町会の一つである須田町中部町会の「元祖女みこし」(町会の神輿を単独で女性だけの担ぎ手で担ぎ、連合渡御や神田神社への宮入を果たし「元祖」を名乗る女神輿)の参加者に注目すると、平成二(一九九〇)年の松平誠の調査(「現代神田祭仄聞」と平成二五年の筆者の調査を比較すると、参加者数は増加した。その内訳は、金融機関(銀行)の会社員の割合が減少し、「元祖女みこし」の参加者を管理する「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人と、町内に全く縁を持たない「一般」の参加者の割合が増加した。いわば「社縁」(会社縁)から「選択縁」への移行がみられる(5)。この拡大した「選択縁」の実態について、インターネットを通じた担ぎ手の募集を行う「女みこし担ぎ手募集係」の友人・知人と、町会に全く縁のない「一般」の参加者五六人のうち、インタビュー調査が行えた一五人についてみると、「元祖女みこし」に初めて参加した人が約九割を占めている。それも、趣味やスポーツ、生涯学習などのつながりによって参加してきた人たちであることが明らかになつた。このことは、松平が「伝統型」とする都市の神社祭礼の中に、不特定多数の個人が自分たちの意思で選択した、様々な縁につながって一時的に結びつく「合衆型」の要素を併せ持っていることがわかる(6)。

地域社会学の竹元秀樹は、宮崎県都城市の「おかげ祭り」を分析した結果、「おかげ祭り」は新しい祭りであるが、日本の伝統ある祭りを手本にして、厳格な秩序の中で本物の祭りを創造することを目指していることから「伝統型」の類型に入るが、運営母体が一般市民で構成され、祝祭の形態は「伝統型」でも「合衆型」の性格を持つものであると指摘している(7)。「伝統型」の中に「合衆型」の性格を併せ持つ都市祝祭の事例が実態としてはこのほかにも存在する可能性が示唆される。いずれにしても、「地縁」に基づく祭りの担い手に代わって、地域社会の外から様々なつながりによって参加した祭りの担い手が増加し、「伝統型」とみられる大都市の神社祭礼においても地域社会の外から訪れる参加者の存在が無視できない存在になりつつあることが確認できた。そして、祭りに際して地域社会の外側から、特定の町会に何年も通う人たちが存在している。

社会学の清水純は、現代の神田祭に参加する神輿同好会の調査から、「大抵二十〜三十年、時には四十年もの付き合いの続く神輿同好会が特定の町会に毎回担ぎに来る関係が成立していた(8)」ことを明らかにしている。また、飲食店街が広がる渋谷中央街では、平成二四年の祭りに、「飛雄連」「浅草志龍」「江戸祭道」の三つの神輿同好会が参加し、主要な担ぎ手を占めている(9)。この三つの神輿同

好会は、二〇年近く渋谷中央街の神輿巡幸に参加しているという。祭りに際して、こうした地域社会に通う人たちの存在が窺えるのである。

二、地域社会に通う人たちの存在

地域社会に通う人たちは、祭りに際して特定の町会の神輿を担ぐ人たちだけにとどまらない。松平誠は、神田祭で「元祖女みこし」を担ぐ須田町中部町会を調査し、地域の大変動の中でこれまでとは異なった町内の構成メンバーが誕生したとして、「住まいこそ別だが、町内で働いている昔からの町内の人という町内会員」を「通いの住民」と名付けている⁽¹⁰⁾。具体例として、住居を千代田区内の他の場所に移したが住民登録はそのまま元の位置で商売を続けている有力者で町内会でも総務部長を務める人や、すでに住民登録は移転しているが、町の中に仕事を持ち、町内会で顧問を務める人の存在を挙げている。しかも、これらの「通いの住民」が通いで働いている店主個人だけでなく、その家族も町内の一員として認知されている点も大切な点であり、居住当時だけでなく、現在まで町内と強い生活の結びつきを持っているからこそ、家族のひとりひとりまで町内に認知されるのであると松平は指摘している。この須田町中部町の「通いの住民」は、平成二（一九九〇）年の神田祭で町内会の祭礼寄付に応じた町内の居住者四八件に対して、「通いの住民」の寄付は一件で、「新しい地縁」の割合は決して少なくないことを指摘している。

翻って、渋谷においてこの「通いの住民」についてみると、地域社会に関わる人たちの間でも非常に割合が高い。先に挙げた渋谷中央街では、関係者の話によれば、平成二四年現在、渋谷中央街に居住している人は三軒だけで、いずれもビルを持っているが住んでいるのは老夫婦だけで常連客が中心の店を細々と営んでいるという⁽¹¹⁾。渋谷中央街の理事長をはじめ、商店街・町会に関わる多くの人が世田谷や松涛などに住み、渋谷中央街に通う人たちが構成されている。こうした地域社会に通う人たちによって渋谷の祭りも実施されている。渋谷の現状をみると、松平がいう「通いの住民」という地域社会に通う人たちの存在が無視できないことになる。一方で、こうした地域社会に通う人たちの存在を無視できないのは大都市の事例だけにどどまらず、過疎地域にも拡大している。

民俗芸能学の星野紘は、平成二四年七月～九月の期間に、成城大学大学院内「民俗芸能伝承危機実態調査」実行委員会で実施した「民俗芸能伝承危機緊急実態調査(アンケート)」の集計結果から分析を行っている。民俗芸能を伝承する団体の全体の七五%が集落内で後継者をまかなっていないと回答しているものの、集落の戸数が三〇〇戸以下の規模の小さな集落へ行くほど、後継者を徐々に集落内ではまかなえなくなってきた。件数は今のところ少ないものの、地域外の当該集落の親類縁者等の関係者を頼っている団体が四件、全く縁のない地域外の人を頼っている団体が四件あることを明らかにしている⁽¹²⁾。花祭の伝承地の一つである愛知県東栄町下栗代では、平成二一年一月一日～二日に行われた花祭において、演者数四六人中、集落内居住者が担当したのは二九人のみで、あとは親類縁者などの地縁者である集落外の人である。会計係やまかない方などの祭りの運営組織は、住民の高齢化のため、大学の研究グループや和太鼓集団など、地縁のない第三者に助っ人を頼んでいるが、こういった協力が今後何年続けてもらえるのかが未知数であるという⁽¹³⁾。祭りを「スル」側ではなく、祭りを支える側も松平の類型でいうと「合衆型」の要素を持っていく可能性も将来的には考えられるのかもしれない。

以上のように、祭りに際して地域社会の外から通い続ける人や「通いの住民」といった地域社会に通う人たちの存在が都市祭りのみならず過疎地の芸能や祭りにも類似した様相を呈してきたことがわかる。つまり、人口減少社会において、地域社会に通う人たちの存在に注目し、その実態を明らかにする意義があると考ええる。

三、渋谷・道玄坂の祭り

毎年九月になると渋谷は祭りの季節を迎える。渋谷駅周辺では、氷川神社(渋谷区東二丁目)、金王八幡宮(渋谷区渋谷三丁目)、北谷稻荷神社(渋谷区神南一丁目)、宮益御嶽神社(渋谷区渋谷一丁目)の例祭が行われる。このうち、金王八幡宮の例祭における神賑行事は、九月の敬老の日に近い日曜日に行われ、平成二八(二〇一六)年現在、渋谷の氏子一五町会の神輿がSHIBUYA109前に集合する。SHIBUYA109前に神輿が集合することによって、渋谷の町会や商店街などの地域社会に関わる人たちと、渋谷の外から訪れる若

者たちが交差する貴重な機会となっている⁽¹⁴⁾。SHIBUYA109 やスクランブル交差点、渋谷駅前ハチ公広場は、私たちが「渋谷」をイメージするときには浮かんでくる場所である。これらのエリアは、町会でいうと道玄坂町会、柳通り町会、道玄坂二丁目商励会のエリアに当る。この三つの町会組織が連合し、そこに道玄坂商店街振興組合が共催する形で、道玄坂町会の神輿を担ぎ、道玄坂の祭りをやっている。

平成二六年は、九月五日（金）に、金王八幡宮の神輿庫から道玄坂町会の神輿を出して、T O H O シネマズ渋谷（旧・渋谷シネタワ）の一階に展示、一二日（金）に神酒所設営と神輿の移動、一七時から神酒所にて御霊入れを実施、一三日（土）に宵宮の神輿巡幸、一四日（日）に町内渡御と道玄坂神輿連合渡御（SHIBUYA109 前への神輿集合）という日程で行われた。

道玄坂町会の半纏数は、平成二六年度は三六一枚であった。あくまで担ぎ手に貸出しをする半纏の数であり、実際の参加者数とは誤差があるが、関係者の話によると一四日の神輿巡幸の出発前時点で担ぎ手が三五〇人に上った。半纏数で見ると、平成一五年度は三二九枚（宵宮…一二枚、当日…二七枚）であったものが、平成二六年度は五四九枚（宵宮…一八枚、当日…三六一枚）に増加し、参加者数は増加していることが窺える。

道玄坂町会への奉納金は「平成二六年度 道玄坂町会 金王八幡宮祭り 奉納金」と書かれた芳名板の掲示（平成二六年九月一四日一〇時現在）によると、一〇万円が三本、八万円が一本、七万円が一本、五万円が一五本、三万円が二三本、二万円が一八本、一万五千円が一本、一万円が五八本、七千五百円が一本、五千円が二〇本、三千円が五本で、総額は三〇一万七千五百円に上った。一〇万円の三本は、それぞれ道玄坂町会会長、柳通り町会会長、道玄坂二丁目商励会会長、八万円はT百貨店が奉納したものである。町会関係者の話によれば、「町会で奉納金としてほしい三〇〇万円集まる」という。例年通りの奉納金があったことがわかる。祭りの費用はこの奉納金で賄い、足りない分は町会費から充当するという。

奉納品は渋谷三丁目町会、円山町会、神山町会、渋谷中央街、富士見町会、道玄坂親栄会、栄和町会、道玄坂上町会、神泉円山親栄会、南平台町会、鶯谷町会、松涛町会、千代田稻荷神社（渋谷百軒店町会）の道玄坂神輿連合渡御に参加する近隣町会の一三町会から御神酒が二本ずつ奉納された。奉納品からも近隣町会とのつながりが窺えた。また、担ぎ手として参加する神輿同好会の一つからはビ

ール券が奉納されていた。

九月一四日(日)の神輿巡幸は、一一時〇〇分発・道玄坂町会神酒所↓(道玄坂上り)↓一一時一五分・道玄坂上【交番前でUターン】↓(道玄坂下り)↓一一時三二分・神酒所前【通過】↓一一時五五分着・SHIBUYA109【休憩】・一二時八分発↓一二時三二分・イワキメガネの角【左折】↓一二時五五分着・渋谷中央街神酒所【休憩】・一三時〇七分発↓一三時一三分着・商励会【休憩】・一三時二五分発↓一三時四〇分着・エスパス日拓前(柳通り町会)【休憩】・一三時五〇分発↓一三時五五分着・SHIBUYA109前(道玄坂神輿連合渡御・式典)・一四時三五分発↓(道玄坂神輿連合渡御・道玄坂上り)↓一四時五五分・道玄坂町会神酒所前【Uターン】↓(道玄坂下り)↓一五時〇七分・プライム↓道玄坂小路↓渋谷センター街↓一六時〇七分着・西村フルーツパーラー【休憩】・一六時二〇分発↓スクランブル交差点【通過】↓渋谷駅前交番↓スクランブル交差点【通過】↓一六時四八分着・商励会【休憩】・一七時〇〇分発↓(道玄坂上り)↓一七時一五分・道玄坂町会神酒所前【通過】↓一七時三〇分・道玄坂坂上【交番前でUターン】↓一七時四八分着・道玄坂町会神酒所【還御】の順で行われた。

以上から、道玄坂町会の神輿は、私たちが一般にイメージする「渋谷」の中心的な場所を巡っていることがわかる。このことから、道玄坂町会の神輿は、渋谷のSHIBUYA109前やスクランブル交差点、渋谷センター街の路上など、ギャラリーがたくさんいるところで担ぐことができることがわかる。特に、神輿の担ぎ手にとっては、渋谷駅のハチ公口にある駅前交番前に神輿が渡御することを楽しみにしている。そこが大きな見せ場であり、盛り上がるポイントである。しかしながら、祭りに参加し、神輿を担いでいる人の大多数が渋谷・道玄坂に住む人ではないという特徴がある。道玄坂町会に住んでいる家は一〜二軒といい、道玄坂町会の会員が約五〇〜六〇であるという。道玄坂町会の会員であっても、道玄坂で商売を営んでいて、道玄坂に通う人が多いのが実態である。

道玄坂のお祭りは道玄坂青年会が中心となって支えている。この青年会のメンバーは四〇〜五〇人程度である。このうち、神輿を組むところから参加し、祭りを手伝う人は二〇〜三〇人という。青年会は年齢層でみると、五〇代が中心で、若手でも三〇代中頃が多く、貸しビル業を営む人が多い。渋谷区以外に住む人も多く、九五〜九六%は道玄坂に通っているという。青年会で祭りを支える人たちは「実際に僕たちのような立場の人間はあんまり楽しむという感じはないですね。なにしろ、事故がないように、見ているお客さんも怪

我がないように、そういうふうが目がいつてしまつて。(青年会に)入った頃、お神輿を担いで楽しいなっていう感じでしたが、最近では終わつてほつとして、やつと一息ついたときに、「今年もよかつたな」という達成感みたいなものがあります」という。

神輿を担いで楽しんでいるのは、渋谷の外から祭りに際して道玄坂へ来る人たちである。本来、地域社会の住民が祭りをスル側であったが、それが支える側に変化した。そして、支える側になった地域社会の人たちは、実は、渋谷・道玄坂に住んでいない人たちが多数を占めることがわかる。

平成二六年現在、道玄坂町会の神輿には、神輿会・神輿同好会が六〜七団体参加するほか、Hエレベーター(宵宮のみ、二〇〜三〇人)、T建設(二〇人)の会社員、インターネットを通じて個人の参加者などで構成されている。ただし、神輿同好会の参加者もあくまで個人参加ということで、団体扱いはしていない。それは、今から一五〜一六年前、道玄坂の神輿の担ぎ手が少なくなり、一つの大きな団体に任せたことがあつたという。しかし、その団体と町会の間にトラブルが生じた。それ以降、団体での募集はやめて、あくまで個人の一般からの募集へシフトしたという。この一般募集へのシフトによって、Facebookなどのインターネットを通じた参加者も増えつつあり、不特定多数の個人が参加できる門戸が開かれたのである。中には道玄坂の祭りを見て、ぜひ参加させてほしいということで町会の芳名帳に名前を記入し、道玄坂町会の半纏を着て神輿を担いだ若者もいたという。神田祭の「元祖女みこし」と同様に、「伝統型」の中に「合衆型」の要素を併せ持つことよつて参加者は増加しつつあるのではなからうか。

四、道玄坂町会に住む人と「通いの住民」

ここでは、道玄坂青年会に関わる道玄坂町会に住む人と「通いの住民」についてみておきたい。

道玄坂で商店を営むT・T氏は、昭和三一(一九五六)年に道玄坂で生まれた。現在でも道玄坂に住む、数少ない住民である。結婚を機に六年だけ渋谷の南平台に住んでいた時期があつたが、T・T氏の母が道玄坂の家に住んでここを終の棲家にしたという意向を持ち、母を一人で住ませるわけにはいかなので同居したことと、住んだら面白いのではないかという考えもあつて道玄坂に住

み続けたという。南平台は同じ渋谷にあり、買物に行くのにも生活圏が変わらなかったので、南平台から道玄坂に戻るのも違和感がなかったという。渋谷の夜の騒音が絶えないが慣れてしまい、二四時間稼働する街は、街が明るく駅からずっと街灯がつながっていて、コンビニも二四時間営業で、安全で泥棒に入られるという感覚はないという。道玄坂のT氏の家は、祖父母が浅草から移ってきて住んだ当時は平屋であったが、その後、木造二階に立て替えて昭和三年の四月に焼失した。その後、鉄筋の三階に立て替えて現在に至っている。鉄筋にするとき、高層化しようという考えもあったが費用などの問題もあり、高層化はなされなかった。バブルの時期に、お店を道玄坂で経営していた同級生もお店を廃業して移転していった。商売をしているのはT・T氏と、鰻屋さんのS・A氏、洋服屋さんぐらいで、道玄坂の青年会に入っているのは、T・T氏とS・A氏だけであるという。S・A氏は現在、道玄坂に住んでいない。多くの人たちは商売をやめてビルオーナーになったという。T・T氏は、誰か一人でも道玄坂に住んでいて「灯台」のように灯りを灯していないと、地域社会の外に出た人が道玄坂に戻ってきにくいのではないかと話していた。祭りの時に道玄坂に戻ってくる人は多いという。そんなT・T氏は、TOHOシネマズ渋谷の一階に道玄坂の神輿を展示する際、飾り付けをして神輿を組んでいく作業を上手にこなしていた。道玄坂青年会に入ってから、神輿を組む仕事を任されたという。それ以来の変わらない姿を祭りに際して披露し続けている。

道玄坂で鰻屋を営み、道玄坂青年会でT・T氏とともに祭りの運営に携わってきたS・A氏は昭和三五年に渋谷の円山町に生まれた。「商売をやっている人間は歩いていける距離に住まなきゃいけない」という祖父・祖母の意向があり、道玄坂のお店に近い円山町に住んでいた。昭和二二〜二三年に木造二階建てを建てた。その当時は一、二階が店舗、二階のお座敷に従業員が寝泊まりし、祖父と祖母は一階に住んでいた。当時の従業員は一〇人であった。S・A氏が小学生の頃は、すぐく賑やかで円山町は料亭が建ち並び、三味線の音が聞こえ、芸者さんもたくさんいたという。昭和四〇年代の前半くらいから、新大宗ビルの一号館を皮切りに道玄坂にビルが建ち始めていき、やがて道玄坂のお店をビル化した。高層化したのは、周辺がビル化したのと、固定資産税が高くなったのも一因であるという。大学までは円山町に住んでいたが、結婚を機に世田谷へ移転した。世田谷から道玄坂のお店に通う「通いの住民」として現在に至っている。S・A氏にとっての祭りは、「本当に町会で生まれて、町会で皆さんに育ててもらったというか、街に育ててもらったって

う気持ちがある。金王八幡宮さん自体も九〇〇年以上続いているので、そういう歴史というか文化はこれから先にもやっぱり守ってほしい。渋谷駅もどんどん新しくなって変わっていきませんが、変わらないお神輿で、皆さんと仲良くできる町会とか文化として本当に守ってほしい。渋谷はすべてが変わっていきますので」と話す。変わらない祭りに道玄坂の未来を託しているといえるかもしれない。祭りに道玄坂に戻ってきた人たちは、神酒所でニコニコと笑顔が絶えないという。一方で、もし仮に祭りがなかったら一年の変化がなような気がするとも話す。S・A氏にとって、祭りは非日常的な場であることが窺える。

以上のように、道玄坂に住む人と通う人は祭りを通じて結びついていることがわかる。しかしながら、両者の防災に関する意識が異なっているという現実がある。大災害があると、道玄坂に通う人たちは、自分の住んでいる所に帰ってしまう。その場合、道玄坂に残る町会の人はT・T氏だけになってしまう。そのため、住んでいる人と通う人では問題意識にズレが生じているのである。

五、祭りに際して道玄坂町会に通う人たち

ここでは平成二六(二〇一四)年の道玄坂の祭りに参加した地域社会の外部から祭りに通う人たちについて、道玄坂の祭りに参加する神輿同好会(睦会を含む)・他町会の参加者のうち、判明した団体を紹介しておきたい。

東京都足立区を拠点とする「神明睦」の二二人と、神明睦が依頼した四つの団体のメンバー三〇〜四〇人が参加した。神明睦は道玄坂の中で一番古くから来ているグループであるという。メンバーの一人は道玄坂の祭りに参加して三四年と話していた。渋谷で神輿を担ぐのは、「集まるとなると目立つところ賑やかなところ。というところ、こういうところ(渋谷)になる」という。地元だとギャラリー(観客)が少ないが、渋谷のようにギャラリーが多いと盛り上がるという。元々は、神明睦の関係者と道玄坂町会の関係者が知り合いで「遊びに来ないか」と誘ったのを契機として、相互の行き来が始まった。神明睦の関係者によれば、道玄坂の祭りは「どちらかというところマンで来るとというイメージ。基本はこの町内(道玄坂)が主体でこちらが助ける」という。反対に、道玄坂の人たちが足立の方のお祭りに来て「担ぎ返す」ということを行っているという。また、神明睦が呼ぶ形で参加した団体の一つに日本橋二丁目通町会の日本

橋貳通睦がある。この会は、東京・永田町の日枝神社の氏子で山王祭に参加している。そして、神田祭では須田町二丁目町会の神輿に参加しているという。

東京都世田谷区の千歳船橋を拠点とする「船橋睦」は一四〇一五人（このうち女性が四〇五人）が参加した。会の結成から二五〇三〇年経過し、道玄坂の祭りに一〇年以上参加しているという。船橋睦は千歳船橋の神明神社の宮睦で、九月最終土日の神明神社のお祭りで神輿を担ぐ。女性の参加者によれば、「ここはメインイベントが109の前に神輿が入っていくこと。それから午後になると駅前交番にみんなで「突っ込め！突っ込め！」と神輿ごと。ここの町会だけなんですよ、交番の前まで行くの。一年に一回、あの有名なスクランブル交差点のど真ん中で地べたに座ってお酒飲めるんですから。109前の、あのギャルでいっぱいいるところに座ってお昼休憩します。それがみんなに自慢で。うちの会は今日三ヶ所行くところがあるんですが、私は絶対渋谷」と話していた。

東京都千代田区神田須田町を拠点とする神田興雄連は一〇人が参加した。道玄坂の祭りに参加するようになって八年が経つという。会長のK・Y氏によれば、渋谷の祭りに参加するようになったのは、「区民まつりかなにかがあったときに、ここの町会の写真をみて、それで「こういうところで担ぎたいね」っていつていたら、知人に紹介してもらって担ぐようになった。ここの町会の写真は上から取ったもので、ちょうど109辺りで、集結した神輿を写したものであった」という。K・Y氏は約一八年前に神輿会を作りたくて立ち上げた。住むのは江戸川区であるが会社が神田にある関係で神田を拠点とした。神田祭では地元・須田町南部町会の神輿を担ぐ。

品川の東親会（荏原神社氏子町会）から参加する人によれば、道玄坂町会の役員が品川の町会の役員を兼務していて、その関係で道玄坂の祭りに参加するようになったという。そして、品川の祭りのときは「あっちこっち走り回っていて、自分のところの神輿ですらほとんど肩入れられない。渋谷のときは楽しませてもらっている」という。渋谷の道玄坂町会と品川の東親会との祭りを通じた行き来がなされていることがわかる。

以上のように、祭りに際して地域社会に行き来する人たちの存在が浮き彫りになった。先に紹介した神明睦のある関係者は、「祭りは地域のバロメーターだから。どんなちっちゃい街でも行き来をしないとお祭りができない。行き来がなくなるとお祭りはなくなる。だから行き来は町の潤滑油というか血みたいなもの。血が循環しなくなったら死んでしまう。死んだ町と生きた町の違いは祭りがあるか

ないか」と話していた。ここで注意すべきは、他の地域の祭りとの行き来があつてこそ祭りは維持され、町は生きるのであるという視点である。ただ単に祭りを守らなければ地域社会が守れないというのではなく、祭りを通じたネットワークを維持してこそ、祭りを守り地域社会が守れるという論理である。言い換えれば、「通いの住民」や祭りに際して地域社会の外から地域社会に通い続ける地域社会に通う人たちの存在は地域社会を維持していく上でも重要なものではなからうか。

まとめ

増田寛也は、『地方消滅』の中で、東京への一極集中を避け「極点社会」になることを回避するための一つの方法として地方の中核拠点都市への「選択と集中」を主張している。地方の拠点都市の圏域を単位として有望な産業や雇用の芽を見出し、若い人たちの雇用の場の開拓に財政を集約して用い、中山間地や離島から若者が東京圏に流出することを防ぎ、圏域内に留まらせることを提言している。つまり、地方の拠点都市が東京圏への人口流出の「ダム」としての機能を果たし、親世帯の住居からせめて一時間くらいの距離に若者がとどまれる必要性を指摘している。宮城県女川町長の須田善明は、増田の拠点都市の提言を受けて、女川町は拠点都市にはなれないが女川の復興まちづくりにおいて町民に使い勝手のいいコンパクトシティの形成と「石巻圏域のなかでのわが町」をどうデザインしていくかを基本的視点に置いているという。

こうした圏域内の様々なネットワークを構築、あるいは見直しをしていく上で、本節でみてきたように、比較的近いエリアで祭りを通じ、相互に行き来するネットワークや、「通いの住民」の存在が、人口減少社会における地域社会の今後を見据える上で、一つの具体的なヒントになるのではなからうか。なぜなら、「若者の街」と呼ばれ、最も変動の激しい渋谷の中心部の地域社会においても、「通いの住民」や伝統的な祭りを通じた地域社会へ相互に行き来するネットワークを持つているからである。圏域内のギャラリー（観客）が多くいる祭りとギャラリーがほとんどいない祭りを相互に行き来しながら、お互いの地域社会の維持につなげていける可能性がある。

しかしながら、地域社会に住む人と通う人たちでは、利害関係が大きく異なり、防災の問題を一つとっても地域社会に住む人と「通

いの住民」の間には意識の違いが生じている。ここには両者が共存する上での大きな課題が存在している。ただし、これらの人々を媒介するものがあれば、少なくとも接点が生じて並存することは可能なのではなからうか。この接点の一つが祭りなのではなからうか。祭りは、地域社会に住む人と通う人々たちを結び付けるだけでなく、地域社会そのものの存在を確認する場になっていると考える。

註

- (1) 増田寛也編著『地方消滅』中公新書、平成二十六年、三二頁。
- (2) 柳田國男「日本の祭」『定本柳田國男集』第一〇巻、筑摩書房、昭和四四年。
- (3) 松平誠『現代ニッポン祭り考―都市祭りの伝統を創る人びと―』小学館、平成六年。
- (4) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年。
- (5) 本研究の第三章第六節を参照。初出は、秋野淳一『元祖女みこし』の変遷にみる地域社会の変容と神田祭』『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第四五輯、國學院大學大学院、平成二六年。
- (6) 本研究、第四章第三節を参照。初出は、秋野淳一「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭―「伝統型」―都市祝祭の中の「合衆型」―』『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第一〇号、國學院大學研究開発推進センター、平成二八年。
- (7) 竹元秀樹『祭りと地方都市―都市コミュニティ論の再興』新曜社、平成二六年、二四八頁。
- (8) 清水純「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―』『日本民俗学』第二七一号、日本民俗学会、平成二四年、二六頁。
- (9) 秋野淳一「祭りからみえてくる「渋谷」―SHIBUYA109前に集う神輿 金王八幡宮の祭り―』石井研士編著『渋谷の神々』（渋谷学叢書第三巻）、雄山閣、平成二五年。
- (10) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年、八五頁。
- (11) 前掲秋野「祭りからみえてくる「渋谷」」。
- (12) 星野紘『村の伝統芸能が危ない』岩田書院、平成二二年、三九〜四〇頁。
- (13) 前掲星野『村の伝統芸能が危ない』二一六頁。
- (14) 前掲秋野「祭りからみえてくる「渋谷」」。

第二節 都市祭りからみえる〈渋谷〉

私たちが〈渋谷〉というときに、そこからイメージするのは、待ち合わせをするハチ公前広場やスクランブル交差点、SHIBUYA109や渋谷センター街、あるいは渋谷ヒカリエといった、渋谷駅周辺の場所を思い浮かべるのではないだろうか。こうした私たちがイメージする〈渋谷〉と、伝統的なイメージを持つ「祭り」とは相容れない、違和感のあるものではなからうか。

しかしながら、毎年九月敬老の日直前の日曜日になると、SHIBUYA109前に半纏姿の人たちに担がれた神輿が集合し、SHIBUYA109前は一時、祭りの場に変貌を遂げるのを知っているだろうか。これはイベントではなく、れっきとした神社の祭りである。SHIBUYA109前には、紫色に白地で「祭」と書かれた垂幕が飾られ、スクランブル交差点からSHIBUYA109、道玄坂上までの道の両側には同様の「祭」と書かれた垂幕と「金王八幡 御祭禮」と書かれた提灯が下げられる。これは、渋谷の氏神の一つである金王八幡宮の祭りの装飾である。金王八幡宮は、渋谷駅の東側、国道二四六号線を渡った渋谷警察署の裏手にある。ビルの谷間に閑静な杜が広がっているが、これが金王八幡宮の杜である。この金王八幡宮の祭りの一部として、SHIBUYA109前に神輿が集合し、道玄坂を巡幸する「道玄坂神輿連合渡御」が行われている。

では、SHIBUYA109前で神輿を担ぐ人たちは一体、どのような人たちなのであろうか。また、こうした都市祭りにはどのような意味や役割があるのだろうか。本節では、SHIBUYA109前に神輿が集合する光景から、私たちが普段イメージする〈渋谷〉とは一味違った渋谷像を浮き彫りしてみたい。

一、鳳輦の巡幸と宮入 — 金王八幡宮の祭りの現在 —

ここでは、現代の金王八幡宮の祭りについて、平成二二（二〇一〇）年と平成二三年の事例からみておきたい。

平成二二年は三年に一度の鳳輦の巡幸が行われ、SHIBUYA109前にも鳳輦は姿を見せた。また、平成二三年は「金王八幡宮御鎮座九二

○年祭」が行われ、氏子町会の神輿が金王八幡宮へ宮入を行った。宮入後、参加した一三町会の神輿がSHIBUYA109前に集合した。

(1) SHIBUYA109前、渋谷センター街を巡る鳳輦(平成二十二年)

平成二二(二〇一〇)年の金王八幡宮例祭は、九月一四日(火)例祭祭典(一一時)、一八日(土)神楽殿奉納行事、一九日(日)神幸祭の日程で行われた。そして、一九日の一四時に道玄坂神輿連合渡御が実施された。

一四日の例祭祭典は、一一時から神社の社殿で行われた。境内の神門付近に設けられた祓所で、祓詞(お祓いの祝詞)を奏上して官司以下の神職たちがお祓いをした。手水舎で清めをした後、社殿まで行列して昇り、祭典が行われた。祭典は型通りのものであるが、雅楽の音色に合わせて神職が手渡しで神饌(お供えもの)を神前にお供えする「献饌」や官司が神前に祝詞を捧げる「祝詞奏上」、続いで行われる「国歌斉唱」など、厳粛な雰囲気の中にも雅な見所があった。また、神前に玉串を捧げ参拝する「玉串奉奠」では、金王八幡宮の元別当寺・東福寺の住職が玉串を捧げ神前で手を合わせた。このほか、渋谷区長や都議会議員などが玉串を捧げ参拝した。例祭祭典は約一時間で終わり、参列者は直会へと移った。

一八日は、一一時から終日、神社境内の神楽殿で奉納行事が行われた。そして、二一時に本殿から鳳輦に御神霊が遷される「御魂入れ」が行われた。この儀礼によって、神社の御神霊が鳳輦に移され、御神霊を載せた鳳輦が青山・渋谷の氏子区域を巡ることとなる。

一九日は鳳輦の巡幸の日である。金王八幡宮の氏子区域は、町会・関連団体でみると、青山・渋谷地域の二七町会に上る。このうち、鳳輦は午前に青山方面の氏子町会を、午後に渋谷方面の氏子町会を巡る。

八時五〇分、境内宝物殿前に曳き出された鳳輦前で「発御祭」が行われ、その後、大鳥居前付近に神幸祭の行列が整列した。行列の先頭には「渋谷三丁目町会」と書かれた高張提灯・二本と「金王八幡宮御鎮座九二〇年」と書かれた旗を持った渋谷三丁目町会の関係者が半纏姿で陣取る。続いて、太鼓・社名旗(「金王八幡宮」と書かれた旗)・猿田彦・真榊・お祓い神職・賽銭受け・賽銭箱・鳳輦・官司(浅草の時代屋の人力車に乗る)・神社総代(金王八幡宮の車に乗る)・「金王八幡宮御鎮座九二〇年」の旗の順に行列した。行列最後尾の「金王八幡宮御鎮座九二〇年」の旗を持つ白衣姿の人たちは、國學院大學専攻科の学生で神職養成の実習の一環として参加した。

また、鳳輦を曳き、行列に参加する人員の多くは國學院大學体育連合会によって有志で集められた國學院大學の学生アルバイトである。金王八幡宮の神職は、人力車に乗った宮司のほか、行列の進行などを指揮する神職一人、お祓い神職の二人などに限られた。お祓い神職は行列に付き添いながら、氏子の人たちにお祓いをする神職で、お賽銭をもらって行列の沿道の人たちをお祓いしていった。

先頭の高張提灯を持った町会関係者は、自分たちの町会エリアの巡幸が終わると、次の町会の人たちに引継ぎ、交替した。渋谷三丁目町会の人たちは、六本木通りを渡った渋谷二丁目の交差点で、次の渋谷二丁目町会の人たちと交替し、渋谷二丁目町会の高張提灯が先頭に立てられた。こうした形で引き渡ししながら、鳳輦は青山・渋谷の氏子町会を巡っていった。

町会の御神酒所へ着くと、金王八幡宮宮司は人力車から降りて、町会の御神酒所を参拝した。各町会の御神酒所の中には祭壇が設けられている。「金王八幡宮」と書かれた掛け軸を中央に祀り、左右に獅子頭を置き、前には神饌（供えもの）が供えられていた。金王八幡宮宮司は、各町会の御神酒所に設けられたこの祭壇に参拝した。この御神酒所は、奉納金を町内や企業などから受け付けたり、町会神輿の巡幸や町会の行事などを取り仕切る、祭りの際の町会の「本部」となる。そのため、町会神輿や山車などは御神酒所付近に置かれ、ここを拠点として町内巡幸や連合渡御へ出発する。

午前中、青山方面のNTT東日本（渋谷二丁目町会）や渋谷区清掃事務所（渋谷第一町会）の敷地内、表参道駅前の秋葉神社（青山表参道町会）、青山北町アパート内（北青山三丁目自治会）、エイベックスビル前（青山三・四丁目町会）、町会事務所（青山高樹町町会）に設けられた御神酒所を鳳輦が巡り、宮司が参拝した。エイベックスビル前では、ビル前にテントを張って御神酒所が設けられた。宮司はそこに参拝するが、参拝している背景ではエイベックスの広告用の大画面でエイベックス・チャンネル（CM）の放送が流されていた。このほか、鳳輦は一部区間で国道二四六号（青山通り）の車道を通行するが、通行止めにするのではなく左車線によって、一般自動車と一緒に巡幸した。青山方面の巡幸が終わると一旦、神社へ戻り、昼休みを取った。そして、午後再び行列して渋谷方面の氏子町会を巡った。鶯谷児童遊園地（鶯谷睦会）、元総理大臣の三木武夫記念館（南平台町会）、桜丘公園（桜丘町会）、渋谷マーケティング・EASTMALLの一階ガード下（渋谷中央街）などに設けられた御神酒所に宮司が参拝した。そして、渋谷中央街を出て、スクランブル交差点を左折し、SHIBUYA109前に向かった。

一四時七分頃、金王八幡宮宮司が人力車より降り、紅い番傘の下を歩き、鳳輦とともにSHIBUYA109前に向かった。この行列を沢山の見物人と渋谷一四町会の神輿の担ぎ手が見守った。警察の警備の姿は、鳳輦の近くからはみえず、半纏を着た町会関係者が警備に当たり、人だかりで混雑した行列の行く先を通行できるように開いていった。一四時一二分頃、SHIBUYA109前の中央に鳳輦が置かれた。その周りを渋谷一四町会の提灯を持った半被姿の町会関係者が勢揃いして囲んだ。道玄坂町会、宇田川町会、鶯谷睦会、道玄坂上町会、渋谷百軒店町会（道玄坂中町会）、富士見町会、神泉・円山親衆会、栄和町会、渋谷二丁目町会、渋谷三丁目町会、円山町会、渋谷中央街（道玄坂一丁目町会）、神山睦会など一四町会が左右に分かれて提灯を掲げた。カメラや携帯でこの光景を写真に収めようと見物人が殺到するが、関係者以外はロープの外側へ出るようにと町会関係者から厳重に注意された。一四時一八分頃、厳粛な雰囲気の中、金王八幡宮宮司が鳳輦前で神事を開始した。この間、SHIBUYA109前に集合した町会神輿が担がれることもなく、多数の見物人も静かに見守った。金王八幡宮宮司が大きく鳳輦に一拝し、祝詞が奏上された。祝詞はマイクを通してSHIBUYA109前に朗々と響きわたった。半纏姿の神輿責任者の中には頭を下げて祝詞を聞いている人もみられた。祝詞奏上が終わると、宮司はもう一度深々と一拝した。一四時二二分頃、宮司は鳳輦前から退下した。神事の時間は約四分であった。一四時二三分頃、栄和町会の神輿を敬老神輿として鳳輦前へ移動し、そこで担いだ。そして、三本締めをして再び鳳輦はSHIBUYA109前から出発した。一四時二八頃、鳳輦はSHIBUYA109前を出て道玄坂を登った。そして、円山町から松濤を巡って、宇田川町会御神酒所を経て渋谷センター街に至った。

一七時頃、渋谷センター街のバスケットボール通り（めぬき通り）を通り抜け、スクランブル交差点まで、鳳輦の行列は巡幸した。通行人は鳳輦を気にとめることなく、行列を平気で横切ったりした。普段と変わらない日曜日の渋谷センター街に、鳳輦が突如現れたかのようであった。そして、スクランブル交差点に差し掛かると、日曜日の夕方のせいもあり、交差点は買い物客などの通行人でごった返していた。その中を鳳輦は巡幸していった。ここでも通行人は鳳輦の存在をあまり気にとめることなく、行列を横切る人がほとんどであった。それでも中には立ち止まって携帯で写真に収める人もみられた。スクランブル交差点を後にした鳳輦は渋谷駅東口から明治通りを恵比寿方向に進んだ。行列は、渋谷警察署前で国道二四六号の横断したが、警察の交通整理はみられず、神職が誘導していた。渋谷三丁目町会の御神酒所で休憩したあと、並木橋から表参道へ向い、神社へ環御した。

以上のように、鳳輦の巡幸は、三年に一回、金王八幡宮の御神霊を載せた鳳輦が氏子町会をくまなく廻り、金王八幡宮宮司が各町会の御神酒所へ参拝し、再び神社へ戻るといふ厳粛な行事であることがわかる。各町会では、鳳輦の行列を迎え、自分たちの町会区域では行列の先頭に立って行列を先導し、次の町会へと引き渡していった。また、沿道では神職によってお祓いがなされた。しかし、その一方で、車道を通行する関係から他の交通とのせめぎ合いがあったり、渋谷センター街やスクランブル交差点では、鳳輦の行列を平気で横切っていく若者たちが存在した。

金王八幡宮の関係者によると、鳳輦は昭和三二（一九五七）年に製作され、それ以降、隔年でオモテの年に巡幸している。昭和四八年より後に毎年巡幸するようになり、平成一〇年まで行われた。この平成一〇年の巡幸を最後に、三年に一回の巡幸に変化した。平成一三年、三年に一回になってはじめての巡幸が行われた。

昭和三二年より前は、現在、金王八幡宮の宝物館に保存されている宮神輿をトラックの荷台に載せて巡幸したという。現在でも保存された宮神輿には、例祭の際、神饌が供えられていた。

(II) 宮入とSHIBUYA109前の町会神輿（平成二三〔二〇一七〕年）

平成二三年は、金王八幡宮が鎮座してから九二〇年の節目に当たった。そこで、「御鎮座九百二十年祭」が催され、氏子町会の宮入が二〇年振りに行われた。また、同年三月一日には東日本大震災が発生し、神輿巡幸の中止も検討されたが、被災地の復興を祈願して神輿巡幸も行われた。この年の例祭は、九月一四日（水）御鎮座九二〇年祭・復興祈願祭の祭典、翌一五日（木）「鎮魂の夕べ」（神社境内）、一七日（土）奉納行事・大和魂祭り（神楽殿、境内）、一八日（日）宮入・道玄坂神輿連合渡御（青山の氏子は表参道連合渡御）を行った。

一四日の御鎮座九二〇年祭・東日本大震災復興祈願祭の祭典は、境内の参道の両側に参列者用のテントを用意して、一〇時四四分頃（正午過ぎまで厳粛に執行された。金王八幡宮宮司の祝詞奏上では、御鎮座から九二〇年、渋谷金丸常光の誕生から八七〇年、春日局が社殿を造営してから四〇〇年を記念する旨、三月一日の東日本大震災や福島第一原発の被害からの復興を祈願する旨が奏上され

た。そして、浦安の舞、国歌斉唱と続いた。玉串奉奠では、金王八幡宮責任役員二人（松濤町会・円山町会）、元別当寺・東福寺住職、東京都神社庁渋谷支部長・隠田神社宮司、明治神宮宮司、東郷神社宮司、渋谷区長、東京都議会議員、渋谷光重、東急建設社長らが玉串を捧げ参拝した。直会のあと、一三時半から一四時一〇分頃まで、社殿で「渋谷伝説・金王丸」が安田登（ワキ方下掛宝生方）・土取利行（楽師）・松田哲博（元力士）・奥津健太郎（和泉流狂言方）・白川深紅（渋谷区松濤中学校一年生）によって演じられた。

一五日の一八時過ぎから、東日本大震災復興を祈願した「鎮魂の夕べ」が行われた。境内の神門付近から拝殿に至るまでの参道の両側に、「金王八幡宮御鎮座九百二十年 東日本大震災復興を祈る 鎮魂の夕べ」という文字や絵が書かれた行灯が灯された。神楽殿では箏篋の演奏が行われた。「もののけ姫」や「ふるさと」、「君が代」などの曲が演奏された。また、社務所では活け花の展示やお茶の席が設けられた。

一八日（日）、一一時前から正午過ぎにかけて、渋谷の氏子一四町会（渋谷二丁目町会、鶯谷町会、宇田川町会、円山町会、渋谷百軒店町会、神泉円山親栄会、栄和町会、道玄坂上町会、渋谷三丁目町会、ときわ松町会、道玄坂町会、渋谷中央街、神山睦会、富士見町会）の神輿が宮入した。夕方の一六時頃には、青山の氏子三町会（青山三・四丁目町会、青山表参道町会、青山高樹町町会）の神輿が宮入した。

ここでは、参与観察した渋谷中央街の神輿宮入を紹介しておきたい。一〇時一八分に渋谷中央街を出発した神輿は国道二四六号に出て、渋谷警察署前の交差点から明治通りを恵比寿方向へ進んだ。並木橋を左折して「金王神社前」交差点へと到着した。渋谷中央街の神輿の前を道玄坂上町会の神輿が巡幸した。渋谷一の大きさを誇る渋谷中央街の大神輿は、三五〇人近い担ぎ手を動員して巡幸が行われた。神輿の担ぎ手には、町会の関係者は少なく、「飛雄連」「浅草志龍」「江戸祭道」「泥亀睦」といった四つの神輿同好会の人たちが多数を占めた。一一時三七分頃、「金王神社前」の交差点を左折して、金王八幡宮の大鳥居をくぐった。渋谷中央街の青年会のメンバーに担ぎ手は鼓舞されながら必死に神輿を担いだ。大鳥居付近は中央街の半纏を着た担ぎ手で埋め尽くされる。一一時三九分、渋谷中央街の神輿の前を行く道玄坂上町会の神輿が金王八幡宮神門の階段の下に到着した。神輿責任者の拍子木を合図に神輿を降した。そし

て、道玄坂町会の担ぎ手たちはその場で神職からお祓いを受け、終わるとその場で神門の方向へ向かって柏手を打って参拝した。参拝が終わると、道玄坂上町会の神輿は神門を通らずに、脇の道から境内に入って休憩した。道玄坂上町会がお祓いを受け、参拝を済ます間、渋谷中央街の神輿は神門へ近づいていった。担ぎ手は掛け声を張り上げ、周囲も扇子を仰いだり、手拍子をして盛り上げた。神門前の階段下中央には御幣が立てられ、その前に渋谷中央街の神輿責任者が陣取り、神輿を誘導した。神輿責任者の左右には「渋谷中央街」「道玄坂一丁目」と書かれた高張提灯が掲げられた。渋谷中央街の大神輿が神輿責任者の前に達すると、神輿を高々と上げる「サシ」が行われた。担ぎ手は大いに盛り上がった。しかし、神輿を降ろすことを神輿責任者は認めず、扇子を挙げて再度の突入を促した。再度、神輿が投突入すると、神門前は渋谷中央街の担ぎ手で埋め尽くされた。担ぎ手たちは笛を合図に掛け声を張り上げながら神輿を担いだ。周りの担ぎ手たちも手拍子をしたり、拳を振り上げながら神輿を鼓舞した。宮入のクライマックスの瞬間である。今度は無事、神輿責任者の拍子木が鳴らされ、神輿が降ろされた。一二時四六分、渋谷中央街の担ぎ手は、神門前階段下で神職からお祓いを受けた。そして、氏子総代でもある渋谷中央街理事長の柏手に合せて担ぎ手一同は、神門方向に向かって柏手を打って参拝した。終わるとすぐに神輿を担ぎ、金王八幡宮の裏手の休憩場所へ移動した。こうして、二〇年振りの宮入は僅かな時間であるが、無事終了した。休憩を挟んで、渋谷中央街の神輿は、国道二四六号を巡幸し、東急プラザの脇で休憩したあと、SHIBUYA109前へ向かった。

SHIBUYA109 前での式典は、一四時半から一五分程度行われた。平成二三年年は宮入が行われ、神社でお祓いを受けていることから、SHIBUYA109 前の式典には金王八幡宮宮司や神職の姿はなく、お祓いは行われなかった。また、例年、道玄坂神輿連合渡御を行う渋谷の氏子一四町会の高張提灯が式典の場で整列するが平成二三年はみられなかった。平成二三年の年番町会は、渋谷三丁目町会・円山町会・渋谷中央街である。年番町会は、毎年二町会が務めるが、宮入があったため、三町会が務めた。年番町会は、「敬老神輿」の役割分担、SHIBUYA109 前の高張提灯の並び順、「ハチハラエ」（または「ハチアライ」と呼ばれる打ち上げ場所）のセッティングなどを行うという。

式典は、年番町会である渋谷三丁目町会会長で祭典委員長の挨拶から始まった。続いて、渋谷区長が以下のように挨拶をした。「本年はとりわけ、先程、年番の方からお話がありましたように、九二〇年祭です。そしてまた、この金丸の生誕八七〇年。さらには春日局による御社殿、啓上・造営四〇〇年という節目の年でございますけれども。皆様方が連合して渡御して催行して頂いております、心

からお祝いを申し上げたいと思っております。この渋谷は東京を代表する、そういう素晴らしい近代都市であります。皆様方が日本人としてのこの崇敬の理念を忘れないで、こうしていつも、いつも伝統文化を大切にして頂いている。心から敬意を表したい。このように思っております。皆様方のこのご活動が必ずやご神徳を頂いて、必ずやこの地域のご発展につながる。そしてまた、皆様方が心にお持ちになつていらっしゃる、東日本のこの中でお亡くなりになられた方に対する鎮魂となり、また復興へのご祈念を申し上げます。そういうことへの大きな意義を持つ連合渡御である。このように思っている次第でございます。がんばれニッポン！そしてまた連合渡御の皆さん、がんばってください。挨拶を終わります。ありがとうございます」と述べた。SHIBUYA109前に集まった担ぎ手たちは大きな拍手と「ハイハイハイ」という掛け声で応えていた。終わると、金王八幡宮の責任総代が挨拶した。その中で「金王神社にお祈りしてございます第一五代天皇・応神天皇の御鎮座九二〇年になるわけでございます。本当に長い間、この渋谷の街を、繁栄と発展のために、平和のために一生懸命お守りしている、安らかな努力。皆さんも今日は宮入りするために朝早くから本当にお疲れになったことと思います。事故もなく、こうやって連合渡御にご参加頂きまして本当におめでとうございます」と述べた。責任総代の挨拶が終わると、一四時三六分、敬老神輿に移った。SHIBUYA109前中央に用意された、年番町会である渋谷三丁目町会の神輿を、僅かな時間であるが渋谷区長をはじめ、各町会の「先輩方」が担いだ。そして、道玄坂町会会長が挨拶をして、年番町会である円山町会の神輿責任者が「金王八幡宮！」と叫んでから、三本締めを行った。最後に、円山町会の神輿責任者が「がんばろう日本！」という、SHIBUYA109前に集まった神輿の担ぎ手たちは最高潮の盛り上がりを見せた。そして、一四時四三分頃、渋谷三丁目町会の神輿を先頭に、道玄坂神輿連合渡御が開始された。

以上のように、金王八幡宮への神輿宮入では、各町会の神輿は盛り上りをみせた。神社前で神輿を降ろすと担ぎ手は神職からお祓いを受け、参拝した。また、SHIBUYA109前の式典では、金王八幡宮の由緒をもとに、渋谷区長や責任総代から「伝統文化」や「神徳」が語られた。そして、道玄坂神輿連合渡御を行うことによって、金王八幡宮の「神徳」を得て、渋谷の街の発展につながるとされた。同時に、東日本大震災で亡くなられた方の鎮魂とすると意味づけていた。その一方で、SHIBUYA109前では多数の見物人がいるものの、祭りには関心を持たず、SHIBUYA109の中へ直行する人や足早に通り過ぎていく人もみられた。

二、展示する神輿

次に、金王八幡宮の祭りについて、町会の視点からみておきたい。ここでは、一般にイメージされる〈渋谷〉に近いが、若者の町渋谷とは一味違った町内に着目したい。JR渋谷駅南口に位置する渋谷中央街（道玄坂一丁目町会）を取り上げ、地域社会（町会）と祭りの関係をみていくこととする。なお、調査データは詳細な参与調査を行った平成二四（二〇二二）年の事例からみていく。

（一）渋谷中央街（道玄坂一丁目町会）の概観

JR渋谷駅南口にあった旧東急プラザ（平成二七〔二〇一五〕年に閉館）から渋谷マークシティにかけての一带、京王井の頭線渋谷駅と国道二四六号に挟まれたエリアが渋谷中央街（道玄坂一丁目町会）である。住所で見ると、道玄坂一丁目の一部が町会区域に当る。

町会組織は、昭和二六（一九五一）年に親和会という組織が結成され、昭和二九年に大和田町会と改称した。国道二四六号が敷設されると、大和田町会は二つに分断せざるを得ず、神輿をはじめとした町会の所有物を大和田町と桜丘町で折半した。神輿は大和田町会、山車（太鼓車）は桜丘町会に分けられた。その後、大和田町会から道玄坂一丁目町会と改称した。町会は発足当初から、商店会と密接な関係にあった。渋谷駅前商店会を前身とした渋谷中央街が昭和四四年四月に結成された。そして、昭和四八年七月に、町会を発展的解散として、商店会である渋谷中央街に吸収、業務を引き継ぎ、現在に至っている⁽¹⁾。渋谷中央街と道玄坂一丁目町会の名称は、祭りに際して、神輿巡幸の先頭を行く高張提灯に両方の名称が一張ずつ書かれている。ここでは便宜上、「渋谷中央街」の名称で統一していきたい。

渋谷中央街は、飲食店を中心とした商店街であり、会員の中心はこうした店舗の経営者である。会員数は、平成三年刊行の『渋谷のあゆみ』によると二〇〇人⁽²⁾、平成四年刊行の『まちづくりのあしあと』によると一七八世帯である⁽³⁾。また、『平成八年度 渋谷区商業名鑑』に記載された渋谷中央街の「店名又は屋号」の総数は一三四⁽⁴⁾であり、平成二〇年発行の『二〇〇八 渋谷区商業名

鑑』に記載された渋谷中央街の「店名又は屋号」の総数は、賛助会員二〇を含む一三三である⁽⁵⁾。会員は店の営業の合間を縫って町会活動に参加している。

昭和六一年度には渋谷中央街で街路灯の整備、舗装道のカラー化、街路灯の新設、ケーブル地中埋設による電柱撤去などを実現している。平成元年度には、渋谷中央街の入口アーチに電光掲示板（スーパーサイン）を設置し、天気予報、ニュース、官庁関係のお知らせなどを間断なく流すようになった。平成二年には渋谷駅を中心とする再開発プロジェクトチームが設置された。平成一二年にオープンした渋谷マークシティの開発に伴い、マークシティのガード下に「ウェーブ広場」を整備した。そこに、特設ステージを設け、「金王八幡宮例大祭」のイベントや「渋谷サウンドパライズ」「クリスマスジャズストリート」「渋谷アコーステックライブ」などのイベントが行われた。

『まちづくりのあしあと』には、渋谷中央街の主な年間行事として、一月の新年会、五月の定期総会、六月の健康診断、七月の一泊旅行、祭礼世話人会・町内害虫駆除、九月の祭礼と渋谷ミュージックフェスティバル、一〇月の日帰りバス旅行、一二月の町内夜警・役員会納会を挙げている。また、毎月一回の常任理事会が開かれている⁽⁶⁾。平成二四年現在でも、ほぼ変わらずこうした年間行事を行っている。月一回の理事会と青年会も行われている。ただし、一〇月の日帰り旅行が都内などの近場での食事会になっている。

渋谷中央街のある道玄坂一丁目全体の人口・世帯数は、国勢調査によると、昭和六〇年の人口が四八五人、世帯数が二三三世帯であったが、平成一七年の人口が一六七人、世帯数が一〇〇世帯である。人口と世帯数ともに減少している。現在、渋谷中央街に住んでいる人は三軒だけであるという。いずれもビルを持っているが、住んでいるのは老夫婦だけで、常連客が中心の店を細々と営んでいる。老夫婦は「生まれたところだから離れたくない」というが、その息子たちは世田谷や松濤などに住んでいる。かつては一階が店舗で二階が居住空間であった。バブルの時に渋谷中央街から移転した。移転後、町会に出ない人も多くなったという。渋谷中央街の平成二四年現在の会員数は、渋谷中央街のホームページによると、一店舗・事務所をひとすると、本会員一一八、賛助会員一四の計一三二である⁽⁷⁾。このうち、祭りで活躍する青年会のメンバーは平成二四年現在、一三人である。

一方、渋谷中央街に属さない非会員が存在する。渋谷中央街事務所のS・I氏によると、七〇〇人くらいは町会に「入れない」

「入らない」ところがある。一つのビルで四〇人いると三九人は町会（中央街組合）に入っておらず、管理人のみが入会しているといったところもあるという。渋谷中央街は、振興組合ではなく、任意の組合のため、組合（町会）費を強制徴収できない。何か月も会費を滞納して、その分を「払ってほしい」を請求した時に「それなら、やめます」といって支払いを拒否されても（入会した期間の分の支払いを求めるが）強制的な徴収はできないという。ビル内のテナントも移り変わりが激しく、地方からきたテナントが二千万円かけて店を改装してオープンしたが、商品が高価なため売れず、二ヶ月で引き揚げたというケースもあるという。しかし、祭りに参加する渋谷中央街のビル管理業の男性によると、所有するビルに六つのテナントが入っているが、移動したのは一軒だけで、組合（町会）費は全員払っているという。しかし、町会の活動や祭りには参加していないという。

（三）神輿の運搬、東急プラザへの展示

SHIBUYA109前へ神輿集合を行う約一週間前の土曜日の夜、金王八幡宮の神輿庫から渋谷中央街の神輿が出され、渋谷駅南口の東急プラザ一階のショーウィンドーに展示された。旧東急プラザ閉館の前年の平成二六（二〇一四）年九月まで、旧東急プラザへの神輿展示が行われた。

平成二四年は九月八日（土）の夜に神輿庫からの神輿の搬出が行われた。集合時間の二〇時前、渋谷中央街の遠州屋前に神輿を運搬する渋谷中央街関係者、アルバイトの若者らが集合した。平成二四年は國學院大學の卓球部の学生五人がアルバイトとして参加した。また、東急不動産の会社員三人も神輿運搬に参加した。合計で約二〇人近くが集まった。

二〇時過ぎ、神輿を積むトラック一台、祭りに使う道具などの荷物を積むワゴン車二台、乗用車などに分乗して、中央街から国道二四六号を通って金王八幡宮へ向かった。二〇時九分、金王八幡宮の正面参道側、大鳥居近くにある神輿庫前に到着した。渋谷中央街の神輿庫のシャッターが開けられ、神輿の前に置かれた荷物が出された。そして、大人神輿が台車に載せられて横付けされたトラックの荷台まで慎重に移動した。台車からトラックの荷台へは「せーの」と掛け声をかけて一気に移された。大人神輿は参加者総出で持ち上げた。荷台に大人神輿を移してからも「向きが逆」と神輿を動かす方向にも注意しながら荷台の奥へ載せた。大人神輿の周りには担ぎ

棒やウマ（神輿を置く台）、太鼓などが載せられた。大人神輿の後には子ども神輿がトラックの荷台へ載せられた。その他の荷物は、「メトロ」や「営団」と呼ばれる営団地下鉄の敷地内と、渋谷中央街事務所へ運搬する物に分類されてワゴン車に載せられた。営団地下鉄の敷地は、荷物置場として渋谷中央街が祭りの際に借りている。

神輿を積む際、その様子を見物する通行人の姿はなく、近くのレストランからは神輿の運搬とは全く無関係に賑やかな声が聞こえてきた。土曜日の夜の〈渋谷〉で神輿の運搬は粛々となされていった。

二〇時四二分、神輿を積んだトラック、荷物を積んだワゴン車などに、神輿運搬の参加者は分乗して東急プラザ前、渋谷中央街へと向かった。神輿を積んだトラックは土曜日の夜の国道二四六号を走り、東急プラザ前へと横付けされた。

二〇時五一分、東急プラザ一階の出入口前に神輿を積んだトラックが着くと、まずウマや案内板など、神輿の展示に必要な備品が降ろされ、東急プラザの中に運ばれた。また、大人神輿を降ろす前に子ども神輿を荷台から東急プラザの中に移した。通行人の中には神輿を積んだトラックを立ち止まってみたり、携帯で写真を撮る人が少しみられたが、多くの通行人は立ち止まらずにトラックの脇を通り過ぎていった。東急プラザの一部店舗が営業している時間帯であったため、上層階で食事を終えて一階に降りてきた人たちも神輿を運び込む光景に出くわした。

二〇時五五分、トラックの荷台から大人神輿を降ろした。「セーの」で持ち上げてまずは荷台から台車へ神輿を移した。次に、台車に載せた神輿を東急プラザ入口のガラス戸を開け、そこを慎重に通過させた。東急プラザの警備員もその様子を心配そうに見守っていた。台車から下ろされた神輿は、ショーウィンドーに先においた二つのウマの上に移された。そこで神輿の飾り付けが行われた。この間、二一時になると、上層階へのエスカレーターが停止しシャッターが下ろされた。また、一階のコージコーナーなどの店舗が閉店する中、タリーズコーヒーは二二時まで営業を続けた。神輿の飾り付けの光景をしばらくみている男性や「金王八幡宮の祭り」であると一緒にいる人に説明して通り過ぎる人がみられた。しかし、立ち止まることなく通り過ぎていく人も少なくなかった。また、神輿運搬を手伝いに来た東急不動産の社員とは別に、東急プラザの関係者も展示の様子を見守っていた。

ショーウィンドーには大人神輿のほか、子ども神輿も展示された。神輿の前には三方に載せられた神饌、左右には獅子頭と榊も供え

られた。神饌の前には賽銭箱、子ども神輿の横には太鼓、神輿の案内板、「金王八幡宮御鎮座920年」と書かれた赤い旗二本が立てられた。そして、展示の周辺は柵で仕切られた。平成二三年は、「渋谷中央街」と「道玄坂一丁目」と書かれた高張提灯が一本ずつ飾られたが、平成二四年には見られなかった。

二〇時五六分、神輿の展示ができあがった。展示が終わると、渋谷中央街の関係者の中には何人か携帯で写真撮影をする人がみられた。神輿の運搬に参加した人たち全員が集まり、飲料水が配られ、アルバイトの学生にはその場で給料が支払われた。そして、渋谷中央街副理事長の挨拶、東急プラザの関係者の挨拶、神輿責任者（町会・青年部）の挨拶がなされ、「東急プラザさんの発展と町内会の皆さまの御多幸」を願って一本締めで終了した。時刻は二二時をまわっていた。

現在、東急プラザと呼ばれる渋谷東急ビルは、昭和四〇（一九六五）年六月一三日に、東急不動産株式会社の安定収入源の拡大と副都心渋谷開発の核としての期待を担って開業した。開業日の総入館者数は五万人以上を数えた⁽⁸⁾。

渋谷中央街副理事長のM・S氏（昭和二〇年生）によれば、東急プラザへの展示は昭和五八年から始まったという。昭和五六年に、渋谷中央街が持っていたそれまでの神輿を渋谷三丁目町会へ売って、一六〇〇万円を掛けて渋谷で一番大きいといわれる大神輿を作った。翌・昭和五七年には東急東横店に展示し、その翌年の昭和五八年から東急プラザに展示するようになったという。同年に金王八幡宮の正面参道側に各町内の神輿庫が新築された⁽⁹⁾。

（四）例大祭の祭典

平成二四（二〇一二）年は、鳳輦の巡幸や宮入は行われなかった。九月一四日（金）の一一時から約一時間に亘って金王八幡宮で例祭祭典が厳粛に執行された。祝詞奏上の後、奏楽に合わせて国歌斉唱が行われた。玉串奉奠では、金王八幡宮の責任役員、総代役員、元別当寺・東福寺住職のあと、東京都神社庁渋谷区支部長（穂田神社宮司）、明治神宮宮司、東郷神社宮司が玉串を捧げ参拝した。また、渋谷区長、都議会議員、元渋谷区長、渋谷家一族も玉串を捧げ参拝した。祭典の後、参列者は社務所で直会となった。祭典の間、神社の拝殿前で参拝する人が二四人いた。中には沢山のお賽銭を入れて熱心に拝む姿もみられた。一方で、渋谷中央街の関係者の姿はみら

れなかった。ただし、金王八幡宮へは毎年一一万円の奉納金を町会から納めている。

翌一五日（土）には神社の神楽殿で奉納行事が行われた。また、神社の駐車場でもイベントが行われた。しかし、宮入のあった平成二三年に比べると、境内に訪れる人は少なかった。

（五）東急プラザから御神酒所への神輿の移動

金王八幡宮で午前中に例祭祭典が行われた九月一四日（金）。渋谷中央街では、一四時に、東急プラザに展示された神輿が渋谷中央街の御神酒所へ移された。この日も渋谷中央街の青年会が中心となって、理事やアルバイト五人、東急不動産の社員二人が参加して神輿や荷物の運搬が行われた。展示された神輿の前には賽銭箱が置かれていたが、小銭の音が聞こえる程のたくさんのお賽銭が入れられていた。また、神輿を移動するために、周辺の荷物から片付けを行っている間にもお賽銭を入れる年配の女性がいた。大人神輿は参加者が総出でウマから台車に移し、たくさんの人が通行する金曜日の昼間、渋谷をマークシティのガード下に設営された渋谷中央街の御神酒所まで移動した。台車に載せられた神輿が移動する様子は普段はみることでできない光景であった。神輿を東急プラザから出すと、展示をしていた東急プラザへ挨拶に行った。

一四時一九分、御神酒所脇に神輿が到着した。子ども神輿の到着を待って、大人神輿を台車からウマの上に移した。一四時二四分、参加者総出で「せーの」と掛け声をかけて大人神輿を台車からウマの上に移した。子ども神輿は大人神輿に脇に置かれた。神輿の案内板と賽銭箱は大神輿の前に置かれた。神饌や獅子頭、榊などの祭具は御神酒所の中に供えられた。「渋谷中央街」と「道玄坂一丁目町会」と書かれた高張提灯は御神酒所の左右に、笹竹と一緒に据えられた。大人神輿には、御神酒・米・塩、子ども神輿には米・塩が供えられた。また、「営団」や「メトロ」と呼ばれる、銀座線乗務管区渋谷車掌事務室・渋谷運転事務室の敷地に置かれた渋谷中央街の貸し半纏や神輿用の柵などが運ばれた。運ばれた柵は、大人神輿と子ども神輿の周囲を囲み、神輿正面の柵の左右に笹竹が付けられた。「営団」から運ばれた紅白幕は、ウェブの広場に設置された特設ステージの舞台に付けられた。青年会のメンバーは店の仕事の合間に参加し、東急プラザから御神酒所までの神輿の移動を行った。そのため、青年会のメンバー総出というわけにはいかず、渋谷中央街の理事やア

アルバイトを含め、二〇人くらいで行った。終了後、参加した青年会の人たちは、同じ日の一七時から行われる御霊入れまで、まだ時間があるため、一旦自分の店に戻った。

三、祭りとイベント

(一) 御神酒所への御霊入れ

御神酒所までの神輿の移動が終わると、一七時から金王八幡宮神職を齋主に、御神酒所への御霊入れと神輿のお祓いが行われた。

一六時四五分頃、金王八幡宮神職一人が御神酒所へ到着し、御神酒所内で神事用の装束に着替え、準備に入った。町会の人たちは、神職が着替える傍らで榊の葉で玉串を作った。この日は、金王八幡宮の多くの氏子町会で御神酒所への御霊入れと町会神輿のお祓いが行われた。そのため、金王八幡宮の神職は手分けして、青山・渋谷の氏子町会の御神酒所を巡る。渋谷中央街に来た神職によると、渋谷中央街の後、栄和町会、神山睦会、神泉・円山親栄会の計四ヶ所の御神酒所を廻って御霊入れを行った。

一七時前、御霊入れに参列する多くの人が「中央街」と町会の名前が入った半纏を着て、御神酒所へ集まった。一七時過ぎ、渋谷中央街の理事長・副理事長、神輿責任者・副責任者を含む九人が参列して御霊入れの神事が行われた。御霊入れの神事は、修祓の後、神職の「オー」という警蹕によって、金王八幡宮の御霊が御神酒所（金王八幡宮）と書かれた掛け軸に降ろされた。そして、供物を献上する献饌、祝詞奏上が行われた後、参列者全員が玉串を神前に捧げ、参拝した。御霊入れが終わると、神職・参列者は神輿の前に移動した。そこで修祓のあと、渋谷中央街理事長が代表で神輿に向かって参拝し、他の参列者もそれに合せて神輿に拝礼した。これで、神事は終了した。時間にして約一五分ほどであった。神事が終わると、御神酒所が閉められた。一七時五〇分過ぎ、神輿を照らす照明と御神酒所の左右に取り付けられた高張提灯の灯りの調整を終え、町会の人たちやアルバイトの学生は御神酒所をあとにした。柵で囲われた神輿の脇には東急グループ警備会社の警備員一人が立ち、神輿を守った。

(二) イベント準備、挨拶回り、神輿組立て

翌九月一五日(土)。この日は、渋谷の氏子町会の神輿がSHIBUYA109前に集合する前日に当たる。渋谷中央街では、「金王八幡宮例大祭前夜祭」として、御神酒所前に出店(屋台)を開いた。「ウェーブの広場」に設けられた特設ステージでは、一八時から大森囃子会とアイドルグループ「A e e r」(エール)のイベントが行われた。エールは、健康・エコ・環境問題に真正面から取り組むという女性四人組のアイドルグループである。この日は、イベント開始前に、出店を準備し、祭礼実行委員長と神輿責任者らが他町会へ挨拶回りを行う。また、神酒所脇に置かれた大人神輿・子ども神輿に担ぎ棒を取り付ける。

アルバイトの学生五人は正午に御神酒所に集合し、出店の準備を始めた。ウェーブの広場の特設ステージでは、イベント業者によって舞台のセッティングが行われた。既に「金王八幡宮例大祭」のパネルがステージ中央に立てられていた。渋谷中央街が出す出店では、ソフトドリンク、かき氷、生ビール、フランクフルト、焼きそばが売られる。イベントをやっているとだいたいの人が立ち止まり、ビールなどを売っていると買う人がいるという。長机を出し、その上に焼きそばを作る炒め台、かき氷を作る機械などが置かれ、出店の準備がなされた。御神酒所脇に置かれた神輿を立ち止まってみる人や写真を撮る人が少なからずみられた。中には、「神輿はいつ動くの?」と聞く中年の男性もいた。「明日」と町会の人が答えると残念そうな表情をして去っていった。御神酒所へ奉納金や奉納品を持参する店や近隣町会の人の姿がみられた。奉納金や奉納品を納めると、「金王八幡宮」と「渋谷中央街」「道玄坂一丁目」の文字が入った手拭いとお菓子が返礼として渡された。奉納金には領収書が発行された。また、「金王八幡御奉納者」の芳名板に、奉納金額や奉納品目を記した奉納者の名前が貼り出された。

一三時四七分頃、大人神輿と子ども神輿の担ぎ棒を保管場所から御神酒所へ運んだ。長い棒は二人掛りで運ぶため、アルバイトの学生が動員された。一四時一五分過ぎ、お囃子の会「大森はやし会」の人たちと町会の人たちの打ち合わせが行われた。その後、トラックの荷台にお囃子の舞台が組み上げられた。

一四時四〇分頃、渋谷中央街の祭礼実行委員長、神輿責任者、神輿副責任者二人の計四人が車に乗って、近隣町会に挨拶に回った。長年の付き合いがある近隣町会のみならず、本年、渋谷中央街の御神酒所へ奉納品を持って挨拶に来た町会を含む、挨拶に来た全ての

町会の御神酒所を巡った。そのため、挨拶に廻っている間に渋谷中央街の御神酒所へ挨拶に来てしまい、行き違いとなるケースも発生した。行き違いとなった町会へは、あとで挨拶にいったこともあったという。本年は、富士見町会、道玄坂上町会、南平台町会、神泉・円山親栄会、道玄坂町会、渋谷百軒店町会、宇田川町会、桜丘町会、鶯谷睦会の順に、計九町会の御神酒所へ挨拶に廻った。各町会の御神酒所へは清酒二本と渋谷中央街の手拭いを持参して挨拶を行った。挨拶回りは約一時間で終わり、一五時三五分頃、渋谷中央街の御神酒所へ帰着した。既に、「大森はやし会」の囃子屋台（トラック荷台）は組み立てられ、お囃子が奏でられていた。また、イベントが行われるウェーブの広場の特設ステージでは、照明や音響のチェックが行われていた。

一五時半過ぎ、神輿の周りの柵や案内板、賽銭箱が一旦片付けられた。そして、青年会を中心とした半纏姿の町会員が神輿前に集合した。アルバイトの学生は出店で売っているため、町会の人と手伝いに来られた神輿同好会の一人が飾り棒から担ぎ棒へ付け替えた。担ぎ棒への付け替える作業は、まず、参加者総出で大人神輿を持ち上げ、ウマを前に移動し、神輿の位置を変えた。次に、二本の飾り棒を外してから、二本の担ぎ棒を入れた。続いて、ウマを担ぎ棒が支えられる位置まで移動した。神輿の真ん中にある二本の担ぎ棒のほか、その間をトンボと呼ばれる渡し棒を渡し、中央の担ぎ棒の外側に左右一本ずつ（計二本の）補助棒を付け、組んでいった。そして、渡し棒と担ぎ棒を縄で締めて固定した。

一七時過ぎ、神輿を組み立てる作業は慎重に続けられているが、特設ステージではアイドルグループ・A e 1 1（エール）のリハサールが行われた。アイドルのファンのみならず、道行く人たちが立ち止まってイベントステージをみていた。神輿を組み立てる作業も、特に年配や中年の男性を中心に立ち止まってみていく人や写真を撮影する人たちの姿がみられた。御神酒所脇には、渋谷中央街の出店のほか、A e 1 1の関連書籍・グッズの出店も出された。一七時一七分、担ぎ棒の取り付けが済むと、縄紐の網掛けや装飾品の取り付けが行われた。大人神輿の屋根に付けられた「大鳥」には稲穂が二束取り付けられた。また、大人神輿の傍らでは子ども神輿の飾り棒を外し、担ぎ棒へ付け替える作業と装飾品を付ける作業が行われた。一七時四七分頃、神輿の装飾がほぼ終わると、神輿全体の汚れを拭き取った。終わると、大人神輿前に御幣が置かれ、賽銭箱もその前に戻された。近くの路上では、大森はやし会の人たちがお囃子に合わせて、獅子舞を舞ったり、ヒョットコが踊ったりした。これを多くの若者が立ち止まって見物した。中には渋谷中央街の出店

で買ったビールを飲みながら見物している人もいた。特設ステージ前には、男性を中心とした多くの若者が集まり、イベントの開始を待っていた。

(三) イベントと若者の沸騰

イベント開始前、特設ステージの上に司会の女性が上がった。司会は、イベントの進行を案内するだけでなく、渋谷中央街の出店の紹介、A e 1 1の物販が出されていることを紹介していた。そして、大森はやし会の紹介を行い、大森はやし会の囃子屋台が、翌一六日の祭りの「本番」では神輿の先頭に行くことが伝えていた。続いて、一八時からステージ上でお囃子が披露された。観客は静かにお囃子の音色に聞き入っていた。大森はやし会の舞台が終わると、「中央街」の半纏を着た渋谷中央街の祭礼実行委員長と理事長の挨拶が行われた。祭礼実行委員長は、明日は大神輿が一二時から動くため、もし機会があったらみに来てほしい旨、理事長は、渋谷中央街に若い人たちが利用できる飲食店が沢山あり、ぜひまた来てほしい旨を伝えた。挨拶が終わると、司会からA e 1 1の紹介が行われ、一八時二〇分過ぎからA e 1 1の一回目のステージが行われた。A e 1 1のメンバーの名前が書かれたTシャツを着たファンの男性(二〇代〜三〇代頃)を中心に観客はステージに向かって「ハイ」と掛け声をかけ、飛び上がるなど大いに盛り上がっていた。この盛り上がりと人だかりをみて、通行人は立ち止まってステージをみたり、携帯で写真撮影する光景が複数みられた。観客の後ろでは渋谷中央街の青年会が大人神輿の飾り付けを直していた。

一八時五五分過ぎ、一回目のステージが終了した。二回目のA e 1 1のステージが一九時四〇分から行われる旨が司会から伝えられ、渋谷中央街の出店の利用が勧められた。素直に出店でビールやカキ氷などを購入するファンが多数みられた。また、出店の横に出されている物販では、千円以上の購入者にはA e 1 1との握手会に参加できることが伝えられた。ステージ上では、A e 1 1とファンで握手会がなされた。握手会がなされている間、ファンや見物人は帰ろうとはせず、ステージ前で握手会の光景を見つめる人や出店のものを飲食するなどしてとどまる人が多かった。握手会が終わると、大森はやし会が囃子屋台でお囃子を奏し、それに合わせて獅子舞が踊った。通行人の中には立ち止まってみたり、写真撮影をする人がいたが、二回目のステージを待つ観客はこちらの方にはほとんど視線

を向けていなかった。二回目のステージの前に出店のフランクフルトが完売した。

一九時四〇分過ぎ、二回目のA e l lのステージが行われた。一回目のステージと同様に、ファンの男性を中心に大いに沸騰した。通行人がやはり立ち止まって写真撮影をしたり、一緒に盛り上がる女性もみられた。ステージが終わると、司会から明日の渋谷中央街の祭りの予定が案内された。二〇時半頃から二一時まで、ステージでA e l lとファンで撮影会が行われた。この間、御神酒所が閉められ、青年会の人たちは神輿の周りに柵を整えた。二一時過ぎ、撮影会が終わると観客たちは帰路に着いた。そして、町会の人たちは出店を片付け、掃除をした。最後に、町会の人たちが集まって、理事長が挨拶をして解散となった。以上のような形で、祭りに際してイベントが行われた。

渋谷中央街の理事長であるH・S氏（昭和二〇年生）によると、「イベントで中央街の名前だけでも知ってもらえればいい」と話す。イベントの合間の挨拶にもあったが、名前だけでも覚えてもらって、渋谷中央街へ飲食に来てほしいという願いがイベントに込められている。つまり、渋谷中央街の発展への期待が祭りとともに行われるイベントに託されているといえる。イベントは、毎年、金王八幡宮の祭りに合わせてを行っている。イベント会社を頼んで、平成二二（二〇一〇）年はプラスバンドを呼んで二時間で一六〇万円以上かかっている。イベントの開催には、渋谷区から五〇万円の補助が出る。平成二三年は、東日本大震災が発生したため、イベントを自粛した。そのため、補助金は支給されていない。しかし、イベントを行うと人が集まり、御神酒所へ奉納金も増えるという。渋谷中央街の祭りの費用は、組合（町会）費と奉納金から捻出するため、イベントでの奉納金の増加は重要である。また、先にみたように、イベントによって渋谷中央街の出店も繁盛する。そして、渋谷区の補助もあるため、イベントとセットで祭りを行うことは、集客効果のみならず財政面での期待もあるといえる。

神輿副責任者を務めるS・S氏によると、かつては、九月一四日の「宵宮」にイベントと神輿巡幸を行い、翌一五日にも神輿巡幸で行っていた。（平成二四年から）ここ二〇年ぐらいで宵宮の神輿は上げなくなったという。以前は、イベントに盆踊りやカラオケを行ったという。カラオケや盆踊りは人が集まらなくなってやめたという。また「中央街杯」という景品を用意して、お笑い大会を一〇年以上開いた。一〇何組かの無名の芸人が競った。無名の時の「99」（ナインティ・ナイン）もかつて参加した。このほか、藤あや子、狩

人、ネプチューンなども来たという。渋谷中央街のイベントに出ると「有名になる」というストーリーが中央街関係者から語られた。平成二三年は、先に述べたようにイベントが三〇年振りに中止になった。しかし、「イベントはやめてもよいが、神輿だけは出さなくてはいけない。他の商店街が出すのに中央街が出さないわけにはいかない」という。あくまで、イベントは沢山の人を集めることに主軸が置かれている。だからこそ、人が集まらなくなったイベントはやめて他のものに変更していくことになる。

このように、渋谷中央街では、祭りイベントをセットで行うことによって、祭りを維持し、盛り上げているといえる。

四、SHIBUYA109 前神輿集合

(一) 発御式から SHIBUYA109 前まで

翌九月一五日(日)。この日は、金王八幡宮の渋谷の氏子町会、一四町会の神輿が SHIBUYA109 前に集合し、道玄坂神輿連合渡御を行う。同じく青山の氏子町会は表参道で一四時半から神輿連合渡御を行っている。

渋谷中央街では、正午に御神酒所から神輿が出発し町内を巡ったあと、SHIBUYA109 前に一四時前に到着した。一四時〜一四時半まで SHIBUYA109 前で式典が行われた。そのあと、道玄坂を連合渡御し、再び町内に戻って巡幸し、一八時に御神酒所へ帰着する予定である。

一一時過ぎ、既に御神酒所周辺には沢山の中央街の半纏姿の担ぎ手が集合している。この担ぎ手の多くが神輿同好会の人たちである。

渋谷中央街の神輿には、平成二四(二〇二二)年は、「飛雄連」「浅草志龍」「江戸祭道」の三つの神輿同好会が参加し、主要な担ぎ手を占めていた。神輿同好会の人たちは、神輿の前方の「左肩前」と「右肩前」、神輿の後方の「後」の担ぎ棒を休憩場所など神輿を降ろす場所で担ぐ場所を交替しながら担いでいった。しかし、四本の担ぎ棒のうち、内側の二本は渋谷中央街の会員に限られていて、外側の二本を神輿同好会の人たちが担ぐことになっている。そのため、町会の人と同好会の人を区別するため、同好会の人たちは色の付いたリボンをつける。飛雄連はピンク、江戸祭道は赤色、浅草志龍は黄色であった。この同好会うち、毎年「当番会」を一つ決め、交通整理や神輿の台であるウマを曳き出すウマヒキなどを行っている。金王八幡宮への宮入が行われた平成二三年は、この三つの同好会の

ほか、「泥亀陸」が緑色のリボンを付けて参加した。当番会は浅草志龍が務めた。

一一時二四分頃、御神酒所脇の大人神輿を十字路の路上まで移動した。また、同じ頃、神輿副責任者は、高張提灯と旗を持つ学生アルバイトの四人と神輿の巡幸ルートの確認を行った。神輿の担ぎ手には四つの神輿同好会のほか、東急不動産の社員が二〇人程度が参加した。社員の着る半纏（前側）には「道玄坂一丁目」と「東急不動産株式会社」の文字が入っていた。

一一時四五分頃、御神酒所前に町会員、神輿同好会からの担ぎ手が集められた。そして、神輿が出発する前に「発御式」が行われた。

一一時五〇分過ぎ、司会（町会の青年会一人が担当）のアナウンスのもと、「金王八幡宮の御神体へ向かって深く礼」の合図のもと、担ぎ手たちは御神酒所へ向かって拝礼し、「直れ」の声で拝礼を終えた。そして、司会から「道玄坂一丁目町会町会長・渋谷中央街理事長、並びに氏子総代」と紹介された渋谷中央街理事長から挨拶がなされた。理事長は、参集頂いた担ぎ手の人たちへの感謝のあと、「事故ない安全な渡御」が行われ、無事に町内へ戻ることを強調していた。続いて、神輿責任者が、参集頂いた担ぎ手の人たちへの感謝のあと、神輿巡幸の世話をする渋谷中央街の青年会のメンバーを一人一人名前を呼んで紹介した。紹介されたメンバーは「よろしくお願いします」と担ぎ手に挨拶をした。そして、神輿の巡幸ルートの説明、神輿同好会の紹介とリボンの色を紹介、大森はやし会の紹介を行った。それぞれの紹介に当たっては「よろしくお願いします」と挨拶し、盛大な拍手が送られた。最後に、「中央街の神輿は渋谷の一二基ある中で一番大きな神輿のため、担ぎ手が多く否が応でも目立ってしまいますので皆さまのマナーをお願いしたい」とのことと、町会と神輿同好会の担ぎ場所の違い（内側二本は町会、外側二本は同好会）について改めて注意を喚起し、「無理ないように」「事故のない渡御」を確認し、挨拶を閉めていた。そして、発御式の最後に祭礼実行委員長が挨拶に立ち、参集頂いたことへの感謝、ここでも「事故のない渡御」が確認され、三本締めで閉めて発御式を終えた。盛大な拍手がなされ、担ぎ手たちは神輿の前に集まっていた。

一二時四分頃、神輿責任者の拍子木を合図に渋谷中央街の神輿が出発した。大森はやし会の囃子屋台（トラック）を先頭に、「渋谷中央街」と「道玄坂一丁目」と書かれた高張提灯二本と金王八幡宮御鎮座九二〇年祭の旗、神輿の順に巡幸を開始した。手拍子と大森はやし会のお囃子に合わせて、休憩場所の遠州屋前まで渡御した。酒屋の遠州屋前には長机が出され、ビールやつまみなどの準備に追われていた。神輿は遠州屋前の到着が近くなると、手拍子と掛け声で盛り上げた。神酒所から遠州屋まではわずかな距離である。一二時

一分頃、神輿は遠州屋前に到着し、神輿責任者の拍子木の合図で神輿が降ろされた。ここで一〇分間の休憩となった。担ぎ手たちは盛んにビールを口にするが、毎年、神輿の組み立てなどの準備を手伝い、神輿巡幸の世話をする同好会の男性は、飲み過ぎによって巡幸の後半で神輿を担げなくなり、担ぎ手の不足につながることを心配していた。休憩中には、大森はやし会による獅子舞がお囃子に合わせ踊り、担ぎ手たちを楽しませた。そして、芸の披露が終わると、遠州屋から大森はやし会に金一封が奉納された。神輿責任者から遠州屋に休憩のお礼を伝え、一二時二三分頃、遠州屋から神輿が発した。遠州屋を出た神輿は国道二四六号の歩道を池尻方面に少し進み、右折して渋谷中央街の中に戻った。居酒屋の千両を経て、東急プラザ脇に位置する渋谷中央街のアーチビジョン下で休憩した。アーチビジョン下では、折からの雨に担ぎ手たちは横浜銀行の好意によって銀行内で雨宿りをした。

一三時八分頃、アーチビジョン下を出発した神輿は、車道を進み、渋谷マークシティの連絡通路の下をくぐり、スクランブル交差点を右折し、キューフロント前まで進んだ。車道には、青年会の人たちによってロープが張られ、通行するバスや自動車の合間を縫う形で巡幸した。神輿と交通とのせめぎ合いがみられた。渋谷マークシティの連絡通路の下では音が反響することもあって、担ぎ手たちは大いに盛り上がっていた。信号で待つ人や通行人が立ち止まって神輿の巡幸を眺めていた。携帯で写真撮影する人も少なくなかった。渋谷マークシティの連絡通路の下をくぐり、スクランブル交差点側に出ると、連絡通路の上から窓越しに立ち止まって神輿の巡幸を眺める人が多数みられた。スクランブル交差点でも、信号待ちの人たちも含め、見物人は多数いるが、交差点を横断する人たちと交差点。横断する人たちは神輿の合間をすり抜けていった。スクランブル交差点では警察によって交通整理が行われ、スクランブル交差点からSHIBUYA109方面の車道は通行止にされていた。スクランブル交差点を左折して、一三時二〇分頃、キューフロント前の車道で神輿を降ろして休憩に入った。スクランブル交差点では渋谷三丁目町会の神輿と一緒にいった。休憩場所はスクランブル交差点に近く、横断する人や他町会の神輿も来たため、神輿をさらに前に移動した。一三時二三分過ぎ、拍子木を合図に再び出発した。神輿はSHIBUYA109前を通過し、文化村通りをヤマダ電機前まで進んだ。この付近をSHIBUYA109方向に路上を巡幸すると、あたかも神輿はSHIBUYA109へ向かって巡幸しているかのようなようであった。特に、若い担ぎ手にとってはSHIBUYA109前付近の巡幸は「一番気持ちいい」ことであるようだ。担ぎ手は掛け声を出しながら、笛の合図に合わせて巡幸した。SHIBUYA109前では雨が降っているせいもあり、雨宿りをしながら神

輿の巡幸を写真撮影する人もみられた。SHIBUYA109を左にみながら通過し、文化村通りを東急百貨店本店方向に向かって進んだ。途中、対抗車線を巡幸する道玄坂上町会の神輿や渋谷三丁目町会の神輿とすれ違った。すれ違いざまにお互いの神輿が掛け合いをして少し盛り上がった。渋谷中央街の神輿は、ヤマダ電機がある道玄坂二丁目東交差点でUターンして、再びSHIBUYA109前に向かって進んだ。SHIBUYA109前を通過し、スクランブル交差点よりの所定の場所に向かい、ここで神輿を降した。ただし、すぐには神輿を降ろさないで、何度か揉んで祭りを盛り上げた。一三時四二分、ようやく拍子木が鳴らされ、神輿を降ろした。そして、ここでお昼休憩となった。担ぎ手にはおむすびなどが配られた。そのあと、SHIBUYA109前で一四時から式典が行われ、各町会の神輿が金王八幡宮の神職によってお祓いがなされる。このため、渋谷中央街の子ども神輿もSHIBUYA109前、大人神輿の隣まで来る。子ども神輿は、町会員と三つの神輿同好会の子どもたちが担ぐ。

(11) SHIBUYA109 前式典

SHIBUYA109前には、続々と渋谷一四町会の神輿が集まってきた。平成二四(二〇一二)年の当番町会は道玄坂町会と渋谷二丁目町会であった。渋谷二丁目町会の大人神輿が敬老神輿として式典で担がれた。そのため、SHIBUYA109前中央のすぐ脇に、渋谷二丁目町会の神輿が置かれた。道玄坂町会からは子ども神輿が出された。一四時過ぎ、SHIBUYA109前に一四町会の高張提灯が集合して並んだ。また、町会の神輿の間を通過して、金王八幡宮宮司と祓い幣を持った神職たちが行列して、高張提灯の間を抜けてSHIBUYA109前中央に到着した。そして、金王八幡宮の神旗がSHIBUYA109前に翻った。一四時四分、渋谷二丁目町会の神輿が高張提灯に囲まれたSHIBUYA109前中央に出された。カメラを持った見物人たちが、SHIBUYA109を背景にした高張提灯や神輿を写真に収めようと盛んにシャッターを切った。一四時一〇分過ぎ、SHIBUYA109前で「道玄坂神輿連合渡御式」が始められた。最初に、年番総代より挨拶がなされた。その中で「この伝統ある歴史を次の世代、さらに次の世代へ受け継いでいきたいと思っています。そのためにも、子ども神輿も参加しております。皆さんの元気を次の世代に伝えていきたいと思っています」と挨拶した。続いて、「渋谷で一番元気な男」として司会から紹介された渋谷区長が挨拶に立った。その挨拶の中で、渋谷が大きく変わろうとしていること(渋谷ヒカリエの開業、今後の駅街区の誕生)を挙げた

上で、「しかしながら、いくら変わっても変わってはならないもの。それは伝統であり、歴史でございます。皆様方が金王（八幡）宮様をお祭りをして、そしてこうして神輿を担いで町々に幸せを、これをお配りしていただくならば、渋谷はいつまでも元気で、そしてまたいつまでも発展をする。このように思っている次第でございます」と述べ、一四町会の道玄坂神輿連合渡御に対して心からお礼を述べたい旨を伝え、挨拶とした。渋谷区長に続いて、金王八幡宮の責任総代が挨拶に立った。その挨拶の中で、今日は金王八幡宮の例大祭であり、例大祭とは氏子である皆様の繁栄を願うことである。今年は金王八幡宮が御鎮座九二一年を迎え、益々渋谷の街の繁栄と皆様方のご健勝とご多幸を祈念する旨が伝えられた。以上の三人の挨拶が終わると、司会から、神輿のお祓いが行われるため、被り物を外し担ぎ手は起立するように促された。そして、幣を持った神職が渋谷二丁目町会の神輿のお祓いをしたのを皮切りに、金王八幡宮宮司がマイクを通して祝詞奏上がなされている間、一四町会の神輿のお祓いに神職たちが慌ただしく走り回った。背後にあるSHIBUYA109では音楽が流れている中、金王八幡宮宮司の祝詞がSHIBUYA109前に朗々と響いた。高張提灯を持った神輿責任者や担ぎ手の中には頭を下げている人もみられた。見物人は高張提灯の外側からみて、写真撮影する人もいたが、高張提灯の間を通り過ぎる人や祭典には興味を示さず、SHIBUYA109に滑り込んでいく人もいた。祝詞奏上が終わると、敬老神輿に移った。平成二四年は、年番町会の渋谷二丁目町会が出した敬老神輿のほか、「お孫さんたちがお祖父ちゃんに負けるな」ということで道玄坂町会の子ども神輿が敬老神輿と一緒に担がれた。敬老神輿は、スーツに半纏を羽織った渋谷区長をはじめ、氏子総代や各町内の年配の関係者が神輿を担いだ。渋谷中央街からは祭礼実行委員長が参加した。一四時二一分、「道玄坂商店街」の旗を先頭に、敬老神輿の脇に、子ども神輿が入ってきた。司会から子ども神輿は元気いっぱい、敬老神輿もお孫さんに負けないようにと促された。そして、木を入れて敬老神輿を上げ、同時に子ども神輿も上げられた。敬老神輿と子ども神輿が互いにその場で揉み合った。僅か数分の時間であるがSHIBUYA109前で敬老神輿と子ども神輿が担がれた。この様子を見物する年配の老人が多数みられた。敬老神輿が終わり、年番町会の挨拶のあと、渋谷の発展を祈念して三本締で式典を閉めた。そして、年番町会である渋谷二丁目町会の神輿を先頭に道玄坂神輿連合渡御に移った。金王八幡宮宮司以下の神職と責任総代は悠々と神輿の間を通り、渋谷駅方面に抜けていった。

(三) 道玄坂神輿連合渡御、還御

一四時三五分、渋谷中央街の神輿も道玄坂神輿連合渡御に SHIBUYA109 前から出発した。今度は、SHIBUYA109 の左脇を進み、道玄坂を登っていった。神輿の巡幸を立ち止まって、あるいは坐って見物する人は多数いるが、どちらかといえば熟年層が多かった。連合渡御では、渋谷中央街の神輿のほか、一四町会の神輿が順々に道玄坂を登っていった。ちょうど、強い西日に向かって神輿は進み、かつ坂道を登るため、担ぎ手にとっては苦しいところであった。担ぎ手たちは、お囃子に合わせて掛け声を出し、盛り上げながら坂道を突破しようとしていた。SHIBUYA109 を過ぎた右手、ユニクロの店舗前には「天城連峰太鼓」との垂幕がかかり、大太鼓がその下にセットされていた。

一四時四六分、道玄坂を登り、Uターンしてきた先頭の渋谷二丁目町会の神輿とすれ違った。道玄坂は神輿と半纏姿の担ぎ手で溢れかえった。ビルの窓や階段などから眺めている人もみられた。道玄坂の信号と、道玄坂町会の御神酒所の前を通過し、かつて YAMAHA 渋谷店があった辺りでUターンをした。そして、一五時過ぎ、反対側の道玄坂ケンタッキー前で神輿を降ろして休憩となった。担ぎ手の中には、フライドチキンとポテトを店で購入し食べる担ぎ手もいた。休憩の最中、大森はやし会の獅子舞とヒョットコ面を付けた子どもが道路の中央で踊り、見物人の興味を惹いていた。一五時一五分頃、神輿は再び巡幸を開始し、今登ってきた道玄坂を下っていった。担ぎ手にとってはこの下りも苦しいところであった。沿道には歩道の片隅に腰かけて神輿を見物したり、写真撮影する人が多数見られた。SHIBUYA109 横の休憩場所に近づくと、担ぎ手たちは掛け声を張り上げ、手拍子をしながら盛り上げた。SHIBUYA109 前で見物する人も多数みられた。一五時二八分頃、SHIBUYA109 前横で、神輿を降ろし再び休憩に入った。SHIBUYA109 前で待ち合わせをする若者も神輿が休憩する光景を眺めるが、全く関心を示さず、SHIBUYA109 へ入っていく若い女性も多かった。道行く通行人も立ち止まってみる人もいるが、関心を示さずに通り過ぎる人も少なくなかった。一五時三三分、再び神輿責任者の拍子木を合図に神輿を担ぎ、SHIBUYA109 横からスクランブル交差点を通り、渋谷中央街へ戻っていった。SHIBUYA109 前の「道玄坂下」交差点では横断する通行人と神輿が交差した。立ち止まって眺めるカップルや外国人もみられたが、足早に通り過ぎる人も少なくなかった。しかし、SHIBUYA109 前からスクランブル交差点へ多数の半纏姿の人たちが神輿を担ぎ巡幸する様子は壮観であった。特に、神輿と SHIBUYA109 のコントラストは

見所である。

一五時四四分、スクランブル交差点に渋谷中央街の神輿が差し掛かった。交差点はたくさんの方でごったがえしていた。警官数人が交通整理に当たっていた。渋谷中央街より先に道玄坂神輿連合渡御を行った道玄坂町会の神輿は、スクランブル交差点を横断し、渋谷駅前ハチ公口の交番前で神輿を高々と上げる「サシ」をしていた。渋谷中央街の担ぎ手は、道玄坂町会と同じように「交番へ神輿をサそう」と話していた。渋谷中央街の神輿は、信号が青になってから掛け声を張り上げながらスクランブル交差点をハチ公側に横断した。すぐ脇を通行人が横断する。警官が笛を吹きながら、交通整理をした。渋谷中央街の神輿は、渋谷マークシティへつがる連絡通路の下まで車道を巡幸した。そして、連絡通路下の横断歩道を京王井の頭線渋谷駅側に横断し、そこで休憩となった。連絡通路の下は音が反響するせいもあり、担ぎ手たちは掛け声を張り上げ、手拍子をしながらいに盛り上がった。神輿はすぐに降ろさず、少し揉んだあとで、一五時四八分、拍子木を合図に神輿が降ろされた。連絡通路の下は京王井の頭線渋谷駅の出入口に当り、担ぎ手にとつては一つの見せ場となっているようだ。一六時七分、休憩が終わり再び神輿の巡幸が開始された。お囃子と笛に合わせながら担ぎ手たちは威勢よく神輿を担いだ。神輿を担かず歩いて歩く担ぎ手も手拍子をしながらいに盛り上げた。神輿はしばらく歩道を巡幸し、東急プラザ脇の渋谷中央街のアーチビジョンをくぐり、ヒグチ薬局前で休憩となった。ここでは、東急プラザから差入として飲料水が担ぎ手に配られた。ここから再び、町内巡幸となった。途中の休憩場所は「中華一番前」と「VIN・鳥竹前」の飲食店前では、店の商品の餃子や焼き鳥などが、数量限定で配られた。担ぎ手たちは我先に並んでこれらのものを手にしていた。薄暗くなり始めた一七時半過ぎ、御神酒所のすぐ近くにある「VIN・鳥竹前」で休憩し、再び出発となった。ここから町内をぐるっと廻って遠州屋から御神酒所まで還御する。美味しいつまみを入れ、残すところあと少しとなった担ぎ手たちはこれまで以上に盛り上がり、お囃子や笛に合わせながら掛け声を張り上げ元氣よく巡幸した。ビルとビルの上に挟まれた道もあり、音の反響が盛り上がり、お囃子や笛に合わせながら左折し、富士そばのある十字路で一旦神輿を降ろした。そして、数分後、歓声を上げながら神輿を上げ、渋谷マークシティ(ガード下)の御神酒所までの真っ直ぐの道を威勢よく進んだ。担ぎ手たちは手拍子をしながらいに盛り上がり、神輿を盛んに揺さぶり、掛け声を張り上げながら巡幸した。大いに盛り上がった。この御神酒所までの最後の巡幸が一番盛り上がった。飲食店の二階で食事をしながら巡幸を

眺める人もみられた。

一七時五四分、渋谷マークシティのガード下まで神輿が入るが、すぐには降ろすことが許されず、一旦後退した。そして、再び御幣が立てられた（神輿責任者の立つ）方向へ神輿は威勢よく突入した。ガード下に入ると音の反響も手伝って担ぎ手は手拍子をしながら大いに盛り上がった。担ぎ手の中には子どもを肩に載せてこの光景をみせている人もいた。神輿は、神輿の正面に御神酒所が来るように向きを変えた。やがて大きな歓声上がり、御神酒所前で、神輿を「サシ」（神輿を高々と上げ）た。担ぎ手たちは拍手をして大いに盛り上がった。神輿のサシを写真撮影する担ぎ手もみられた。しかし、これで神輿は降ろす合図が出されず一旦ガードの外まで後退させられた。神輿は、再び御幣が立てられた神輿責任者に向かって突入していった。手拍子をしながら担ぎ手たちは声を張り上げ、最高潮を迎えた。まさにこの辺りが渋谷中央街の祭りのクライマックスである。さらに何度か戻されたあと、一八時、ようやく拍子木が鳴らされ、担ぎ手の歓声と盛大な拍手の中、神輿が降ろされた。そして手拍子をして大いに盛り上がった。

一八時二分過ぎ、御神酒所の「金王八幡宮御神体」に一同で拝礼した。そして、渋谷中央街理事長、神輿責任者が挨拶を行った。挨拶の度に盛大な拍手が担ぎ手から送られた。特に、神輿責任者が「お陰様で無事還御できました。また来年もここで会いましょう。よろしく願います」と挨拶をすると、担ぎ手たちは盛大な拍手を送っていた。最後に、祭礼実行委員長が音頭をとって三本締めをして、神輿巡幸は終了した。終了後、神輿同好会の関係者や大森はやし会の人たちは、理事長や祭礼実行委員長、神輿責任者ら渋谷中央街の関係者に挨拶をしてから帰路に就いていた。御神酒所と御神酒所前に置かれた神輿では、すぐに片付けが始められた。

一八時二〇分、神輿がトラックの荷台に載せられ、子ども神輿やウマなどの祭具が荷台へと運ばれた。また、そのほかの神輿庫に納められるものがワゴン車などに載せられた。一八時五〇分過ぎ、御神酒所前から金王八幡宮の神輿庫まで出発し、神輿や関係する道具を渋谷中央街の神輿庫へ納めた。二〇時近く、再び渋谷中央街御神酒所前へ戻った。理事長の挨拶のあと、神輿責任者が三本締めで閉め、祭りは終了した。渋谷中央街の関係者、アルバイトは中央街の店で二〇時半から打ち上げとなった。

なお、「鉢洗い」（あるいは「鉢被い」と呼ばれる打ち上げ（反省会））は、平成二四年は、青年会が九月二九日、世話人会は一〇月上旬の予定で行われた。

(四) 渋谷中央街と祭り

本節の最後に、渋谷中央街の人たちの「声」を紹介し、渋谷中央街と祭りとの関係を考えてみたい。

平成二二(二〇一〇)年から神輿責任者を務めるM・I氏(昭和四三年生)は、「祭りが無いのは考えられない。祭りが無い街はかわいそう。絆がないからだ」と話す。I氏は神輿副責任者を一年経験したあと、すぐに神輿責任者になった。通常は何年か副責任者を経験してから神輿責任者になるという。一年目は反省ばかりであった。そして二年目に金王八幡宮への神輿宮入を迎えた。神輿責任者として宮入ができたのは光栄であるという。警察には宮入ができるように何度も掛け合った。宮入を終え、町内に戻ったときはホッとすると話す。I氏は渋谷中央街のエリアではないが同じ道玄坂一丁目生まれ、お店が渋谷中央街に移ってからお祭りにずっと関わっている。神輿は子ども神輿から担いでいる。祭りは嫌だと思ったことが無いという。

青年会長も務め、「祭り好きである」というM・H氏(昭和三〇年生)は、一八歳頃(昭和四八年頃)、初めて大人神輿の手伝いをした。同じ頃、東急の人たちと地元の人で「飛雄連」という神輿同好会を作り、各地の祭りで神輿を担いだという。この頃は町会の人もたくさんいた。二六〜三八歳まで神輿責任者を務めた。昭和五六(一九八一)年に現在の大神輿が作られた。そのとき、神田の宮惣から新しい大人神輿をトラックの荷台に積み、荷台の四方に篠竹を立てて帰ってきたときは嬉しかった。H氏は、昭和五六年に新調される前の古い神輿の最後の神輿責任者でもある。古い神輿は宮本町会である渋谷三丁目町会に売られ、渋谷三丁目町会は現在でもこの神輿を使っている。

理事長のH・K氏(昭和二〇年生)は、神輿をみながら「毎年、毎年、風格が出てくる。きつとみんなの気持ちが入っているに違いない。担ぎ手は代わっているかもしれないが、五〇年後も担いでいたらすごいこと。そのためにも伝承していきたい」と話す。イベントの際、渋谷中央街の名前だけでも知ってもらいと話していたH・K氏である。祭りに商店街の永続を託しているといえる。

祭りに参加するK・K氏(昭和三八年生)は、「今日一日、御神酒所へ詰めてくれなんていわれるとうんざりする。それでも、いざ臨んでみると祭りは楽しくなってくる」と話している。こうした肯定的意見だけでなく、「疲れる」「大変だ」といった声も聞かれる。し

かし、祭りを「やめるわけにはいかない」という声も多く聞かれ、必ずしも積極的な理由とはいえないものの、他の商店街との関わりや町会内の人間関係もふまえつつ、祭りは継続されている。

このように、祭りを大事に考える人や祭り好きな人たちは、地域社会とのつながりや商店街の永続を祭りに託しているといえる。イベントを祭りに合わせて実施し、人集めに一役買っているのも、祭りに多くの人を集め、祭りを切っ掛けに渋谷中央街を少しでも知ってもらい、将来につなげたいと考えている。しかし、必ずしも祭りに対して積極的・能動的な会員ばかりではない。店の営業の合間に、年に一回の祭りは辛い面もある。それでも、嫌だと感じて、いざやってみると楽しくなっているという要素も祭りは持っているようだ。また、「他の商店街がやっているのに、うちだけが神輿をやめるわけにはいかない」「すごく大変だが、お祖父さん、お祖母さんが楽しみにしている。やめるわけにはいかない」という声も聞かれる。渋谷中央街で商売を続けていくには、付き合いもあり祭りに参加せざるをえない面もある。だからこそ、見る人を多く集める要素の維持が不可欠となる。見る人が多い祭りは、「見る人が多いから辛いくど止めるわけにはいかない」という意味付けにつながる。同時に、「多くの人が集まれば、渋谷中央街のことを広く知ってもらおうチャンス」になる。だからこそ、人を集めるイベントが祭りとセットで行われるのではなからうか。つまり、「人に見られる」「人が集まる」要素によって祭りが持続している。そうした意味では祭りは、参加する会員にとっては、商店街の人間関係を維持し、将来の発展に上げるためには不可欠なものであると位置づけているようにみえる。渋谷の駅街区の再開発に着手した東急不動産が神輿の準備や神輿巡幸を手伝うのは、こうした祭りの重要性を認識しているからに他ならないのではなからうか。ひとことでいえば、祭りへの参加や協力は地域の中で人間関係を円滑にできるといえる。逆にいえば、祭りを資源として捉え、利潤追求のために祭りを活用しているといえるかもしれない。東急グループと地域社会（商店街）との結び付きは、東急プラザの神輿展示やSHIBUYA109前での式典のように祭りを介して現出する。東急グループと商店街は、共に結び付きながら発展しようという心意が祭りからみえてくる。それは再開発を下支えする。しかし、ビルのテナントとして、町会費を払わず、祭りに参加しない経営者にとって祭りはほとんど意味のないものに過ぎないのでなからうか。ビルの一角をテナントとして借りている場合、流動性が強く、必ずしも地域社会との関係性が重視されない。それは、テナントの利益が地域の発展と必ずしも結び付いていないからではなからうか。そうした場合、祭りは都市の中の風景に過ぎない

いのかもしれない。

五、渋谷の街の変化と祭り

今度は、渋谷の街の変化と、SHIBUYA109前での神輿集合（道玄坂神輿連合渡御）が行われるようになった経緯をみておきたい。

（一）歩行者天国と道玄坂神輿連合渡御の誕生

大阪万博が開催された昭和四五（一九七〇）年の八月一六日の日曜日、渋谷で歩行者天国が始まった。同じ年に銀座・新宿・池袋・浅草では歩行者天国が開始されていて、そこに渋谷が加わる形であった。渋谷では、道玄坂通りと栄通りを中心とした区内の計二六本（計二・三キロ）がその対象となった。毎週日曜日と祝日の正午から一九時までで、この時間帯はバスの迂回措置を取られていた。初日の八月一六日には一五万三千人の人出を記録した⁽¹⁰⁾。『まちづくりの あしあと』の道玄坂町会の項によると、「道玄坂が歩行者天国になったので、各町会の若い人達の協力により、渋谷金王八幡宮の祭礼（毎年九月十五日、敬老の日）に各町会の御神輿を道玄坂に（約二十基）集合させ、そのうち一基を各町会の六十才以上の人達で敬老神輿として担ぎ、その模様をNHK及び民放テレビで放映された、それ以降祭礼行事として現在に引継がれている（11）」としている。

しかしながら、道玄坂町会の資料によれば、「当時の道玄坂周辺の町会及び道玄坂商店街振興組合の有志・諸先輩の発案に依り、お宮・宮総代・氏子総代・有志町会の理解と情熱の結果『道玄坂で御神輿を担ごう』の合い言葉のもと昭和42年の例大祭より連合渡御がスタートした」という、歩行者天国が開始される以前の昭和四二年に道玄坂での連合渡御が始められたとの見方もある。いずれにせよ、現在のSHIBUYA109前の神輿集合につながる道玄坂の連合渡御が昭和四二年〜四五年頃、新たに始められたことは間違えなさそうだ。金王八幡宮によると、元々は鳳輦の到着に合わせてお祓いをしていたのが、だんだんと周辺の町会の神輿が集合するようになり、連合渡御を行うようになった。道玄坂の振興を目的に神輿連合渡御を行うようになったという。歩行者天国という外的な要因だけでなく、町

会の人たちの連合渡御をりたいという思いもあったようだ。道玄坂町会の資料によれば、「連合渡御が始まった当初は、各町会間で簡単な打合せ程度。道玄坂町会から集合時間の連絡程度にて執行。現在の様な式典ではなく町会の御神酒所前で簡単な挨拶程度の物であった」という。そして、道玄坂町会では、「参加町会へのお土産としてお菓子等を届け一応の礼儀を尽くし連合渡御の維持に努めてきた」といい、このお土産代は道玄坂町会の祭礼決算書に計上されているという。つまり、道玄坂の神輿連合渡御は、始められた当初、道玄坂町会が中心になって行っていたことがわかる。そして、現在のような式典は行われず、挨拶程度で道玄坂町会から連合渡御に来た他町会にお土産がお礼として出されたことがわかる。

ただし、ここで注意しておきたのは、昭和四二年～四五年頃の時点では、SHIBUYA109はまだ存在していないことである。連合渡御が始められた当時、道玄坂では、旧防災建築街区造成法（昭和四四年に都市再開発法へ発展的に解消）に基づき、「恋文横丁」とそこに連なる一帯の再開発が計画され、高層化が進められていた。そうした中で、「恋文横丁」のあった第一ブロックに緑屋、第三ブロックには道玄坂センタービルが建設されるが、第二ブロックの道玄坂と栄通りに挟まれた扇の要部分、「丸国マーケット」と呼ばれた現在のSHIBUYA109のある場所は、権利者との話し合いが進まず再開発が遅れていた⁽¹²⁾。SHIBUYA109前で神輿が集合し、式典が行われるようになったのは、後で触れるように近年のことである。

(二) 渋谷の人の流れの変化と祭り

昭和四七（一九七二）年に区役所通りが「公園通り」と命名され、翌四八年には西武パルク店が開店した。そして、昭和五〇年に「スパイン坂」が命名された。パルクの開業を契機として、公園通りの開発が進み、公園通りが若者の街として演出されるようになると、渋谷の人の流れが道玄坂から公園通りへシフトしていった。昭和五二年、新玉川線（渋谷―二子玉川）が開通した。この新玉川線を道玄坂では「第二の黒船」と期待して、新玉川線の出口を道玄坂へ直結させるなどして、人の流れを変え、道玄坂へ若者を取り戻そうとした⁽¹³⁾。そんな中、同年の九月一五日、道玄坂に六〇歳以上のお年寄り一〇〇人が集まり、重さ四〇〇キロの「老人みこし」を担いだ。最高齢の参加者は八六歳で「若い者には負けられぬ」と参加したという⁽¹⁴⁾。翌五三年の九月一五日、道玄坂で「敬老みこし」に

六〇歳以上のお年寄り約三〇人が集まり、二五〇キロを超す神輿を担いだ。小雨の影響もあり予想よりも参加者が少なかったという。お祓いのあと、「ソリヤ、ソリヤーツ」と掛け声を掛けながら坂道で神輿を担ぎ上げた。雨脚が強まり万一を心配して一〇分足らずで終了となったが見物客から拍手が送られた。しかし、祭りの中心は若い衆で、各町内から参加する一五の神輿を担ぐのは二〇代、三〇代が圧倒的に多いという⁽¹⁵⁾。当時は、現在のようにSHIBUYA109前で敬老神輿を担ぐのではなく、道玄坂の坂道で敬老神輿を担いでいたこと、担ぐ前にお祓いがなされていたことがわかる。同じ年、東急不動産が経営する東急ハンズが開業した。そして、昭和五四年、ファッション・コミュニティ109（現SHIBUYA109）が開業した。既に、昭和五一年の八月に丸国マーケットなどが取り壊されていた⁽¹⁶⁾。そのあとに東急グループが調整役となり、再開発ビルとしてSHIBUYA109が建設された。現在でもSHIBUYA109の一階入口付近に「道玄坂共同ビル」の看板と「大規模小売店舗 丸国産業有限会社・他10名 昭和53年7月20日」の銘板が付けられている。円筒形のビルをデザインした建築家・竹山実氏は、「どこから見ても同じ印象になるようなデザイン」にし、「渋谷のアイデンティティになるようなものになってほしかった」という⁽¹⁷⁾。

SHIBUYA109が開業した同じ年、渋谷警察署から宮益坂上までの青山通りの坂が「金王坂」と命名され、「金王坂」の碑が渋谷駅東口町会・渋谷二丁目町会・渋谷第一町会・渋谷宮益町会によって建立された。碑文には「明治、大正、昭和と波瀾万丈の過程を経て市区改正、町名変更に伴ない先輩諸氏の築かれた幾多の功績をたたえ、由緒ある金王の地名を保存し、ここに金王坂と命名する」と刻まれている。「金王」の名は、「役所とは関係なく、住民の間から地名が浮かび上がった」という。金王八幡宮にちなんで、かつては「金王町」と呼ばれた「鎌倉時代から開け、渋谷のなかの渋谷ともいうべき伝統の町」は市区改正や町名変更によって「金王」の名を失ったが、その「伝統」を坂の名前に託しているという⁽¹⁸⁾。一方、一年後の昭和五五年には、今度は道玄坂に「道玄坂の碑」が建てられた。地元商店街の有志約千人が拠金して、道玄坂に与謝野晶子の歌碑・道玄坂の由来碑・供養碑に三つが一組となった「道玄坂の碑」が完成し、昭和五六年一月三十一日に除幕式が行われた。この碑には「道玄坂の栄光再び輝く日を。そして道玄坂が渋谷の中心であることを忘れないために」、「老いも若きも気軽に楽しめる商店街を造り、とくに若い人たちには青春の思い出を刻む坂道に」となるようにとの願いが込められているという⁽¹⁹⁾。

道玄坂の碑の除幕式が行われた昭和五六年には、先に述べたように、渋谷中央街では新しい神輿が新調されて、翌五七年には東急東横店に、翌々年の五八年には東急プラザで新調された渋谷中央街の神輿の展示が行われた。『まちづくりの あしあと』によれば、昭和五二年に道玄坂親栄会が神輿を新調⁽²⁰⁾、昭和五四年七月に南平台町会が子ども神輿を購入⁽²¹⁾、昭和五五年九月には富士見町会の神輿が、「町会員の親睦、青少年の育成等、町会に活力を」と思い⁽²²⁾、新調された。また、渋谷中央街の新調以前の神輿は渋谷三丁目町会が購入した。そうした中で、昭和五八年には金王八幡宮の正面参道側に各町内の神輿庫が新築された⁽²³⁾。また、道玄坂町会の資料によれば、昭和五五年頃、「現在の「金王八幡宮例大祭連合渡御実行委員会」の前身となる、神輿連合渡御に参加する「一二町会合同会議」が始められた。

一方、公園通りでは、昭和五十一年にパルコパート2、昭和五六年にはパルコパート3ができた。公園通りを抱える神南・宇田川町会では神輿を昭和五九年に新調した。神南・宇田川町会は、NHK放送センターの近くの北谷稻荷神社の氏子区域である。神南・宇田川町会には、それまで子ども神輿が一基あるだけで、北谷稻荷神社の秋祭りは今一つ盛り上がらなかったという。デパートや東京電力の新館工事が相次いだ第二の建築ブームが到来し、それを契機として昭和五八年の末から地元の商店街に寄付を募って目標額の二千七百万円を集めた。神南・宇田川町会は、公園通り商店街振興組合と「神南・宇田川睦会」を結成し、昭和五九年二月に神輿を注文した。そして、同年の九月九日の午後、神輿のお披露目パレードが公園通りで行われたという⁽²⁴⁾。

以上のように、「金王坂」や「道玄坂」の碑が建立されるのと時期を同じくして、道玄坂の神輿連合渡御に参加する町会によって「一二町会合同会議」が組織された。神輿の新調や購入が相次いでなされ、金王八幡宮の神輿庫も作られ、渋谷中央街の神輿の展示が始められた。そして、公園通りでも神輿が新調され、パレードが行われた。渋谷の街が開発によって大きく変化していったこの時期（一九七〇年代後半から八〇年代初め）、「伝統」が改めて強調され、二〇〇三〇代の若い担い手も少なくなき、渋谷の祭りが盛んであったといえるであろう。

(三) 渋谷の街の性格とSHIBUYA109の変化

西武パルコの仕掛け人で、昭和六一（一九八六）年当時のパルコ社長であった増田通二氏は、『朝日新聞』（昭和六一年一〇月九日付）の「街は舞台だ」という記事の中で、渋谷の街の欠点について、次のように指摘している。

「人がとことこきて、買い物が終わればまた、とことこ帰ってしまう。今でも言えるんですが、渋谷の街には落ち着いて楽しめる核がない。ふと気が付いてみたら、例えば公園通りに浮浪者がいない。何でここには、いてくれないのだろうかと考えてみたら、若者の数の多さと歩くスピードが速すぎる。浮浪者は座りきらんです。それに、渋谷を歌った演歌がないものも気になってます」と指摘した上で、「安住感」というものが、一種の新しい街の年輪を作っていくはずだから、渋谷には浮浪者と苔（こけ）が必要じゃないかと思っているんですよ」と述べている。増田氏が述べるような渋谷の街の欠点を少しでも克服しようと、街を歩く人たちを立ち止まらせるため、様々な工夫がなされた。その一つとして待ち合わせ場所が作られていった。昭和五年には渋谷駅南口に、ハチ公と並ぶ待ち合わせの名所となるモヤイ像が作られた。昭和六一年には公園通りにハチ公像に変わる待ち合わせ場所として、現在の西武モヴィータ館（旧シード館）前にNANA K O像が作られた⁽²⁵⁾。

そうした性格を持つ渋谷の街で、SHIBUYA109は、開業から二年が経過した昭和五六年に商戦の参考にするため来館者について調査を行った。来館者は平日で二万六千人で平均年齢は二一・六歳。男女の入館比率は六七対三三で女性の方が多く、滞留時間も女性が四分、男性が三四分と女性の方が長いことが判明している⁽²⁶⁾。しかしながら、総支配人の相馬邦夫氏によると、開業当初のSHIBUYA109は女性向けの店舗だけでなく、紳士服店、レコードショップ、本屋、呉服屋もあり、普通のファッションビルであった。バブルが崩壊したあとも、渋谷の街には一〇代〜二〇代前半を対象にした店が揃う地下一階だけは常に賑わっていたという。そして、平成七（一九九五）年頃から、毎年若い女の子向けのテナントを数フロアずつ増やしていった。数年後に全館が高校生から二〇代前半向けの店を集めたビルに生まれ変わり、上層階へも客足が向くように変化した。同時期に、歌手・安室奈美恵のファッションを真似た「アムラー」やコギャルなど渋谷発のスタイルが流行するようになっていった。その後、「カリスマ店員」が生まれるなど、現在も流行を発信し続けている⁽²⁷⁾。こうして、SHIBUYA109は、ギャルの「聖地」などと呼ばれるようになり、若者が足を止めて、楽しめる核になっていった。SHIBUYA109の開業当初から出店している「CECIL McBEE」を展開するジャパンイマジネーションの木村達央氏によれば、

SHIBUYA109 は「客のニーズに応じてテナントを機微に入れ替えて成功した。『109の奇跡』と言っても過言ではない」という(28)。「109の奇跡」は、地元・道玄坂にとっては再開発の成功でもある。つまり、SHIBUYA109 は、地域社会にとっては再開発の成功のシンボルとしての性格も帯びるようになっていく。

(四) SHIBUYA109 前での神輿集合の開始時期

道玄坂神輿連合渡御の際、現在は SHIBUYA109 前に町会の神輿が集合している。それ以前は道玄坂の途中、新大宗ビルの辺り(百軒店入口の向い、道玄坂町会の御神酒所が作られる辺り)に本部があり、挨拶をするのに使うような舞台が設営され、そこに神輿が集合していた。SHIBUYA109 が出来てからもそこで行っていた。金王八幡宮の神職によると、平成四(一九九二)年は道玄坂の途中で式典を行い、神輿のお祓いをしたという記憶があるため、平成五年以降に SHIBUYA109 前に集合し、そこで式典が行われるように変化したことが窺える。平成四年は金王八幡宮の御鎮座九〇〇年祭が行われた年であり、記憶に残っているという。この記憶を裏付けるため、『渋谷区ニュース』などのコミュニティ新聞の記事で確認していきたい。

平成三年一〇月一日発行の『渋谷区ニュース』(No. 685、渋谷区役所)には、「敬老神輿「わっしょい、わっしょい」9月15日道玄坂」と解説のある写真が掲載されている。道玄坂町会の関係者のよれば、神輿の背景に写る「田や」の看板は、かつて道玄坂の途中(百軒店の入口の辺り)にあった店であるという。

平成六年一〇月一日発行の『渋谷区ニュース』(No. 769、渋谷区役所)には、「敬老みこし 道玄坂周辺の渋谷祭り」で9月15日の敬老の日に、恒例の敬老みこしが披露されました。時々小雨が降るなか、おとしよりは元気な掛け声を上げてみこしを担ぎました」とあり、敬老神輿を担ぐ写真が掲載されている。写真の場所は、SHIBUYA109 前ではなく道玄坂の途中のようである。

ここで注目すべきは、敬老神輿の担いでいる場所である。敬老神輿は式典が行われる場所で担ぎ、そこから移動はしないという。つまり、平成三年と平成六年は道玄坂の途中で敬老神輿を担いでいることから、式典が行われた場所は道玄坂の途中で SHIBUYA109 前ではないことがわかる。このことは、平成四年に道玄坂の途中で式典が行われ、そこでお祓いを行ったという神職の記憶とも一致する。そ

して、興味深いことに、平成六年の写真を境として、『渋谷区ニュース』に掲載される道玄坂連合渡御の写真が撮影される場所が道玄坂から SHIBUYA109 前へ移行していく。

平成八年一〇月一日発行の『渋谷区ニュース』(No. 827)には、「9月15日、雨上りの青空の下、道玄坂では数々の御輿が繰り出しました。今年は、富山県小杉町の人たちも参加し、威勢のいいかけ声が、ビルの谷間に響き渡りました」とあり、鶯谷睦会の神輿の写真が掲載されている。背景に SHIBUYA109 パート2 (スクランブル交差点の近くに立地) が写っていることから、撮影の場所は SHIBUYA109 前の横断歩道を渡ったところであることがわかる。

平成九年一〇月一日発行の『渋谷区ニュース』(No. 855)には「9月15日、道玄坂にも御神輿が繰り出し、道行く人ども、威勢のいいかけ声に包まれていました」とあり、敬老神輿の写真が掲載されている。前年と同様に、背景に SHIBUYA109 パート2 が写っていることから、撮影の場所は SHIBUYA109 前の横断歩道を渡ったところであることがわかる。つまり、平成九年には SHIBUYA109 前で敬老神輿を担いでいることから、少なくとも平成九年には SHIBUYA109 前で式典が行われていたと考えられる。なぜなら、既に述べたように、敬老神輿は式典が行われる場所で担ぎ、そこから移動はしないため、SHIBUYA109 前で敬老神輿を担いでいるということは SHIBUYA109 前で式典が行われたことを意味するからである。平成九年一〇月一日発行の『地域情報誌 大向界限』(No. 4、渋谷区役所大向出張所)によると、「例年の通り、9月14日・15日の両日、金王八幡宮祭りが行われました。何と言ってもこのお祭りのメインは、15日の12町会による御神輿の練り歩きです。威勢のいい掛け声と共に109前から道玄坂上まで練り歩き、お祭りも最高潮に達しました」とあり、静岡県湯ヶ島町から「天城連峰太鼓」が今年も来て、神輿の練り歩きに合わせて太鼓を披露したという。SHIBUYA109 前から道玄坂上まで神輿が巡幸したことがわかる。

平成一〇年九月一五日付の道玄坂町会の資料には「各町会の御神輿は各町会区域を渡御しつつ集合場所(109前各指定場所)に14:00までに集合・待機」とあり、平成一〇年には SHIBUYA109 前に神輿が集合するように変化していたことが確かである。この平成一〇年には、「金王八幡宮例大祭連合渡御実行委員会」が発足し、参加町会共同の連合渡御運営組織が作られ、従来の道玄坂町会を中心とした連合渡御から変化していることが窺える。

平成十一年一月一日発行の『地域情報誌 大向界隈』(No. 12)によれば、「今年も毎年恒例の9月14・15日の両日に行われました。15日は台風16号の上陸でお天気が心配されましたが、風はいくらか強かったものの、幸い雲ひとつない秋空となり、12町会の御神輿が繰り出されました。威勢のよい掛け声とともに109前に集合した御神輿は、宮司さんのお払いを受けた後、今年もはるばる静岡県湯ヶ島町より応援に駆けつけてくれた『天城連峰太鼓』に送られて、道玄坂上まで練り歩きました」とある。平成十一年にはSHIBUYA109前で神輿が集合し、お祓いがなされていることがわかる。

このように、SHIBUYA109前に神輿が集合し、式典が始められたのは、道玄坂途中で敬老神輿を担ぐ写真からSHIBUYA109付近で敬老神輿を担ぐ写真へ変化した平成七年から平成八年頃の可能性が指摘できる。平成七年は、SHIBUYA109が若者向けのテナントに変化し始めた時期であり、同年には阪神淡路大震災やオウム真理教による地下鉄サリン事件が発生した年である。

(五) SHIBUYA109と地域社会

若者の絶大な支持を得る SHIBUYA109 であるが、地域社会と隔絶して存在しているわけではない。まず、組織でみると、SHIBUYA109 内のテナントの多くが地元・渋谷道玄坂商店街振興組合に属している。『平成八年度 渋谷区商業名鑑』には、渋谷道玄坂商店街振興組合の箇所に、SHIBUYA109 内のテナントとして、八九の店名が記載されている。また、渋谷駅前のスクランブル交差点の向かい側、神南一丁目に立つ SHIBUYA109 パート2のテナントとして、五五の店名が記載されている⁽²⁹⁾。平成二〇(二〇〇八)年発行の『二〇〇八 渋谷区商業名鑑』には、渋谷道玄坂商店街振興組合の箇所に、SHIBUYA109 内のテナントとして、地下二階から地上八階まで一二八の店名が記載されている。また、SHIBUYA109 パート2のテナントとして、地下二階から地上七階までの五二の店名が記載されている⁽³⁰⁾。平成八年と平成二〇年を比較すると、テナントそのものの数の増加が窺えるが、商店街振興組合に所属するテナント数が増加している。現在、金王八幡宮の祭りに際して、「祭」と書かれた垂幕が SHIBUYA109 に付けられるが、SHIBUYA109 パート2にも「祭」と書かれた垂幕が付けられる。これも渋谷道玄坂商店街振興組合のエリアに当るからである。次に、SHIBUYA109 のホームページに掲載された「SHIBUYA109 店頭イベント広場「スペース」使用規則」についてみてみたい。店頭イベント広場は SHIBUYA109 の一階、正面入口前

のイベントスペースを指す。金王八幡宮の祭りにおいて、式典が行われる場所である。その使用規則の第五条にイベントの「申し込みの制限」を挙げ、その一つに「当イベント内容がシリンダー、周辺商店街、町会の催事と競合する場合」が制限対象となるとしている。「周辺商店街、町会の催事」と地域社会への配慮がしっかりと明記されている。また、「基本方針」として「広場イベントは、通行人、観客及びスタッフがイベントと融合して楽しんでいただくため、安全を第1とし、それらの人々に危険や危害が及ぶことのないイベント開催をお願いします。したがって多くの観客やファンを動員し、周辺が混乱するイベントの開催はお断りします⁽³⁾」と謳われている。このことは、祭りにおいても、観客を巻き込んだ沸騰は安全上の問題もあり、制限される方向性を持つことが窺われる。

まとめ

金王八幡宮の祭りにおいて行われるSHIBUYA109前の神輿の集合は、渋谷中央街の事例にみられるように、町会や商店街といった渋谷の地域社会の人たちが、再開発を進める東急グループと結び付きながら、神輿同好会の力を借りて持続していることがわかる。そこで、強調されるのは「伝統」であり、伝統ある渋谷の氏神・金王八幡宮の「ご神徳」によって渋谷の街の「繁栄」がなされ、今後の「発展」につながるというストーリーである。また、「老人」や次世代を担う「子ども」の元気が強調される。式典が行われるSHIBUYA109は、女子高生やギャルの「聖地」であるのみならず、地域社会と密接に関わる再開発のシンボルでもある。しかしながら、祭りはSHIBUYA109に買い物に来る若者を巻き込み、地域社会の人たちと共に一体化するまでには至っていない。祭りにリアリティを感じていないのである。あくまで、彼女たちの一体化する対象は、SHIBUYA109の中にある。それは流行の最前線であり、かつては憧れの対象であったカリスマ店員であったが、現在は親しみやすい店員である。また、SHIBUYA109付近を通行する人たちは、渋谷の街の性格にみられるように、歩くスピードが速く、立ち止まりにくい。一方、祭りを担う町会や商店街は、交通からの安全や担ぎ手同士のトラブルを防ぎ、マナーを重視する。また、SHIBUYA109前の「場」の使用規則もあり、羽目を外して沸騰しにくい現状にあり、秩序の範囲内での盛り上りとどめられる。参加する神輿同好会の側は、あくまでも「楽しみ」で神輿を担いでいるのであり、町会とのトラブルを起こさないために

は、町会の秩序を超えて神輿を担ぐことは遠慮することになる。その結果、日常の形式性が祭りでも逆転しにくく、保たれることになる。つまり、見物人を巻き込み、日常の構造が逆転するような「祝祭」には発展しにくいのではなからうか。そうした観点からみれば、SHIBUYA109 前の神輿集合は、一年に一回、渋谷に定着する大人と、渋谷を訪れる若者が出合い、交差する数少ない場であるといえる。そして、地域社会の大人たちは、氏神・金王八幡宮の名のもとに、町会名の入った揃いの半纏を神輿同好会や有志の担ぎ手に着用させ、神輿とともに SHIBUYA109 前に集合する。そして、若者たちに対して、「元気」であることを強調し、普段はみえにくい自分たちの存在を主張しているかにみえる。つまり、祭りからみえてくるのは、渋谷の戦後の歴史の中で再開を進め、若者の街を形成した町会や商店街といった地域社会と、再開発によって集うようになった若者の両者の存在である。そして、両者を仲介するのが、祭りを資源化する東急グループであり、SHIBUYA109 であることである。同時に、両者を仲介するのは、渋谷中央街のイベントであり、過疎の街〈渋谷〉の神輿巡幸を賑やかなものに演出する神輿同好会や有志の担ぎ手であることである。まさに、仲介者は「見せる」存在である。祭りは現代の渋谷の街の縮図を反映しているといえるかもしれない。そして、地域社会の大人たちは、祭りを通じて自分たちの存在を主張し、訪れる若者を振り向かせ、自分たちの商店街の客として取り込んでいきたいと考えている。渋谷という現代都市で行われる祭りに、地域社会の未来が託されているのである。祭りを SHIBUYA109 前に誘致することによって、道玄坂の祭りが〈渋谷〉の祭りに変化し、SHIBUYA109 は本当の意味で、建築家がデザインに託したように「渋谷のアイデンティティ」となりつつあるのかもしれない。

註

- (1) 『まちづくりの あしあと 渋谷区町会連合会創立三十周年記念誌』渋谷区町会連合会、平成四年、一七四頁。
- (2) 『渋谷の街のあゆみ』渋谷区商店会連合会、平成三年。
- (3) 前掲『まちづくりの あしあと』。
- (4) 『平成八年度 渋谷区商業名鑑』渋谷区区民部商工課・渋谷区商店会連合会、平成八年。

- (5) 『二〇〇八 渋谷区商業名鑑』渋谷区商店会連合会、平成二〇年。
- (6) 前掲『まちづくりの あしあと』。
- (7) 渋谷中央街ホームページ <http://shibuyachuogai.com/>
- (8) 『街づくり五十年』東急不動産株式会社、昭和四八年、二六七頁。
- (9) 『東京都神社名鑑』上巻、東京都神社庁、昭和六一年、一四六頁。
- (10) 『朝日新聞』昭和四五年八月一日付、同八月一七日付。
- (11) 前掲『まちづくりの あしあと』一五四頁。
- (12) 『朝日新聞』昭和四〇年七月一六日付、同昭和五一年五月二〇日付。
- (13) 『朝日新聞』昭和五二年四月五日付。
- (14) 『朝日新聞』昭和五二年九月一六日付。
- (15) 『朝日新聞』昭和五三年九月一六日付。
- (16) 『朝日新聞』昭和五一年五月二〇日付。
- (17) 『讀賣新聞』平成二〇年九月二九日付。
- (18) 『朝日新聞』昭和五四年一〇月一二日付。
- (19) 『朝日新聞』昭和五六年一月二七日付。
- (20) 前掲『まちづくりの あしあと』一六三頁。
- (21) 前掲『まちづくりの あしあと』一八二頁。
- (22) 前掲『まちづくりの あしあと』一六四〜一六五頁。
- (23) 前掲『東京都神社名鑑』上巻、一四六頁。
- (24) 『朝日新聞』昭和五九年九月八日付。
- (25) 『地域情報誌 大向界限』No.28。
- (26) 『朝日新聞』昭和五六年九月一日付。
- (27) 『讀賣新聞』平成二〇年九月二九日付。
- (28) 『讀賣新聞』平成二〇年九月二九日付。
- (29) 前掲『平成八年度 渋谷区商業名鑑』。
- (30) 前掲『二〇〇八 渋谷区商業名鑑』。
- (31) SHIBUYA109 ホームページ <http://www.shibuya109.jp/>

第三節 〈渋谷〉の小さな神々

若者の街〈渋谷〉。SHIBUYA109 やスクランブル交差点、渋谷センター街など、私たちがイメージする〈渋谷〉は、渋谷駅周辺に広がっている。しかし、この〈渋谷〉には、様々な「小さな神々」が存在していることをご存じだろうか。例えば、待ち合わせ場所としても名高い、渋谷駅前のハチ公の銅像がある。実は年一回、神社の神職を招いて慰霊祭が行われている。東急東横店や西武渋谷店といったデパートやビルの屋上には小祠が祀られている。地藏や道祖神、慰霊碑も存在する。さらには、何らかの願いや思いが込められた様々なモニュメントが街角に立てられている。意外にも、渋谷駅から程近い距離にこれらの神々は祀られているのである。

そこで、本節では、渋谷駅前のハチ公を起点に〈渋谷〉の街を巡り歩きながら、これらの神々について紹介していきたい。そして、そこから浮かび上がる〈渋谷〉について考えてみたい。

なお、本節で取り上げたもモニュメントや小祠は平成二四（二〇一二）年現在のものである。

一、ハチ公前広場から公園通り・渋谷センター街に坐す神々

渋谷駅前のハチ公の銅像と慰霊祭

〈渋谷〉の待ち合わせ場所として有名なハチ公の銅像は、よく知られているようにハチ公口の渋谷駅前広場にある。しかし、毎年四月八日にハチ公の慰霊祭が行われていることは案外知られていない。ハチ公の命日の三月八日の一ヶ月後に行われている。そこで、平成二四（二〇一二）年四月八日（日）に行われたハチ公慰霊祭の模様を簡単に紹介したい。

（一）ハチ公慰霊祭の現在

四月八日（日）の正午からハチ公銅像前にて慰霊祭が行われた。参列者は、約六〇人であった。ハチ公周辺は柵で仕切られ、関係者

以外の立ち入りが制限させていた。それでも、柵の外側から多くの見物人が携帯やカメラで写真撮影をしていた。警備員は、通路のため柵の前で立ち止まることをやめるように促していた。

慰霊祭は、まず司会によって開会の挨拶がなされた。次に、主催者である忠犬ハチ公銅像保存会会長（東急電鉄）から挨拶が行われた。そして、来賓である渋谷区長と渋谷区議会議長の挨拶のあと、金王八幡宮宮司によって祭典が始められた。ハチ公像と参列者に対してお祓い（修祓）をした後、宮司がハチ公像に深々と頭をさげる「祭主一拝」を行った。そして、お供えものをハチ公像に献じる「献饌」（供えられた御神酒の蓋を開ける）をしてから、ハチ公像に向かって祝詞を奏上した。「祝詞奏上」が終わると、「玉串奉奠」が行われた。まず、宮司が玉串をハチ公像に捧げ参拝した。次に、①忠犬ハチ公銅像保存会会長、②渋谷区長、④渋谷区議会議長、⑤上野和人氏（上野博士の孫）、⑥秋田県大館市副市長、⑦渋谷警察署署長、⑧渋谷消防署署長、⑨東京商工会議所渋谷支部長、⑩渋谷税務署副署長、⑪忠犬ハチ公銅像保存会名誉会長、⑫銅像製作者・安藤氏、⑬その他の参列者一同が玉串をハチ公像に捧げ、参拝した。玉串奉奠が終わると、供え物が下げられる「撤饌」（供えられた御神酒の蓋を閉める）、再び「祭主一拝」が行われた。さらに、忠犬ハチ公銅像保存会会長と渋谷区長が花輪をハチ公銅像の首に掛ける「花輪献上」が行われた。最後に、司会から閉会の挨拶がなされ、一二時四五分頃、慰霊祭は終了した。参列者は一三時から渋谷エクセルホテルに会場を移して、懇親会を行った。

（二）ハチ公の慰霊祭の変遷

昭和二三（一九四八）年の八月一日、渋谷駅の軒下にハチ公銅像が再建された。翌二四年の四月三日には渋谷駅前広場で全国秋田犬コンクールとともに慰霊祭が行われた⁽¹⁾。その後、ハチ公銅像は渋谷駅の軒下から駅前広場中央に移された。昭和二八年の一月八日には、ハチ公銅像に秋田犬の三頭が先輩の偉業をたたえてチャンチャンコとカーネーションのレイの首輪を贈った⁽²⁾。これは秋田県主催で都内に開かれた「産業と観光展」にちなんだものであった。午後からは東横デパートの屋上で「ハチ公祭」が催された。詳細は不明であるが、デパートの屋上で遊ぶ子どもたちやアベックも、上野動物園長や動物愛護会理事長らの講演に耳を傾けたという。

昭和三十一年八月一日には、ハチ公銅像が昭和二三年八月一日に再建されたのを記念して「第一回ハチ公祭」が行われた。東映の

女優やミスQRなどを乗せた宣伝カーやオープンカーが青山墓地のハチ公の墓と渋谷駅前前の銅像をめぐる華やかな自動車行進を行った。墓と銅像の前にはハチ公が生前好物だった焼き鳥などが供えられた。銅像前では幡ヶ谷小学校児童の作文朗読が行われた。また自動車行進を二子玉川まで延ばし、ここではハチ公祭を記念して都内の保護施設の子ども五百人を招き、夜遅くまで野球教室や演芸会が開かれた⁽³⁾。このハチ公祭の翌九月には地下街工事によって渋谷駅軒下に移動した。そして、地下街工事が終わり、昭和三二年一月四日には新設された「ハチ公小公園」に移された。この際、ハチ公銅像維持会ではハチ公の新移転を機会に盛大な「ハチ公祭り」を行い、ハチ公をたたえる運動資金と新会員を集めようと計画し、準備委員会が設置された。準備委員会の初会合では、「①ハチ公祭りを年中行事にする。その時期をこんどの地下街落成式と一緒にやるか、中元、歳末大売出しのころにするが、サクラの咲くころか、それともハチ公命日の八月一五日にするかを決める ②ハチ公祭りを渋谷名物に盛り上げるため、東横デパート、各商店街、交通機関が協力する ③PRとしてはハチ公を『食いもの』にするのはいかがでしょうかと思われるが『ハチ公マンジュウ』といったものを売出す⁽⁴⁾」ことなどが検討されたという。

昭和三七年四月八日には、午後から銅像前で「ハチ公まつり」が行われている。ハチ公像は、周囲を地元の人たちが持ち寄った花輪やサクラの造花で飾られ、カーネーションの首輪が付けられた。そして、神職による祝詞奏上が行われ、忠犬ハチ公銅像維持会の関係者が参列して、その「遺徳」を偲んだという⁽⁵⁾。翌三八年三月八日のハチ公命日に、銅像維持会員や渋谷駅長ら一〇人によって、ハチ公像に花で編んだ首輪をかけ、果物や草花をお供えして飾った後、青山墓地にある上野英三郎博士とハチ公の墓前で供養を行った⁽⁶⁾。昭和四〇年四月八日には、没後三〇年を記念してハチ公像前で慰霊祭が行われた。銅像には美しいレイが掛けられ、果物やマンジュウ、ハチ公の好物だった焼き鳥などが供えられた。渋谷駅開業八〇周年記念行事で一日駅長を務めた日活女優の芦川いづみ氏や再建されたハチ公銅像の台座の題字を刻んだ当時小学生であった羽島（旧姓佐々木）敦子氏らも参列し、約一〇〇〇人の観衆が詰めかけたという⁽⁷⁾。また昭和四三年四月八日にも忠犬ハチ公銅像維持会の主催で慰霊祭が行われた。広場には造花のサクラやボンボリの飾りがなされ、ハチ公銅像にはレイがかけられ、焼き鳥・マンジュウ・果物などが供えられた。地元商店街の関係者や通行人も約一〇〇〇人が参列する中で慰霊祭は行われ、神職によるお祓いのあと、渋谷駅長や渋谷区長らが玉串を捧げ、「今後も渋谷の発展を見守って下さ

い」と祈願したという⁽⁸⁾。

昭和六一年四月八日、忠犬ハチ公銅像維持会が主催してハチ公慰霊祭が行われた。生まれ故郷の秋田県大館市からハチ公と同じ秋田犬も参加して子供たちの人気を呼んでいたという⁽⁹⁾。ハチ公慰霊祭のみならず、ハチ公をモチーフとした祭りに発展した時期があることが興味深い。

西武渋谷店の東伏見稲荷大神

ハチ公銅像前からスクランブル交差点を渡り、渋谷センター街には入らずに、公園通り方向に進むとすぐ左側に西武渋谷店（旧西武百貨店渋谷店）がみえてくる。手前にあるのが西武渋谷店A館であるが、「井の頭通り入口」交差点の信号を横断した反対側に西武渋谷店のB館がある。実はB館の屋上には稲荷神社が祀られている。現在、B館屋上は、屋上フリースペース立入禁止のため、一般の見学はできないが、閉鎖中の出入口の窓から、その姿をわずかにみることができ、植木をあたかも「鎮守の森」に見立てたように配置した合間から、赤い鳥居がみえる。この鳥居は入口の鳥居で、二つ目の鳥居（閉鎖中の出入口からは見えない）には「東伏見稲荷大神」の額面が付けられている。そして、その後ろの左右に燈籠を配置し、奥には台に載せられた小さな祠がある。その下には賽銭箱が置かれている。祠の左右には榊を供える台と狐の像がある。祀られている神さまは東伏見稲荷大神である。

西武渋谷店の担当者によると、そもそも東伏見稲荷大神を祀るようになったのは、現在の西武池袋本店（旧西武百貨店池袋本店）を開店する際に、京都の伏見稲荷を祀ったのが発祥という。現在でも、池袋本店の屋上には伏見稲荷大神が祀られている。そうした縁があつて、商売繁盛を願って、伏見稲荷を分霊した東京の東伏見稲荷を祀ったという。昭和四三（一九六八）年に渋谷店はオープンするが、開店当初からB館屋上に祀っている。

毎月一日の午前中（開店前）、管理職一同約三〇名が参拝する。幟を左右に二本立て、榊を上げ、米・塩・水・果物・スルメイカ・揚げ・野菜などを供え、賽銭を上げて一・二名ずつ順番にお参りをする。また、新年の営業開始日に当たる正月二日にも、管理職一同で参拝を行っている。

ロフトの道祖神

西武渋谷店B館を出て、A館との間を通る井の頭通りを東急ハズ方面に向かって進むと、右側に西武渋谷店ロフト館がある。その入口に道祖神があり、花が供えられている。

西武渋谷店ロフト館の担当者によると、この道祖神は昭和六二（一九八七）年、渋谷ロフト館ができる時にロフト館の脇の「間坂」（まさか）に道のシンボルとして、井戸・燈籠などともに作られた。古くからの日本の風景をモチーフとして坂の途中に作ったという。道祖神を作ると、拝む方がいて、お賽銭のように小銭を置いていく方がいた。そこで、むげにもできないので、お花を供えているという。花は定期的にお花屋さんに頼んで交換してもらっている。道祖神をお参りしている人は実際には見たことはないが、早朝お参りをされているようで、一円玉が上がっているのを見たことがあるという。

NANAKO像

西武渋谷店ロフト館の脇の「間坂」を登っていき、公園通りに出たら左折する。そして、山手教会の手前、シブヤ西武モヴィータ館の前に、招き猫のような銅像があるのをご存じだろうか。この銅像は、NANAKO像とよばれ、昭和六一（一九八六）年にハチ公に代わる待ち合わせ場所として作られたものである。「NANAKO」の名は公募によって選ばれた（10）。シブヤ西武モヴィータ館のホームページによると、「NANAKO」は、ハチ公の「8」に対して、「7」（NANA）なのだという。ハチ公の「雄」に対して、NANAKOは「雌」である。銅像の後ろに回ってみると、「寅年参月石工」の銘が刻まれている。しかし、銅像には小銭が供えられてはいない。

平成元（一九八九）年一二月四日付の『朝日新聞』には「ライバル道玄坂をキャットといわせたい」という記事が掲載されている。それによると、渋谷公園通り商店街振興組合が歳末交通安全キャンペーンの一つとして一二月三日に「公園通り猫まつり」が開催された。仮装行列で有名なベルギーのイーブルの猫まつりにヒントを得て、映画「公園通りの猫たち」を封切る東映のバックアップを得て実現

したという。中心のイベントは賞金付きの街頭仮装猫パレードだという。「ライバルの道玄坂は、ハチ公に代表される犬の街。うちは猫で勝負したい」といい、いずれは公園通りの暮れの恒例イベントにしたいという。「公園通り」対「道玄坂」の対抗関係は、「イヌ」対「ネコ」という形を借りて競い合っている。しかし、NANA KO像の前で待ち合わせをする人はほとんどみられない。

近江美容室の伏見稲荷

シブヤ西武モヴィータ館から公園通りをNHK放送センター方面に登っていく。そして、「渋谷区役所前」交差点に立つと、六階建てのアップル近江ビルの屋上に、緑の木々の合間から赤い鳥居がみえる。この鳥居は、ビル六階にある近江美容室の伏見稲荷のものである。オーナーのR・O氏（昭和七年生）によると、愛知県の犬山から名古屋に移った後、東京オリピックが開催された昭和三九（一九六四）年に東京に移った。O家では先祖代々、鬼門祀りをしていて、O家の移転と一緒に伏見稲荷も移動した。稲荷には、毎朝のお参りのほか、毎月一日と一五日に水・榊・米を供えてお参りする。また、美容室の新しいスタッフが入った時やO家の一族が来店した際に、お供えをして参拝する。祭りは、毎年二月の初午に近くの北谷稲荷神社の宮司を招いて、管理会社と美容室が参列して祭典を行う。以前は、ビルの全テナントから御神酒をお供えし、全テナントで祀ったという。

R・O氏は二〇歳頃、疎開先の愛知県の犬山で美容室を始め、二三、四歳頃、名古屋に出て中日劇場の近くの三階建てのビルの一階で美容室を営んだ。店の二階は家族の部屋、三階が従業員の部屋で、その脇のベランダに稲荷神社を祀っていた。渋谷に移転した際には四階建てのビルの屋上に祀った。このときから、近くの北谷稲荷神社との付き合いが始まり、現在の宮司さんで三代目であるという。そして昭和六三年にビルの建て替えを行った。現在の六階建てのビルに変わり、稲荷神社も四階から六階へ移動した。建て替えの間、稲荷神社の御霊を北谷稲荷神社へ遷した。建て替えが終わった際に、御霊を戻し、遷座祭を行った。そして、北谷稲荷神社の宮司から、稲荷神社の周りに樹木がないのは「曝しものにされてはいるから良くない」といわれ、稲荷神社の周りに植木を置くようになったという。植木を置くようになってから、気持ちも落ち着き、テナントも落ち着いたという。また、美容室の研修生が美容師の試験前に、夜遅くまで研修生二人で実技の練習をしていた。その際、窓の外のベランダを「ふっと白いものが通った」のをみたという。その研修生は試

験への合格が難しいと思われていたが、その後、美容師の試験に合格した。その「白いもの」はお稲荷さんであったのではないかと語られている。

このように、近江美容室の伏見稲荷は、土地の移転やビルの建て替えなどを経ながらも祀り続けられてきたことがわかる。

二・二六事件慰霊碑

「渋谷区役所前」交差点から、渋谷C・Cレモンホールを左に、NHK放送センターを見ながら、松濤方面に向かうと、左側に渋谷地方合同庁舎（渋谷税務署・東京法務局渋谷出張所）の建物がみえてくる。そして、「渋谷税務署前」の信号までくると左側に、片手を空に向かって上げている観音像がみえる。その下には「慰霊」と書かれていて、祭壇には、花や水が供えられ、線香が手向けられている。これは、二・二六事件慰霊碑である。

二・二六事件は昭和一一（一九三六）年二月二六日、陸軍の青年将校らによって、高橋是清大蔵大臣が殺害され、国会議事堂や首相官邸周辺を占拠した事件である。しかし、なぜこの場所に慰霊碑があるのだろうか。慰霊碑の脇にある碑文には、二・二六事件を起こした青年将校が事件後軍法会議にかけられて東京陸軍刑務所で刑死した。その陸軍刑務所があったのがこの地であり、関係する犠牲者のいっさいの霊を合わせ祀り、事件から三〇年を記念して昭和四〇年二月二六日に慰霊碑建立を発願したと書かれている。

『渋谷ふるさと語り 二十一世紀の孫たちへ』によると、渋谷の町が若者で賑やかになった頃、とても不思議なことが起こった。代々木の陸軍衛戍監獄があった場所にはその後、法務局が建てられたが、法務局の職員が夜残業をしていると、「ザワザワと、何か人の気配がする」「軍靴の音がする」といい、職員は残業を嫌がった。昭和五六年、ある事務官が赴任し、何も知らずに宿直をしたら理由のわからない死に方をした。その亡くなられた場所はちょうど、二・二六事件で一九にの将校が処刑された、まさにその場所であった。そのため、昭和五七年の盆に、安全菩薩を祀り、不慮の死を遂げた事務官の冥福を祈り、僧侶を呼んで懇ろに供養した。そして、新合同庁舎ができたときには、大きな慰霊観音が建立されたという⁽¹¹⁾。

宇田川地蔵

「渋谷税務署前」の交差点から、NHK放送センターを右にみながら、井の頭通りが交差する「NHKセンター下」の信号まで坂を下りる。ここで、左折して井の頭通りを渋谷センター街へ向かって歩くと、「神南小学校下」の信号の手前、「宇田川町」のバス停の近く、平屋建ての民家の脇に瓦屋根のお堂がある。このお堂の中に宇田川地蔵が祀られている。

宇田川地蔵は、藤田佳世の『大正・渋谷道玄坂』⁽¹⁾によれば、元々は道玄坂の坂下、現在のスクランブル交差点の辺りに祀られていた。祀られていた当時は、辺りには宇田川という川が流れ、その川の畔、宇田川橋のたもと松の下に宇田川地蔵は祀られていた。そして、日露戦争の直後、道玄坂付近が市街地化し始めた明治四〇（一九〇七）年頃、宇田川を塞いでその上に家屋を建てるため、地蔵は宇田川町の高台に移された。この高台は、現在の西武渋谷店B館裏にあり、近くには衛戍監獄があった。この監獄に勤める息子を持つ老女が宇田川地蔵に花や線香をよく供えていたという。昭和二〇（一九四五）年の五月、米軍の空襲による難を受け、宇田川地蔵は損傷した。そして、宇田川町の現在地に移され、今日に至っている（平成二四年現在）。

オーク・ヴィレッジの被官稲荷

宇田川地蔵から井の頭通りを、西武渋谷店方向に向かって進み、「神南小学校下」の交差点を直進する。そして、東急ハンズを過ぎた辺りで右折し、夢二通りを進むと左側に「渋谷BEAMよしもと・ムゲンダイホール」がみえる。その反対に「オーク・ヴィレッジ渋谷」ビルがある。このビルの屋上には稲荷神社が祀られている。ビルの屋上に鳥居と祠があるのが、少し離れた宇田川町駐車場付近からみることができる。変電施設などがある屋上部分の僅かなスペースに浅草の被官稲荷神社から受けた御札を御神体として祠を祀っている。

オーナーのM・K氏（昭和一八年生）によれば、貸しビルを営む前は旅館をしていたというが、その頃から稲荷の神札を室内に祀っていた。昭和五五（一九八〇）年に現在の場所にビルを建て、貸しビルを始めた。その時に、「お稲荷さんを無くすと祟りがある」といわれ、出入りの大工さんに手作りで祠を作って貰い、屋上に稲荷をお祀りしたという。また、旅館の居間に祀っていた「内神宮」と

呼ばれる神棚（天照皇大神宮・明治神宮・金王八幡宮の神札を祀った）、屋上につながる最上階の事務室内に祀っている。というのも、「内神宮と稲荷を同じ所に祀ってはいけない」といい、別々に祀っているという。内神宮の氏神札は、毎年金王八幡宮から頂いているが、「被官稲荷大神」の神札は二、三年に一回の割合で何かの折に新しい神札に取り替えるという。

稲荷へは、昔は毎日、御飯を供えて参拝し、毎月一回（一日）、榊を上げ、油揚げ・御神酒・水を供えて参拝をした。現在では、月に一回水だけは替えるが、カラスが来ていたずらをするため、供物を奉るのを年に一、二度にした。祠にネットを張ったという。かつては、「お姿」（狐の白い像）も祠に祀っていたが、カラスが狙うので飾らなくなった。また、正月を迎えるに当たって、注連縄を張り替え、柿を載せた鏡餅を一对、お供えする。

稲荷を屋上に祀るのは「一番上でないと失礼」との意識があり、ビルを計画する段階から屋上に稲荷の祠を祀るイメージをしていたという。祠の向きについては、「神さまは北面するのは良くない。南面か東に向くのが良い。北が上座で、南から北へ向うのは自分の地位が低い」という。また、稲荷の真下に事務所用の部屋があるが、その部屋の会社は「商売が繁盛する」といわれ、実際にその部屋を事務所とした会社が利益を上げたという。その部屋には何かがあるのではないかといわれている。そして、その会社は同じ階の他の部屋へ事務所を移転したが、今でもお稲荷さんにお酒などの供物を供えているという。

M・K氏がお稲荷さんの神札を受けてきた浅草の被官稲荷神社は、浅草寺の隣にある浅草神社の境内末社である。この被官稲荷は、安政元（一八五四）年に江戸の町火消の頭領であった新門辰五郎が、妻が重病を患った時に、伏見稲荷に願を掛けたところ、病気が平癒したため、そのお札に安政二年に伏見稲荷から勧請して祀ったという。被官稲荷への入口へは新門辰五郎が奉納したという鳥居がある。「被官」の意味は不明だが、「官を被る」ということから出世を意味していると解され、現在でも多くの参拝者が訪れる。稲荷の一角では、「お姿」（雌雄一对の狐像）を受けることができる。かつては、ここで受けた「お姿」も持ち帰って屋上の稲荷に祀っていたが、現在では「被官稲荷大神」の神札を取り替えるのみである。

二、松濤から道玄坂に坐す神々

次に、オーク・ヴィレッジ渋谷から、夢二通りを東急百貨店本店の前に出て右折し、東急文化村を過ぎて神山町方面へ進む。そして、左側に、宗教法人世界基督教統一神霊協会のある「神山町東」の信号を左折すると、やがて閑静な松濤に入ってくる。

社団法人観世会の能楽堂と正一位観世稻荷社

「神山町東」の信号からしばらく道なりに歩いてみると、道が左に曲がるが、すぐ横を眺めると木立の中に鳥居がみえる。そして、観世能楽堂の入口がある。中に入っていくと右側に稲荷神社が祀られている。小さな朱塗りの鳥居と由緒が書かれた案内板が入口にある（平成二四年現在）。

二六世観世宗家の観世清和氏によると、観世家は室町幕府から京都の西陣に「観世屋敷」を与えられたが、徳川家康の江戸開府とともに、観世家も江戸に移った。その際、氏神も江戸に持ってきた。一方、京都市上京区の屋敷跡は観世町と呼ばれ、現在でも観世龍王社とともに観世稻荷社が祀られている。観世稻荷は「一足稻荷」とも呼ばれるが、いつ頃から祀られているかは定かではないという。松濤にある観世稻荷社は、清和氏の祖父（二四世）が京都の伏見稲荷から勧請したといい、松濤の観世稻荷社は港区の愛宕神社の神職にお願いをして祭祀を行っているという。

栄和町会の大山稻荷神社

観世能楽堂から、東急文化村・東急百貨店本店の方へ坂道を下っていくと、向かって左側、都知事公館の手前に小さな森がひっそりとある。この鎮守の森が大山稻荷神社である。神社の入口には、左右に狛犬ではなく、狐の像が一对立っていて、二つの鳥居が設けられている。奥には拝殿と本殿があり、左側には神輿などを収納した祭典庫がある。

大山稻荷神社を祀る栄和町会によると、毎年二月（初午祭）と十一月に金王八幡宮の神職を斎主として祭典を行っている。参列者は栄和町会の関係者であるが、近年は参列者が減少したという。また、九月の金王八幡宮の例大祭には、大山稻荷神社の祭典庫から栄和

町会の神輿を出し、SHIBUYA109前へ集合し、式典のあと、道玄坂神輿連合渡御を行っている。栄和町会の御神酒所は、東急百貨店本店脇に作られる。

平成二一（二〇〇九）年には、東急文化村の二〇周年を記念して、七月五日の日曜日に「第一回渋谷時代祭」が開催された。その際、東急文化村の地元である栄和町会の神輿が一基参加した。時代祭当日、一時から大山稻荷神社で、金王八幡宮の神職により祭典が行われた。そのあと、神輿は東急百貨店本店（一一半）、SHIBUYA109（一二時二〇分）、東急百貨店本店の順に巡った後、再び大山稻荷神社に戻り、直会となった。

円山町の道玄坂地蔵

大山稻荷神社から坂道を下って東急文化村・東急百貨店本店の裏側を通り、東急百貨店本店を左にみながら「松濤郵便局前」の信号を横断し、「道玄坂上交番前」の信号へ続く坂道を登っていく。二つ目の十字路、スペーススターの手前、ホテルルペイプランの先を左折し、しばらくいくと再び十字路に出る。左側に「三長」という料亭があるが、十字路を渡った料亭の一角にお堂がみえ、中にお地蔵さんが祀られているのがわかる。これが道玄坂地蔵である。円山町のホテル街の一角に祀られている。お地蔵さんには、花や缶コーヒ―が供えられている。また、面白いことに、口元に口紅のような紅い色が付けられている。

道玄坂地蔵は、豊沢地蔵とよばれ、元は道玄坂上にあった。宝永三（一七〇六）年という古さを持つといわれ、多摩川三六地蔵の一つとして四の日の縁日は大いに賑わった。特に、大正四（一九一五）年頃と大正七・八年頃が最も賑わったという⁽¹³⁾。松川二郎は『全国花街めぐり』の中で「渋谷の街」を取り上げ、道玄坂上にあった道玄坂地蔵について、「古い話をするなら、今の神泉谷あたりは往時は「隠亡谷戸」といって、火葬場だったところである。ここで茶毘に付した亡者の冥福を祈るために、建立した大きな石の地蔵尊が、今でも彼の坂上の交番の隣に、『右 北澤道』など書いた石碑と共に残って居るのを知る人があるや否や、背に「文化三年」と刻んである。文化三年といえば春花秋雨ここに百余年、先には火葬場への曲り角に立って冥界の道案内者、今日は花街の守護仏？芸者から赤いよだれ掛などを贈られて艶めかしく、地蔵さまも定めて感慨無量であろう。またそれとも、予が職掌は六道の能化、色の道だけは管轄

外ぢやと苦り切っておわすか。兎に角花街の入口に、巡査とならんで地蔵尊が立っておわすは無類の奇観である。この地蔵さまと、仲吉の「はだか甚句」などがまず道玄坂名物であろう⁽¹⁴⁾と紹介している。ここで興味深いのは、この辺りは、昔は火葬場であつて茶毘に付した亡者の冥福を祈るために地蔵を建立したという伝承である。

昭和二五(一九五〇)年一〇月五日発行の『渋谷区ニュース』(四七号、渋谷区役所)によると、火葬場の供養のために地蔵が建てられたという伝承を紹介し、昭和七・八年頃の道玄坂改修前に交番の後ろにあつた地蔵を現在の場所へ移したという。道玄坂上商店街では南平台有志と共同で上通り四丁目七番地先にある道玄坂地蔵尊の地蔵まつりを一〇月中旬頃行う計画を立てたとしている。地蔵講を作つて毎月六回(一〇日に二回ずつ)の割合で供養を行い、その日は縁日を開き、付近の商店は割引売出しを行うというものである。地蔵の所有者は高橋三枝氏で、地蔵にはよく香花が供えられていたという。また、飯沼彦一郎の「道玄坂地蔵二世の由来」⁽¹⁵⁾によれば、交番の脇にあつた地蔵は二度の火災で焼失し、焼失して一年くらい経つた頃、渋谷松竹劇場主(当時)の高橋長衛門という人の寄付で道玄坂地蔵二世を作り、昭和新道(円山町の三長という料亭の側)に祀つたとしている。

平成九(一九九七)年三月一九日、東京電力のOLが円山町のアパートから遺体で発見される。殺害によつて様々な事実が浮き彫りになっていく。佐野眞一は『東電OL殺人事件⁽¹⁶⁾』の中で、東京電力本社で働いたあと、渋谷駅で降り、SHIBUYA109の女子トイレに入つて化粧を施し、道玄坂を登り、円山町のラブホテル街を抜けて道玄坂地蔵のお堂の前に立ち、道行く男性に声を掛けて売春をしたという。こうしたことも影響したせいか、インターネット上では道玄坂地蔵は東電OLの名前を取つて「泰子地蔵」と呼ばれている。

道玄坂のモニュメント・「時の化石」

道玄坂地蔵から、来た道をホテルペイブランのある十字路まで戻り、そこを右折すると「道玄坂上交番前」の交差点に出る。そこから道玄坂を渋谷駅方面に下つていくと、SHIBUYA109の付近に様々なモニュメントがあるのに気がつくだろうか。ひととき目立つのが、SHIBUYA109正面脇にある、大きな卵の上に小さな卵を載せたような石像がある。これは「時の化石」と名付けられた石像で、彫刻家・大木達美氏によつて平成三(一九九一)年に設置されたものである。ユーモラスなデザインが目を引くことから待ち合わせ場所として

も使われている。

「時の化石」が設置される一〇年前、円山町の風俗街が繁盛していて、道玄坂周辺の電話ボックスには業者のピンクビラがびっしりと貼られていた。道玄坂商店街振興組合の若手が連日、パトロールやビラ回収に走りまわり、回収したビラが一日二万枚を数えたこともあったという。業者とのいたちごっこが続いたある日、道玄坂商店街振興組合の関係者が知人である大木氏に相談したところ、「追い立てるばかりでなく、道玄坂を彫刻が置けるような文化的な街並みに変えてみてはどうか」と提案した。その言葉が契機となって、業者追放から文化的なまちづくりへ商店街振興組合の活動はシフトしていった。そして、組合員から募金を集め、道玄坂の歩道を整備し、街路灯を五五基設置した。そして、平成三年七月に、「時の化石」をはじめ七つの像が設置された。それによって「まちの空気は入れ替わったようだった」といい、作品にピンクビラが張られることはなかったという⁽¹⁷⁾。

渋谷駅南口のモヤイ像

SHIBUYA109前からスクランブル交差点まで戻る。そして、今度は東急プラザがある渋谷駅南口に出る。南口の一角にはモヤイ像がある。ここでは待ち合わせをする人が多くみられ、ハチ公像と並ぶ待ち合わせ場所として著名である。モヤイ像は昭和五五(一九八〇)年に新島観光協会によって、新島産の坑化石を使って作られ、設置された。「モヤイ」とは、新島の方言で「力を合わせる」を意味する。モヤイ像の表に若者(アニイ)、裏に老人(インジイ)の顔が彫られていて、世代を超えて協力していく姿を象徴するという。「都会のコンクリートジャングルに助け合いの心が根付いてほしい」との願いが込められているという⁽¹⁸⁾。モヤイ像には、供えものや小銭が今のところ置かれていない。

遠州屋の小松稲荷

渋谷駅南口にある東急プラザの七階から九階のトイレに向う通路の窓から、正面の赤レンガ色の六階建てのビルの屋上に小さな祠がみえる。また、近くの路上から屋上を見上げると、コンクリートの台の上に祠が載り、赤い小さな鳥居が一つ建っているのがわかる。

この遠州屋の屋上に祀られた祠は小松稲荷という。

遠州屋の代表取締役であるT・I氏（昭和二八年生）によると、元々、遠州屋は現在の道玄坂一丁目の現在の場所に移る前は、現在の宮益坂下の「みずほ銀行渋谷支店」の位置に店があった。現在でもその土地は遠州屋の所有である。天保一二（一八四一）年から、そこで酒屋を始めたという。お店と住居の中庭に、井戸と一緒に稲荷を祀られていた。

中林啓治の『記憶のなかの街 渋谷』には、明治時代の宮益橋付近⁽¹⁾に遠州屋が、大正三（一九一四）年頃の宮益橋付近の佇まいに遠州屋が描かれている⁽²⁾。第二次世界大戦中、山手線から何メートルは強制疎開ということになり、現在の道玄坂の場所に店を移し、店とともに稲荷も移動した。移動の際には、金王八幡宮の神職を斎主として遷座祭を執り行った。かつては町内会で祀っていたものを、町内会の家が途絶えて祀り手がいなくなったため、移動とともに持ってきたという。現在、毎年二の午の午前中に、六階屋上の稲荷に榊を上げ、油揚げ・メザシ・米・水・塩・御神酒などを供え、幟を立て、T・I氏の家族で参拝する。その後、太鼓（中ぐらいのもの）を叩いて、近所の特に子どもがいる家に、お稲荷さんとお鮎の入ったお弁当・ヌタ（アサリと小松菜を味噌であえたもの）・御菓子を配って歩く。その際、「お稲荷さんの日なのでよろしくお願います」と言って配って歩くという。お稲荷さんへの供物や飾りは、その日の夜まで祀っている。そのほか、正月にもお参りをするという。

平成二三（二〇一一）年は、二月二〇日の日曜日が二の午に当り、屋上の祠に「正一位小松稲荷大明神」の幟を立てて参拝した後、近所の開いている店舗にお弁当とヌタ、御菓子を配った。屋上の祠には供物を供えず、一階の店舗奥に御神鏡と榊を祀った祭壇を設け、塩・米・油揚げ・鰯とメザシ・お饅頭を供えた。お饅頭は休日なので特別に供えたという。宮益坂下にお店があった当時は、金王八幡宮の神職による祭典のあと、現在と同じように、太鼓を叩いて近所の子どもがいる家に御菓子などを配って歩いたという。

三、渋谷駅東口から青山方面に坐す神々

東急東横店の東横稲荷神社

渋谷駅東口、東急東横店の東館屋上の一角に東横稲荷神社はひっそりと祀られている。神社の入口には、左右に燈籠が立ち、中に入ると右側に手や口をすぐための小さな手水舎がある。「東横稲荷神社」と書かれた額面を付けた朱色の鳥居をくぐると、その奥に注連縄を張った小さな祠がある。左右には榊を奉り、ペットボトルの水と日本酒の一升瓶が供えてある。榊は、毎月一日と一五日に新しい榊に替える。神社の周りは樹木が取り囲み、小さな鎮守の森が形成されている。この樹木の手入れは、年末に専門の職人を呼んで行い、注連縄を張り替えて正月を迎える。また、新年の営業開始日に当たる正月二日に、東急東横店の店長以下管理職一同が集合して、新年の参拝を行う。一番大きな祭りは、年一回、二月の初午の日に金王八幡宮の神主を呼んで行う初午祭がある。開店前の午前中、御神酒・鯛・昆布・野菜などの供物をお供して、店長以下の管理職が参列して、商売繁盛を祈願する。一般の方の祭典への参列はできないが、東急東横店の営業時間内であれば、神社への参拝は可能だ。平成二四（二〇一二）年現在、東急東横店のパンフレットには、屋上の施設として「東横稲荷神社」が掲載されている。

東急東横店の前身、東横百貨店は昭和九（一九三四）年一月一日に開店したが、昭和初期の東横百貨店の「店内売場配置図」に、屋上の施設として小鳥・自動木馬・子供自転車とともに「東横稲荷」がみえる⁽²¹⁾。開店から三ヶ月を経過した翌二月一〇〜一三日の三日間、屋上で「東横稲荷初午祭」が行われ、同時に東横百貨店で「全店奉仕賣出し」が行われた⁽²¹⁾。初午祭が終了した翌日の二月一四日の一三時から屋上で「東横稲荷豆まき」が行われた。この豆まきには東映の俳優が参加した⁽²²⁾。ここからは、東横稲荷神社は東横百貨店の開店当初から屋上に鎮座し、祭祀が行われていたことがわかる。

なお、同じ渋谷にある東急百貨店本店の屋上には、稲荷神社を祀っていない。

日本薬学会長井記念館の壽稲荷

渋谷警察署前から六本木通りを六本木方面に進み、渋谷クロスタワーを過ぎて坂を登っていくと左側に公益社団法人・日本薬学会長井記念館がある。この記念館の一階、ラウンジ前の中庭に壽稲荷が祀られている。

壽稲荷前に立てられた渋谷区教育委員会の案内板によると、江戸時代に信州高島藩下屋敷（諏訪氏）の屋敷神として勧請されたと推

定されている。稲荷の右脇には、石造手水鉢があり、そこには明和八（一七七七）年の銘がある。明治一三（一八八〇）年に旧徳島藩医であった長井琳章が高島藩の屋敷地を購入している。その後、琳章の子で薬学者（日本薬学会初代会頭）の長井長義の子孫が昭和三七（一九六二）年に日本薬学会に土地の一部を寄贈した。その際に、壽稲荷も日本薬学会の所有となったとしている。壽稲荷本殿と石造手水鉢は渋谷区の指定有形文化財に指定されている。

日本薬学会のホームページでは、「長井記念館紹介動画」（映像）で壽稲荷について触れ、毎年二の午（二月中旬）に壽稲荷祭を行っていることが紹介されている。また、長井記念館が立地する渋谷二丁目町会の『六十年のあゆみ』そして明日へ 渋谷二丁目町会創立六十周年記念誌』によれば、町会の二月の行事として、「薬学会「壽稲荷」祭礼参加⁽²⁾」とある。日本薬学会の関係者と地元・渋谷二丁目町会の人たちが参列して祭りが行われていることがわかる。渋谷一丁目のT・K氏（昭和一七年生）によれば、Kさんが子どもの頃、長井さんの屋敷に鬱蒼とした森があり、この森の中にお稲荷さんが祀られていたという。渋谷駅からわずかな距離の場所で、祀り手を変えながらも、江戸時代から祀り続けられている稲荷神社の存在に驚かされる。

小林ビルの藤田稲荷

日本薬学会会長井記念館を出て、六本木通りを「渋谷二丁目」の交差点まで進み、ここを左折して青山学院大学を右手に見ながら、青山通りに交わる「青山学院前」の交差点まで行く。ここで歩道橋を渡り、青山通りの反対側に降りる。そして、今度は、こどもの城を右手にみながら渋谷方面に戻る。しばらく進むと、都営バスの「渋谷二丁目」のバス停が左側にあり、その前に小林ビルがある。このビルの屋上には、実は稲荷神社が祀られている。しかし、青山通りの路上から見上げることはできない。

屋上に祀られている稲荷神社の名を「藤田稲荷」と呼ぶ。小林ビルのT・K氏（昭和一七年生）によると、藤田稲荷は明治頃からあるという。T氏のお祖母さんの家をY家といったが、Y家は元々、今の東急百貨店本店の方において材木屋を営んでいた。江戸時代の末頃である。Y家が入る以前は藤田屋が瀬戸物屋を営んでいたが盗賊の襲撃を受けて皆殺しにあつて空地になっていた。Y家はその空地を買って材木屋を始め、その後現在地に移転した。そして、藤田屋が皆殺しに合つてかわいそうだといひ、またY家が現在地に移つて、

商売が上手くいったため、「藤田」の名をとって「藤田稲荷」として祀るようになったという。Y家のお祖父さんの代のことである。

屋上に祀られた稲荷神社には大小二つの祠がある。T氏の叔母によると、藤田屋には小さな子どもがいて、盗賊の襲撃の際に不幸な目に合ったため、それで祀っているという。小さな祠の方に小さな子どもを祀っているという。中庭に祀っている頃は、大小の祠の大きさが現在のものよりもその差が大きかったという。

その後、Y家の跡継ぎがなくK家で藤田稲荷を祀るようになった。昭和二七（一九五二）、八年頃には、K家の中庭に藤田稲荷を祀っていた。祭りは年に一回、初午の時に行った。昔は近所の人を皆呼んだため沢山の人が集まったという。夕方になると飲みにきていた。

戦前の祭りはかなり賑やかであったという。その後、戦争中に祀りは中断したが、戦後、K家によって祀りが続けられる。昭和六二年にビル化し、地上から屋上へ稲荷を遷座した。ビルを建設する間、御霊を氏神の金王八幡宮へ一年半預けていた。また、地上に祀ってあったときの土台だけはとっておいて、ビルが落成したあと、すぐに土台を屋上に移し、その上に浅草の業者に依頼して造った社を載せて祀った。鳥居も一緒に作られ祀られた。藤田稲荷は伏見稲荷や豊川稲荷などとは異なる性格のため、鳥居は赤く塗らないという。

K家では二月の初午に金王八幡宮宮司（または神職）を招いて屋上の稲荷前で祭典を行っている。近年、二月は寒いため、三月末から四月初めの午の日に行っている。平成二四（二〇一二）年は四月三日に行われた。祠の前の両側に「藤田稲荷大明神」の旗を立て、お供え餅・米・塩などの供物を供えて祀る。宮司の祝詞奏上のもと、K家の御家族が玉串を捧げ稲荷に参拝する。屋上は家族・近い親戚など一五、六人が参列して行われる。平成二四年は一〇人が参列した。祭典が終わるとビル内で神職を交えて参列者で直会を行う。

年一回の祭りのほか、K家の当主が毎朝、起きると必ず屋上に上がって参拝する。また、一日と一五日には祠を清掃して櫛を新しいものに取り替えている。暮れの最後には、松飾りをして注連縄を張っている。

なお、小林ビルに隣接する青山セブンハイツの屋上にも藤田稲荷が祀られている。昭和二五年頃、分祀したという。青山セブンハイツの「セブン」は七人の地主で建てたビルのため「セブンハイツ」と命名したといい、七人の中で一番土地を広く所有している方が屋上の稲荷神社を祀っているという。小林ビルの屋上から隣の青山セブンハイツのビルの屋上に鎮座した藤田稲荷の屋根を微かにみるこ

とができる。

学校法人清水学園の「衣は人なり」登美神社

小林ビルから青山通りを渋谷方面に進むと「宮益坂上」の交差点に出る。この交差点から近くのビルの屋上に鳥居と小さな社殿がみえる。これは「きもの」(着物)の学校である「学校法人清水学園専門学校 清水とき・きものアカデミア」の九階建てのビルの屋上に祀った「衣は人なり」登美神社である。この神社には学園の創設者・清水登美氏を祀っている。「衣は人なり」登美神社の鳥居には、「衣は人なり」の額面を飾り、学園の創設者の衣服への精神を今に伝えている。清水登美氏は平成六(一九九四)年五月一六日に亡くなられ、翌平成七年に現在の学園長の清水とき氏(大正一三年生)によって祀られた。清水とき氏によると、「母のために、きもの(着物)の学校を続けてきたから最後に神社を建てた」といい、創祀に当って金王八幡宮の神職を斎主として遷座祭を行ったという。また、屋上に神社を祀るに当って、先ほど紹介した小林ビルの藤田稻荷を参考にしたという。清水登美氏はK家の庭にあった藤田稻荷によくお参りしたという。小林ビルのT・K氏は、清水とき氏から「T・Kさんと同じように神社を屋上に作った」と聞いたという。現在、屋上の「衣は人なり」登美神社から、小林ビルの藤田稻荷を遠望することはできないが、隣の青山セブンハイツ屋上の藤田稻荷をみるこ
とができる。

毎年五月の母の日(休日の場合は直近の平日)に学園の生徒がカーネーションを供えてお参りを行っている。また、一〇月一七日の創立記念日には午前中、登美氏が一番好きだった百合の花を供えて生徒を含めた学園の皆さんでお参りをする。このほか、清水学園では二月八日に金王八幡宮の神職を招き、学園内のホールで菟蓐に使い古した針を刺す「針供養」を行っている。菟蓐から抜いた針は世田谷区の淡島神社へ納めるといふ。また、学園内の神棚には登美氏と織物の神さまである文布神社のお札を祀り、ビル一階の登美氏の写真の前には水とお茶が毎日供えられる。

敗戦後の困難な時期を乗り越えて、「衣は人なり」の精神のもと、熱心に歩まれてきた清水登美・とき氏母娘の思いを「衣は人なり」登美神社は象徴的に伝えているといえる。

まとめ

このように、〈渋谷〉の街には小さな神々が少なからず祀られていることがわかったと思う。これらの神々を大きく三つに分類すると、(一) 屋上や地上に祀っている小祠、(二) 地蔵や銅像、慰霊碑など供物が供えられ参拝が行われている偶像、(三) 供物の献上や参拝は行われないが、何らかの願いが託された偶像・モニュメントである。ここでは、これらの神々の特徴についてみておきたい。

(一) 小祠 (小さな神社)

本節で取り上げた小祠は、東伏見稲荷大神(西武渋谷店)、伏見稲荷(近江美容室)、被官稲荷神社(オーク・ヴィレッジ渋谷)、観世稲荷(観世能楽堂)、大山稲荷、小松稲荷(遠州屋)、東横稲荷神社(東急東横店)、壽稲荷(日本薬学会長井記念館)、藤田稲荷(小林ビル)、藤田稲荷(青山セブンハイツ)、「衣は人なり」登美神社(清水学園)の一一社に上る。ここから浮かび上がる〈渋谷〉の小祠の特徴として、以下の七点が挙げられる。

① 大多数が「稲荷」を神さまとして祀る神社である。

小祠に祀られた神さまに注目すると、「衣は人なり」登美神社(清水学園)を除く、一〇社全てが「稲荷」を神さまとして祀っている。

② 「人を神に祀る」神社がある。

「衣は人なり」登美神社は、清水学園の創設者・清水登美氏を神さまとして祀っている。また、「衣は人なり」登美神社に隣接する小林ビルの藤田稲荷も「人を神に祀る」要素がみられる。小林ビルの藤田稲荷、盗賊の襲撃によって皆殺しに遭った藤田屋にちなんで命名され、祀られた大小二つの祠のうち、小さい方の祠は亡くなった子どもを祀るとしている。青山セブンハイツの藤田稲荷は、小林ビルの藤田稲荷から分祀され、藤田稲荷によく参拝していた清水登美氏は、登美氏の後を継いだ娘の清水とき氏によつ

て屋上の神社へ神として祀られている。清水とき氏が「衣は人なり」登美神社を作る際、参考にしたのは屋上に祀られた小林ビルの藤田稲荷であったという。「衣は人なり」登美神社と藤田稲荷の間には影響関係がみられる。

③ ビル化や祀り手の変化に適応しながら、祀り続けられる小祠が多い。

現在、ビルの屋上に祀られた小祠は、東伏見稲荷大神、伏見稲荷、被官稲荷、小松稲荷、東横稲荷神社、藤田稲荷（小林ビル）、藤田稲荷（青山セブンハイツ）の七社である。このうち、元々は地上や室内に祀られていたものがビル化の際、屋上に祀られたという事例が、伏見稲荷（近江美容室）、被官稲荷神社（オーク・ヴィレッジ渋谷）、小松稲荷（遠州屋）、藤田稲荷（小林ビル）、藤田稲荷（青山セブンハイツ）の五社ある。一方で、地上に祀られた小祠は、観世稲荷、大山稲荷神社、壽稲荷の三社あり、祭祀を継続している。特に、壽稲荷は、江戸期から現在まで祀り続けられている。また、小祠の祀り手の変化もみられる。小松稲荷（遠州屋）は、かつては町内会で祀っていたものをI家で祀るように変化した。藤田稲荷はY家の跡継ぎが途絶え、K家で祀るように変化した、さらには稲荷神社を分祀している。壽稲荷（日本薬学会会長井記念館）は、諏訪高島藩、長井家、日本薬学会会長井記念館と祀り手を変えながら継続している。

④ デパートの小祠やビル化の後に祀り始めた小祠は、最初から屋上に祀られている。

デパート（百貨店）にある東伏見稲荷大神（西武渋谷店）と東横稲荷神社（東急東横店）の二社は、いずれもデパートの開業当初から屋上に祀られている。そして、デパートの棟の中で最も古い建物の屋上に祀られている。東急東横店では東館、西武渋谷店はB館が古い。そのため、新たにできた東急百貨店本店の屋上には稲荷神社を祀っていない。また、「衣は人なり」登美神社（清水学園）は、登美氏の死後、最初から屋上に祀られている。伏見稲荷（近江美容室）は渋谷に店が移転する名古屋の段階で屋上に祀られていて、渋谷に移転した当初から稲荷神社が屋上に祀られている。つまり、これらの事例には、小祠は「屋上に祀る」という前提があったことが窺える。

⑤ 小祠を祀り続けるのは、個人の強い意志によることもみられる。

特に、伏見稲荷（近江美容室）、「衣は人なり」登美神社（清水学園）の二社が該当する。伏見稲荷は、度重なる店の移転にもかか

わらず、オーナーの強い意志に支えながら祀り続けられている。「衣は人なり」登美神社は、清水とき氏の亡き母への思いが、母を神として祀り、神社への祭祀の持続を支えている。

⑥ 家やお店が移動すると祀られた小祠も一緒に移動する。

小松稲荷（遠州屋）、伏見稲荷（近江美容室）、観世稲荷（観世能楽堂）の三社が該当する。特に、小松稲荷では、初午祭のとき、太鼓を叩いて近所の子どものいる家にお弁当・お菓子・ヌタを配るといった儀礼習俗も移動している。

⑦ 小祠の周りに、植木を含めた樹木を配置して、神さまを「奥」に隠そうとする傾向がみられる。

東伏見稲荷大神（西武渋谷店）、東横稲荷神社（東急東横店）、伏見稲荷（近江美容室）の三社が該当する。また、小松稲荷（遠州屋）もスペースがあれば、植木を置きたかったといい、「衣は人なり」登美神社（清水学園）もカラスの害がある前は、緑の植木を「夏に暑くないように」と小祠の周りに置いていた。しかしそれは、単に小祠の周りに「鎮守の森」を作ろうというだけではないようである。東伏見稲荷大神の事例が象徴的で、屋上の入口の扉から、直接みえにくいように植木を配置し、わざわざ鳥居を二つ用意して参拝の経路まで変えて、神さまを「奥」に隠そうとする傾向がみえる。つまり、奥に神さまが「コモル」（籠る）といった伝統的な日本の神さまの性格が屋上の小祠にもみてとれる。植木を祠の周囲に配置はしていないが、路上からはみえにくい場所に祀られた小林ビルと青山セブンハイツの藤田稲荷にも同様に性格が考えられる。

以上のように、〈渋谷〉の小祠は伝統的な日本の神さまの性格と共通項を持ちながら、社会変動の中で、集団だけでなく、個人の強い意志にも支えられ、ビル化や祀り手の変化、家や店の移転といった大きな変化にも適応しながら、自在に祀り続けられてきたといえる。

（二）祀られている偶像

本節で取り上げた、供物が供えられ参拝が行われるなどして祀られている偶像は、ハチ公銅像、ロフトの道祖神、二・二六事件慰霊碑、宇田川地蔵、道玄坂地蔵の五例ある。ここから浮かび上がる特徴として、以下の二点が挙げられる。

① 慰霊または供養がなされている偶像が多い。

ハチ公銅像、二・二六事件慰霊碑、道玄坂地蔵が該当する。ハチ公銅像では毎年、金王八幡宮の神職を齋主として慰霊祭が行われている。二・二六事件慰霊碑は、その名の通り二・二六事件で処刑された青年将校らを慰霊するものである。道玄坂地蔵は、かつては火葬場の亡者に対する供養、近年では東電OLという非業の死を遂げた亡者の供養という願いが託されている。

② 移転を重ねながらも存続する偶像がみられる。

ハチ公銅像は、何度か渋谷駅前を移動し、また戦争中は金属として供出されながら戦後、復活している。宇田川地蔵も道玄坂下の宇田川の畔から移転し、戦争を経て現在地に祀られた。また、道玄坂地蔵も道玄坂上の交番の脇から現在地へ移転している。移転を重ねながらもハチ公銅像や地蔵は持続し続けている。

(三) 願いが託された偶像・モニュメント

本節で取り上げた、供物の献上や参拝は行われないが、何らかの願いが託された偶像・モニュメントは、NANAOKO像、時の化石、モヤイ像の三例ある。「招き猫」の形を模したNANAOKO像はハチ公に代わる「待ち合わせ場所」として期待されている。また、モヤイ像は「助け合いの心が根付いてほしい」という思いが石像に託され、「待ち合わせ場所」として成り立っている。道玄坂の「時の化石」は、「文化的な街へ」との願いを託して造られ、ピンクビラを撃退し、結果として「待ち合わせ場所」として機能している。

(四) 「渋谷」の小さな神々における共通項

以上、〈渋谷〉の小さな神々について、大きく三つに分けてその特徴について考えてきた。最後に、これらに共通する特徴を考えておきたい。

第一に、小祠や地蔵、ハチ公像は、ビル化や移転などの社会的な変化に適応しながら持続している点が挙げられる。この背景には、

小祠や地蔵など祀られる神々には、「粗末にはできない」という観念が窺える。被官稲荷神社（オーク・ヴィレッジ渋谷）の事例のように、「お稲荷さんを無くすと祟りがある」といって、ビル化の際に屋上に新たに祠を作ってまで祀った心意の背景には、こうした観念が窺える。また、ロフトの道祖神は、賽銭を供え、参拝する人が現れた結果、「むげにもできない」ため、花を供え始めている。

第二に、ハチ公像や地蔵、慰霊碑、小祠の一部には、慰霊または供養の観念がみられる点が挙げられる。ハチ公銅像や道玄坂地蔵、二・二六事件慰霊碑のみならず、人を神に祀る「衣は人なり」登美神社や藤田稲荷（小林ビル）にもこうした観念が窺える。都市空間で慰霊や供養がなされるのは、東京都千代田区大手町の将門塚の事例から同様の観念が窺える。二・二六事件慰霊碑や被官稲荷神社では、「祟り」が言語化されていて、「祟る」存在であるため、祭祀が強化されている。

第三に、ビル化などの社会的な変化の時期に、祭祀が強化されたり、新たに碑やモニュメント、小祠など作られる点が挙げられる。例えば、二・二六事件慰霊碑は、昭和五六（一九八一）年の不慮の死の翌五七年に安全菩薩が作られている。また、被官稲荷神社は、旅館の柱に祀った神札から、屋上の祠へと発展したのは、昭和五年のビル化の際である。宮益坂の御嶽神社のビル化も、渋谷駅南口にモヤイ像が作られたのも昭和五年である。付論第二節で触れているが、昭和四四年にSHIBUYA109が開業するが、同じ年は渋谷警察署から宮益坂上まで登る坂道に伝統ある名を残すために「金王坂」と命名され、「金王坂」の碑が建立された。与謝野晶子の歌碑・道玄坂の由来碑・供養碑に三つが一组となった「道玄坂の碑」が道玄坂上に建立されるのが、昭和五年である。金王八幡宮の渋谷のいくつかの氏子町会で神輿の新調や購入がなされ、敬老神輿が強調されるのも同時期である。つまり、〈渋谷〉の再開発が進み、ビル化が進む昭和五五年前後に、小さな神々の祭祀が強化されたり、新たな神々が作り出されている。

このように、〈渋谷〉の小さな神々は、社会変化の中で細々と祭祀が続けられているのではなく、変化によって祭祀が逆に強化されたり、新たな神々を生み出しながら、〈渋谷〉という都市空間の中に溶け込む形で持続しているといえる。つまり、〈渋谷〉という、一見すると合理的に思える都市空間にも、小さな神々の息吹からわかるように、非合理的な世界が存在していることがわかる。

註

- (1) 『朝日新聞』朝刊、昭和二十四年四月四日付。
- (2) 『朝日新聞』夕刊、昭和二十八年一月八日付。
- (3) 『朝日新聞』朝刊、昭和三十三年八月一六日付。
- (4) 『讀賣新聞』朝刊、昭和三十三年一月一日付。
- (5) 『朝日新聞』朝刊、昭和三十七年四月九日付。
- (6) 『朝日新聞』朝刊、昭和三十八年三月九日。
- (7) 『讀賣新聞』朝刊、昭和四四年四月九日付。
- (8) 『讀賣新聞』朝刊、昭和四三年四月九日。
- (9) 『讀賣新聞』朝刊、昭和六一年四月九日付。
- (10) 『地域情報誌 大向界隈』N. 28、渋谷区役所大向事務所、平成一五年。
- (11) 野村敬子編『渋谷民話の会 渋谷ふるさと語り 二十一世紀の孫たちへ』渋谷区、平成一三年、一一六～一一七頁。
- (12) 藤田佳世『大正・渋谷道玄坂』、青蛙房、昭和五三年。
- (13) 『渋谷区史』渋谷区役所、昭和二十七年、九七〇～九七一頁。
- (14) 松井二郎『全国花街めぐり』誠文堂、昭和四年、一四六頁。井上章一編『近代日本のセクシュアリティ 風俗からみるセクシュアリティ』二二、ゆまに書房、平成九年所収。
- (15) 『地域情報誌 大向界隈』N. 15、渋谷区役所大向出張所、平成一二年、所収。
- (16) 佐野眞一『東電OL殺人事件』新潮文庫、平成一五年。
- (17) 『讀賣新聞』平成三年五月四日付。
- (18) 『地域情報誌 大向界隈』N. 28、渋谷区役所大向事務所、平成一五年。
- (19) 中林啓治『記憶のなかの街 渋谷』河出書房新社、平成一三年、二六～二七頁。
- (20) 前掲中村『記憶のなかの街 渋谷』三三頁。
- (21) 野田正穂・原田勝正・青木栄一編『東京横浜電鉄沿革史』日本経済評論社、昭和五八年（復刻版）、六八三～六八四頁。
- (21) 『東京朝日新聞』夕刊、昭和一〇年二月一〇日付、広告欄。
- (22) 『讀賣新聞』夕刊、昭和一〇年二月三日付、広告欄、『東京朝日新聞』夕刊、昭和一〇年二月三日付、広告欄。
- (23) 『六十年のあゆみ そして明日へ 渋谷二丁目町会創立60周年記念誌』渋谷二丁目町会、平成二十四年、四八頁。

資
料
篇

【資料一】平成二五（二〇一三）年の神田祭・町会別祭礼行事実施状況

平成二五年に神田神社への宮入を行った五二町会（大手・丸の内町会を除く）と二連合（錦連合・小川町連合）の祭礼実施状況の一覧を以下に掲載した。参考として、岩本町二丁目岩井会と蠣殻町東部町会の二町会のデータも掲載した。この二町会を入れると五四町会と二連合のデータである。本調査は、平成二六年一月～平成二七年五月の期間で、神田神社の各町会の担当神職の協力のもと、各町会の関係者（町会長、副会長、青年部長等）に、以下の調査項目に沿ったインタビュー調査（内神田鎌倉町会と神田大和町会はFAXによる回答）を実施。調査項目の詳細は、昭和四三（一九六八）年の菌田稔の調査項目に沿う形で、①町会の世帯数、②町会で配布した神田祭の祈禱札の数、③神酒所の有無と場所、④祭礼の象徴、神輿・M、山車・D、曳き太鼓・Hなどの数、大きさは判明分のみ、年代は昭和六〇年代～平成にかけて新調した判明分のみを掲載、⑤町会の主な行事（祭礼行事）、蔵出し（出）・神輿展示（展）・御霊入れ（御）・挨拶廻り（挨拶）・神幸祭「受渡し」（受）・宵宮行事（宵）・町内渡御（町）・隣町廻り（隣）・連合渡御（連）・神輿宮入参拝（宮）・直会（直）・御霊返し（返）・蔵入れ（入）の有無、⑥役割動員…町会の祭礼の組織、祭典委員…（委）、祭典実行委員…（実委）、祭典委員会…（委会）、祭典実行委員会…（実会）、祭典委員長…（委員長）、祭典実行委員長…（実長）、祭礼委員会（礼会）、祭礼委員長（礼長）、青年部（青）、婦人部（婦）、⑦一般動員（参加者）…参加者数とその内訳、神輿同好会は「同好会」と表記、⑧行事経済…町会の祭礼費用、⑨行事変化…（平成二五年から）この一〇～一五年の変化、⑩祭りの評価…町会にとって神田祭はどのようなもの（場）か、⑪神社イメージ…神田神社は何の神様を祀る、どのような神社か、を質問した。

【神田中央連合】宮入実施…二町会・二連合。

神保町一丁目町会…①町会員三八三世帯・七四三人。②一五〇～二〇〇枚程度。③有り「神保町三井ビルディングF」。④M…大一「二尺三寸・H一五」・大一「二尺」・小一、H一。⑤（御）、（宵）、（受）、（町）、（宮）、（返）、（直）。⑥（委）、（委会）、（委員長）、総務統括、（青）、（婦）。⑦町会員四〇〇人、町会員外一五〇人。同好会二二～一三団体。女性…多い。⑧寄付（奉納金）。⑨企業の参加が増えた。⑩町会員の親睦の場。⑪氏神様、平将門。

神田猿楽町町会…①町会員八〇世帯。②不明。③有り「明治大学内」。④M…大一「二尺」・中一「二尺八寸」・小一、H一。⑤（出）、（御）、（宵）、（受）、（挨拶）、（町）、（宮）、

〈町〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、青少年部、〈婦〉。⑦大人神輿…日曜三五〇人、子ども神輿…一〇人、曳き太鼓…三〇〜四〇人。同好会一六〜一七団体。⑧寄付（奉納金三八〇万円）。⑨平成二五年、宵宮を初めて実施。宵宮は金曜夜、社員が半纏を着て一〜一時間半神輿を担ぐ。二〇年前頃から神輿同好会の比率が高くなった。寄付は減少傾向。⑩地域の絆の再確認の場。町に活気が出る。⑪平将門、氏神様。

錦町二丁目町会（錦連合）…①居住者二二〜二三世帯・町会員六〇世帯。②五〇〜六〇枚。③有り「錦連合で一つの神酒所。ちよだプラットホーム」。④M…大・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、縁日、〈受〉、〈町〉「門付」、〈宵〉巡幸、「錦連合」〈宮〉、〈入〉、〈直〉「各町会ごとに実施」。⑥〈委〉、〈委員長〉（錦連合で一人）。⑦六〇〇人「錦町二丁目町会と錦町三丁目町会の合計」。同好会五団体。⑧寄付（奉納金六〇〇万円弱）、町会費一〇〇万円（三町会合計）。⑨住民が昔の一分の一。二〇年前には既に連合を組んでいた。神酒所は町会ごとに作っていたが平成二五年に錦連合で一つに統合。ここ二〇年で担ぎ手が増加。⑩町会で一番大きなイベント（行事）。⑪大国主命、平将門、三神。氏神様。

小川町北部一丁目町会（小川町連合）…①六〇世帯。居住者…約三八世帯。②約五〇枚。③有り「小川町連合」。小川町北部一丁目町会…なし、小川町北部二丁目町会…有り「幸徳稻荷神社」、小川町北三町会…有り「三立商事一F」、小川町三丁目西町会…有り「三井住友銀行神保町ビル前」。④M…「小川町連合」大「S六二」。小川町北部一丁目町会…MとHなし。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、「小川町連合」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉（小川町連合）、〈委員長〉（当番町会の町会長）。⑦小川町連合四町会…五〇〇人。揃いの半纏で担ぐ。友人・親戚が多い。社員も参加。女性…多い。⑧小川町連合…寄付（奉納金三八〇〜四〇〇万円）、町会費（祭礼費）。⑨パブル期の少し前から連合の神輿を作ろうという話が出た。幸徳稻荷神社が小川町北部四町の核にあるから連合するようになった。⑩どこの町会でも存在感があるような場。⑪神様は三人。

【中神田十三ヶ町連合】宮入実施…一三町会。

内神田美土代町会：①一三五世帯（住民登録）・人口二〇〇人。②二二〇〜二三〇枚。③有り「和泉国際産業ビルF」。④M：大「二尺」、小「二尺三寸」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈礼長〉（町会長）、副〈礼長〉（副会長）、〈青〉、〈婦〉。⑦土曜一七三人「地元九五五、同好会七八人」。日曜二五六人「地元六〇人、同好会一九六人」。青年部一〇人前後。会社員参加者数四〇〜五〇人。⑧寄付（奉納金四〇〇万円）。不足分は大祭準備金で補充。⑨やり方自体は変わっていない。同好会の比率が増加。町内の子どもが少ないため、子ども神輿は飾るのみ。⑩大変だと言いつつ、それを楽しむもの。祭りがないと寂しい。⑪地元の氏神。

司一町会：①一五一世帯（住民登録）、町会員六四世帯。②二二〇枚。③有り「三立社ビルF・駐車場」。④M：大「二尺一寸」、小「一尺五寸」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈隣〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委長〉。⑦土曜二三八人、日曜三二九人。町会五〇人、城南信用金庫一〇人、神田睦会約二〇人、子ども神輿四〇〜五〇人。⑧寄付（奉納金四六〇万円）、繰越金約五十一万円。⑨半纏の新調。寄付・参加者を維持。平成一九年に子ども神輿・山車を修復。寄付集めをオープン化。⑩町内の最大のイベント。⑪平将門様。神田の人間は成田山にはいかない。

司町二丁目町会：①二〇四世帯・三七六人「町会員一四〇〜一五〇世帯」。②二二〇枚。③有り「神田児童公園」。④M：大「一尺一寸」、小「一尺一寸」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈宵〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦土曜三五〇人、日曜六五〇人。青年部一四〜一五人。同好会二〇〜三〇団体。⑧寄付（奉納金四八三万円＋神酒所奉納金二七万六千円）、繰越金約二〇七万円、お祓い奉納金（門付）二二五万円。⑨お祭りそのものは変化なし。お金と人の問題が大変で以前に比べ厳しくなっている。⑩神田で生活している中で一番の華。⑪子どもが生まれるとお祓いを受けに行ったり、商売繁盛の祈願にも行く、身近な神社。

内神田鎌倉町会：①二二五世帯（区公表）、町会員一七八世帯。②不明。③有り「内神田尾嶋公園」。④M：大「二尺五寸」、小「一尺一寸」、H一。⑤〈御〉、〈町〉、〈宵〉、〈受〉、〈隣〉、〈宮〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈青〉、〈婦〉。⑦町会員二〇〇人、町会員縁者二〇〇人、同好会二〇〇人。⑧寄付（奉納金八四七万円）、町会費八五万円。⑨町会員の高齢化、

転出により男女ともに実行部隊の戦力低下を感じる。⑩江戸最古町としての伝統を伝える場、町会員の心が一つになる場。⑪大黒様、恵比寿様、将門様。

内神田旭町町会…①九九世帯「町会員は二〇〇弱世帯」②二〇〇枚弱。③有り「佐竹稻荷神社」。④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈隣〉、〈町〉、〈連〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈青〉、〈婦〉。⑦金曜夕方一〇〇人。土曜二五〇〜三〇〇人。日曜四〇〇人。同好会三〇〜四〇人。子ども神輿三〇人。⑧寄付（奉納金五〇〇万〜六〇〇万）、町会費（積立金）。⑨以前に比べ、居住者の参加…三分の一。⑩町会員が一体化する場。⑪子どもの頃からの氏神。心休まる氏神様。

多町二丁目町会…①五四世帯（住民登録）、居住者…三〇世帯、町会員一五〇。②一五〇枚。③有り「三島彩色補正店1F」。④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈展〉、〈宵〉、〈御〉、〈町〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉〈委会〉、神輿部「〈青〉」、給食部「〈婦〉」。⑦金曜五〇〜六〇人、土曜約二〇〇人、日曜約二五〇人「約一五〇人が友人・知人」。城南信用金庫神田支店…約二〇人。女性八〇〜一〇〇人。⑧寄付（奉納金四〇二万円）、繰越金一三五万円、門付のご祝儀など。⑨昭和四〇年頃から担ぎ手が一時減少したが、盛り返して現在に至っている。奉納金は二〇年前は七〇〇万円。⑩大変だが町会が一つにまとまれるもの。神田祭はブランド。⑪大黒様、少彦名命、平将門。

多町二丁目町会…①町会員二二〇〜二三〇世帯。②寄付を貰った方に配布。③有り「神城ビル1F」、御飯屋…有り「多町二丁目交差点」、④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委長〉（町会長）、〈実長〉（青年部長）。⑦土曜…大三五〇人「町内…元町内・親戚を含み一〇〇人、町外…二五〇人」、日曜…大八〇〇人。同好会一〇団体。会社員約五〇人。子ども一五〇人〜二〇〇人、女性一割。⑧寄付（奉納金六三〇万円）、繰越金。⑨変化なし。住んでいる人は増加。土曜日の八町会合わせは一五年くらい前から開始。⑩人と人のつながりを深くする場。一番大事な行事。お祭りがあるから青年部、町会も固まれる。自慢できるお祭り。⑪将門公。

神田鍛冶三会町会…①七七世帯(住民登録)・町会員二二〇人。②二二〇枚。③有り「KDX鍛冶ビルF」。④M…大「二尺三寸」・小「一尺八寸」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈接〉、〈受〉、〈宵〉、〈町〉、〈連〉「八町会」、〈宮〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈礼会〉、〈礼長〉(町会長)、〈青〉、〈婦〉。⑦役員三〇、町会員二二〇人、同好会三〇〇人「二〇団体以上」。三菱銀行三〇人「土曜」。⑧寄付(奉納金四五〇万円)。⑨担ぎ手が年を取った。若い人が出てこない。平成一九年頃から金曜日の女神輿を開始。⑩祭りによって町が密接になる。他町会との張り合いの場。⑪平将門。

淡路町一丁目町会…①町会員五〇世帯・約一五〇人。②なし。③有り「西形氏染物屋F」。④M…大「二尺八寸」・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈接〉、〈受〉、〈宮〉、〈町〉、〈直〉、〈入〉。⑥〈委〉(委員長)、副〈委長〉(副会長)、〈実長〉(青年部長)、世話人「〈連〉」、青年部、婦人部。⑦日曜…二五〇人「町会員二〇人、同好会一三〇人」、女性少ない。ワテラスの学生一〇人。⑧寄付(奉納金二九八万円)。⑨ほとんど変化なし。以前は金曜、土曜も町内渡御を行ったが現在は日曜のみ。⑩二年に一回の最大の行事。⑪氏神様。平将門。ちゃんとお祀りをしないと将門さんは怖い

神田淡路町二丁目町会…①町会員一四〇世帯「事業所、新住民を含む」、②一四〇枚。③有り「ワテラスF」。④M…大「一・小一、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈接〉、〈受〉、〈宮〉、〈町〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委長〉。⑦四〇〇人。同好会二〇〇人弱。ワテラス在住の学生一〇人。⑧寄付(奉納金三五〇万円前後)。⑨一六〇一七年前から淡路町の再開発が始まる。⑩町会にとっても、街のとっても義務である。大イベント。⑪大黒様、恵比寿様、平将門。親しみのある神社。

須田町一丁目南部町会…①町会員一六三世帯。②約二〇〇枚。③有り「中川金属ビルF」。④M…大「一・小一、H一」幅一m二〇、長さ一m八〇」。⑤〈出〉、〈御〉、〈宵〉、

〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、〈宮〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉、祭典実行委員長（町会長）。⑦土曜二二〇人、日曜三〇〇人「町内五〇人、同好会二五〇人・一七〇一八団体」。⑧寄付（奉納金五五〇〇六〇〇万円）。不足分は町会費一五〇万円。⑨寄付は年々減少。⑩みんなで参加できるもの。⑪未回答。

須田町中部町会…①二六〇世帯「町会員一〇〇世帯、企業七〇」。②二五〇枚。③有り「駐車場」。④M…中一「H一五」・小一、H二、獅子頭一对、四神剣。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈婦〉、女みこし担ぎ手募集係。⑦一般募集（女性のみ）。参加者一六九人。⑧寄付（奉納金三三三万円）。⑨もともと、住んでいた人が減少し、マンションが多くできたこと。⑩昔からいる人の一つの結束の象徴。⑪平将門、大黒様。

須田町北部町会…①町会員一四〇世帯「大半が企業」、住民五〇世帯。②二五〇枚。③有り「須田町北部会館一F」。④M…大一・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈宵〉、〈宮〉、〈町〉「門付」、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦四〇〇人「住民の関係者二〇〇人、町内の企業社員二〇〇人」。企業…りそな銀行三〇人、新日鉄興和不動産二〇人、JR東日本ビルディング、JRステーションリテリング、みずほ銀行二〇〇三〇人。女性…多い。⑧寄付（奉納金四〇〇万円）。⑨二年前、神酒所の場所が新しい町会会館の一階へ変化。最大で五〇〇人いた神輿の担ぎ手が減少。町内の銀行が減少。⑩神田祭は特別なもの。世代を超えてみんなで一緒に汗をかくことで一体感が増す。それは街の機能にとっても有益。⑪神田神社はステータス。

【外神田連合】宮入実施…一二町会。

外神田一丁目万世橋会…①一三世帯。②未調査。③有り「JR秋葉原駅電気街口」。④M…大一、小一。⑤〈出〉、〈御〉、〈町〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦大人神輿…四〇〇人「町会二〇〇人、神輿同好会三〇〇人」。

神田旅籠町会…①一五〇世帯。②未回答。③有り「住友不動産秋葉原ビルF」。④M…大1、小1。D…H1。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈町〉、〈入〉。⑥〈委〉。⑦町内に担ぐ人がいない。町会員の友達の友達が参加。⑧寄付（奉納金二〇〇〇三〇〇万円）⑨昭和四〇年頃から、だんだんと町会員の友達を連れてくるように変化。深川や浅草の神輿の睦会が三〇四団体参加。奉納金の芳名板は板張りに紙を貼るのが大変な作業のため一〇年ぐらい前から廃止。⑩神田祭は伝統、お神輿はレクリエーション。⑪未回答。

宮本町会…①町会員…一七〇世帯。②未配布③有り「アヤベビルF」。④M…小1。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈町〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈青〉、〈婦〉。⑦子ども神輿…子ども一〇〇人「町内二〇〇三〇人と昌平小学校」。大人神輿…二五〇人「亀有三丁目東町会一〇〇人、町内企業・印刷屋四〇人、町会員の親戚五〇人」。⑧寄付（奉納金二一〇〇二二〇万円）、町会費二〇〇〇二五〇万円、繰越金。合計四〇〇〇四五〇万円。⑨町内の高齢化。ただし、子どもの参加は増。平成二一年より大人神輿を亀有の町会から借りて宮入を開始。⑩町会を守っている氏神様のお祭り。氏神の近くに住んでいるという誇りがある。何があってもきちんとやろうと思っっている。⑪大国主命、恵比寿様、将門。商売の神様。

神臺會…①八〇世帯「登録世帯」。町会員五〇世帯「居住者二〇人」。②八〇〇九〇枚。③有り「中村鋳金工業F」。④M…大1「一尺八寸」・小1、H1。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、神社神輿「四尺」〈宮〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈町〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈礼会〉、〈礼長〉（町会長）。⑦二五〇人。友人・親戚が参加。企業二〇〇三〇人。⑧寄付（奉納金三〇〇万円）、町会費二〇〇万円、繰越金四〇〇万円。⑨平成六年から中央通りの「おまつり広場」を開始。平成二一年に四尺の神社神輿を用意して天皇御即位一〇周年を記念して皇居前へ渡御。ここ一五年くらいで盛んになった。⑩生き甲斐。商売とは別なもの。⑪氏神。ずいぶん隆盛してきた。

神田同朋町会：①一五〇世帯「町会員一〇〇世帯」。②一五〇枚。③有り「永井紙器印刷一F」。④M：大一「二尺三寸・H八」・中一「新調前の大人神輿」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈町〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈宮〉、〈隣〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉、〈青〉、〈婦〉。⑦四〇〇人「町内一五〇人、外二五〇人」。町外：町会員の親戚、氏子外の他町会、同好会など。女性約一五〇人。子ども三〇人。⑧寄付（奉納金三〇〇万円）。⑨二〇年ぐらい前と担ぎ方が変化。ユカコーラのCMに神田同朋町会の神田祭が出たのは二五年前。⑩神田祭はお祭りの象徴。三社祭や鳥越神社の祭りにも負けない権威がある。⑪氏子の象徴。今は商売繁盛の神様。

外神田三丁目金澤町会：①町会員九〇世帯・一〇〇人。②二〇〇枚。③有り「長竹ビル一F」。④M：大一「二尺三寸」・小一「二尺」、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈町〉、〈親睦会〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈隣〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉。⑦大人神輿：二五〇人「町内二〇人、町外三〇人」。同好会二団体。女性：三分の一。⑧寄付（奉納金二五〇万円）。⑨お祭りをやる人が少なくなった。若い人も年寄りもいなくなった。ここ一〇年ぐらいで、金曜日の神輿巡幸と、年に一回の企業との懇親会を開始。⑩お祭りだから地域社会のためにはなる。人がいないから、終わるまで大変。⑪商売、結婚の神様。地域を守ってくれる神様。

神田末廣町会：①町会員二四四世帯。②二五〇枚。③有り「木村末廣苑一F」。④M：大一・小一、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈宮〉、〈隣〉、〈連〉「おまつり広場」、〈町〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦日曜：大人神輿一〇〇人。同好会参加。女性：多い。⑧寄付（奉納金六一〇万四五〇〇円）、神輿奉納金一八八〇〇円。⑨ほとんど変化なし。昭和五二年の神田祭では食券と入浴券を配布。⑩戦後すぐの頃は他に楽しみがなく、団結力があって町会で盛り上がった。現在は町会役員の負担が大きく辛い面もある。⑪大己貴命、少彦名命、平将門。

外神田四丁目目代会：①町会員二〇世帯（町内に通ってる世帯：三世帯）。②七〇枚。③有り「ドンキホーテ前の路上」。④M：大一・中一・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈青〉、〈婦〉。⑦大人神輿二六〇人。町会員の親戚・友人が多い。同好会は四団体・五〇人が参加。

⑧寄付（奉納金二四〇万円）。⑨奉納金はここ二〇年くらい集まりにくい。⑩神田の祭りで神輿を担ぐからやっている。この辺りの同窓会がお祭り。地域文化、地域の交流の場。⑪将門がいるとはいってはいけない。氏神。

外神田四丁目松富会…①八〇世帯。②八〇枚。③有り「柵マコトの隣の一F」。④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈隣〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）、〈青〉、〈婦〉。⑦日曜…大人神輿二五〇人「町内三〇〇〜四〇〇人、町外二一〇〜二二〇人」。町外…友達の良い人が多い。女性多い。⑧寄付（奉納金二三〇万円）。⑨寄付が集まらなくなった。神田市場がなくなってから住んでいる人が少なくなった。⑩役員をやっている人は「また祭り」といった感覚。寄付を集めるのも大変。⑪商売繁盛の神様。

栄町会…①居住者三〇世帯・法人四〇。約一〇〇〇人。②八〇枚弱。③有り（ユータックBAN東邦一F）。④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈御〉、ふれ合い広場、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈隣〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈礼長〉、副〈礼長〉、〈婦〉、青少年部。⑦二三〇人。町内…約三〇〇人「男一〇〇人、女一〇〇人弱、企業二〇人」。同好会二〇〇人「七〜八団体」。女性…町外三〇〇〜四〇〇人。⑧寄付（奉納金約二八〇万円）⑨居住する三〇世帯からの寄付金が多い。祭りの運営に際して、無駄の排除を行い、分業化を進め、地元企業の取り込みを図っている。⑩お祭りは故郷帰りのような場所。⑪氏神。氏子と氏神の距離間は変っていない。

元佐久町会…①町会員五二世帯。②不明。③有り「沼田ビル一F」。④M…大1・小1、H1。⑤〈出〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦約七〇〇人「町内二〇〇人未満、町外五〇〇人」。同好会参加。女性約一〇〇人。子ども一〇〇人未満。⑧寄付（奉納金一七五万円?）。⑨純粋にここで生活している人、町会員でお祭りのお手伝いをしてくれる方が減少し、運営が大変。⑩町会最大のイベント。⑪商売の神様。

神田五軒町町会…①三三〇世帯、六二二人。②四四〇枚。③有り「鍊成公園町会防犯・防災倉庫」。④神輿…大一「二尺七寸」・中一「現在の子ども神輿」・小一、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、神社神輿〈宮〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈隣〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉〈委会〉、〈委長〉〈町会長〉、〈婦〉、〈青〉、子ども会。⑦大人神輿五〇〇人「青年部五〇人、親戚二五〇人、同好会二〇〇人」。子ども五〇人。女性多い。⑧寄付（奉納金約五〇〇万円）。⑨隆盛した。町としての勢いがついた。⑩神田っ子の心意気をぶつける場。⑪神田神社は氏神。

【神田駅東地区連合】宮入実施…六町会。

鍛冶町一丁目町会…①五九世帯・一一〇人。居住二六世帯、町会員三〇〇世帯。②なし。③有り「山梨中央銀行事務所ビル一F」。④M…大一「二尺三寸」・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、宵宮、〈町〉、〈挨拶〉、〈受〉、〈町〉、〈連〉「日本橋」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、祭典運営委員会。⑦町会員一〇〇人、同好会二二〇人、その他一三〇人。金曜一〇〇人程度。土・日曜二五〇～三〇〇人。山梨中央銀行三〇人。小…約三〇人。⑧寄付（奉納金四五〇万円）。⑨特に変化なし。平成二二年から金曜の神輿渡御を実施。⑩町内で生まれ育った人たちにとっての絆。⑪大国主命（大黒様）、少彦名命（恵比寿様）、平将門命の三神。子どもの頃からの氏神。

鍛冶町二丁目町会…①町会員三〇〇世帯「居住者六〇世帯」。②三〇〇～三五〇枚。③有り「秋山ビル一F」。④神輿…大一・小一、D…H一・囃子屋台一「鼓鍛冶」。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈町〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈連〉「日本橋、神田駅周辺」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈実長〉〈町会長〉。⑦五〇〇人「町会役員の知人が多い」。青年部二〇～三〇人（交通整理）。同好会四〇～五〇人。徳力本店一〇人、神田通信機二〇～三〇人。子ども二〇～三〇人。⑧寄付（奉納金約七六二万円）。⑨ここ二〇年～一五年で盛り上がってきた。食べ物と飲み物を充実。⑩町内の親睦として最たるもの。代々受け継がれていく伝統文化。⑪将門さん。江戸の総鎮守。

北乗物町町会…①居住者二三世帯、七〇人。②なし。③有り「旧今川中学校、紺屋町南町会と合同」。④D…一（獅子頭太鼓山車）。⑤〈出〉、〈町〉、〈受〉、〈町〉、〈連〉「日本橋」、〈宮〉、〈町〉、〈入〉。⑥〈委〉。⑦山車約五〇人「子ども・大人」。⑧寄付（奉納金）、町会費。支出二〇〇万円。⑨紺屋町南町会と合同で行うようになった。合同で行うようになって非常に活性化した。宮入は一〇年前頃から開始。⑩地域の活性化になる。⑪商売繁盛の神様。

紺屋町南町会…①三〇世帯（区登録）、居住者一〇世帯・町会員六〇世帯。②八〇枚。③有り「旧今川中学校、北乗物町会と合同」。④M…大「二尺三寸、H一、飯田昭次郎氏作」。⑤〈御〉、〈町〉、〈受〉、〈町〉、〈連〉「日本橋」、〈連〉、〈宮〉、〈町〉、〈直〉。〈出〉、〈入〉。⑥〈委〉。⑦五〇人「町内少数、明治大学学生、知人、担ぎたい人」。⑧町会費七〇万円、寄付（奉納金一五万円）。⑨平成一二年五月に神輿（ダンボール製）を自主制作。神輿制作後、神酒所を設置。平成一五年に最初の宮入を実施。平成一九年から北乗物町と合同の神田祭を実施し、祭りが賑やかになった。合同の神酒所は旧今川中学校に設置。平成二五年に一〇年振りに宮入。⑩地域の「団結の象徴」。神輿は町会を一つにするシンボル。⑪大黒様、恵比寿様、将門様。

富山町町会…①七〇世帯（区登録）、町会員一三世帯。②五〇枚。③有り「神田通信工業一階」。④M…中一（S三〇）・小一、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈町〉、〈宮〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉、青壮年部、〈婦〉。⑦土曜一五〇人「町内企業五〇人、同好会九〇人、紺屋町北部町会約一〇人」。⑧寄付（奉納金一五〇万円）。⑨お祭りに対する意識が変化。⑩地域の守り神として地域を活性化するためにはお祭りが必要。⑪大黒様。氏神様。

神田須田町二丁目町会…①四一四世帯・五七六人（区登録）、町会員一五〇世帯。②未回答。③有り「柳森神社前」。④M…大「H二五」・小一、D…H二、囃子屋台「柳囃子…町会文化部」。⑤〈御〉、〈宵〉、〈町〉、〈受〉、〈挨〉、柳森神社〈宮〉、柳森神社例大祭参列、〈返〉、〈宮〉、〈直〉。⑥〈委〉。⑦金曜一〇〇人、土曜二〇〇人、日曜六〇〇人。⑧寄付（奉納金五〇四万円）、町会費「大祭費」二四〇万円。⑨一番大きく変わったのが二〇数年前から金曜日のお

祭りをやるようになったこと。⑩地域活性化にはつながる。それぞれ半纏が違うので自分の町会への愛着が湧く。⑪江戸の氏神様。

【岩本町・東神田地区連合】宮入実施…七町会、(参考)岩本町二丁目岩井会。

岩本町三丁目町会…①町会員一八〇世帯「町会役員五〇世帯」。②五〇〇枚。③有り「山崎製パン本社ビルF」。④M…大一「二尺五寸」・中一・小一。H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨〉、〈町〉、柳森神社〈宮〉、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈返〉、〈直〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委員長〉、〈実長〉、〈婦〉、〈青〉。⑦参加者…元町内二〇〇三〇人、山崎製パン三〇〇人「土・日」、本間組二〇人、田島ルーフィング二〇人、貝印一〇人、インターネット応募三〇〇四〇人、和泉小学校教員。同好会としての参加なし。女性多い。⑧寄付(奉納金七〇〇万円を超える)。⑨大きな変化なし。約二〇年前、金曜に宵宮を実施。宵宮は町内の平成通りに、東神田町会、東神田豊島町会、東紺町会、大和町会などの神輿と連合渡御。しかし、担ぎ手が少なくなり廃止。⑩町会の付き合いも神田神社、神田祭があるから成立。⑪平将門、大黒様、恵比寿様。神田神社そのものが持っているエネルギーが大きい。

神田松枝町会…①二二〇世帯「昔からの住人七〇世帯、マンション住民一五〇世帯」、町会員一五〇世帯。②二二〇枚。③有り「ハープ神田ビルF・駐車場」。御飯屋(山車小屋)…神酒所の隣。④M…大一「二尺一寸〇二寸」・小一、D…「羽衣」山車一。⑤〈出〉、〈御〉、〈宵〉、〈町〉、〈挨〉、〈受〉、〈連〉「岩一・東紺・松枝・大和」、〈M〉・D、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委員長〉、〈婦〉、〈青〉。⑦大人神輿二二〇人。同好会約一五人。山車…子ども七〇人「お母さんも一緒に参加」。神輿・山車の参加者合計二二〇二二〇人。⑧寄付(奉納金四三〇万円)。⑨祭りの内容は変化なし。お祭りに参加する人は減らない。子どもの参加者(マンションの知人)増加。山車の車輪を直してから昭和五五年頃、宮入を開始。⑩山車は松枝町会の誇り。この祭りを継承したい。お祭りをすると防災や地域の絆につながる。⑪地域の氏神様。

岩本町二丁目岩井会…①一八〇世帯、町会員二〇〇三〇世帯「町会活動に参加している世帯一〇世帯」。②不明。③有り「岩本町二丁目児童遊園」。④M…中一、D…「桃太

郎「山車一。⑤〈出〉、〈展〉「M・D」、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、宮入迎え、〈直〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委員長〉（町会長）、〈実長〉（町会副会長）、〈青〉（二人）。⑦五人「土曜一五〇一人、日曜一五〇一人」。町会長の会社員五〇六人。セブンスイレブン…店長以下二二〇三人。⑧町会費（約一〇〇万円）。従来は寄付（奉納金）。⑨平成二五年に二〇年振りに神酒所を作り、神輿を組んだ。⑩地域の人たちとつながりを深める場。⑪平将門。

神田大和町会…①昔からの住民六〇世帯・約一五〇人。②約三〇〇枚。③有り「ほほえみプラザーF」。④M…大「二尺一寸」、小「一尺一寸」。H「山車人形「天鈿女命」一。⑤〈出〉、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、〈宵〉、〈町〉、〈連〉「岩一・東紺・松枝・大和」、〈宮〉、〈返〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈礼長〉（町会長）、〈実長〉（青年部長）。⑦町会員約一五〇人、親戚・友達一〇〇人、同好会一三〇人。⑧寄付（奉納金三五〇〇四〇〇万円）。⑨昔からの町会員が減り、祭礼を一町会で運営するのが困難。⑩町会員、知り合いが一同に集まりコミュニケーションが取れる。⑪一の宮に大己貴命、二の宮に少彦名命、三の宮に平将門命。住民のすべての心の支え。

神田東紺町会…①町会員二〇世帯・四〇〇五〇人「昔からの住民」。②二〇〇枚前後。③有り「金山神社」。④M…大「二尺」、小「一尺二寸」。H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈宵〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈連〉「岩一・東紺・松枝・大和」、〈宮〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委員長〉、〈実長〉、〈婦〉、〈青〉。⑦土曜一五〇〇二〇〇人。日曜三〇〇〇人「町内二〇人、神輿同好会五〇人。大半が町内会員の同級生、職場の仲間」。同好会二〇三団体。⑧寄付（奉納金三〇〇万円）、繰越金一五〇万円。⑨昔からの住人が減り、町内の門付は年々減少。三〇年前に宮入を開始。宮入の実施後、参加者は増加。⑩町会にとって最大のイベント。お祭りがあるから町会がまとまっている。⑪平将門。商売繁盛。

岩本町一丁目町会…①町会員約一二〇世帯「マンションを含むと五〇〇世帯」。②二五〇枚。③有り「山崎金属工業ビルF」。④M…大「二尺三寸」、小「一尺八寸」、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、門付、〈宵〉、〈町〉、〈受〉、〈挨〉、〈連〉「岩一・東紺・松枝・大和」、〈宮〉、〈連〉「おまつり広場」、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈実会〉、〈青〉、〈婦〉。⑦金曜…町内約五〇人、町会外約一〇人、同好会約五人。土曜…町内約四〇人、町会外約二〇人、同好会約二〇人。日曜…町内約五〇人、町会外約八〇人、同好会約

七〇人。⑧寄付（奉納金約三〇〇万円）。⑨神輿・曳き大鼓を祭礼前に町内に展示。金曜午後に町内へ神輿行列、金曜夕刻に法人対象の神輿渡御。土曜の近隣町会との連合渡御の開始。日曜終了後の「打ち上げ会」の簡素化。平成一五年に神輿を載せる台車を作る。⑩コミュニティの再確認の場。お祭りは町会の最後の抛り所。⑪大己貴命、小彦名命、平将門命。氏神様。

東神田町会…①三五〇〜三六〇世帯「H二七・五五四世帯」。②三三〇枚「H二七・五五四枚+^a」。③有り「都立一橋高校」。④M…大「二尺七寸」・中「一尺三寸」、H一、獅子頭一対。⑤〈出〉、〈御〉、〈町〉、前夜祭、お子様イベント、〈挨〉、〈受〉、〈宮〉、〈直〉、〈返〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈実委〉。⑦土曜五〇人、日曜三九六人。六団体九六人。（水海道・栄町仲睦青年会四三人、外神田松住町会八人、一橋高校神輿OB会二二人、新宿・諏訪睦七人、足立区前保木間青年部六人、神和睦二〇人）。⑧寄付（三九〇万円）。⑨ここ五〜六年で町内構成が変化し、マンションの住民が増加。⑩お祭りを行うことによって町内の活性化、伝統の継承がなされる。一大イベント。⑪平将門公、明神様は心の抛り所。善意の象徴。

東神田豊島町会…①居住者一二〇〜一三〇世帯「マンションを含むと四〇〇〜四五〇世帯」、町会員二二四世帯。②二〇〇〜二五〇枚。③有り「龍角散ビルF前」。④M…大一・小一、H一、獅子頭一対。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、前夜祭、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委員長〉、祭実行委員長（青年部長）、〈青〉、〈婦〉。⑦土曜…大人神輿一〇〇人「担ぎ手五〇〜六〇人、町内の支える人四〇〜五〇人」、子ども神輿二〇〜三〇人。日曜…大人神輿三〇〇人「同好会二五〇人。町会関連三団体…三〇〜四〇人」。⑧寄付（奉納金三三七万四千元）、町会費六〇万円。⑨祭りのやり方は一緒に変化はない。町内に銀行が多かった時代、奉納金は四二〇万〜四三〇万円になったこともあった。統廃合で移転後、その分が減少。⑩伝統であり、慣習。祭りによって町内がまとまる。⑪平将門ほか三神。神田神社は下町につながる神社。

【秋葉原東部地区連合】宮入実施…五町会。

神田佐久二平河町会…①町会員二三〇世帯。②二〇〇枚。③有り「森羅紗店一階」。④M…大一「二尺三寸」・小一「二尺三寸」、H一「胴二尺三寸、台四尺〇五尺五寸」。⑤〈出〉、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈宵〉「〔連〕」、〈宮〉、〈返〉、〈直〉、〈入〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈礼長〉、副〈礼長〉、〈青〉、〈婦〉。⑦大人神輿…土日約五〇〇人（H一九九一年…土・二一九人、日・三〇七人）。アルバイト三人。同好会五団体。UFJ銀行八人、三協化成一三人、パセラ一人。子ども五二人。女性多い（宮入の際、大人神輿の前棒は全部女性）。⑧奉納金二九八万三千円十町会積立予備金（祭礼準備金）。⑨大きな変化なし。土曜の佐久間学校通りに近隣町会の神輿が集合する「宵宮」は三〇年前から開始。宵宮は青年部長主体で青年部費で用意。⑩町会の皆さんに感謝の気持ちが残るのが祭り。町内巡幸が祭り。⑪平将門。

神田佐久間町三丁目町会…①四三一世帯、六九九人「町会員三三〇世帯」。②三三〇枚。③有り。④神輿…大一・小一。H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈宵〉「〔連〕」、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈実長〉（副会長）、〈青〉、〈婦〉。⑦日曜…大人神輿三〇〇人「町内一五〇人、同好会一〇団体・一五〇人」。⑧寄付（奉納金五三〇〇〇万円）。⑨変化なし。住んでいる人が減少。会社の従業員が神輿を担がなくなっている。金銭的には増加。⑩町会にとってはなくてはならない行事。⑪平将門、商売の神様。

神田佐久間町四丁目町会…①人口二〇〇人（登録人口）。②不明。③有り「佐久間公園」。④M…大一・小一。H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉。⑦大人神輿三〇〇〇〇三二〇人「地元の関係一〇〇人、木場グループ一〇〇〇〇二二〇人、北千住三丁目一〇〇〇人」。子ども神輿二〇〇〇三〇〇人「町内会の友達、和泉小学校の子ども」。⑧寄付二〇〇万円弱、繰越金三〇〇万円。⑨お祭りに対して、今まではどちらかという否定的。ヨソ（外部）の力で神輿を出すのは町内の祭りではないと考え、神輿の巡幸は行わず、神酒所に飾るのみの時期があった。その後、平成二五年に神輿巡幸を復活し、宮入を実施。⑩何ともいえない。かつての町会最大のイベントは旅行。⑪みんな氏子だと感じ、いい意味でプライドを持っている。

東神田三丁目町会：①四一九世帯、七〇六人「このうち町会員は半分強。マンション七棟中三棟が町会に加入」。②三〇〇枚。③有り「萩原ビル一F」。一〇年以上この場所。
④M：大一「H一六」・小一、H一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、〈縁日〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）、〈実長〉（副会長）、〈青〉、〈婦〉。⑦土曜：大人神輿一〇〇人、子ども神輿・曳き太鼓五〇人。日曜：大人神輿三〇〇人。町内六〇〇六五人「担ぎ手二〇〇二五人、役員二〇人、婦人部二〇人」。氏子外の町会関係者が多い。同好会四〇人。⑧寄付（奉納金二六四万一千円）、町会費（祭礼準備金五〇万円）。三五〇万円の支出。⑨平成に入ってからマンション化。大人神輿はレンタルで借り、五回（一〇年くらい）、巡幸。平成二年から平成五年の間に大人神輿を新調。八〇九年前から、町会長のマンション一Fに神輿展示。⑩若手の交流の場。
⑪平将門、氏神様。

神田和泉町町会：①二〇〇世帯、三〇〇人。②なし。③有り「小林ビル」、御飯屋：関口記念和泉会館一F。④神輿：大一・中一・小一。⑤〈出〉、〈展〉、〈御〉、〈受〉、〈挨拶〉、〈町〉、〈宵宮〉〈連〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委員長〉（町会長）、〈実委〉。⑦土曜：大神輿一八〇人「町内四〇〇五〇人、町外一三〇〇一四〇人」。町外は同好会、YKK・キリンビバレッジ・凸版印刷の社員。中・小神輿：子ども四〇人「里帰りの子ども、和泉小学校が参加」。女性約二〇人。⑧寄付（奉納金約七〇〇万円）、町会費五〇〇六〇万円。⑨ここ二〇〇三〇年で盛り上がってきた。担ぎ手の内容が変化し、和泉町に縁のある人が多い。⑩祭りをやるために町会がある。祭りがあるお蔭で町のまとまりができる。大きな祭りをやる一つの絆。⑪三体のご神体。氏神様。

【日本橋一地区連合】宮入実施：一町会。

室町一丁目町会：①町会員一七〇世帯「居住者一〇五世帯」。②約一七〇枚。③有り「三越一F」。④M：大一・小一、D：加茂能人形山車一。⑤神輿搬出、〈展〉「M・D」、〈御〉、〈町〉、〈受〉、〈宮〉、〈返〉、〈神輿搬入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈礼会〉、〈礼長〉（町会長）、〈実長〉（青年部長）、〈青〉、〈婦〉。⑦土曜：同好会一〇五人、六青会三三人、近隣町会七五人、企業二二六人、町会員一七四人、藤岡市二九八人。日曜：同好会「宮入九二人、町内渡御一六二人」、六青会「宮入一七人、町内渡御四八人」、近隣町会「宮入四〇人、町内渡御七〇人」、企業「宮入三二人、町内渡御二二二人」、町会員一九八人。⑧寄付（奉納金）、町会費、青年会費、弓張提灯の収益金、献灯料。⑨町会の人が祭りに積

極的になってきた。お祭りをやるようになってから和も広がり、「橋渡し」の場。⑩町会の一番大きな行事で、みんなが仲良くなる一番の場。⑪将門様、大黒様。神田神社は庶民に開かれた神社。

【日本橋三地区連合】宮入実施…二町会「H二七・三町会」。

蛎一共和会…①七〇〇世帯（住民登録）、町会員約二〇戸（マンション以外）。②二三〇枚。③有り「庵原ビル隣の駐車場」。④M…大1・小1、H1。⑤神輿搬出、〈御〉、〈町〉、〈挨〉、〈受〉、〈宮〉、〈連〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈青〉、女子部。⑦大人神輿一五〇〜一七〇人「宮入の時は少なく、日曜が多い」。町内マンション住民の参加多い。カルチャースクール受講生・関係者三〇名、近隣町会二〇名弱。女性多い。⑧寄付（奉納金二六〇万）。⑨平成二一年に宮入を開始、平成二五年も実施。⑩単なるイベントではなく、宮入で神社につながっている。⑪明神様はやっぱり平将門。

蛎殻町東部町会…①七四六世帯・人口一三二三人（区登録）。町会員約三三三世帯。②三〇〇枚。③有り「川本氏ビル」F。④M…大1「H二二」・小1、H1。⑤神輿搬出、〈展〉、〈御〉、〈町〉、〈挨〉、〈受〉、〈連〉「八町会」、〈隣〉、〈返〉、神輿搬入、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）。⑦土曜二〇〇人、日曜二〇〇人「町内五〇人弱、町外一五〇人」。同好会一〇団体。子ども…土曜一〇〇人「鯨の曳き物を曳く」・日曜一五〇人「町内は少ない」。⑧寄付（奉納金四五〇万円）、繰り越し金、門付祝儀。⑨小さい神輿のときは町内の関心が低かった。平成二二年に大神輿を新調してから参加者が増加。担ぎ手を外から頼むようになったが、地域のお祭りではなくなってきた。平成二二年に宮入を始め、平成一七年、平成二二年に宮入。⑩一年おきでは多すぎる。三年おきにした方がいい。⑪将門のイメージが強い。

人形町二丁目三之部町会…①四一八世帯（住民登録）。②四二〇枚。③有り「米澤芳彦氏ビル」F。④M…大1・小1、H1、獅子頭一対。⑤神輿搬出、〈御〉、〈町〉、〈受〉、〈挨〉、〈宮〉、〈連〉、神輿搬入、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈青〉、〈婦〉。⑦大人神輿二〇〇人「町内五〇人、町外一五〇人」。町外…同好会。⑧寄付（奉納金三五八万円）、町会

費（祭礼準備金）ほか。支出総額三八八万円。⑨大きな変化なし。宮入は平成二五年に開始。⑩江戸っ子の楽しみ。子どもたちも楽しめる。⑪神田祭の神社。

【日本橋四地区連合】宮入実施…二町会。

東日本橋三丁目橋町会…①町会員九四〇世帯「マンション一〇棟で五五〇戸」。②二七〇枚。③有り「戸田商店一F」、御飯屋「橋モーター商会一F」。④M…大一・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈宵〉、〈町〉、〈受〉、〈隣〉「H二五のみ」、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）。⑦土曜…町内五〇人、担ぎ手一五〇人。マンションの人や会社員が参加。日曜…町内五〇人、担ぎ手二〇〇人。同好会は団体の参加なし。友人・知人が多い。女性約二〇%。子ども…一〇〇人前後。⑧寄付（奉納金二五〇〜二六〇万円）、祭礼積立金（町会費）。計四七〇〜四八〇万円。⑨こころ一〇年くらいでマンションの街に変化。お祭りのときに、お店のシャッターが閉まっているところが多く、ギャラリーも少ないなど、お祭りの雰囲気の変化。宮入は五〜六回実施。⑩町会としてはなくてはならない催し。老若男女が集まって協力する場所、親睦の場は他にない。マンションの人たちが参加するきっかけにもなる。⑪楽しめる神社。資料館もあり、面白い行事もあり親しめる。

東日本橋二丁目町会…①一一〇〇世帯、二三〇〇人。②五〇〇枚。③有り「菓研堀不動院」。④M…大一・小一、H一。⑤〈出〉、〈御〉、〈挨〉、〈受〉、〈連〉、チビッコ縁日、〈町〉、〈宮〉、〈返〉、〈入〉、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）。⑦大人神輿六〇人「町内四〇人、町外二〇人」。町外…東京理科大学学生。⑧寄付（奉納金四〇〇万円）、町会費一〇〇万円。⑨一二年前に舟渡御を実施。⑩地域の連携がお祭り。⑪平将門。

【日本橋五地区連合】宮入実施…二町会。

浜町二丁目町会…①九七六世帯「町会に大半加入」。②二五〇〜三〇〇枚。③有り「浜町コミュニティルーム」。④M…大一・小一、H一。⑤神輿搬出、〈展〉、〈御〉、〈町〉、〈挨〉、〈受〉、〈町〉、〈宮〉、〈連〉「明治座前」、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）、祭担当責任者（副会長）、浜一会「〈青〉・〈婦〉合同」。⑦大人神輿二五〇人「町内

八〇人、町外一七〇人」。宮入八五人。同好会七団体。子ども五〇人。女性二割。⑧寄付（奉納金二〇〇万円）、町会負担金一〇〇万円。⑨地元の人が減少し、マンションの住民が増加。平成二五年から宮入を開始。⑩町会が一つにまとまる二年に一度の機会。お祭りは他の行事と別もの。⑪将門のイメージが強い。氏神様。

浜町三丁目東部町会：①九一〇世帯（区登録日二七一月）。町会員約八一九世帯。②二五〇枚。③有り「大山高志氏宅・車庫」。④M：大一・小一、H一。⑤神輿搬出、〈御〉、〈挨拶〉、〈町〉、〈受〉、〈宮〉、〈連〉「明治座前」、神輿搬入、〈直〉。⑥〈委〉、〈委会〉、〈委員長〉（町会長）。⑦大人神輿：七〇〜八〇人「町内四〇〜五〇人、町外三〇人」。同好会三〜四団体。築地町会、菊一町会（亀戸天神）から参加。子ども八〇〜一〇〇人。女性約二〇人。⑧寄付（奉納金二五〇万円）。⑨参加者は変らない。寄付金は減少（最盛期四〇〇万〜五〇〇万円）。マンションの住民が増加。宮入は平成二五年から開始。⑩氏子の中で一番端の町会には神田祭をがんばって実施。⑪今は将門のイメージは強くない。

【資料二】平成二七（二〇一五）年神田祭（御遷座四〇〇年奉祝大祭）・町会別祭礼行事実施状況

本調査は、國學院大學大学院・石井研士教授のゼミナール「宗教学研究Ⅱ・宗教学特殊研究Ⅱ」「以下、石井ゼミ」の博士課程OBの筆者（國學院大學研究開発推進機構P D 研究員・当時）が実施した事前調査（平成二七年四月二六日〜五月八日）をもとに、平成二七年度に石井ゼミを受講する大学院生のうち、大道晴香、古山美佳、田口萌、永田昌志、守屋和彦、千葉統彦、修士課程OBの大久保衣純と大和友大朗、筆者の計九人が「石井ゼミ神田祭調査班」として、五月九日・一〇日の二日間、地区連合ごとに分担して調査を実施した。

調査方法は、観察記録が中心で筆者の事前調査で判明しマッピングした各町会の神酒所へ赴き、町会関係者の許可を得て、神酒所や芳名板、行事予定などの写真記録、今まで実施されなかった曳き太鼓（太鼓）の製作年代の把握、参加者数については可能な範囲でインタビュー調査を実施した。調査後、各調査者の記録写真と調査メモを集め、各

町会の実態を示すデータとして筆者が整理し、執筆したものである。

調査の分担は、大道・古山・田口が神田中央連合と中神田十三ヶ町連合、永田・守屋・千葉が外神田連合と秋葉原東部地区連合、大久保・大和が神田駅東地区連合と岩本町・東神田地区連合、筆者が神田の全エリアと日本橋一地区連合と五地区連合を担当した。ただし、筆者は九日は附祭に参加したため、一〇日の調査が中心となった。

資料篇にまとめるに当り、地区連合ごとに分類し、町会によっては神酒所の設置や祭礼の象徴などがない場合、あるいは調査時に未確認であった町会は祭典委員のみを挙げている。

【神田中央連合】

神保町一丁目町会

- ・祭典委員（役割動員）…安野浩史（町会長）、岡本吉司、萩原憲一、土島豊裕「四人」
- ・神酒所…神保町三井ビルディングF（神田神保町一―一〇五）、御仮屋…神保町三井ビルディング前
- ・祭礼の象徴…M大一・中一・小一、H一「神保町一丁目南部、昭和二七年五月」
- ・一般動員…大人神輿約四〇〇人、子ども…九日山車約一〇〇人・一〇日約二〇〇人「奉納金より九段二丁目青年会、むさし神輿會など、奉納品より亀市天神睦会、亀戸勇祭會、亀神睦、錦糸若睦會など」
- ・行事経済（奉納金）…六六二万五千円+² 「五月一〇日一七時二二分掲示分より」
- ・祭礼行事（主な行事）…五月三日（日）御仮屋工事 九時集合、奉納板 設置 祭典実行委員全員／八日（金） 一五時 神輿御霊入れ式、一八時半〜 青年神輿 町内渡御／九日（土）八時 神酒所集合、八時半 鳳輦巡行 駿河台下、一四時〜 子供神輿・山車、一六時〜一九時終了 青年神輿／一〇日（日）神田神社 宮入 九時 青年神輿 御神酒所 出発、子供神輿 連合にて一基出す、一五時半頃 子供神輿・山車、青年神輿 一六時半〜一九時終了（一七時頃より女神輿、すずらん通りと周辺を女性だけで大神輿を担ぐ）、一九時 神輿御霊返式／一一日（月）御神酒所かたづけ 祭典委員全員 九時集合（「神田明神大祭行事表」「平成二七年神田祭 お神輿を担ぎませんか 神保町一丁目町会」より）

神田猿楽町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 鎌倉勤（町会長、地区代表）、渡辺圭一、小林博高「三人」
- ・ 神酒所… 明治大学一〇号館前（猿楽町一・六）
- ・ 祭礼の象徴… M大「平成二七年」・小一、H一「皇太子殿下御降誕記念、昭和九年五月」
- ・ 一般動員… 参加者約四〇〇人（弁当の数三〇〇以上）「奉納金より、桑都勇会、三一会、雄健会、成宗睦、粹紫輦、酔祭会、西神田町会青年部一秀会、七福神睦、高砂神輿会など。奉納品より、羽田鳳珠会など」

・ 行事経済（奉納金）… 三四六万五千円＋² 「五月一〇日一―一時三五分揭示分より」

- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金）神酒所開き 役員は一六時神酒所集合、「神輿」御霊入れ 一六時半頃の予定、宵宮 九月一〇日に参加できない勤め人の方が対象で一八時から神輿を担ぎます／九日（土）神幸祭 役員は七時神酒所集合 神田神社鳳輦町内渡御は九時一〇分頃です、「大神輿」町内巡行 一三時半集合 一四時出発、「子供神輿」「山車」町内巡行 一四時神酒所前集合、接待「大人神輿」豊島屋・浅野屋・石毛食糧品店、三笠産業㈱、接待「子供神輿」豊島屋・富多葉・片口土木 役員は正午に神酒所集合／一〇日（日）「大神輿」宮入 神田神社参拝（神田中央連合）一〇時半 錦華堂前出発（集合時間八時半、九時三五分出発「時間厳守」、集合場所 神酒所 役員は七時集合「朝食の用意あり」）、「子供神輿」九時集合 お茶の水小学校↓宮入り、「子供神輿」「山車」町内巡行 一五時 神酒所前集合、「大神輿」宮入り後 町内巡行、接待「大人神輿」町会婦人部有志（三井住友前） 水のトラブル・クレオール／一歩、接待「子供神輿」「山車」虎臣、伊藤クリーニング店、「御霊返し」一八時半頃の予定／一一日（付き）庫入れ 役員は六時 神酒所集合「日程表」より
- ・ 備考… 子供山車の接待… 一一件。

錦町二丁目町会（錦連合）

- ・ 祭典委員（役割動員）… 南部明夫（町会長）、紅林公克、丸山幹雄「三人」

・神酒所「錦連合」…ちよだプラットフォームスクエア前（神田錦町三丁目二）

・祭礼の象徴…M大

・一般動員…錦連合の参加者…日曜七五〇人（町会一五〇人、参加者五〇〇〜六〇〇人）「奉納金より、駒込神明睦、荒木町青年会、芝濱睦会、櫻水會、扇壽會など」

・行事経済（奉納金）…「錦連合で」七四二万三千元「五月一日一七時四分揭示分より」

・祭礼行事（主な行事）「錦連合」…五月八日（金）一七時〜前夜祭（一一時四五分〜二〇時 神田錦町連合会夕べの会）／九日（土）宵宮 一二時半〜一四時 子供山車、

一六時半〜一九時半／一〇日（日）宮入 八時半集合「九時五〇分 子供神輿 御茶ノ水小学校前集合」八時四五分出発〜一七時二〇分神酒所帰着（錦連合 神田祭）ポ

スター、巡幸図より）

・備考…錦連合で一つの神酒所

錦町三丁目町会（錦連合）

・祭典委員（役割動員）…前田智彦（町会長）、倉田茂樹「二人」

・神酒所…ちよだプラットフォームスクエア前（神田錦町三丁目二）

・備考…錦連合で一つの神酒所。

錦町三丁目第一町会（錦連合）

・祭典委員（役割動員）…堀井市朗（町会長）、田中宏、伊藤一郎「三人」

・備考…錦連合で一つの神酒所。

小川町二丁目南部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：神谷誠一（町会長）、布河谷文孝、岡田実〔三人〕

小川町二丁目南部五番地会

- ・ 祭典委員（役割動員）：横山秀樹（代表）

小川町三丁目南部町会（錦連合に参加）

- ・ 祭典委員（役割動員）：仲谷芳久（町会長）
- ・ 一般動員：錦連合の参加者：日曜七五〇人（町会一五〇人、参加者五〇〇〜六〇〇人）〔奉納金より、駒込神明睦、荒木町青年会、芝濱睦会、櫻水會、扇寿會など〕
- ・ 行事経済（奉納金）：「錦連合で」七四二万三千元〔五月一〇日一七時四分掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）：ちよだプラットフォーム 五月八日（金）前夜祭一七時〜※小雨決行、九日（土）宵宮 一六時半出発、一〇日（日）宮入 八時四五分 出発／五
十稲荷 五月七日（木）半纏貸出一二時〜一五時、八日（金）半纏貸出一二時〜一五時、一〇日（日）半纏返却 一八時〜一九時／たちばな・Y a 五月一日（金）半纏
申し込み一七時まで／『奉納板』はちよだプラットフォームになります〔五十稲荷の千代田区掲示板（神田小川町三十九）に掲示された貼紙より〕
- ・ 備考：錦連合で一つの神酒所。

小川町三丁目西町会（小川町連合）

・祭典委員（役割動員）…岩崎與士（町会長）、松島健、田近恭一「三人」

・神酒所…富士見坂入口 三井住友銀行神保町ビル前（神田小川町三、一二）・テント

・祭礼の象徴…M大一

・行事経済（奉納金）…五〇四口＋四万五千元「五月一〇日―一時四〇分揭示分より」

・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）七時 御仮屋設営 幸徳稲荷集合、九時 神酒所設営 駐禁ビラ貼り その他 神前設営 赤飯・神札・神輿渡御案内配布、一六時

半 神輿御霊入れ 3西↓御仮屋↓北3↓幸徳、一八時 直会 神酒所 青年部神輿移動あり／九日（土）八時 青年部 御仮屋集合、八時二〇分 神幸祭参加者神酒所集

合↓淡路町交差点、八時五〇分 神幸祭・鳳輦引き受け（淡路町交差点・三井住友銀行前）、一一時 山車町内巡行 3西神酒所 一〇時四五分集合 3西↓北3↓北2↓

小川広場 お菓子配布、一三時半 神輿渡御参加者 神酒所集合 町会長挨拶 その後、揃って御仮屋へ、一三時四五分 宵宮 御仮屋集合、一六時半 神輿接待、一七時

神田中央連合・神輿四基 駿河台下交差点、一九時 直会 アミ／一〇日（日）八時 神輿渡御参加者 神酒所集合 町会長挨拶 その後、揃って御仮屋へ、八時二〇分 御

仮屋 おにぎり・味噌汁振る舞い、九時一五分 中央連合集合場所へ出発、九時三五分 中央連合集合 お茶の水小学校前、一〇時半 宮入道中出発、一二時半 神輿宮入、

一三時一五分 昼食 小川広場、一四時 神田中央連合神輿四基 駿河台下交差点、一五時一五分 3西神酒所神輿休憩・接待 その後、神酒所解体・富士見坂提灯片付け

その他、一七時一〇分 神輿納め 幸徳稲荷、一九時 反省会・有志 億万（平成二十七年神田祭・小川町三丁目西町会日程表）より

小川町北部一丁目町会（小川町連合）

・祭典委員（役割動員）…三谷健太郎（町会長）、大井明「二人」

・神酒所…宝ビル前（神田小川町一―六）・テント

・行事経済（奉納金）…五六口「五月一〇日―一六時一九分揭示分より」

小川町北部二丁目町会（小川町連合）

- ・ 祭典委員（役割動員）…横田達之（町会長）、小端協一、佐宗秀行「三人」
- ・ 神酒所…幸徳稻荷神社（神田小川町二・一四）
- ・ 祭礼の象徴…M小一
- ・ 行事経済（奉納金）…九〇本「[五月一〇日一六時頃掲示分より]」
- ・ 備考…神酒所には「神田神社」と「幸徳稻荷大明神」の掛け軸を祀り、小川町の駒札を付けた神輿一基を飾っていた。

小川町北三町会（小川町連合）

- ・ 祭典委員（役割動員）…小林泰治（町会長）、石津勝男、高橋保夫「三人」
- ・ 神酒所…東京特殊紙業(株)・三立商事(株)ビルF（神田小川町三・二八）
- ・ 祭礼の象徴…M小一
- ・ 備考…子ども神輿があるが神酒所に飾るのみ。この子ども神輿は、小川小学校があった時は婦人部が担いでいた。

小川町連合

- ・ 御飯屋…お茶の水仲通り「石津ビル（神田小川町三・二）前、平和堂ビル（神田小川町二一四）前」・テント
- ・ 祭礼の象徴…（小川町連合）M大一「神輿をつくる会、昭和六二年五月」
- ・ 一般動員…参加者六〇〇〜七〇〇人
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）七時 幸徳集合 御飯屋設営 神輿飾り、淡1神酒所挨拶（担当は当番町会会長・青年部長、酒一対、酒の手配は北2）、一六時半 御

霊入れ 3西↓御飯屋↓北3↓幸徳(車なし) 車代 幸徳から他町会への車は手配)、一八時 御飯屋集合、神輿をF・クレストビルに移動/九日(土)八時 御飯屋集合
神輿を移動、八時五〇分 御鳳輦引受け(淡路町交差点) 高張り持参、神幸祭後 隣接町会神酒所廻り(中央連合三ヶ所、賭け紙付き手拭二本、錦連合、神保町、猿楽町 担
当 各町会青年部長 車なし)、一一時〜一二時:子供山車 一〇時四五分 3西神酒所集合 3西↓北3↓北2↓小川広場、一三時四五分 宵宮 御飯屋集合 お神酒、
一四時二〇分 出発 祭典委員長挨拶、一七時 駿河台下交差点、一七時四五分 宵宮 納め 御飯屋 神輿移動 (神輿お守り) 一三時〜 北1町会、一五時〜 北2町
会/一〇日(日)八時二〇分 集合 御飯屋(味噌汁・おにぎり)、九時 出発式 祭典委員長垂視察、九時一五分 中央連合集合場所へ移動、九時三五分 中央連合集合
お茶の水小前 出発式(お神酒)、一〇時半 出発、一二時半 神田明神宮入、一三時一五分 昼食 小川広場、一四時 駿河台下交差点、一七時一〇分 幸徳稲荷神輿納
め 片付 (神輿お守り)八時〜 北1町会、一一時〜 3西町会、一四時〜一七時 北3町会「平成二十七年神田神社・幸徳稲荷神社大祭日程」より」

【中神田十三ヶ町連合】

内神田美土代町会

- ・ 祭典委員(役割動員)：安川博(町会長)、熊谷晃一、針谷忠男「三人」
- ・ 神酒所：泉国際産業ビル1F(神田美土代町三―三)
- ・ 祭礼の象徴：M大1・小1、H1「昭和九年五月」
- ・ 一般動員：神輿の担ぎ手は全部で三〇〇〜四〇〇人。企業で募集を掛けたりするほか、神輿会から参加する。子ども神輿には一〇人ほどしか参加しない。この地域は住人が少ないため。
- ・ 行事経済(奉納金)：三五〇万三千元「五月九日一〇時七分掲示分より」

司一町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…坂井重正（町会長）、栃木一夫、青木繁幸〔三人〕
- ・ 神酒所…三立社ビル（内神田一―一六一八）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和九年五月〕
- ・ 一般動員…大人神輿約三五〇人、子ども神輿約三〇人
- ・ 行事経済（奉納金）…四五二万円十^〇〔五月九日二時二〇分頃揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）七時 神輿出し（吉沢ビル前） 神田明神、一五時半 神酒所集合、一六時 御魂入れ／九日（土）大人神輿…九時 神酒所集合、九時五〇分鳳輦巡行引き渡し（美土代町交差点）、一三時 神酒所集合、一三時半 町内廻り出発、一七時 八町会神輿（多町交差点） 子供神輿・山車…第一回 一三時半、第二回一五時半／一〇日（日）大人神輿…八時半 神酒所集合、九時 神酒所出発、九時半 不動通り集合（宮入三番）、一〇時 出発（連合渡御） 子供神輿・山車…子供神輿参加者 一〇時半 神酒所集合（大人神輿と一緒に連合渡御に参加）、山車 子供神輿が連合から帰ってきて一緒に回る 一四時半頃／一日（月）七時 神酒所集合（かたづけ）〔司町二丁目町会神田祭日程表〕より〕／五月九日（土）町内渡御 一三時半出発 神酒所↓美土代町神酒所↓一四時半 鎌倉町神酒所↓一六時二〇分 旭町神酒所↓一七時 多一神酒所↓一七時半 司二神酒所↓一八時 神酒所〔司一町会御神輿（町内回り）コース〕より〕

司町二丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…大井孝一（町会長）、堀井進、向井靖夫〔三人〕
- ・ 神酒所…神田児童公園
- ・ 祭礼の象徴…M大一〔宮本重義、昭和二十七年五月〕・小一、H一〔昭和二十七年五月〕
- ・ 一般動員…〔奉納金より、紅都連、祭好会・関係者など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…四七九万七千円〔五月九日一五時四五分揭示分より〕

内神田鎌倉町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 斎藤光治（町会長）、柴田明雄、田熊清徳「三人」
- ・ 神酒所… 尾嶋公園（内神田一―五―五）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一「太鼓の上に天狗の人形を付ける、昭和二七年五月」、獅子頭一対
- ・ 一般動員…「奉納金より、富貴会、神輿愛好会矢車、向ヶ丘弥生町青年部、菊川神輿会、両輿連、新川崎幸睦など」
- ・ 行事経済（奉納金）… 六六六万五千元「五月一〇日一七時頃掲示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金）一八時―二〇時半 大神輿町内廻り／九日（土）子供神輿渡御… 一一時半 神酒所集合、一二時神酒所出発、一三時半 神酒所帰還
「太鼓車の一緒に巡行」、隣町神酒所廻り… 一四時半―一八時半 神酒所↓司一神酒所↓美土代町神酒所↓旭町神酒所↓多一神酒所↓一七時 八町会神輿合わせ↓神酒所／
一〇日（日） 大神輿一基・小神輿一基 九時、一〇時 出世不動通り集発、一五時頃 宮入（八番）、一八時 帰還、太鼓車一台 神酒所発一五時半―一六時（町会行事
予定より）
- ・ 備考… 天狗の人形を載せた曳き太鼓は一五人程度の子どもたちが神酒所前で曳いていた。

内神田旭町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 山本宏昭（町会長）、丸木俊雄、広瀬征由「三人」
- ・ 神酒所… 佐竹稻荷神社（内神田三―一―〇）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一
- ・ 一般動員…「奉納品より、神田睦会など」
- ・ 行事経済（奉納金）… 四六七万五千元「五月九日一五時頃掲示分より」

多町一丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…藤田光春（町会長）、上田東雄、中曾根利光〔三人〕
- ・ 神酒所…三島染色補正店一F（内神田三一―一八―四）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和二三年五月〕
- ・ 一般動員…〔奉納品より、神田睦会など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…四三九万六千円〔五月九日一五時二〇分揭示分より〕

多町二丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…大藤雅也（町会長代行）、黒井由男、田畑秀二〔三人〕
- ・ 神酒所…神城ビル一F（神田多町二・九・二）、御飯屋…多町二丁目交差点角（神田多町二丁目九）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和五四年五月〕
- ・ 一般動員…〔御神酒奉納より、神田睦会など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…六六一万二千円+ε〔五月九日二時四七分揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月七日（木）御飯屋・神酒所の設営終了、神社の御札・御供物等配布／八日（金）大神輿・小神輿・太鼓の移動、テント張り等、一八時 みたま 入れ／九日（土） 大神輿、小神輿、太鼓、町内渡御、一二時一〇分集合 山車（ふれ太鼓）で町内巡行、一三時半頃～一五時頃（鳳輦前に終了）小神輿 町内渡御／一〇日（日）中神田地区連合渡御 八時集合、八時半 町内出発、一〇時集合、一〇時半頃 鍛冶三の子供と一八通りで合流、宮入…小神輿、大神輿の順、宮入後の大休憩の後、小神輿解散、一五時頃 山車巡幸／一六日（土）大神輿、小神輿、太鼓など神輿庫へ、直会 於ゑびす（〔役員日程表〕ほか貼り紙より）

神田鍛冶三会町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：櫻井忠太郎（町会長）、植村宣三、高遠和則「三人」
- ・ 神酒所：KDX鍛冶町ビル1F（神田鍛冶町三―五―二）
- ・ 祭礼の象徴：M大1・小1、H1「昭和二七年五月」
- ・ 一般動員：「奉納金より、日本橋茅場町二・三丁目町会など、奉納品：清酒二本（三田台町、神田睦会、茅場町二・三丁目町会青年部など）」
- ・ 行事経済（奉納金）：四一五万円＋²。「五月九日一四時掲示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）：五月八日（金） 宵宮 九時 役員集合、神田神社みたま入れ 一九時、おんな神輿町内巡行 一九時一〇分出發／九日（土） 八時 役員集合 十
二か町への挨拶まわり、一三時出發 山車 町内巡行、一四時半出發 大・小神輿 町内巡行、神社神輿鳳輦巡行 当町会通過 一七時頃予定／一〇日（日）連合渡御 役
員重合 六時、連合渡御参加者集合七時半（朝食）、八時半 神酒所出發、九時半 出世不動通り集合、一〇時 出世不動通り出發 ※中神田十三か町会連合渡御行程 ↓
出世不動通り東進↓神田駅西口前左折↓旧神田電話局前通り左折↓神田駅北口通り左折↓当町会・神酒所から一八通り左折↓外堀通り右折↓淡路町↓昌平橋手前にて小休止
↓神田神社宮入↓小川町交差点手前にて大休止↓近隣町会との合わせ↓町内着↓小休止後当町内巡行 一九時 神輿納め（神田祭・町会挙行のお知らせ 平成二十七年五
月改訂版）より）

淡路町一丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：稲垣彰（町会長）、太田恭市、田所秀樹「三人」
- ・ 神酒所：西形氏染物屋1F（神田淡路町一・一五）
- ・ 祭礼の象徴：M大1

- ・行事経済（奉納金）…二六万五千円〔五月九日一六時半頃揭示分より〕

神田淡路町二丁目町会

- ・祭典委員（役割動員）…呉豊良（町会長）、黒崎真、八尾正光〔三人〕
- ・神酒所…WATERRAS TOWER 1F（神田淡路町二丁目一〇一）
- ・祭礼の象徴…M大一〔二尺四寸〕・小一、H一〔昭和五二年五月〕
- ・一般動員…神輿担ぎ手四〇〇人（一回に担ぐのが五〇人）、子ども神輿は、女神輿として担いでいる。土曜日（九日）の十六時にワテラスの周りをぐるっと回る。参加者は二〇〇三〇人
- ・行事経済（奉納金）…三九万五千円+²〔五月九日八時五四分揭示分より〕
- ・備考…半纏合わせがあり、普通は同じ半纏（町会の半纏）を着ていないと神輿は担がせない。

須田町二丁目南部町会

- ・祭典委員（役割動員）…松浦喜之助（町会長）、米元修二、持田民雄〔三人〕
- ・神酒所…神田須田町一・三四
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一。
- ・一般動員…〔奉納品より、永代二丁目町会、永代二丁目南町会総代一同、祭興睦、深川祭神会、神田睦会、二本榎神輿會、祭命会、鯨睦連合（石粋會、石美睦、勇健會、宮本睦會、弁慶睦、源太連、宮臺會、志乃粋）など〕
- ・行事経済（奉納金）…四九二万九千円+²〔五月九日一四時一二分揭示分より〕

- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月九日（土） 大人神輿・子供神輿 一三時集合、山車 一三時半集合／一〇日（日） 大人神輿 八時集合、子供神輿 九時集合、山車 一三時集合（行事予定貼り紙より）

須田町中部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…大塚實（町会長）、大熊基一〔二人〕
- ・ 神酒所…パートナー須田町二丁目パーキング（神田須田町一・六）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・中一、H一、獅子頭一対、四神剣
- ・ 一般動員…「元祖女みこし」の参加者は女性約一八〇人
- ・ 行事経済（奉納金）…三二四万円＋^②「五月一〇日八時の時点、芳名板揭示より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月六日（水） 一〇時 蔵出し、八日（金） 一八時 御霊入れ、九日（土） 神幸祭「受渡し」、町内渡御、一〇日（日） 連合渡御、宮入、町内渡御、
- 一一日（月） 後片付け、一二日（火） 六時 蔵入れ、三二日（土） 町会総会・神田祭直会〔於 ホテルジュラク〕

須田町北部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…堀田康彦（町会長）、小高登志、田端幸一〔三人〕
- ・ 神酒所…須田町北部会館一F（神田須田町一・四）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・ 一般動員…日曜…大人神輿約一五〇人・子ども神輿約八〇人
- ・ 行事経済（奉納金）…五〇万五五二〇〇円＋^②「五月一〇日一三時半揭示分より」 出世稲荷神社から一万円が奉納。

- ・ 祭礼行事（主な行事）：四月三日（木）一四時半 祭具蔵出し／五月八日（金）一八時頃 神輿神盃入れ／九日（土）鳳輦巡行…往路八時半頃（昌平橋南詰より淡路町交差点みずほ銀行前まで巡行し、献饌を淡路町二―四外堀通りで行います）、復路一七時一〇分頃（多町通り地区境より万世橋北詰まで巡行します） 往路・復路ともに供奉員・獅子頭山車奉仕者は二〇分前に神酒所集合、山車町内巡行…一三時半 スタッフ集合、一四時 山車参加者は神酒所前に集合、一四時一五分 町内巡行（有志の接待所にて適宜休憩） 鈴たすきを付けます、一六時 山車「納め」解散（弁当・お菓子支給・鈴たすきと交換）、最終点検…一八時 祭典委員は各自の分担の点検確認をお願いします／一〇日（日）氏子神輿連合渡御（大人神輿）七時 スタッフ集合、七時半 大人神輿参加者は神酒所前に集合↓出発式（朝食サービス） 町内会で肩慣らし後、出世不動通り「連合集合場所」へ出発、九時半 連合集合「町会長、世話人、木頭（大人神輿責任者）は最前方に集合」、九時四五分 木遣り、手締めの出発式、一〇時 連合先頭出発、一〇時半頃 一八通り「小休止」（飲物サービス）、一一時半頃 外堀通り「大休止」（昼食サービス）、一三時 連合宮入出発（町会の宮入は一番につき一四時四〇分頃の見込み）、一五時頃 連合から離れ、お茶の水聖橋附近にて昼食休憩（昼食サービス）、一五時半頃 淡路坂を経て、町内帰着↓町内巡行（有志の接待所にて適宜休憩）、一八時 大人神輿「納め」解散（夕食弁当支給・たすきと交換）、一八時半 祭典委員は片付け後、解散（子供神輿）一〇時半 スタッフ集合（※中学生「大人神輿に参加しない」のお手伝いを募集）、一一時 子供神輿参加者は神酒所前に集合↓出発式、一一時半頃 町内会で肩慣らし後、外堀通りで大人神輿と合流（昼食サービス）、一三時 連合宮入出発（※以降は大人神輿と同様のスケジュールとなります）、一六時 子供神輿「納め」解散（夕食弁当支給・たすきと交換）／一日（月） 祭具蔵入れ・絆纏回収…一四時 蔵入れ↓町会会館に集合、神社神輿に山車や祭礼用品を納めます、一四〜一六時 絆纏回収↓町会会館に集合、絆纏の回収を行います／一六日（土）直会（反省会兼）一八時 場所…ホテルマイステイズ御茶ノ水コンファレンスセンター「〔須田町北部町会祭典委員 御祭礼のご案内〕より」

【外神田地区連合】

外神田一丁目万世橋町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：塚田一郎（町会長）、田中誠一、市川英男「三人」
- ・ 神酒所…JR秋葉原駅電気街口・アトレ秋葉原（外神田一、一七―六）前・テント
- ・ 祭礼の象徴…M大1・小1、H1「昭和三五五年五月」

- ・一般動員…日曜は大人五五〇人、子ども三〇人（半纏の数から算出）。〔奉納金より、相祭会、開神会、櫻睦会、賽祭会、浅勇会、剛神会、狛江講中、泉昇会、氷川睦、鬮将皇、翠郭、雄祇会、綿引睦、秩父神輿粹好会、豪彦会、芝中鳳輦、御嶽神社、幻龍会、ほか全一九団体〕
- ・行事経済（奉納金）…三七二万円〔五月一〇日一六時揭示分より〕
- ・備考…五月九日（土）の一六時頃、外神田三丁目金沢町会が挨拶に訪れる。

神田旅籠町会

- ・祭典委員（役割動員）…松永耕一（町会長）、渡辺修、増田宗一〔三人〕
- ・神酒所…ベルサール秋葉原1F
- ・祭礼の象徴…M大1・小1〔南部屋五郎右エ門・作〕、H1〔南部屋五郎右エ門・作、昭和三三年五月〕、囃子屋台1
- ・一般動員…土日合計約八五〇人
- ・行事経済（奉納金）…揭示なし
- ・祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）八時 神幸祭（於…神田明神）、一三時四五分 子供神輿・山車（万世橋町会神酒所集合）、一五時 旅籠町大神輿／一〇日（日）八時 旅籠町大神輿 連合宮入り、一〇時・一四時（二回） 子供神輿・山車（旅籠町会神酒所集合）、一二時半 中央通り神輿連合（平成二七年神田祭 神田旅籠町会）ポスターより）
- ・備考…芳名板は無い（金額の誇示に繋がるという理由から）。店舗の奉納金は、大きい店舗…約三〇万円、小さい店舗…約一万円。

宮本町会

- ・祭典委員（役割動員）…五島一雄（町会長）、手塚康二、手塚久雄〔三人〕

- ・神酒所…アヤベビルーF（外神田二一七―三）
- ・祭礼の象徴…M小一（大ニはレンタル）
- ・一般動員…土曜…子ども二〇〇人（神輿巡幸大人なし）、日曜…大人三六〇人（貸半纏約三三〇枚、名前入り約三〇枚）・子ども約一〇〇人（昌平小学校）
- ・行事経済（奉納金）…二三九万五千元〔五月一〇日一〇時揭示分〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月九日（土） 一時 子供神輿担ぎ手集合、一時半〜子供神輿町内巡行／一〇日（日） 七時四〇分 宮本町会神酒所集合、八時二〇分 神輿出発、一〇時頃 宮入（子供神輿は宮入後 町内渡御 解散）（大人神輿は宮入後、芳林公園まで渡御）、一時半 芳林公園にて昼食 休憩、一二時半 芳林公園出発、一二時四〇分 連合中央通り神輿渡御、一六時 宮本町会内渡御後解散（遷座四〇〇年 神田祭 〈宮本町会神輿渡御スケジュール〉ポスターより）

神臺會

- ・祭典委員（役割動員）…中村建夫（町会長、地区代表）、神田茂、神山栄太郎〔三人〕
- ・神酒所…中村鍍金工業㈱一F（外神田二一九―二）
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和二三年五月〕
- ・一般動員…日曜…大人二〇〇人・子ども二〇〇人
- ・行事経済（奉納金）…二五九万六千元〔五月一〇日一四時揭示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金） 一七時頃 神輿御霊入れ／九日（土） 一三時頃 太鼓町内渡御、一三時半頃 子供神輿町内渡御、一四時頃 大人神輿町内渡御、一六時五〇分頃 神社神輿渡御 ベルサール秋葉原前、一八時 明神拝殿着輿祭／一〇日（日） 八時 神輿渡御（大） 出発（宮入）、一時頃 太鼓町内渡御、正午 中央通り神輿渡御、一五時半頃 子供神輿町内渡御、一六時頃 大人神輿町内渡御（平成二十七年神臺會祭禮日程）より）

神田同朋町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…永井裕（町会長）、宇野一郎、前川正、石田周三〔四人〕
- ・ 神酒所…永井紙器印刷㈱一F（外神田二・一五・八）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・中一・小一、H一〔昭和二五年五月〕、囃子屋台一
- ・ 一般動員…土曜…大人二〇〇人・子ども三〇人、日曜…大人四〇〇人・子ども三〇人（神輿はなし）。〔奉納金より、外神田五丁目亀住町会、茅場町二・三丁目町会、妻恋会、神田囃子諫鼓、新中野祭事会、春日部宮本町神輿会など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…四五六万一千円＋²〔五月一〇日一四時四五分掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金） 一八時 御霊入れ・神酒所開き／九日（土） 一四時 神輿・山車 町内渡御／一〇日（日） 七時半 神輿 出発式、九時 神輿 外神田連合 神田神社宮入、一二時半 神輿 外神田連合 中央通り渡御／町会神輿展示〔4／20〕新潟原動機ビル一F〔神田祭遷座400年奉祝 神田同朋町会ポスターより〕
- ・ 備考…妻恋神社の氏子地域。神酒所に「妻恋神社」の掛け軸を祀る。五月九日一一時前に神田山本町会が挨拶に訪れた。

外神田三丁目金澤町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…石塚勝洪（町会長）、大瀧隆樹、高関好和〔三人〕
- ・ 神酒所…長竹ビル一F（外神田三・四・一五）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和二三年五月、復興記念〕
- ・ 一般動員…土曜…大人二〇〇人、日曜…大人三〇〇人、子ども…神輿五〇人、山車三〇人。シニア世代が多い
- ・ 行事経済（奉納金）…二四九万三千円〔五月一〇日一四時一五分頃掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金） 一八時〜町内懇親会／九日（土） 一五時一五分集合 宵宮 神輿町内渡御／一〇日（日） 一九時半集合 神輿連合宮入渡御、正午集

合 中央通り神輿渡御（平成二十七年神田祭 外神田三丁目金澤会）ポスターより）

・備考…神酒所の受付には、「金澤町会・てぬぐい¥6000 ・神田祭冊子 共¥10000」の貼紙があった。

神田末廣町会

・祭典委員（役割動員）…前川知正（町会長）、小川久雄、佐竹信敬「三人」

・神酒所…木村末廣苑一F（外神田三・一六・二）

・祭礼の象徴…M大1・小1、H1「大正一五年」、囃子屋台1

・一般動員…参加者数は、土曜…大人約二四〇人・子ども約八〇人、日曜…大人約三五〇人・子ども約一二〇人（実際には子どもは一五〇人に到達）。「奉納品より、亀住町会、親和囃子会、金町中央会、蒲田葵会、益荒会など」

・行事経済（奉納金）…六一四万三千五百円「五月九日一九時一五分頃掲示分より」

・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一七時 御霊入れ（神酒所集合）／九日（土）一四時半 担ぎ手集合（神酒所集合）、一五時 町内神輿巡幸出発／一〇日（日）七時半 担ぎ手集合（神酒所集合）、八時 神酒所出発（外神田連合宮入九時〜一〇時半）、一二時半 中央通りお祭り広場参加（江戸総鎮守 神田明神 神田祭 神田末廣町会）ポスターより）

・備考…五月九日の一〇時過ぎ、子どもたちがお囃子の練習をしていた。

外神田四丁目田代会

・祭典委員（役割動員）…松本博昭（町会長）、亀田延幸、松井一郎「三人」

・神酒所…ミナミビルドンキホーテ秋葉原店（外神田四・三・三）前路上・テント

- ・ 祭礼の象徴：M大1・中1・小1、H1
- ・ 一般動員：大人二四〇～二六〇人。山車三〇人
- ・ 行事経済（奉納金）：二四〇万円（インタビューによる）
- ・ 祭礼行事（主な行事）：子供山車 五月九日（土） 一一時三〇分・一五時三〇分、一〇日（日） 一〇時三〇分・一三時三〇分 集合は各一五分钟前 / 大人神輿 集合七時一〇分、出発七時四〇分、納め一五時三〇分（神酒所掲示「神田祭 田代会日程」より）

外神田四丁目松富会

- ・ 祭典委員（役割動員）：田中喜一（町会長）、坂東正章、川田大河「三人」
- ・ 神酒所：榎マコトに隣接する建物1F（外神田四・八・九）
- ・ 祭礼の象徴：M大1・小1、H1
- ・ 一般動員：土曜：大人二〇〇人、子どもは山車のみ、日曜：大人三〇〇～四〇〇人、子ども二〇～三〇人
- ・ 行事経済（奉納金）：二五四万円「五月一〇日一五時五〇分頃掲示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）：五月九日（土） 近隣町会への神輿巡幸 一四時半 神酒所出発↓栄町神酒所↓五軒町神酒所↓一六時半神酒所到着（五月九日（土） 近隣町会 外神田四丁目松富会神輿巡行図」より） / 一〇日（日） 七時半 神酒所出発↓八時二〇分明神下集合・八時半出発↓宮本町会神酒所↓九時一五分宮入↓神臺会神酒所↓神田末廣町会神酒所↓一一時半神酒所到着・一二時一〇分神酒所出発↓中央通り連合渡御↓一七時半神酒所到着（五月一〇日（日） 宮入 宮入帰路 外神田四丁目松富会神輿巡行図」五月一〇日（日） 中央通り連合渡御 町会 外神田4丁目松富会神輿巡行図」より）
- ・ 備考：五月九日一〇時頃、マークの半纏を着た人たちが挨拶に神酒所を訪問。

栄町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 作道泰明（町会長）、澤井輝男、松田一夫、山下亨「四人」
 - ・ 神酒所… ユーテックジャパン（株）一F（外神田五・六・二）
 - ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一、獅子頭一対
 - ・ 一般動員… 土曜… 大人二七〇人、子ども〇人、日曜… 三八〇人、子ども二〇人。「奉納金より、新松戸権ノ會、高濱睦、江戸里神楽若山胤雄社中、亀住町会、神田囃子諫鼓、千石青年部、石一睦会、亀住町会青年部、若宮睦会など。奉納品より、浜田山睦、親和会など」
 - ・ 行事経済（奉納金）… 三一四万五千元「五月一〇日一六時揭示分より」
 - ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月六日（水）九時 神輿、裃纏等引き取り、一三時 神酒所設営・神輿飾り付け／七日（木）一三時 神酒所設営・神輿飾り付け等、一六時 神霊入れ「集合一五時四五分半纏着用」、一八時 ふれあい広場（宵宮）「集合… 神霊入れ終了後」／九日（土）八時 神幸祭御発轡祭「着付け… 七・三〇、参列者… 祭典委員二名」、午前 外神田二二町会挨拶廻り「祭典委員三名を含む五名」、大人神輿渡御時間割 一三時四五分 担ぎ手、町会神酒所前に集合、一四時半 元佐久神酒所挨拶、町内回り「約一時間」 一六時 神酒所閉鎖 一六時半 神社大神輿 担ぎ手集合「旧 日通前」、夕食「神酒所前」／一〇日（日）大人神輿渡御時間割 七時 担ぎ手、町会神酒所前に集合 七時二五分 祭礼委員長・町会長挨拶 七時半 連合渡御集合場所に出発 八時二〇分 松富、田代、旅籠の神酒所によって集合場所へ（明神通り）一〇時頃 宮入（栄町会は一〇番目） 宮入後 万世町会 一一時半 芳林公園にて昼食 一二時一〇分 中央通り神輿渡御に出発 一二時半 ドンキホーテ前に集合 一四時半 解散後、末広、金澤、神台、同朋、五軒町 一六時 町内帰着 一六時一五分 町内巡行 一六時四五分 終了後直会 一七時半 解散、子供神輿、山車時間割 一時半〜一二時半 神輿町内巡行出発 一四時半〜一五時半 山車町内巡行出発 一六時〜一七時 大人神輿と共に町内巡行／二一日（月）八時 神酒所、神輿等の後片付 一〇時 神輿搬入／一五日（金）一八時 栄町会直会（久保田）／二二日（金）一八時 外神田連合直会「明神会館 町会から一〇名以内で出席」（平成二十七年 神田祭 栄町会日程」より）
- 備考… 五月一〇日一五時頃、神臺會、元佐久町会の神輿が栄町会の神酒所へ挨拶に来る。

元佐久町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 田村貞吉（町会長）、中村節子（町会長代行）、岡田貢男、浜田修吾〔四人〕
- ・ 神酒所… 沼田ビルF（外神田五・五・五）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一
- ・ 一般動員… 日曜… 大人約二五〇人、子ども二〇人。
- ・ 行事経済（奉納金）… 一五九万八千円〔五月一〇日一四時三〇分頃揭示分より〕

神田五軒町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 石田勝彦（町会長）、小林俊司、伊澤正昭、渡辺博、亀村轟〔五人〕
- ・ 神酒所… 区立鍊成公園（アーツ千代田3331）・ 神田五軒町町会防犯・防災センター（外神田六一二）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一〔昭和九年五月〕
- ・ 行事経済（奉納金）… 五七三万一千円五月一〇日一五時揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月九日（土）午後・大神輿 神酒所出發一三時～町内渡御～帰着一五時四五分〔休憩場所四ヶ所〕／一〇日（日）午前・大神輿 神酒所出發七時二〇分～明神下交差点集合～連合宮入〔八番、一〇時一〇分頃〕～清水坂～帰着一一時、午後・大神輿 神酒所出發一二時～連合渡御・町内渡御～帰着一七時半〔休憩場所四ヶ所〕／子供神輿・山車 九日（土）一二時 鍊成公園前 子供神輿貸出し、一二時半 神酒所出發 一三時五〇分 解散／一〇日（日） 鍊成公園前 宮入り子供神輿貸出し 七時半 宮入り出發 一〇時半 子供神輿貸出し 一二時 宮入り解散 一二時半 神酒所種發 一二時四〇分 解散（平成27年 神田神社例大祭 神田五軒町々会 大神輿渡御町内巡行路図）〔子供神輿・山車巡行図〕より）

神田山本町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 染谷英雄（町会長）、扇谷克、山本俊行「三人」
- ・ 神酒所… 秋葉原UDXビル（外神田四・一四・二）前・テント
- ・ 一般動員… 日曜… 大人七〇人（弁当の数）、子ども三〇人。土曜は参加せず、日曜はテントのみ。神輿を担ぎたい人は他町へ
- ・ 行事経済（奉納金）… 三〇万円「神酒所内、五月一日一五時半掲示分貼紙より」

【神田駅東地区連合】

鍛冶町一丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 城塚良一（町会長）、橘五郎（地区代表）、渡辺宏「三人」
- ・ 神酒所… 山梨中央銀行東京事務所一F（鍛冶町一・六・一〇）
- ・ 祭礼の象徴… M大・小一、H一「昭和二九年五月」
- ・ 一般動員… 大人神輿三五〇人。「奉納金より、昭島仁龍睦、長後町会、八丁堀三丁目西町会・町会長、西町睦会など」
- ・ 行事経済（奉納金）… 四七八万二千円「五月一日八時五五分掲示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金）一五時半 御霊入れ、一八時半 担ぎ手神酒所集合 一九時 大神輿出発 町内渡御「町内企業、青年部員参加」、神輿合わせ「神田駅南口のガードを越したところ… 鍛冶町二丁目・鎌倉町・多町一丁目」／九日（土）一三時 大神輿・子供神輿 町内渡御、一五時頃 神田駅南口へ鍛冶町二丁目と乗り入れ、一六時 担ぎ手日本橋三越新館横集合、一六時五〇分 大神輿出発 町内渡御／一〇日（日）九時 担ぎ手神酒所集合、九時半 大神輿出発、一〇時 神田駅東連合式典会場（旧今川中学校）着、一一時 連合渡御開始、一五時四〇分 宮入、一九時頃 肉の万世にて連合解散式、二〇時 神酒所へ還御（日本三大祭 神田祭 鍛冶町一丁目町会祭礼について 平成二十七年五月吉日」の案内、「奉祝遷座四百年 日本三大祭 神田祭 鍛冶一」ポスターより）

鍛冶町二丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…保志場宏（町会長）、平野恵一、三村榮一〔三人〕
- ・ 神酒所…旧今川中学校
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・ 一般動員…「奉納金より、大正会、大正会担ぎ手一同、鴨川市諏訪講など。奉納品より、神田睦会、江戸川西睦、若駒会など」
- ・ 行事経済（奉納金）…七九六万三千元〔五月一日九時五〇分頃掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…神酒所集合時間 五月八日（金） 大人神輿 一六時四五分 神田駅周辺を町内巡行（二七時〜一九時のうち、一八時半〜一九時 女性優先 レディ
ー スタイルを開催）／九日（土） 曳き太鼓山車 一〇時四五分、子供神輿 一一時四五分、大人神輿 一一時四五分 町内巡幸と日本橋渡御／一〇日（日） 大人神輿・子供
神輿 一〇時 神田駅東連合 神田明神宮入（「神田祭 鍛冶町二丁目町会」ポスター、「神田祭 女性50人限定 お神輿体験してみませんか？」の貼り紙より）

昭和町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…瀧口晶雄（町会長）、溝本智之、鶴飼友義〔三人〕

北乗物町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…池田和夫（町会長）、若月順一、小川福正〔三人〕
- ・ 神酒所…旧今川中学校〔紺屋町南町会と合同〕
- ・ 祭礼の象徴…山車一、獅子頭一对

・行事経済（奉納金）…一三万円＋² 「五月二〇日八時五〇分頃の掲示より」

紺屋町南町会

・祭典委員（役割動員）…飯田昭次郎（町会長）、中村哲、高井盛和「三人」

・神酒所…旧今川中学校「北乗物町町会と合同」

・祭礼の象徴…M大一「飯田昭次郎・作、平成二一年」

・行事経済（奉納金）…一〇六万円＋² 「五月二〇日八時五〇分頃の掲示より」

紺屋町北部町会

・祭典委員（役割動員）…中里彰秀（町会長）、和合征夫、神崎孝之「三人」

・神酒所…峰岸氏宅（紺屋町四三）

・祭礼の象徴…M大一「一尺三寸、昭和四〇年」・小一「宮本重義作」

・一般動員…土曜 大人神輿七〇人「このうち、興産信用金庫二〇人、橋本産業二〇人」。

・行事経済（奉納金）…九〇万八千円「五月一〇日八時五〇分頃掲示分より」

・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一七時 神輿御霊入れ／九日（土） 神田明神鳳輦行列巡行 紺屋町一一時頃予定、一三時半頃 紺屋町神輿渡御、一五時頃 紺屋

町神輿渡御／一〇日（日） 一一時頃 紺屋町神輿渡御（神田祭り祭礼・紺屋町北部町会予定）より）

・備考…五月八日（金）の御霊入れには約二八人が参列「このうち、興産信用金庫から四人が参列」。興産信用金庫は平成二六年から夏祭りも実施している。

富山町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…北清昭男（町会長）、高阪泰正、宮坂守「三人」
- ・ 神酒所…神田通信機株・浅野商事株一F（神田富山町二四）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・ 行事経済（奉納金）…一六八万円「五月九日一時五四分頃揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一六時 みたま入れ、一九時～二〇時 神酒所開き／九日（土）一一時 当町会へ鳳輦渡御、一三時半～一四時半 子ども神輿巡行、一五時 大人神輿巡行、一七時～二時半 大人神輿巡行、宮入り／一〇日（日）一〇時半～ 子ども神輿巡行（神田神社祭礼・富山町行事予定）より）

神田須田町二丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…坂下賢三（町会長）、伊関仁、三野修「三人」
- ・ 神酒所…柳森神社前
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一、囃子屋台一
- ・ 一般動員…「奉納金より、向井建設㈱向祭会、横濱連合、横濱金沢睦、荒六新地青年部など。奉納品より、神明睦会、鮎睦会、虎宮睦、神田囃子保存会など」
- ・ 行事経済（奉納金）…四九八万円「五月一〇日一七時頃揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一一時半 神輿出発↓町内巡行、一七時半～ 宵宮（神輿巡行あります）／九日（土）九時集合、九時半 神輿出発↓町内巡行、一時二〇分 鳳輦出迎え 和泉橋詰め予定、一二時半 神輿出発↓連合渡御↓柳森神社宮入 大神輿に合わせ子供神輿又は山車を巡行予定／一〇日（日）八時半 集合、九時 神輿出発↓連合渡御、一五時四〇分 神田明神 宮入予定 子供神輿は連合の神輿を宮入まで担げます。一〇時までに鍛冶町二丁目町会神酒所前へご集合ください（江戸の華 神田祭 須田町二丁目町会）ポスターより）

【岩本町・東神田地区連合】

岩本町三丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 栗下治康（町会長）、福山正孝、小澤正治〔三人〕
- ・ 神酒所… ヤマザキ岩本町ビル（山崎製パン株式会社） 一F（岩本町三丁目一〇・一）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一〔昭和十一年五月〕、獅子頭一対
- ・ 行事経済（奉納金）… 八五七万二千元〔五月九日一四時一〇分頃掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金） 一六時 御霊入れ／九日（土） 一一時 神幸祭行列お迎え（神酒所に全員時集倉）、一二時 大神輿・巡行準備・出発 小神輿・山車 町内巡行準備・出発、一七時一五分 神輿還座後、弁当支給／一〇日（日） 七時半 神酒所集合・連合渡御準備 朝の給食・給食車準備、九時 岩本町・東神田連合渡御出発、一五時半 神輿還座後、弁当支給、一六時 御霊抜き、一七時 直会 我が家（平成二十七年神田祭 岩本町三丁目町会）ポスター、「予定表 岩本町三丁目町会」より

・ 備考… 主な企業の奉納金… 山崎製パングループ一六四万円、本間組二〇万円、田島グループ一五万円、三井住友建設一〇万円、千葉銀行秋葉原支店七万円、貝印五万円

神田松枝町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 川原清重（町会長）、五十嵐恒夫、岡田昭三〔三人〕
- ・ 神酒所… ハーブ神田ビル5F（岩本町二丁目一・一）、御飯屋… ハーブ神田ビル脇
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、D二〔羽衣〕山車一、獅子頭一対
- ・ 一般動員… 「奉納金より、神田朔日会・関係者など。奉納品より、本所一丁目青年会、リパシティ21水泳部一同など」

- ・行事経済（奉納金）…二九六万五千円＋α 「五月九日一五時一七分揭示分より」
- ・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一五時半～ 御霊入れ、宵宮、宵宮神輿渡御／九日（土）終日 神幸祭（鳳輦巡行）正午頃 永谷マンション前にてお迎え、町内渡御（神輿・山車）一三時頃 神酒所前集合 *遠州 横須賀の祢里が合流します／一〇日（日）終日 宮入渡御 七時半 神酒所前集合、八時四〇分 連合町会出発式（神田祭 羽衣山車のある町会 神田松枝町会）ポスターより）

岩本町二丁目岩井会

- ・祭典委員（役割動員）…斉藤守正（町会長）、萩原康彦「二人」
- ・神酒所…区立岩本町二丁目児童遊園
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、D「桃太郎」山車一「山車一の人形…現在・神田神社資料館で展示」
- ・一般動員…大人神輿の担ぎ手三〇〇四〇人。弁当六〇個用意してなくなった。大人神輿の町内渡御を三〇何年振りに実施。町内のマンションに住んでいる人の仲間が参加。飲み屋で会って声をかけた人も参加した。何かをやり続けることが大事。
- ・行事経済（奉納金）…一〇〇万八千円「五月一〇日一六時半揭示分」
- ・祭礼行事（主な行事）…五月四日 九時 児童公園集合 神社より搬出、御神酒所設営／五日 九時半 御神酒集合 神田明神にて桃太郎山車組み立て／八日（金）一四時半 神社より禰宜がまいります。お祭りの始まりです。／九日（土） 一一時半 御神酒所集合 御鳳輦行列お迎え準備 昼食、一二時半 神幸祭（セブナイレブン角）御神輿と共にお祓い、手締めを行います。一三時 町内神輿渡御、一四時半 遠州掛川の山車と共に連合渡御（金物道り）六町会連合渡御に参加する方は大和町神輿にお願いたします、一五時半 町内神輿渡御、一七時 御神酒所にて夕食／一〇日（日） 七時一〇分 大和町神輿に参加する方は、ほほえみプラザへ 大和にて朝食配布あり、八時 御神酒所集合 朝食配布、八時二〇分 山崎パン前 連合宮入出発式、八時四〇分 岩本町東神田連合宮入出発式、一〇時 神田明神桃太郎山車前へ、一〇時四〇分 宮入開始、一二時 昼食（神輿宮入の方は、明神下で大和町と）山車の方、御神酒所の方は岩井会御神酒所にて、一四時 町内神輿渡御、一五時半 直会／一一日（月）一二時 御神酒所集合 御神酒所解体 明神へ搬入（岩井会 神田祭）貼り紙より）

神田大和町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…山口弘一（町会長）、菊間敏雄、堀田昌彦「三人」
- ・ 神酒所…ほほえみプラザ広場前（岩本町二・一五・三）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・ 一般動員…「奉納金より、岩井会、若林睦会、浦守稲荷青年会など。奉納品より、宿河原四丁目神輿会、平井南親会、七神會、京橋二丁目など」
- ・ 行事経済（奉納金）…四八六万六千円「五月二〇日一五時半頃揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一七時 御霊入れ・宵宮 前夜祭、企業町会員の方々との交流会／九日（土）鳳輦お迎え 神輿・山車町内渡御 子供神輿・山車一〇時一五分 ほほえみプラザ神酒所集合／一〇日（日） 神田明神 宮入 神輿・山車町内渡御 子供神輿・山車 一三時一五分 ほほえみプラザ神酒所集合（「神田祭 大和町」ポスター、「神田祭 子供神輿・山車 渡御のおしらせ 神田大和町」、「神田祭 ご案内 神田大和町」より）

神田東紺町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…竹内省三（町会長、地区代表）、黒田孝之、田辺一宇「三人」
- ・ 神酒所…金山神社（岩本町二・一・五）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一「昭和二五年五月」、獅子頭一対
- ・ 一般動員…「奉納金より、目黒不動前町会、志も町鳳輦など」
- ・ 行事経済（奉納金）…三六六万三千円「五月一〇日八時五五分頃揭示分より」

岩本町一丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…中山卓（町会長）、東恒雄、安原直樹「三人」
- ・ 神酒所…山崎ビル一F（岩本町一丁目一、一四）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・ 一般動員…「御神酒所奉納金より、神田大剛会、銀杏岡八幡神社宮元睦など。奉納品より、春日部八友會、双龍会など」
- ・ 行事経済（奉納金）…三三四万四千元「五月一〇日一六時二〇分頃掲示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金） 一五時 遷座祭 神酒所前、一六時一〇分 大神輿 門付け行列 出発、一八時半 大神輿 町内渡御 出発、一九時四五分 渡御終了／九日（土） 一二時半 神幸祭行列のお迎え 神酒所前 遠州横須賀祢里曳き回し参加、一三時二〇分 子供神輿・曳き太鼓 町内渡御 出発（約三〇分）、一四時 大神輿と祢里 連合渡御（六町会・祢里二基集合） 出発（祢里にはご家族・子供も参加できます）その後町内渡御、一七時五分 渡御終了／一〇日（日） 七時二〇分 宮入り担ぎ手 集合 神酒所前、七時四五分 大神輿 宮入り出発式、一〇時四〇分 連合宮入り 開始 神田明神、一二時 中央通りお祭り広場 参加、一五時 子供神輿・曳き太鼓 町内渡御 出発（約一時間）、一五時一〇分 大神輿 町内渡御 出発、一七時半 渡御終了、一八時 遷座祭神酒所前（平成27年度 神田祭 渡御予定 表 岩本町一丁目町会」より）

東神田町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…鈴木正道（町会長）、縣裕久、水野清「三人」
- ・ 神酒所…都立一橋高校（東神田一丁目二、一三）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一「昭和二九年五月」、獅子頭一対
- ・ 一般動員…「奉納金より、松住町会青年部、馬喰町一丁目町会、諏訪睦、神和睦など」

- ・行事経済（奉納金）…四一三万三千元〔五月二〇日一五時四五分頃掲示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月七日（木）夕刻 御霊入れ（遷座祭）／八日（金）午後 町内渡御、夕刻 町会前夜祭／九日（土）午前 小神輿・山車町内渡御、午後夕刻 大神輿町内渡御／一〇日（日）早朝 大神輿 宮入連合渡御、午後 大神輿・小神輿・山車 町内渡御・直会、夕刻 御霊返し（遷座祭）（東神田町会 神田明神御祭禮）ポスターより）

東神田豊島町会

- ・祭典委員（役割動員）…寺田善次郎（町会長）、小泉俊通、大原正道〔三人〕
- ・神酒所…龍角散ビル前（東神田二丁目五、一二）
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、曳き太鼓一〔昭和二七年五月〕、獅子頭一対
- ・一般動員…月光町会、神輿同好会…「川崎天満陸」、「鳳睦」が参加
- ・行事経済（奉納金）…三八四万二千元〔五月九日一五時五〇分頃掲示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一八時前夜祭／九日（土）／一〇日（日）〔日本三大祭 神田祭 東神田豊島町会〕ポスターより）

【秋葉原東部地区連合】

神田佐久間町一丁目町会

- ・祭典委員（役割動員）…小串金太郎（町会長、地区代表）、松本正、中島道明

神田佐久二平河町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 佐々木一（町会長）、田中善雄、小林洋一「三人」
- ・ 神酒所… 森芳三氏宅（神田佐久間町二・六）

・ 祭礼の象徴… M 大一「昭和二十七年」、小一「昭和二十七年」、H 一「昭和二十七年五月」

・ 一般動員… 日曜… 大人四〇〇人＋お手伝い一〇〇人。「奉納金より、仙和會、中目黒鳳凰會など。奉納品より、仙和會、江戸砂塵睦、奥田會など」

・ 行事経済（奉納金）… 三〇二万八千円「五月一〇日一二時揭示分より」

・ 祭礼行事（主な行事）… 五月七日（木）神酒所設営九時より・森様宅／八日（金）神酒所飾り付け設置九時より、奉納金受付一〇時より・神酒所受付にて、神輿御霊入れ
九時より・神酒所にて／九日（土）神幸祭一―時二〇分・委員集合、鳳輦渡御 一―時四〇分・和泉橋 一―時五〇分・和泉公園着 一二時一〇分・和泉公園発 一二時二〇分・美倉橋、神輿町内巡行 子供神輿山車一五時―一七時 大人神輿一五時―一七時半、宵宮は一―九時―二〇時半（集合は一―八時）／一〇日（日）宮入参拝 正午集合予定 昼食後神酒所出発、子供神輿・大人神輿（山車は町内廻りのみ）一四時学校通り集合、一四時半学校通り出発、一六時半宮入、一八時連合宮入解散、一九時神輿渡御終了、神輿御霊抜き一九時・委員集合／一―日（月）神酒所片付け九時・委員集合、神輿庫納め（平成二十七年神田佐久二平河町会祭礼日程表）より）

神田佐久間町三丁目町会

・ 祭典委員（役割動員）… 上野昭悦（町会長）、鈴木精一、小林一治、岸塚正夫「四人」

・ 神酒所… クリダイヤモンドション（神田佐久間町三・三七・六一）前・テント「御飯屋と神酒所を設営」

・ 祭礼の象徴… M 大一・小一、H 一「昭和二十五年五月」、囃子屋台一

・ 一般動員… 土曜… 大人二五〇人・子ども一五〇人、日曜… 大人四〇〇人・子ども二〇〇人。「奉納金より、岩門町町会、神田歩会、須賀睦会、蒲田西口睦、中野独楽睦など。

奉納品より、深川祭明会、紅扇會など」

・ 行事経済（奉納金）… 五六万九千三百円「五月一〇日一二時五〇分頃揭示分」

- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）八時半 御神酒所前集合 御神酒所設営、神輿・山車準備など、一七時半 神霊入れ（有志による神輿渡御を15分程行う予定です）
- ／九日（土）宵宮 神幸祭鳳輦渡御 一一時四〇分 和泉橋受渡し、一二時二〇分 美倉橋受渡し、子供神輿・山車 一三時集合、一三時一五分出發、一五時解散、大人神輿 一五時四五分集合、一六時一五分出發、一九時一五分宵宮（子供宵宮有り）、二〇時半解散／一〇日（日）宮入 一〇時半 大・小神輿 山車集合、一一時出發、一六時半神田明神宮入、二〇時半解散、二〇時半神霊抜き （2015年度 神田明神祭禮 佐久三町会日程表）より）

神田佐久間町四丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…中川恒雄（町会長）、斉田精一、岡田貞夫〔三人〕
- ・ 神酒所…区立佐久間公園
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和二六年〕、獅子頭一対
- ・ 行事経済（奉納金）…一六〇万六千円〔五月九日一二時半掲示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…神田神社より神輿搬出 五月八日（金）七時半（佐久間公園集合）、神田神社へ神輿搬入 一一日（月）七時半（佐久間公園集合）、神輿みたま入 八日（金）一八時（御神酒所）、子供神輿 九日（土）一四時、一〇日（日）一〇時、山車 町内巡り、大人神輿 集合…一〇日（日）正午（一二時）（佐久間公園集合）、出一三時（お祭り行事予定協力お願い 平成二十七年五月 神田佐久間町四丁目町会祭礼員会）より）

東神田三丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…佐原藤雄（町会長）、伯耆原正章、高木潤〔三人〕
- ・ 神酒所…萩原ビル一F（東神田三丁目一八）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔講和記念 昭和二七年五月〕

・一般動員…土曜…大人二八〇人・子ども三〇人。マンション住人の参加は少ない

・行事経済(奉納金)…二九二万三千元「五月一日一八時一五分頃掲示分より」

・祭礼行事(主な行事)…五月八日(金) 神霊入れ(神酒処前)／九日(土) 一二時頃 神田明神鳳輦巡幸(清洲橋通り沿い)、一四時〜 子ども山車・神輿 町内渡御(お菓
子・飲み物配布有り)、一七時〜 大人神輿 宵宮町内・連合渡御、一八時半〜 秋葉原東部連合渡御 子ども神輿集合(和泉小学校前…小学生対象)、一八時四五分〜秋葉
原東部連合渡御 子ども神輿出発／一〇日(日) 一〇時〜 子ども山車・神輿 町内渡御(お菓子・飲み物等有り)、一二時頃 大人神輿 神田明神へ出発、一六時半頃
大人神輿 神田明神宮入、一八時半頃 大人神輿 帰町、一九時頃 大人神輿 町内渡御、二〇時頃 神霊抜き(神酒処前)〔東神田三丁目町会 神田祭 平成二十七年五
月八日(金)〜十日(日)「ポスターより」

・備考…東神田三丁目町会は、江戸時代の職人の町「八名川(やながわ)町」と「元久右衛門(もときゅうえもん)一丁目・二丁目」が合併してできた町会。曳き太鼓と神酒
所前に掲げられた高張提灯には旧三町の名前が入っていた。

神田和泉町町会

・祭典委員(役割動員)…宮沢敬則(町会長)、早尾貢一、金田守正、井出武甫〔四人〕

・神酒所…小林ビル(神田和泉町一・一・八)、御飯屋…関口記念神田和泉町会館一F

・祭礼の象徴…M大一・中一・小一、H一〔昭和二五年五月〕、囃子屋台二〔泉笑会・子供連〕

・一般動員…土曜…大人約五〇〇人・子供約五〇人。「奉納金より、横根睦など。奉納品より、松四東栄青年会、祭遊連、柳北睦、本四若睦会など」

・行事経済(奉納金)…六三九万円「五月九日一九時半掲示分より」

・祭礼行事(主な行事)…五月八日(金) 一七時 御霊入れ／九日(土) 七時 明け囃子、一四時 小中神輿・山車・お囃子町内渡御、一七時 大神輿・お囃子町内渡御、一
九時 神輿連合渡御(宵宮、佐久間学校通り)／一〇日(日) 七時 明け囃子、一〇時 小中大神輿・山車・お囃子町内渡御、一三時四五分 小中大神輿・お囃子宮入渡御、一
四時半 宮入連合渡御〔神田祭 和泉〕ポスターより)

神田松永町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 山崎誠（町会長）、西井伸樹、安部金次郎〔三人〕

神田練堀町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 齋藤進（町会長）、平井晴男、中島光治〔三人〕
- ・ 神酒所… 竹内ビル前（神田練堀町三）・ テント
- ・ 祭礼の象徴… 神輿なし。町内の会社が神輿を寄贈するという話もあったが景気が悪くなって立ち消えになったという。
- ・ 行事経済（奉納金）… 一六〇万五千元〔五月一〇日一六時一五分頃掲示分より〕
- ・ 備考… 町会の世帯数は三〇軒であるが、居住者は四軒。神酒所付近から駅の向こうの消防署前の道までが町会の範囲であるが、会社しかないという。この地区では一番新しい町会

秋葉原町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 関谷弘美（町会長）、亀田春雄、久保田進〔三人〕
- ・ 神酒所… 東京商會秋葉原ビル一F（台東区秋葉原三、一〇）
- ・ 祭礼の象徴… 神輿はあるが、人と場所がなくて今年は組むことができなかった。以前は神輿や山車を出していた。
- ・ 行事経済（奉納金）… 三三万円〔五月九日九時五〇分掲示分より〕

・備考…台東区で神田祭に参加する唯一の町会。住人は学生寮アパートの学生のみ。人が住んでいないから、人もお金も集まないという。

【大手・丸の内町会】

大手・丸の内町会（史蹟将門塚保存会）

・祭典委員（役割動員）…福澤武（町会長、地区代表）、及川浩志、三田村尚志、堀内義経〔四人〕

【日本橋一地区】

本石町町会

・祭典委員（役割動員）…岡田親幸（町会長）、小泉太郎、安部隆彦〔三人〕

室町一丁目会

・祭典委員（役割動員）…清水勇（町会長）、橋本敬、川田孝夫〔三人〕

・神酒所・御飯屋…三越本店室町口

・祭礼の象徴…M大1・小1、H1、D1

・一般動員…「奉納金より、諏訪神社御神輿保存会、本町一丁目町会、小舟町町会、吹毛会、茅場町二・三丁目会、日本橋三丁目西町会、人形町三丁目西町会、日本橋一丁目東町会、本町二丁目自治協会、八重洲一東町会青年部、日本橋二丁目通町会、亀沢一丁目町会、翔麗会、江戸橋会、主水会など」

・行事経済（奉納金）…六一〇万五千円＋金一封〔五月一〇日九時〇六分揭示分より〕

・祭礼行事（主な行事）…四月四日（土）一六時〜半纏合わせ会／五月八日（金）山車行列・御霊入 一八時半／九日（土）町内巡行 小神輿・山車 一〇時、大神輿 一

三時半※特別参加 群馬県藤岡市諏訪神社 大神輿／一〇日（日）神田明神宮入 一〇時半、町内巡行 小神輿・山車 一二時、大神輿 一三時半、一七時半 御霊抜き／
二三日（土） 町会直会／三〇日（土） 青年部直会（「神田明神御祭禮 室町一丁目祭」ポスター、町会資料より）。
・備考…三越より金一封、三井不動産より五〇万円、山本海苔店より三〇万円、清水建設より一〇万円、鹿島建設より一〇万円の奉納あり。

室町二丁目町会

・祭典委員（役割動員）…高津克幸（町会長）、大島博、新原昇平〔三人〕

室町三丁目町会

・祭典委員（役割動員）…田中寛（町会長）、井上賢（町会長代行）、村田乾、三宅正洋〔四人〕

室町四丁目町会

・祭典委員（役割動員）…田中正夫（町会長）、酒井良治、下田豊、村松毅〔四人〕

本町一丁目町会

・祭典委員（役割動員）…佐久間司郎（町会長）、小川一信、松沢和男〔三人〕

本町二丁目自治協会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 小西茂之（町会長）、石井和義、阿重田行雄〔三人〕

本町三丁目東町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 羽田良郎（町会長）、筒塩文男、山尾智祥〔三人〕

本町三丁目西町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 橋本泰三（町会長）、境宜信〔二人〕

本町四丁目東町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 小林丈夫（町会長）、小雀直、牧田恵次〔三人〕

本町四丁目西町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 本田宣男（町会長）、湧井恭行（名誉会長、地区代表）、海老原裕〔三人〕

【日本橋二地区】

大伝馬町一之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：濱田捷利（町会長）、鈴木康信、鈴木章久〔三人〕

大伝馬町二之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：瀧常二（町会長、地区代表）、服部慶雄、伊藤哲雄〔三人〕

大伝馬町三之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：星和男（町会長）、吉田和雄、齋藤弘〔三人〕

小伝馬町一之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：宮城真一（町会長）、志賀征二、秋山保司〔三人〕

小伝馬町二之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：新井一雄（町会長）、小川浩一、山口みのる〔三人〕

小伝馬町三之部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：石井重喜（町会長）、高取繁男、上野幸重〔三人〕
- ・ 神酒所：石井ビル一F（日本橋小伝馬町一九一三、竹森神社隣）
- ・ 祭礼の象徴：M大・小一
- ・ 行事経済（奉納金）：一二四万九千円〔五月七日一六時四〇分頃揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）：五月八日（金）宵宮縁日 一八時〜、御霊移し一九時頃／九日（土）担ぎ手集合 一三時（竹森神社前）、宮出し 一四時 ※神田明神鳳輦町内巡幸
- ・ 正午頃（竹森神社例大祭 小伝馬町三之部町会 竹森神社保存会）ポスターより）
- ・ 備考：竹森神社例大祭と合わせて実施。

日本橋小舟町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：平野熙幸（町会長）、吉田誠男、鴛尾泰彦〔三人〕

富沢町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：宮本晃男（町会長）、青山貞夫、野崎愛子〔三人〕
- ・ 神酒所：富沢稻荷神社（日本橋富沢町七・一八）
- ・ 祭礼行事（主な行事）：五月九日（土）子ども山車巡行 一二時半 富沢稻荷神社前集合、一三時〜一四時 巡行、一五時二五分〜神田神社鳳輦巡行（富沢町町会案内より）

人形町三丁目東町会

・ 祭典委員（役割動員）…三田芳裕（町会長）、矢崎豊、加王文良「三人」

【日本橋三地区】

人形町一丁目町会

・ 祭典委員（役割動員）…高柳豊（町会長）、鈴木健一、浅田光彦「三人」

・ 神酒所…吉田氏宅前（日本橋人形町一丁目一〇）・テント

・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一

・ 一般動員…日曜の大人神輿は七五人ぐらい（町会関係者三五人、神輿会三五人）

・ 行事経済（奉納金）…四四五万三千元「五月一日一〇時二〇分頃掲示分より」

・ 祭礼行事（主な行事）…五月三日（日）一〇時 万国旗飾付、一七時 祭典委員会／七日（木）一〇時 神酒所準備、神輿、山車整備、テント張り、高張り、縄／八日（金）

一〇時 祭礼準備、神酒所飾付、各戸軒灯準備、半纏・御供物配布、一〇時半 各戸へ神社御供物配布（各組長はテントに集合）、一三時 神輿蔵入れ、一七時半 祭典委

員神酒所集合（お祭りゆかた着用）、各戸提灯点灯、一八時半 委員参列、町会神輿御霊入れ／九日（土）九時半 祭礼開始 委員集合、神輿用半纏、昼食・休憩、一三時

町内大人神輿出発、一三時半 町内子供神輿出発（山車同行）、一五時 有馬小学校引継、一五時二〇分 神幸祭渡御 人形町大通り↓水天宮交差点、一七時 神輿終了、

一七時半 お祭り広場開始（町内親睦の夕べ）町会員全員参加 子供祭り ゲーム・焼きそば他、一九時半 ビンゴゲーム・抽選会（景品多数）、二二時 お祭り広場終了

／一〇日（日）八時半 祭典委員集合、九時 町会出発、九時四〇分 神輿連合勢揃、九時五〇分 神輿出御式、一〇時 神輿連合渡御出発、一二時 神輿連合解散、一二

時二〇分 昼食・休憩、一三時半 神輿山車出動・町内子供神輿出発、一四時 町内大人神輿出発、一八時 祭典終了／二一日（月）一〇時 祭典委員集合、万国旗・掲示

板等後片付け／一七日（日）一七時 祭礼直会（「平成二十七年神田神社大祭町内祭礼予定表 人形町一丁目町会祭典委員会」より）

・備考…茶之木神社世話人会より二〇万円の奉納あり

人形町二丁目三之部町会

・祭典委員（役割動員）…高梨節三（町会長）、伊藤泰夫、浜田二三雄「三人」

・神酒所…米澤氏宅（日本橋人形町二・三五・六）

・祭礼の象徴…M大一・小一、H一「昭和二七年五月」

・一般動員…土曜・大人神輿二〇〇人

・行事経済（奉納金）…三四七万六千円「五月一〇日一〇時二三分頃掲示分より」

・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）正午 御供物引換開始、一七時半 役員全員集合（ゆかた又は担ぐ格好で・青年部一七時集合）、一八時頃 霊入れその後乾杯・神輿渡御へ（二九時前後）／九日（土）九時半 役員及び拡大実行委員全員集合、一〇時 大人神輿町内渡御、一〇時半 子供神輿・山車渡御、一二時四五分 大人神輿渡御終了後、弁当配布、一三時 子供集合 集合後 子供神輿・山車渡御、一四時半 鳳輦供奉・諫鼓山車・獅子頭山車参加者四名有馬小へ集合（町内半天着用）、一五時頃 鳳輦 有馬小出発、一八時半 宮入神輿担ぎ手集合（明神下・福井ビル前）、一九時一五分 宮入（予定）、二〇時半解散（予定）担ぎ手流れ解散 終了後、青年部全員片づけ作業、神酒所集合／一〇日（日）八時一五分 全員集合（青年部八時集合）、九時 大人神輿連合渡御へ出発、一〇時 セレモニー後 蛸一共和会出発、九時半 子供集合 集合後 子供神輿・山車町内渡御、正午 連合神輿 水天宮前解散 渡御終了後、弁当配布、一三時 全員集合、一三時一〇分 大人神輿 八町会・五の部町会の有志との連合へ出発、一三時四五分 全町会甘酒横丁通り集合、一四時 巡行開始 各基そのまま巡行 近隣町会及び町内渡御、一七時 子供神輿・山車納め、一八時 大人神輿納め後、弁当配布、一八時半かたづけ後乾杯／一六日（土）九時 神輿・太鼓・その他用具日本橋小に運搬、一八時 直会（「平成27年神田神社例大祭予定表 人形町二丁目三之部町会」より）

蛸一共和会

- ・ 祭典委員（役割動員）…松永富治（町会長・地区代表）、金指幸男、岩崎昇一〔三人〕
- ・ 神酒所…パラカ日本橋蛸殻町第五駐車場（日本橋蛸殻町一・三三・七）・テント〔御飯屋一、神酒所一〕
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和一三年五月〕
- ・ 一般動員…日曜・大人神輿二〇〇人、子ども五〇人
- ・ 行事経済（奉納金）…二五万五千元〔五月一〇日九時二五分頃揭示分より〕

- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）ご寄付御礼配布 八時増田屋さん前集合、御霊入れ 御神酒所一九時集合／九日（土）一〇時 挨拶廻り、他町会挨拶受け（神酒所係ほか）、神田神社神幸祭 一五時 行列お迎え、一五時半 神輿町内渡御、一五時半～一六時 山車町内巡行（菓子配布）、一六時半 夕食休憩、神田神社宮入り 一八時 出発、一八時四〇分 明神下集合、二〇時 宮入終了予定／一〇日（日）八町会連合祭 九時 神酒所前集合、九時二〇分 七町会出迎え、九時四〇分 連合祭セレモニー開始、一〇時 連合渡御出発、一一時～一二時半 山車町内巡行、一二時 連合祭解散、一二時半 昼食休憩、一三時五分 町内渡御、一四時～一四時半 山車町内巡行、一四時四〇分 三町会（蛸東、自衛会、共和会）渡御、一五時二〇分 共和会着（一〇分休憩）、一五時半～一六時 山車町内巡行、一五時四〇分 解散（連合）、一六時二〇分 町内巡行、一七時 終了予定 直に直会準備 ※山車の巡行は九日に一回、一〇日に二回の計三回、集合場所はいずれも町会神酒所（蛸一共和会の貼り紙より）
- ・ 備考…平成二七年から連合祭の式台の前で各神輿が「サシ」をして挨拶を行うようにした。それ以前は、蛸一共和会の神輿だけが「サシ」を式台の前で行っていた。

蛸殻町一丁目町会自衛会

- ・ 祭典委員（役割動員）…安藤信明（町会長）、酒井国男、相羽政孝〔三人〕
- ・ 神酒所…酒井国男氏宅（日本橋蛸殻町一・三〇・七）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・中一・小一、H一〔昭和一一年五月〕
- ・ 一般動員…日曜・大人神輿二〇〇人（弁当一八〇）・子ども五〇人〔奉納品より、千成會、一十三會、吾孀會、玉清睦、隅田睦、飛龍會など〕

- ・行事経済（奉納金）…一六一万七千円〔五月二〇日九時四〇分頃掲示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一八時五〇分頃 神輿の御魂入れ（神田神社神主による）／九日（土）一五時頃 鳳輦渡御 水天宮前を通過予定／一〇日（日）八時半 連合神輿渡御の方集合（朝食を用意を致しております）、九時二〇分 連合神輿の方出発、一四時～一五時 大人神輿、子供神輿、山車出発。一緒に町内巡ります、一四時四〇分 共和会、蛸東町会、自衛会、三町会連合神輿出発（共和会の神酒所挨拶）（ロイヤルパークホテル前解散）大人の方にはお弁当、子供にはお菓子を町会より配布致します。（蛸一自衛会の貼り紙より）
- ・備考…子ども神輿は町会の安達さんが五〇万円で作った。大・中・小神輿の製作年代は同じ。自衛会の神輿が日本橋三地区で一番古いのではないか。

蛸殻町東部町会

- ・祭典委員（役割動員）…森田兆蔵（町会長）、齊藤誠治、田口泰弘〔三人〕
- ・神酒所…日本橋蛸殻町二・七・一
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・一般動員…大人神輿二〇〇人（うち町会五〇人）〔奉納金より、箱崎睦会、榎橋睦、昭和会など。奉納品より、両国若睦、三鷹巴会、古石場一丁目西睦会など〕
- ・行事経済（奉納金）…四二〇万九千円〔五月一〇日一〇時半頃掲示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一〇時 御神札、御共物、手ぬぐい氏子に配布、一七時半 神輿 御霊入れの儀、一八時 大神輿 町内渡御、一八時半 振る舞い／九日（土）一二時 町内渡御神酒所前集合、一二時半 町内渡御神酒所前出発、一四時半 町内渡御蛸殻町公園前到着、一四時半 振る舞い、一四時半 関係者神酒所集合、一五時 鳳輦お出迎え、一五時半 子供山車町内巡回出発、一六時半 子供山車神酒所前帰着、一六時 大神輿 神田神社宮入大鳥居前集合、一六時半 大神輿 神田神社宮入、一七時半 大神輿 町内渡御、一八時 大神輿 町内渡御帰着／一〇日（日）八時半 蛸東神酒所前集合、九時 蛸東神酒所出発、九時二〇分 蛸一共和会神酒所着、一〇時 八町会連合渡御出発、一二時半 蛸東神酒所帰着、一三時二〇分 子供神輿・山車巡回出発、一四時四〇分 子供神輿・山車帰着（宮入）、一三時半 大神輿 町内及び他町会渡御出発 浜三西部・蛸一自衛会・蛸一共和会渡御、一六時 魚竹商店前到着、一六時二〇分 魚竹商店前出発、一六時半 蛸東神酒所帰着、一六時半 祭典

委員長挨拶 乾杯 接待、一七時 御盃抜きの儀、一七時半 神酒所納め（「神田祭日程表 蛸殻町東部町会」より）

【日本橋四地区】

馬喰町一丁目一の部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 山本宗一郎（町会長）、長谷川本継、土田饒「三人」
- ・ 神酒所… ㈱三洋（日本橋馬喰町一、一三、三）※馬喰町一丁目（馬喰町一丁目一の部町会・二の部町会・三の部町会の合同）の神酒所
- ・ 祭礼の象徴「馬喰町一丁目」… M大一・小一、H一、囃子屋台一（トラック荷台）
- ・ 行事経済（奉納金）… 八〇万一三〇〇円「五月七日一六時五〇分揭示分より」
- ・ 備考… 奉納金、奉納品の芳名板に揭示された奉納者は全て企業・法人。

馬喰町一丁目二の部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 飯田永介（町会長）、水野博光、高木為嗣「三人」
- ・ 神酒所… ㈱三洋（日本橋馬喰町一、一三、三）※馬喰町一丁目（馬喰町一丁目一の部町会・二の部町会・三の部町会の合同）の神酒所
- ・ 祭礼の象徴「馬喰町一丁目」… M大一・小一、H一、囃子屋台一（トラック荷台）
- ・ 行事経済（奉納金）… 四八万五千元「五月七日一六時五〇分揭示分より」
- ・ 備考… 奉納金の芳名板に揭示された奉納者は全て企業・法人。

馬喰町一丁目三の部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 山内武雄（町会長）、平塚治、海渡清「三人」
- ・ 神酒所… 榊三洋（日本橋馬喰町一・一三・三）※馬喰町一丁目（馬喰町一丁目一の部町会・二の部町会・三の部町会の合同）の神酒所
- ・ 祭礼の象徴「馬喰町一丁目」… M大一・小一、H一、囃子屋台一（トラック荷台）
- ・ 行事経済（奉納金）… 金額未記載「五月七日一六時五〇分揭示分より」
- ・ 備考… 芳名板に掲示された奉納者は全て企業・法人。

馬喰町二丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 高島敏泰（町会長）、川瀬和夫、萩原祥謹「三人」
- ・ 神酒所… 榊高田パッケージ（日本橋馬喰町二・六・一一）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一「昭和二五年五月」
- ・ 行事経済（奉納金）… 二五四万七六六〇円「五月一〇日一六時頃揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金）ふれ神輿（引き宮）一七時～一七時四〇分／九日（土）太鼓山車 町内渡御 一二時半～一四時、大神輿 町内渡御 一五時～一八時一〇分（町会巡幸図より）大神輿渡御ご接待… 四件、太鼓山車巡行ご接待… 四件。
- ・ 備考… 子ども神輿は東横イン神田秋葉原一Fに展示／五月一〇日の一六時頃、神酒所を解体し、神輿、山車を運搬する作業など片付を行っていた。

横山町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 岩田博（町会長、地区代表）、山田孝雄、齋藤高章「三人」

・神酒所…YYパーク立体臨時駐車場（日本橋横山町六・一五）

・祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）子供山車 一〇時～一一時一〇分

東日本橋一丁目矢ノ倉町会

・祭典委員（役割動員）…堀越雅夫（町会長）、出口洋弐、小林一雄「三人」

・神酒所…ソアブル日本橋一F（東日本橋一・二・一二）

・一般動員…参加者二五〇人。このうち町内が七〇人（子どもを含む）。地元の関係が半分強。

・行事経済（奉納金）…一〇七万二千元「神田明神神幸祭奉納者御芳名」五月一〇日一三時二〇分頃掲示分より」

・祭礼行事（主な行事）…五月八日（金）一一時 神輿引取、一三時 神酒所飾付、一七時 霊入れ、一七時半 宵宮／九日（土） 九時集合 町会役員・婦人部・青年部 九時半 担ぎ手集合、一〇時 出発式、一〇時半～一一時二〇分 神輿 町内廻り、一一時半 昼食 一二時半 神輿出発 四の部渡御（谷口前一三時一〇分集合）、一四時二〇分 鳳輦 東日本橋二丁目 神酒所出発、一四時半 鳳輦 矢の倉町会 協和自動車前（予定）、一四時四〇分 鳳輦 村松町会 鈴木齒科前（予定）、一五時 四の部渡御 帰着、一五時半～一七時半 神輿 町内廻り、一五時半 山車出発、一八時 食事、一九時半 閉会／一〇日（日） 九時集合 町会役員・婦人部・青年部、九時半 担ぎ手集合、一〇時～一〇時四〇分 神輿 町内廻り、一〇時五〇分 昼食、一一時半～一五時 五の部連合、一五時半～一七時半 神輿 町内廻り、一五時半 山車出発、一七時四〇分 大締 村松町会 会長挨拶 白襷手締め、一八時 打ち上げ、一九時半 閉会（平成二十七年 神田明神 神田祭行事予定表」より）

・備考…東日本橋一丁目村松町会（日本橋五地区）と「東日本橋一丁目」として、合同の神酒所・祭礼の実施

東日本橋三丁目橋町会

・祭典委員（役割動員）…戸田昌男（町会長）、川名信一、吉田實、福田錦二「四人」

・神酒所…(株)戸田商店(東日本橋三・八・五)

・祭礼の象徴…M大一・小一、H一「昭和二十七年」

・行事経済(奉納金)…三三三万六千円「五月一〇日一三時二〇分頃掲示分より」

・祭礼行事(主な行事)…五月八日(金)一八時一五分 神酒所前にて 神輿御霊入れ/五月九日(土)〈四の部 連合渡御 参加〉 九時半 開会式、一〇時 大人・子供

神輿 担ぎ出し、一二時 子供神輿 町内渡御 終了、一四時二〇分 鳳輦 神酒所前通過、一八時 大人神輿 町内渡御 終了/五月一〇日(日)〈神田明神宮入り参加〉

九時半 開会式、一〇時 大人・子供神輿 担ぎ出し、一二時 子供神輿 町内渡御 終了、一六時 大人神輿 神田明神宮入りの為 橘町出發、一九時 大人神輿 終了 ※

大人神輿に参加された方には、お昼、夕方に弁当が配布されます。子供にはお菓子が配布されます。両日ともに、九時二〇分までには神酒所前にお集まりください(平成27年東日本橋三丁目橋町会 神田祭 神輿出發予定表)より)

・備考…神輿接待二六件

東日本橋三丁目町会

・祭典委員(役割動員)…吉澤功勝(町会長)、森峻介、植野光弘「三人」

・神酒所…菓研堀不動院前(東日本橋二・六・八)

・祭礼の象徴…M大一・小一、H一

・一般動員…「奉納金より、富二会、富岡三丁目町会総代一同、深川富岡町有志、深川郷有志、東門前睦など」

・行事経済(奉納金)…三三三〇万四千円「五月一〇日一六時頃掲示分より」

・祭礼行事(主な行事)…五月九日(土) 四之部連合渡御 一二時〜一四時半、大人神輿町内渡御 一四時半〜一九時、子供神輿・山車町内渡御 一五時半〜一六時半、チビッコ

縁日 一五時〜一九時/一〇日(日) 大人神輿町内渡御 九時半〜一四時半、子供神輿・山車町内渡御 一一時〜一二時 船渡御 一五時〜、宮入 一七時〜一九時、チビッコ

縁日 一〇時〜一四時 ※平成二十七年、浜町から万世橋まで舟渡御を実施。万世橋で神輿をクレーンで吊上げ、その後、人力で担いで神田神社へ宮入を果した。

・備考…菓研堀不動院から二〇万円、矢ノ倉稻荷神社、川上稻荷神社からそれぞれ一万円の奉納あり

【日本橋五地区】

東日本橋二丁目村松町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…太田雅久（町会長）、栗原健、井上純司「三人」
- ・ 神酒所…ソアブル日本橋一F（東日本橋一・二・一二）
- ・ 祭礼の象徴…M大一、H一
- ・ 一般動員…参加者二五〇人。このうち町内が七〇人（子どもを含む）。地元の関係が半分強「奉納金より、川口増幸連、天三會など。奉納品より、松神睦、祭籠會、川口増子連、梢會、明治座、新富町睦友會、浅草天三會、両老睦、両老若睦など」
- ・ 行事経済（奉納金）…一二六万三千元「神田明神幸祭奉納者御芳名」五月一〇日一三時一〇分頃揭示分より
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月八日（金） 一時 神輿引取、一三時 神酒所飾付、一七時 霊入れ、一七時半 宵宮／九日（土） 九時集合 町会役員・婦人部・青年部 九時半 担ぎ手集合、一〇時 出発式、一〇時半〜一一時二〇分 神輿 町内廻り、一一時半 昼食 一二時半 神輿出発 四の部渡御（谷口前一三時一〇分集合）、一四時二〇分 鳳輦 東日本橋二丁目 神酒所出発、一四時半 鳳輦 矢の倉町会 協和自動車前（予定）、一四時四〇分 鳳輦 村松町会 鈴木齒科前（予定）、一五時 四の部渡御 帰着、一五時半〜一七時半 神輿 町内廻り、一五時半 山車出発、一八時 食事、一九時半 閉会／一〇日（日） 九時集合 町会役員・婦人部・青年部、九時半 担ぎ手集合、一〇時〜一〇時四〇分 神輿 町内廻り、一〇時五〇分 昼食、一一時半〜一五時 五の部連合、一五時半〜一七時半 神輿 町内廻り、一五時半 山車出発、一七時四〇分 大締 村松町会 会長挨拶 白襷手締め、一八時 打ち上げ、一九時半 閉会（「平成二十七年 神田明神 神田祭行事予定表」より）
- ・ 備考…東日本橋二丁目矢ノ倉町会（日本橋四地区）と「東日本橋二丁目」として、合同の神酒所・祭礼の実施／水天宮より二万円の奉納あり

久松町町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…佐藤寛（町会長）、外川隆康、堀井定雄〔三人〕
- ・ 神酒所…久松町会館（日本橋久松町六・六）
- ・ 祭礼の象徴…M大一、H一〔昭和二十六年五月、久松協力會〕
- ・ 一般動員…大人二五〇人、子ども三〇人〔奉納品より、神越會、勇志會、豪鳳、越一太鼓など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…一七八万九千円〔五月一〇日一三時頃揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）子供山車渡御 一〇時集合、一〇時一〇分～一時半、神輿渡御 一五時半集合、一五時四五分～一六時五〇分／一〇日（日）神輿連合渡御 八時集合、八時半～一七時半（平成27年神田祭）〔鎮座400年奉祝大祭 久松町会〕ポスターより）
- ・ 備考…久松町会館1Fには久松稻荷大明神が祀られている／水天宮より二万円の奉納あり

浜町一丁目町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…鈴木征矢男（町会長）、東内弘司、佐野英志〔三人〕
- ・ 神酒所…浜町コミュニティルーム（日本橋浜町一丁目二・三）
- ・ 祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和三十一年五月〕
- ・ 一般動員…〔奉納金より、浜一会、上州沼田虹悠會、鳳心會など。奉納品より、通新町睦、本所墨紅會、通新町若睦、晴海睦、葉月會など〕
- ・ 行事経済（奉納金）…二二万四千円〔五月一〇日一三時頃揭示分より〕
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）町内渡御・神幸祭行列・宮入 一〇時半～二一時頃（五月九（土）・一〇（日）神田祭 濱町荅丁目町会〕ポスターより）／五月一〇日（日）九時半～一〇時半（子供一一時）大人神輿・子供神輿・山車、一〇時半～一時半 昼食、一一時四五分～一七時半五之部連合渡御・人形町・浜一町内、一五時～一七時 子供神輿・山車（〔神輿・山車巡行予定表〕

- ・備考…水天宮より二万円の奉納あり

浜二金座町会

- ・祭典委員（役割動員）…高橋伸治（町会長、地区代表）、松本浩一、市橋義史〔三人〕
- ・神酒所…浜二防災センター広場（日本橋浜町二・四〇・五）
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一〔昭和二九年五月〕
- ・一般動員…二町会で大人四〇〇人以上（弁当四〇〇）が参加
- ・行事経済（奉納金）…一〇〇万四千元〔五月一〇日一二時一五分頃掲示分より〕
- ・祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）子供神輿・山車 一五時発輿、大人神輿 一七時発輿／一〇日（日）子供神輿・山車 一〇時発輿、大人神輿 一一時四五分発輿（平成乙未年神田祭 金座町会 親合町会 合同 御祭禮「ポスターより」）
- ・備考…浜二金座町会と浜町二丁目親合町会で合同の祭礼を実施／水天宮より二万円奉納あり

浜町二丁目親合町会

- ・祭典委員（役割動員）…吉崎興一（町会長）、笹原智之、鈴木健治〔三人〕
- ・神酒所…浜二防災センター広場（日本橋浜町二・四〇・五）
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一
- ・一般動員…二町会で大人四〇〇人以上（弁当四〇〇）が参加
- ・行事経済（奉納金）…一五二万六千元〔五月一〇日一二時一〇分頃掲示分より〕

- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月九日（土）一〇時～一二時 貸半纏の受渡し、一四時半 神幸祭巡行通過・子供受付開始、一五時 子供神輿・山車出発、一六時半 子供神輿・山車着、一七時 大人神輿出発、二〇時半 大人神輿着 直会／一〇日（日）九時半 子供受付開始、一〇時 子供神輿・山車出発、一一時 大人カレー配布、一一時半 子供神輿・山車着 子供カレー配布、一一時四〇分 大人神輿出発、一五時半 大人神輿着 直会、一八時 御霊抜き、一八時半 後片付け後解散 半纏返却 神酒所まで（神輿・山車 巡行予定表）

・ 備考… 浜二金座町会と浜町二丁目親合町会で合同の祭礼を実施／水天宮より二万円の奉納あり

浜町二丁目西部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 澤浦廣（町会長）、疋田廣司、篠崎栄造「三人」
- ・ 神酒所… 元徳稻荷神社・網敷天満神社（日本橋浜町二・三・五）
- ・ 祭礼の象徴… M大一・小一、H一「昭和二七年」
- ・ 一般動員… 日曜大人二三〇人「奉納品より、川友会、用賀しんゆう会、両三若睦など」
- ・ 行事経済（奉納金）… 一九五万二千元「五月一〇日一一時四〇分頃揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月八日（金）一六時四五分 神輿準備「元徳神社前に大人神輿、子ども神輿を設置」、一七時半 御霊入れ、一八時半 打ち合わせ／九日（土）九時 男性集合くMTG「本部・神酒所設営、裃貸出対応、大人神輿、子ども神輿、山車の準備など」、一〇時 女性集合 他町会への挨拶廻り三名・他町会からの訪問対応「寄付を頂いた方へ「赤飯」、「神田祭のパンフレット」、「お札」の配布」、一一時半 食事、一三時 山車・子ども神輿出発、一四時半 鳳輦出迎え、獅子頭山車の対応、一四時三五分 神幸祭出迎え、一五時 神輿の準備「大神輿」、一五時半 町内渡御「町会メンバー全員参加＋（助っ人もOK）」、一七時半 宵宮「社務所前」／一〇日（日）八時 全員集合、九時 山車出発（二五～二〇分間）、九時四〇分 担ぎ手集合「町会メンバーで記念撮影」、九時五〇分 セレモニー「祝詞・お祓い、町会長挨拶、白樺挨拶（ルールの説明、友好団体・担ぎ手紹介）、乾杯」、一〇時一〇分 宮出し・町内渡御、一一時 休憩（軽食）「元徳神社前」、一一時四五分 大人神輿 発輿「五の部連合渡御、明治座へ」、一二時一五分 弁当屋付近（浜三西部の後方に下ろす）、一二時半 明治座前着「セレモニー」、一二時五〇分 明治座前出発「発輿順①浜三東

②浜二③浜二西部④浜三西⑤中洲、五町会連合渡御（浜二西部・浜二、浜三東、浜三西、中洲町会）、一三時三五分 浜三東部町会着「神酒所、セレモニー」、一四時五分 浜三東部町会出発、一四時三五分 元徳神社着（休憩、昼食）、一五時半 発輿「子ども神輿、大人神輿の順で町内渡御」、一六時半 宮入、納め式「町会メンバー紹介、副会長挨拶」、一八時 鉢洗い「外部の担ぎでお礼接待」（浜二西部町会 平成27年度神田祭タイムスケジュール（最終稿）より）

・備考…町会の世帯数は、昭和四〇年頃は一〇二世帯であったが現在は約四八〇世帯。マンションの住民が増加した。神田祭以外にも、春に餅つき大会、夏に納涼会を行っているという／水天宮より二万円の奉納あり

浜二町会

- ・祭典委員（役割動員）…加藤德行（町会長）、福田昭三、望月孝泰「三人」
- ・神酒所…区立浜町公園
- ・祭礼の象徴…M大一・小一、H一「昭和五年五月」、囃子屋台一
- ・一般動員…大人二〇〇～二五〇人（持ち半纏一〇〇、貸半纏一三〇～一五〇、弁当二〇〇）、子ども…九日夜二三八人、一〇日約一五〇人。子どもの参加者は多い「奉納金より、上州沼田虹悠会、纏睦など。奉納品より、元黒門町町会、早稲田宮元講など」
- ・行事経済（奉納金）…二二一万五千元「五月一〇日一一時五〇分頃揭示分より」
- ・祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）神輿巡行…一六時五〇分 神酒所出発「四ヶ所で休憩」、一九時 神酒所到着 山車巡行…一五時 神酒所出発「五ヶ所で休憩」、一七時半 神酒所前到着／一〇日（日）神輿巡行…九時四五分 神酒所出発「二ヶ所で休憩」、一〇時四五分 神酒所着、一一時四五分 神酒所出発、一二時 清洲橋通り待機、一二時半 連合神輿明治座前集合 一三時出発、一四時半頃より町内巡行開始「三ヶ所で休憩」、一六時半 神酒所到着 山車巡行…一〇時二〇分 神酒所出発「二ヶ所で休憩」、一一時半 神酒所到着、一四時一五分 神酒所発「二ヶ所で休憩」、一五時半 神酒所到着（平成27年度神輿町会巡行表）「平成27年度山車町会巡行表」より
- ・備考…清正公寺、水天宮よりそれぞれ二万円の奉納あり

浜町三丁目東部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）：桜井進司（町会長）、高橋勝治、松野芳久「三人」
- ・ 神酒所：大山高志氏宅（日本橋浜町三・三四・九）
- ・ 祭礼の象徴：M大1・小1、H1「昭和二七年八月吉日」
- ・ 一般動員：土曜：大人一六〇人・子ども一〇〇人、日曜：大人一三〇人・子ども一〇〇人「奉納金より、深川一壺會など。奉納品より、金森睦、新宿一志睦、築七睦、菊川一丁目町会、早稲田宮元講など」
- ・ 行事経済（奉納金）：二六七万四千円「五月一日一―時五分揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）：五月八日（金）一四時―一七時 お赤飯の引換・半天の貸出、一八時半 神輿「御霊入れ」／九日（土）九時―一―時半 半天の貸出、一―時 子ども神輿・山車出発、一―時二〇分 子ども接待、一―時五〇分 神酒所帰着、一二時 大人は昼食、一三時 子ども神輿・山車出発、一三時二〇分 子ども接待、一三時五〇分 神酒所帰着、一四時四五分 「鳳輦・神輿行列」迎え、一五時半 大人神輿 町内渡御 出発、一五時五〇分 大人接待、一七時五分 神酒所帰着、一七時五分 担ぎ手は早めの夕食、一七時半 トラックに神輿を載せ出発、一八時 担ぎ手は電車の切符をもらう、一八時一五分 担ぎ手は電車で神田神社へ、一九時 神田神社 宮入参拝へ、二〇時四五分 神田神社 現地解散、二―時半 青年部は後片付け後に夜食／二〇日（日）一〇時 子ども神輿・山車出発、一〇時一五分 子ども接待、一〇時四〇分 子ども接待、一―時 神酒所接待、一〇時 大人神輿 町内巡行 出発、一〇時二〇分 大人接待、一〇時五五分 神酒所帰着、一―時 大人は早めの昼食、一―時五〇分 大人神輿連合渡御発、一二時半 明治座前 九基集合、一三時三五分 南五カ町を接待、一四時三五分 接待終了 神酒所帰着、一四時三五分 大人は遅い二回めの昼食、一五時二〇分 大人神輿町内巡行 出発、一五時三五分 大人接待、一六時五分 大人接待、一六時三五分 大人接待、一七時五分 神酒所帰着 終了、一七時五分 担ぎ手はお土産弁当
- 役員・青年部は後片付（「平成27年神田祭 浜三東部予定」より）

備考：安田不動産より五万円、水天宮より二万円の奉納あり

浜町三丁目西部町会

- ・ 祭典委員（役割動員）…宮崎紀久司（町会長）、古井丸弘、赤川進「三人」
- ・ 神酒所…濱町神社（日本橋浜町三・三）
- ・ 祭礼の象徴…M大1・小1、H1「昭和二十七年五月」
- ・ 一般動員…土曜…山車（曳き太鼓）子ども一二〇人（大人二〇〇人）、日曜…山車（曳き太鼓）子ども一二〇人（大人二〇〇人）。山車の子ども参加者が多い。お菓子を赤ちゃんにも配布。新しい住民にも参加してもらっている。半纏四〇〇枚を用意「奉納品より、あたけ睦会、鉄砲洲湊三青年部など」
- ・ 行事経済（奉納金）…三八九万三千円＋金一封二本「五月一日一時五五分頃揭示分」
- ・ 祭礼行事（主な行事）…五月九日（土）一三時半 子供神輿 町内巡行出発（子供神輿が先発）、太鼓山車 町内巡行出発、一四時四〇分～五〇分 神田神社鳳輦町内渡御 お供物用意（鳳輦係）、一五時 子供神輿 帰着 お菓子配布（婦人部）、一五時二〇分 太鼓山車 帰着 お菓子配布（婦人部）、一五時半 大人神輿 町内巡行出発、一九時一五分 大人神輿 帰着 夕食（給食係）／一〇日（日）八時 祭典委員及び実行委員集合、九時三五分 太鼓山車 町内巡行出発、一〇時 子供神輿 町内巡行出発、大人神輿 町内巡行出発、一一時 大人神輿 帰着 昼食（給食係）、太鼓山車 帰着 お菓子配布（婦人部）、一一時半 子供神輿・太鼓山車 帰着 お菓子配布（婦人部）、一一時五〇分 大人神輿 巡行出発（明治座前へ）、一二時半 大人神輿 明治座前集合、一三時 大人神輿 明治座前出発（五町連合渡御）、一三時一〇分 太鼓山車 町内巡行出発、一三時二〇分 子供神輿 町内巡行出発、一三時三五分 大人神輿 五町連合 浜三東部到着、一四時 五町連合渡御の後、蛸東との二町連合に出発、一四時一〇分 大人神輿 浜町神社で蛸東と合流、一四時二〇分 大人神輿 蛸東と手打ち後町内巡行出発、一四時三五分 太鼓山車 帰着 お菓子配布（婦人部）、一五時 子供神輿 帰着 お菓子配布（婦人部）、一七時 大人神輿 帰着 夕食（給食係）、一八時 中村神官に依り御霊移し大祭終了、一九時半 祭礼完了（「平成27年浜三西部町会大祭スケジュール表」より）
- ・ 備考…濱町神社崇敬会、濱三西部町会からそれぞれ金一封、陶栄神社から三〇万円、安田不動産より二五万円、水天宮より二万円の奉納あり

中洲町会

- ・ 祭典委員（役割動員）… 増田智之（町会長）、宮下一雄、中井利信「三人」
- ・ 神酒所… 中洲町会事務所前
- ・ 祭礼の象徴… M 大一・小一、H 一「昭和三十一年五月」
- ・ 一般動員… 土曜… 大人一七〇人、日曜… 大人一〇〇人「奉納品より、新川越二町会など」
- ・ 行事経済（奉納金）… 二二三万七千円「五月一〇日一十一時一五分揭示分より」
- ・ 祭礼行事（主な行事）… 五月九日（土） 子供神輿・山車 一四時 町内渡御出発、大人神輿 一四時五五分 集合、一五時 町内渡御出発（鳳輦巡行後の渡御となります。）
／一〇日（日） 子供神輿・山車 一〇時 町内渡御 一回目出発、一五時 町内渡御 二回目出発、大人神輿 一十一時集合、一十二時四五分 日本橋五之部連合渡御 出発
- ・ 明治座へ、一五時 大人神輿 町内渡御 出発（平成27年 神田神社例大祭 中洲町会祭典委員 みこし・だし出発時間）より）
- ・ 備考… 水天宮より二万円の奉納あり

初出一覧

【第一部】

第一章 書き下ろし

第二章 書き下ろし

【第二部】

第三章

第一節 「都市祭りの経年的変化―戦後の地域社会の変容と神田祭五〇年の盛衰―」『國學院雑誌』第一一六卷一一号、國學院大學、

平成二七年

第二節 「神田祭調査報告―平成二七年 神田神社・御遷座400年奉祝大祭の分析―」『神道研究集録』第三〇輯、國學院大學文学

研究科神道学・宗教学院生会、平成二七年

第三節

石井ゼミ神田祭・蔭祭調査班（秋野・執筆分）「神田祭・蔭祭 調査報告―平成二六年度―」『神道研究集録』第二九輯、國

學院大學文学研究科神道学・宗教学院生会、平成二七年／「観客のみえない都市の祭り―神田祭・蔭祭、将門塚保存会大神

第四節

輿の巡幸―」『都市民俗研究』第一九号、都市民俗学研究会、平成二六年

第五節

「元祖女みこし」の街の稲荷―神田・須田町中部町会の変容と豊潤稲荷―』『朱』第五七号、伏見稲荷大社、平成二六年

第六章

第一節 書き下ろし

第二節 書き下ろし

第三節 「元祖女みこし」にみる参加者の実態と神田祭―「伝統型」都市祝祭の中の「合衆型」―『國學院大學研究開発推進センター研

究紀要』第一〇号、國學院大學研究開発推進センター、平成二八年

結論 書き下ろし

【付論】

第一節 「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる「共存」への課題」古沢広祐責任編集『共存学3』弘文堂、平成二七年

第二節 「祭りからみえてくる「渋谷」―SHIBUYA109前に集う神輿 金王八幡宮の祭り―」石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』

雄山閣、平成二五年

第三節 「「渋谷」の小さな神々」石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、平成二五年

あとがき

大都市の都市祭りを対象とした調査研究に着手するもとの契機は、國學院大學大学院の石井研士教授のゼミナールで行った渋谷の宗教調査にあった。私が修士一年の時である。授業の空き時間などを利用して、渋谷の宗教民俗として把握すべき、屋上の小祠を探して歩いた。まさか渋谷駅周辺に小祠が複数存在するとは思っていなかった。ところが、東急東横店や西武渋谷店といった百貨店の屋上の神社のみならず、いくつかのビルの屋上に小祠が祀られていた。中には、住人と一緒に、遙々愛知県から渋谷へ移動し、屋上に祀られた小祠もあった。現代を象徴するような渋谷の都市空間にも、ビルの屋上に小祠が祀られ、現在でも祭祀が続けられているという事実を知り、驚かされた。そして、ハチ公像が毎年慰霊され、モヤイ像やロフト道祖神といった何らかの願いが託されたモニュメントが渋谷駅周辺に作られている事実にも出会い、都市と宗教の関係に一層、関心を持つきっかけとなった。渋谷の小祠やモニュメントについては、本研究の付論第三節にまとめた通りである。

渋谷の屋上の小祠に出合った直後、現在の國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター渋谷学研究会（國學院大學二一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」）に携わるようになり、金王八幡宮の祭礼におけるSHIBUYA109前の神輿集合を知り、再び驚くことになる。現代の渋谷を代表するようなSHIBUYA109と伝統的な神社祭礼がなぜ結びついているのか。そこにはどのような役割があるのか、疑問に思った。本研究の付論の第一節・第二節はこうした疑問に対して、答えようとしたものである。こうした経緯から、現代の都市祭りを研究対象とするようになった。具体的な調査研究の対象として、渋谷の都市祭りを中心に据えることを想定したこともあったが、先行研究がほとんどなく、実証的な研究が困難であった。折しも、神田神社が千代田区外神田の現在地に遷座して四〇〇年を記念する奉祝大祭が近づき、神田祭調査の話が神田神社から指導教員の石井研士教授のもとへ舞い込んでいた。

そこで、先行研究が複数存在し、実証的な比較検討が可能であり、多くの観客と参加者を動員して盛んに行われている神田祭を主たる研究対象に設定することとなった。國學院大學大学院特定課題研究「地域社会の変容と都市祭り―神田祭を事例として」（研究代

表・石井研士教授) のリサーチ・アシスタント(RA)として、平成二四(二〇一二)年〜二六年度までの三年間、調査研究に従事させていただいた。まず、平成二四年五月の日曜日、神田祭・蔭祭における史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸をみることとなった。大手町の将門塚を起点として観客がほとんどいない中、会社員が一〇〇〇人規模で神輿を担いでいた。そして、参加する会社員同志で盛り上がっている光景を目にして不思議に感じた。蔭祭の役割に注目するようになるのはこの時からである。

平成二五年五月は神田祭が行われ、松平誠が重点的に調査を行っていた「元祖女みこし」がある須田町中部町会を中心に神田祭の参与調査を行った。神輿の蔵出しから蔵入れ、町会の直会まで参加させていただいた。同時期に、岩本町二丁目岩井会の「桃太郎」の山車の展示(神田神社境内)にも参与させていただいた。「元祖女みこし」や「桃太郎」山車のように、祭礼の象徴の重要性に気がついたのである。平成二六年五月は、蔭祭の年であったが神輿の町内渡御を行った神田和泉町会の蔭祭を調査した。蔭祭の役割についてさらに思考を深めることとなった。そして、平成二七年の御遷座四〇〇年奉祝大祭・神田祭では、神保町から浜町、中洲までかなりの距離を歩いて廻った。また、附祭に参加し、慶應幼稚舎の子どもたちと浦島太郎の曳き物を曳いて宮入した。

こうして実施した神田祭の調査であったが、調査にあたって、多くの人たちからご協力とご支援を賜ることができた。まず、神田神社の氏子各町会の関係者の皆様にお礼を申し上げたい。参与観察も含めると、とりわけ須田町中部町会、神田和泉町会、岩本町二丁目岩井会の皆様には、ご迷惑をおかけした。伺った貴重な数々のお話は、今後の調査研究にも反映させていきたい。また、神田神社の神職の皆様には、様々なご支援をいただき、スムーズに調査を進めることができた。とりわけ、大鳥居信史宮司、清水祥彦権宮司、長沢隆光権禰宜、岸川雅範権禰宜には、感謝申し上げます。指導教員の石井研士教授にもお礼を申し上げます。都市祭りという研究テーマに導いていただき、頭が下がる思いである。神田祭の実地調査にご協力をいただいた國學院大學大学院の石井ゼミの皆様にも改めて感謝を申し上げます。そして、生活面で支えてくれた母と、パートナーにお礼を言いたい。

付論の調査研究でお世話になった金王八幡宮の神職の皆様、渋谷中央街と道玄坂町会の皆様、渋谷学の関係者にも感謝申し上げます。研究の課題は山積みであるが、今後も精進して都市祭りの研究に精進していきたい。

平成二八年九月吉日

秋野 淳一